

日本戯曲全集
第二十九卷

義太夫狂言世話物集

東京
春陽堂版





「双蝶々曲輪日記」に因み、女形ばかりで演じた珍らしい相撲場の錦絵をお目にかけます。文化十三年八月、河原崎座の上演で、中村大吉の濡髪、五世岩井半四郎の放駒であります。

日本戯曲全集　第二十九巻　目次

義太夫狂言世話物篇

關取の濡髪
名取の放駒

双蝶々曲輪日記



文化十一年六月中村座上演番附

三世坂東三津五郎の濡髪　三世中村歌右衛門の放駒

双蝶々曲輪日記

序幕

浮無瀬の場
清水堂の場

役名――山崎屋與五郎。同手代、權九郎。藤屋利八。藤屋吾妻。藤屋都。平岡郷左衞門。三原有右衞門。傾城折鶴。同、玉琴。藝子、豐野。太鼓持ち、佐渡七。南與兵衞。

造り物、浮無瀬、大座敷の體。幕内より傾城吾妻、折鶴、玉琴、好みの拵らへ。曳船、禿、大勢、並よく並び居る。藝子豐野、好みの拵らへ、太鼓持ち佐渡七、豐野を煽ぎ立て居る。この見得、山姥のチラシにて幕開く。

トこれにて仲居おいわ、おさき、おもん、銚子、杯、肴鉢を持ち出る。姉女郎都、附き添ひ出る。

佐渡　豐野さんの山姥の振り事、けうといものでございます。いつぞや見たより、扇の手が、餘ッぽどよかつたわいなう。

さき　どうでも此方の贔屓の藝子さん。

都　ヨウ〳〵、豐野さん〳〵。

佐渡　お前ばつかりは、ハテ、なんでも太夫さん方に、贔屓にしてもらはねばならぬ。

ト豐野を前へ連れ出る。

いよ〳〵御贔屓を、ヅイと希ひ願ひ奉ります。

ト引合せのやうに云ふ。

折鶴　佐渡七さんが頼ましやんせいでも、豐野さんは、贔屓でおますわいなア。

玉琴　隨分お客を引きつけう程に、早う神詰めさしやんせえ。

豐野　よろしう、お頼み申し上げます。

佐渡　オッと、氣遣ひせまい。そのお客は、この佐渡七が引きつけて、お初穗を、おれが戴くぢや。

ト抱きつかうとするを、振り放し

豐野　こちや、知らぬわいなア。

佐渡　その、おぼこい所を。

　ト捉へにかゝる。

豊野　アレイ。

　ト逃げて玉琴の後へ隠れる。折鶴と仲居三人立ちかゝり

仲三　佐渡七さん、堪忍して上げさしやんせいなア。

佐渡　イヤ、堪忍はならぬ。留めて取つてくりよ。

　ト踊り三味線になり、四人、豊野を捕へにかゝる。皆皆、捕へさせぬ模様、蛇尾とろになり、よろしくあり

もん　これはしたり、佐渡七さん、よい加減にはたへなませ。太夫主達も、見つともない。お前がたばかりの陽氣にしましても、肝心の此方の太夫主の氣が浮かぬわいなア。

禿皆　佐渡七、主は氣がないぞえ、

佐渡　誠に、負うた子に教へられて、アハヽヽヽ。どう云ふかう云はうと、云ふ御手もてぬお顔。申し太夫さん、こりやどうでござります。

吾妻　わたしが持てぬ顔して居るを、知らずかいなア、都さん。

都　里の悪口云はしやんす程にもない、佐渡七主、嗜なましやんせいなア。

佐渡　イカサマ、愛河竹の持てぬ顔とは、節季には、まだ早し。よもやお腹が、岩田帯と云ふでもあるまいし。

禿皆　戀ぢやわいなア。

佐渡　なんぢや。戀ぢや。待つたり、逃げ戀、待つ戀、忍ぶ戀、この三つのうちぢやわい。

都　オヽ、愚鈍やの。

佐渡　オヽぐどん。ひだるい時にぐどん蕎麦切り、もう來さうなものぢやが。ニヽ、聞えた。待つ戀に、逢ひなし逢ひなし。

もん　やう〳〵合點がいたさうなわいなア。

都　吾妻さんは、與五郎さんがござんせぬに依つて、辛氣に思うてゞござんすやら。

吾妻　都さんには、與平さんが。

　ト兩人、顔見合せ

兩人　オヽをかし。

吾妻　ほんに、譬へに云ふ通り、待たるゝと

佐渡　松は、松坂越えたえ。

　ト音頭のやうに云ふ。踊り三味線になり、佐渡七、禿踊る。この一件、皆々奥へ入る。

〽すぎはひは、草の種とやさま〳〵に、世を浮き節の笛

細工、傘に小笛をぶら〳〵と、子供たらしの荷ひ賣り、清水邊を吹き歩く。

トこの浄瑠璃にて、向うより與兵衛、好みの形、荷を持ち出て

與兵　サア〳〵、買うたり〳〵、横笛鹿笛唐人笛。

〽吹き立て〳〵賣り立つる、笛の音に寄る鹿ならで、合圖の笛を聞くよりも、都はソッと座敷を抜け出し。

ト與兵衛、本舞臺へ來る。ト奥より都、出て

都　與兵衛さん、よう來て下さんした。逢ひたかつた逢ひたかつたわいなア。

與兵　おれも其方の文を見たゆゑ、早速昨夜にも來ようと思うたれど、この浮無瀬は揚屋と違うて、夜はちよつとも、逢はれまいと思うて、商ひの出がけに來た。して、急に逢ひたいと云やる用は。

都　サア、その急な用と云ふは、外でもない。いつぞやから、九軒の井筒へ來る客に、有右衛門と云ふ、憎てらしい侍ひがござんす。その侍ひ面めが、わたしを身請けすると云うて、親方に引合うたとやら云ふ噂で、それでこの事を、お前に知らせたのでござんすわいなア。

與兵　よう知らせてたもつた。わしが流浪も、云はゞ其方ゆゑ。その太夫が、外へ身請けしられるを、なんで默つて見て居られう。

都　まだそればかりぢやござんせん。お前に云はねばならぬのは、與五郎さまの手代權九郎、太鼓の佐渡七もろともに、昨日から段々と、わしに云ふのを聞かしやんせ、追ッつけ年も明くなれば、何かにつけて心に叶はぬ事がある。借錢萬事を請け込まう、どうぞ逃げてくれんかと、あの佐渡七面めが、同じやうにアタ憎てらしい。どこで聞いたやら、お前の事まで云ひくさるわいなア。

與兵　そりや死際に樂しうなると、好い鳥がかゝつて仕合せ。逢うてやつたがよいわいの。

都　エヽ、逢ふ氣ならお前に云やせぬ。もし疑ひの心もあらうかと、思うて云ふに其やうな、つれない詞は胴慾なわいなア。

〽恨みつらみも人目を忍び。

ト都、與兵衛に取りつくと、奥にて

禿　アイ〳〵。

ト禿、走り出る。兩人、ちやつと、素知らぬこなし。

都さん、爰にかいなア。吾妻さんが、呼んでぢやぞえ。

都　もうそこへ行く程に、先へ行て下さんせ。

秃　そんなら、早う來ませやア。

ト奥へ入る。

都　オ、忙しっ。これでは、なんにも話しする間がない。追ッつけ首尾して來う程に、ちつとの間、待つて下さんせ。

與兵　心長う、待たす事はならぬぞや。

都　合點ぢやわいなア。

與兵　嘘ぢやないか。

都　オ、くど。

〽君に別れ南與兵衞、暫し木蔭に待ち居たる。

ト都、心を殘し、奥へ入る。與兵衞、荷を片寄せ、下手へ隱るゝと、踊り三味線になり、向うより與五郎、衣裳、羽織、好みの拵らへにて、丁稚治郎吉を伴ひ出て、花道、よき所にて

與五　アヽ、面白さうに、騷ぐワ〳〵。なんと治郎吉、面白い所であらうが。

治郎　爰は、なんと申す所でござりますえ。

與五　爰は、清水の浮無瀬と云ふ所ぢや。今日は、太夫が來て居やる筈ぢやが、爰へ來て居い、安井から、天王寺へ向うて來ると云うて置いたが、まだ來ぬか、誰れぞに、聞きたいものぢやが。

佐渡　つい一走り行て、見て參りませう。

ト奥にて云ひ〳〵出る。與五郎、見て、手を叩く。

旦那、きつい、お待たせぶりでござりますなア。

與五　オ、佐渡七か。今日は大儀々々。太夫は來て居るか。

佐渡　來て居るかとは、愚か〳〵。あなたが遲いと云うて、酒も知らず、飯も食べず、大機嫌惡でござります。ちよつと、あなたのお顏を、お目にかけて下さりませ。

與五　そんなら、なんと云ふ。おれが遲いと云うて、太夫が腹立てゝ居たか。

佐渡　イヤモウ、側が堪るもんぢやござりませぬ。

與五　アノ、ほんまにか。

佐渡　眞實、誓文。

與五　早う知らせてくれ〳〵。

佐渡　畏まつたと、急ぎ行く。

ト淨瑠璃にて、奥へ入る。

與五　治郎吉、おれは爰から、直ぐに仲へ行くに依つて、明日の朝、新町の折屋へ迎へに來い。

治郎　畏まりました。

ト橋がゝりへ走り入る。

與五　また冗談するな。
ト後を見送り
冗談せうと思うて、嬉しがつて行き居つた。ハヽヽ。併しなア、彼奴が冗談のしたいも、おれが、山崎へ去にとむないも、同じやうなものかい。
ト合ひ方になり、此うち吾妻、出かけ、物云はうとしても、與五郎、矢張り向う向きにこの臺詞云うて居るゆゑ、いろ／＼あつて、トゞ癪の發りしこなし、ウンと反る。與五郎、これにて惻り、側へ寄つて、
太夫、なんとしやつた。
ト吾妻、氣附かぬこなし。
サア／＼、癪が發つたさうな。
ト抱きかゝへ、耳に口をよせて
吾妻やい、太夫いなう。
トいろ／＼呼び生ける。吾妻、矢ツ張りのさつてゐる。與五郎、いろ／＼として脊中を撫でながら
與五　太夫、氣が付いたか／＼。
ト手を放す。吾妻、バッタリこける。
ヤイ／＼、矢ツ張り氣が付かぬさうな。吾妻やアい、太夫やアい。

トいろ／＼うろたへる事あつて
こりやモウ、どうもならぬ。誰れぞ、來てくれいや。
ト奥より都、玉琴、折鶴、豐野、禿、仲居三人、曳船佐渡七、皆々バラ／＼と出て
皆々　なんでござりまする。
與五　なんぢやどころか、太夫が、癪が發つた、目が舞つた／＼。
皆々　エヽ。
曳船　さうして、太夫主が氣附かぬかいなア。
都　お醫者樣を、早う呼びにやつたが、よいわいなア。
與五　さうぢや／＼。誰れぞ、早う醫者を呼んで來て。
もん　それでも、妾らの勝手は知らず。
さき　と云うて、捨てゝも置かれず。
與五　どうぞ仕やうは、ないかいやい。
玉琴　困つたものでござります。
與五　コリヤ／＼佐渡七、どうぞ太夫の氣附く、好い思案はないか。思案してくれ／＼。
佐渡　なんぼう旦那のお詞でも、斯うなつては、私しぢやて、醫術は覺えず、藤井ではなし、とんと仕やうがござりませぬ。全體、これは皆、旦那、あなたから起つた事

でござります。
與五　太夫が、癪が發つたを、おれが業とは。
都　そりや、お前が遲いに依つて、吾妻さんが例の、疳癪でござんすわいなア。
叉瑚　サア與五郎さん、太夫主を元のやうにして
玉折　戻さしやんせいなア。
與五　おやと云うて、そんな無理な事があるものか。おれおやと云うて、遲う來る氣はないけれど、つい天王寺へ參つて行たに依つて、それでちつと隙が入つたのぢや。
都　イ、エその云ひ譯は
皆々　立たぬわいなア。
與五　そんな無理な事があるものか。あやまつて居る程に皆も思案してくれいやい。
佐渡　旦那、こりや皆、あなたが惡いからでござりますぞえ。
與五　サア、おれが惡いと云ふゆゑ、最前から、あやまつて居るわいなう。
佐渡　そんなら、ほんにあやまらしやりましたか。
與五　イヤモウ、近年の大あやまりぢや。
佐渡　なんと皆さん、旦那も餘ツぽど應へたさうと見えます。
都　あやまらしやんす事ならば、吾妻さんの氣附けの傳授を
皆々　教へて上げしやんせいなア。
與五　南無佐渡七大明神、拜むわい／＼。
佐渡　サア、その氣を附ける傳授は。
與五　その傳授は。
佐渡　マア、何がなしに、水を呑ました／＼。
與五　オッと合點ぢや。
　ト茶碗の水を持つて來て、吾妻の側へ行く。
佐渡　オット、それではゆかぬ。口移しに呑ました、呑ました。
與五　合點ぢや。
　ト口移しに水を呑まして
斯うか／＼。
皆々　その通り／＼。
與五　さうして、どうぢや／＼。
佐渡　それから、太夫主を、抱き上げた／＼。
與五　オッと、よし／＼、斯うか／＼。
　ト抱き上げる。

皆々　その通り〳〵。
與五　斯うして、どうぢや〳〵。
佐渡　サア、それからが、大事のところ。マア、太夫主の兩の手から、お前の兩手を、脊中へ廻した、脊中へ廻した。
與五　合點ぢや〳〵
　ト　よろしうあつて
斯うか〳〵。
皆々　その通り〳〵。
與五　斯うして、どうぢや〳〵。
佐渡　サア、それから、抱き付いた〳〵。
　ト　吾妻を抱いて
與五　斯うか〳〵。
皆々　その通り〳〵。
與五　さうして、この後は、
吾妻　この後は、斯うぢやわいなア。
　ト　締め返す。與五郎、恟りして
與五　ヤア、そんならわが身の、目の繇うたは。
吾妻　噓ぢやわいなア。
都　あなたが違うござんすゆゑ、

玉折　皆が、云ひ合して、折檻の
皆々　酷ぢやわいなう。
與五　でも、むごい目に逢はしたなア。
佐渡　首尾よう參つて、狂言の當り振舞ひ、打つて置け。
皆々　しやん〳〵。
　ト　手を打つ。
佐渡　サア、酒にしよう〳〵。
與五　ハテ、同じ穴の骨頂どもぢやなア。
佐渡　時に太夫主、此やうに、あなたの心底を、彼の人が聞いたら、腹立てる事でござりませうなア。
與五　佐渡七、彼の人とは。
佐渡　イヤサ、彼の人とは。
　ト　くど〳〵云ふ。
與五　誰れが事ぢやぞいやい。
吾妻　そりや、斯うでござんすわいなア。いつぞや、田舍から來た、お話しの井筒屋の客でござりまするわいなア。
與五　その客が、なんとした〳〵。
吾妻　サア、その客面が、わたしに出いと云うたわいな。否と云うて戻つたれども、否では濟まぬと云うて、度々

呼びにおこすれど、とんとわたしが行かぬに依つて、あつちも意地になつて、身請けすると云ふわいなア。
與五　エヽ、憎い奴ぢやな。
佐渡　サア、どんな憎い奴でも、金の威光で根引きの談合。大方親方も、合點のやうに申します。
與五　ヤア／＼、そりや、實かいやい／＼。
佐渡　實もほんまも、今夜中に手付け金三百兩、打ちますげなぞえ。
曳船　彼方が手付け打つたれば、差づめ太夫主は、あつちへ行かしやんせずば、なるまいぞえ。
吾妻　こちや、否なア。
佐渡　サアヽ、その否應の云はれぬ金づく。こりや旦那、急に御思案なされずばなりますまいぞえ。
與五　思案と云うて、太夫が身請けさへすれば、よいぢやないかい。
佐渡　サア、それも彼方より、先へせねばなりませぬ。
皆々　こりやマア、鈍なものになつて來たわいなア。
與五　大事ない／＼、高で三百兩、手付けさへ遣れば、よいでないか。
佐渡　さうして、その手付け三百兩、持つてござりまするか。
與五　イヽヤ、爰にはない。
佐渡　爰になうては、鈍なものぢや。
與五　今度おれが大坂へ、三百兩と云ふ爲替金を取りに來て、權九郎に渡して置いた。佐渡七、一走り行て、取つて來てたも。
佐渡　そりや、どこへ參りまして。
與五　ハテ、石町の座敷へ行て。
佐渡　權九郎さんへ逢ひさへすりや、ようござりますか。
與五　さうぢや／＼。權九郎に逢うたら、昨日の三百兩を直ぐに太夫が親方へ渡して、受取とつて來いと、云うてたも。
佐渡　オッと呑み込み、山吹色の金の使ひ。
吾妻　佐渡七主／＼、大儀でおますなア。
佐渡　なんの、大儀も、お前へ奉公。
都　吾妻さんは、さぞ
皆々　嬉しうござんせうなア。
吾妻　皆、喜んで下さんせ。追ッつけ顔も直して、笄に髮結うてなア。
與五　なんと、この喜びに、奥へ行て、酒にせうではある

まいか。
皆々　よからうわいなア。
與五　佐渡七、頼むぞ。
佐渡　呑み込んで居ります。
吾妻　おとわさん、皆さん。
皆々　サア、行かしやんせいなア。
ト騒ぎ唄になり、この一件、皆々奥へ入る。佐渡七、残り
佐渡　どうやら、此方の狂言へ、すつぼり嵌るこの使ひ。うまい／＼。
〽うまい／＼と獨り言、心も空に飛び石傳ひ、表へ出づる向うより、とつかは來る手代の權九郎。
ト向うより權九郎、出て來り
佐渡　オヽ、權九郎、ようござりました。
權九　佐渡七、どこへ行きやる。
佐渡　今、お前さんに逢ひに、参りまするところでござります。
權九　おれに逢ひたいと云ふ、その用は。
佐渡　用と云うたら、戀の使ひでござりますわい。
權九　戀の使ひとは、エヽ、聞えた。都が事、首尾なつたか。
佐渡　イヽエ、そこらではござりませぬ。
權九　そこらでないとは。
佐渡　彼のお聞き及びのお侍ひが、吾妻主の身請け、今日の明日のともやつて居る。ところで、その事を旦那に話したれば、えら急きが來て、いま俄かに、太夫主の身請けする。お前から三百兩の爲替金を取つて、直に手付けを打つて來いとの勅諚。なんと、えらいか／＼。
權九　けうとい／＼。都をおれが手に入れて、金の蔓に有りついたと云ふものぢや。
佐渡　都を手に入れる金の蔓とはえ。
權九　ハテ、われにも兼ねて話して置いた通り、拵らへもの、眞鍮判、先づこの金を手付けに渡すワ。ところで藤屋は南無三、一杯やられたと、尻持つて來て、科は旦那にかぶせてしまふと、彼の正金は都の親方へ渡すワ。金の蔓ではあるまいか。
佐渡　天晴れ妙計。流石は山崎のお番頭。
權九　コリヤ、首尾よう行たら四六店を出させてやるワ。
佐渡　忝ない……併し、同じやうな包み小判、さすが肝心。

ト兩人、囁く。

權九　コリヤ一杯呑まう、奥へ來い。

ト踊り三味線にて、兩人、奥へ入る。ト向うより平岡郷左衞門、三原有右衞門、田舍侍ひの拵らへにて出て

郷左　なんと有右どの、あの騷ぎは、山崎與五郎でござらう。

有右　イカサマ、左やう見えます。併し、日頃聲高な、あの佐渡七めが聲が聞えませぬ。

郷左　また喰ひ醉うて、醉ひ潰れて居るのでござらう。

有右　なんでもおすかた酒を、喰ふ奴でござるてなア。

郷左　先づ、あれへ參つて、佐渡七めを、呼び出しませう。

有右　左やう仕らう。

ト矢張り踊り三味線にて、兩人、本舞臺へ來る。佐渡七、奥より出て

佐渡　これはお珍らしい所で、御兩所樣、お顏を拜しまして、エヽ、合點が參りました。こりや、なんでござります。郷左衞門さまには、吾妻さんが、浮無瀨へお出での樣子を聞いて、御來臨でござりませう。

郷右　彼の深草の少將ほどにはなくとも、君を思へば徒歩裸足ぢやぞ。

佐渡　申し、徒歩裸足どころではござりませぬ。一大事でござります。

郷左　ナニ、一大事とは。

佐渡　サア、その一大事は、今日、吾妻さんを、與五郎が身請けの相談でござります。

郷左　ヤア、して、最早手付けを相渡したか。

有右　但しは、まだか。

兩人　どうだ／＼。

佐渡　さん候ふ、吾妻さんの手付け金三百兩、持參の役目は斯く云ふ佐渡七、卽ち親方、藤屋利八、西照庵へ參會に來て居られた。只今、金を渡し、受取つて歸りました。

有右　すりや、なんと云ふ。吾妻太夫の手付け三百兩、親方に渡せしとな。

郷左　なにサ／＼、某に氣を持たさうとて、さま／＼のたわ言。滅多にさうは乘らぬてや。

佐渡　ハテ、氣の惡い。眞實誓文、交りなしでござりますわい。その證據は、この一札。

ト書き物を出す。有右衞門、取つて見て

有右　ナニ〳〵、金子三百兩なり、右は我れら抱への太夫、吾妻儀、身請けの手付けとして、慥かに受取り申し候……
……郷左衞門どの、御覽なされ〳〵。

ト郷左衞門、一通を取つて見て

郷左　イカサマ、こりや、手付け金の受取りの一札。

佐渡　なんと、違ひはござりますまいが。

郷左　違ひあるまいとは、よく吐かいたな。吾妻が事を頼めばこそ、兼ねてお主に金銀を與へ置いたも、吾妻を我が手に入れんが爲。なぜ手付け渡さぬ先に、身共に知らさぬ。よくも武士を捨てさせた。もう料簡がならぬ。

ト刀に手をかける。有右衞門、止めて

有右　まづ〳〵待たつしやれ。御尤も至極。推量いたして居る。

郷左　イヤ〳〵、お止めなさるな〳〵。

有右　いま彼奴を手にかけられたとて、吾妻が手に入るでもござるまいし、某が存じ寄りもござれば、平にまづまづ。

ト郷左衞門を宥め、佐渡七を連れて出て

佐渡七、惡いぞよ〳〵。斯やうな時、働らかせんと思はしやればこそ、常々心を付けさつしやるではないか。その恩も辨へず、外より身請けの手付けを相渡さすとは、禽獸も同然。ナニサマ犬に劣りし馬。そりや、太鼓持ちではなくて、太鼓打ちぢや。サア、この上は、郷左衞門どの、武士の立つべき、思案の致せ〳〵。

佐渡　成る程、差當つての御立腹、御尤もに存じます。これは申し譯がござります。

郷左　今となつて、云ひ譯とは、野太い奴の。

トきつぱ廻す。

有右　よくござる〳〵。して、其方が云ひ譯とは。

佐渡　その申し譯は、手付けの受取でござります。

郷左　ナニ、この受取が、云ひ譯とは。

佐渡　その受取の、宛名を書かさぬが、私しの工風。郷左衞門さまへの云ひ譯、働らきでござります。

ト有右衞門、一札を見て

有右　誠に、こりや、金子の受取ばかり、宛名はござりませぬ。

郷左　これを、身共への働らきとは。

佐渡　ハテ、今でも、あなたのお金が調ひ次第、宛名を平岡郷左衞門さまと書けば、あなたのお入れなされた手付けになつて、吾妻さんは、お手に入るではござりませぬ

か。

郷有　イカサマ。

佐渡　なんと、佐渡七が忠義の程は。

郷左　皆まで云ふな、當座の褒美。

ト金の包みを投げる。佐渡七、取つて

佐渡　時ならぬ山吹色、實の一つだに、あるぞ嬉しき。兩人とも、重ねて貰はう。

ト仔細らしう云ふ。

三人　ハ、、、、。

有右　イヤモウ、金さへ遣れば、いきり出す奴でござる。

郷左　併し、出かし居りました。

ト云ふうち、與兵衞、立ち聞く事ある。この時、藤屋利八、橋がゝりより佐渡七を尋ねて出て

利八　オヽ、佐渡七、爰にか。

佐渡　利八さま、なんぞ御用でござりますか。

利八　用どころか、吾妻を身請けのお客に逢ひたい。どれにござるぞ。

佐渡　そのお客は、即ち爰にござるが、太夫主のお客でござります。

利八　そんなら、あなたがお客様。イヤ、私しは吾妻が親方、藤屋利八と申す者でござります。藤屋利八、身が吾妻が客ぢや。

郷左　名は聞き及んで居る。何用がある。

利八　イヤ、別儀でもござりませぬが、只今、遣はされました三百兩の金子、此やうな眞鍮小判でござります。

郷有　ナニ、眞鍮小判と。

ト兩人、見て

誠に、こりや百足小判。

ト佐渡七と顔見合せ、思ひ入れあつて

ハテナア。

佐渡　ほんに、こりや似せ小判。如何にも、持つて行つた私しなれど、封印が付いてあるからは、上から見えやう筈もなし。旦那、こりや、お金の出所を、キッと御吟味なされたが、ようござります。

ト郷左衞門、見込むこなしあつて

郷左　如何にも。出所の知れた金子。ちや吟味いたさう。其方は奥へ參り、山崎與五郎に、某が逢ひたいと、申して參れ。

佐渡　合點でござります。

ヘハッとは云へど底氣味悪く、胸に思案も浮無瀬の、路

地より外へ外しける。廓の亭主、手を突いて。

ト佐渡七、ソツとこなしあつて、逃げて入る。

利八　お金の詮議とあれば、まそつとお隙も入るでござりませう。金子はあなたへ、お返し申します。受取は、此方へお戻し下されませ。

郷左　ソレ、手付け證文。

ト拋る。

有右　重ねて此方より、金子は遣はす、さう思やれ。

利八　いづれ、よろしうお頼み申し上げます。

ト利八、橋がゝりへ入る。

郷左　町人の分として、なに勿體。與五郎、早く來やれ。

有右　與五郎々々。

〽與五郎逢はうと云ふ聲に、何事やらんと慌てふためき、奥より出づれば。

ト與五郎、奥より出て

與五　私しに逢はうと仰しやるは、どなたでござります。

郷左　ムウ、山崎與五郎と云ふは、てまへだな。

與五　與五郎は、私しでござります。して、あなた樣は。

郷左　身共は、平岡郷左衛門と云ふ者。

與五　ヘエ、、その又、郷左衛門さまが、私しに御用とは何事でござります。

郷左　用事と云ふは別儀でもない。今日、廓の御用に依り、金子三百兩受取り、開き見れば、殘らず似せ金。即ち包みは、お身が封印、とくと見やれ。

ト與五郎が前へ出す。

與五　ナニ、私しの封印とな。

〽見れば手付けに打つたる金、使ひに遣つた佐渡七が仕業か、どう廻つて手に入りしと、不審晴れねど打明けて云はれもせず、返答にあぐみしが、暫らく思案し手を突いて。

成る程、包みの封印は、私しの印形でござります。

郷左　すりや、覺えがあるの。

與五　覺えはござれど、金銀の取扱ひは、手代どもへ申し付けて、私しは存じませぬ。歸つて、とくと詮議いたしますでござりませう。

郷左　默れ二才め、平岡郷左衛門、武士だぞよ。この兩腰が眼にかゝらぬか。うぬが歸つて吟味の間、べん／＼と殿の御用を欠き、待つて居らうか。ちよつとも待つ事ならぬ。いま爰で思案の致せ。

與五　イヤ、この金に付きまして、ちと仔細もござります

れば、暫らく御容赦下さりませう。

郷左　仔細も互才もいらぬ。似せ金に相違はない。化の皮が剝はれたゆゑ、この場を外さうと云ふ企みだな。

與五　イヤ、全く左やうではござりませぬ。

郷左　左やうでなくば、たつた今、爰で云ひ譯いたせ。

與五　サア／＼、その儀は。

郷左　ニ才め、どうだ。

有右　郷左衛門どの／＼、まづ／＼、お待ちなされ……ナニ與五郎とやら。差當つて似せ金の大罪、假初めならぬ儀だ。殊に大仰にならば、山崎の家に關はる事、聞いた者は某一人。ナニ郷左衛門どの、彼れが申し譯の筋立つてござらば、事穏便にして遣はされまいか。

郷左　武士に似せ金を摑ませる町人め、以後の見せしめ、ぶち放してしまひます。

有右　ところを、拙者が扱ひ申す。與五郎とやら、申し譯申し譯。

與五　サア、その申し譯と申して

有右　無いでは濟まさぬ。とくと思案して、郷左衛門どのの納得めさるゝやう、よく分別さつしやれ。

與五　どう致して、ようござりませうやら。

有右　ハテ、どうと云うたら、この似せ金を、正眞の小判と取替へて、渡さつしやるれば、不念の段は、身共がお詫び申して遣はす。

與五　よし金子を、取替へますと申してからが、只今持ち合せと申してはござりませねば、一先づ立歸りまして。

郷左　イヤ、一寸も動かす事、罷りならぬ。

有右　但し、人の詞も立てず、この場を外すのか。

與五　イヤ、全く。

郷左　正眞の小判を辨まへるか。

與五　サア、その儀は。

有右　すりや、いよ／＼、似せ金を遣うたのぢやの。

與五　サア、それは。

郷有　サア／＼／＼、いつそ、うぬを。

〽金に事寄せ兩人が、無體も戀の意趣晴らし、兎やせんかくやと難儀の折柄、南與兵衛ずつと出て、二人を突き退け。

ト有右衛門、郷左衛門、與五郎にかゝる。與五郎、いろいろ宥める。よき所へ南與兵衛、ズツと出て、兩人を突き退け、キツと見得。

與兵　待つた。

郷左　コリヤ、何ひろぐ。
有右　見苦しい商人め。
郷左　横合ひから出しや張つて、慮外いたさば
郷有　手は見せぬぞ。
與兵　其やうに、立派に云はんすな。横合ひと云ふは、おれよりは、こなさん達の事ぢや。
郷左　ナニ、身共を横合ひとは。
與兵　マア第一、その似せ金は、誰れが手から取らんした。
郷有　ヤア。
與兵　云はれまい／＼。そりやソレ、與五郎から藤屋利八へ、手付けに打つた三百兩だ。太鼓持ちとぐるになつて……なんと胸に、こたへたか。
ト兩人、こなし。
何もかも、聞き抜いて居るこの笛賣り。こりや一番、腰入れて、詮議せにやならぬと云ふ所なれど、云はぬぞや。聞いた事は聞き遁がし、見た事は見遁がし、汚ない所を探しや、蚯蚓が出る。むさい、汚たい侍ひ、キリ／＼去なれい。
郷左　オヽ、去ぬる。此方の足だ、勝手に去ぬる。ナウ有右衛門どの。
有右　左やう／＼。野でも山でも、好かぬ奴なら除けたがよいと、申す唄もござる。
郷左　出家、侍ひ、長袖でござる。彼れらと論は無益の沙汰。と云ふは云ふものゝ、與五郎め、よく似せ金を掴ました。
郷有　覺えて居れよ。
與兵　こま言云はずと、とつとと行かう。
郷左　悪い所へ、出しやばつて、うぬ。
ト兩人、騙し討ちに切つてかゝる。與兵衛、立廻りにて、よろしく止め
與兵　見りや、大事もない侍ひぢやが、此やうな悪い臺詞すると、笠の臺が離れるぞや。
ト突き飛ばす。兩人、顔見合せ
郷左　イザ、刀、お納めなされい。
有右　まづ／＼、貴殿から。
郷左　イヤ、御自分から。
有右　然らば、一緒に。
郷左　イザ。
有右　イザ。
兩人　イザ。

ト ちやんと一時に納める。唄になり、兩人、向うへ仔細らしう入る。

與五 どなた樣かは存じませぬが、だん／＼のお情、有り難う存じます。して、あなたは。

ト云ふうち、奥より皆々出かけ出で

都 與兵衛さん、よい所へ、よう出て下さんしたなア。

與五 すりや、あなたが、

吾妻 都さんと譯のある、南與兵衛さんぢやわいなア。

與五 これはしたり、存ぜぬ事とて。都、よろしうお禮を。

與兵 イヤモウ、お禮には及ばぬ事でござります。もと私しは、あなたの父御さまの、與の一字を申し受けまして、八幡で人に知られた、南方十次兵衛が悴、南與兵衛と申す者でござります。いつぞやはお近付きにならうと、存じて居りましたれど、何を申すも、見苦しいこの風體ゆゑ、わざと御遠慮申して居りましてござります。只今の御難儀、お救ひ申したは、右申し上げます、御縁に依つての儀でござります。

與五 さう云ふ事なら、私しから近付きにならうもの。知らぬ事とて、疎遠に暮らしましたなう。

吾妻 それはさうと、與五郎さん、あの金は、どうした事でござんすぞいなア。

與五 サイナウ。おれも、とんと合點がゆかぬ。與兵衛どの、なんぞ樣子は聞かずかいなう。

與兵 成る程、その仔細と申しますは……イヤ、爰らは入込み。委細の事は、旅宿でお話し申しませう。

與五 皆も氣の付かぬ、酒でも出さぬかいやい。

與兵 イヤ／＼、母者人の病氣の立願で、禁酒いたして居ります。

與兵 禁酒とあれば、無理にとも云はれず。

吾妻 都さんも、何やかや、話したい事もござんせう。ちつとの間、奥座敷へ。

與兵 イエ／＼、今日は、早う歸りまして、また重ねての事に致しませう。

吾妻 ほんに、男と云ふものは、素氣ないものぢやなア。

都 取分けてぢやわいなア。

吾妻 そんなら、どうでも。

與兵 ゆるりと、お目にかゝりませう。

吾妻 與兵衛さん。

與兵 おさらばでござります。

與五 ハテ、堅い和郎なア。

ト唄になり、この一件、奥へ入る。與兵衛、荷をかたげ、橋がゝりへ入る。返し。

ト橋がゝりより郷左衛門、有右衛門、出て

二階座敷の體。踊り三味線にて、道具とまる。

造り物、橋がゝり、清水の舞臺。臆病口、浮無瀬の

郷左 有右衛門どの、どうやら斯うやら、しくじりました。

憎い奴は、笛賣りめでござる。

有右 左やう〳〵。大事を聞いた奴、あのまゝ置いては、我れ〳〵が身の上でござる。

郷左 イカサマ、なんと致したら、ようござらう。

ト兩人、思ひ入れ。ト橋がゝりより佐渡七、走り出て

佐渡 お二人樣。

郷有 佐渡七。

佐渡 まんまと首尾よく

郷有 しくじつたわい。

佐渡 申し、一大事を知つた笛賣りめ。いま、爰へ參ります。

松左 あの笛賣りめが、幸ひ〳〵、コリヤ。

ト囁く。

佐渡 そんなら、舞臺の小蔭に。

兩人 合點か。

ト三人、舞臺へ忍び居る。ト暮れ六ツの鐘鳴る。與兵衛、荷をかたげ、橋がゝりより出て、舞臺へ上がり、こなしあつて

與兵 今日は、いろ〳〵さま〴〵の事にかゝつて、つい日を暮した。もう在所へは去なれず、高い旅籠を喰はねばなるまい。

ト云ふ所へ佐渡七、出て

佐渡 待て。うぬはお侍ひに、よう慮外を働らいたなア。いつぞ。

〽目に物みせんと捻ぢ付ける、心得たりと蹴り退けぶちのけ、又立ち上がるを棒押ッ取り、肩骨脊骨なぎ立つれば、思ひがけなき後より、二人の侍ひ物をも云はず切付ける。身をかい沈み、持つたる棒で丁と受け。

トこの四人、面白き立廻りありて

與兵 武士に似合はぬ、騙し討ちとは卑怯者。

〽拂へば突き入り附け込むを、發矢と彈き、飛んづ跳ねつ働らけども、相手は三人、身は一人、棒もなんなく切り折られ、笛をば釣りたる傘押ッ取り、拔けつ潜りつ、

受け流しては後すさり、透を窺ひ高欄に飛び上がれば、どつこいやらぬと切り込む拍子、舞臺をひらりと一飛びに、飛んだる傘に風持つて、次第に下がれば舞臺の三人、口あんぐり。

ト與兵衛、傘を持つて舞臺を飛び下りる。三人、呆れたこなし。

與兵 それにゆるりと、ござりませ。

〽長町さしてぞ。

ト三重にて、與兵衛、向うへ走り入る。

幕

二幕目　角力場の場

役名――山崎屋與五郎。平岡郷左衛門。三原有右衛門。藤屋吾妻。曳船、外山。仲居、おもん。山崎屋與次兵衛。同手代、庄八。茶店の亭主。關取、放駒長吉。關取、濡髪長五郎。

造り物、角力場、木戸口、組み合せの貼り紙。白張り紋付きの櫓提灯を吊り、檜がこひ、水茶屋店。上手、川岸、御座船繋ぎある。右、櫓太鼓にて、幕開く。

ト見物の仕出し大勢、出て

仕一 今年の角力は、えらうはずむなう。

仕二 第一に、勸進元の顔がよいてや。

仕三 それ〳〵、さうして、もう始まつたさうなぞや。

仕四 その筈ぢや。今日は、濡髪と相引とぢやけれど、片やに痛みが出來たに依つて、その代り、西國方の抱へを取らしてくれと、大方の侍ひ衆の所望ぢやに依つて、頭取がだん〳〵の頼みぢやとて、その屋敷の抱への角力が、取るわいなう。

仕一 そりや、見ものぢや。よからう〳〵。

ト札賣り、出て來て

札賣 通り札〳〵。

仕三 なんぼぢや〳〵。

札賣 れそぢや〳〵。

ト小算盤にして見せる。

仕一 そりや高い、コレ。

トまた算盤をする。

札賣 減相な。七日目ぢやわいなう。

仕一　そんなら、これか。
札賣　負けもせい。
ト札を買ふうち、櫓、打ち切り、もや／＼云うて木戸口へ入る。
へみな／＼打連れ急ぎ行く。川風に天幕ひらめく石疊、堅い約束變らじと、藤屋吾妻が物思ひ、浮かぬ君達すゝめ込み、舟の一字の讀み醒や、みな一やうの襠は、これぞ龍頭鷁首かと、橋行く人も行きなやむ、曳舟外山が上調子。
外山　もう爰らがよからう。船、着けておくれえ。
ト吾妻、外山、おもん、禿、船より出る。
なんと皆さん、角力へ行て押されうより、爰で一つ、吞ましやんせぬかえ。
もん　ア、モウ、太夫主は、酒に醉うて、あの船に寐てなり、なんと、起きなませんかいなア。
禿　この間、浮無瀨で、田舍の侍ひと、與五郎さんとの揉めを、苦にしなましての事ぢやわいなア。
もん　ほんに、その時のもや／＼。吾妻主の辛氣がらしやんすも、道理でござんす。
外山　身にかゝはらぬわたし等さへ、苦になつてならぬもの、その時ぢやわいなう。
もん　ほんにその時は、南與兵衞さんのいかいお世話。あのやうな賴もしいお方に、ちつと與五郎さんも、あやからしたいわいなア。
外山　サイナア、よい所に、南與兵衞さんが居なましたとて、都さんも、大抵喜んで居なました事ぢやないぞえ。あのやうな賴もしいお方と、附合うて居なます都主は、あやかり者ぢやわいなア。
吾妻　サア、その都主が、諸事、吞み込んで居る、案じな案じなと云ひなますれど、とんと氣が浮かんわいなア。
外山　それはさうと、與五郎主は、もう見えさうなものぢやなア。
もん　ほんに、きつい來しませうぢやわいなア。
ト此うち橋がゝりより與五郎、出て來るを見て
ヤア、吾妻さん、與五郎さんが、來て居なさんすわいなア。
吾妻　ほんに、與五郎さん、なぜ遲かつたえ。
與五　先刻にから來て居るけれど、意地惡の郷左衞門や、有右衞門が附き張つて、浮無瀨の意趣を晴らすと。惡角弱い者は、歩に取らるゝと氣味が惡いけれど、長五郎が角力しまひ次第、來るであらうと思うて、待つて居るの

ぢやわいなう。
もん　そんな事なら、尤もぢやわいなア。
秃一　それ〳〵、長五郎さんさへ居やしやんすりや、千人力ぢやなア。
秃二　どうぞ早う、濡髪さんが、來てくれなませいでたア。
與五　氣遣ひするな。あの濡髪は、此方の親仁の大氣に入りで、家來筋の者ぢやに依つて、この間から、身請けの事も頼んで置いたに依つて、角力が果て次第に來るけれど、ひよつと果てぬうちに、意地惡めが來おつたら惡いに依つて、舟の中に隱れて居るのぢやわいなう。
もん　そんなら吾妻主、人の見ぬやうに、ちやつと、あの舟へ乘つてなア。合點かえ。
吾妻　そんならアノ、舟へ行く程に、頼んだぞえ。
外山　跡はわたしが、呑み込んで居るわいなア。
吾妻　そんなら、頼んだぞえ。
外山　ソレ太夫さん、貸しますぞえ。
ト與五郎を船へ乘せ、思ひ入れあつて
もん　與五郎さんも吾妻さんも、しつぽりと樂しみなませ。跡の首尾は、わたしらが役。
外山　西は、與五郎主〳〵。

もん　東は、吾妻主〳〵。
二人　やつと、お取りなされえ。
ト船の障子を締める。
〽障子ぴつしやり、流石廓の手だれ者、惡性仲間ぞ頼もしき。
ト内にてハアノ〳〵大勢の聲。こちらの船も障子締める。
〽東の方から息せきと、歩み來るは與五郎の父親、吾妻からげの山崎與次兵衞、年は六十二か三か、始末親仁の固くな者、荷持ち丁稚も遲れ足、ちんばちが〳〵、吹え面かゝへ。
ト與次兵衞に手代久三、丁稚附いて出る。
丁稚　申し〳〵旦那さん、ちと、お休みなされませんか。
久三　肩も足も、堪りませんでござります。
與次　エヽ、きたない奴等ぢや。道ならたつた七八里、山崎から一息。晝休みは北濱のお屋敷。これも立ちながらつい爰まで。それにちよこ〳〵休んだら、茶の錢が堪らん。幸ひ、爰に茶店がある。そんなら、ちつとの間休んでやらうか。
ト床几に腰をかける。亭主、茶を持ち出る。

亭主　お茶、上げませう。
與次　イヤ、呑みたうござらぬ。コレ、火を借りるばかりぢやぞや。コリヤ、わいら、咽喉が乾くなら呑め。仇茶を呑むと、腹が損ねるぞ。イヤ亭主、角力は、きつい繁昌ぢやの。
亭主　ハイ、今日は、濡髪と、ア、、なんとやら云ふ屋敷の、お抱への角力取りが、取る筈でござりまするが、ちと御見物なされませぬか。
與次　オ、、今日は、濡髪が取り居りますか。
亭主　ハイ、札が六十八文、中木戸が九十八文。
與次　オッと、九十八文とは廉いやうなが、そりや、百二文の事ぢや。ア、、この和郎はどぎ〳〵と、算盤をば貸しやれ。
亭主　ハイ〳〵。
　ト亭主、算盤、持ち出る。與次兵衛、眼鏡を出し
與次　サ、、初手から云うたり。
亭主　札が、六十八文。
與次　ムウ、主従三人ぢや依つて、三八、二十四、三六の十八、これが二百十二文よ。さて、今のどぎ〳〵したが、中とやらぢやの。
亭主　ハイ、中木戸が九十八文。
　ト算盤、置いて
與次　三百六文。
亭主　下桟敷が、七百六十文。
與次　下桟敷が、七百六十文。
亭主　上桟敷は、一〆め八百。
與次　ホイ、一〆め八百。これに酒が小半合、高い依つて、マア五十文、蛸の足一本が八文、三太めが小豆餅が十で十文。久三、わりや、下戸であらうなア。
久三　イヱ、酒と餅も下さります。
與次　ホイしまうた。此奴、盗人上戸ぢや。そんなら、また酒、小半合、五十。蛸が八文、惣〆めて三貫百八十二文。ホ、、恐ろしや。この辛い世界に、大抵で儲けられぬ。この銭を遣はずに、濡髪に遣れば、結構な正月が出来る。まちつと爰に休んで居て、評判聞けば、見たも同じ事ぢや。ドレ、茶を、も一つ下され。
　ト此うち向うより白臺に巻き物、青緡、樽、肴、持たせ、庄八と手代二人、駈けて出る。
庄八　エイサツサ〳〵。
皆々　さゝまめこ。

ト皆々、本舞臺へ來る。

與次　コリヤ〳〵、庄八めぢやないか。

ト庄八、悑りして

庄八　ヤア、親旦那樣、お前樣、マア、お駕籠にも召しませず、どこへお出でなされます。

與次　ハ、ア、やるワ〳〵。なんぢや、エイサッサ、さゝまめことは、呆れるわやい。與五郎めは、どこに居るぞ。

庄八　イエ、若旦那は。

ト氣の毒なこなし、もぢ〳〵する。此うち、與次兵衛、船に目を附け

與次　どこに居るぞ、吐かさんか。このマア、自體番頭の權九郎めが、大きなうつそりぢや。今度の傾城の事は、おれが直に來る筈なれど、折り惡う持病ゆゑ、コリヤ、晉ばかりでは心元ない、其方は屋敷の勝手も知つて居れば、附いて行て、見習はせよ。埒が明き次第、連れて戻れ、隙が入る體、大坂の水に味が出來ると、とつくりと權九郎めに云ひ付けしたれば、今日は戻るか、明日は戻るかと、待つても〳〵いつかな事、この月で丁度、あしかけ三月。人をおこせば、イヤ、屋敷方の御用が出來たの、イヤ、傾城の埒が明かぬわのと、明かねば明かぬやうの議定して、なぜ戻らんぞ。此やうに隙の入るは、大方新町の傾城どもに、鼻毛を讀まれて居るのであらう。エイサッサ、さゝ豆ことは、なんの事ぢや。ヤイ、山崎から爰まで、一人前三十づゝで乘合ひに乘ると、三人で九十。ナ、それ程の錢、惜しむではなけれども、一文でも費えな事に使ひ果せば、金の冥加と云ふもので、思ひ果敢がいかぬものと、みな與五郎めが不便さに、始末を思ふわいやい。内に居れば、うそ高い金魚だらけ。あの金魚が、なんの役に立つ。喰はれもせぬ亂中ぢやの、はりひぢぢやのと、さうして大分の進上物。それがマア、大抵の金目ぢやと思ひ居るか。錢三十の乘合ひにさへ、親はえゝ乘らぬのに、息子どのはあのやうな、御座船に乘り散らし、お山と一緒に酒を呑み、さゝ豆こでもあらうがの。

ト船に目を附け

サア、與五郎めを連れて來い。どこに居るぞ。

ト此うち庄八、いろ〳〵こなしあつて

庄八　ハイ、若旦那は、今朝から角力見物……と仰しやつたけれど、いから頭痛がして、目が舞ふやうな。これでは堪らぬ、大方親仁樣もお待ち兼ねなされてござるであ

らう依つて、早う親仁様のお目にかゝりたいと仰しやつて、駕籠に乘つて、直ぐに山崎へお歸りなされました……ハイ、私しも、お供と申しましたれど、イヤ〳〵、わしはこの進物を、こりや、おれが遣ふのではない、藏屋敷から言傳かつたのぢや程に、長五郎に渡して、受取を取つて、お藏屋敷へ渡して、後から

ト どぎ〳〵云ふ。

與次　ムウ、なんぢや、與五郎は病氣で、山崎へ去んだか。

庄八　ハイ、お歸りなされてゞでござりました。

與次　その進物は、藏屋敷のぢやな。

庄八　左やうでござります。

與次　さうぢやないかよ。

庄八　なんのお前。

與次　マア、そんならそれにしてやらうが、違ひはないかよ。

庄八　勿體ない、口も腐れ。

ト 互ひに思ひ入れ。

與次　なんとせう、病氣とあれば是非がない。大方小さいからの、蟲の業であらう。そんなら、おれも直ぐに、夜通しにやつてくれう。併し、此奴等は、おれが足には續くまいし、よいワ、道から辻駕籠で、ぼッ立てう。コリヤ庄八、長五郎に逢うたら、おれも少と用があつて下つたけれど、與五郎が病氣ゆゑ、折れ歸りに去ぬる依つて、角力をしまひ次第、見舞ひがてら來いと云へ。角力も見たけれど、錢もたんと入るし、何やかやで……ナア、おりや、去ぬる程に、此方へ來てから、在所の若い者どもを寄せて、錢なしに取らせて見せう。嫁のお照も待ち兼ねて居る……權九郎に云へよ……オ、まだ忘れた。この扇子。

ト 腰より拔き出し

今朝、おろした十二本の加賀骨、要は象牙ぢやぞよ。これが花ぢやと云うて、長五郎に遣つてくれ。

ト 庄八に渡して

いよ〳〵與五郎は、病氣ぢやの。

庄八　ハイ。

與次　進物は、藏屋敷のに違ひはないか。

庄八　ハイ。

與次　エヽ、これ程に。

ト 御座船を睨み、庄八と顏見合せ

ドリヤ、去なうか。

〽慥かにさうと角の内、肝心かなめの所をば、云はぬ心の親骨に、疊み込んでぞ歸りけり。

ト庄八、ホッと吐息つき

庄八　オホヽヽ若旦那、お聞きなされましたか。

與五　聞いた段ではない。

ト船より出る。

庄八　なんと、この進物を、藏屋敷のとは。

與五　天晴れ、作者並木庄八、出かした〳〵。

庄八　毛氈の親旦那を、先へお歸し申したれば。

與五　もう怖い事はない。皆來い〳〵。

皆々　だんないかえ。

ト皆々、船より上がり

外山　ほんに庄八、出來たぞえ〳〵。

吾妻　ひよつと、與五郎主の首尾が、そこねやうと思うて、熱が發つたわいなア。

もん　ほんにわたしらも、どうなる事と思うたが、首尾ようしたも、庄八どののお庇。

與五　今日の褒美に、この文字野が水上げ、汝にさすワ。

禿　こちや、嫌いなア。

外山　ほんに、粹な與五郎さんに似合ぬ、怖い親御さん。

庄八　併し、今のやうに云うて、親旦那をお歸し申したれば。

外山　ほんに、また遲うお歸つたら、お館の首尾が、惡からうぞえ。

與五　サア、そんなら、太夫が身請けを、今夜中にせにやならんやうになつたと、濡髮に云うてくれいよ。

庄八　畏まりました。そんなら、この進物を、早う關取へ。

與五　オヽ、早う、持つて行け〳〵。

ト内にて大勢の聲になる。

庄八　サア、みな來い〳〵。

トみな〳〵、木戸へ入る、ト返し、右の道具、觀音開きになる。

造り物。東西、棧敷。まん中、土俵、四本柱に弓、化粧紙、桶、水吞み、よろしく。行司二人、土俵際に居る。右、道具、とまると、觸れ拍子木、打つて廻ると、行司、眞中へ出て

行司　東西々々、抑も角力の始まりは、人皇十一代、垂仁天皇の御時、當麻の蹶速、野見の宿禰、大内にて力くらべありしより始まりたり。それより、代々の帝に傳へ、

今に絶えせぬ花の都には、松の尾の御神事とて、毎年八月二日の勝負、東には、山王の御神事に角力を始めるその謂れ、畏き御代の例しなり。昔を今に浪花津や、賑ふ春の花角力、四本の柱は四天王、土俵の數は十六俵、十六羅漢を表したり。出で入る息は阿吽の形、組み打つ表裏の始まりなれば、臺座一面、御神妙に御一覧下さりませう。

トこれより土俵入りになり、角力、だん／＼あつて、ト〻放駒、濡髪と名乗りを上げる。皆々捨ぜりふありて、濡髪長五郎、放駒長吉、二人、よろしく土俵へ上がり、こなしあつて、キツと見得。これにてよろしく返し。

元の木戸になり、鯨波の聲、櫓太鼓になり、見物の仕出し、群衆のこなしにて、押し合ひ／＼出る。此つまりに長吉、郷左衛門、有右衛門、仕出し大勢、附き出て、皆々、手を打つて入る。

郷左　ア、關取、手柄々々。

有右　放駒、けうとい／＼。イヤ、郷左どの、吾妻が身請けの儀も、埒の明く瑞相。與五郎めが腰押しの濡髪に、勝つてくれたは、めでたいめでたい。なんと祝うて、一つたべませうか。

郷左　拙者が思ふ坪、飛び入りと云うては、濡髪が立ち合ぬは定のもの。そこをぬからず、一人の長吉を拵への角力、放駒と僞はり、名乗りを上げたればこそ、今の角力、勝つたる手柄。いよ／＼太夫が身請けの世話も、賴むぞや。

長吉　成る程、諸事、私しが吞み込んで居りまする。濡髪濡髪と、えらう贔屓して、相手になる者もないやうにも申しましたが、立合つて見れば、ヘエ、見ると聞くとでござりますてや。

郷左　なんでも、この勢ひに。

長吉　イヤ申し、爰は往來、諸事は座敷で。

郷左　如何にも／＼。

有右　サア、關取。

長吉　サア、ござりませ。

ト角力取の唄になり、郷左衛門、有右衛門、長吉を煽り立て向うへ入る。與五郎、木戸より出かけ、聞いて

與五　なんぢやい。そないに、なんで褒めくさるのぢや。コリヤ、なんぼう角力取りが勝つても、太夫は矢ツ張り

嫌がつて居るわい。なんぢや阿房らしい。エヽ、モウ、と
つと氣の濟まぬ。

ト床几に腰をかける。

ヘ思案にくれて居る所へ、木戸口より濡髮の長五郎、評
判一の角力髮、大郡内の肥り肉、鮫鞘流石關取と、一際
目立つ男振り、與五郎見るより。

ト木戸口より、長五郎出る。

長五郎か、待つて居た。マア／＼、掛けや／＼。

長五　オヽ、若旦那、これにござりましたか。

與五　これにどころか、今のはなんぢやいの。なんの事ぢ
やいなう。

長五　これはしたり、後も先も仰しやらずに。ハヽヽヽ
……イヤ、コレ、茶屋の、ちやつと頼みませう。

亭主　ハイ／＼、御用でござりますか。

長五　アヽ、大儀ながら、こなんは今、あそこへ行た放駒
を、ちやつと呼んで下んせ。

亭主　ハイ／＼。

ト行かうとする。

長五　イヤ、コレ／＼、わしがと云はず、誰れやら、急に
お目にかゝりたいと云うて居らるゝと、云うて呼んで下
んせ。

亭主　ハイ／＼。

ト向うへ入る。

長五　返事聞かして下んせ、待つて居るぞや。

ト云ふうち、與五郎、ウロ／＼して

與五　コレ長五郎、マア爰へ、おぢやいの、マア、かけや
いなう。

長五　イヤ、これがようござります。

トちよくばつて居る。

與五　コレ、今日の始末は、なんぢやぞいの。なぜ放駒と
やらを、突き出してしまやらんぞいの。突いて轉けにや、
脇の下へ手を入れて、こそぐつてなりと、かきつくなり
と、其方の得手に差し込んで、なぜボイと轉かしやらぬ。
とつと、郷左衛門や、有右衛門めが嘲めくさる。腹が立
つて／＼、いつそ出て、存分云うてと思うたけれど、あ
つちは強し、おれは弱し。さうして、吾妻を身請けする、
瑞相ぢやと云ひ居つたが、大事ないかや。

長五　ハテ、お氣遣ひなされまするな。角力は放れ物、勝
つたが勝ちにならず、負けたが、負けにも立ちませぬ。
また強い者が、常住勝つ事なら、見に來る人は一人もご

ざりませんわいの、ハヽヽヽ。それはさうと、先刻に庄八どんに逢ひまして、親旦那の事も、殘らず承はりましたが、マアお前樣は、後までお歸りなされませ。太夫どんの身請けは、例へ五日十日、隙が要つても、濡髮が呑み込みました。外の手へ遣る事ぢやござりませんわいの。

與五　そんなら、よいかや。

長五　ハテ、わしに任して置かしやりませ。

與五　だんないかや。

長五　ハア、わしが母者人は、お前樣の母御樣の、お召仕ひなりや、わしの爲には、大切なお主のお前。殊に、大恩を請けました、親旦那の思し召しもあれば、この長五郎の命のある内は、吾妻どんの事、世話せいで、なんと致しませう。その段は、大船に乘つたと思うてござりませ。

ト亭主、向うより戻り來て

亭主　申し／＼、放駒さんが、爰へお出でなされてござります。

長五　オヽ、大儀でごんした。ま一遍頼みたい。

亭主　ハイ／＼。

長五　此お方を、新町へ送つて上げまして下んせ。

亭主　ハイ／＼。

長五　申し若旦那、お前はマア、先へお出でなされませ。

與五　イヤ、行かれん／＼。

長五　なぜでござります。

與五　ハテ、濡髮と放駒との出合ひに、おれが居いでは濟まぬて。

長五　ハヽヽヽ、お前がござつては、結局、邪魔になりますわいの。

與五　ムウ、それもさうかい。

長五　氣遣ひせずと、ござりませ。

與五　そんなら、行かうか。

長五　追ツつけわしも參じます。

與五　待つて居るぞや。

亭主　サア、お出でなされませ。

ト與五郎、捨ぜりふにて行きかける。

長五　頼みますぞや。

ト與五郎、花道にて、こなしあつて

與五　なんと濡髮は、よい關取ぢやなう。

亭主　左やうでござります。わたしは、大贔屓でござりま

す。

與五　貴樣、贔屓か、アノ、ほんまに贔屓か。

ト嬉しさうにして、我が腰提げな外し

これ遣らう、提げて下んせ。

亭主　これは、有り難うござります。

ト喜び、戴く。

與五　あゝして居る所を見やんせ、好い男ぢやの。

亭主　イヤモウ、土俵へと上がつた所は、鬼でも敵ひませぬ。

ト追從らしう云ふ。

與五　エヽ、鬼位が敵ふもんかいの。凡そ、鎮西八郎この方の前髪ぢやて。

亭主　イエ／＼、まつと強うござりまする。

與五　強いなア。

トなんぞ遣りたいと云ふ思入れあつて、羽織を脱いで

これ、着やんせ。

亭主　これは有り難い。サア、お出でなさりませ。

ト與五郎、亭主が腰に提げて居る手拭にて頬かむりをして

與五　お前、先へ行て下んせ。

亭主　そりや申し、なぜでござります。

與五　關取が負けたので、わしや、顏が恥かしい。

ト亭主を先に立て、頬かむりして、後に附いて行く。

〽はや黃昏の濱側や、茶店日當に放駒、樣か爰らと見廻せば。

ト向うより長吉、一散に走り出る。

長五　オヽ、これは御苦勞。サア、爰へ／＼。

長吉　ムウ、ちやつと逢ひたいとは、關取、こなんでえすか。

長五　成る程、ちと、こなんに賴みたい事もあり、また外に話さねばならぬ事もあり。サア、マア、爰へ／＼。

ト扇子にて、塵を拂ふ。

長吉　アイ、そんなら、許さんせ。

〽互ひにおれそれ床几に並び、腰うちかける前髪同士、四角な十の二枚もの、すは事こそと見えにけり。

ト兩人、よろしく、こなしある。

長五　イヤ長吉どん、名はせき／＼聞き及んで居れど、しみじみ逢うたは今日の角力。さて、強い身あん梅、小手の利きやう。

長吉　へ、、、、、なんとごんすやら。

長五　イヤモウ、達者な事ぢや。けうといもんぢや。

長吉　アイヤ關取、何やら、話したい事があると、人をおこさんしたは、その事でごんすか。

長五　イヤ〳〵、頼みたい事と云ふは、外でもない、今日の桟敷のお客な。お侍ひ様さうなが。

長吉　アイ、さうでえす。それが、なんとしたな。

長五　イヤ、なんともせんが、其お客がこの間、新町の藤屋の、吾妻を身請けの相談。その吾妻どんには、先から馴染み、即ちわしが親方筋の人でごんすが、イヤモウ、若い人なり、殊に部屋住みゆゑ、身請けの金事。サ、マア、我が物で我が物にならぬゆゑ、無茶苦茶とした事でごんすぢやが、金の工面するとても、ヤア四五日はかゝる。其うちこなんのあのお客に請け出されては、とサア、そこが今の若い同士なり、なんぞ云ひ交した詞が立たぬとやら、なんぢややら、マアあるさうな。そこで、わしは家來筋の事なり、コーヤ濡髪、彼方へ遣つては、おれが立たぬ程に、われが先の客に逢うて、斷わり云うて、此方へ請け出させてくれと、イヤモウ、ほんの子供のやうな、若い、お人。わしぢやと云うて、其お侍ひに近付きではなし、どうせうぞと思ふ折から、こなんと今日の立合ひ、これは幸ひ、若い同士、大坂同士、其お客のお氣に立たぬやうに、そこをナア、コレ、どうぞ、こなんが。

長吉　イヤ、コレ〳〵關取、こなんの今、云はんす親方筋とは、山崎の與五郎どんの事でごんすか。

長五　よう知つて居やんすなう。

長吉　アイ、知つて居ります。その與五郎どんの事について、吾妻どんの身請けの相談、わしも成る程、侍ひ衆に頼まれて、金の工面するうち、與五郎どんに、請け出されては立たぬ程に、長吉頼む、金の才覺する間、他人に遣るな。殊に、向うは濡髪が肩持つ程に、われを頼むと頼まれました。わしも又、與五郎どんとやらと、吾妻どんばかりなら、侍ひ衆に斷わり云うて、イヤ、そんな世話は嫌でござりますと、云ふまいものでもなけれども、なまなか濡髪が肩持つと云うては、どうやらわしが、關取が强さに、へりつかうと思はれても面倒さに、また友達仲間へも、そんなものぢやごんせぬかい。

長五　ムウ、天晴れ男……ぢやが、そこぢやて。

長吉　どこでえす。

長五　サア、そこが男同士。平押しに頼みたい事があれば



嘉永五年七月河原崎座初演　八世市川



関十郎の濡髪長五郎　嵐璃寛の放駒長吉

こそ、今日の角力に、放駒と名乗りを上げたを見れば、長吉どん、こなんぢや。これは、よい所ぢやと思うたに依つて、四の五のたしに立合うたはな、行司がヤッと團扇を引くと、こなんが存分に差し込んで、右の肩へズルズル〳〵。コリヤ、大概。

長吉　コレ〳〵關取、そんなら何かいの、この長吉に、その事を頼まうばつかりに、今日の角力は、よいやうにしたと云ふのか。

長五　イヤ〳〵、さうではない、さう聞くと。

長吉　イヤ〳〵〳〵、振つたのぢや、振りあがつたのぢや。なんで振り居つたい。おれも面妖な。貴様は評判の取り手。どうで小供なぶるやうにするであらう。おのれ、左差いたら、喰ひついてなりと、やつて見ようと思ひの外、ヤツと云ふと、ズル〳〵〳〵と持つて出た。其うちに團扇は上がるし、ハテ、合點のゆかぬと思うたが、振つたのぢやなア。投げるなら、どつさりと投げて、投げ殺して置いて、さて長吉、斯う〳〵ぢやと、なぜ改めて、頼まんのぢや。人に物遣つて、後から金の無心云ふやうな、むさい長吉ぢやごんせぬ。慮外ながら、關取にも似合ひませぬなう。

長五　ハテ、さう云はんすと、いかう出入りがむづかしいなア。

長吉　むづかしけりや、どうするえ。

長五　さればいの。與五郎どんとその侍ひとが、めつきしやつき。こなんとおれとが達引も、まだ半分道も行かぬうちに、爰で互ひに云ひ合うたり、ぶつたり踏んだりするは、ほんの喧嘩の地取りするやうなもの。そちらの身請けも今日明日に、埒が明くでもなさゝうな。すりや、茲四五日のところ。ハテ、こちらも二三日のうちには、埒する筈。どうぞこなんを頼む、そちらの金の

長吉　エヽ、どしつこい。其やうな工面師か、もがり者の云ふやうな事は、嫌ぢや。叶はぬまでも、その時になつたら腕づく。もがり商賣は、嫌でごんすわいなう。

へと、やり込める。

長五　長吉どん、イヤ長吉よ。あまり顔が、あがき過ぎるが。與五郎どんの事については、長五郎が命でも、進ぜにやならぬ筋がありやこそ、男が手を下げて、われを頼むぢやないかい。

長吉　それをおれが、知つた事かい。

長五　サ、知らぬに依つて、云うて聞かすのぢや。

ト合ひ方になり

もう頼まん。聞分けのない者に、もの云ふは、ほんの放れ駒の耳に風。随分侍ひの、腰押せよ。

長吉　知れた事、これから内の商ひも構はず、姉貴に勘當しられうとまゝ、随分貴様の、邪魔せうかい。

長五　ホオ、侍ひが抜いて切りかけうが、何奴が抜いてかからうが、額に濡髪、鎖鉢巻きよりは、慥かな受け手、ちつと切り憎からうかい。

長吉　まだ鞍味知らぬ放れ駒。人中で、馬乗りに遭うた事がない。珍らしう、踏まれて見ようかい。

長五　見るかよ。

長吉　見ようかい。

二人　サア／＼／＼。

〽互ひに悪口睨み合ひ、思はず持つたる茶碗と茶碗、手に持ちながら立ち上がり。

長五　コリヤ長吉、物事が、この茶碗のやうに、丸う行けば重畳。

ト手の中にて茶碗を割る。

長吉　それも、斯う割つてしまへば。

ト茶碗を打ち割る。

長五　接がれぬ角菱。

長吉　濡髪。

長五　放駒。

二人　重ねて逢はう。

〽別れてこそは。

ト三重にて、

幕

三幕目

大寶寺町米屋の場

難波浦の場

役名――山崎屋與五郎。藤屋吾妻。平岡郷左衛門。三原有右衛門。野手の三。下駄の市。講中、妙林尼。同、六兵衛。同、五助。同、久兵衛。關取、放駒長吉。同姉、おせき。關取、濡髪長五郎。

造り物、三間、二重舞臺。上手、障子屋體。赤壁、納戸口。橋がゝり、丸太格子。門口に俵数多積みあり。幕の内よりおせき、二重舞臺に帳合ひして居る。雨車の音、浄瑠璃にて幕開く。

〽大坂に、隱も名高き島の内、大寶寺町に年を經て、角も絶やさぬ搗米屋、獨り息子の長吉は、父親なしの我まま育ち、姉のおせきはあたふたと、店の帳面繰込し、駄賣り小賣りの石高を、置き十露盤の手品まで、男まさりと見えにける。春雨の、向うしぶきに傘傾むけ、我が家へ歸る放駒は、門口に立ちはだかり。

ト長吉、向うより傘をさして出て來り

長吉　この雨の降るのに、俵ものは、なぜ入れぬぞい。エエ、野良どもではあるわい。

〽片手に提げて抛り込み／＼、傘提げて内に入り。

姉さん、まだ帳合ひしまはんせぬか。

せき　嗜なみや。降り出すに、傘や下駄、持たしてやる先は知れず。ちとマア、内に居たがよいわいの。

長吉　男どもは、どこへ行きやんした。

せき　見てたも。一人は頭痛で、枕が上がらず、勘兵衛は立賣堀へ、飯米持たしてやつたが、今に戻らぬわいなう。

長吉　なんぢや、立賣堀へ飯米、持たしてやつた。その使ひをかこつけて、座摩か、稲荷の稽古場へ入つて居るであらう。いけもせぬ聲で、淨瑠璃を語らうより、空臼唄の稽古でもしをらいで、阿房ではあるわい。

せき　コレ長吉、男どもの居る前では云はぬが、人の七難より、我が身の十難と、其方もちつと嗜なみや。内の手廻し諸事萬事、この姉に打任し、明けても暮れても外を内。

長吉　アヽ、モウよいわいなう。云はんすないなう。ようつべこべ／＼と云ふ人ぢや。わしが昨夜泊つて戻つたわな。

せき　なぜ泊つて戻りやつた。

長吉　そりやナア、藏屋敷の侍ひが、頼む事があると云ふ依つて、つい泊つて戻つたが、それが、なんとしたな。

せき　それは御苦勞に、よう泊つて戻らしやんした。わしが意見がましい事を云ふと、噛みつくやうに云やる依つて、常時、わしが方からあやまつて居にやならん。モウモウ、わしも云やせんぞえ。泊つて戻るなりと、どうなりと、勝手にしたがよい。アヽ、嫌やの／＼。さうしてマア、今時分に戻つて、夕飯も、まだであらうなう。

長吉　飯はまだぢや。なんぞ菜があるかえ……ごんすか。

ト　おせき、ムツとして居る。

菜があるかいなう。

せき　ドレ、茶を沸かしてやりませう。

〽我が子のやうに弟を、思ふは姉の習ひなり。これも同じ夜歩き仲間、下駄の市、野手の三、悪鬼どもが蛇の目傘、町一ぱいに肩ひぢを、いかつがましく表より。

ト市、三、同じく傘をさし、出て來て

下野　長吉、内に居るか。

ト云ひ〳〵、傘さしながら入る。

長吉　コリヤヤイ、おれが内は、雨が降らぬわい。

下駄　ほんになア。シタガ、火が降らいで仕合せぢや。

長吉　エヽ、どう云や斯う云ふ。どえらい頬桁ぢやなア……

……サア〳〵、遠慮せずと、上がれ〳〵。

〽おゝ上がろと泥足を、からげの裾で押拭ひ、奥へ一ぱい伸しくれば、悪者連には猶以て、詞優しく姉のおせき。

ト膳を持ち出て

せき　オヽ皆、ようござんした。煙草でも上がれ。長吉もひもじからう。友達衆に断わり云うて、食べてしまやらんか。

長吉　オヽ、食ひやんしよ。わいらも喰はぬか。

せき　ほんに、お前達も上がらんか。

野手　イヤ〳〵、世話やきやんな。下駄もおれも、砂場へ寄つて、ナア、市よ。

下駄　オヽ、二八を蹴倒して來た……長吉、こりや、膳廻り、きつう奢るな。

野手　なんぢや、振舞ひに行たやうな膳ぢやなア。

下駄　平は、大根に油揚げ。

野手　焼き物は、鯛のなんぞ煮、旨さうなもんぢやなア。

長吉　イヤモウ、おれも昨夜の酒で、肴は喰へぬ、水雑炊と云ふ腹鹽梅ぢや。

野下　そんなら、おいらに喰はさんか。

長吉　オヽ、据つた物でも大事なきや、これを肴に、一つ呑め。姉様、面倒ながら、燗してやつて下んせ。

せき　オヽ、易い事〳〵。其方の食後におまさうと、爰に酒も取つて置いた。ドレ、燗つけて上げうか。

野手　アヽ、コレ〳〵、燗すると湯氣だけ減る。矢張り冷がようごんす。

下駄　長吉、われも呑まんか。

長吉　イヤ〳〵、おれに構はず、この汁椀で、サ、下駄よ、始めい〳〵。

下駄　忝ない。

野手　そんなら姉様、飲べます……オヽ、よいワ。

下駄　オホヽ、來たぞ〳〵。

野手　空腹へやつた加減か、えらい〳〵。なんぞ、肴をせんかい。

下駄　ぢやてゝ、謠は知らず、淨瑠璃は本が讀めず。オヽあるぞ〳〵、コリヤ、三よ、囃してくれよ。

野手　なんぢや、やりかけ〳〵。

下駄　哀れなるかな石童丸は。

野手　よいサ〳〵。

下駄　父を尋ねて高野へ上がる。

野手　ハア、よい〳〵、よい〳〵〳〵〳〵、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ハア、なんでもせい。

長吉　コリヤ〳〵、喧ましいわい。二人ながら、羽目を外すな。おれは構はねど、委は町家、アレ、姉者人も、近所の手前を思うて、氣の毒がつてぢや。通り筋をぞめくやうに、仇口たゝくな。

下駄　エヽ、われも餘ッぽど、臍の下に分別の實生えが出來たやら、堅い事云ふな。併し、昨夜新町橋の喧嘩で、すんでの事に、締めらるゝのであつたが、長吉が來てくれたで、先の奴めが、手ひどい目に遭ひ居つたぞい。

長吉　オヽ、そればかりぢやない、西口の出入りも、この長吉が居合さずば、皆どつかれて居るであらう。それは格別、わいらも知つて居る、山崎與五郎と、吾妻の事について、侍ひに頼まれ、晩には濡髮と、グッと達引せにやならぬ。はした喧嘩と違うて、相手は長五郎なれば、なんでも生きるか、死ぬるかの、二つ一つの出入りぢや。

〽喧嘩話しも聞き辛く、姉のおせきは身拵らへ、びらり帽子も色氣なき、丸括けの抱へ引き締め〳〵。

せき　とんと忘れてゐた。今夜は、同行衆に逮夜がある。長吉、わしや行て來る程に、留守してたもや。

長吉　エヽ、なんぢや。コレ〳〵、わしや今夜は、行かにや濟まん事があるわいなう。つい戻る程に、やつて下さんせいなう。

せき　なんの事ぢやぞいの。今夜は行かにやならぬと云うて、毎日其方は行きやるぢやないか。わしは、たま〳〵の事ぢや程に、おとなしう内に、留守して居やいなう。

長吉　エヽ、そんなら、わしに留守せいかえ　…そんなら早う戻つて下んせや。

せき　わしや、つい戻る程に、留守して、あなた方に酒を上げや。お二人ながら、ちつとの間、遊んでおくれなされや。

下駄　アイ、野手とおれとが、留守すりや、慥かな〳〵。

せせ　それは忝ない。そんなら、頼みますぞえ。嬉しや、雨も上がつたさうな。

〽近所の德は、引摺りで軒づたひ。皆さん、行つて參じませう。

〽皆さんこれにと出て行く。

　ト おせき、入る。

野手　サア〳〵、留守のうちに、なんぞ食はせ〳〵。

長吉　エヽ、此奴らは、痾病みぢやさうな。滅多に食ひたがるわい。

下駄　長吉、食はすか〳〵。

長吉　エヽ、鈍な事があるわい。今夜は新町で、濡髪との達引、姉貴が留守をせいと云はるゝ。鈍な事ぢやわい。

野手　エヽ、われも、埒の明かぬ事云ふものぢや。内の事は構はすと、行けいやい〳〵。

長吉　エヽ、おのれらが屋體ぢやないぞ。いろ〳〵の事を吐かす。おりや、死んでしまうても大事なけれど、親にも何にも彼にも、たつた一人の姉貴から頼まれた留守ぢやに依つて、どうも行かれぬ。と云うて、行かねば濟まず。ほんにそれよ。わいら、新町橋へ行て、長五郎に逢うて、長吉が云ふ、今夜はどうも内が出悪い程に、どうぞ大儀ながら、長五郎に此方の内へ來てたもと云うてくれ。

下駄　オヽ、合點ぢや。

野手　ほんに、肝心の事を忘れて居た。藤屋の吾妻と、與五郎が駈落ちして、行くへが知れぬとて、侍ひが亂騒ぎぢやが、その譯、知つて居るか。

長吉　サア、ぢやに依つて、今夜の達引ぢや。早う行てくれい。

野手　合點ぢや。必らず、ひけ取るなよ。

下駄　コヽヤ、長五郎に負けなよ。

〽お、合點と肩打振り、四ツ橋さして急ぎ行く。折から來るは平岡郷左衛門。

　ト 兩人入る。引違へて郷左衛門出て

郷左　長吉は宿に居るか。

長吉　これは〳〵、お珍らしい。なんと思うて、ござりました。

郷左　イヤサ、珍らしいどころではない……さて長吉、無念な事をしたわい。其方にも、かねがね頼んだ吾妻が事、値段も相濟み、金子百兩、手付けに渡し、後金を渡す段

になつて、吾妻が駈落ち。なんと、肝が潰れると云ふものぢや。コリヤ長吉、其方を頼む。何卒、身が武士の立つやうに、好き思案をしてたもれ。これサ長吉、この通り、頼む〳〵。

長吉　お氣遣ひなされますな。大概に、うづんだ奴も知れてござりまする。わたしが、せいらくして上げまする。マア、落ちついてござりませ。

郷左　それは過分。おてまへが、さう云うてたもれば大船に乘つた心地。少しは安堵いたしたわい。併し、身はこれより、高津、生玉、鹽町邊の、貸座敷を探して見ようわい。

長吉　イカサマ、それも、ようござりませう。お心任せになされませ。

郷左　長吉、よき吉左右あらば、身が屋敷まで、早そくに知らしてくりやれ。

長吉　よろしうござりまする。呑み込んで居りまする。

郷左　然らば長吉、さらばだ〳〵。

長吉　これは餘り、そう〳〵。マア、よろしうござりまする。

〽挨拶すれども郷左衛門、耳にも入れず息きせき、むしやくしや腹にて立歸る。長吉、後を見送りて。

このマア、勘兵衛の大野良め、何をしてけつかるぞ。姉貴の戻りも、夜に入らうし、ドレ、店を片づけうかい。オヽ、また雨が降つて來たわい。

〽座敷の船をかつたびし、琉球の日覆も、破れかぶれの達引せんと、知らせに依つて濡髪の長五郎、流石浪花の關取と、一目に見ゆる角前髪、脇差ぼツ込み、しと〳〵と門口より。

ト向うより長五郎、傘をさし出て

長五　長吉、内に居やるか。

長吉　何奴ぢや。

長五　イヤ、おれぢや。

長吉　おれとは、何奴ぢや。オヽ、關取か。

ト長吉、着替へをする。

長五　わが身や、よう内に居やつたなう。

長吉　よう内に居いで。今、下駄や野手を、頼んでやつたが。

長五　野手や下駄とは、なんの事ぢや。おりや、この邊まで來たゆゑ、ちやつと寄つた。いよ〳〵達引に行きやるなら、連れ立つて行かうと思うて、來たのぢや。

長吉　ムヽ、そんなら、わが身や、此あたりへ用があつて、寄りやつたか。
長五　オイナウ。
長吉　よう來てたもつた。
　ト表の戸を引立て
わが身とおれが達引に、外から邪魔が入つても面倒ぢや。ちつとの間ぢや、待つてたも。樣子知らずに、來てたもつたが、よう來てくれたなア。
長五　マア、仕事を片づけてしまや〳〵。
長吉　廓で詞を番うた通り、わが身の方からしやるか。サア、關取、どうぢや。サア、行こか〳〵。
長五　コレ、急きやんな。わが身とおれとが出入り、外からちつとでも、指さす者はない。マア、出入りせぬ先に、出してもらはにやならぬ。
長吉　何を。
長五　吾妻どのを。
長吉　吾妻どのとは。
長五　與五郎どのと、吾妻どのが、駈落ちして、行くへが知れぬ。大方わが身が埋んで置いて、侍ひに渡しやる心であらう。達引するに、埋んである事を知らいでは、事が立たぬ。マア、吾妻を爰へ出して置いて、その上で、わが身とおれとの勝負をせうかい。
長吉　長五郎、そんな事云ふと、關取の顔が廢るぞよ。吾妻を遣るか、遣るまいのと、達引になつたを、金も出さずに、連れて去なうと云やつては、それぢや男が立つまいがの。關取、人を見て、法を說きやいなう。
長五　それ聞いたら、おれも男ぢや。埋んで置いて、出さぬと云ふ人ぢやあるまい。それ聞いたら、胸が晴れる。
長吉　イヤ、おれは晴れぬわい。
長五　どうして晴れぬ。
長吉　知つて居るわいの。
長五　誰れが。
長吉　ハテ、下駄や野手が、取分け頭のえらい奴等、云ひ觸らさいでなんとせう。不承ながら、爰で、達引してたも。
長五　そんなら、どうあつても、達引するか。
長吉　不承ながら。
長五　ハヽヽヽ、おりや、爰へ達引しに來たのぢやなけれど、そんなら、お二人の在所は、後が先へなる分の事ぢやて。

長吉　それ〳〵、それなら爰で、達引してたもるか。
長五　わが身の望みの通り、達引からするぞや。
長吉　サア、行かうか。
長五　サア〳〵。
〽両方一度に尻ひッからげ。
わが身や、どうして片付けうと思やる。
長吉　関取、おりや、マア、斯うするわいの。
〽取りにくる腕外がらみにしつかと取り。
長五　それでは行かぬ。
長吉　やつて見せう。
〽両方一度に諸肌ぬぎ、互ひに手練の身贔屓、やつと云ふより合掌して、ひねれば止まり、突き落せば、どつこいさせぬと濡髮が、さしかくる腕ひッ捕へ、長吉が高無双、立つを飛び越し小腕とり、こりや〳〵と引き廻せば、敷居に爪づき放駒、尻餅どつとつきながら、瓢なる脇差抜く間も見せず起き上がり、切つてかゝるを俵口、攫んで丁と受け。
長五　叶ひもせぬ事、すなやい。
長吉　もう自棄ぢや。
〽開いて發矢と切りかくれば、腕捌俵に切り込んで、流るゝ米は雨あられ、小癪するなと切尖下がりに突ッかくる、どつこいさせぬと俵の楯、切尖に刎ね飛ばせば、飛びしさつて抜き合せ、受けつ流しつ我流無法の白刃と白刃、白髪まじりの親仁ども、駕籠を舁かせて、爰ぢや〳〵と戸を叩けど、二人は耳にも聞き入れず、命限り根限り、刃音鍔音はつし〳〵、表よりはぐゎつた〳〵。
ト六兵衛、五助出て表を叩く。
六兵　放駒の大盜人め。
五助　長吉の盜人め、明け居れやい〳〵。
トロ々に云ふ。
長五　待て〳〵、長吉。
長吉　待てとは、卑怯な。後れたか。
長五　長吉、いま表から云うたを、なんと聞いた。
長吉　や。
長五　放駒の長吉、大盜人と云うたぞよ。
長吉　なんと。
長五　これまで、なんぼも出入りはしたれど、盜人を捕へて、相手にはした事がない。明りを立てい。われが盜人の明りさへ立つたら、後で勝負せうわい。
長吉　盜人の明りさへ立つたら、後で勝負してくれるか。

長五　何時でも、勝負するのぢや。マア、明り立てゝしまへ。
長吉　忝ない〳〵。それなら、引け。
長五　われから、引け。
二人　サア〳〵〳〵。
〽一度に抜き身をさつと引き。
長五　盗人の明りさへ立つたら、何時でも勝負する。それまでは、一寸も後へは引かぬ濡髪の長五郎。おりや、爰で待つて居やうわい。
〽どつかと押直れば。
六兵　明けやい、大盗人め、明け居らぬかい。
長吉　なんぢや、放駒の長吉を、大盗人と云うたは、うぬらか。
六兵　オヽ、おれぢや。大きな事するなア。立ちながら云ふ事ぢやない。みな此方へ入らしやれ。
五助　米屋の長吉は、和御寮か……和御寮は〳〵。昨夜、此方の男を、立賣堀まで使ひに遣つたりや、新町橋で踏んだり叩いたり、えらい事しやつたなう。なんの意趣あつて、あのやうに投げたのぢや。サア、それ聞からそれ聞かう。

長吉　そんなら、昨夜の事か。おれに楯突く奴は、何奴でも投げてこます。投げたのが、どうしておれが盗人ぢや。うぬら、一人づゝ捻り殺すぞよ。
六兵　コリヤ、ヤイ、かさかわくないやい〳〵。
五助　オヽ、かさでも、汁椀でも、なんとも思ふのぢやないぞ。
〽ト云ひ〳〵長五郎を見て、氣味惡さうに
立派な角力取りさん、お前も聞いて下さりませ。昨夜、此方の男に、銀六十匁、打がへに入れて持たして遣つたを、せしめうばかりに、喧嘩を仕掛けたのでござります。その喧嘩から、打がへが見えませぬわいなう。
長吉　默りあがれ。打がへか見えねば、おれが盗人かい。あんだら盡すと、頰桁を引裂くぞ。
五助　ヤレ、恐ろしや〳〵。
六兵　コリヤ、そないに頭から喚くないやい。科もない者を、投げたり、踏んだりしをつたは、その金をせしめうばかり。當世流行る、ぱつたりぢやわい〳〵。
長吉　おれが取たつと云ふは、證據があるか。
六兵　アヽ、コレ〳〵、何も、せり合ふ事はない。いつそ町へ斷わつたがよい。ござれ〳〵。

〽近所へ響くわなり聲、姉のおせきは息せき、戻ればいつものつけ答へ、様子をためらふ其うちに、また車から二三人。

ト久兵衛、背に青葉を貼り、ちんば引き、妙林の肩にかゝりながら出る。

妙林　爰ぢや／＼。内に居やるか。其方は／＼、此方の息子を、山本町へ謡の稽古に遣つたれば、かけも構ひもせぬ者を、よう此やうにしやつたなう。腕が折れたわいなう。そればかりぢやない。紙入れに金三歩と、豆板が二十粒、その場から見えぬは、疵養生代を、其方へ取られたのぢやな。大盗人め、紙入れを戻し居れ。サア、この腕を、元のやうにまどへ／＼。

長吉　猫殿達め。

妙林　にやんぢや。

長吉　いろ／＼の事を吐かすがな、おのれが不調法で落したを、おれが知つた事かい。

妙林　叩いて置いて、取りやつたのぢやわいなア。

六五　大盗人よ／＼。

長吉　そんならおれを、盗人に仕上げるなア。

久兵　オヽ、盗人ぢや／＼。

長吉　盗人か。

三人　オヽ、盗人ぢや。

長吉　さう吐かしや、うぬら、モウ。

ト　かゝらうとする、おせき、入つて、止めて

せき　マヽ、待つてたも。先刻にから、様子は聞いたが、道理ぢや／＼。

長吉　姉様か。彼奴等が、おれをナ、盗人ぢやと云ひやんすわいなう。

せき　道理ぢや／＼が、マア、待ちや。わしが聞かぬ。例へ其方が料簡しやつても、わしが聞かぬ。わが身の顔の立つやうにする程に、マア／＼待ちや。コレ、頼む程に、待つてたもいなう。

ト度々宥め、又こちらへ来て

お前方も、ざわ／＼と、マア、下に居さしやんせ。一體、慮外でござんす。アイ、云ひやうが、麁相にござんすぞえ。

皆々　何が慮外、麁相ぢや／＼。

せき　喧嘩をする者は、此方の長吉、一人でござんすかえ。ほんに、これまで紙一枚、粗末にせぬ者を、人様の物を盗んだとは鈍な事。聞いては居ませぬぞえ。

トきつと云ふ。

長吉　コレ／＼姉様、此方へ退いて居やんせ。彼奴等が、おれを盗人にして。

トかゝらうとするを、いろ／＼宥める。

エヽ、お前に構はす事はない、退いて居やんせいなう。うぬ、彼奴らを。

ト又かゝらうとするを、引止め

せき　サア、よいわいの。此方の理窟のある時は、温なしうしたがよい……そちらな前髪様、お前も、なんぞ云ひ分があるのかえ。

長五　アイ、わしも出入り残りがあつて、来たのでごんす。盗人ぢやの、盗人でないのと、云ふやうな者を相手にした事がごんせぬ。マア、そちらの達引から、片附けてしまはんせい。

せき　さうなされて下さりませ。アレ、餘所の事のやうに云うて、立つものでござんすか。小さうても、店張つて居りますぞえ。アイ、慮外ながら、そんな事、聞いては居やせんぞえ。

妙林　ヤ、コレ、姉御の姫御前、喧嘩の場から、金が見えぬ依つて、盗人と云ふのぢやわいな。總體この頃は、人に喧嘩を仕掛け、物を取るのを、ばつたりとやら云ふげな。ちつと耳が痛らかう。サア、盗まぬと云ふ、なんぞ證據がござんすかえ。

せき　そんなら、喧嘩を仕掛け、物を取るを、ばつたりと云うて、流行る依つて、長吉が取りやつたと云ふには、なんぞ證據があるかえ。

妙林　そりや、その場から見えぬが證據。

五助　成る程、姉御の云ふのは尤もぢやが、オヽ、さうぢや、長吉が取らぬと云ふ證據を見しや。

せき　サア、證據は。

皆々　サア／＼／＼、見よう／＼。

せき　證據、見せませう。アレ、長吉の着替へや、手道具を入れる、あの箪笥、あの中を、お前方に見せて、もし無い時は、キッとお禮申しますぞえ。

妙林　そりや、その時の事。

五六　サア、見よう／＼。

長吉　コレ、なに云はんすぞいなう。エヽ、とつと彼奴等が、覺えもない事云うてうせて、おれが箪笥を見せるのかえ。そりや、家搜しぢやぞえ。なりませぬ、ならぬぞ。コリヤ、うぬら、指でもさいて見され、捻り殺すぞ。

せき　悪い合點ぢや。此方に覺えのない事ぢやに依つて、有るか無いかを見せて置いて、後で存分云はねばならぬ。マア〳〵、わし次第に、任して置きや。

〽姉に任して抽出しの、上の一重は袴入れ、次は帷子薄羽織、着物布子もでんぐり返し、箱の底より引き出せば、ついに見つけぬ紙入れ打がへ。

五助　ソレ、紙入れや打がへが、あつたぞや〳〵。

六兵　なんと、それでも、盜まんのか〳〵。

長吉　この紙入れ、打がへは。

妙林　此方の息子のに、違ひはないわいの。

長吉　こりや、どうぢや。

せき　ハア。

〽はつと吐息もつき詰めた、姉のおせきは顔をも上げず、面目涙にくれければ。

長吉　姉貴、おりや、知らんぞえ。エヽ、なんの事ぢやえ。おれが簞笥の中に、こりやマア、なんの事ぢや。コリヤ、よい加減な事を拵らへて、此方の内へ、ねだりにうせたか。おりや、盜みした事はごんせぬわいなう。

せき　まだそんな事云ふか。紙入れや打がへに、手足が附いて、わが身の簞笥の中へ、入つてあつたか。そんな事とは知らずに、今まで潔白さうに云うたが、今さらどうも、エヽ、なんの事ぢやぞいなう。

長吉　どのやうに云うても、おりや、盜んだ覺えはないもの。

トおせき、長吉を摑つたり、叩いたり、振り廻しても、動かぬゆゑ、腹立ち聲にて

せき　エヽ、ほんにそんな心には、どうしてなつた。思へば、死なしやんした父さんや、この姉が顔まで、よごさしたぞよ。

〽打がへ取つて容赦なく、叩き据ゑぶち据ゑる、姉が眞身の強意見。

妙林　エヽ、コレ〳〵、こちらは、こな衆の御意見を、聞きにや來ぬぞや。いつそ町へ斷わらうか。但し、金を戻すか。

皆々　どうぢや〳〵〳〵〳〵。

ト立ちかゝるを、姉はいろ〳〵宥めて

せき　サア、御尤もでござりまする。其やうに口々に、聲高に仰しやつて下さんしては、近所の手前がどうも。覺えのない事ぢやに依つて、今のやうに申しましたは、重重惡うござります。御料簡なされて下さりませ〳〵。

ト　いろ〳〵こなし、泣いて云ふ。

妙林　オヽ、金さへ済ましたら、料簡してやらう。

せき　アイヤ〳〵、その金も、わたしが辨まへませうし、また養生代も、わたしが辨まへませう。金を拵らへるまで、マア奥へござつて、待つて下さりませ。

妙林　ハテ、金さへ戻る事なら、でんどへ出ずと、待つてやりませうかいなう。

五助　ぢやと云うて、横道な奴ではある。

六兵　と云うても、でんどへ出ては、互ひの損恥。

妙林　そんなら、兎角町には事なかれ、待つてやりませう。

せき　それは忝なうござりまする。マア〳〵、此やうに疵まで附け居つた憎い奴でござります。さぞ痛むでござりませうなア。

ト　いろ〳〵追従云ふ。皆々、思ひ入れあつて

五助　エヽ、盗人めは憎けれど、姉様の手前が笑止なゆゑ、みんな奥へ、ござれ〳〵。

ト　皆々、奥へ入る。後を見送り、おせき、紙入れ、打がへを取り上げ、泣き、また長吉を見て、思ひ入れあつて、泣く。合ひ方になり

長五　長吉、勿怪な出入りになつたなア。この仕舞ひは、マア、どう附けうと思うて居るぞ。

ト　長吉、物をも云はず、無念のこなしあつて、脇差を提げ

長吉　さうぢや。

ト　奥へツカ〳〵と行かうとするを、おせき、止めて

せき　待ちや。血相變へて、どこへ行く。

長吉　どこへとは、奥へ行つて、おれが盗みしたか、せんかの明りを立てた上で、何奴も此奴も、胴腹抉つてこますわいの。

せき　待ちや。

ト　いろ〳〵止める。

長吉　イヤ、放さんせ〳〵〳〵。

せき　姉の云ふ事、聞かんのか。あれほど慥かな證據があつても。

ト　長吉、無念のこなし。また行かうとするを、止めて

コレ、いま奥へ行かしやんしたお方の、云はしやんしたを、なんと聞きやつた。この頃、人を叩いて、物を取るを、ばつたりと云ふと、云はしやんしたぞよ。モウ、世界は廣いさかい、悪い者もあらう。なんぢやあらうと、喧嘩をする者は、盗人のやうに、人が思ふわいなう。此

方の父さんは、丸屋仁右衛門と云うて、人様方にも立てられ、若い時分から相撲好き。あの長吉は角力を取れば、内方の息子どのは、十五やそこらで大きな體ぢや、元服した者を投げたと云ふ、親の心ではそれを喜んで、力立てするを止めなんだが、今ではひよんな事。母が死ぬか、おれが死んだら、頼みにするは其方一人、長吉が事を頼むと、勿體ない、娘のわしに手を合して、拜ましやんしたぞえ。それにマア、親の事は微塵も思はず、色里へ入込み、人を投げたり、それが親の弔ひになると思うて居やるか。其方の事を思うて見れば、この姉の胸が、一杯になつてならぬわいなア。

〽心に思ふありたけを、數へ立て〳〵、弟を思ふ眞實に、袖も袂も千石通し、涙の種をふるひけり。

妙林　コリヤ、いつまで待つても、埒の明かぬ事ぢや。

六五　コレ〳〵、こりや、でんどへ出ませうわいの〳〵。

　ト皆々、奥より出る。

せき　もう〳〵金は、出來てござんす。まちつとの間、待つて下さりませ。長吉、わしや、奥へ行くぞや。コレ、今夜は父さんの年忌の逮夜ぢやぞや。親がないと思うて、我まゝの有り條。男が立たぬ、顔が立たぬと云ふその顔は、矢ッ張り父さん母さんに、產みつけてもらうたその片割れぢやぞや。盗人と惡名の附いた其方、その惡名を、この姉が血の涙で、洗ひ雪ぐやうにしてたもや。ドレ、奥へ行きませう。

　ト思ひ入れあつて、おせき、奥へ同行、連れ立つて入る。あと唄になり、長吉、いろ〳〵こなしあつて、打がへ、紙入れを見て、無念のこなしあつて、脇差を拔き、手拭にて卷き、腹を切らうとするを、長五郎、止めて

長五　待て〳〵、待て。わりや、なんで死ぬる、腹切るのぢや。

長吉　イヤ、止めな、長五郎、生きて居られぬこの長吉、それぢやに依つて。

　ト死なうとするを、止めて

長五　待て〳〵〳〵、待てと云うたら待て。われが立たんと云ふは、世間よりは、今日の出入りしに來た、おれが手前が立たぬと云ふのであらうが、われが盗まぬ事は、おれがよう知つて居る。それを、長五郎が盗人にして、殺してしまうては、こりや、喧嘩の尻があるに依つて、疫病の神で敵と、見ぬ顔して、見殺しにしたと云はれて

は、長五郎の男が立たぬ。ほんにわりや、大きな仕合せ者ぢや。

長吉　おれを仕合せ者とは、きよくるのぢやな。

長五　きよくるのぢやない。おれも八幡には、一人の母者人があれど、五つの時に別れてから、逢うたはたつた一度。誰れが意見してくれる者もないに、わが身は結構な姉貴を持つて居るなア。姉貴はえらい者ぢや。假へ山が崩れて來ても、姉貴がグッと受けこんで、わが身に微塵も難儀はかゝらぬ。そんなら、なんと姉御の庇ほど、忝ないものはないぞや。姉貴が云はれた今の意見が、わが身の事ぢやとは思はぬ。一つ〳〵おれが身に堪へて、これから喧嘩は止めぢや。又こんな時に止めにや、止める時はないぞよ。出入りは止める程に、さう思うてたも。

長吉　わが身とおれが、出入りをこれぎりで止めるとは、アヽ、こりや、盜人を相手にせぬと、わが身や、おれを矢ッ張り盜人にするのぢやの。

長五　なんの盜人にせうぞいの。わが身が盜人なら、先刻の時に、おりや去ぬる。こりや、なんぞの間違ひぢやあらう。あの野手や下駄を、心安うしやるが、彼奴等は世間で評判の悪い者ぢやぞや。大方先へ廻つて仕事して、わが身に難儀かけるのであらう。吟味して見や〳〵。

長吉　忝ない。これまで友達は幾人もあるけれど、こなたのやうな深切な者はないわい。大抵、嬉しい事ぢやないぞよ。併し、こなたの疑ひは晴れてあるけれども、長吉は盜みしたと、世間で云はれては、どうも表へは出られぬ。姉者人の手前も面目ない。それぢやに依つて。

　トまた切腹せうとするを、おせき出て押しとめ

せき　コレ待ちや。其方を殺すまいと思うて、いろ〳〵と姉がするのぢや。この後、喧嘩さへせねば、わが身の明りは、立つであらう。

長五　立つてやるとい〳〵。

長吉　立つてやるとは、盜人の明りを立てるのかえ。おりや、盜人とさへ云はれねば、餘り死にたうもないわいの。

せき　死んで堪るものか。喧嘩を止めると云ふ、誓言を立ちや。

長吉　それでも、誓言をついに立てた事がないもの。オヽ、あるぞ。コレ、今夜、此方の内へ達引に來た、相手の長五郎、その長五郎が、踏まうが叩かうが、相手にはならぬ。これが慥かな誓言。

せき　そんなら、假へあなたに踏まれても、叩かれても、

口惜しいと思やせんか。喧嘩する事もならぬぞや。

長吉　もう喧嘩はせぬわいの。

せき　オヽ、出かしやつた〳〵、お同行様、みな來て下さりませ。

〽妻へ〳〵と呼ぶ聲に、ねだりに來たる親仁ども、肩衣かけて珠數つまぐり、どや〳〵と立ち出づる。

ト皆々奥より出る。

斯うばかりでは合點がゆくまい。あなた方は、死なしやんした父さんの、同行方ぢやわいなう。

長吉　エヽ。

せき　氣の毒なこなたの氣を、助けてやりたいと、今日長五郎さんと、この様子を云うたら、今夜中は延ばされぬと、喧嘩の相手に來て下さんしたりやこそ、其方の心が直つたぢやないか。

長吉　こりやマア、なんの事ぢや。打がへや紙入れは、何奴が入れて置いたのぢや。

せき　わしが入れて置いたのぢや。

長吉　姉さん、胴慾ぢやわいなう。

せき　サア、腹が立つなら、わしをどうなりとしてたも。わしが入れて置いたりやこそ。人が入れて置いたりや、矢ツ張り其方は、盗人にならにやならぬ。オヽ、腹立ちやつても、今夜は出入りもなら濟んだぢやないか。皆お講中さんのお志しが屆いてなア。

妙林　オヽ、さうとも〳〵。姉御の心を、無足に思はしやるな。年寄つて、此やうな作り事して來るも、こなたの心が直さしたいばかり。サア、今日からとんと、心を入れ替へさつしやれや。

五六　サア〳〵、とてもの事に、誓言を聞きませう聞きませう。

長吉　ハイ、いかいお世話さま。お前方に誓言は、もうこれから喧嘩を止めて、商賣を精出して、姉さんの云はんす事、なんなりと聞きますでごんせう。

妙林　オヽ、出かさんした〳〵。今のを聞いては、姉御、さぞ嬉しうござんせう。

せき　妙林さんの仰しやる通り、わたしや産れてから、此やうな嬉しい事はござりません。身に引きかけて、お前方のお世話で、弟一人拾ひましてござります。もうこれからは、喧嘩は止める、わしが云ふ事も聞かうと申しますし、商ひも精出さうと云うて居ります。いかいお世話さまでござります。

　トこなしあつて、長吉に向ひ

長吉や、よう思うても見や。喧嘩をして人樣に、腹立てさしたりすると云ふやうな事があるものか。一體また、喧嘩する者に碌な

　ト云ひさし、長五郎の方を見て、思ひ入れあつて

碌なお方があるかも知らぬけれど、ハヽヽヽ、長五郎さま、初めてお出でなされまして、いろ〳〵の事を、お聞かせ申します。手前の長吉は、喧嘩はもう止めると云うて居ります。お前樣も、ちよつ〳〵と、遊びにお出でなされませば、これまで出歩かしやつたものぢやに依つて、もし又、門中でお逢ひなされませうとも、内の姉が案じてあらう、早う去ねと、機嫌よう叱つて下さりませ。若い同士の事なり、何分よろしく、お頼み申しまする。

長五　イヤモウ、これが、雨降つて、地固まるとやらでごんせう。これからは、長吉とは兄弟同然にして、また惡い事でもあつたら、意見をしませうわいなう。

せき　その御深切、忘れは措きませぬ、有り難うござります。長吉も、この後は心を附けて下されや。

長吉　濡髮がさう思うてくれりや、おれもさうかい。

せき　聞かしてやつて下さりませ、生きる死ぬるの勝負にお出でなされたに、二人ながら兄弟分になつて、惡い事があらば、意見をして下さるとは、ほんに、マア〳〵、いかいお世話さまでござります。

〽所縁の袖に置く涙、手向けの水となりぬらん。

妙林　これと云ふも、佛のお庇、ちとお寄りにも、參じられませ。

皆々　サア、もう去にませうかい。

せき　ようお出でなされました。

　ト唄になり、皆々、下座へ入る。

長五　おれも、もう去なう。二三日のうち、此方へおぢや。

せき　マア、お待ちなされませ。つい歸しましては、どうやら、兄弟同然と仰しやつたに、違ひもせまいが、女は愚痴なものぢや依つて、とても事に、ちよつと杯をなされて下さりませ。

　ト神棚の徳利、土器を持ち出る。

長五　尤もでごんす。慮外ながら、注いで下んせ。とてもの事に、しつかりと固めがして置きたい。大儀ながら、腕出してたも。お氣遣ひな事ぢやごんせぬ。斯うして置かねば、氣がしつかりとせぬて。

　ト長吉の腕を引く事よろしくあつて

なんぞ、つけてやつて下んせ。

トおせき、思ひ入れあつて、袂の埃を出して長吉の腕につける。

長吉　斯う血を絞り込んで呑むからは、兄弟同然。サア、おれが腕を引いて、一つ呑みや。

長吉　イヤ、その杯は戴かぬ。

長五　杯を戴かぬとは、矢ッ張り心が残つてあるか。

長吉　残つてありや、爰で勝負する。済んだに依つて、どらも杯が戴かれぬ。

せき　それでは、長五郎さまが、立つまいぞや。

長吉　イヤ、立つ。

長五　どうして立つ。

長吉　この杯、暫らくおれが預かつて置く。

ト皆々こなし。向うより野手の三、走り出て

野手　長吉々々。彼の侍ひが難波裏で、吾妻と與五郎を引ッ捕へて、出入りの最中。行きやらんか。おりや、その仕舞ひを、見ようわい。

長五　南無三方。

ト駈け出さうとする。

長吉　長五郎、待て。われればかりは遣らん。おれも行くまで、待つてくれい。

長五　待てと聞いて、行かうとは、矢ッ張り肩持つのぢやな。

長吉　さうぢやない。生きても死んでも、われ獨りでは心元ない。一緒に行く。待つてくれ。

トおせき、止めて

せき　まだ其方は、心が直らぬか。

長五　杯せぬうちは、われには頼まぬ。

長吉　待つてくれ〳〵。

トおせきを引き退け、立廻りある。

長五　おのれ。

ト尻を引つからげ、走り入る。長吉、おせきを退けて、行かうとする。おせき、積んである米の俵をこかす。この見得にて、兩人よろしくこなしあつて、返し。

造り物、難波裏の體。向う遠見、今宮天王寺の景色。所々に稲村、松の木などあり、幕明く。

ト踊り三味線にて郷左衛門、有右衛門、與五郎を引ッ立て出て

有右　エヽ、郷左どの、手ぬるい〳〵。吾妻が事を、思ひ

切つたと吐かさずば、土坪へ打ち込み、茶碗蒸しの冷し物にさつしやれ。

郷左　イヤ／＼、それは後詰めの事。先づ、やわ／＼と苛なみますが、吾妻を手に入れる責め道具。この二才めは、拙者に任して、貴殿は何卒吾妻の儀を。

有右　お氣遣ひなされな。二才をそびき出した事を、わざと吾妻へ聞かせてござるは、在所を慕うて參るは必定。先づ、貴殿はその二才めを。

郷左　合點でござる。コリヤ毛二才め、手付け金百兩、親方へ渡し置いたれば、後金の相濟み次第、身が奥様だぞよ。イヤ、吾妻は女房だぞよ。それを、吾妻を連れて走らうとは、コナ、生き盗人めが。

有右　間夫とやら、虻とやらは、勤めのうちの事。最早郷左どのの奥方と極まれば、間男も同然だぞよ。

郷左　顔に似合はぬ、太い奴だわい。

ト振り廻し、いろ／＼苛なむ。

有右　手ぬるい／＼。ドレ、拙者、代りませう。

ト與五郎を引きつけて

ヤイ二才め、苛なまるゝが、苦しいと思ふならば、吾妻が事を思ひ切つて、あなたの方へ差上げませうと、三拜ひろげ。どうぢや。

與五　ならぬ／＼。相手は侍ひ、御免づくで退いたと云はれては、與五郎は立たぬ。思ひ切る事は、ならぬ／＼。

有右　死太い奴の。

ト郷左衛門、與五郎を引き付け

郷左　エヽ、嫌らしい。その心中立てが猶むやくしいわい。

有右　土性骨にこたへさせませう。

トはたと蹴る。

郷左　大泥坊めが。

ト兩人していろ／＼苛なむ。そこへ吾妻、走り出て

吾妻　ヤア、與五郎さん。

ト寄らうとする。有右衛門、吾妻を引きつけて

有右　なんと、見たか。郷左どのゝお心に背けば、あの通り。今にも應と云うて、奥様にさへなれば。

吾妻　エヽ、穢らはしい。嫌ぢや／＼。

郷左　さう吐かせば、この二才めを、カウ／＼／＼。

トいろ／＼苛なむ。

吾妻　そりや、あんまり胴慾ぢや。心に從はぬが腹が立つなら、マア、わしから先へ、殺して下さんせいなア。

有右　益體もない。そもじを殺しては、郷左どのゝ涙の種、

兎角郷左どのゝ、修羅の種はこの與五郎。
郷左　傾城遊女をたぶらかす、蟲の種どもへの見せしめに、
蟲塚へを埋んでこまさう。
有右　いつそ、手短かに、さうだ〳〵。
〽與五郎一人を手玉につき、踏みつ蹴りつの打擲に、目も當てられぬ吾妻が思ひ、我橋筋一文字、飛ぶが如くに長五郎、馳け來るより侍ひ二人が、腰骨摑んでぐつと差上げ、大地へどつと首の骨、碎けて退けともんどり打たせ、二人を睨うて仁王立ち。
ト長五郎、向うより馳けて出て、二人を投げる。
吾妻　オヽ、長五郎さん、好い所へ、よう來て下さんしたなア。
與五　如何におれ一人ぢやとて侮つて、此やうにむごい目に遭はして、人中へ顔が立たぬわいなう、
長五　サア〳〵、ようござります〳〵。わしが、立てます立てます。
吾妻　いとしなげに、與五郎さんを、二人して
長五　サア〳〵、よいてや〳〵。怪我がありや惡い。お前隨分氣を付けて、マア、片寄つてござりませ。
ト與五郎、吾妻を宥め、稲村の蔭へ入れて

お侍ひ、濡髪が云ふ事があつて、後追うて來たのぢやと、性根を附けて、爰へ出て、聞いてもらひませう。
〽喚けど更に返答なく、砂まぶれになつて起き上がり、互ひに顔を見合せて。
郷左　なんと、有右どの、氣が付いたか。
有右　成る程、人心地にはなりましたが、皆目、首が廻りませぬて。
郷左　イヤ、身共も御同然。斯程の目に遭ひまする儀は、臍の緒切つて以來の儀。
有右　恐らく、人間業とは思はれませぬ。
郷左　道理で、當年は、暖かなと存じましたが。
有右　雷か、地震か。
兩人　どいつぢや、何奴ぢや。
長五　誰れでもごんせぬ。濡髪の長五郎でごんす。マ、、下に居て下んせ。
有右　ナニ、濡髪。
ト兩人、愕りして
郷左　ヤア、慮外な奴め。武士に向つて、下に居よとは。
有右　其やうに、自由に立居がなる程なら、云ひ分はないけれど、歩くも心に任せぬわい。

郷左　匹夫下郎とは違ふぞ。身は武士だぞ。武士だに依つて、ひどくこたへて、體に痛みがあるワ。痛みのない體とは違ふぞ。例へ、難波道で骨接ぎが近ければとてもぢや。

有右　長五郎、卑怯な。諸侍ひを騙し投げとは、何事ぢや。樊噲、辨慶でも、騙しや負けるわい。なぜ尋常に名乘りを上げて、かゝらぬぞ。團扇も引かぬうちに、投げると云ふ事があるものかい。

長五　エヽ、喧ましいわいの。コレ、おれが云ふ事、よう聞かんせや。吾妻の身請けの高は六百兩、與五郎さまから、親方へ渡した手付けの金は三百兩。しかもおれが手から渡して、即ち、受取は爰にある。それに、こなさん方が、奥様ぢやの、女房ぢやのと云はんすゆゑ、どうも添はれまいかと思うて、そこで駈落ちぢや。總體、屋敷方の格式で、例へ金があり剩つても、身請けぢやの、イヤ請け出すのと、ぱつとした事はならぬものぢやげな。それを、こなさん方の意地づくで、身請けの邪魔。その意地づくの所を、どうぞ長五郎に下んせ。わしが貰うた吾妻どのゝ身請けを。

郷左　ならぬ。吾妻が身請け、止めにする事、罷りならぬ。と云ふのは、あながち戀の意趣ばかりでない。與五郎には濡髪と云ふ、腰押しがあるゆゑ、侍ひが敵はぬと思うて、吾妻が事を思ひ切つたは、濡髪が恐ろしさ、長五郎には敵はぬと、世の人々にかけられては、この郷左衞門、武士が立たぬ、料簡ならぬぞ。

長五　なんと云はんす。長五郎が腰押しぢやに依つて、料簡ならぬと云はんすのぢやな。

郷左　くどい。

長五　聞えた。成る程、尤もぢや。歴としたお侍ひが、町人の濡髪に、度々投げられ、それが怖さに、吾妻を思ひ切つたと云はれては、腹が立たう。侍ひが立つまい。ようごんす、その腹癒せに、おれを。

郷左　ナニ、其方が存分になるか。

ト兩人、顏見合せ

有右　アノ、郷左どのゝ存分になるぢやまで。

長五　アイ、存分になりませう。

郷左　なんと致さう、有右どの。

有右　存分になるに相違なくば、望みの通りに致してくれうわい。

長五　そんなら、おれを存分にして、思ひ切つて下んすか。

忝ない。サア〳〵、存分に踏まんせ〳〵。

ト両人、顔見合し、こなしあつて

郷左　オヽ、好い覚悟。

有右　いよ〳〵得心だな。

郷左　サア、有右どの、お出でなされい。

有右　先づ〳〵、貴殿から。

郷左　然らば、お先へ参る。

ト怖々、思ひ入れあつて

ヤイ長五郎め、うぬ、一度ならず二度ならず、町人の分際として、諸侍ひを、斯う踏んだか。カウ〳〵……サア、お出でなされい。

有右　もう、それでようござるか。其やうな、生ぬるい事では参らぬ。身共が代つて、カウ〳〵〳〵。

ト打擲する。

郷左　重ねて慮外ひろがぬやうにカウ〳〵〳〵。

トいろ〳〵苛なんで、草臥れたこなし。

両人　ア、しんど。

長五　お二人様、もうこれで、ようござりますか。

郷左　存分に、仕返しは済んだぞ。

長五　御存分でござりますか。

両人　もうよい。

長五　云ひ分ないなア。

両人　くどい。

長五　御存分になつた上は、約束ぢや、吾妻どのを、思ひ切つて、早う去んでもらひませう。

郷左　イヤ、去なれぬ。仕返しは済んでも、吾妻には、百両と云ふ手付けが渡してあるわい。

長五　ハテ、お前方の手付け金は、廓へ行て、お返し申しませう。吾妻どのゝ身請けは、どうぞこれぎりに。

郷左　ならぬ、否ぢや。百両と云ふ手付けを、渡して置いたれば、いつまでも吾妻は、身が女房だわい。

長五　そんなら、どうでも吾妻どのを。

郷左　是非受取らうと云ふならば、有右どの。

ト目にて教へる。

有右　オヽ、斯うして渡さうかい。

ト切つてかゝる。立廻りて、二人を止め

長五　コリヤ、何をするのぢや。ほてゝんがうかはくと、相手にならねばならんぞ……と云ふは嘘。どうぞ料簡を付けて下んせ。お前方も二人して、わしを仕舞ひつけもさんせうが、わしも、手も足もある。エイヤットウの道

も、ちつとばかりは知らんでもなし。すりや、互ひに命づく。ナ、さうぢやないか。大事の所ぢや。どうぞ料簡して。

兩人 ならぬ。

長五 そこを、どうぞ。

兩人 否ぢや。

長五 料簡ならねば百年目。猿松めら、覺悟しをらう。

トきつとなる。これより二階にて鳴り物入りの合ひ方になり、三人、立廻り、いろ／＼ある。トヾ兩人を切り伏せ、よろしくある。與五郎、吾妻、慄へ／＼出て

與五 ヤア、これは。

長五 騒がすと、チツとしてござりませ。

ト野手、下駄、窺ひ寄つて

下駄 吾妻、見附けた。

野手 郷左衛門さまに手渡しして、褒美にする。來い。

ト引ッ立て行かうとする所へ、長吉、走り出て、立ち塞がり

長吉 野手や下駄か。

野手 オヽ、長吉、好い所へ來たなア。

長吉 オヽ、好い所へ來たのぢや。

ト長五郎、吾妻を圍ひ、二人を投げる。

長五 さう云ふは、長吉ぢやないか。

長吉 オヽ、長五郎。この場の事が氣にかゝつたに依つて、姉貴の手前を拔けて來たが、して、出入りはどうなつた。どうぢや／＼。

長五 聞いてくれ。達引になつて、二人とも、殺らしてしまうた。

長吉 ヨウ、そんなら、ざぶを殺らしたか。

長五 長吉、お二人の事を頼んだぞよ。

ト腹切らうとするを止めて

長吉 待て。われが死んでは、お二人のお爲にならぬ。

長五 でも、人を殺したこの濡髮。所詮生きては居られぬわいの。

トまた死なうとするを、止めて

長吉 ハテ、悪い合點。侍ひが死んだら、もう誰れも義理はない。吾妻どのや與五郎どのは、おれが預かつて、お世話申すと云ふ證據は、コレ、この杯。

ト出して長五郎が腕を引き、呑んで

兄弟の印。

長五 エヽ、忝ない。

長吉　斯うするからは、お二人の事は案じずと、一先づ大坂を立退き、半季か一年は、影を隠したらよからう。
長五　そんなら、其方の詞につき、與五郎さま、吾妻どの、随分御無事で。
與五　短氣な心を、持つてたもんなや。
長五　そんなら、長吉。
長吉　さらば。
ト長五郎、行かうとする。
野下　長五郎、待て。
トかゝるを、立廻り、二人の首筋を摑み
二人　毒喰はゞ皿。
ト双方一時に、長吉は締め殺す。長五郎は泥へ切り込む。ト明け六ツの鐘鳴る。
長五　ありや、明け六ツ。
長吉　夜明けぬうちに。
長五　さらば。
〽足を早めて。
ト長五郎は向うへ走り入る。舞臺の三人、よろしく幕

四　幕　目　　橋本の場

役名　橋本次部右衛門。山崎屋與次兵衛。山崎屋與五郎。藤屋吾妻。次部右衛門娘、おてる。下女、おしも。同、おゆき。駕籠の太助。駕籠の甚兵衛。放駒長吉。

造り物、三間、二重舞臺。見附け、重ね戸棚、納戸口。上手、折り廻り、障子屋體。橋がゝり、藪垣に塀。いつもの所に門口。幕の内よりおてる、蒲團の上に脇息にもたれ、二枚屏風、側に下女おしも、おゆき、附いて、本の繪を見せて居る。淨瑠璃にて幕開く。

〽思ひなくて藪入りしたれ親里に、與五郎が噂おてる、去らるゝとなく去るとなく、呼び戻されて明暮れに、辛氣辛氣のぶら／＼病、頼む床にはつかねども、つれなき床もなつかしき、お氣のもつれを慰さめんと、下女が按摩も話し伽。

ゆき　コレ／＼、おしもどの、この間、御寮人様のお供をして見に行た芝居は、面白い事であつたなう。

しも　ほんに、その時の藝題は、傾城淺間嶽、江戸役者の中村七三と云ふ色事師、なんと、好い男ではないかいなう。

ゆき　その相方の奥州と云ふ傾城になつたは、なんとやら云ふ、女形であつたなう。

しも　ても、物覺えの惡い人ぢや。それは、岩井吾妻と云ふ女形ぢやわいなう。

ゆき　オヽ、その、吾妻々々。ほんに、美しい女形であつたぞえ。

しも　サア、吾妻も好い傾城なり

ゆき　七三も、よい殿御ぢやに依つて、どちらも、惚れる筈ぢやわいなう。

しも　わしらも、どうぞあのやうな、面白い色事が、して見たいわいなう。

兩人　ホヽヽヽヽヽ。

〽笑ひほころぶ戀ばなし。

てる　二人とも、聞いて居れば、この間見た芝居の話し。吾妻と云ふ名で、太夫になれば、與五郎さんの惚れてござる、藤屋の吾妻も同じ事。よう似た事も、あるものぢやなア。

ゆき　ほんに、御寮人樣の仰しやる通り、同じ名の吾妻でも、藤屋の吾妻は大膽者。

しも　それ〳〵、與五郎さまをたらし込み、御夫婦の仲を割くとは、エヽ、憎らしい傾城づら。

ゆき　お前樣も、少つと又、悋氣なされたが、ようござりますわいなア。

てる　アノ、云やる事わいなう。悋氣嫉妬は、女の嗜なみ。併し、傾城と云ふものは、人の心を迷はして、殿達が可愛がりなさるゝは、ほんにどのやうにすれば、殿御に思はるゝ事ぢやぞや。わしや、その傾城が、見たいわいなう。

ト泣く。兩人、こなしあつて

しも　ア、又どうやら、鬱陶しい日和になつた。

ゆき　此やうに暖かいのは、また雨であらう。

しも　ちやつと、張り物を、取入れてしまはう。

ゆき　貞庵さまの加減の藥も、一番が上がる時分。

しも　ちやつと御寮人樣に、上げましたが、よいわいなう。

ゆき　合點ぢやわいなう。ちと、お休みなされませ。

しも　お枕も、爰にござります。

ト蒲團を着せ、枕を渡し

兩人　ドリヤ、輿を片附けう。

〽云ひ損なひの出直しに、お藥あげうと立つて行く。

ト在郷唄になり、向うより甚兵衛、太助、駕籠舁きにて出て、花道にて

甚太　オツと、杖ぢや。

太助　なんと、重いもんぢや。

甚兵　二十六貫もあらうかい。

太助　オヽ、あるとも〳〵。旦那が十四五貫目、女中さんが十二貫目、慥か牧方から橋本までを、げんこの相輿とは廉いものぢやなア。

甚兵　オイヤイ、勘六や喜兵衛めが、鬮に當つたらへたり居らうぞい。

太助　まだ親仁は達者なゝう。

甚兵　仕込みが違ふわい。

太助　また白化をするわい。

甚兵　サア、ヤレ〳〵。

ト本舞臺へ來り、橋がゝりにて

藪垣のある所とは、大方爰らであらう。

ト駕籠へ開くこなし。

ハイ〳〵、爰ぢやわい。

ト駕籠を下す。中より與五郎吾妻出る。

與五　お召し物〳〵。

辻駕籠は狹うて、腰も肩も、ムリ〳〵云ふ。ヤレヤレ、しんどや〳〵。ドリヤ、ちつと歩いて、休まうか。

吾妻　オヽ笑止、なに云ふぢやいなア。

與五　ちつと仇口なと云はにや、氣が盡きて堪らん。なんと太夫、斯う二人、差向ひに乘つた形は、女雛男雛の箇の內、乘卷形の內裏雛とは、なんと見立ては、どうぢやどうぢや。

〽駈落ちしても減らず口、面白病は一盛り、橙にてや直るらん。太助は空駕籠ふりかたげ。

太助　サア甚兵衛、去なぬかい。

甚兵　ハテ、忙しない。マア、一服せいやい。

太助　イヤ、おりや氣が急く。先へ去ぬる程に、わが身が算用してもらうて、後から戻りや。

甚兵　オヽ、そんなら、さうしや。

太助　酒手も、よいやうに賴むぞや。

甚兵　ハテ、えいわい。

太助　旦那、お願ひ申します。

ト駕籠をかたげ、橋がゝりへ入る。
與五　時に太夫、どうせうぞ。ア、、どうやら云ふのであつたなう。
吾妻　それをわたしに、なんの談合。奥樣も戻つて居なさるぢやないかいなア。
與五　サア、その戻つて居るのが、氣もたぢやてや。
吾妻　ぢやてゝ、どうで逢ひなされにや、濟むまいがな。
與五　濟まぬ／＼。濟まぬ心のうちにも暫し、すむはゆかりの月の影。
ト謡ひ／＼甚兵衛と顔見合せ
甚兵　ドリヤ、木蔭で、一服下さりませう。
ト藪蔭へ入る。
與五　ハ、、、、親仁め、粹ぢやなア。エ、、此方の親仁もあの位に氣を通せばよけれども、朝から晩まで、算盤離さず。六ちんの三ちん、二ちんも三ちんも、いけんやうになつたわい。
吾妻　そないに入り兼ねて居なさるうち、もし誰れぞに見付かつたら。
與五　それを樣に、入る思案ぢやて。
トつか／＼と行て
頼みませう……と云はうか……コレ、わが身は……チッとそこに居や。どこへも行きやんなや。
吾妻　アイ／＼。
ト與五郎、入り兼ね、内を覗き
與五　ハア、あそこに寢て居るは、われが奥樣、よしよし。
〽幸ひあたりに人はなしと、つか／＼入る枕元、どし／＼と足音に、ふつと目覺めて見合す顔。
ト與五郎ズッと内へ入り、そこに來を置き、寢て居るおてるに打ちつける。これにて目を覺まし。
てる　ヤア、與五郎さま、ようマア、なんと思うて。
與五　なんと云うたら、わが身に逢ひに來たのぢや。
てる　ナニ、嘘ばつかり。が例へ嘘でも、そんなお詞は、聞き初めの、聞き納めでがなござんせう。
與五　エ、、幸先の惡い事を云ふ人ぢや。さうして、舅太夫は留守か。
てる　父さんは、奥に御寢なつてござるわいなア。
與五　寢て居らるゝか。嬉しや。マア半分落ちついた。
てる　さうしてマア、お供には、誰れが參じましたえ。
與五　イヤ／＼、供はないが、連れがある。

てる　お連れは、どなたぢや。此方へお入りなされませ。
〽挨拶ながら表の方、ちらと素振りを見て取る廻り氣。
ト表の吾妻を見て、思ひ入れ。
與五郎さま、聞えませぬ。お氣に入らぬは、わたしが科。假令へ幾日お宿にござらぬとて、これまでついに一度、なんとも申した事はござりませんぞえ。わたしより堅いは父さんが、親の與次兵衛にあやまらさにや、なんぼでも戻しはせぬと云はしやんすゆゑ、去にたうてならぬけれど、去ぬる事のならぬを、悋氣で去なぬと思うて、お腹の立つのかえ。その當てつけに吾妻どのを、連れて來て、これ見よがしのなされ方。わたしは近づきになりもせうが、父さんは、どこで立ちませうぞいなア。昨夜も讀んだ本の中、悋氣も少しは愛想ぢやと。
〽書いてはあれど、怪我な事。
思ひもせにや、申しも致しませぬ。わたしばかりか父さんまで、それ程お前は、憎いかえ。
〽お胴慾なと恨み泣き、側で聞き居る夫より、洩れ聞く吾妻が切なさは、身を悔むより外ぞなき。
ト　おてるの脊中を撫でる。吾妻、門口より見て居て、嫌ぢやと云ふ事する。與五郎、飛び退き、ちやつと上手へ行く。

與五　さう思やれば、腹の立つは尤もぢやが、全く其やうな機嫌ぢやない。おりや、匿まうてもらひに來た。どうぞ匿まうてたも。コレおてる。
てる　そんなら、父御さまの御機嫌でも、損ねましたかえ。
與五　イヤ〳〵、親仁は知らぬけれど、内へは去なれぬ譯は、あそこに居る、あの吾妻を、外から請け出さうと云ふ客があつて、どうも濟まぬ譯で、廓を連れて、駈落ちしたのぢやわいなう。
てる　そんなら、廓を抜けて。それでは、關破りとやらになりますぞえ。
與五　サア景清は牢破り、吾妻は關破り。見附けられて濟まず、内へは猶連れて去なれず、なんと、清少納言で、鳥の空音ははかるとも、世に大坂の關取りは、おれゆゑに難儀する。誰れを頼まう所もない身の上。頼むと云ふはわが身ばかり。舅どのへ沙汰なしに、こつそり二人を、匿まうてたもらぬか。
ト　おてる、思案して居る。
コレ、どうぢやいの。物を云やいなう。

ト おてる、顔を上げる。
得心で、匿まうてたもるか。
ヘ急く男には返事もなく、表へ出て吾妻が手を取り、
てる　折が折ぢやに依つて、お話しは後での事。人目に立つはお氣の毒。マア、入りなされませ。
ト 無理に内へ入れ
吾妻さんとやら、しみ／＼お近附きになりませねども、主の話しで、お名は聞き及んで居りまする。わたしは、てると云ふ者でござんす。
吾妻　ほんに、お名は兼ねて聞いて居りますれど、お目にかゝりましたは今が初めて。さぞ心の内では、憎い奴ぢやと、お叱りなされてござんせうなア。
てる　ナンノイナア。大事の與五郎さんを、大切にして下さんすお前ぢやもの、餘所外のやうに思ひません。氣遣ひなされな、お前はわたしが身に替へて、匿まひ負ふせて見せませう。
與五　ヤア、そんなら匿まうてたもるか。エヽ、忝ない忝ない。流石はりやんこの廓、オヽ、頼もしい／＼。吾妻、ちやつと、禮を云や／＼。
吾妻　今さら、申し譯するも恥かしい。賤しいこの身とお育ちから、悋氣嫉妬は打越えて、お頼もしい今のお詞。なんとお禮を申しませうやら。ほんに、あなたのお目にかゝるまでは、どうあらうと、與五郎さんも、大抵案じてぢやなかつたわいなア。
與五　それ／＼、案じるよりは産むが安いと、おてるがあゝ請合うたからは、大丈夫ぢや。モウモウ、大船に乘つたやうに、思うて居や。
吾妻　大抵嬉しい事ぢやござんせぬわいなア。
與五　それ／＼、今夜からは、誰れに遠慮もなう、其方と二人……サア、二人かと思へば、三人。ヤ、いつそ眞中におれが寢て、おてると吾妻を右、左、世話形の三面の大黒といふものぢや。
ト 喜ぶ。おてる、物云はず、與五郎が手を取り
てる　與五郎さん、早うお歸りなされませ。
ト 與五郎、思ひ入れ。
與五　そんなら、いま匿まふと云うたは、騙したか。
てる　吾妻さんは匿まふ程に、お前は早う、お歸りなされませいなア。
與五　そりや、なんの事ぢや。
吾妻　與五郎さんは匿まうても、わたしはならぬとありさ

うな事を、あちらこちらの仰しやりやう。

てる　イヤ、さうぢやござんせぬ。傾城は一夜流れ、嘘を賣るのが商賣と、惡洒落な譬へ。つい一通りで、關破りの科を受けてなりとも、與五郎さんと一緒に居たいと、命にかけて思うて下さる吾妻さま、なんの憎う思はうぞいなア。

吾妻　さう思うて下さんすが、ほんの事なら。

てる　お二人ながら匿まへは、主に逢ひたいばつかりに、傾城までを引入れてと、一途な父さんのお叱りは知れた事。差當つて、世を忍ぶ身と云ふは、吾妻さんばかり、與五郎さんは、なんにも科はないお身。お内へさへお歸りなさるれば、結句父御さまの御機嫌もよく、元より世間の疑ひも晴れて、御難儀のかゝる筋はありそむないものと、マア、わたしは思ひますが、吾妻さん、なんと、さうぢやあるまいかいなア。

〽神妙なやうでも武家育ち、立て拔く義理に恥ぢ入つて、涙を押上げぬばかりなり。與五郎は若氣の苦なし。

與五　ヨウ〱、當世娘の性根々々。そんなら、いよ〱吾妻が事を、頼むぞや。

てる　オヽ、なんの頼むの、頼まるゝのと、云ふやうな仲かいなア。

與五　嬉しや、吾妻、そんなら、おりや、もう去ぬるぞや。

吾妻　なんぼうさうぢやてゝ、わたしは、お前に別れては。

ト縋りつく。與五郎、おてるの方へ思ひ入れあつて

與五　ハテサテ、ちつとの間ぢや、辛抱しや。

吾妻　必らず、ちよつ〱と、來てくれなませや。

與五　來なと云やつても、わが身が居るもの、來ないで…預けたぞえ。

てる　お氣遣ひ遊ばすな。しつかりと預かつて、晩からわたしと二人寢て、廓の話しも聞きますわいなア。

與五　イヤ、コレ、何を話しても大事ないが、ついにわが身の事、おりや、惡う云うた事は、ナア吾妻。

吾妻　オヽ、笑止。そりや、呑み込んで居るわいなア。

與五　おてる、頼むぞや。

吾妻　そんなら、もう去ぬかいなア。

與五　イヤモウ、今までと違うた體。さらばお暇。

ト行かうとする。この時、障子屋體の内より

次部　聟どの、待ちやれ。傾城遊女を連れて走れば、關破

りの同罪、滅多には去なれまい。

ト次部右衛門、着流し、耳に眼鏡をかけ、本一冊持ちながら出て、本を抛りながら、平舞臺へ下りる。

與五　エヽ。

次部　關破りの與五郎は、この次部右衛門が、匿まつてくれう。

〽呼びとめる舅の顔、はつと二人は生中に逃げそゝくれて手持ちなく、消えも入りたき風情なり。

ト次部右衛門、吾妻を眼鏡にて見る。吾妻、氣味惡さうに上手へ行く。次におてる、次部右衛門、與五郎、下手に坐る。

ムウ、駈落ちするに、ハテ、仰山な形だ。これを大坂から橋本へ來るまで、人が見咎めぬとは、ハテ、盲目千人、目明き千人だなア。娘、出かした、よく吾妻を匿まうた。流石は次部右衛門が娘、出かした。世の人口を顧みて、えゝ匿まはぬと云ふ與五郎は、身が匿まうてくれうわサ。

てる　そんなら、與五郎さんは。

次部　匿まひやうにも、一思案。

ト硯と紙を出し

サア、聟どの、一札召されい。

與五　一札とは、なんでござります。

次部　娘てるへ、暇の狀を。

與五　エヽ。

次部　エヽとは、何を其やうに驚ろく。氣に入らぬ女房、持つてもらふ追從に、匿まつたと云はれては、浪人ながらも次部右衛門、武士が立たぬ。サ、早く書いた〳〵。

與五　ぢやと申して。

次部　何を斟酌。去りたくてならぬ娘、出したくてならぬ暇の狀を、親が望んで出さすのぢや。サア、早く書いた書いた。

〽退引きさゝぬ詞づめ、はつと一度に三人が、心ごゝろの當惑涙。

てる　思ふ事、まゝならぬが浮世とは云ひながら、ほんに又、此やうに。

次部　コリヤ〳〵、あれにお傾城も見て居らるゝ。たつた今褒められたでないか。その詞に引きかへて、未練な奴の。

與五　申し〳〵、其やうに、おてるをお叱りなされて下さりますと、私しはモウ。

次部　へヽ、御深切、忝なうござる。

ト苦笑ひして

身が娘のてる、叱らうが、叩き殺さうが、お身が世話にやたらぬ。女童をたらすやうに、追從云はずと、サア、キリ/\、書いた/\。

與五　それぢやと云うて。

次部　不承知か。不承知ならば、これまでの通り聟舅此まゝには捨て置かれぬ。世間への面晴らしに、わしが聟の與五郎、新町の傾城を連れ、駈落ち致し、私し方へ參り居ると、代官所へ訴人せうか。

與五　サア、それは。

次部　但しは、ぐる/\卷きにして、二人ながら、引摺つて行かうか。

與五　サア、それは。

次部　離緣して、隙まはるゝか。

與五　サア。

次部　サア。

與五　サア。

次部　サア/\/\、どうだ。

〽せり立てる程とまくれて、返事なければ。

てる　申し、與五郎さん、わたしへの義理を思うて、その一札をお書きなされて下さりませぬと、お前のお爲にならぬ程に、マア、この場は素直に。ハテ、事なら濟んだその上では、又、どうなりと、そりや、お前のお心にありさうな事。父さんのお心安め、サア、なんであらうと、お書きなされて下さりませいなア。

〽と云ふもおろ/\差當る、訴人の嚇しに詮方なく、遣りたい暇も遣り惜い、義理も糸瓜も一つ書き、お定まりの三下り半、手早に書いて差し出すを、中から取つて。

吾妻　おてるさん、こりや、わたしに預けて下さんせ。

てる　その暇の狀を、お前が。

吾妻　わたしが見る前で、お前に渡さしましては、どうも道が立ちません。

與五　そんなものぢや。

吾妻　と云うて、お書きなされねば、隙まはぬと仰しやる、舅御樣の思し召し、これとても御尤も。いづれをどうと分け兼ねて、悲しい中からおてるさまの、お進めなさるこの去り狀。中からわたしが預かりさへすりや、この場は濟みさうなものと、思ひますわいなア。

〽離緣の意氣づくそれ者とて、所譯を立てし裁きなり。

次部　一度傾城の涎を得れば、忽ち心散亂し、武士の知行に離れ、町人百姓は、家藏を棒に振るは、たわけた奴だと思つたが、尤もだ。今の緣切りと云ひ、イヤハヤ、驚ろき入つた。この去り狀を、此まゝに書かしては、アレ見よ吾妻と云ふ傾城は胴慾者だ。現在の女房を、與五郎をたぶらかして去らせたと云はれては、また後々、與五郎如き好い客の附いたる時、末々職分の障りともならんと思ひ計つて、わたしに預け下されいとは……ハン、天晴れの白狐めぢやなア。

ト皆々思ひ入れ。

〽折もこそあれ山崎與次兵衞、我が子が爰に來て居るとは、白髮頭のおつほろ髮、供をも連れずあひやけの、門口に來かゝつて。

ト向うより與次兵衞、杖を突き出て來て

與次　頼みませう。與次兵衞でござる。次部右衞門どのはお宿にかな。

〽と云ふ聲に、見附けられなと三人とも、奥へ追ひやり出で迎ひ。

トこれにて次部右衞門思ひ入れあつて、三人を障子屋體へ入れ、朱鞘の刀差し、捨ぜりふにて門口を開け、

兩人顏見合せ

次部　オヽ、これは與次兵衞どの、よう出やしやりました。サヽ、通り召され通り召され。

與次　イヤ、その後は、御無沙汰ばかり。

ト云ひ〳〵二重へ通る。

次部　貴殿にもお達者で、マア〳〵、めでたうござる。

與次　イヤモウ、おらが達者なより、息子どのゝ達者に、モウほうど困り果てました。して、おてるは、氣色はようござるかの。

次部　オヽ、だん〳〵に心よくござる。

與次　物も食べますか。

次部　食べるとも〳〵。

與次　アヽ、そりや、嬉しうござる。そんなら、連れて歸りたうござる。

次部　イヤ、先づ今分では歸されませぬ。

與次　そりや又、どう云ふ譯で。

次部　與五郎が本心から、てるを戻せと云ひ越さば、自身は愚か、丁稚小和郎を寄越すとも、違背なく戻すが道。臭い物に蓋すると、押しつけ業が氣に入らぬ。

與次　イヤ、さう云はしやんな。嫁に取るからはおれが

娘、野良めが性根が直らずば、おてるで跡を立てる所存。

次部　ハテ、皆まで云ふな。肉身の我が子さへ、金銀を惜しみ、命、生害に及ぶとも、構はぬやうなてまへが、人の子で家相續なんぞとは、存じも依らぬ。金銀財寶、望みにはないぞ。

與次　その望みにない者が、なぜ與五郎を引込んで置きやる。

次部　皆まで云ふな。斯く云へば、放埒の荷擔人するやうなれど、傾城を請け出し、てかけ妾にしたりとも、誰れが咎める者もなき身の上、ながら、僅かな金銀に手支へさせ、義理に義理が迫りし駈落ち、見捨て置けぬ聟の難澁慾心に迷ひ、引込みしと云はるゝが面倒さに、離緣させて匿まうたは、世の人口を防がん爲の潔白。

與次　ムウ成る程、それで讀めた。それでは無理に暇取つて、此方の緣を切つてしまうて、さつぱりと養ひを取るやうな、聟を取り替へる、思案であらうがの。

次部　默れ、與次兵衞、太平の世に、要らざる武具馬具賣り代なし、細い烟を立つればどて、聟などに養なはるゝやうな、次部右衞門でないぞ。諸式を買ひ込み値上げさせ、高利を貪り、人をひづめる、むさい賤しい人非人と次部右衞門とは性根が違ふわい。

與次　イヤ、人非人とは、誰れが事ぢや。

次部　聞きたくば、うぬが心に問へ〳〵。

與次　エ、、腹の立つ〳〵。さう云やモウ、破れかぶれぢや。

ト與次兵衞、脇差を拔き、切つてかゝるを、左の手にて肘を止め

次部　町人の分際で、いらざる刃物三昧、てんがうすない。

〽劍は飛ばせば、猶いら立ちの滅多切り、互ひに聞かぬ氣、拔き合せ、發矢々々と切り結ぶ、中を押し隔る息杖は、始終殘らず立ち聞く甚兵衞。

ト此うち甚兵衞出て、息杖にて程よく止め

甚兵　マア〳〵、待たつしやりませ〳〵。

次部　待てとは、おのれ、見馴れぬ奴ぢやが。

與次　誰れぢや、何者ぢや。

甚兵　誰れであらうと、なんであらうと、止める思案があつて止めましたのぢや。マア〳〵……どつこいな。

〽二人の刀を息杖で、下にしつかり押へつけ。

先刻にからの一部仔什、お二人ともお腹の立つも、お子達の可愛さ。サ、御尤もぢや〳〵が、喧嘩の起りは藤屋の吾妻……樣とやら云ふお山さんからの事ぢやござりませんか。今にも、その傾城どのゝ親……サア、親御でも爰へわせられて、今のやうなわり口說きを聞いては、サアマア、例へわしがやうな雲助でも、親の身では大抵や大方、術ないこつちやあらうと思つてもやりませぬか。その親御の事を思ひやつて、止めに出た思案と云ふは、慮外ながら、この親仁めが、そのお傾城の親御になり代つて、とつくりと意見して、若旦那樣の事、思ひ切らしさへすりや、よいぢやござりませんか。ハテ、田から行くも、畔から行くも、內方のお娘御樣と、若旦那樣と睦まじう、女夫にして家さへ立てりや、浪風なしに治まると云ふもの、爰の所を聞き分けさつしやりまして、どうぞこの喧嘩は、親仁めに、預けさつしやつて下さりませ。

〽思ひもよらぬ平賴み、藪から片棒の駕籠の甚兵衛、心あり氣に見えにけり。

與次　ムウ、すりや、われが吾妻に意見して、思ひ切らさうと云ふのか。

甚兵　この息杖冥利、噓は申しませぬ。

與次　面白い、なんと次部右、願ひ叶へて、待つ氣はないか。

次部　ハテ、身共とても、聟や娘が不便さゆゑ、無難に治まる儀に違變はない。とは云へ、一旦、武士が拔き放した刀の手前。

甚兵　サ、、、、そのお刀は、御慮外ながら、甚兵衛に預けさつしやつて下さりませ。

次部　この拔身を、其方が預かつて。

甚兵　首尾よう、元の鞘へ納めるやうに、細工は流々、仕上げをお目にかけませう。

〽預かる氣より預けたき、心くろめる黑鞘朱鞘、腰から拔いて差出し。

與次　サア、次部右衛門。

次部　與次兵衛。

與次　これで暫らく云ひ分も。

次部　吾妻が返答一つに極まる。

甚兵　マア、それまでは。

次部　甚兵衛とやら、奥で返事を

兩人　待つて居るぞよ。

ト唄になり、次部右衛門は障子屋體へ、與次兵衛は納戸へ入る。

〽甚兵衛は刀こて〳〵と、鞘に納める受合ひの、思案とりどりそれぞとは、知らぬ吾妻が落ちつきし、樣子を道に待ち合す、放駒へ知らせんと。

吾妻　甚兵衛どの〳〵。

ト呼び〳〵出て

オヽ、爰にかいなう。こなさん、大儀ながら、この狀を、長吉さんへ、ちやつと屆けて下さんせ。

ト文を出す。

甚兵　ハイ、畏りました。わしもちと、お前樣にお目にかかりたいところ。ようござつて下さりましたなう。

吾妻　ムウ、わしに用とは、なんの用ぢや。

甚兵　ちよつと爰まで、出やしやつて下さりませ。

吾妻　オヽ、あの人の氣味の惡い、なんぢやぞいなう。

〽近う寄つて跼き。

甚兵　おとよ、大きうなりやつたなう。母は、もう二年になるぞや。

吾妻　ムウ、こなさん、それ、どうして知つてぢや。

ト下に居る。

甚兵　オヽ、可愛い娘や女房の身の上、例へ海山隔てゝも、知らいでかいなう。知つて居るわいなう。

吾妻　ヤア、そんなら、こなさんは。

甚兵　オヽ、おきちが連合ひ、其方の親ぢやわいなう。

吾妻　エヽ。

甚兵　オヽ、斯うばかりでは、合點が行くまい。とつくりと云うて聞かしませう。元おれは大坂の聚樂町で、破れ家の一軒も持つて居た者。商賣の荒道具、ひよんな物買ひ合して、大坂の土地には居られず、娘とわが身を殘して、おりや牧方の知るべへ立退いて、何商賣の當もなく、只うろ〳〵、たうとうこの態になり下がり、その時は、わが身はやう〳〵六つの年ぢやに依つて、知つては居やるまいが、もう大抵難儀した事ぢやないぞいの。

ト泣いて

シタガモウ、習はうより馴れぢや。一日々々と、何もかも合點がいて、やう〳〵と稼ぎ溜め、三枚敷を敷いてからは、互ひに往來はせねど、娘の方から狀をおこしやる度毎に、とよも隨分達者で、今では新町の藤屋の吾妻と云ふ、太夫になつて居ますと聞いて、ヤレ嬉しや、どうぞして稼ぎ出し、さつぱりと羽織の一枚も着てから、逢

ひに行かうと思ふうちに、一昨年の十二月の十三日、近所の衆からの狀に、嫦は死んだと讀んで悔りせまいか。それからと云ふものは、心にかゝるはわが身の事、例へ嫦は居やらずとも、わが身さへ出世すりや、又どうなりと神佛へ、願ひに願ひをかけ、どうぞ好い客がな附けかしと、祈つた甲斐があり過ぎて、與五郎さまと云ふ、山崎の若旦那、おてるさまと云ふ、奥様のあるお方を、ようもようもあんな、うぽ〳〵にしをつたなア。おのれ、如何に人を騙すのが商賣ぢやて、あんまりであらうぞよ。おのれが事で今も今、親仁樣達がすんでの事に切ッつ擲ッつ。聞いて居たこの甚兵衞、術ないと氣の毒なと、悲しいのと腹が立つので、なんぼでも淚がやまいで、昨日洗うた單衣物、四文が糊を棒に振つたわい。こりや皆誰れから起つた事ぢや。長うは云はぬ。あの衆に、意見して思ひ切らしませう、と請合つた詞がある。コリヤ、久しぶりで逢うた親が初めての頼みぢや。われさへ得心して、與五郎さまと緣切つてくれゝば、双方の納まりぢや。サ、、得心してたも。有る緣なら、また逢はれる程に、マア當分は思ひ切つてくれい。サ、、否と思ふは尤もぢや。命にかけて居る仲を、思ひ切れと云ふ、心の内のおらが悲しさ思ひやり、どうぞ聞き分けてくれい。コリヤ、拜むわいやい〳〵。

〽縋り上げ〳〵、わつとばかりにむせ返る。駕籠が淚は息杖の、休む隙なき思ひなり。

吾妻　そんなら、お前が父さんかいなア。

甚兵　オヽ、父ぢやわい。

吾妻　父さんかいなア。

甚兵　父ぢや。

吾妻　父さん〳〵。

甚兵　父ぢや〳〵。

吾妻　てもさても、珍らしい、悲しい話しを聞きました。今の今まで、お顏は見た事はなけれども、父さんがあると、云ふ事は、母さんの話しで聞きました。お前をわしが、父さんとも。

〽知らぬ道筋勿體ない。野邊の送りの親の輿、子が舁くとこそ聞いて居るに、如何に知らぬと云ひながら、現在親に駕籠舁かせ。

〽乘つたわたしに神樣や、佛樣が罰當てゝ、なぜにわたしを逆さまに、落して殺して下されぬ。神や佛が恨めしい。まだその上に與五郎さん、退けと仰

しやる御意見も、無理とはさら〳〵
〽思はねど。
よう思うても見やしやんせ。おてるさんと云ふ奥様の、あるを知りつゝ逢うた客。初めの勤め、後の色、女夫にならうとも、去らさうとも、微塵も思やせぬけれど、否な客から請け出すと、まゝならぬ身は是非なくも、連れて退いたる與五郎さん。輕いお身なら、そもないに。
〽逢ひかゝるから今までも、重なる節句、年の暮。
お世話になつたこの吾妻、いま又わしゆゑ難儀のお身。任せぬ時に振り捨てゝ、どうマア義理が立つものぞ。コレ、手を合せて拜みます。コレナア、申し、これぱつかりは、拜みます、どうぞ堪忍して、下さんせいなア。
〽親に取りつき泣く娘、粹な育ちも涙には、譯も隔てもなかりける。
甚兵　オヽ、道理ぢや〳〵。道理ぢやわいやい……サア、道理は道理ぢやが、又此方も道理、彼方も道理、道理とばかり云うて居ては、いつまで云うても同じ道理ぢや。その道理を思ひ外し、わしが道理も考へ、與五郎さまの道理も思うて、退いてくれ、エヽ、コレ。
トいろ〳〵云へど、吾妻頭振るゆゑ、困つたと云ふこなしあつて
よいワ、われのやうに、さう片意地云ふと、おらが又、仕樣がある。オヽ、おらが子で、子でない、勘當ぢや。勘當も勘當、七生も八生も、一斗までの勘當ぢや。
吾妻　勘當、否ぢや〳〵。
ト大泣き。
甚兵　アヽ、嘘ぢやわい〳〵。
ト抱きしめて泣いて
なんの可愛い娘ぢやもの、ほんまに勘當して堪るものか、勘當はしやせん程に、アイと云へ〳〵。
吾妻　アイ〳〵。
甚兵　合點したか。
吾妻　アイ〳〵。
甚兵　退いてくれるか。
吾妻　アイ〳〵。
〽アイ〳〵の詞の隙、有り合ふ刀拔くより早く。南無阿彌陀佛。
ト自害せうとする。甚兵衛、慌て止め
甚兵　待て〳〵。
吾妻　イエ〳〵、最前からのお前の意見、よう合點して見

ても、生きて居るうちに、與五郎さんの事は、どうも思ひ切られませぬ。否と云へばこれまでに、一日の產みの御恩さへ、え、送らぬ父さんの、お詞背く不孝の罪。とても生きては居られぬわたし。止めずに殺して下さんせ。放して〳〵。

甚兵　イヤ〳〵、なんぼでも、殺さぬ〳〵。

吾妻　イエ〳〵、殺して〳〵。

〽死ぬる〳〵とせり合ふうち、中から取つた次部右衞門。

ト次部右衞門出て、吾妻を止める。

甚兵　ヤア、あなたは旦那樣。

吾妻　最前からの樣子を。

次部　殘らず、あれにて聞き屆けた。さては甚兵衞は、吾妻が實の父親であつたよな。

甚兵　ハイ〳〵、お恥かしうござりまする。

次部　なんの〳〵、盛衰は人間の習ひ。職分身分の高下より、心こそ恥かしきものなれ。甚兵衞が實情と云ひ、吾妻が立つる貞女、あの一間から聞いて居て、熱い淚をこぼしたわい。吾妻が心底、見拔きし上は、身請けいたし、この次部右衞門が、與五郎と添はしてやる。コレ、この刀は五郎正宗、判金百枚の折紙。この刀を賣り代なし、關破りの科は助けてやる。お身が吾妻を思ふも、身共が娘不便なも、思ひは變らぬ燒野の雉子。それにつけても與次兵衞め、腐るほど金持つて居ながら、與五郎が關破りになるも、吾妻が難儀も、見捨てにする胴慾者。吾妻が身請けも濟んだ上、あの與次兵衞め、存分云はいで置かうか。

與次　オヽ、その鬱憤。與次兵衞、直に承はらう。

ト奧より法體して出る。

甚兵　ヤア、お前樣は。

次部　坊主になつたか。

與次　ア、次部右衞門どの、あやまりました〳〵。有やうは、今日來たも、忰めが關破りの科が、助けたいばつかり。と云うて金づく。その金を、おらが手から出して遣つては、親の手で請け出すも同然。關破りの科を助けてやりたいと、思うて下さる次部右衞門どのゝ心を聞いては、モウ〳〵〳〵、嬉しうて〳〵、どうも禮の云ひやうがなさに、與五郎が惡事を引請けて、今からおれは與五郎入道、法名もちやんと附けて置きました釋の淨閑。息子どのは、おれが名を讓つて、山崎與次兵衞。門跡樣

へも、えゝ上げぬ大切な金をさへ、出してなりとも、さつぱりと闕破りの譯は立てまする。そこに居るば、吾妻どのとやらぢやの。昨夜までも今朝までも、恨んだは此方が惡い。先刻にからの志しを聞いては、いとしうて〳〵ほんの嫁女、とサア思へども、次部右衞門どのゝ手前、不承ながら、マア、姿になつて下されや。甚兵衞とやらが志し、忝ない〳〵。次部右衞門どの、こなたへの過言、何事もみな、悴が不便さから。コレ、萬事は、この頭に免じて、眞平々々。

〽こはい親仁が打つて變へ、恥も惜しまぬ平詫びに、涙一ぱい目に持つて、頭を下げる親の慈悲。與五郎夫婦は障子より、覗いて影に手を合せ、我が身の不孝思ひ知り、謝まり入るぞ哀れなり。

ト皆々よろしくこなし。

次部　これは〳〵痛み入る。兎や角と申せしも、聟娘等が不便さゆゑ。斯く打解ければ互ひに他事なき婚同士。サア、手を上げられい、平に〳〵。

與次　イヤモウ、さう思うて下さりや、わしも安堵、だんだん謝まりましてござる。

次部　これはさて、マヽ、手を上げられい。

與次　マヽ、其許から。

次部　貴殿から。

兩人　ハヽヽヽヽ。

〽心解け合ふ婚同士、頭ばかりの一家中、丸うなつてぞ見えにける。

吾妻　斯う何も彼も、丸う納まる上は、預かりましたこの去り狀。

ト引裂いて

斯うしてしまふが、わたしがお禮。必らず、疑うて下さんすなえ。

甚兵　オヽ、さうぢや〳〵、出かした。ハイ旦那樣、御隠居樣、エヽ、有り難うござりまする。

〽喜び合ふこそ道理なり。庄屋名主があわたゞしく。

ト これにて庄屋、年寄、駈け來り

庄屋　サア〳〵、大事ぢや〳〵。

年寄　次部右どのに、山崎の與次兵衞を連れて、罷り出いと、代官所からの急お召しでござるわいの。

次部　ナニ、急お召しとは心得ぬ。して、御用の筋は。

庄屋　なんぢや知らぬ。遲いと叱られる。早うござれ早うござれ。

次部　なんにせよ、公用とあらば、參らずばなるまい。

與次　幸ひ與次兵衞も、參り合せて居りまする。

次部　支度いたして、同道いたさう。

年寄　エヽ、悠長な。支度どころぢやない、急お召しぢやわいの。

庄屋　早うござれいの。

次部　然らば、淨閑老。

與次　次部右どの。

次部　參りませうか。

〽代官所へと行く跡に、障子押し明け與五郎夫婦、飛んで出で。

ト次部右衞門淨閑に庄屋年寄り附いて向うへ入る。與五郎おてる出て、

與五　先刻にから出たかつたけれど、親仁樣や舅どのゝ手前、面目なうて、えゝ出なんだ。

てる　お二人樣を急お召しとは、氣遣ひな事ぢやないかいなア。

甚兵　ハテ、益體もない。盜み騙りはさつしやるまいし、お召しでも、茶漬でも、なんにも案じる事はござりませぬわいの。

與五　イヤ／＼、吾妻を身請けせうと云ふ、屋敷の客を、濡髮が切つたゆゑ、その事についての、詮議であらうわいなう。

吾妻　ひよつと、その詮議になつたら。

與五　わが身も。

吾妻　お前も。

ト顏見合せ、思ひ入れ。甚兵衞、悄りして

甚兵　ヤア／＼、そんなら、懸り合ひぢや、えらぢやぞえらぢやぞ。

てる　父さんのお身の上も、氣遣ひないわなア。

甚兵　アヽ、其やうに心にかけて、案じてばかり居たつてあかん事。ハテ、それ程に氣遣ひに思はしやる事なら、わしが一走り行て、樣子を聞いて進ぜませう。

てる　そんなら、大儀ながら。

〽まつかせ合點と甚兵衞は、尻引ッからげ、飛んで行く。

ト甚兵衞入る。

與五　エヽ、おれが、これが否さに長五郎に、喧嘩しやるなと云うたのに。

吾妻　なんのマア、長五郎さんぢやてゝ、あまり殺したら

もあるまいけれど、二人の侍ひ面めが、意地の悪いに依つておやわいなア。

與五　エヽ、いつそわが身を、侍ひの方へ遣つてしまうたら、この難儀はせまいもの。

トうろ／＼する。

吾妻　なにを。こちや否いなア。

ト橋がゝり、ワヤ／＼云ふ。

判人　慥かに爰へ、付け込んだといやい。

ト判人、太助と供男を連れ出て

太助　おやてゝ、侍ひの家、滅多には入られぬ。

ト此うち、おてる思ひ入れあつて、騒いて、與五郎、吾妻を戸棚へ隠す。

判人　でも、駕籠の太助が、證人ぢやわい。

供男　そんなら、太助を猿にして。

判人　來い／＼。

ト内へツツと入り

關破りの與五郎、吾妻を、爰の内へ付け込んだ。出しや出しや。

てる　オヽ、滅相な。そんな覺えはござんせぬ。大方それは門違ひ。胸を尋ねさしやんせいなア。

太助　とぼきやんないの。證人はこの太助ぢや。先刻に、相輿の二人連れ、爰へ付け込んで置いたのぢや。

てる　女ばかりぢやと思うて、嚇すのぢやの。例へ、どのやうな事を云うても、覺えはないわいなう。

判人　でも、つべこべと、よう喋る衒妻ぢや。その上、慥かな證據は、この戸棚が氣ぶさいな。

トつか／＼と行くを、おてる立ち塞がり

てる　狼藉しやると、免さぬぞ。

トせり合ふ所へ、代官、捕り手大勢を連れ出て

代官　ソレ。

トばら／＼と込み入り

捕手　動くな。

ト取卷く。皆々、恂りして

てる　ヤア、これは。

判人　なんの事ぢや。

代官　御上意。

てる　御上意とはな。

代官　橋本次部右衞門こと、家柄たるに依つて、先年より當村の大庄屋、仰せつけられしところ、五ケ年以前、老衰に及びしゆゑ、役儀御赦免の願ひに依つて、退役仰せ

つけたるに、この度、當村の田畑反別、御吟味の事につき、役中取捌きお疑ひの旨あつて、書き物諸式に封印をお付けなさるゝ。家來、ソリヤ。

家來　ハツ。

〽云ふより早く手分けして、押入れ戸棚も締めたなり、簞笥長持ち膳棚まで、きり／＼しやんと封印を、附けるもハア／＼女氣の、怖い／＼におど懼ふ。

代官　ヤア、何奴も此奴も頭が高い。早速罪科にも仰せつけらるべきところなれども、お上のお慈悲、附け立ての封印、少しでもそゝける時は、退荷同然、科は重罪、キッと申し渡したぞ。

〽叱り付けてぞ立歸る。廓の者どもうつかりひよん。

ト代官皆々入る。

判人　なんの事ぢや。戸棚も封印附けられては、指さす事も叶はぬ。

太助　ハテ、だんないわいの。斯う封印が附、程の事、三日や五日で埒明くまい。早うて三十日か、五十日、其うちには干殺しになるわいなア。

判人　そりやそんなものぢや。

太助　四五日のうちに來て、樣子を見たがよいわい。

判人　エヽ、忌々しい。サア、來い／＼。

〽サア來い／＼と出て行く跡へ、大汗になつて甚兵衞が。

ト判人等入る。甚兵衞出て

甚兵　サア、むづかしうなつて來たぞ／＼。

てる　なんとしたえ／＼。

甚兵　與五郎さまの事について、長五郎が、侍ひを殺したと云ふ噂、あやが拔けいで、お二人とも、揚り家へ、お入りなされた。

てる　エヽ。

〽ハッと一度に戸棚の內外、泣き出す聲に氣の附く甚兵衞。

甚兵　さうして、この與五郎さまや吾妻は、どこへ參じました。

てる　サイナウ、廓から詮議に來たに依つて、急に隱し所はなし、この戸棚の內へ、二人ながら隱しましたりや、お上からお咎めで、封印を附けて去んだわいなう。

甚兵　ヤア、そんなら、おらより先へ、捕り方が來て、封印を附けたかえ。

てる　この通りぢやわいなう。

甚兵　南無三、封印を切つたら猶お咎め、科の上に又科を増す。

てる　と云うて、斯うして置いては、濟まぬわいなう。

甚兵　こいつ、難儀なものぢやわい。

〽どうせうぞいのどうせうと、また内外から泣き出す聲。

ト長吉、代官を連れ出て

長吉　その封印、わしが切つてやりませう。

甚て　ヤア。

〽聲をかけて放駒、以前の代官侍ひもろとも。

長吉　最前から、詮議にうせる素振りを見付けたに依つて、南無三方と思うて、村外れの人を雇うて、思ひついた家財の封印。

てる　エヽ、そんなら、今の代官様は。

代官　みんな、關取に、雇はれて來たのでござります。

長吉　オヽ、みんな大儀であつた。ソレ、骨折り代。

ト金包みを遣る。

代官　こりや、忝ない。

長吉　シタガ、この譯、ちよつとでもはぶしへ出す事、ならぬぞや。

代官　なんの、お前。

長吉　づきの廻らぬうち、散れ〳〵。

トめい〳〵、刀をかたげ、橋がゝりへ入る。

てる　そんなら、この封印は、もう切つても、大事ないかえ。

長吉　知れた事。

ト皆々、戸棚の戸を開けて

てる　申し〳〵與五郎さま、みんな長吉さんの計らひでござります。サア〳〵、ちやつと、お出でなされませ。

長吉　申し與五郎さま、長吉ぢや。何してござる。サア、爰へ。

〽手を取れば、きよろ〳〵顏。

ト與五郎出て、狂人の思ひ入れ。

與五　ハアハヽヽヽ、詮議に來る〳〵。親仁様はずんばら坊。坊主々々小坊主。

〽いたいけな事云うた、ほろゝん〳〵〳〵や。

長吉　コレ、なに云はしやります。長吉ぢやわいなう。

與五　なんぢや、町中引き廻す。

吾妻　與五郎さん、なに云はしやんす。

てる　申し〳〵、なに仰しやる。今のをお聞きなされて、

それで、お氣が狂つたのか。
吾妻 コレ、氣を付けて下さんせ。
〽二人の女が取りついて、泣く顔じろ／＼打詠め。
與五 其方は、藤屋の吾妻かの。
〽吾妻請け出せ山崎與次兵衞。
廓を抜けて、それ／＼／＼、名代のはしり坊、しつたん／＼や、法ぬけ坊主。
〽途方もなしに駈け出だす。それ止めましてと捕ゆる吾妻、氣狂ひ力の手に合ねば、どつこい遣らぬと長吉が、止めても止まらず引摺られ、共に狂ふや。
ト三重にて、皆々、與五郎を留めるこなし。　よろしく幕

五　幕　目　　道行菜種の亂咲

役名――濡髪長五郎。山崎與五郎。藤屋吾妻。娘おてる。放駒長吉。
造り物、向う一面に野邊の遠見。前は淀川堤の體。一面に菜種の花盛りの體。上手に太夫座を飾る。淨瑠璃、櫻の吊り枝、見事にして幕開く。
〽吾妻請け出せ山崎與次兵衞、請け出せ／＼山崎與次兵衞、いつか思ひのな、下紐解いて、昔思へば戀や辛や、情なや誰れあらう、山崎與次兵衞さまとては、人に後れぬ亂れ髪、吾妻が顔も見忘れて、現なやとせいすれば、ムウ、其方は藤屋の吾妻かの、オ、嬉しやなア、お心も鎮まり、お氣が付いたか與次兵衞さま、アレ御覽ぜよ虫でさへ、番ひ離れぬ揚羽の蝶、我れ／＼とても二人連れ、好いた同士のなか／＼に、お心弱やと諫むれば、ヤアヤア／＼、ソレ／＼／＼、コレ／＼／＼、この花盛り、よい京女郎ぞと八文字の、道中姿しよてんになづむ、傾城駒めにならひが女房、精出したくいの底ぬけて、影も宿らぬきぬ／＼の、親を悲しみ妻を戀ひ、心一つを二品に名乘つて通る時鳥、ぢやが父に似て父に似ぬ、子は色里に初音ふる、かむりは着ねど大盡と、花車がとゞろく口舌の門、遣り手が叩く禿が眠り、みな夢の間の境界と破れば愚痴もなかりけり、吾妻はとかう涙さへ、止めかねたる我が夫の、心の亂れ解けやらぬ、その馴染を繰返し、指を折屋の惣がりに、吾妻太夫主、サアをかし、この人をかしと呼び立てられて、突き出しのまだ恥かしき

初座敷、それその時に主さんは、床に寄り添ひにつこりと、笑はしやんした殿御振り、見惚れて落す杯の、くわつと上氣を濟ました顏で、衝立越しに見返りし、縁と縁とが結ぼれもつれ、二人寐る夜の揚句には、口舌の船を楫とる仲居が取りなし、太鼓はどん／＼段梯子、のぼり詰めての戀ひいさかひ、口に任せて詫び言に、なんの事なき一つ夜着、寢物語りは長かれと、思ひ暮らして居るものを、正體もなきお心と、かこち歎くぞ道理なり。

ト此うち與五郎、狂亂の振り、吾妻介抱して、よろしく振りある。

〽春風に、つるゝにあらず連れられて、吹くとしもなき裾かい取り、夫の身の上案じられ、心も爰に荒川の、渡せる縁の橋本を、そつと抜け出で來ながらも、なんと菜種の花の際、打伏す夫を見るよりも、なういとしさと戀しさに、心たどりて走りつき。

トこの淨瑠璃のうち、向うよりおてる來て、與五郎を見て側へ走り寄つて

てる　申し與五郎さま、お怪我はなかりしか。

〽あゝ嬉しやと縋り寄る。

ト與五郎に取りついて、泣くを見て

吾妻　オヽ、おてるさま、お前を振捨て、わたし一人が氣儘にしたと思うて、定めし腹が立つたであらう。何を云うてもこの姿、堪忍して下さんせ。

てる　エヽ、ナンノイナア。お二人の揚り屋入りゆゑ、ハッと思うてこの狂氣。わたしは心にかゝれども、父さんの手前、跡に殘れど氣もそゞろ。人目を忍んで、お跡を慕うて參じました、申し、與五郎さま。

〽我が夫戀ひは八雲だち、その神樣の縁結び、そもや初めのその日から、逢ふ瀬も絶えてなか／＼に、淺い縁の悲しさは、繋がぬ船のたとへ綱、追うてこがるゝ身の上を、人こそ知らね袖の雨、濡れて音を置く小男鹿の、慕ふわたしが無理かいな、なぜにお心亂れしと、ゆすり起せどこはなんと、正體さへもなかりける。

トおてる、吾妻、取りついて泣く。

〽これも浮名の菜種畑、楠葉を後に歩み來る、跡をつけ來る捕り手の面々、慕ひ寄れども白絞り、透を見合せヤッと掛け聲、尻目にきつと身構への、その勢ひに氣を呑まれ、堤傳ひに引返す。

ト長吉、向うより出る。後より捕り手、附いて出て、よき所にて十手振り上げる。長吉、振返り、キッと見

る捕り手は後へ引返す。この間、長吉、本舞臺へ來て皆々と顔見合せ

長吉　ヤア、おてるさま、吾妻どの。

吾妻　長吉さん。

長吉　先日、橋本にて騒動の砌りより、狂氣におなりなされし與五郎さま、長五郎は人目もあれば、八幡へと落しましたが、あなた方のお身の上が氣遣ひさ、後を尋ねて參りました。

〽先づ旦那をと抱き上ぐれば、むつくと起きて。

與五　ヤア、われは蝶。

〽蝶々菜の葉にとまりや。

ハヽヽヽ。

てる　正體もない、この有樣。

吾妻　長吉さんが、來て下さんしたぞえ。

二人　氣を慥かに、持つて下さんせいなア。

〽取りつく吾妻が顔打ち詠め、わりや吾妻か、オヽ、めでたい〳〵、ヒヤ、ぬめた傾城、やつたる物はなに〳〵、切つた小指に鬢の髮、起請誓紙は數知れず、昨日は吾妻に戀を載せ、今日は筑紫の入れ黒子、燒いた報いは焦熱の、さつても厚皮な三味線の、ちやう〳〵ちやうと打連るゝ。

ト此うち長五郎、頰かむりにて出る。長吉見て

長吉　オヽ、こなたは長五郎、八幡へ落ちたと思うたに、どうして爰へ。

長五　オヽ、與五郎さまの御病氣も、科を名乘つて出るならば、一時に事は濟む。

長吉　イヤ〳〵、そりや惡い、長五郎。われが名乘つて出るとな、與次兵衛さまから起つた事と、却つてお家に瑕が附く。隱れるだけは隱れるが、矢ッ張り旦那樣のお爲ぢや。

長五　イヤ〳〵、それでも。

長吉　ハテサテ、コリヤ、長吉が詞を立て、氣遣ひせずと、河内の方へ行け。

〽一足も早をちこちの、道筋よりも數多の侍ひむら〳〵むら、長五郎やらぬと押ッ取卷く。濡髮慌うて長吉が、落ちよ急げと氣をあせり、だんびらひらりと濡髮も、拔いてつれ〳〵切り立つれば、叶はぬ逃げよと侍ひども、一足出して畔道を、いづくともなく迯うて行く。ゆきかふ雲の程もなく、西山に風おこり、東南に向ふ空の足、栫木の葉もばら〳〵〳〵。走れば走る、止むれば止まり、

狂はぬ袖の亂れ心、命つれなき流れの身、流れ渡りの世の中に、しばし止むる賤が家の、軒を尋ねて憐みけり。

ト捕り手かゝり、長吉長五郎と立廻つて、よろしく追つて入る。跡に與五郎吾妻おてる、よろしくあつて、三重にて、　　　　幕

大詰　　八幡村與兵衛内の場

役名——南方十次兵衛　實ハ南與兵衛。同女房、おはや　實ハ都。十次兵衛母親。三原傳藏。平岡丹平。濡髮長五郎。

造り物、平舞臺、惣二階。見附け、押入れ、赤壁納戸口。上手、下手とも屋體。いつもの所に門口。右の舞臺に母親、神棚へ神酒などを供へ居る。おはやは小芋を三方に載せて月見の拵らへして居る。この見得、床の淨瑠璃にて幕開く。

〽出で入るや月弓の、八幡山崎、南與兵衛のお婆、我が子可愛か金を出せと、諷ひしを思ひ合せば、その昔、八幡近在隱れなき、郷代官の家筋も、今は妻のみ生き殘り、神と佛を友にして、秋の半の放生會、宵宮祭と待つ宵と、かけ荷うたる供へ物、母は神棚しつらへば、嫁は小芋を月魄へ、子種賴みの米團子、月の數ほど持ち出づる。

ト　あと合ひ方になる。

母親　コレ嫁女、月見の芋は明日の晩。今日は待宵、殊に日のうちからは、早いわいなう。

はや　母さんの、何をわつけもない。お前が明日の放生會を、今日からお供へ遊ばすゆゑ、何もかも、宵月からする事と存じまして、オヽ笑止やなア。

母親　アヽ、コレ嫁女、その笑止は、矢ツ張り廓の詞。大坂の新町で、都と云うた時とは違ふぞや。今では南與兵衛の女房のおはや、近所の人が來たとて、煙草など吸ひつけて出しやんなや。今でこそ落ちぶれたれど、前は南方十次兵衛と云うて、人も羨やむ身代。連合ひがお果てなされてから與兵衛が放埒、郷代官の役目も上がり、内證もしもつれ、こなたの手前も恥かしい事だらけ。さりながら、爰の殿樣もお替りなされ、新代官は皆上がり、古代官の筋目をお尋ねにて、與兵衛も俄のお召し。昔に返るはこの時と、難行なれども、神いさめの供物、蚤の

息が天とやら、お上の首尾が開きたいわいなう。
はや　イヤモウ、それはお氣遣ひ遊ばすな。お前のその心が通じて、御出世でござりませうわいなア。
〽早う吉左右聞きましたやと、待ちかね見やる表の方、編笠にて顔隱し、世を忍ぶ身の後や先、見廻して立ち寄る門口、嬉しや爰ぞとずつと入る、母は見るより。
トこの淨瑠璃にて、向うより長五郎、前幕の形にて、編笠を着て、向うより出て來て、後先見廻して直ぐに本舞臺へ來て、内へ入ると、母何心なう、長五郎を見て
母親　ヤア、長五郎ではないか。
長五　母者人。
はや　濡髪さんか。
長五　都どの。これはしたり。さては願ひの通り、與兵衛どのと夫婦にならつしやつたか。
はや　ヤア、喜んで下さんせ。わたしを請け出した權九郎は、根が似せ金師で牢へ入れられ、殺された太鼓持ちは、盗人の上前取りで、追剝になつて殺し德。なんの氣がゝりなう、添うて居やんすわいなア。
長五　ハテ、仕合せな事ぢやなう。同じ人を殺しても、運の好いのと、悪いのと。
トちよつと思ひ入れあつて
イヤ、仕合せな事ぢやなう、
ト母親、こなしあつて
母親　コレおはやゝ、しみ〴〵とした話しぢやが、其方衆は近附きかいなう。
はや　アイ、廓でのお近付き。
母親　アノ、與兵衛もかや。
はや　イヽヤ、これは、つい一日知る人ぢやが、また長五郎さんが、お前を母さんと仰しやる譯はえ。
母親　オヽ、不思議なは道理々々。どうで一度は、云はねばならぬ、マア一通り、聞いて下されいなう。
ト合ひ方になり
この長五郎は、五つの時、養子に遣つて、わしはこの家へ嫁入り。與兵衛は先妻の子で、わしとは生さぬ仲ゆゑに、その譯知つても知らぬ顔。あそこや爰の手前を思ひ、かつふつ音づれもせなんだが、去年開帳參りに、フト大坂で見た時には、年はたけても父御ゆづりの高頰の黒子。もし其方は、長右衛門へ遣つた、長五郎ではないかと、問ひつ問はれつ昔語り、息子の親達も死失せ、相撲

取りになつたとの話し。歸つて與兵衛に話さうかと思うたれど、以前を慕ひて、尋ねにでも行つたかと、思はれるが恥かしさに、隱して居ましたが、斯うしらけて來たからは、與兵衛が戻られたら、引合して、兄弟の杯。嫁ともに子二人。ほんにわしほど、果報な身の上は、又と世界にあるまいわいなう。

〽喜ぶ親の心根を、思ひやるほど長五郎、明日をも知れぬ我が命を、知られぬ母のいたはしやと、思へばせき來る涙を隱し。

長五　イヤ申し、母者人。與兵衛どのが、お歸りあらうとも、わたしの事はお話し御無用になされて下さりませ。

母親　そりや又、なぜに。

長五　されば、相撲取りと申す者は、人を投げたり、抛つたり、喧嘩同然。勝負の遺恨に依つて、侍ひでも、町人でも、切つて〳〵切りまくり、ぶち殺して。

母親　ヤア。

長五　イヤ、そんな事、わしは致しませねど、男を立て通して、一家一門へ、難儀のかゝる事もあるもの。マア、この商賣しまふまでは、お前とも赤の他人。忰を持つたと思うて下されまするな。何時知れぬ身の上、これがお別れにならうも知れず。おはやどの、與兵衛どのへも母の事、頼みますると云うて下され。長崎の相撲に下りますれば、長うお目にかゝりますまい。隨分御息災で、お暮しなされて下さりませ。

〽と打萎るれば。

ト長五郎、愁ひの思ひ入れ。母親、おはや、合點のゆかぬこなしあつて

母親　コリヤ長五郎、そんな商賣せねばならぬか。長崎へも、どつこへも行かずと、この内に居て、與兵衛とも問ひ談合。その恰幅では、何さしたとて仕兼ねはせまい、ナウおはや。

はや　さうでござりまするとも。御兄弟と云ふ事、主も聞かれましたら喜ばれませう。マア、お茶漬でも、ナア阿母様。

母親　イヤ〳〵、初めて來たもの、鱠でもしませう。あの體へは牛蒡の太煮、蛸の料理が好きであらう。マア、それまでは氣が晴れてよい二階座敷、淀川を見て肴にして、一つ吞みや。うご〳〵せずに、行きやいなう。ドリヤ、拵らへませうか。

〽薄刃の鏽は身より出て、死出の出立ちの料理ぞと、思

へばいとゞ胸ふさがり。

長五　申し、何もお構ひなくとも、缺け椀の一杯ぎり、つい食べて、歸りませう。

トこれにて母親、おはや、納戸へ入る。長五郎、こなしあつて

〽母の手盛りを牢扶持と、思ひ諦らめ煙草盆、提げて二階へ萎れ行く。

トこれにて長五郎煙草盆、提げて、二階へ上がる。

〽人の出世は時知れず、見出しにあづかる南與兵衞、衣類大小申し請け、伴なふ武士は何者か、所目馴れぬ血氣の兩人、家來もその身も立ちどまり。

トこの淨瑠璃にて南與兵衞、着附け、袴、大小にて、出て來り、後より平岡丹平、三原傳藏、着附け、羽織大小にて出る。次に家來一人、旅形にて附いて出て、花道よき所にて立ちとまり

與兵　即ちあれが、拙者の宅でござりまする。

丹平　然らば、あれが御貴殿樣の、お宅でござりまするか。

傳藏　左やうござらば、御案内の下されい。

與兵　サ、お越しなされませう。お先へ參る。

〽互ひに辭儀合ひ南與兵衞、いそ〳〵として内に入り。

トこれにて皆々、本舞臺へ來て、與兵衞は直ぐに内へ入つて

母者人、女房ども、只今歸つたぞよ。

トこれにて母親、おはや兩人、出て來て

はや　ヤア、お歸りか。

母親　戻りやつたか。して、お上の御首尾は、どうぢやぞいなう。

トこれにて與兵衞は眞中に居ると、上手に母親、下手におはや。

與兵　イヤ、お喜び下されい。首尾は極上々。まッこの如く衣類大小下し置かれ。名前も南方十次兵衞と、親の名跡に改め下され、昔の通り、庄屋代官を仰せつけられ、七ケ村の支配まで、仰せつけられましてござりまする。

母親　ヤレ〳〵、それはめでたい事。さうして、見れば、表にお歴々がござるが、あれは全體、どなたぢやぞいなう。

與兵　即ち、あれは西國方のお侍ひ。密々に仰せ合さるゝ事あつて、御同道申せしが、さして隱す程の事ではござらねども、暫らく母人にも、御遠慮下され。女房ども、、用事あるまで差控へてよからう。

〽と云ひ渡し、表へ出づれば。

トこれにて與兵衛は門口へ行くと

母親　コレ嫁女、今からは武士づき合ひ、遠慮が多い。

〽物馴れし、母と嫁とは立別れ、奥と口とへ入りにける。

トこれにて母親は奥へ入ると、おはやは思ひ入れあつて、下手の屋體へ入る。

與兵　イザ、お通り下されませう。

兩人　然らば、御免下され。

〽兩人を上座に直し。

トこれにて丹平、傳藏、内へ入つて、上手へ居直る。

與兵　さて、今日殿の御前にて、仰せつけられし、秘密の御用、仔細は各々方に承はれとの儀。先づそのお尋ね者の科の様子、お物語り下されい。

〽と尋ぬれば、年かさなる侍ひ取りあへず。

丹平　さて、拙者は平岡丹平、これなるは三原傳藏と申して、主人の名は、お上にも御存じ。當春、大坂表にて、兩人の同苗どもを殺されしゆゑ、相手の者の在所を、所所方々と詮議致せども、討つたる相手の行くへ知れず、この間承はれば、この八幡近在に由緣あつて、立越えしと申す。さるに依つて、當役所へ、お願ひ申せしに、兄弟の敵、隨分見付け、召捕られよ。併し、夜に入つては當地不案内、所に馴れたる者に申しつけ、繩かけ渡さんとあつて、貴殿へ仰せつけられた。仔細と申すは、斯くの通りでござる。

トこの間、おはや、下手の屋體より立ち聞いて居る。上手の屋體より母、これも立ち聞いて居る。

〽語るを一間に母親は、耳そば立つればこなたには、女房おはやが立ち聞きの、蟲が知らすか胸騷ぎ、與兵衛はなんの心も付かず。

ト此うち、長五郎は二階にて聞いて居て、いろ〳〵とこなしある。與兵衛は、何も知らず

與兵　然らば、敵討ち同然、隱密々々。もし左やうな儀もござらうかと、母女房まで退け、御内意を承はる。なんとその討たれさつしやつた、御同苗のお名は、なんと申しまするな。

丹平　その討たれたは、身共が弟、郷左衛門と申しまする。

傳藏　手前が兄、有右衛門と申しまする。

與兵　フム、すりや平岡郷左衛門、三原有右衛門どのとな

ア。
丹平　如何にも。
傳藏　すりや、貴殿には御存じかな。
與兵　イヤ、承はつたやうにも……して、その殺したる者は何者。
丹平　サア、その相手は、相撲仲間で隠れもなき、濡髪の長五郎。
〽開いて母親障子をぴつしやり、おはやは運ぶ茶碗をぐわつたり。
トこれにて母親は恟りして、障子を締めると、おはやは丸盆に茶碗を載せて持つて居るを、恟りして落す。與兵衛はこれを見て
與兵　ハテ、不調法な。
〽叱る夫の側に坐り、猶も様子を聞き居たる。
トこれにておはやは與兵衛の下手に坐る。
して、御兩所は、何所を目當。
丹平　この丹平は、當所を家探し致したうござる。
與兵　イヤ、御尤も。して傳藏どのゝ思し召しは、如何でござりまするな。
傳藏　手前が存ずるには、最前其許様へお頼み申した繪姿を、村々へ貼り置き、油斷の體に見せ、どか〱と踏ん込んで、牛部屋、柴部屋、或ひは二階などを、吟味いたしたい所存でござる。
與兵　それも尤も。
ト與兵衛、思ひ入れあつて
併し、大きな體で、下家には居りますまい。兎角二階などが心元ない。先づ御兩所には、楠葉橋本邊を、御詮議なされませ。夜に入らば、拙者が受取り、例へ相撲取りでござらうが、柔術取りでござらうが、見付け次第に繩打つて、お渡し申さん。その段、ちつともお氣遣ひなされまするな。
傳藏　イヤ、其お詞を承はつて、我れ〱が安堵。イヤ丹平どの、楠葉邊へ參らうではござらぬか。
丹平　イカサマ、日の内は、我れ〱が働らき、夜に入つてお頼み申すが肝心。然らば、お暇申すでござらう。
與兵　然らば又、晩ほどお役所にて、御意得ませう。
兩人　おさらばでござりまする。
〽と目禮し、二人の武士は立歸る。おはやは始終物案じ差俯向いて居たりしが。
ト丹平傳藏入る。おはや思ひ入れあつて

はや　申し與兵衞さん、味な事を頼まれなされたが、長五郎とやらを、捕つて出さうとの請合ひ。そりやマアお前、ほんの氣でござんすかえ。

與兵　ハテ、けうとい物の云ひやう。あの侍ひに由縁もなく、元來長五郎に意趣もなけれど、今の兩人が願ひに依つて、お上よりこの與兵衞に、仰せつけられたその仔細は、關口流の一手も覺え居る事、お聞き及びあつて、役人どもに申しつける筈なれども、當地に來て間もなく、土地不案内ゆゑ、當所に住み馴れたる其方に申しつくる。日の内は、あの方より詮議せん、夜に入つては此方より、隅々まで詮議いたし、搦め捕つて渡しなば、國の譽れとあつてのお頼み。一生の外聞、召捕つて、手柄の程を見せたらば、母人にも、さぞお喜びであらう。

はや　イヤ／＼、なんの、それがお嬉しからうぞいなア。

與兵　とは又、なぜに。

はや　ハテ、昔はともあれ、昨日今日まで八幡の町人、生兵法大疵の基と、ひよつとお怪我でもなされた時は、阿母様の悲しみ、なんのお喜びでござんせうぞいなア。

與兵　イ、ヤ、入らざる女の差出。わりや、手柄の先を折るか。

はや　サア、折るも一つは、お前の爲。

與兵　ヤア、此奴が。なんで濡髪を庇ひ立て。但しはおのれが一門か。何にもせよ、御前で請合ひ、見出しに遣うたこの與兵衞。今までとは違ふ。詞返せは、手は見せぬぞ。

〽と切刃廻せば。

トこの時、與兵衞は腹を立て、刀の柄に手をかけると納戸より母親、出て

母親　ヤレ、夫婦の衆、爭ひは必らず無用。

〽と一間を立ち出で。

最前からの樣子は、殘らずあれにて聞きましたが、その濡髪の長五郎と云ふ者、其方は、よう見知つて居やるか。

與兵　その長五郎と云へる者、一度堀江の相撲で見請け、その後、色里にてちよつとの出合ひ。隱れもなき大前髪。慥か、右の高頬に黒子、見知らぬ者もあらうとあつて、村々へ配る人相書。

ト懷中より人相書を出して

これ、御覽下されい。

〽懷中より、出して見せたる姿繪を。

母親　ドレ。
〽と見る母、二階より、覗く長五郎手洗鉢、水に姿が映ると知らず、目早き與兵衛が水鏡、きつと見附けて見上ぐるを、敏きおはやが引窓ぴつしやり、内は眞夜となりにけり。
ト母親、繪姿を開くと、二階より長五郎、覗く。下の手洗ひ鉢に姿映る。與兵衛は見て、キツとなつて、二階を見込む。この時、おはやは引窓を締める。
五兵　コリヤ、何をする、女房。
はや　ハテ、雨もぼろつく、最早日の暮れ、灯をともして上げませうわいなア。
ト與兵衛は、さてはと云ふ思ひ入れあつて
與兵　ハテナア、面白し〳〵。日が暮れたれば、この與兵衛が役。忍び居るお尋ね者、イデ、召捕らん。
〽とスツクと立つ。
トおはや、こなしあつて
はや　ソレ、まだ日は高い。
〽引窓ぐわらり、明けて云はれぬ女房の、心遣ひぞ切なけれ。母は手筥に嗜なみし、銀一包み取出し。
トこれにておはやは窓を明けると、母親は手筥を取つて來て、銀一包み出して
母親　これは、コレ、御坊へ差上げ、永代經を讀んでもらひ、未來を助からうと思ふ、大切な金なれども、手放す心を推量して、なんと、その繪姿、わしに賣つてはたもらぬか。
與兵　フム。母者人、二十年以前に、御實子を大坂へ、養子に遣はされたと聞きましたが、その御子息は、堅固でござるかな。
母親　與兵衛、村々へ渡すその繪姿、どうぞ買ひたい。
與兵　ハテナア。鳥の粟を拾ふやうに、溜め置かれたその金、佛へ上げる布施物を費しても、この繪姿が、お買ひなされたいか。
母親　未來は奈落へ沈むとも、今の思ひに替へられぬわいなう。
與兵　エヽ、是非もなや。
〽大小投げ出し。
トこれにて與兵衛、丸腰になつて
兩腰差せば十次兵衛、丸腰なれば、今までの通りの與兵衛。相變らず八幡の町人、商人の代物、お望みならば、上げませう。

母親　アノ、貰つて下さるか……それでは、こなたの。
與兵　アイヤ、日の内は、私しが役目ではござりませぬ。
母親　ハア、、忝なや。
〽と戴く母、袖は乾かぬ涙の海、嫁は見る目を押拭ひ。
はや　イヤ申し、與兵衛さん、あまり母さんのお心根が痛はしさに、大事の手柄を変へました。さぞ憎い奴、不屈き者と、お叱りもあらうが、産の子よりも大切に、可愛がつて下さる御恩、せめてお力にと、とも〲に隠まひました。常々からも、萬事の品、包むと思うて下さんすなえ。
〽中に立つ身の切なさは、云ひ譯涙に時うつる。哀れ數ふる暮れの鐘、隈なき月も待宵の、光り映れば。
　ト與兵衛、氣を替へて
與兵　イヤ、夜に入らば村々を、詮議する我が役目。
　ト二階へこなしあつて
河内へ越ゆる抜け道は、狐川を左に取り、右へ渡つて山越しに……よもやさうは行くまいわい。
〽それと知らして駈け出づる、情も厚き藪疊、折から月の雲隠れ、忍びて様子窺ひ居る。堪え兼ねたる長五郎、二階より飛んで下り、表をさして駈け出すを、母は抱きとめ。
　トこれにて與兵衛は二階へ思ひ入れあつて、表へ出て下手へ隠れる。この時長五郎、二階より下りて來て、表へ出かける。母は止めて
母親　コリヤ、うろたへ者、どこへ行く。
長五　イ、ヤ、最前より尋常に、繩かゝらうと存じたれども、餘りと申せばお志しの有り難さ。眼前嘆きを見せませうよりは、この家を離れてと、堪えに堪えて居りましたが、與兵衛どのゝ手前もあり、後よりぼッつき、捕はれる覺悟。お免されて下さりませ。
〽駈け出すを、取つて引据ゑ。
　トまた駈け出すを、母は長五郎を引据ゑて
母親　ヤイ、こゝな物知らずめ。おればかりか嫁の志し、與兵衛の情まで無にしをるか、罰當りめが。生さぬ仲の心を疑ひ、繪姿買はうと云ひかけたは、見遁がしてたもるかたもらぬかと、胸の内を聞かう爲。貰つてくれたその時の嬉しさ。おりや、後ろ影を拜んだわいやい、拜んだわいやい。まだその上に、河内へ越える抜け道まで、教へてくれた大恩を、なんと報じようと思ひ居るぞ。コリヤ、死ぬるばかりが男ではないぞよ。七十近い親持つ

て、喧嘩口論で、人を殺すと云ふやうな、不孝な子が世にあらうか。來ると其まゝ缺け椀に、一膳盛りと望んだは、おのれは牢へ入る覺悟ぢやな。それが、どう見て居られうぞ。せめて親への孝行に、逃げられるだけ、逃げてくれ。生きられるだけ、生きてたも。なんの因果で科人に。

〽なつた事ぢやと撞と伏し、前後不覺に泣き叫ぶ。おはやも共にせきのぼす、涙押へて。

はや　申し〳〵、泣いてござる所ぢやないぞえ。夜が明ければ、放生會で人立ちが多い。今宵のうちに落す思案。どうぞ姿を替へる、仕様はない事かいなア。

母親　オヽ、それも心付いて置きました。マア、目に立つこの大前髮、剃り落しませう。ドレ、剃刀を、取つて來う。

ト母親、立ちかゝると

長五　イヤ申し、母者人、姿を替へて繩かゝらば、よくよく命が惜しさにと、云はれるも無念な。侍ひを殺した場で、直に相果てうと存じましたが、死なれぬ義理にて、生き長らへ、一日々々と親の事が身に浸み、ま一度お顏が拜みたさに、お暇乞ひに參つて、却つて思ひをかけまする。矢張り此まゝで、與兵衞どのへ、お渡しなされて下さりませ。

母親　すりや、どうしても、繩かゝる氣ぢやな。

長五　覺悟いたして居りまする。

母親　よいワ。勝手にしをれ。

〽われより先にと剃刀を。

ト母親剃刀にて死なうとするを、おはや、長五郎兩人にて止めて

長五　アヽ申し、あやまりました〳〵。

母親　サヽ、そんなら、剃つて、落ちてくれ。

〽母は手づから合せ砥に、かゝる思ひがあらうとは、神ならぬ身の白髮のこの身、剃るべき髮は剃りもせで、親うて落す前髮を、涙で揉んで剃り落す、老の拳の定まらず、わな〳〵慄うて刃尖がきつくり。

トこれにて長五郎、顏に二所ほど疵附く。おはや見て、

はや　申し、二所まで、お顏に疵が。

母親　アヽ、ひよんな事しました。幸ひ、血止め。

〽硯の墨べつたり附けて、顏打詠め。

大方これで人相が變つたが、肝心の見知りは、高頰の黑

子。
〽剃り落さんと剃刀を、當てる事は當てながら。
これこそは、父御の讓り。
〽形見と思へば。
嫁女、わしやどうも剃り惜い。こなたを頼む。剃り落して下され。
はや　わしぢやとて、むごたらしい。それが、どう剃らるるもの。お免しなされて下されませ。
母親　思へば〳〵親の形見まで、剃り落すやうになつたか。エヽ、心柄とは云ひながら
〽可愛の者やと取りついて、わつとばかりに泣き沈む。
折もこそあれ門口より。
與兵　濡髪、捕つた。
〽と打ちつける金の手裏劍高頬にぴつしやり、ハッと身構へ母は構、おはやは灯火立ち覆ひ。
トこれにて與兵衛出て、門口より金包みを長五郎の高頬へ當てる。身構へすると、母親は長五郎を圍ふ。おはやは行燈の灯を我が身で隱して
はや　今のは慥かに、連合ひの聲。
ト云ひつゝ、長五郎の顔を見て

長五郎さんの、顔の黒子が、潰れたぞえ。
母親　ヤア、ほんに、誠にこれも情。
〽と母親は、表を拜み居たりしが、兼ねて覺悟の長五郎、思ひ設けてどつかと座し。
長五　サア母者人、お前の手で繩かけて、與兵衛どのへ、お渡しなされて下さりませ。
はや　コレ長五郎さん、お前は氣がのぼせたか。捕つたと顔へ打ちつけて、黒子を消した連合ひの心、又コレ、この打ちつけた金の包みに、路銀と書いた一筆、そこへお心は附かぬかえ。
長五　イヽヤ、その書付けも、黒子を消した心も、骨にこたへ、肝に通り、餘り過分な忝なさに、母の嘆きも御意見も、不孝の罪も思はれず、片輪な子が可愛いと、義理も法も辨まへなく、助けたい〳〵と、母人のお慈悲心、暫らくはお心休めと、詞に從ひ、元服まで致したれど、一人ならず二人ならず、四人まで殺した科人、助かる筋はござりませぬ。生中な者の手にかゝらうより、形見と思ひ母者人、泣かずとも、繩をかけ、與兵衛どのへ手渡しゝて、ようお禮を仰しやれや。ヤ、コレ、さうなうては、未來の十次兵衛どのへ、濟むまいがな。

母親　アヽ誤まつた、長五郎、よう云うてくれたな。イカサマ、思へば、わしは大きな義理知らず。誠を云はゞ我が子を捨てゝも、繼子に手柄さするが人間。畜生の皮かぶり、猫が子をくはへ歩くやうに、隱し退けようとしたは何事。とても遁がれぬ天の網、一世の縁の縛り繩。おはや、その細引でも、取つて下され。

はや　イヤ、それでは連合ひの心を、無になされると云ふもの。唐天竺へござつても、この世にさへござれば、どうしてなりとも、また逢はれる。何かはなしに、落しまして下さんせ。

母親　イヤナウ、一旦庇うたは恩愛、今また繩かけ、渡すのは生さぬ仲の義理。晝は庇ひ、夜は繩かけ、夜晝と分ける繼子、ほんの子、慈悲も立ち、義理も立つ。草葉の蔭の親々への云ひ譯、覺悟はよいか。

長五　待ち兼ねて居りまする。

はや　マア〱、待つて下さんせい。

　トおはや、止めるを、突き退けて

〽おはやを取つて突きのけ突きのけ、手を廻すれば母親は、幸ひ有り合ふ窓の繩、押取つて縛り繩、突き放せば引き繩に、窓は塞がれ心も闇、暗き思ひの聲張り上げ。

　トこれにて窓紐にて長五郎を縛りて、放すと、窓の蓋締まる。

母親　濡髮長五郎を召捕つたぞ。十次兵衛は居やらぬか。受取つて、手柄に召され。

〽呼ぶ聲に、與兵衛は駈け入り。

　トこれにて與兵衛は内へ入つて

與兵　お手柄〱。左やうなうては叶はぬところ。とても遁がれぬ科人。受取つて、御前へ引く。女房ども、もう何時。

はや　されば、夜半にもなりませう。

與兵　たわけ者めが。七ツ半を最前聞いた。時刻が延びると役目が上がる。繩先知れぬ窓の引き繩、三尺殘して切るが古例。目分量にて、これから。

〽すらりと拔いて縛り繩、ずつかり切れば、ぐわら〱ぐわら、さし込む月に。

南無三方、夜が明けた。身共が役目は夜の内ばかり。明くれば即ち放生會、生けるを放す所の法、恩に着ずとも、勝手にお行きやれ。

　ト長五郎を突きやる。

長五　ハア。

〽ハッと喜ぶ嫁姑、合す両手の數よりも、九ツの鐘六ツ聞いて。
與兵　殘る三ツは、母への進上。
長五　拙者が命も、御自分へ。
與兵　それも云はずと、さらば。
長五　さらば。
〽さらば〳〵の暇乞ひ、別れてこそは、落ちて行く。
ト皆々よろしく、引張り模様、三重にて、
幕

双蝶々曲輪日記（終り）

けいせい反(はん)魂(ごん)香(かう)



文政九年九月中村座上演繪番附

けいせい反魂香

逢坂山將監閑居の場

役名――土佐將監。同娘、お梅。同下女、お鍋。土佐修理之介。狩野雅樂之助。女房お德。浮世又平。

造り物、本舞臺一面の淺黄幕。この外に百姓大勢、簑笠に、竹槍を持ち、ワヤ／＼云つて居る。ドン／＼にて、幕明く。

百一　どうぢや／＼、知れましたか。

百二　イヤモウ、三井寺の後から、前の道までは見屆けましたが、それから先は見失ひました。

百三　大方この山科の藪陰へでも、逃げ込んだのであらうわい。

百四　全體、虎と云ふものは、話しに聞いたばつかりで、見た事もない獸ぢや。

百五　それ／＼、これは末代までの話しの種で、一生の得でござるわいの。

百六　イヤ、おいらは田も畑も荒されて、一生の迷惑ぢやの。

百七　サア／＼、これから手分けをして、追ひ出すやうにしませう。

百八　ならう事なら生捕りにして、田地を荒された入れ合せをしませう。

百一　慾の深い事を云はずと、見附け次第に、叩き殺せ、叩き殺せ。

皆々　合點ぢや／＼。

ト　わや／＼云ひながら、向うへ入る。淺黄幕、切つて落す。

造り物、三間の間、高足の二重、竹簀の本緣。向う世話襖。上手障子屋體。この前、誂らへの御影石の手洗鉢。いつもの所、枝折り戸。下の方、一面の竹藪。但し、置き舞臺を敷き並べ、よろしく、勢子太鼓にて納まる。

〽爰に土佐の末弟、浮世又平重興と云ふ畫工あり。生れ附いて口吃り、言舌明らかならざる上、家貧しくて身代は、薄き紙子の火打ち箱、朝夕の煙りさへ、一度を二度に追分や、大津のはづれに店借りして、妻は繪の具、夫は畫く、筆の軸さへ細元手。上り下りの旅人の、童すかしの土産物、三錢五錢の商ひに、命も錢も繋ぎしが、日蔭の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦連れ。

ト臼挽き唄になり、又平、木綿やつし、藁苞を脊負ひ、お徳、女房の拵らへ、拵らへの一升樽を提げ、出で來り、花道にて

とく　コレ／＼、こちの人、如何に御浪人なされぱとて、お師匠様のお住居、案内もなしに入ると云ふ事が出來る事かいなア。

又平　エ、、イ、、石部金吉金兜。

とく　ホ、、、、どもらぬ口で、口合ひが云ひたいかいなア。

又平　云ひたい、お前と斯うなつたは。

とく　エ、、まだかいなア

又平　嬶。

とく　こちの人。

又平　サ、

とく　サア、行かしやんせいなア。

ト門口へ來て

お頼み申します／＼。

〽訪へば、下女は立ち出で。

トお鍋、奥より出て

なべ　アイ／＼、案内は、どなたでござんすぞえ。

ト顔を見て

オ、、ほんに、お徳さん御夫婦の衆かえ。餘所外の人のやうに、なんの案内に及ぶのかいな。サア／＼入りなさんせ。

とく　そんなら許して下さんせ。

ト内へ入り

お前もマア、變りも無うて、ようござんすたア。

なべ　アイ、わたしはいつも達者でござんす。それはさうと、お徳さん、お前方は、いつも何所へ出るにも二人連れ、さぞマア樂しみでござんせう。

とく　イエモウ、樂しみやら、苦しみでござんすわいなア。

なべ　ホ、、、、。

ト笑ふ。

モシ、お德さん、お前の髮は、綺麗に結うてござんすなア。

とく　サア、聞いて下さんせ。こちの人の云はしやんすには、明朝はお師匠樣の所へ、夫婦連れで行かねばならぬと云はしやんすゆゑ、そんなら髮も結ばねばならぬと、昨夜はわたしがちよつと、結んで置きました。見て下さんせ。

なべ　そんならお前一人で結はしやんしたか。てもマア、御器用な事ぢやなア。

とく　何をお鍋さんの云はしやんすぞいなア。それはさうと、私しどもの來た事を、どうぞ取次いで下さんせ。

なべ　ほんにさうでござんす。モシ、お梅さま、又平どのが見えましたわいなア。

ヘ下女が知らせに將監の、娘お梅は一間を立ち出で

ト奥より、娘お梅、振り袖衣裳にて、出て來り

うめ　オヽ、又平どの女夫の衆、ようござんした。今日はいから風があつて、寒いに依つて、見えまいと思うたに、ようこそ〳〵。

とく　この四五日は、叶ひませぬ用事もござりまするし、その上急ぎの繪馬を受取られまして、これではお師匠樣へお見舞ひに行けぬと申して、仕事しい〳〵、これはかりを云うて居られましたが、俄に夫婦連れ立ちましてお見舞ひに參りましてござりまする。

うめ　オヽ、こなた衆も變る事もなうて、よいわいの。シタガ、この四五日見えぬのは、夫婦の者が、どちらぞ氣合ひでも惡いのかと、お案じなされど、知つての通り、御浪人なされてより、召使ふ者もなし、無沙汰はゆるして下されや。

とく　これは〳〵、有り難いお詞でござりまする。さうして一度はお尋ね申さうと存じて居りましたが、お前樣のお姉上樣、同じ廓の勤めでも、遣り手とやらは、町家の召使ひ同然ぢやと承りましたが、ツイ、お目にはかゝりませぬが、京大坂の花魁にも增つた御器量でありながら、なぜ遣り手のお稽古をなされるのでござんせうなア。

うめ　サア、これには云ふに云はれぬ譯あつて。

とく　私しどもへ何もお隱しなさる事はござりませぬ。ちよつとお聞かせなされませ。

ト又平、袖を引く。

なんでござんす。

ト又平、そんな事を云うては悪いと云ふ思ひ入れ。

ほんにさうでござんすなア。モシ、憚りながらお師匠様へ、私しども夫婦で參りました事、仰つしやつて下さりませ。

うめ　ほんにさうぢや。わしが知らせう。

ト屋體の側へ行き

父さん、又平どの夫婦が見えましたぞえ。

將監　又平が來りしとな。それへ行て逢はうわえ。

〽將監一間を立ち出でゝ。

ト將監、袴羽織にて、修理之介を連れ、出て來り

オヽ、これは又平夫婦か。よくござつたなう。

ト勢子太鼓鳴るゆゑ

あの、物音は。

とく　ハイ、成る程、御不審は御尤もでござりまする。只今も夫婦連れで、これへ參りまする時、大勢の百姓衆が竹槍や、鋤鍬なぞを持つて、打ち殺せ／＼と云うて參りましたゆゑ、樣子を尋ねましたれば、虎が出たと、口々に申しまして

將監　ナニ、虎が出た。馬鹿な事を。そりや叡山か鞍馬あたりより、猪でも出たのであらう。日本へ虎が出やう筈がない。

修理　イヤナニ、又平どの御夫婦の衆、最前より御挨拶も致さぬが、先生にもお二人の事、お案じなさるゝゆゑ、私しもちよつと見舞ひに參りたう存じたれど、筆の離されぬ事仰せつけられましたゆゑ、御無沙汰の段、お免されて下されませ。

とく　これは／＼、又平を兄弟子と思し召して、只今のお詞、有り難うござりまする。この間は冷えまするのに、お師匠樣にもお健やかにて、おめでたう存じあげまする。

將監　イヤ／＼、冷える加減か、兎角持病の疝氣が、イヤモウ、何やかや、新らしい病ひが殖えるので、いかう算用が違うて來たわえ。

とく　さて、お師匠樣へ申し上げまする。春にもなれば、日もめつきりと暖かになりまして、世間は花見の遊山の、と、ざわ／＼致しまする。こなたは山蔭、御浪人のおつれづれをお慰めの爲、蕨菜のひたし、豆腐の煮染め小筒でも持ちまして、關寺か高觀音へお供いたし、春めく人でもお目にかけたいと、常住夫婦が申して居ります事で

ございまするが、何を申しましても、家内は夫婦差向ひ、道者時分で見世は忙がし、洗濯物はつかへて居ります。仕事は捗が行かず、お聞きなされませ、日がな一日立ちづくめ。朝も夜から馬士衆が、と鉢卷いたして小室節を唄ふやら、夜がパッと明けますると、店一ぱいの人だかり、コレ／＼見さつしやれ、あれが評判の吃りぢやぞや、どれがいの、あれがいの、ウム、あれが吃りか、可哀さうに、あれが吃りか、あれが吃りか、と

ト此うち又平、腹の立つ思ひ入れ。

それぢやとて、違ひない事云ふのぢやわいなア。ホヽヽホヽヽ。今ではこちの人の吃りが、評判になつて、さて店が繁昌いたします。爰へも一枚、彼所へもと、持囃されるわたしが嬉しさ。この頃は着物が一枚出來ました。こんな事なら持つて來て、お目にかけたらよかつた事いの。

又平　フム。

とく　エヽ、モウ、何をするやらぬらくらと、急げば廻る、こりや瀬田鰻でござりまする。今日膳所から貰ひました、練ぬき水の大津酒、ゆめ／＼しらはござりますれど、この春からお仕合せも直り、鰻が穴を出るやうに、御代をお出まし遊ばしたら、御門前には大勢の、お喜びの人々が、入れ替り立ち替り、その時の奏者は誰れでござりませうな。

ト又平を見て

差詰めお師匠樣の一番弟子、私しどもの又平どのが、鹿爪らしう出られませう。そのお喜びにつきまして、土佐の苗字をお許し下され、派手な場所の席書きにも、上下立派に

トちよつと構へ

して、其許樣の御家名は、ホヽウ、某こそは將監さまの一番弟子、土佐の又平、などゝ申さるゝでござりませう。さうなりますれば夫婦が喜び、あなた樣にもお喜び御壽命は萬々歲、おめでたうござりまする。ホヽヽホ。私しとした事が、自分の申す事ばつかり、こちの人の吃りと、わたしのしやべりと、斯う搗き混ぜたら、頃合ひな女夫が一對出來ませうわいな。ホヽヽヽ、ア、しんど。憚りながら、お茶一つ下さりませ。

なべ　ハイ、お茶。

ト茶を出す。

〽ア、おはもじやと笑ひける。

ト又平、お徳を見て

又平　ヨ、ヨ、ようしやべる嬶ぢや。

将監　オヽ、ようこそ／＼云うてくれた。練ぬき酒とは第一身が好物。その上鰻まで。瀬田鰻は風味も格別ぢやて。コリヤ、お梅、この酒を奥へ持ち行き、用意して置きやれ。

うめ　アイ／＼。

ト酒樽を持ち、奥へ入る。

〽お梅は奥へ入りにける。

将監　オヽ、鰻は好物なれども、料理方に困るわえ。

ト又平、女房の袖を引き、料理はおれがすると云ふ思入れ。

とく　ア、モシ、料理は又平どのが、すると申しまする。

将監　すりや又平が致すとな。これは重畳。少しも早く致してくりやれ。

とく　モシ、こちの人、早う料理をしやしやんせいなア。

ト又平頷き、お鍋を招き、思ひ入れ。お鍋見て

なべ　アイ／＼、さうして又平さん、なんぞ用かえ。

又平　オ、オ、大きなばつちり。

ト仕方をして見せる。

なべ　なんぢや、大きなばつちりとはえ。

又平　オ、オ、大きなばつちりに、オ、オ、大きな蓋。

なべ　大きなばつちりに、大きなふた。ハヽヽヽヽ。

又平　エヽ、うぬ。

ト焦れ込み、手を振り上げる。お徳、中へ入り

とく　アヽ、これはしたり、何を其やうに腹を立てて、何が欲しいと云はしやんすのだえ。

又平　オ、オ、大きなばつちりに、大きなふた。

ト仕方をして見せる。

とく　アヽ、大きな鉢に、大きな蓋かえ。

又平　ソヽ、さうぢやい。

とく　モシ、何か大きな鉢と、大きな蓋を貸してあげて下さんせ。

なべ　アヽ、さうかいなア。

ト取つて来て

又平さん、これかえ。

ト出す。又平、引ッたくり

又平　阿房め。

ト藁苞より、鰻を出し、蓋の上へ載せる。鰻、逃げ廻

る。又平撫で廻し。トゞ緣の下へ、鰻入る。又平、あわてゝ、這ひ寄つて、緣の下を覗き見て、當惑のこなし。

とく　これはしたり、何をさしやんすぞいなア。折角持て來たものを、逃がしてしまうてからに。

又平　嬶、ダ、大事ない、ト、、捕れる〳〵。

とく　そりや、どうして。

又平　フ、、來年の、スス掃きに。

とく　何を云ふのぢやぞいなア。

トこの時。勢子大勢烈しく、以前の百姓、大勢出て來て。

百一　コリヤ〳〵、爰の藪の中へ入つたぞや。油斷さつしやるな〳〵。

皆々　オヽ、合點だ。捜せ〳〵。

ト下手の藪の中へ入らうとする。修理之介、出て

修理　コリヤ〳〵、其方達は何者なれば、大勢徒黨して、かゝる狼藉。この家を誰れとか思ふ。高島家の蟄所、土佐の將監さまの御閑居。慮外いたすと免さぬぞ。

百二　ヤア、高島家でも御影でも、心の惡い事を云へば、構ふ事はない。

百三　高で田畑を荒す虎を捜すのぢや。邪魔すると、侍ひとは云はさぬぞ。

百四　さうぢや〳〵。農業の妨げすれば、誰れでも彼れでも。

皆々　叩つ殺せ〳〵。

ト立ちかゝる。

修理　なにを。

トきつとなるを、又平、留めて

又平　オ、、マ、マ、、待て〳〵。オ、オ、おれが居るおれがゐる。

ト修理之介を留め、百姓に向ひ

エ、、ニ、、ニ、日本に、ト、虎は無いわえ。

百一　コウ、なんぢや。おかしな奴が出て來たぞ。コレ、虎はあるわえ。

又平　オヽ、ないわえ。

皆々　オヽ、あるわえ。

ト皆々、吃りの眞似をして云ふ。又平、ムツとして

又平　うぬ。

ト立ちかゝるを、將監、留めて

將監　コリヤ〳〵、又平、待て〳〵。仔細を聞いて、如何

やうともなる事ぢや。鎮まれ〳〵。
ト ぢつと留める。又平、これにて、咳きながら抑へる。
女房は思ひ入れあつて
とく　コレ、又平どの、お師匠樣がお留めなさるゝ。待たつしやりませ〳〵。
將監　ナニ、お身達は百姓さうなが、何ゆゑあつて身が屋敷にて立騷ぐのぢや。サ、樣子聞きたい。仔細はどうぢや。
百五　成る程、これは、お斷わり申しませぬが此方の誤まり。
百六　只今表の藪の中へ、虎を追ひ込みましたゆゑ。
百七　その虎を殺して、田畑を荒さぬやうにと存じましての事でござります。
將監　なんと申す。この藪の中へ虎を追ひ込んだ。ハ、、ハ、ハテ、埒もない。虎と云ふものは、唐土の猛獸。ナニ日本の地へ出やうか。如何に土民なればとて、馬鹿な事を。
トこの時、風の音になり、下手藪の内へ、虎現はれる。
皆々見て
皆々　アレ〳〵、彼所へ出ました〳〵。

ト口々に喧ましく云ふ。
將監　なんぢや、虎が出た、ドレ〳〵。
〽眼鏡取出し將監は、庭に下り立ち、ためつすがめつ打眺め
ト 二重より下り、庭下駄を穿き、眼鏡をかけ
ハテ、不思議や、顏輝の筆の、竹に虎の筆勢、少しも紛ふ所なし。しかも新筆。當時斯樣に畫かんず者、狩野の祐勢が忰、四郎次郎元信より外になし。頭の筆勢、眼の鋭さ。畫きも畫いたり。見事々々。
〽感じ入てぞ居たりしが。
イヤナニ、百姓衆、これは誠の虎に非ず。名筆の繪に魂ひ入つて、拔け出たに相違なし。その證據には、あの虎が駈けて來た跡に、足跡はあるまい。尋ねて見やれ。
百一　ヘイ〳〵、これは不思議な事でござります。皆の衆、氣を附けて尋ねさつしやれ。
皆々　合點ぢや〳〵。
ト 花道へ行き、あちこちを搜して見て
百一　ヨウ、ある〳〵。
百二　ナニ、ある。こりや馬の足跡だ。
皆々　何を云はつしやる。ハ、、、、。

百一　ヨウ、あるぞ〳〵。なんぢや、こりや犬の足跡だ。ハ、、、、。
皆々　ヘイ、どう見ても、足跡はござりませぬ。
ト将監、思ひ入れあつて
将監　あるまい〳〵。まだ〳〵お身達に不思議な事を見せう。あの虎を眼前に、畫き消して見せ申さう。コリヤ、硯を持て〳〵。
ト修理之介、上手より、誂らへの硯筆立てを持ち來り、よき所へ置き、手を支へ
修理　ハッ、先生へお願ひ申し上げまする。某、拙き筆なれども、何卒筆先にてあの虎を、畫き消したうござりまする。また日頃より師の御恩、報じまするは今この時。あはれこの儀、お聞き屆け下されうなれば、有り難うござりまする。
又平　イヤ〳〵、ア、、あの虎は、ワ、ワ、私しめが、カカ、畫き消しまする。
修理　これはしたり、又平どの、願ひかゝりし修理之介、何卒この役目は私しへ。
又平　イ、イエ、ワ、ワ、私しに。
修理　イヤ、拙者めに仰せつけられ、下さりませうなれば。
兩人　有り難うござりまする。
ト同じく辭儀をする。
将監　如何にも聞き屆けた。修理之介、其方が願ひに任せ、申しつくる。大切の場所、心靜かに。
修理　ハッ。
ト硯箱より、筆を取り出し、花道、よき所へチッととまる。
〽印可の筆を與ふれば、修理之介は筆を染め、四五間間置きながら、筆引く方に從つて、頭、前脚後足、胴より尾先に至るまで、次第々々に失せけるは、神變術とも云ひつべし。
トよき程に、薄ドロにて、虎自然と消え失せる。百姓大勢、これを見て驚ろく。修理之介は舞臺へ來て
ハッ、畫き消しましてござりまする。
将監　オ、、出かした〳〵。かゝる不思議を見る上は、今日より其方は、土佐の光澄と名乘るべし。
修理　ナニ、すりや私しに、土佐の苗字を下されんとな。ハツ、有り難き師のお詞、拙き筆に心を籠め、畫き消しましたも師の御恩、須彌蒼海より上もなき、御恩の程、忘

れは致しませぬ。チエ、、有り難う存じまする。百姓どもは
〽天を拜し地を拜し、喜び勇むぞ道理なり。
共に喜び、
百四　さても／＼、畫きも畫いたり、消しも消したり、目利きも目利き、前代未聞の名人ではござらぬか。
百五　ソレ／＼、あのやうな名人に、よいお山繪でも描いてもらうたら、よい金儲けであらうわい。
百六　ほんにあの人に、借錢や節季の帳面を、畫き消してもらひたうござるわい。
皆々　何を云はつしやる。ハヽヽヽ。
百七　時にこれでは、モウ、虎が田地を荒す事もあるまい。
百一　サア、この上は早う村へ歩んで、喜び酒としませう。サア、ござれ／＼。
ト皆々、わや／＼云ひながら、門口へ出て、又平を見返り
百二　なんと、皆の衆や、同じやうに並んで居るが、あれは兄弟子ぢやといの。
百三　弟弟子に苗字を名乘られて、あの理窟らしい顏を見さつしやれ。

百四　あれでも腹が立つかして、口をむが／＼して居れど。
百五　それさへきけぬ片輪者。
百六　ほんに因果な、あれは吃。
百一　さう云ふ此方は百姓ども。
百二　皆の者ども、ども致せ。
皆々　ハヽヽヽ。
〽我が家／＼へ立歸る。又平時節と女房を、先へ押出し袴を突き、訴訟ありげに見えければ、女房心得進み出で。
ト百姓皆々、橋がゝりへ入る。お德思ひ入れあつて
とく　只今お見受け申しますれば、驚ろき入つたる修理之介さまのお手際、感心いたしてござりまする。あのやうなお弟子をお持ちなされましたは、お師匠樣のお仕合せ、お嬉しうござりまする。それにつきましても、御存じ知られましての通り、夫又平、身は貧なり片輪なり、弟弟子に土佐を名乘られ、兄弟子の身で、うか／＼と。
〽いつまで浮世又平とて、藤の花かたげた女形繪や、鯰押へて瓢簞の、ぶら／＼と生きて甲斐なしと、身を揉んでの無念がり。

尤もとも道理とも、側に見てゐる女房の身では、どのやうにあらうと思し召して下さります。土佐の苗字をお許しのお願ひは、お梅さまゝで度々申し上げましたれど、お直に申し上げまするは今日が初めて。今生の思ひ出、死しての後の石塔にも、俗名土佐の又平と、お許しのお詞は

〽師匠のお慈悲ばかりにて、涙にむせび入りければ、又平も手を合せ、將監を三拜し、疊に喰ひつき泣き居たる。不便とは思へども、わざと詞を荒らげて。

將監　又しても／＼、叶はぬ願ひ。コリヤ、よく聞け。この將監はナ、近江の國高島家の御家來筋、即ち禁中の繪所、小栗宗丹と筆の爭ひ。その上、高島家の重寶、雲龍の硯を、宗丹兼ね／＼所望なす。イヤ、彼奴には持たせじ、我れに與へよと、互ひに意地を立て募り、遂に御前のお聞きに達し、某は勅勘を受けて、浪人の住居。今でも小栗に隨へば富貴の身と榮ゆれど、一人の娘お光に、君傾城をさせ、貧苦を凌ぐは何ゆゑぞ、土佐の苗字を惜しむに非ずや。修理之介は只今の大功あり、其方には何の功がある。琴碁書畫は曠れの業。貴人高位の御座近く參るは繪師。物を得云はぬ身を以て、及ばぬ願ひ。似合うたやうなお山繪描いて、この世を渡れ。サ、茶でも呑んで立歸れ。

〽愛想なくも叱られて。

〽ハッとお徳は力を落し。

とく　ハア。

ト　お徳、思ひ入れあつて、又平の手を取り

又平どの、こなたを吃りに生みつけた、親御を恨まさつしやれいなう。

〽悔み泣く／＼又平も。

又平　サ、サ、三年先のワワ煩ひに、人參呑まずにシ、シ、死んだなら、イ、今の思ひは、ア、ア、あるまいに。

〽我が咽喉笛を掻き挘り、口に手を入れ、舌を掴つて泣きけるは、理り見えて不便なり、折から表に人聲して、狩野の弟子雅樂之助。

ト　向うより、雅樂之助、凛々しき形、拔刀、大童にて走り出て

雅樂　將監どのは在するか。光信どの／＼。

〽呼はり／＼拔身にて、簀戸押し開きばつと入る。將監目早く。

ト　將監、修理之助、よろしく

將監　御身は狩野の雅樂之助ならずや。一大事とは氣遣はし。コリヤ、修理之介、介抱いたせ。

修理　ハツ。

ト修理之助、印籠より藥を出し、服ませる事よろしく

將監　コリヤ／＼、又平、後より追手來らんも計られず、汝には似合つた役目。張り番いたせ。

とく　畏まりました。

ト又平に向ひ

コレ、又平どの、遠見おや／＼わいなう。

又平　ムウ、が、合點だ。

ト又平、花道へ行き、鉢卷をして、向うを見詰め居る。お德、湯を持つて來る事よろしく

修理　雅樂之助どの／＼。

ト活を入れる。これにて雅樂之助、心附く。

將監　コリヤ、雅樂之助、して／＼樣子は、なんと／＼。

雅樂　ハツ、されば／＼。館の騷動云ふに及ばず、姫君の御供仕り、やう／＼切り投け、爰かしこに忍びしが、主人四郎次郎、行くへ知れず。

〽これ第一の氣遣ひと、心迷ふ其うちに、敵は手ひどく追ひかくる、しやまつかせと眞向に、太刀差翳し討ち向ひ、四角八面に切り散らせしが、敵は大勢、こなたは一人。難なく姫君

〽奪ひ取られ。

下の醍醐は雲角が館なり、伴左衞門を始めとして、門を固めて寄せつけず。

〽刀の刃金の續かんまで、駈け入らんとなしたるが、イヤイヤ／＼、主人の身の上、心元なし、御跡慕ひ尋ぬる所存。

姫君の御事は、將監どの、よろしく賴み存ずる。

〽詞も足も血氣の若者、跡を慕うて走り行く。

ト雅樂之助、一散に花道へ行き、又平の肩を越し、飛んで向うへ入る。

〽將監　心も心ならず。

ト當惑のこなし。お德、又平を連れて來る。又平、舞臺へ來る。

將監　南無三、死なしたり、我が爲の一大事。聞捨てたらぬお家の騷動。イデ、馳せ向つて

ト向うを見て

イヤ／＼、勅勘の身の上なれば、自身には向ひ難し。ハ

テ、如何いたしたものであらう。
〽額に小皺、頬杖つき、思案小首を傾くる。又平なんぞ云ひたげに、妻が袖引き脊中突き、指さしすれども合點せず、辛氣を沸かし、女房を引退けツつと出で、師匠の前に諸手を突き、唾を呑み込んで。
トお德を掻き退け、前へ出て
又平　オ、お師匠樣へオお願ひ。コ、コ、このお使ひにはワワ私しを、お遣りなされてク、ク下さりませ。
〽願ふを將監、見やりもせず。
將監　ヤア、思案半へ邪魔入れるか。そこ退き居れ。
又平　イ、イヤ〳〵、オ、お氣遣ひはござりませぬ。そこがヒ膝ともダ談合、ククロこそ利けね、カ叶はぬ時は、エえんせう祐定。
ト脇差を見せ
ア、あつちへやるか、コ此方へ取るか、ク、ク首掛けの博奕、イ命の相場が一分五厘、ウ、ウ浮世又平と名乘つては、オ親もない、子もない、ミ身から一身。命は掃溜の塵芥、ナ名は須彌山と釣替へ。イ、命に替へてト取返しまする。ド、どうぞこのお願ひを
ト將監、あちら向く

モモシ、イ五ツの年から奉公なし、イ命に替へてモ申しあげるも、オお師匠樣のゴ御苗字をツ繼ぎたい望み。ドどうぞ私しを、オお遣りなされて下さりませ。
トまた上手へ行く。
モモシ、ドどうぞコこのお使ひに私しを。
トいろ〳〵あつて
エ、モ、モ、モシ、サ、さりとては承引ないか。ド、吃りでなくば斯うはあるまいに
〽さりとはつれないお師匠ぢやと、聲を上げてぞ泣き居たる。將監猶も聞入れなく。
將監　片輪の癖に述懷涙、不吉千萬。相手になつて果しなし。コリヤ、修理之介、御邊向つて思案をめぐらし、姫君を取返へして立歸れ。
修理　ハッ、畏まつてござりまする。
〽畏まつたと云ふより早く、刀引提げ立ち出づる。又平むんづと抱き留め。
又平　ココレ、ママ待つてくれ〳〵。オ、お師匠樣こそゴ御胴慾なれ、ここなたはわしの弟子、兄弟のヨ誼みに、オおれをやつてくれ。オオおれをやつてくれ。
修理　成る程、御尤もにはござれども、師の命は背かれず。

そこお放しなされ。

又平　イイヤ、ハハ放さぬ。ク首がちぎれても放さぬ。ヤヤやりはせぬ、やりはせぬ。

修理　ハテ、聞分けの悪い。達てとあれば、兄弟子とて容赦はござらぬぞ。

ト刀の柄へ手をかける。

又平　ムウ。サアア、切れ。キキ切つた〳〵。サア、オオおれを切つてから行け。

ヘ行くをやらじと控ふる袂、嗜しの刀びくともせず、覺悟極めし又平を、將監はつと怒りの顔色。

將監　又しても〳〵、邪魔立てひろぐ憎くい奴。大事に向ひ妨げなさば、將監が手は見せぬぞ。

トきつとなる。又平、思案し、二重の際へ行き、首筋を突き附け

又平　ササア、キキ切らつしやりませ。キ切つて下さりませ。

將監　此奴、師匠を困らせ居るわえ。コリヤ、修理之介、此奴に構はず、早く行け。

修理　ハイツ。

ヘ飛ぶが如くに走り行く。

ト修理之介、刀を提げ、行くを、又平、留める。振り拂ひ、一散に向うへ入る。又平、跡を追ひかけるを、お德、引留め、舞臺へ來り

とく　コレ、又平どの、聞分けのない。お師匠樣の仰しやるも構はず、さりとてはおとましい、氣狂ひどのではあるわいなア。

ト又平、お德を引きつけ、打つ事あつて

又平　エ、、ニヨ女房にまでアァ侮られるか、

ヘ片輪はなんの因果ぞと、撞と座を組み大地を打ち、聲を惜しまず歎きける。將監重ねて。

將監　コリヤ、よう聞け。畫の道の功に依つて、苗字を繼いでこそ、手柄とも云ふべけれ、武道の功に苗字を讓るべき仔細なし。修理之介が安否も心元なし。一間に於て又一思案。

ヘと立ち上がる。

トお德留めて

とく　モシ、どうあつても、アノ、こちの人の願ひは叶ひませぬか。

將監　ヤア、ならぬと申すに。

とく　そこをどうぞ。

将監　エ、、くどい。
〽云ひ捨てゝこそ奥へ入る〽跡を見送り女房は。
ト将監、奥へ入る。お徳、又平を引起し
とく　コレ、又平どの、覺悟さつしやれ。今生の望みは切れたぞや。モシ、この庭の手洗鉢を石塔と定め、こなたの畫像を畫き殘し、この場で自害しその跡の、送り號を待つばかり。
〽硯引寄せ、墨差流し。
手も二本、指も十本ありながら、なぜ片輪にはならしやんしたぞいなア。
ト思ひ入れ。
〽又平うなづき筆を染め、石の面に差向ひ、これ生涯の名殘の畫、姿は苔に崩るとも、名は石魂に止まれと、我が姿を我が筆の、念力や徹しけん、厚さ尺餘の御影石、表へ通つて筆の勢、墨も消えず、兩方より、一度に畫いたる如くなり。
トこの文句のうち、又平、手洗鉢へ、文句一ぱいに、我が姿を書き終り、下の方へ來る。お徳、手を洗はうとして石を見て、恟りして、又平の側へ來り、連れて行つて、表裏を指し見せる。又平、何氣なく見て、恟り。
又平　カカ、嬶、又抜けた。
〽呆れ果てたるばかりなり。将監一間を立ち出でゝ、石面を打見やり。
ト将監、出て、これを見て
将監　ハ、ア、奇妙々々。唐土の王羲之趙子昂が、石に入り木に入るも、我が朝にて例しなし。ホ、ウ、師に勝る畫工ぞや。
〽出かしたり〳〵。
かゝる不思議を見る上は、今日より土佐の苗字を許し、土佐の又平光起と名乘るべし。
とく　エ、、そんなら何と仰しやります。左樣なら今日より、又平どのに、土佐の苗字を下されんとな。
将監　オ、、許さいでなんとせう。
又徳　エ、、有り難うございまする。
〽はつとばかりに夫婦が喜び、又平は忝なしの口吃り、禮より外は泪に暮れ、躍り上がり飛び上り、嬉し涙ぞ道理なり。将監重ねて。
将監　オ、、その喜びはさぞこそ〳〵。この勢ひに乘じ、下の醍醐へ立越え、姫君御朱印、取返して立歸れ。

とく　ハツ、すりや、その役目を又平どのへ。モシ、こちの人、お使者ぢや〳〵。

又平　ムウ。

ト立ちかける。

將監　ア、、コリヤ、待て〳〵。

とく　御用でござりまするか。

將監　大切の使ひに、此まゝにては。

ト奥へ向ひ

コリヤ、誰そあるか、身が衣服大小持て。

なべ　畏まりました。

〽ハイと答へて恭々しく、下女が持ち出る廣蓋に、上下衣服取揃へ、夫婦の前へ差置けば。

トお鍋、奥より衣服を持ち、出て來り、前へ置く。

將監　その衣服に着替へて參れ。

又平　エ、、ア有り難うござりまする。

なべ　ドレ、わたしが手傳つてあげませうわいなア。

ト着物の鳴り物になり、お鍋、お德、手傳ひ、上下衣服を着替へさせ

とく　サア、お辭儀〳〵。

又平　ムウ。

ト辭儀をして、行きかけるを

將監　アイヤ、待て〳〵。志し厚うして心剛なれど、敵に向ひ問答せんに、その吃りにては心元ない。

とく　イエ、それはお氣遣ひ下されまするな。常々大頭の舞を好み、私しもろともツレワキにて舞ひまするが、節のある事には、少しも吃りませぬ。私しが附いて參りまして、拍子を取つて物を云はせましたれば、まんまと仕負ふせて歸りませう。

將監　それこそ幸ひ、首尾よう仕負ふせて立歸る、門出の壽き、めでたう一さし、舞うて立ちやれ。

とく　ハイ〳〵、畏まりました。お師匠樣の御意ぢや。めでたう舞うまいか。

又平　ムウ。

ト將監扇を取り

將監　ソレ。

ト渡す。又平、辭儀をなし、受取り、身構へる。女房、手拍子を打つ。將監また鼓を取り

ソレ、鼓もこれにあるぞ。

〽オツと答へて立ち上がり、古き舞を身の上に、なぞらへてこそ舞うたりけり。

又平　さる程に鎌倉どの、義經の討手に向くべしと、武勇の達者を選まれたり。それは土佐坊、これは又

〽土佐の又平。

ト考へる。

將監　ア、コリヤ、光興なるぞ。

又平　ハツ。

〽光興が、師匠の御恩を報ぜんと、身にも應ぜぬ重荷をば、大津の町や追分の、繪に塗る胡粉は安けれど、名は千金の繪師の家、いま墨色を上げにけり。斯くて女房勇みを附け。

とく又もや御意の變らぬうち。

〽早御立ちと進めける。

又平　オヽ、いしくも申されたり。

〽身こそ墨繪の山水男、紙表具の體なりとも、朽ちて朽ちせぬ金砂子、極彩色に劣らじと、勇み進みし勢ひは、由々し賴もし我れながら天晴れ墨繪の健氣さよ。

とく唐繪の張良樊噲を

又平　楯に突けたと思し召せ。はやお暇。

將監　行け。

又平　ハツ。

〽師匠の御恩を頭に頂き、とう〳〵〳〵力足踏む又平は、今ぞ出世の金おとがへ、天晴れ諸人の繪本ごと、勇み進んで急ぎ行く。

ト双方よろしく段切れにて、

幕外、三味線入り大小にて、よろしく、向うへ入る。　幕

けいせい反魂香（終）

「けいせい反魂香」の書替狂言

「名筆傾城鑑」（反魂香の増補作）
「傾城輝草紙」（又平兄妹讓の仇討）
「信田妻容姿中富」（二人又平の所作事）
「浮世又平譽助劔」（又平と大津繪人物）
「姿花宿色衣」（又平と淸水淸玄）

おはつ
徳兵衛

往古曾根崎村噂



嘉永二年十一月河原崎座繪番附

往古曾根崎村噂

序幕

河堀口藤棚の場

役名——平野屋德兵衞。天滿屋お初。宗次女房、お染。油屋九平次。道具屋彌助。藝子、小京。仲居お澤。同、お菅。太鼓持ち、佐平治。甥、長藏。

造り物、平舞臺、臆病口の方、一間半の屋體、見附け障子、前、例の欄間に、松屋と書いたる紅摺りの提灯、數多吊り、軒下に、紺地に河堀口松屋と書いたる水引き暖簾かけ、但しこの屋體、筋違ひ、漏斗に飾り、この續き、勝手口への門口、これにも松屋と書いたる暖簾を掛け、この門口續きに、見附け、葭簾圍ひの取合はせ、よろしく、奧深に飾り、この前、橋がゝり際より、見事なる藤の棚、藤の盛り、この見得よろしく、騷ぎ唄にて、幕開く。

仕一　ア、騷ぐワく、河堀口の松屋は、いつもく、夥しい客ぢやないかい。

仕二　イヤモウ、毎年の事ぢやが、藤の盛りは、また格別なものぢやわいの。

仕三　その上この庭の、泉水の杜若も見事ぢや。

仕四　オ、、それく、この大坂では野田の藤か、この河堀口の松屋が大將ぢや。

仕一　それゆゑ此やうに、人が群集して見に來て、アレ、あの通りに藤の花を、褒めた秀句が、たんとぶら下げてあるわいの。

仕二　ほんに、えらう吊り下げ居つたな。ドレく。

ト藤の花に吊り下げてある短冊を、取つて見てなんぢや「藤咲くや、我れかおれかの煮賣り店」ハ、、、、こいつは藤の花を、蛸に見立て居つたな。

仕三　待つたり、こちらのはなんぢや。

トまた短冊を見て

「振り袖の長と較べん藤の花。」

仕四　こりや面白う、やり居つたな。

ト云ひながら、外のを見て

「褒める聲、こぼれかゝるや藤の花、もつれ寐よやれ葉隱

れの床。」嫌らしう連ねたな。
仕一　ところで我れら、一句浮んだ。
皆々　どうぢやな。聞きたいな〳〵。
仕一　サア、斯うもあらうか。先づこの藤の、花を見て。
皆々　オヽ、花を見て。
仕一「ぼた餅の、色合ひにこそさも似たり、そこで棚から落ちかゝりける」とはどうあらうな。
皆々　ハテ、卑しい狂歌ぢやなア。
仕一　ハテ、高いも低いも、食はにやア立たん世の中ぢやなア。
仕三　イカサマ、云はゞそんなものぢや。
仕二　イヤ、食ふ事と云へば、天王寺の鳥居前へ行て、焼餅の焼立てゞ、兵粮附けて去なうぢやないか。
仕四　さうとも〳〵。戻りが遅いと、内で嬶衆の、焼餅を貰はにやなるまい。
仕一　こりや早う去んで嬶衆と、よれつもつれつの藤の花と出かけようわい。
皆々　オヽ、それがよい〳〵。
仕一　そんなら皆の衆。
皆々　サア、ござれ〳〵。

ト皆々、捨ぜりふにて、橋がゝりへ入る。ト摺り鉦入りになり、向うよりお初、女郎、他所行きの形。後より小糸、禿子の拵らへ。仲居お澤、お苫、次に太鼓持ち佐平治、附き添ひ、出て來て、花道よき所にて
さは　コレイナア、お初さま、もそつと靜かに、行かしやんせいなア。
とま　何が内を出ると、碌々に休みもせず、歩かしやんすに依つて、ナウ、小糸さま。
小糸　さうでござんす。わたしやはぐれまいと思うて、大抵しんどい事ぢやないわいなア。
はつ　サア、そりや道理でござんすが、わたしが此やうにいら〳〵と、氣を急くのはな。
ト云はうとするを
佐平　オッと、皆までのたまふな。お初さまのお心に、キッと思惑、有馬山の藤ではない、この河堀口の松屋へ御來臨は、諸事胸中に疊み込んで居りますぞえ。
はつ　アレ、また佐平治さんの、惡口云はうと思うてからに。
佐平　でも、まんざら無い事でもなし。
さは　彼れこれ云ふうち、もう向うがこぼれ口の松屋、マ

ア、あの床几へ行て、休まうぢやないかいなア。
小糸　それがよいわいなア。そんなら皆樣。
佐平　サア〳〵、行かつしやりませ。
はつ　サア、ござんせいなア。
　ト皆々舞臺へ來て
さは　ハア、こりや內で聞いたより、見事に咲いたわいなア。
佐平　所で妾らが日頃の心掛け。なんぞ一首、驚ろかしたいものぢやて。カウツ。
　ト手を組み、思案のこなし。お澤もこなしあつて
さは　佐平治さん、斯うもあらうか。
佐平　オツと、どうもあらうか。
小糸　ア、、コレ〳〵、お澤どんの趣向、默つて聞かしやんせいなア。
佐平　成る程、後學の爲、さらば聽聞仕らうか。
さは　そんならちよつと……「盃の中にも咲くや藤の花」
……とは、どうぢやぞいなア。
佐平　ヤ、奇妙々々。誠に韓信、股を潜るぢや。
とま　佐平治さん、さうしてお前、なんぞ出來たかえ。
佐平　オ、、出來たとも〳〵。えら出來ぢや。
皆々　そりや、どんなのが出來たぞいなア。
佐平　サア、わたしが出來たは。
三人　早う聞きたい。
佐平　待つたり〳〵。エヘン〳〵。
　トむづかしう構へて
「うぢや〳〵と花を見に出る蝨かな。」とは、痒からうがな。
三人　オ、穢な。ホ、、、。
　ト此うち、お初は始終、向うへ思ひ入れあつて、何事も耳へ入らぬこなし。お澤、お初を見て
さは　これはしたり、お初さまとした事が、委細構はず、きつい待ち兼ねやうぢやわいなア。
とま　あのやうに思はれてこそ、面白いと云ふもの。
小糸　わたしらは、けなりいわいなア。
佐平　イヤ又、その德さまも、何をしてござるやら。どうでもこりや、持たせ振りと見えます。
三人　ほんに早う、ござんしたがよいわいなア。
佐平　オ、、さうぢや。これより安居山の絕頂へ馳せ登り、下寺町を眼下に見下ろし、德さまの押寄せ來るか來ぬかを、イデ、遠見の仕つた上、實否を糺して直さま注

進、ソレ。
ト花道際へ行き、向うを見て
ヤア／＼、行くまでもない。向うより來るは、慥かに德さま。
さは　ドレ／＼。ほんにさうぢやわいなア。
佐平　威風堂々として、德さまのお出でゞござりまする。申し、コレ／＼、お初さま、見えたぞえ。矢ッ張り德さまぢや／＼。德さまに御萬歳と、御代も榮えてましんます。
ト惡身にて踊る。ト誂らへの唄になり、向うより德兵衞、着附け、羽織の形。後より男、堺重と樽を一荷にして、擔ひ、附き添ひ、出て來て
德兵　コリヤ藤助、わりやそれを、松屋の臺所へ持つて行て、天滿のりんぼう組は、まだ戾つて見えぬかと、尋ねて來い。
下男　ハイ／＼、畏まりました。
ト行かうとするを
德兵　コリヤ／＼、さうしてまだなら、その酒肴、堺重も隨分風の透く所へ直して置きや。サア／＼、早う行きや行きや。
下男　ハイ／＼。
ト云ひながら、正面の入り口へ入る。お初、こなしあつて、上手の床几へ居直る。德兵衞、こなしあつて、皆々を見て
德兵　オヽ、こりや皆揃うて、早かつたの。
三人　德さま、きつう遲うござんしたなア。
佐平　イヤモウ、最前から、何がお初さまが待ち兼ね。姿の美しいあの首を、長う延ばしてやかましい事。
小糸　わたしらも、とも／＼。
三人　待ち兼ねたわいなア。
德兵　オヽ、さうであらうとも。イヤモウ、おれも內を出ようと、急けば急く程、煮染めが出來ぬの、握り飯がまだ胡麻が振つてないのと、どぎちやぎ／＼と隙が入つてやう／＼の事、今になつた。併し、北から爰まで、餘ッぽどの道程、定めてお初、しんどかつたであらうの。
ト お初の側へ行く。お初、物も云はず、莨を呑んで居て、この時煙管にて、德兵衞の額をちよつと突く。悸りして
アツヽヽヽ、。こりや何をするのぢや。
はつ　德さま、待たるとも待つ身になるなと云ふ事、お前

知つて居やしやんすかえ。

徳兵　ヤ。

はつ　オ、、辛氣。

トちよつと膝を抓る。

徳兵　アイタ、、、、。これは怪しからぬ、痛い御馳走、顔は重々厚い表なしで、太股は痛み入ります。

はつ　エ、、そんな事がよう云はれるなア。アタ憎てらしい。

ト煙管を振り上げると、徳兵衛、身をかはして

徳兵　佐平治、こりやどうぢや。きつう浪が荒いなア。

佐平　イエ〳〵、お案じなされまするな、金毘羅參りの迎ひと違うて、山上參りのお迎ひなら、氣遣ひはござりませぬ。

徳兵　エ、、をかしうもない惡ぢやり、措いてくれ。面白うないぞ。こりやどうやら、大分氣が揉めて來た。なんぢやら、疱瘡見舞ひの鯛を見るやうに、びんびんと、なんの事ぢや。ア、、聞えた、こりやてつきりと、出來たな〳〵。サア、外に面白い事が出來て、おれに火傷さしても大事ないのか。ほんに熱い代物ぢや。そんな事は、われが可愛がる男にせい。この徳兵衛は嬉しうないぞ。

トむつとこなし。お初も、こなしあつて

はつ　ア、、コレイナア。

ト徳兵衛を捕へ、顔を見る。

徳兵　なんぢやい。

トこなし。

はつ　そりや、お前の心に引較べて、云はしやんすのかいなア〳〵。

徳兵　なんのおれが、そんな事知らうかい。

はつ　イエ〳〵、知るまいと思うてか。お北さまと云うて美しい振り袖の奥樣が、疾からあるげな。エ、、つッともう、アタおめでたい、アタ結構なお樂しみでござんせう。それゆゑ内を出とむなうて、隙が入つたのであらうがな。

トむつとしたるこなしにて、胸倉取る。

徳兵　エ、、そりや何を云ふのぢや。ようそんな出放題の嘘が云はれるわい。あのお北と、寐たやら死んだやら、おりや知らん。さうして、マア、男の胸倉取つて、マア見つとむない。爰放さぬかい。

はつ　イエ〳〵、滅多に放しやせぬ。惡性さしやんす吟味するのぢやわいなア。

德兵　こりやおかしい。われの惡性狂ひは棚へ上げて置いて、どこにおれが惡性するぞ。
はつ　そんなら、いつわたしが、どこで又面白い事が、出來たと云はしやんすえ。
德兵　オヽ、出來てあるから出來たと云ふのぢや。
はつ　イエ〳〵、ないわいなア。
德兵　イヤ、あるわい〳〵。
はつ　イエ、ない。
德兵　イエ、ある。
はつ　ない〳〵〳〵。
德兵　ある〳〵〳〵。
ト兩人せり合ふと、皆々、取りさへて
皆々　ア、〳〵、待たしやんせいなア。
德兵　イヤ、待たんぞ〳〵。
佐平　これはしたり、お二人とも、どうでござりますぞ。マア〳〵、お鎭まりなされませ。
さは　さう互ひに云はしやんしては、とんと果しがござんせぬ。なんであらうと堪忍して
小糸　今日はわたしが仲立てゝ
佐平　オヽ、さうとも〳〵。仲直りはあの小座敷。
ト屋體を敎へる。
三人　ちやつとお二人とも、行かしやんせいなア。
ト手を取る。
德兵　否ぢや。おりや行きはせぬわい〳〵。
ト頭ふる。
皆々　ハテマア、さう云はずと。
ト無理に引ッ立てる。德兵衛、お初が手を取り、行かうとして、兩人、こなしあつて
德兵　エヽ、否ぢやわい。
トついと上手の屋體へ入る。
皆々　サア、行かしやんせいなア。
ト一件、よろしく、騷ぎ唄になる。皆々、屋體へ入る。ト戶屋の內にて、法螺貝の音する。これにて向うより、九平次、先達の形にて、浴衣縞の上に輪袈裟かけ、貝を持ち、後より、彌助その外、行者參りの仕出し、附き添ひ、次に長蔵、新客の形、足を痛めし心にて、金剛杖に縋りながら、出て來る。戶屋の內より
皆々　大峯八大金剛童子、南無行者大菩薩。
ト云ひながら、本舞臺へ來り
九兵　サア〳〵、河堀の松屋ぢや。爰まで戾つたらもう樂

ぢや。なんと、一休み休んで、ゆる〳〵行からぢやないかいなう。

參一　成る程、先達の云はつしやる通り、一休みして去にませう。

皆々　オヽ、さうしませう〳〵。

　ト皆々、床几へ腰掛けて

參一　イヤ、モウ、おいらは度々お山へ登つたなれば、勝手は知れて、さのみしんどいとも思はぬが、彌助どのや長藏どのは、今年は始めての新客ゆゑ、定めて草臥れさつしやつたであらうの。

長藏　イヤモウ、草臥れた段ぢやござりませぬ。何がお山は初めてなり、怖いのとしんどいので、一向なんにも覺えませぬ。ナウ、彌助どの。

彌助　それ〳〵、話しに聞いたより怖いお山、取分けあの西の覗きでは、アヽ、誰れも病ひついた。何が逆樣にして、向うへズツと突き出されて、サア、親に孝行にするか、親方に口返すな、博奕も打つまいぞ。又お山買ひもたんとする事はならんぞと、せごされたその時は、思はずゾツとしたわい。ほんにあれを思へば、惡い事はこれ程も出來ぬわい。アヽ、思ひ出しても、怖やの〳〵。

九平　その筈ぢやい、お山を怖がらぬ者があつて堪るものかい。また新客の間は、怖いと云うても譯を知らぬゆゑ、ツイ怖いと、只一通りぢやが、おいらのやうに度々と山數を經る程、一年々々恐ろしくなるぞい。隨分と信心して、毎年お山へ登るやうにしたがよい。

長藏　イヤモウ、なんぼう怖うても、有難いお山ぢや。

參一　毎年々々參りたうなると云ふも、不思議でござるわいの。

皆々　とんと爭はれぬものぢやてなう。

　トこの時、屋臺の内より、德兵衞、出て來り、皆々を見て

德兵　オヽ、これは〳〵、皆樣、只今でござりまするか。お早い御下向でござりましたなア。

皆々　オヽ、それは〳〵、德兵衞どの。

德兵　ハイ〳〵、どなたも御無事で喜びます。取分け九平次どのには、手前方の長藏が事、今年新客の事なれば、道中は勿論、お山でも、定めてお世話でござりませう。お禮がてら爰まで、お迎へに參りましてござりまする。

九平　それはようこそ。イヤモウ、若いに依つて、道も達者なり、何も世話な事はござりませなんだて。

長藏　イエ〳〵、大抵お世話になつた事ぢやござりませぬ。ようお禮仰しやつて下さりませ。
德兵　オヽ、さうであらうとも〳〵。イヤ、長藏や、幸ひ持たして寄越した酒肴、なんにもないが、堺重も奧にあれば、九平次どの始め、同行の衆へも、一つ上げてはたもらぬか。
長藏　ハイ〳〵、畏まりました。左樣なら、申し、御先達樣。
九平　アレ、皆の衆、德兵衞どのゝお持たせ。なんと奧へ行て、一つ下されうではないか。
皆々　それは御馳走でござりますの。
德兵　何がいの。サア、長藏、ちやつとお供申しや。
長藏　ハイ〳〵、サア、皆の衆も御一緒に。
皆々　それは忝ならござる。
九平　サア〳〵、ござれ〳〵。
ト捨ぜりふにて、九平次、草鞋脱ぎ、皆々連れだち、屋體へ入る。德兵衞、後見送り、いろ〳〵捨ぜりふ。
德兵　コレ、長藏や、奧に藤介が來て居る程に、何もかもあれに云ひ附けての。合點か。
トいろ〳〵こなしあつて

時に、いま聞いたお初が身の上。こりやマアどうしたものであらうぞ。ハテナア
ト床几へ掛け、思案のこなし。始終合ひ方にて、橋がかりより、お樂、着流し、抱へ帶にて、出て來て、こなしあつて
らく　ヤレ〳〵、しんどやの。さうして爰は河堀口。マア、休んでから行きませう。
トこなしあつて、下手の床几の側へ行く。
これは、あなた、お許しなされて下さりませ。
ト挨拶して、よき所に腰掛け、莨のむ。此うち、德兵衞、これに構はず、思案してゐる。お樂、莨のみながら、德兵衞へ向ひ
申し、もう何時でござりまするなア。
トこれにて、フと心附き
德兵　ハイ、彼れこれもう、晝過ぎでもござりませうか。
らく　左樣でござりまするか。さうしてこれから、大坂の内本町二丁目までは、何程ござりまするか。
德兵　ハイ、大方なま一里もござりませう。
トこなし。此うち、德兵衞、お樂を見て、こなしあつて。

らく　申し、お前様が尋ねさつしやる、内本町二丁目は、何屋何兵衞と云ふ所へお出でゝござるぞ。

らく　ハイ、私しが參りまする所は、平野屋久左衞門さまと申しまする、醬油屋へ參りますのでござりまする。

ト これにて、思ひ入れあつて

德兵　ムウ、アノ平野屋へ。

ト お樂の顏を見て、さてはと云ふ思ひ入れ。

らく　ハイ、左樣でござりまする。

德兵　オヽ、慥かにさうぢや。

ト 仰山に云ふ。お樂、悃りして

らく　これは又、仰山な。なんでござりまするえ。

德兵　イヤサア、率爾ながらお前は、もしや、敎恩寺村の淺田宗次さまのお內方、お樂さまとは申しませぬかえ。

らく　ハイ、成る程私しは敎恩寺村の、お樂でござりまするが。

ト 思ひ入れ。

德兵　左樣でござりまするか。ヤレ〳〵、ほんにマア思ひがけない。

らく　ついぞこれまで、お目にかゝつた事のない、あなた樣が、私しが身の事を、よう御存じでござりますなア。

ト 不思議なこなし。

德兵　成る程、ついにお目にかゝつた事はござりませねど、常々お北が話しで、よう聞いて居りまする。ハイ、私しは久左衞門が悴、德兵衞でござりまする。

ト それにて、悃りして

らく　エヽ、そんならお前樣が、アノ、德兵衞さんとな。

ト こなし。

德兵　お樂さま。

兩人　これはしたり。

ト 兩人、こなし。

德兵　マア、こちらへお出でなされませ。

ト 合ひ方になる。

らく　でもマア、思ひがけないと云はうか。ついぞこれまでお逢ひ申さねば、文の便りと音づれも、音信不通で水子のうちから、養子に遣つた娘のお北。定めし何かの樣子委細、お聞きなさつたでござりませうが、いつも無心を申し遣はしまして、あの子にいかい苦勞をかけまする。今度連合ひ宗次どのゝ大病、人參を入れねば本腹も叶はぬ病氣、どうか斯うかと思へども、在所の事なり仕樣もなし、ほんの譬へに伯母の從兄弟とやら、詮方盡き

てお北の方へ無心状。サア、しをらしい、これ見て下され。

ト懐より、状出して、擴げ、徳兵衛に見せ

この通りの返事をたもりました。四五日のうちに徳兵衛さまに、持つて行てもらふ程に、必らず氣遣ひするなと眞實なこの返事。モウ〳〵、嬉しうて〳〵嬉しうて、この文をお北ぢやと思うて、肌身離さず持つて居りまするわいなア。

徳兵 ドレ〳〵、お見せなされませ。

ト徳兵衛、取つて見て

成る程、こりや、お北が手に違ひござりませぬ。申し阿母様、有やうは今日お前様の所へ、私しが持つて參ります所でござります。丁度幸ひ、好い所でお目にかゝりました事ぢや。

ト云ひながら、紙入れより人參を取出して

これがお頼みの人參でござります。

ト お樂に渡す。

らく エヽ、忝ならござりまする。

ト頂き、嬉しきこなし。

徳兵衛さま、なんとお禮を申さうやら、忝ならござります。シタガ、夫宗次どのは、今では百姓なれ、根が侍ひの果なれば、義理堅い生れ附き、水子の時から久左衛門どのへ、遣り切つた娘、未練さうに顔見になぞ行くなと、常から申されますゆゑ、お北と云ふ名は聞きながら、今日まで顔も見ず、便り音づれもせぬに、こんな無心やなぞ云うてやつたと聞かれたら、大抵叱られる事ぢやござりませぬ。又この人參も、あの人に隱して、ソッと服ませます。これと云ふも、どうぞして、もう一度達者にして、命さへあれば娘に顔も、見つ見せつ時節もあらうかと、思ふは女子の愚痴ゆゑに、とつおいつ、つひに行かぬ久左衛門さまの内方へ、どうも打ちつけに押しかけても行かれず、と云うて打捨てゝも置かれず、どうか斯うかと案じて居りましたところに、丁度幸ひ計らずも、お前に爰で逢ひましたは、神佛のお引合せ、夫の病氣も本腹すると云ふ吉左右。こんな嬉しい事はござりませぬ。ホヽヽヽ。イヤモウ、斯う云ふ話しをするも娘の外聞必らずお北に愛想盡かして下さりますなえ。徳兵衛さま、兎角あなたをお頼み申しますぞえ。

徳兵 ハテ、益體もない。お北が實の親御なれば、私しが爲にも誠の舅今の人參を早うお上げなされて、御病氣さ

へ本腹なされたら、私しが方へも、お出でを待つて居りますする。
らく　イエ〳〵、今では他人向きの娘、あなたのお宅へは餘所々々しい。なんの遠慮に及びませうぞ。
らく　これでも一日の義理。とは云ひながらお北が顔、一遍はどうぞして、見たうござります。
　ト泣く。徳兵衛もホロリとして
徳兵　オヽ、さうでござりませうとも。現在血を分けた
　トこなしあつて
イヤ、よろしうござります。其うお前を見て、私しもゆつくりと。
らく　左様なら、徳兵衛さま、一時も早う、この人参を
徳兵　もうお歸りなされまするか。
らく　シタが、必らずともに
　トこなし。
徳兵　アイ、お靜かにお出でなされませ。
らく　おさらばでござりまする。
　ト唄に成り、橋がゝりへ入る。徳兵衛、後見送り
徳兵　折角思案しかけてゐる所へ邪魔が入り。何は然れ、お初に逢うてとつくりと
　トこなしあつて
オヽ、さうぢや。
　トまた唄に成り、ツイと屋臺へ入る。ト浄瑠璃になり。
〽奥の暖簾を抜けて出る、惡毒の先達油屋九平次、あたり見廻し鼻紙に、矢立の筆のさら〳〵書き、八丁ゆがむ藤棚の、柱にべつたり、打睨め。
九平　ハテ、智慧もあればあるもの。徳に借りた銀、あの貼り紙で砂になる我れらが計略。奇妙〳〵々。あゝして置けば、ヘエ、うまい〳〵。
〽舌なめずりして奥に入る。
　トこなしあつて、ツイと門口へ入る。屋臺の内にて、
　仲居大勢
仲居　マア〳〵、ようござりますわいな〳〵。
　トお初徳兵衛を宥めながら、察明きの人數、附き添ひ、
　出て
とま　お初さま、又いつもの口舌かいなア。
作平　もう、大概で仲直りしたがようござりますぞえ。
はつ　サア、私しや何も云はん氣ぢやけれど、あんまりぢやわいな。
　ト腹の立つこなし。

德兵　あんまりとは何があんまりぢや。又しても〳〵、ひざるのは久しいものぢや。措いてくれ〳〵。

さは　イエ〳〵、お初さまに無理にござりませぬ。一體お前樣が惡いわいなア。

德兵　どうしておれが惡いぞ。

小糸　アイ、その譯、私しが云はうかえ。

德兵　イヤ〳〵、われには問はぬ、默つて居い。

小糸　イ、エ、お初さまの云ひ譯、マア、聞いて下さんせいなア。いま奥の前栽で、德さまがござんして、私しが懷へ手を入れて、じやらくら云うてな。

さは　それ〳〵、この間も大仁の麥飲屋で、日野伊の色香さまを捕へて、なんのかのと。

とま　ほんに誰れ彼れなしに、黙性な德さん。

佐平　聞けば聞く程、氣の多い德さん、こりやマア、どうでござりますぞ。

德兵　マア、よいてや。でも、よう嘘をつく奴等ぢや。

はつ　イエ〳〵、あんまり嘘でもござんすまいわいなア。

皆々　こりやキツと、云はしやんせいなア。

德兵　コリヤ〳〵、そんな事云ふ手間で、奥へ行て酒なと呑んで居い。お初には差向ひで、とつくりと話したい事もある。エ、氣の利かぬ佐平治ぢや。ソレ、皆を連れて早う行かぬかい。

佐平　オツと、呑み込み山伏しでなうて、山上參りの法螺の貝。サア、皆奥へ行きませうか。

小糸　サア、行くは行くけれど、キツとせりふしやさんせ。

はつ　アイ、そりや合點ぢやわいなア。

德兵　これはしたり、強情云はずと、早う行かぬかい。

小糸　アイ〳〵、いま行くわいなア。

佐平　サア〳〵、ござりませ。

と捨ぜりふにて、入る。あと合ひ方になる。

德兵　お初、いま奥で九平次が、何とやら云うたと云やつたなア。もう一遍聞かしや。

はつ　サイナア、この間九平次が、わたしを呼んで云ふには、コリヤお初、德兵衞は、今では内のお北と、大抵仲のよい事ぢやない程に、わればつかりウロウロと、あんまりしこらぬがよいと、わたしのお爲顏で焚き附けるのぢやと、よう得心はして居りながら、わたしや、モウモウ、腹が立つて〳〵、ならぬわいなア。

德兵　エ、わが身も嗜なみや。そんな事を聞いたとて、怒るとはきつい癇癪ぢや。勤めして居る者に似合はぬ。て

も、愚痴な事ぢやわいの。

はつ　エヽ、わたしやそれでも、どうやら心が、

德兵　ハテ、高が斯うぢや。其方が無うともあのお北を、女房に持たれぬその譯は、外でもない。この德兵衞が身の上。あの伯母者人の氣に入らぬに依つて、どうで平野屋の家は繼がさぬ料簡。いま奧へ來て居る長藏と云ふは、母者人の眞身の甥ぢや。つまる所は、あれとお北と娶合して、平野屋の跡式を讓る料簡。それゆゑおれに當りの胴慾さ。そこは此方も承知して、なんの、あの家の一軒や二軒位、欲しうはない。いつそ此方から出てこまして天下晴れてわが身と女夫に。サア、例へさうならずとも、粹の味を覺えてから、只の女房が持たれるものか。なんとこれで、心が晴れうがな。どうぢや〳〵。

はつ　イエ〳〵、四ツ晴れで、滅多に傘は離されぬわいなア。

德兵　そんなら、まだ疑うて居るのか。

　トこなし。

はつ　サア、疑うては居ぬけれど。

　ト引き寄せる。

德兵　けれどなら……けれどぢや。

　トちつとこなし。

はつ　アレ、又てんがうしやしやんすかいなア。

德兵　なんの、てんがうぢやない、大眞實ぢや。

　トぐつと引寄せる。

はつ　エヽ、そんな事は小糸さんに、してあげさしやんせいなア。

德兵　エヽ、まだそんな事を。

　トこの時、長藏、出かけ、ちよつとこなし。

はつ　でも、人が來たら惡いわいなア。

　ト突き離すを。

德兵　なんの構ふ事があつて。さうぢやないか。藤の花の下で、よれつもつれつ。

　トまた引寄せる。

はつ　德さん、そりやほんまに、お北さんより。

　トこなし。

德兵　ハて、女房に持つはお初、其方ぢやわいなう。

はつ　オヽ、嬉し。

　ト抱きつく。長藏、いろ〳〵こなし。

〽臺詞殘すも色の道、囁く後へ。

　ト長藏、トンと足音して

長蔵　徳兵衛さん／＼。

ト云ひながら、前へ出る、

〽爰に愕り飛びのいて。

ト両人、愕りして、お初を無理に、上手へ押しやり

徳兵　ヘイ／＼、畏まりました。憚りながら旦那様へよろしうお傳へ下さりませう。ヘイ／＼／＼。

ト慇懃に挨拶するを、

はつ　コレイナア、徳さま。

ト側へ来るを、また上手へ突きやる。

徳兵　ア、イヤ／＼、徳利よりは、醤油樽に詰めて差上げませう。ナ、コレ、ソレ。

トいろ／＼仕方して、悪いと云ふこなし。長蔵と顔見合し、

ヘイ／＼、左様なら、もうお別れ申しまする。

ト早う行けと云ふこなし、いろ／＼あつて

サ、、ちやつとな、ソレ、お座敷へ、お出でなされたがようござりませうぞえ。

トいろ／＼仕方する。お初、呑み込んで

はつ　そんなら徳兵衛さま、内へよいやうに心得て下されの。その代りに、わたしや座敷へ行くぞえ。

ト顔で、よいかと云ふこなし。

追つて逢ひませうぞや。

ト両人、思ひ入れあつて、奥へ入る。

〽奥様顔して立つて入る。

ト後見送り

徳兵　ヘイ／＼、ようお出でなされました。

トいろ／＼こなしあつて

ハテマア、珍らしいお方にお目にかゝつた。イヤ、ナニ、長蔵、其方、あなたを知りやるまい。

長蔵　あなたとは、今の女中の事でござりますかえ。

徳兵　サイノ、あれは此方の大事のお客先、但馬の妾宅ぢやわいの。

長蔵　ヘエイ、珍らしいお人、根から存じませぬ。

トこなし。

徳兵　追ツつけ木みしり茄子が出れば、諸味をくれいとのお頼みぢや。

長蔵　左様でござりましたか。イヤモウ、但馬屋の妾宅なら、兼ねて聞き及んで居ります。

徳兵　オ、、さうなうて。大事のお得意ぢやもの。

長蔵　ハイ、さうして、名はお初と云ひまするな。

徳兵　ヤ。
　ト　ぎつくりする。
長藏　イヤサア、但馬屋さまぢやあるまい。今の女中は、天滿屋のお初と云ひませうがな。
　ト徳兵衞こなしあつて、氣を替へ
徳兵　イヤ、そんな名でもなかつたが。
　トこなし。長藏、思ひ入れあつて
長藏　徳兵衞さま、そりやあんまりでござりますわいなう。
　トこなし。合ひ方になる。
サア、なんぼうおれぢやとて、まんざら町の女子と色町の女子と、見分けぬ阿房ぢやでござらぬわいなう。
徳兵　ヤア、そんなら其方は。
長藏　オヽ、知らいでならうか。徳兵衞さま、これまでお前が夜泊り日泊り、北で居續け打つてござると、アア、今夜戻られぬと、また伯母さんが怒らうかと、商賣の片手に、天滿屋の門をウロ〳〵、常住あちこちしたに依つて、お初どのゝ顏もよう知つて居りますわいの。サア、この心遣ひをするも、どうぞしてお北さまと、女夫にしたいばつかり。伯母さんの氣では甥のわしに、平野屋の名跡を讓らうと思はれうが、この長藏に限つてそんな性根は、コレ、微塵程もないぞや。ハテ、一旦養子筋にならしやつた徳兵衞さま、おりやいつまでも甥の長藏ぢやぞや。モウ〳〵、行者樣に蹴殺さるゝ法もあり、山上樣へ參つても、お前の事ばつかりを願うて居りますわいなう。それにマア、おれが心を疑うて、自暴起しての茶屋狂ひ。そりや聞えぬ徳兵衞さま、旦那どの、エヽ、コレ、唄の文句にある通り、おれが心が竹ならば、割つて見せたいわいなう〳〵。
〽棒突ッ立てた男氣に、涙もろみは醬油屋の、眞身に沁みし極みなる。あやまり入りて徳兵衞は。
　ト合ひ方。
徳兵　イヤ、モウ〳〵、長藏、其方の心は知つて居る。さらさら其方を、疑ふではなけれども、有やうはお初が手を、今ではどうも
長藏　サヽ、何も緣を切らさつしやりませいとは云はぬぞや。ハテ、矢ッ張り緣も切らずに、妾宅にしたがよいぢやござりませぬか。幸ひ奧に、お初さまも、來て居らる事ぢや。いつそ近附きになつて、とつくりと云うて聞かしませうか。
徳兵　長藏々々、其方は、マア、いつの間に左樣に粹にな

りやつた。今の今まで、とんと氣が附かなんだが口惜しい。さつても粹め、エヽ、一番やりたいなア。

長藏　アヽ申し〳〵、その判官には弱つたものぢや。

德兵　わが身がそんな氣なら、これからちよこ〳〵、おれが散財に行く時は、一緒に連れ立つて行かにやならぬ。

長藏　その時には辨慶に

ト我が姿を見て

イヤ、この形では辨慶ぢやない、平の知盛。

兩人　ハヽヽヽ。

德兵　そんなら長藏、マア、お制に

長藏　逢うて參りませう。

トこなしあつて、奧へ入る。

〽輕口云うて奧へ行く、粹の強力金剛杖、直ぐにはゆかぬ九平次彌助、のけぞり出づるほろ酔ひまぎれ。

ト九平次、彌助、酒に醉うたる思ひ入れにて、出て來り、德兵衞を見て

九平　德兵衞々々々、爰に居やるのか。杯をしかけて、どこへ行くのぢや。

彌助　腹の惡い、ちやつとぬけておぢや。

ト云ひながら、兩人、床几に腰掛ける。

德兵　イエ〳〵、さうぢやないが、オヽ、さうぢや、丁度幸ひ、九平次、其方にちと逢ひたい事もあるし、イヤ、また道具屋の彌助どのには、この間の曼陀羅の事、いかいお世話でござつたなう。

彌助　エヽ、なんのお禮に及ぶ事か。あんな古筆と云ふ物は、貰らうと思へば二束三文。世話甲斐もない事でごんした。

德兵　イエ〳〵、さうでない。貴公なりやこそ、二十兩にもして下さつたと云ふもの。外の者ではとんと埒が明かぬ。忝なうごんす。時に九平次、わが身にちつと話したい事がある。ちよつと爰まで來てたもらぬか。

九平　ムウ、アノ、おれにか。

德兵　オイナウ、隙は取らぬ、ちよつと爰まで。

九平　なんの用ぢやの。

ト上の方へ來る。兩人、下に居て

德兵　サア、戻り早々から、こんな事を云ふのは惡いけれど、其方に用と云ふは別の事でもないが、ソレ、先度取替へた金の事。七日の日には、キッと戻すと云やつたに依つて、親仁樣の手前はじやらくら云うて、其方に取替へたところが山上參りして內には居やらず、道理こそ音

かせぬと思うて、今日爰へ來たのはその金の事や、又は無事に戻りやつた迎ひやら、何やらかやらで出かけて來たが、殊にあの金は、急にちと入用な事が出來たに依つて、どうぞ、取替へた二貫目の金、氣の毒ながら今日中に、戻してはたもらぬか。話しと云ふはこの事ぢやわいの。

〽云ふ顔きよろりと打眺め。

九平　オイ〳〵、德兵衛、そりやマア、何を云ふのぢや。

德兵　ハテ、何を云ふとは、わが身に貸した金をいなう。

九平　イヤ、コレ、德兵衛、金とはなんぢや。おりやそんな事は知らんが。オヽ、覺えはないぞ。

德兵　ヤ。

九平　ハヽン、德兵衛、わりや酒に醉うて居るな。コリヤ、氣でも狂やせぬか。イヽヤイノ、この九平次は太平樂ぢやないが、つひにこれまで、人に金借りた事はないわい。オヽ、二貫目や三貫目の端下金なら、いつでも内にあるおれが身の上。エヽ、じやら〳〵した事云ふない。

　トすつぱりと云ふ。

〽けんもほろゝに云ひなせば、德兵衛は突つかゝり。

　ト德兵衛、少し氣の急くこなし。

德兵　コレ、九平次、そりやマア本氣で云ふのか。イヽヤイナウ、覺えないとはなんの事。エヽ、こりやおれより、貴樣が酒に醉うて居るのか。コレ、太鼓程な判まで捺した事、よもや忘れやせまいが。

九平　イヤ〳〵、德兵衛、わりや、マア、途方もない事云ふ者ぢやなア。云ふ事と云はぬ事とあるわい。今聞いて居りや、大それた首替りの印形が捺してあるとは。面白い。ドレ、印形見ようわい。

德兵　オヽ、見せいで。

　ト紙入れより、證文取出して

一つ、銀二貫目なり。文句は讀むに及ばぬ。戌の三月二十七日、平野屋德兵衛どの、油屋九平次、判。なんと、斯う云ふ慥かな證文があつても、金借りた覺えはないと云ふのか。

〽見すればぢろりと打眺め。

九平　ハア、企んだな〳〵。如何に我が身に火が附いて來たとて、わりや、マア、悲しい事するなア。德兵衛、此やうな仕事するものぢやないぞよ。コリヤ、そんな事するとの、可哀やわれのその首が、獄に愛想が盡きるぞよ。

エ、マア、そのまざ〳〵しい顔はい。
〽云はれてぐらつく胸の中、チッと押へて。
徳兵　イヤ〳〵、九平次々々、この徳兵衛が貸したと云ふには、コレ、此やうな慥かな證文がある。其方は又、書かぬと云ふ、なんぞ慥かな
九平　オヽ、證據と云ふは、オヽ、さうぢや。
トあたり見廻し、こなしあつて
サア、これぢや。
ト最前の貼り紙を取つて來る。
〽柱に貼つたる紙引きめくり。
コリヤ、これを見い、當月二十五日、花羅紗の紙入れに印形を入れ、落したと云ふこの書附け。大坂の橋々は云ふに及ばず、五里三里の在所までも、この通りの貼り紙ぢや。印形落した事は、町年寄りまでも答へてあるわい。殊に印形を落した日は二十五日、われが貸したと云ふ證文は二十七日。なりや判を落してから後の事。ハヽヽ、解つた。こりや何か、おれが落した紙入れを、拾うてからの思ひ附き。勝手に證文書いて、おれが判を捺して、この九平次を騙る思案ぢやの。
徳兵　エ、なんのそんな事を。
九平　せぬ者が、この書附けはどうぢや。
徳兵　サア、それは。
九平　それともおれに云ひかけするのか。
徳兵　エ、見す〳〵知れた。
ト口惜しいこなし。
九平　騙りをひろぐか。
徳兵　サア、それでも。
九平　云ひかけさらすか。
徳兵　サア。
二人　サア〳〵〳〵。
九平　アノ玆な、大盗人めが。
〽横に寐る、縫の意趣とは内本屋の、手代が爰へ走り來て。
ト手代出て
手代　オヽ、彌助、爰に居るか。コレ、貴樣はな〳〵。ようもようも此やうな銀騙を摑ましたなア。旦那が京へ上られる次手に、本山で見極めてもらはしやつたら、眞赤な似せ筆ぢやげな。そこで旦那が怪しからぬ腹立ちで、なんでも彌助を引摺つて來いと、喧しう云うて居られる。もし彼れこれ云ふなら、直ぐに代官所へ屆けて來い

との事。サア、この似せ筆物は其方へ戻すに依つて、二十兩の金戻せばよし、さもなくばでんどで取つて見せるのぢや。隙が入ると爲にならぬ程に、いま來るがよい。遲いと代官所ぢやぞや。よいか。早う來い〱。

ヘ云ひ捨てとつかは立歸れば、彌助は始終呆れ顔。

ト手代、曼陀羅を渡して、橋がゝりへ入る。彌助悔りして

彌助　ヤア〱、そんならこの曼陀羅は似せ物か。

ト色々こなしあつて、德兵衞を引寄せ

コレ、德兵衞さま、イヤ、德兵衞。わりやマア、恐ろしい事するなア。樣子は今聞いたであらうが、この曼陀羅は似せ物ぢやげな。ようマア、こんな物おれに摑ましたな。サア、こりやわれに戻すから、おれが渡した二十兩と云ふ金、いま返せ。オヽ、戻せ。ようこんな似せ物を

ト曼陀羅を打ちつけ

突きつけさらしたなア。

トこなし。德兵衞、曼陀羅を取上げ、見て

德兵　何を云ふのぢや。親仁樣の祕藏の曼陀羅、しかも鑑定まで附いてある正筆。それを似せ物とは。

ト云ひながら、改め見て、悔り。

ヤア〱、こりや似せ物。こりや違うてあるわいなう。エヽ、聞えた。彌助、われが方へ摺替へたのぢやな〱。

トきつとこなし。彌助、これを聞いて、ムツとして

彌助　ヤア、此奴が〱。云はして置けば、樣々の事を吐かすがな。わりやおれを一ぱいやつて置いての逆捻ぢや。おのりや小息子かと思や、えらい太郎師ぢやなア。

九平　オヽ、さうぢや〱、人に無實を云ひかける、兇な大騙りめ。

彌助　似せ曼を拵り廻して、騙りさらすあんだらめ。

九平　斯う云ふ奴は以後の見せしめ。ソレ、彌助。

ト頷でこなし。

彌助　オヽ、合點ぢや。

ト引きつけ、くらはす。

九平　エヽ、そんな手ぬるい事ぢやいかぬ。ドレ、おれが手傳うてやらう。

ト引きつけて、くらはす。

兩人　これがよいか〱。

ト兩人にて、散々に苛なむ。

德兵　こりや二人して、この德兵衞を。

二人　何を大盜人めが。いつそ腹癒せに、斯うして
〽蹴腹どうと蹴飛ばせば、彌助が蹴返す傍若無人、踏むやら蹴るやら摑みかけ、山上參りの前鬼後鬼、二人寄つて苛む所に、お初は驅け出で
ト　お初走り出で、割つて入る。
はつ　ヤア、こりや德さまを、どうさしやんす。マア〳〵待つて下さんせいなア。
九平　ヤア、わりやお初か、よい所へ、よう來たなア。
ト　直ぐに抱きつく。
はつ　アレエ〳〵。
ト　身を踠く。德兵衞、見て
德兵　ヤア、こりやお初を。
ト　行かうとする。
彌助　どつこいしよ。
ト　引きつけるうち、お初は九平次を突きのけ
はつ　こりやマア、どう云ふ譯で德さまを、打ち叩きさしやんすのぢやぞいなア。
彌助　九平次さま、來ておやぜ〳〵。
ト　お初へこなし。
九平　オヽ、來ておや〳〵、來ておやわい。お初、ちよつとおぢや。
はつ　マア〳〵、待つて下さんせ。いとしぼさうに德さまを、こりやマア、なんとさしやんすのぢやぞいなア。
〽こりや、マアどうした譯ぞいのと、取りつくお初を隔つる惡者。
九平　お初、よい所へようおぢやつたなう。重々憎い德兵衞なれど、そもじの挨拶なら堪忍してこますが、とつと、モウ〳〵、むごいぞよむごいぞよ。そさまに惚れたと云ふは、並や大抵の事ぢやと思やるか。モウ〳〵〳〵、寢ても覺めても、覺めても寢ても、モウ〳〵、惚れて〳〵、エヽ、惚れ拔いて。
〽登りつめたる山上參り。
コリヤ、ひこつけなこの無頼漢めを思ひ切つて、おれが女房になつてたも、ヤヽ、コレ、お初、エヽ、春の花見の頃ぢやあつたが、濱側の橋半へ花見に行て居やつたが、半兵衞は走り込んで、出刄庖丁を持つて、はまちを斜に切つてゐる。お早は半がいに靠れて齒をせゝつて居る。わが身にそれを見て居やつた。その時わしが羽二重の着物着て、博多の帯締めて、袴穿いて、羽織着て、橋の上を通つて、わが身をちよいと見て、ハテマア、美しい

者ぢや。年は二十でもあらうかと、その時のわが身の姿が、オヽさうぢや、黒羽二重に萩の裾模樣、八丈縞の下着で、花天鵞絨に花菱の縫ひの帶をして、コレ、鼻紙で顔拭いて居やつたが、あゝ云ふ女子の肌とおれが肌と、合せて見たいものぢやと思うたはずみに、橋の上からはまらうとして、ハッと思うたわいなう。それから半鐘の下の袴屋へ行て、花を買つた程に買つた程に、凡そその花が八萬八千八百八十八本半、この花をば八貫八百八十八文八分八厘八毛八才拂ひがあつた。働らかねば拂ひは出來ぬ。どうぞしてと思うて、八幡樣へ二十日の間、履物脱いで跣足で裸で、水洟たらして跣足參りをして、鳩の羽にハッと射て放したら、破目にとまり、ばた／＼羽叩きして、ハッと飛んで行たゆゑ、ハッと拜して戻りがけに、四ツ橋の橋詰めで、羽田と云ふ八卦見に、八文張り込んで、八卦見てもらうたら、八卦見が云ふには、この戀は成り難いと云ふから、それはどうしたものと問うたれば、お前の鼻が大きいと云ふ。ハヽン、ハテ、面妖な、鼻が大きいと戀はならんがと云うたれば、ハイ、鼻が大きいと、今の鼻が大きいと云ふゆゑ、フム、そんなら馬を見たがよい、鼻はひしやげてあるけれど、今の鼻は大きいと云うたら、八卦見も云ひ樣がなかつたかしてハヽヽヽと笑うたわいの。これ程に思うて居るのに、我が身はおれに逢ふと、そちら向いて、髱裏と首筋の、二本足ばかり見せやるわいの。コレ、お初／＼、ほんにほん／＼、山で行してゐるうちも、行者樣の顔までが、わが身の顔のやうに見え、ほんに／＼／＼、ほんにやれ、忘れる隙はないわいの。コレ、拜む／＼／＼、コレ、叶へて、どうぞ叶へて、南無お初大菩薩、如何に男が惡いとて。

〽せめて德兵衛が百分一、これなら／＼と取りつくを、金剛杖で向う臑を、ぴつしやりどつさり。

ト 惡身にて寄り添ふ。德兵衛は彌助を振り切り、側に有り合ふ金剛杖にて、九平次が向う臑をくらはす。九平次、恟りして

九平　アイタヽヽヽ。猪口才な、何さらすぞい。

德兵　イヤ金の事や曼陀羅の目論見事、その上にまだ、アノ、お初を。

ト 云ひながら、また打つてかゝるを、立廻つて、金剛杖を引ッたくり

九平　何さらすぞい。

ト散々に打ち据ゑるを

はつ　こりや徳さまを

ト寄らうとするを、彌助、隔てゝ

彌助　ドッコイ、さうはさゝんわい。

ト引ッ捕へる。

九平　オヽ、コリヤ彌助、おりやこの泥坊を、泥田へ蹴込んで來る間、必らずお初を手放すなよ。もし又長藏めがうせて手に餘らば、法螺貝吹いて知らせい。直ぐに出て來る程に、合點か。

彌助　オヽ、合點ぢや。早うその泥坊めを片附けて來い。

九平　オッと、呑み込んだ。サア、うせやがれ。

〽小腕捩ぢ上げ無理矢理に、引ッ立てゝこそ驅け行く。

はつ　ヤア、徳さまを。

ト行かうとするを、彌助、引ッ捕へて

彌助　イヤ、滅多にわれを逃がしてよいものか。九平次から預かつた大事の代物。手放してならうかい。

はつ　イエ／＼、わたしは

ト振り切り、行かうとする。此うち、長藏、出て來る。

ヤア、長さんか、遲かつた／＼、遲かつたわいなア。

長藏　遲かつたとは、そりや何が。

はつ　サイナア。いとしほさうに徳さまを、あの彌助と九平次が、踏んだり叩いたり。まだその上に、借つた金を借らぬと云ひ、誠の曼陀羅を似せ物と摺替へ、金を戻せと無理ばつかり。殊に徳さまを、いま九平次めが、引摺つて行たわいなア。

長藏　ヤア／＼、こりや斯うしては居られぬわい。

〽行かんとするを隙を見て、さうはならぬと取りつく彌助。

彌助　長藏、われを。

ト起き上がつてかゝるを、立廻つて、締め上げ

長藏　コリヤ彌助、曼陀羅を摺替へたは、おのれが細工であらう。昨夜の泊り、宿屋でチラリと見附けたは、慥かに誠の曼陀羅に違ひない。キリ／＼そこへ、出しさらせ。

彌助　エヽ、そんな事おれが、知らうかい。

長藏　知らぬと吐かしや、手短かに。

ト懷へ手を入れるを、振り切り

彌助　何を猪口才な。

へ叩きかゝれば強い潜り、はずみに蹴返す向ふ臑、躓く所を乗りかゝり、懐捜せど曼陀羅は。

長蔵　ヤア、こりやいつの間に曼陀羅をこかした。大方九平次が持つて居ろ。サア、有やうに吐かせ。

彌助　へ、、そんな事は、おりや知らんわい。

長蔵　知らんと吐かしや、締め上げても云はすぞよ。

彌助　大きな事吐かしてけつかるわい。おれも道具屋の彌助と云うて、小口の一つもきく者ぢやわい。心安う締め上げるの、こち上げるのと、おのれが内の醤油搾るやうに、吐かしてけつかるわい。

長蔵　ムウ。さう吐かしや、もう締め上げにやならんわい。

彌助　ハ、、、、まだ吐かしてけつかるわい。如何に口の端に御番所がないと云うて、締め上げるも凄まじい。さらして、こりやマア、どうして締め上げるぞい。われが二本の手を出す間に、おれが手は何して居やうぞい。引ッ縛つて伊勢参りさすか、但し西国でも廻らさうかい。茲な鼻垂れめが。

長蔵　オ、、そんなら斯うして。

ト彌助の胸倉を取るを

彌助　エ、、、、何するぞい。人中ぢや。人が見て居るわい。男の胸倉取つて見つともない。爰放せ。エ、放しさらせ。

長蔵　イヤ、滅多にや放さぬ。サア、これでも吐かさぬか。

ト締め上げる。彌助、こなしあつて

彌助　ナ、、なんぢや／＼。コ、、、この位で締上げるやうな、彌助ぢやないわい。

長蔵　エ、、去死太い。キリ／＼吐かせやい。

彌助　ムウ、、コ、、、、今度はちつとばかり、こたへてけつかるわい。

ト顔をしかめながら、強い顔して

けれど、こんな事で、締上げやせぬ。

長蔵　忌々しい。ちやつと吐かせ。アノ、箪笥めが。

トまた締め上げる。彌助、苦しがり。

彌助　ア、コレ／＼、そないに締めたら、死ぬる／＼。落ちます／＼。

長蔵　サア、吐かせ。

彌助　サア、云ふ／＼。ちいと緩めて／＼。

長蔵　オ、、そんなら緩めてこますワ。サア、吐かせ／＼。

彌助　ハイ〳〵。ア、マア、如何にわしが道具屋ぢやて、わしの事を簞笥とは、長持は赦しておくれさい。とうからモウ、湯桶か〳〵と思へど、斯う責め上げられてからと云ふものは、涙が幽々とこぼれるわいなア。

長藏　エヽ、なまたれて、何とて吠えるのぢやぞい。キリキリ吐かしやアがれ。

彌助　アヽイタヽヽヽヽ、そないに面張るない。お前、締めたり張つたり、えらう上手なら、三味線屋へ奉公に行かんせんかいなア。

長藏　エヽ、何吐かすぞい。早う吐かせやい。

ト また締め上げる。

彌助　アヽ、サア〳〵、申しまする〳〵。ぬかちまちよう、ぬかちまちよう。コヽヽ、この指を、ちいと折れ合うておくれ、咽喉の佛様が潰れる。どうぞ、この指を、ちつとばかり折れ合うておくれ。ハイハハハイ〳〵、オヽ、しんど。お前、アノ、えらい爪ぢやなア。ちつと風呂へ入つた時、爪を取らんせ。

長藏　何吐かすのぢやぞい。ちやつ〳〵と吐かさぬかい。

彌助　ハイ〳〵〳〵。成る程その曼陀羅は、九平次が持つて居る。

長藏　して、その九平次は。

彌助　ムウ、アノ、九平次か。

長藏　九平次は。

彌助　九平次は九平次で、九平次が九平次ぢや。

長藏　エヽ、何吐かすぞい。サア、吐かせ。

彌助　ハイ〳〵、わりや九平次に逢ひたいのぢやな。

長藏　わりやとは舌長な。

ト 又くらはす。

彌助　ハイ〳〵、わりやで氣に入らにや、あなた、あなた九平次に逢ひたいのぢやな。

長藏　オヽ、さうぢや。

彌助　九平次に逢ひたくば、そこにある。ホヽヽ。

長藏　なんぢや。ホヽとは。

彌助　アイ、あの法螺貝を吹くと、戻つて來る約束ぢやわいの。

長藏　オヽ、よう吐かした。ドレ、そんなら。

ト 手を放すと、彌助、直ぐに掴みかゝつて來るを、立廻つて、捻ぢ伏せ

ア、コレ〳〵、初さま、そこに法螺貝がある筈ぢや。取つて來た〳〵。

はつ　アイ〳〵。
　トあたり見廻し、最前の法螺貝を取つて來て
　アノ、これかいふなア。
　ト見せる。長藏、彌助を捻ぢつけながら。
長藏　オヽ、これ〳〵、おりや此奴を締め上げて居るゆゑ手が放されぬ。お前、そこで、ちやつと吹いた〳〵。
はつ　アイ〳〵。斯うかいなア。
　〽云へばお初が取上げて、吹くとも〳〵音は出でず。
　エヽ、つッとモウ、こりや根から鳴らぬわいなア。
　ト長藏、それを見て
長藏　エヽ、鳴らん筈ぢや。そりや逆樣ぢやわいなう。エエ、不器用な。早う吹かんせ〳〵。
はつ　アイ〳〵。
　ト法螺貝を持ち直し、吹いても鳴らぬこなし。
　オヽ、辛氣。三味線ならよう鳴らすけれど、こんなおかしい物は、わしやよう鳴らさぬわいなア。
　トこなし。長藏、見て
長藏　エヽ、埒の明かぬ。
　ト行かうとする。彌助、おこづくゆゑ
　そんなら、おれの口へ當てがうて下んせ。

はつ　アイ〳〵、斯うかいなア。
　〽長藏が、ほつと一息吹き鳴らせば、合圖の法螺と思ひけん、九平次は取つて返し、この體を見て
九平　彌助、合圖の法螺貝は。
　ト云ひながら、長藏と顏見合し
九平　ヤア、わりや長藏か。
長藏　オヽ、嬉しや九平次め。
九平　さてはうぬが。
彌助　加勢ぢや〳〵。
九平　オヽ、合點ぢや〳〵。
　トかゝるを、三人、立廻り。此うちお初、ウロ〳〵してゐるを見て
長藏　コレ〳〵、お初さま、お前は爰構はずと、德兵衞さまの身の上が心元ない。早う行かんせ〳〵。
はつ　この樣子を德兵衞さんへ。
長藏　ちつとも早う。
はつ　アイ〳〵〳〵、さうぢや。
　〽こけつまろびつ德兵衞を、慕ひ行くこそあやなけれ。
　トお初入る。
長藏　サア、九平次、德兵衞さまの仕返し。又われが持つ

て居る詠の曼陀羅、キリ〳〵表へ出してしまひ、

九平　エヽ、面倒な。さう吐かしやア、四の五の云はず、彌助、合點か。

彌助　オヽ、疊んでしまふのぢや。

長藏　何を猪口才な。

〽三人を相手に長藏は、叩き合ひ〳〵。

ト兩人を相手に、立廻り。長藏は九平次の懐へ手を入れ。曼陀羅を出さうとする。彌助、支へる。誂らへの面白き鳴り物になり、トヾ、曼陀羅を引き出し、取り合ひながら、九平次、引ッたくり、駈け出す。これにて花道より、場の中を廻り、いろ〳〵追ひ廻り、立廻りあつて、皆々、草臥れるこなしあつて、本舞臺にて突き合ひ、息の切れたる模様、をかしみの立廻りあつて、三人ともうつとりとなり、思はず三人、顔見合し悧りして、また曼陀羅を取り合ふ。

〽迫り合ふうちに九平次が、からりと落す曼陀羅と、それはと立寄る長藏を、支ふるうちに駈け出す先達。

トよろしく立廻つて、チョンと木の頭。賑やかなる鳴り物にて

ト鳴り物、替つて、三人立廻りながら、幕外へ出て、トド、長藏兩人の髻の毛を、兩手に持ちながら、向うへ入る。

大切　敎恩寺村の場

役名　平野屋德兵衞。同女房、お北。天滿屋お初。醫者、野中の彌造。天滿屋卒助。女房、お樂。淺田宗次。

造り物、向ふ一面の淺黄幕、その前草土手、菜種畑の模樣、幕の内より、在所娘三四人、畑仕事して居る。この見得、よろしく、在鄕唄にて、幕開く。淨瑠璃。

〽苗を造りの堤端、娘が口々小唄節、在所鶯藪醫者の、人の命を、助ける人事、我が方寸の匙加減、山の禰宜野中の彌造。

ト在鄕唄になり、橋がゝりより、彌造、慈姑頭、田舍醫者の形にて、出て來り、皆々を見て

彌造　ヤア、これは〳〵、お内儀達、打揃うて、よう精が

出ますなう。さて、この中は、とんと煩らはぬが、ても
さても、意地悪う達者過ぎて、近頃氣の毒千萬ぢや。ち
と煩らうて見やつしやらぬか。
さよ　エヽ、何を云はつしやるやら。達者過ぎたら何が氣
の毒。煩らはぬに越した事があるものかいなア。
娘一　それ〳〵、兎角百姓は達者でないと、内がいけぬわ
いなア。ナウ、皆の衆。
娘二　オヽ、さうぢや〳〵。殊にこちらのやうな女夫暮ら
しの世帯は、どちらが煩らうても人手はなし、勝手は惡
し
皆々　一生煩らはいでもよいわいなア。
彌造　イヤ〳〵、それでは、其方はよからうが、此方が惡
い。なぜと云はつしやれ、村に病人がないと、第一この
名醫者が立たぬわい。せめて流行り風でも引いてくれる
とよいのに、今年ほど陽氣のよい年はないわい。イヤ、
それはさうと、長太の娘衆、どうぢや、痛も發らぬか。
さよ　サイナ、後の月から、とんと癪氣は、忘れたわいな
ア。
彌造　ホイ、しまうた。忘れいでもよい事を。イヤ、その
忘れたで思ひ出した。其方の亭主長太どのが、先度疝氣
で惡かつた時、おれが藥を服んだが、後の節季に書出し
遣つたに、まだ其まゝで、算用が濟まずにあるぞや。
さよ　エヽ、何を云はしやるやら、そりや疾に濟んである
がな。
彌造　ヤア、そりやいつの。
さよ　ソレ、後の三月の節句の日、葱が十把と牛蒡二把、
へ、此方の長太どのが畑から、直ぐに持つて行かれたが
の。
彌造　アヽ、コレ〳〵、そりや何を云やるのぢや。五十服
も藥服んで、牛蒡やねぶかで、帳消しせられて堪るもの
か。十二文の藥にしても、七百二十四目、卑劣に藥代を
催促するではなけれども、其方の冥加が惡からうぞや。
さよ　イヤさう云はしやんすりや彌造さま、此方も云はね
ばならぬわいな。コレ、主の留守に、なぜわしの手を
握らんしたえ。
彌造　ハテ、手を握つて脈を見るは、醫者の商賣ぢやわい
なア。
さよ　サア、そればかりぢやないぞえ。わしが否と云ふも
のを、無理に引轉ばして、腹撫でゝやらうと云うて、惡
てんがうさしやんした事、此方の主に云はうかいなア。

彌造　ア丶、滅相な。そんな事云うて堪るものか。

嫁一　おさよさま、お前ばかりぢやないぞえ。此方の内へ來ても、兎角手癖の惡いお醫者どの。

嫁二　それ〳〵、女さへ見ると、いつでも腹を撫でたがつて、氣味の惡るい事だらけ。

彌造　ア丶、さう口々に云はいでも、よいわいなう。

さよ　イエ〳〵、お前が今のやうに云はしやんすりや、云はにやならぬわいなア。何が五十服の藥ぢやと云うて、大事の生娘まで附けて遣つてよいものかいなア。

彌造　ア丶、もうよいわいなう。

さよ　そんなら、藥代は濟んであらうがな。

彌造　サア、それでも。

嫁一　そんならまだ云ひ分があるかえ。

彌造　サア、それは。

嫁二　主へ今の事云はうか。

彌造　サア。

さよ　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

きよ　彌造さま、グツとでも云うて見さんせ。

皆々　どうぢやぞいなう。

彌造　ホイ、ア丶、しまひ〳〵。好事門を出でず惡事千里を走るぢやよな。

　トむづかしう云ふ。

皆々　エ丶、なんの事ぢやぞいなア。ハ丶丶丶。

〽口喧ましき在所嫁、云はれて何も茶稗爛、息急き來るは、淺田宗次が女房お樂。

　トまた在郷唄になり、橋がゝりより、お樂、出て來る。

らく　オ丶、これは彌造さま、爰に居さつしやりましたか。只今お前樣の所へ參りましたところが、お留守と聞いて、すご〳〵戻りました所、丁度よい所でお目にかゝりましたなア。

彌造　オ丶、さうであらう。大方こなさんが呼びにござるであらうと思うたゆゑ、こちらから出掛けて來ましたわい。

さよ　オ丶、こりや誰れかと思うたら、宗次さまの所の小母樣。さうして、御病人はちつとよいかえ。

嫁一　誰れしも覺えのある事、男が煩らうてみると、とんと仕事が出來ぬ上、物入りは多し、女房はこつぱい。

嫁二　それ〳〵、醫者どのへ奉公するやうなもので、藥と

首ッ引き。

さよ　シタガ、定めて介抱で、えらうござんせう。随分疲れの出ぬやうに

皆々　氣を附けさんせい。

らく　アイ〳〵、これはよう深切云うて下さる。忝ならござんす。さうして、マア、お前方は、仕事はもうしまひかえ。

皆々　アイ、やう〳〵の事で片附いたわいなア。

らく　そりやマアようござんすなア。早う去んで、ゆつくりと休まさつしれ。

さよ　サア、今日は日和もよし、天王寺さまへ參つて來うと思うて、朝疾から一息にやつたわいなア。

嬶一　さうしてマア、お前、彌造さまの所へ行かしやんしたさうなが、宗次さまなら格別、必らずお前は針などしてもらひなえ。

嬶二　それ〳〵、どんな手むごい療治しられうやら、知れんぞえ。

さよ　ほんにマア、顏に似合はぬ

　ト顏見合せ、こなしあつて

皆々　お醫者樣ぢやわいなア。ハヽヽヽヽ。

さよ　サア〳〵、去にませう。

　ト捨ぜりふにて、橋がゝりへ入る。

〽我が家〳〵へ立歸る。

　トあと合ひ方、こなしあつて

彌造　ハテ、三人寄れば姦しいと譬への通り、別してあの嬶衆ほど、口喧しい女子はない。氣のぼりがするやうなわい。ハヽヽヽ。イヤ、時にお藥どのや、宗次どのは今、人參の力でなけりや、所詮本腹は、むづかしいが、と云うて大枚の金を出さねば、人參は手に入らず、人參を用ひねば命は危ふし。アヽ、何にしても氣の毒な事でござるわいの。

　トこなし。

らく　サア、それゆゑにいろ〳〵と、心配いたしましたところが、天道樣のお助けで、その人參が調ひましたゆゑ、只今あなたの所へ參つたのでござります。

彌造　ナニ、そんなら、その人參が調ひましたか。

らく　この通り、御覽じて下さりませや。

　ト口卷の藥を出す。

彌造　ドレ〳〵。

　ト取つて見て

ヤア、こりや朝鮮の大人參。しかも目方が三兩餘り、大枚の金高。どうしてこの人參が調ひましたなア。

ト云ひながらお樂へ戻す。

らく　サア、これに就いては何やかや、たんと樣子のある事。それに附けてもこちの人。宗次どのと云ふは、御存じの通り堅苦しい氣質、殊に段々、年も取つたれば、いつまで生きて居ても同じ事、もう藥も入らぬ、必らず服ましてくれるなと、思ひ切つて居られましたが、どうぞしてま一度達者にしたいと、病人にも隱して、私し一人が心遣ひ。

トこなし。

彌造　オヽ、さうでござらう〳〵。シタが、夫婦仲とて、よう深切に介抱さつしやるなう。

らく　ハテ、何をするのも夫が大切。さうしてマア、この人參さへ手に入りましたら、あの病氣は愈々本服いたしますかえ。

彌造　ハテ、そりや氣遣ひさつしやるな。この彌造が、今に匙加減で、命は取りとめますわい。

らく　エヽ、忝なうござります。兎角お前樣が便りでござりまする。

彌造　オヽ、さうぢやわいの。元の通り達者にして見せます程に、丈夫に思うて居さつしやれ〳〵。

らく　アヽ、嬉しや。それ聞いて落ちつきました。

ト詞が力、病人より、お樂が病、折りこそあれ、中町の天滿屋幸助、お初を尋ねるすた〳〵足。

ト在鄕唄になり、上の方より、親方幸助、着附け、合羽がけ、男を二三人連れ、出て來りて、お樂を見て

幸助　なんでも片ッ端から、尋ねて見よう。イヤ、卒爾ながら、こなさん、ちよつと物が尋ねたい。外でもないが昨夜大坂から、天滿屋お初と云うて、曾根崎新地のお山を引いて出た、年の頃は二十四五な、色白な男、もしや二人連れで、爰らあたりへ來はしませぬかの。

らく　イエ〳〵、わたしは心當りはござりませぬが。

幸助　ハテナア、慥か此あたりへ來たと云ふ事ぢやが、今この村はづれの一軒家で尋ねたら、病み惚けた親仁が一人居て、何を尋ねても、とんと埒が明かなんだが、どこぞでしつかりと聞きたいものぢやが。

らく　アヽ、申し〳〵、その一軒家と云ふは、私しが内ちやわいなア。

幸助　ヤア、そんならあの病人と云ふは、こなた樣の御亭

主かの。
らく　ハイ、左様でござりまする。
幸助　ヤレ、こりや粗相申しました。料簡さつしやれ。これぢやに依つて、迂濶に物は云はぬと云ふに、わいらが喧ましう云ふに依つてぢや。ちと嗜め〳〵。
らく　エヽ、何を云はつしやりますぞい。お前があわてさつしやるからぢや。
幸助　エヽ、どこにおれがあわてゝ居るぞい。おりや生れ附いてきよとぢやと云はれたが、まだあわて者とは云はれぬが。
男一　エヽ、そりや同じ事ぢやわいなう。ハヽヽヽヽ。
幸助　よい〳〵。わいらがさう云や、これから氣を落ちつけて尋ねて見せう。併し、どこらを尋ねようぞ。
　ト手を組み、こなしあつて、ト彌造を見て
オヽ、幸ひぢや、コレ、山伏どの、ちよつと走り者ぢや。方角が見てもらひたいが、見て下さらぬか。
らく　アヽ、これは又滅相なお人。このお方は山伏ぢやない、醫者どのぢやわいの。
彌造　アヽ、イヤ〳〵、氣遣ひさつしやるな。愚老ことは醫者もやらかす、占ひもずんと先取りで三十二銅、それ承知なら考へて遣はしませうわい。
幸助　オツと、三十二銅、合點ぢや、待たんせ〳〵。
　ト錢を出す。
〽云ふにお藥は氣の毒さ、をかしさ隱して。
らく　彌造さま、後方お見舞ひなされて下さりませ。わたしはマア、お先へ。
彌造　オヽ、ようござつた。いづれ後刻、お見舞ひ申しませう。
らく　おさらばでござりまする。
　トこなしあつて、上手へ入る。
〽挨拶そこ〳〵歸りける。後に彌造は仔細らしく。
幸助　サア〳〵、ちやつと見て下され〳〵。ソレ、先錢三十二文、不足はないぞや。
　ト錢を渡す。彌造、取つて
彌造　ドレ〳〵、待たんせ〳〵。
　ト錢を懷中へ入れ、こなしあつて
イデ、考へて遣はさう。
〽小石拾うて卽座の投げ算。
　トあたりの小石拾うて、投げて見て、こなしあつて
ハヽア、死の卦が現はれた。さては、こりや心中して死

ぬると見えるわいの。
幸助　エ、、なんぢや、心中ぢや。
男一　こりや縊體ぢや。
幸助　どうしたらよからう。心中ぢやとやい〳〵。
　トうろ〳〵する。
彌造　サア〳〵、あわてさつしやるな〳〵。シタガ、總體易と云ふものは、變化するものなれば、この卦を今一遍變じて、轉き直して見ると惡しき事も善となるまいものでもござらぬが、今一應考へ直して見る氣はないかの。
幸助　イヤモウ、變化とやら變替へとやらで、惡い事がよいやうになる事なら、早う見て下され〳〵。
彌造　オッと、そこは只はいけぬ。見料も三十二銅の變化するに依つて、六十四銅、それ合點か。
幸助　イヤモウ、六十四銅位で心中の助かる事なら、ソレ六十四銅。
　トまた錢を渡す。彌造、取つて
彌造　オッと、よかもの〳〵。
　トまた小石を投げて見
ハ、ン、誠に爭はれぬもの、今度は裏の震が現はれたが、この卦の面は、卽ち親方の巽の卦でござる。

幸助　ヤア〳〵。エ、、緣起の惡い山伏どの。さうして方角は、西か東か南か北か。それが開きたい〳〵。
彌造　なんぢや方角か。こいつ大分むつかしいが、方角が開きたくば、これ又見料百銅ぢやが、貴公、持合はせはまだあるかの。
幸助　ソレ、百銅ぢや。
　トまた錢を出す。彌造、取つて
彌造　オ、、よかもの〳〵。然らば考へて遣はさう。今度は百銅だけに一入念を入れて。
　ト空手水を使ひ、いろ〳〵とこなしあつて
その方角はの。
　ト小石を拾ひ、數を讀んで居る。
幸助　どこぢやの〳〵。
彌造　サア、その方角は、コレこの石。
〽摑んではら〳〵。
飛んだ所が卽ち方角。
〽滅多無性に投つたる、石は落ちて前なる溝。
ヤア、南無三、さてはこりや身投げて死んだと見えるわい。
皆々　ヤア〳〵〳〵。

彌造　詮議の目當は、丑寅と未申、どうやら遠くは行くまい。東海道、跡を慕うてお尋ねなされ。
幸助　云ふにや及ぶ。ちつとも早う。
彌造　おさらばでござる。
〽錢懷へ着服し、おのが住家へこそ〳〵と、足早にこそ立歸る。跡に親方口あんぐり。
幸助　こいつはえらい事になつた。併し、なか〳〵空腹では行かれぬ。二人とも、八十文盛りの茶碗で一杯入れて行かう。皆來い〳〵。
〽闇に礫の小石原、踏み立てゝこそ
　ト二重になり、幸助、先に、男、附き添ひ、向ふへ走り入る。返し。
造り物、三間の二重、見附け、赤壁、納戸口の方、折り廻し障子屋體、橋がゝりの方、塗垂れ塀、いつもの所に藁屋根の門口、すべて百姓屋の飾りつけ。
この見得よろしく。返しにて
〽行く道は、水の出花の一盛り、粋のしまひは斯う果てにや、ならぬ二人が大坂を、跡に見なしてとぼとぼと、戀の初旅着たまゝの、昨夜は野邊に夜を明かす、淺茅が原の霜柱、一足づゝに消えて行く、夢の果こそ果敢なけれ。德兵衞は稍立ちとまり。
　トばた〳〵と向うより、お初、德兵衞、着流しにて、頰冠りにて、走り出て、花道中所にて。こなしあつて
德兵　コレ、お初、もう爰まで來れば、滅多に見附けられはせぬ。ちつと休んで行かうではないか。
はつ　イヤ、申し、德兵衞さん、今日と云ふ今日は、ほんの女夫でござんすぞえ。さうして、マア、お前の心當りの、落ちつく所はどこでござんすえ。
德兵　サア、おれが心當りの落ちつく所と云ふは、有やうはどこもない。
はつ　エ、。
德兵　マア、斯う何かなしに出て見たばかりぢやが、して、わが身の心當りと云ふのは。
はつ　アイ、私しが心當りと云ふのはなア。
〽西方彌陀のお國より。
外に當はござんせぬわいなア。
德兵　ハテ、さう短氣に思やんな。どこでなと二人一緒に世帶するわいなう。さうして、其方の懷に金があるかや。

はつ　アイ、爰に持つて居る鏡袋に、一兩が三つでござんす。

德兵　ムン、三兩あるか。銀に直して四十五貫。おれが懷に昨夜の遣ひ殘りの、小玉が七貫餘り。兩方合はして五十四貫あるが、所でこれを三百六十日に割つて見れば、先づ三ちんが一ちん、一ん六と……ハヽン、丁度一日に一分五厘暮し。なんにも食はずに居れば、一年は心よう暮されやうと云ふもの。ハテ、何も氣遣ひしやんな。なんの浮世は一分五厘。マアそれよりも爰な内で、一服のんで行きませう。

はつ　アイ〳〵。

德兵　イヤ、御無心ながら、煙草の火を一つお貸しなされて下さりませ。

ト門口明ければ納戸より。

らく　アイ〳〵、お安い事、マア〳〵、こちらへ、お入りなされませ。

ト愛想もよく煙草盆、持ち出る門口、德兵衛を見て悔り。

ヤア、さう云はつしやるは、德兵衛さまぢやござりませぬか。

德兵　エヽ。

トこれにて悔り、お樂を見て

ヤア、あなたは昨日逢ひました

らく　ハイ、お北が母でござりますわいなう。

德兵　オヽ、ようこそ尋ねて來さつたの。定めて親仁どのゝ病氣見舞ひでござりませうなう。

德兵　そんなら爰が、ハテナア。

ト思ひ入れあつて、また氣を替へ

イヤ、昨日お目にかゝつてから、如何にしても氣がかり。殊に大事の親どのゝ事なり、お近付きにならずに居ても、濟まぬ事と存じますから、取りあへず

トこなしあつて

お見舞ひに參りましてござります。

ト思はず出合ひの挨拶に、拔かぬ太刀の孝行かと。

らく　それは〳〵、遠い所をわざ〳〵と、よう尋ねて下さつたの。さうして、見れば女中のお連れがあるが、アア、聞こえた。さては女夫連れでござつたのぢやなア。

トいそ〳〵して、お初を見る。德兵衛、チツとこなして

德兵　ハイ、左樣でござります。

らく　そんなあれが、娘のお北でござりまするか。ヤレヤレ、懷かしや〳〵。ようマア、連れて來て下されましたなア。

〽ほた〳〵喜ぶ間違ひに、さうでないとも云はれもせず。

徳兵　エヽ、成る程お北。

　ト お初の顏を見る。お初もいろ〳〵とこなし。

イヤサ、コレ、これが女房のお北。あなたがわが身の阿母ぢやぞよ。

　ト いろ〳〵仕方して、吞み込ます思ひ入れにて

ナウ、お北。

はつ　エヽ。

　ト 徳兵衞を見る。徳兵衞、押へながら

徳兵　イヤサ、北々、北のナ、ソレ、來た所が親の內ぢやと思うて居や。ナ、コレ、合點がいたか。

らく　それ〳〵、在所の事ゆゑ、見苦しうはあれど、眞實の親の內ぢや程に、遠慮なう、サア〳〵、內へ入りや入りや。

　ト 屋體へこなしあつて、門口へ出て、お初を見て、嬉しいと云ふこなしにて、姿を見る。お初も辭儀して居る。

てもマア、大きうなりやつたなう。しかも好い女房ぢや。藁の上から遣つた娘に、この間は判りなう無心を云ひましたに、八ケ年が間音信せぬ、むごい親ぢやと恨みもせず、よう用立てゝたもつたなう。シタガ、義理堅い親父どの。わが身の方から人參が來たと云うてに、いま死ぬると云ふまでも、なか〳〵人參は服まつしやれぬ昔氣質。そこを思うて、そなたに無心云うた事は、病人には隱してある程に、いま逢うても云ひはしませぬ程に、さう思うてたも。その代り、コレ、爰でわしがくれ〴〵も禮を云うて置きますぞえ。

　ト 喜ぶこなし。

アヽ、ほんに娘は持たうものぢやと、今の今までも心の內では、神佛とも思うて拜んで居りました。アア、忝ない、忝ない。

〽誠娘の間違ひに、どう云うてよからうやら、只アイ〳〵と口籠る。

ドレ〳〵、親仁どのに引合はして、早う顏見せて喜ばしませう。ちつとの間、爰に待つて居や。ドレ、知らして來うか。

〽いそ〳〵とつかは走り入る。跡には互ひに顔見合せ、お初は猶更心ならず。

はつ　申し、徳さま、なんの事ぢやいなア。わたしや最前から、術なうて〳〵、びつたり汗になつたわいなア。

徳兵　サア〳〵、おかしい工合になつた。おれもハラ〳〵思うたが、よう考へて見りや、いつそ勿怪の幸ひぢや。どこまでもわが身をお北にして、何くはぬ顔で今夜一夜、爰の内に泊つて、又その上で、どんな好い思案が出やうも知れぬ程に、なんであらうと儘よ、おれ次第になつて居やいなう。

はつ　それぢやと云うて、わたしやそんな事が。

徳兵　ア、コレ。

　トこなしあつて、ちよつと囁く。

〽囁き互ひに工合して、奥の病間の反古貼り障子、骨あらはなる彼の親仁、痛み煩らうても小七首、撓り放さぬ浪人気質、小蒲團に寄りかゝり。

　ト障子屋體を開く。内には宗次、切繼ぎ、病ひ鉢巻にて、蒲團に靠れ、お藥、附き添ひ居る。宗次、こなしあつて

宗次　お客人、お通りなされ。

らく　徳兵衞さま、宗次どのがお目にかゝらうと申されます。ちやつと爰へ。

徳兵　ハイ〳〵、サア、お初。

　ト思はず云はうとして、フト心附いて

イヤ、何も恥かしい事はない。わが身の親仁様ぢや。サアサア、お側へ、早う來や〳〵。コレ、お北。

〽無理に手を取り、伴ひ入れば、懐かしげに打ほゝ笑み

宗次　ついに御意得た事もない、平野屋徳兵衞どの、病中なれば御免あれ、して、あれがお北ぢやなア。

らく　宗次どの、なんと好い器量でありませうがの。

宗次　オヽ、氏より育ちと、なか〳〵美しう生ひ立つたな。生れ落ちると其まゝ、音信不通に遣り切つた娘なりや、今では此方の縁は切つてあれば、徳兵衞どのとも何でもない、赤の他人の宗次を、よう見舞ひに來て下さつたの。兎角女は顔形より、心入れが猶大事。云ふまでもないが、今の兩親、久左衞門どの御夫婦へ、孝行が第一、次に内の取締り、商人の女房には、ちと形が派手過ぎる。櫛も木櫛を差したがよいぞや。とくと合點か。

〽我が子を思ふ眞實の、意見もきよろりと疊の目、讀んで俯向くばかりなり、徳兵衞、爰ぞとまめ〳〵しく。

徳兵　お近附きにはならねども、お北が親に逢ひない其許様、徳兵衛が為には、眞身の舅姑御と云ふは、お二人様より外にはない。コレ、お北、エ、、お北、今のお詞、有り難い事ではないか。親の大恩、必らず必らず、、ナ、コレ、忘れまいぞや。

ト　いろ〳〵こなしあつて云ふ。お初も、こなしあつて

はつ　アイ〳〵、ほんに不思議な御縁で、思ひも依らぬ父様母様の御意見、妙見様かけて、お嬉しうござります。さうしてマア、おいとしい、きつうお窶れ。オ、、さうして、さうぢや、爰に結構なお守がござんすが、いつそそれをお頂かせ申しませうかいなア。

徳兵　オ、、それは幸ひぢや。さうしてその守は、どこのお守ぢやな。

はつ　アイ、こりや、アノ、お客に貰うて

ト　思はず云ふを、打ち消し

徳兵　ア、、コレ〳〵、お客とは。エ、、なにか、そりや、オ、、さうぢや、アノ、新客のお土産か。それなれば山上様のお守りぢやの。そりやあらたかな物ぢや程に、ちやつとお頂かせ申しや。早う〳〵。

はつ　アイ〳〵。

ト　鏡袋より、守を出す。徳兵衛、取つて

徳兵　ドレ〳〵、おれがちよつと。

ト　宗次の側へ持つて行く。

〽女郎の手から山上のお守、これもお山の縁なれや。

ト　此うち、宗次、お守を戴き

宗次　オ、、過分々々。大事のお守、ソレ、神様へ上げて置いて下され。

らく　ハイ〳〵、心得ました。

ト　こなし。

宗次　オ、、御苦労々々々。さぞ今日は草臥れさつしやつたであらう。マア、一寐入りされたがよいて。

徳兵　アイ〳〵、私しよりは御病人のお前様、先づお寝になりなされませ。ちとお腹でも擦つて上げませうか。

宗次　フム、すりや其許には、醫道の心掛けもござるかなう。

徳兵　ハイ、どうでしまひは按摩痃癖でもせざなりますまいと、兼ねて心掛けて置きました。

宗次　何を云はるゝやら。

兩人　ハ、、、、、。

〽思はず知らず云ふ事も、心にかゝる目にかゝる上氣と

お樂が氣を附けて。

らく　オヽヽソレ、その上着は、どうして、マア、其やうに綻びてござるな。なんぼ近旅でも、ほんに滅相な。人が見ては見とむない。コレ、お北、其方も氣の附かぬ、男にあのやうな形をさして置くと云ふ事があるものか。ドレ、つい縫うて上げう。ちよつとの間、脫がつしやれい。

德兵　エヽヽ滅相な。イヤ、大事ござりませぬ。

トこなし。

らく　ハテ、內では大事ないが、外へ出ると見苦しい。直ぐに縫はれる事、何も遠慮はない。サア〳〵、ちよつと脫がつしやれ。

德兵　左様なら憚りながら。

ト上着脫ぎ、下着ばかりになる。

らく　オヽヽそれでは風引かつしやらう。親仁どのゝ古着なりとその上から。

ト立ち上がるを、留め

德兵　ア、イヤ〳〵、これでようござります。滅多に風引く事ぢやござりませぬ。

ト云ひながら、下着の上へ帶を締めて

左様なら、お慮外ながら。

ト上着を差出す。

〽詞で脫がす上皮一重、脫ぐも男の氣を兼ねて、ぬめであしらふ二重帶。

イヤ、私しより御病人が、お風が當らば惡うござります。ドレ、一療治してあげませう。

〽立て切る障子こなたには、在所女房の堅苦しく、昔細工の針箱取出し。

ト合ひ方になり、お樂、針箱、出して來て

らく　コレ、お北や、もう飯は炊いてあるし、これから浸しの高菜の葉を揃へるばかり。わしやちよつと揃へて來る間に、其方は爰で、その綻びを縫うて置きや

はつ　エヽ。

ト悸りする。

らく　糸も針も、爰に入れてあるぞや。

ト針箱を側へ差出す。

ほんにマア、よい時によう來てたもつた。親仁どのゝ一重羽織を、この間洗ひ張りして、縫はうと思うて仕掛けて見たが、恥かしいが在所の手づゝ。羽織の縫ひやうを知らぬわいなう。丁度幸ひ、この手次手に針留めして、

仕立てやうを教へてたも。
〽教へてたもと、突きつけられても里育ち、知らぬ縫ひ針手に取るは、今がお初と云ふ事を、但しは知つての探りかと、胸に針持つばかりにて、立つとも分かぬ思案顔。
イヤナウ、何よりは女夫仲がよいさうで、めでたいめでたい。かうして見りや、もう鐵漿も附けて居やるからは、内祝言は濟んだと見えるに、まだ眉を取りやらぬは、さては表向きの披露目はまだぢやなう。取分け聟どのは好い男ぢや。母が惡性根附けるぢやないが、美男は政道が大事ぢや。殊に大坂は色所なり、得ては外で色事の出來るもの。こりや女房の油斷からぢや程に、コレ、かんまへてその通りに、いつも〳〵、どこへ行くのも、連れ立つて行て、必らず〳〵手放さぬがよいぞや。
ト此うち、お初、着物を嬲つて居る。
大方綻びも縫へたであらうなう。ドレ〳〵、見しや。
ト着物を取つて見て
オヽ、これはしたり、まだかいなう。オヽ、それもさうかえ。こちらが木綿物仕立てるのとは違うて、上びた絹物は隙入る筈。
ト云ひながら、側にある鏡袋を取つて見て
アヽ、大坂の衆と云ふものは、ちよつと出るにも延べ鏡持つて、さうしてこの袋の裂れは、結構な裂れぢやの。
ト繰返して見て、中を開けて
中に何やら、書附けが入れてあるの、なんぢや。
ト日柄帳を出して見て
朔日、二日、三日……お北、こりやなんぢやえ。
ト合點のゆかぬこなし。
〽問ふは日柄の覺え割り、心に何と答へも云ひ兼ね。
はつ　サア、それは、アノ、オヽ、それ〳〵、私しが精進日でござんす。
らく　フム、旅へ出やるに、精進日の手附けを放さぬとは、オヽ、奇特な事ぢやの。
ト段々奥を見て
オヽ、こりやたんと精進日が續いてあるなう。これならもう鰹は掻くまい。ドレ、おつけなと仕掛けて置きませうか。
ト奥へ入る。
〽繕ひ物の綻び口、つゞくり兼ねる折も折、徳兵衞が家出より、西も東も平野屋の、お北も心ならざれば、もし我が親の故里へ、便りもせんと教恩寺の、在所にとぼと

ぼ尋ね來て、宗次が軒端に訪るゝ。
ト向うより、お北、町娘の形にて、菅笠を持ち、出て來る。花道にて、こなしあつて、門口へ來て
きた　ちと物が尋ねたうござります。淺田宗次さまと云ふは、內方でござりますかえ。
〽云ふ聲お初は氣も附かず。
はつ　アイ〳〵、慥かに爰の內ぢやさうにござりまする。
ト門口へ行く。
きた　そんならどうぞ、申し、大坂の內本町、平野屋のお北が參りましたと、仰しやつて下さりませ。
はつ　エ、エ。
ト大恟り、直ぐに門口閉めて、いろ〳〵こなし。
〽昔まで開かず戸をぴつしやり、內にも恟り、物音に、お樂は驅け出で。
ト納戸口より、お樂、出て來て
らく　コレ〳〵、今の物音はなんぢやぞいなう。さうしてマア、戸を閉めておど〳〵と、何を其やうに怖い事があるぞいなう。一體どうしやつたのぢや。
ト云ひながら、門口を明けて
〽何心なく戸を開けて、出づる門口、緣の端。

きた　申し、卒爾ながら、お前樣のお名は、お樂さまとは申しませぬかえ。
らく　ハイ、お樂は私しでござるが、さう云ふお前樣わえ。
きた　ヤア、そんならわたしが、母樣でござりますかいなア。
ト取りつく。お樂、恟りして
らく　ア、コレ〳〵、わしを母樣とは。
きた　ア、この中、文を下さんした、平野屋のお北でござんすわいなア。
らく　ヤア〳〵。
ト大恟り、お初はいろ〳〵心遣ひのこなし。
きた　お懷かしうござりましたわいな。
ト取りつくを振り切り
らく　ヤイ、滅多に懷かしがつて下さるな。
ト　お初を見て
ハテ、合點のゆかぬ。
ト門口をさし、不思議なこなし。
〽內へ驅け入り又恟り、差合はして二人まで、心どきまぎ德兵衞も、何事かと立ち出づる。
ト納戸口より

德兵　表が騷がしい。なんぢやぞいなう。
　ト何心なく、出て來るを
はつ　オヽ、コレイナ、德兵衞さん、來たわいなア〳〵。
　ト取りつき、こなし。
德兵　ナニ、來たとは誰れが。
　ト不思議なこなし。お初、ウロ〳〵して
はつ　アレ、表へござんしたわいなア。
　トまア見て來いと云ふ仕方、これにて
德兵　ヤア。
　ト何心なく、合點のゆかぬこなしにて、門口へ行き
〽來たとは誰れがと戶の隙間、覗いてこれも仰天し。
　ト此うち、戶の隙間より、覗いて、悑り。
ヤア〳〵、ほんにあれは。
　トまた覗いて見て、悑り。お初と顏見合し。
フム。
　ト兩人、こなし。德兵衞、當惑の思ひ入れ、お樂もこなし。
らく　コレ〳〵、德兵衞さま、こりやマア、一體、どうでござります。外にもお北、內にもお北、どちらが北やら方角が知れませぬ。これと指すが磁石の德兵衞さま、早うどちらとも云うて下さりませ。
　ト德兵衞、術ないこなしにて、もじ〳〵しながら
德兵　イヤ、斯うなつたら、この磁石の劍尖が狂うて、どちらを指してよからうやら、一向谷體でござります。
　トこなし。
〽三人はうろ〳〵顏、門にはお北が開き取つて。
きた　ヤア、さう云ふ聲は、德兵衞さまぢやござりませぬかえ。申し、母樣、お前の文でよう〳〵知つたこの在所、兩親のお目にもかゝりたし、德兵衞さまが、もしや爰へ見えはせぬかと、何やかやを思うて、尋ねて來た甲斐あつて、お初さまも一緒にか。それならば恨みも云ひたし、顏も見たし。マア、ちよつと爰明けて下さんせいなア。
　トこれを聞いて
らく　ヤア〳〵、そんなら、表に居やるのが、ほんまのお北かいなう。ドレ、そんなら、マア、內へ。
　ト門口の方へ行きかける。
〽立ち寄るお樂を病間より。
宗次　ヤレ、待て女房、必らずその戶、開けやるな。その女、內へ入れまいぞ。
　ト屋體の內より、よろぼひ出る。合ひ方になり

らく　エヽ、なんと云はつしやる、
　トこなし。宗次、こなしあつて
宗次　お薬、最前の人參、爰へ。
らく　エヽ、人參とはえ。
　ト空とぼけのこなし。
宗次　ハテサテ、なんぼう隠しやつても、娘お北の方から來た、コレ、この文の返事。拾うてとくと見て置いた。今でこそ水呑み百姓なれど、武家の禄を食んだ淺田宗次、生れ落ちると養子娘に遣はし、今では親子の縁切つた娘の手から、芥子一粒、糸一筋、申し受けうやうがない。イヤ、ナニ、徳兵衛どの、一旦のお禮は申さうが、この人參は其許へ返却申す。サ、持つて歸つて下され。先程二人連れで見えた時、あの女中が正眞のお北ならば、敷居一寸入れねども、形風俗しこなし素振り、さてはさうでないと見附けたゆゑ、一宿させるは他人向きの懇ろと云ふもの。殊に今日、中町の親方の噂に聞けば、女郎を連れての駈落ちとは、徳兵衛お初が二人の身の上。それと云ふも、部屋住みの儘ならぬは、皆金ゆゑの駈落ち、つまる所は心中して、死ぬる覺悟であらうがの。この大人參の目方は三兩、これを賣り拂へば、凡そ一貫目餘りの代物。最早我れらは老病と云ひ、年の知れた親仁が體、入らぬ命を取りとめる人參で、生え先ある二人の衆の、若い命を助かつて下され。コレ、徳兵衛どの。ヤイ、門に居る餘所の娘、產顔を見たばかりで、顔見た事はなけれども、ナ、親の心の未練さは、大坂へ行く度々には、さま〴〵と問ひ合せ、内のしだら何もかも、側に居た程聞いて置いた。久右衛門どの結構人なれど、女房が慳貪親繼婆、徳兵衛どのを追ひ出して、甥の長藏とやらんにお北を娶合はし、平野屋の家を繼がさうと云ふ惡企み。おのれも大方その長藏と、夫婦になる心であらうか。物一つ云うた事もない、この親の嫌らひに、人參くれるその心の、十分一でも徳兵衛どのゝ身の上、命大事となぜ思ひ居らぬ。明日にもお初どのと、もしもの事があつた時には、おのれはぬく〴〵生き殘り、平野屋の娘は二心な不化ものと、噂を聞いてこの宗次、嬉しからうと思ふか。その悲しさはどのやうにあらうと思ひ居るぞ。エヽ、人參も入らぬ、顔も見たうない。そこな不所存者め、早く去に居らうぞ。
　トいろ〳〵思ひ入れにて云ひ、咳き入る。皆々、こなし。

〽老の氣を揉むたぐり咳、痰と涙に咳き入れば、徳兵衛は脊撫でさすり。

ト合ひ方。

徳兵　何を申すも、皆私しが、不所存から起る事、必らずお腹立てゝ下さりますな。

ト介抱する。お北は門口にて泣いて居る。

〽不所存ゆゑとばかりにて、悔むも今更詮方なく、お北ははつと泣き出だし。

きた　眞實眞身の父樣に、只今お聲の聞き初めに、悲しいお叱り受けるのも、みんなわたしが愚鈍から。

〽嫌はるゝのも無理ならねど。

また長藏さまに限つて、徳兵衛さまを追ひ出すの、家を繼ぐのと云ふ、惡い事は微塵もごさんせぬ。伯母樣の手前を蔭になり、日向になつての心遣ひ、今日も道まで連れ立つて、お前を尋ねて來る道々も、くれ〲わたしに意見して。

〽必らず〲悋氣すな、お初さまを請け出して、二人が仲の男ぢやと。

仲よう添はして波風なう、納める思案と、打明けての話し。わたしもやう〲氣が附いて、今の今まで、お初さまを恨んだも

〽矢ツ張り殿御の身の仇と、知らぬが女子の淺墓さ。

お二人の死なさんせぬ先、わたしが死ぬるが身の云ひ譯。どうぞこの世の見納めに、ほんの父樣母樣の、お顏を見せて下さんせいなア。

〽戸口に縋り泣き居たる。

宗次　コリヤヤア、その性根が疾からあれば、男に疎まれはせぬわいやい。明日をも知れぬ今際の思ひ出、その顏の見たさは、子より親は百倍なれど、生仲に涙をかけて、今の兩親を袖にする氣になつたなりや、男ばかりか親にまで、見放され居らうかと不便さ餘つての事ぢやわやい。

〽蒲團にがばと食ひ附いて、泣く聲ばかり内と外、隔てぬものは眞身なり。始終我が身に迫り來る、お初は思案の胸を定め。

はつ　申し、徳兵衛さま、わたしはお前樣の事。とんと思ひ切つたぞえ。

ト思ひ入れにて云ふ。徳兵衛、これを聞いて、ムツとして

徳兵　ヤア、わが身はそりや、何を云やるのぢや。

はつ　何を云ふは、フツツリと思ひ切つて、今から親方の内へ去ぬる程に、お前もコレ、切れて下さんせえ。
ト思ひ入れにて云ふ。徳兵衛、腹立てこなしあつて
徳兵　ヤア〳〵、そりや又なんで、どうして〳〵。
はつ　サイナア。たつた今までもお北さまは、長蔵さまと女夫にならさんす、心と聞いて居たゆゑに、思や思ふ程お前がいとしさ増り、おのれやれ徳さまには、わしが添うて見せうぞと、外のお客へ無理云うて、女郎の身を打つ程、一倍お前に重なる難儀。お北さまの心底を聞いては、とんと夢が覺めたやうなわいなア。互ひに思ひ切りさへすれば、二人が命も恙なし。お前はお北さまと、仲よう添うて下さんせ。その代りに又わたしも、外の客衆の方へ、身請けせられて行くわいなア。
ト思ひ入れにて云ふ。徳兵衛口惜しいこなし。
サア〳〵、腹の立つは尤もなれどナ、アレ、あのお北さまが可愛けりやこそ、命を助ける人參を、現在二人に下さんした、親御樣のお心の内と云ひ、その上、お北さまの誠ある心を聞いては、なんとお前に添はれうぞいなア。この世の縁は思ひ切つて、お北さまといつまでも、仲好う添うて下さんせ。わたしも外の手へ渡つても、變らぬ心はどこでなと、知れる時節があるわいなう。サア〳〵、手を引き合うて一時に、死ぬるばかりが心中ぢやと、思うてかいなア、コレ。
ト いろ〳〵思ひ入れにて、呑み込ますこなし。
〽我れと我が、心で命捨小舟、流れの義理も立て通す、徳兵衛はつと顔振り上げ、
ト思ひ入れあつて
徳兵　オヽ、さうぢや。成る程、お初、わが身の云やる通り、迷ひの縁はこれぎりに、さつぱりと思ひ切つて、しまはうわい。サア、女房ども、内へ入りや〳〵。
〽お北が手を取り入り口の、途端にお初を門を突き出し、はたと立て切り鍵を閉め。
サア、思ひ切つたと云ふからは、モウ〳〵、フツツリと思ひ切つた。この後は思ひ出しも云ひ出しもせぬ程に、どこへなと勝手次第に、好いた男を持つたがよい。この徳兵衛は男ぢや。未練はないぞ。サア〳〵、親方の内へ去んだ〳〵。イヤ、申し、宗次さま、御安堵下さりませ。徳兵衛は向後心を改め、平野屋の内へ歸り、お北と睦まじう添ひ遂げまする。
〽聞いて思はず起き上がり。

宗次　オヽ、あれを聞いたか、女房ども。
らく　ほんに宗次どの。
宗次　エヽ、忝ない〳〵。よう心を改めて下さつた。それ聞いてこの親仁、只今兩眼ふさいでも、その一言が黒谷の。お十念より有り難い。お北、其方もさぞ嬉しからうの。おれも顏見て嬉しいわいやい。
ト喜ぶこなし。
〽嬉しやと、病も忘るゝ笑ひ顏。
らく　オヽ、めでたい〳〵。イヤ、めでたいが、いとしほなげにお初どのゝ今から一人は去なされまい。矢ッ張り一緒に泊めませう。
ト門口へ行きかける。
德兵　アヽ、イヤ〳〵、そりやよしになされませ。
らく　そりや又なぜにな。
德兵　ハテ、今となつては片時も、側にゐるは嫌でござります。
らく　それぢやと云うて、今から大坂まで、夜道をかけて一人去なしては、どうやら道が危なうもあるし。
德兵　エヽ、なんのマア、夜が夜中でも、お山と云ふものは、膽の太い者で、一人歩きは常住の事。大方あつちにも好い事があつて、幸ひの退き潮でがなござりませう。お初と縁を切るからは、勿論金も入りませぬ程に、この人參を入れて舅どのを、今一度達者にせにやなりませぬ。オヽ、さうぢや。今晩はお北もろとも、夫婦一緒に御介抱、その上に又た、お心の落ちつくやう、枕元で二世の固め。祝言の杯いたしてお目にかけませう。
らく　マア〳〵、親仁樣には御病間。お北もおぢや。
きた　アイ〳〵。
〽二人が寄つて肩車、お北はほんの兩親に、孝行始め殿御始め、圍ふ屏風のしめやかに、
ト介抱しながら、皆々、屋體の内へ入る。チヤンチヤンと入相の鐘打つ。お初、門口に一人立つて居る。
〽入相告ぐる鐘事の、お初は表につつくりと。
はつ　エヽ、つッとモウ、なんぢやゝら、お北さまの心を思ひやつて、あんまり義理を立て過ぎて、わたし一人死んでしまへば納まる事と、覺悟は心に極めたものゝ、今のやうに云うて聞かすは、擂のやうにもない。何事ぢやぞいなア。コレ、德兵衞さま、よい退き潮とは何事ぢやぞいなア〳〵。どのお客でも此方から。
〽惚れて見せるが勤めの習ひ、それさへとんと打越して、

わざと人目に水臭う、深うなる程朝迎ひ、待たして置いての一言は。

勤め離れた女房氣に、なつて居るわいなア。つい一通りの仲かいなア。

〽一人死んでもこれ爰に、肌身離さず持つてゐる、お前の起請と手を引いて。

死ぬる氣ぢやわいなア。徳兵衛さん。只の口舌かなんぞのやうに、愛想づかしはあんまりぢや。

〽凝り固まつてはそれ者程、果し涙の眞實を、内にはとくと徳兵衛が

ト徳兵衛、出て來り、門口へ來て

徳兵　コレ、お初、なんの其方を一人殺さうぞいなう。今のやうに云うたは舅の氣休め。おれも其方のこの起請。

はつ　そんならお前もその覺悟。

徳兵　傍へ所は變るとも。

はつ　エヽ、嬉しうござんす。

〽聲ばかりにて身は外に、閉め出す涙、竹戸一重、通す心のいつの間に。

ト徳兵衛、門口を明け、出かける。屋體の内より

宗次　二人とも、マア／＼、待ちや／＼。

らく　コレ、待つて下されいなう。

ト宗次、お樂、お北、出て來る。これにて悄りして

徳兵　ヤア、こりや宗次どの御夫婦。

はつ　お北さまも一緒にか。

徳兵　面目ないこの有樣。さうぢや。お初、おぢや。

ト行かうとするを、お北、駆け寄り

きた　マア／＼、待つて下さんせいなア。

徳兵　エヽ、爰放しや／＼。

きた　イエ／＼、放しやしませぬ／＼。

ト揉み合ふうち、バタ／＼にて、向ふより、手代大勢平野屋と云ふ提灯を持ち、出て來りて

手一　ヤア、若旦那、お初さまも爰にでござりましたか。一遍と尋ねました。よう爰にお出でなされたなア。

手二　さうしてマア、お二人とも、お喜びなされませ。大吉左右でござります。

皆々　ナニ、吉左右とは。

手一　サア、お聞きなされませ。長藏さまの働らきで、首尾よく誠の曼陀羅も、取返してこの通り、持つて參りました。

ト曼陀羅を徳兵衛に渡す。

徳兵　ヤア、そんならこの曼陀羅が手に入つたか。エ、、忝ない。

手一　それと云ふも、皆九平次と彌助が、惡企みと云ふ事がお上へ聞えて、二人とも代官所へ召捕られし上、

手三　白木屋の二十兩は、親旦那樣からお出しなされて、曼陀羅は元々。

手四　又その上に、お初どの丶身請けも濟んで、この通りの年季證文。

ト年季證文を出して見せる。

はつ　ヤア／＼、そんならわたしが身請けも。

手一　すつぱり埒が明く上は、今からお初さまはお妾、お北さまは御本妻。これと云ふも、皆長藏さまの計らひで

皆々　ござりますぞえ。

徳兵　そんなら、何もかも長藏が計らひで。

はつ　わたしが身請けも出來ると云ひ。

徳兵　誠の曼陀羅手に入れば。

宗次　丸う納まる平野屋の跡式。

らく　幾千代かけて、いつまでも。

宗次　夫婦仲よう、三人とも

徳兵　二世も三世も添ひ遂げませう。

ト双方より取りつき、嬉しきこなし。

兩人　ニ、、嬉しうござんす。

宗次　オ、、めでたい／＼。

ト皆々、よろしく、打出し

幕

往古曾根崎村噂（終り）

「往古曾根崎村噂」初演太夫連名

河堀口の段　竹本文字太夫
　　　　　　竹本彦太夫

教興寺村の段　竹本是太夫
　　　　　　　竹本染太夫

住吉新家の段　竹本中太夫

内本町平野屋の段　竹本男德齋
　　　　　　　　　竹本組太夫

小はる
治平衛

心中天網島



中村鴈治郎の「河庄」の紙治

心中天網島

河庄の場

河　庄　の　場

役名――紙屋治兵衛。粉屋孫右衛門。紙屋丁稚、三五郎。江戸屋太兵衛。五貫屋善六。若い者、佐助。廻し男、嘉助。紀伊國屋小春。伯人、小糸。花車、お松。仲居、お長。同、お民。

本舞臺、三間の間、常足の二重、正面襖、上手障子屋體、下手惣格子、いつものところ門口、河庄といふ掛け行燈、すべて北の新地茶屋の體。爰に仲居お長、お民。佐助、廻し男の拵らへにて腰をかけ居る。この見得、騒ぎ唄にて幕明く。

てう　コレお民さん、今日は座敷淨瑠璃があるに依つて、お客も多からう、どうぞ氣を付けて下さんせ。

たみ　アイ〱、そりや合點でござんすわいなア。

てう　さうして、紀伊の國屋へ誰れぞ行たのかいなア。

佐助　そりや先刻呼びに行きました。

てう　それも急がねばならぬ。大儀ながら、佐助どん、急いで來て下さんせ。

佐助　ハイ〱、畏りました。ドリヤ、一走り行て來ようか。

　ト唄になり、下手へ入る。この時奥より、小糸、白人の形にて出て

小糸　お長さん、小春さんはまだでござんすかいなア。

てう　アイ、佐助どんをやつたれば、もう來やしやんせうわいなア。

小糸　どうぞ早う來てくれたがよいになア。

　ト唄になり、向うより嘉助、先に提灯を持ち、風呂敷包を抱へ、小春、後より白人の形にて舞臺へ來り

嘉助　ハイ、小春さんを送ります。

てう　オヽ、小春さん、いま呼びにやりましたが、最前から早う〱と內がやかましい、サア〱、ちやつとお上がり。

小春　サイナア、わたしも遲うなつたに依つて、氣が急くけれど、何やかや隙が入つて、やう〱今になつたわい

なア。
小糸　小春さん、わたしはお前に逢はうばつかりに、最前から爰に待つて居た。よう來て下さんした。
小春　何の用ぢやぞいな。
小糸　ソレ、この間約束した芝居へ行かうと思うて。
小春　エヽ、わたしや、芝居も嫌ぢやないわいなア。
小糸　そりや又、紙治さんの事でかえ。
小春　ハア、これでなア。
　ト氣に濟まぬこなし。
小糸　この間も心中の仕損じをさしやんしたげな。滅多な事をしやしやんすなえ。
小春　何を云はしやんすやら。
てう　コレ〳〵嘉助どん、よい次手ぢや、このお子を送つて上げて下さんせ。
嘉助　ハイ〳〵、畏まりました。サア、お出でなされませ。
　ト捨ぜりふにて、嘉助先に、小糸附いて下手へ入る。
てう　ヤレ嬉しや、これでよいといふもの。小春さんのお出ぢやと云うて、落ちつかさうか。
たみ　さうしやしやんせ。
てう　サア〳〵お出で。

　トぜりふにて奥へ入る。この時向うより丁稚三五郎、狀を持ち出て、門口へ來て
三五　小母さん〳〵。
　と招き、狀を見せる。
小春　オヽ、どのお子かいなう。恟りした。治兵衞さまから文かえ。ドレ、早う見せて下さんせ。
三五　イエ〳〵、旦那からぢやない、お前へ初めて來た狀ぢや。
小春　わたしへ初めて來た文とはえ。
　ト取つて見る。
紀伊の國屋小春さま、紙屋内より。
　ト恟りしていろ〳〵思ひ入れ。
三五　コレ〳〵小母さん、お家樣がこの狀を、お前へ持つて行き、必らず旦那に云ふなと云うてゞあつた。
小春　治兵衞さまの内方から、わたしへの文とは、どうやら氣の濟まぬ。
　ト讀む思ひ入れ。
三五　小母さん、わたしや爰に居て、旦那樣に逢うたら、お家樣に叱られる。早う返事して下され。
　ト小春、よく〳〵讀んで。

小春　よく〳〵切なさが餘つてのこの文。道理でござんす、尤もぢや。さぞ腹が立つたでござんせう。この文の樣子では、治兵衛さまの素振が。太兵衛づらに、身請けされては、片時も生きては居ぬこの身。

ト泣く。

三五　小母さん、お前なんで泣かんす。腹でも痛いかえ。但しひだるいか。コレ、ちやつと返事をして、こちや叱られん間に去にたいわいなう。

小春　成る程返事しませう。

ト硯、紙を出し、返事を書く。

コレ、こりや大事の狀ぢや程に、必らず誰れにも見せぬやう、ちやつと持つて去なしやんせ。

三五　アイ〳〵、ドリヤ、ちやつと去んで、お家樣に、賃を

ト行かうとして。

コレ〳〵小母さん、肝腎の事忘れた。今の狀を誰れにも云てくれな、と云うてゞあつたぞえ。

小春　そりや氣遣ひしやしやんすな。

ト懐より守り袋を出し。

コレ、この守り袋は大事な物が入れてある。この中へ入れて、この通りにして置けば、氣遣ひはござんせぬ。とよう云うて下さんせ。

ト云ひ〳〵泣く。

三五　エヽ、また泣かんすかいなう。ドリヤ去んで賃を貰はう。小母さん、お前は旦那樣の使ひに來る時は、何やかや下さんすが、今日は何にもないかえ。

小春　ほんに何ぞ上げたいが。

ト思ひ入れあつて、莨入れの中より金を出し。

サア、これを上げる程に、必らずこの文の事、わたしが返事した事を、誰れにも云ふ事はならぬぞえ。

三五　合點ぢや〳〵、斯ういふ好いものを下さるもの、人に云うてたまるものかい。そんなら小母さん。

小春　早う去なしやんせ。

三五　そんなら小母さん、去んで來るワ。

ト流行り唄になり、三五郎、向うへ入る、小春、思ひ入れあつて泣く。この時奥よりお杉、花車の形にて出て

すぎ　オヽ、小春さん、どうぢやいなア。太兵衛さまの伊丹へ行かしやつた事、又きつう揉めると聞いたが、マア、治兵衛さまの事はどうなつたえ。

小春　イヤモウ、何ぢやゝら、益體ぢやわいなア。いとしなげに紙治さま／＼と、それ程にもない事を、あの太兵衞づらが浮名を立て、氣晴し同樣に五貫屋の善六づらまで粹がつて、わたしやモウ、腹が立つて／＼ならぬわいなア。

ト此うち、善六太兵衞、酒に醉ひ、橋がゝりより出て、門口に立聞きして居る。

すぎ　ほんに、あの太兵衞さまは、可愛氣のないなめくさり。シタガ、大金持ちの太兵衞さま、請出されて行かしやんすは、お前の出世といふものぢやぞえ。

小春　何云はしやんすやら。あんな男と添はうより、牛にはぢかれた方がましぢやわいなア。

兩人　ハヽヽヽ。

ト これにて兩人ムツとして內へ入る。

太兵　コリヤ小春、あんまりぢやぞよ。なんぼう蔭で謗つても、やがてこの男が女房、あの小判の光で可愛がられて見せうわえ。ナア善六。

善六　オヽ、それ／＼、大坂三鄕に人も多いが、紙屋治兵衞は二人の子の親、女房は從弟同志、舅は伯母聟、その世話になる體で、十貫目餘の身請け金、何として／＼。

太兵　其やうな男が矢ッ張り可愛うござりますか。イヤサお前は治兵衞どのが、それ程に可愛いか。おれは女房なければ舅なし、また伯父持たず、身すがらの太兵衞と名を取つた男。色男で僣上云ふ事は、治兵衞めに叶はねども、金持つたばかりは太兵衞が優つた。金の力で押したれば、ナウ善六。

善六　ナニ、勝たうも知れぬ。今宵の客も治兵衞めぢや。貰へ／＼貰うた。

太兵　サアコレ花車、酒を出せ／＼。

すぎ　何を云はしやんすやら。今宵のお客はお侍ひ衆で、追ッつけ爰へ見えませう。お前方は、どうぞ脇で遊んで下さんせいなア。

善六　ヤア、侍ひ客ぢや。侍ひなんぢやい。なんの、刀差すか差さぬかの違ひ。侍ひも町人も客は客ぢやわえ。

太兵　ハテ、なんぼさしても、五本も六本も差しはしよまい。ハヽヽヽ。

善六　ハテ、よう差して脇差で、たつた二本ぢやわえ、侍ひぐるめ貰うた。コリヤ、小春どの／＼さま、なんぼう拔けつ隱れつなされても、緣あればこそ出會ひ申すワ。

すぎ　そりや、いたみでござんす。

太兵　ナニ、したみとは。

善六　アヽ、コリヤ、伊丹ぢや〳〵。

太兵　さうかいやい。サア、貴樣一杯やれ。時に花車、この頃仲居仲間の流行り文句。小春、よう聞きや、善六、覺えた通りやつて見い。

善六　そりや合點ぢやが、併しつるがあるか。

太兵　成る程、そりやおれがやらう。

ト箒を持ち出て、兩人こなしあつて

善六　結ぶの神の紙屑に、貧乏紙屋の治兵衛の女房、おさんに子があるドツコイ。その子は鼻たれお京と勘太郎、貧乏小春に命ちり紙の、紙屋姿ぞ藥袋紙。

太兵　もうよい〳〵。小春、なんと好い文句であらうがの。

ト此時孫右衛門、下手から出る。善六、門口を見て

善六　太兵衛さん〳〵、紙屑が來て居る〳〵。

太兵　ナニ紙屑が來た。

善六　表へ來てゐるワ。

太兵　それは好い所へ來をつた。サア、貰はうかえ。

善六　ムウ、貰へ〳〵。

ト兩人、表へ出て、孫右衛門を引ツ張り、いろ〳〵手を取つて。

太兵　サア治兵衛、われに貸した金、いま戻せ〳〵。

トいろ〳〵云ふ。

孫右　この大小が目にかゝらぬか。

トこれにて兩人悔りして、向うへ逃げて入る。

ハテサテ、慌てた奴ではあるわえ。

すぎ　オヽ、あなたは、旦那樣ではござりませぬか。

孫右　そちやお杉ぢやないか。

すぎ　好い所へお越し下されました。サア〳〵、お入りなされませ。

孫右　入つても苦しうないか。

すぎ　サア〳〵、こちらへお入り下さりませ。

孫右　然らば許しやれ。

ト捨ぜりふにて二重よきところへ住ふ。下手より以前の嘉助出て

嘉助　ハイ御免。小春さんの今晩のお客樣は、どなたでござりまする。見て來ぬと云うて、内でえらう叱られました。

すぎ　ハテ氣の惡い。今晩のお客樣は、藏屋敷のお侍ひ樣ぢやわいなア。

嘉助　左樣でござりませうが、ちよつとお顏をばお見せ下

さりませ。ツイちよつとさへ拜見いたしますればよいのでござります。

すぎ　其やうに云はしやんすなれば、そこにお出でなさるお侍ひぢや程に、見やしやんせ。

嘉助　ヘイ〳〵、御免下さりませ。ちよつとお顏を。

ト孫右衛門の顏を提灯にて覗き

ヘイ〳〵、よろしうござりまする。内が誠にやかましいので困つて居ります。よろしうござります。イヤもシ小春さん、あのお客樣なら、今夜はしつぽりとお勤めなされませ。イヤ申し、大きに御面倒いたしました。

ト門口へ出て。

ドレ〳〵、これからもう一軒廻つて行かう。

ト下手へ入る。

孫右　なんぢや、今の男は身共の顏を、茶入れか茶碗のやうに目利して行き居つた。さうして、これがあの小春どのか。イヤ、てんと御器量。手前が屋敷は晝の出入りを堅く誡め、それゆゑ家來も連れず只一人にて參りしが、どうぞ一夜の情は受けられまいか。これはしたり小春どの、其やうに俯向いて居て、首筋は痛みはせぬか。物を云はつしやれ、小春どの。

小春　申しお侍ひ樣、同じ死ぬると云うても、首縊るのと自害するのは、どちらが苦しうござんすえ。

孫右　これは又迷惑な。手前とても首を縊つて見た事も、自害して見た事もないが、マア、小氣味の惡い女郞ぢやわえ。

すぎ　これはしたり小春さん、初對面からあんまりな御挨拶。こちの人も今夜は留守、幸ひ隣に座敷淨瑠璃の會がござります。それを肴に、奧で御酒に致しませう。奧へお出でなされませ。

孫右　オヽ、ナニサマ、酒よからう。小春どのも不機嫌なら、淨瑠璃など承らう。

すぎ　それがよろしうござります。

孫右　然らば案内いたしておくりやれ。

すぎ　それをつッとお出でなされませ。

孫右　然らば斯う參るのか。

ト孫右衛門、刀を忘れて行かうとして、顏を見合せ

三人　ハヽヽヽ。

ト踊り地にて三人、上手へ入る。床の淨瑠璃になり

〽天滿に年經る千早振る、神にはあらぬ紙樣と、世の鰐口にのるばかり、小春に深くあふぬさの、腐り合うたる

御注連繩、今は結ぶの神無月、堰かれて逢はれぬ身となり果て、あはれ逢瀬の首尾あらば、それを二人が最期日と、名殘の文の云ひ交し、毎夜々々の死覺悟、魂ひぬけて、とぼ〳〵うか〳〵身を焦す。

ト向うより治兵衞、着流し一本差し、頬冠にて出て來り、花道にて。

治兵　いま向うの煮賣屋で、高聲で小春が噂、侍ひ客で河庄方。どうぞ首尾して逢ひたいものぢやなア。

〽覗く格子の奥の間に、客は頭巾の頤の、動くばかりに、聲聞えず。

アレ〳〵可愛や、小春が行燈に背けた顏の、あのマア痩せた事わいの。心の中は皆おれが事。

〽爰に居ると吹込んで、

連れて退くなら、梅田か北野。アヽ、知らせたい、呼びたい。

〽と心で招く氣は先へ、身は空蟬の脫殼の、格子に抱きつきあせり泣き、奥には客の聲として。

孫右　アヽ、思ひのある女郎衆にかゝつて、とんと氣が滅入る。表へ出て、行燈でも見て氣を晴らさう。サア、小春、おぢやれ。

〽連れ立ち出れば南無三方、身付けられじと身を忍び、隱れて聞くとも内には知らず。

ト小春、孫右衞門出る。

宵からの素振りといひ、花車が話しの紙治とやらと、心中する心と見て取つた。死神の附いた耳へは、意見も道理も入るまいとは思へども、さりとは愚痴の至り。先の男の無分別は云はず、一家一門其方を恨み、萬人に死顏を晒す身の耻。サ、親はないかも知らねども、もしあれば不孝の罰。極樂へは愚か、地獄へも溫かに、二人連れでは落ちられまい。一見なれども武士の情、見殺しになるまい。コレ、定めて金づくの事であらう。どうか五兩か十兩の事なら、用達つて命が助けたい。なんと死ぬる氣に相違あるまい。神八幡侍ひ冥利、他言は致さぬ。コレサ小春、心底殘らず打明きやれ、どうぢや〳〵。

〽と囁けば、手を合はせ。

小春　ア、忝ない。有り難う御座んす。

〽馴染、よしみもないわたし、御誓言での情のお詞、涙が滾れて、嬉しうござんす。

思ひ内にあれば、色外に顯はるゝと、お前樣の御推量の通り、紙治さまとは死ぬる約束、元はと云へば身請けの

張合ひ。南と爰とにまだ。
〽五年ある年の内、人手に取られては。
わたしは元より。
〽主は、猶、一分立たず、いつそ死んでくれぬか。
アイ。
〽アイ死にましよと、引くに引かれぬ義理詰めに、ふつと云ひ交し、首尾を見合せ、合圖を定め。
もう脱けて出よう／＼と。
〽いつ何時を、最期とも。
その日暮らしの母へたい命。わたし一人を頼みの母さん、死んだ後では袖乞非人、餓死もなされうかと思へば、ほんの事は死にともない。わたしとても命は一つ、水臭い女と。
〽思し召しも耻かしながら。
その耻を捨てゝも、死にともないが第一。死なずに事の濟むやうに、どうぞお頼み申します。
〽語ればうなづき思案顔、外には、はつと聞いて驚き、思ひがけなき男氣に、木から落ちたる如くにて。
治兵　そんなら死なうと云うたは、皆嘘か。三年この方誑しくさつた野狐め、いつその事踏ん込んで、面耻かゝせて腹癒よか。
〽と齒切ぎり／＼口惜し涙、内にも小春が喞ち泣き。
小春　此やうに云へば、卑怯なお頼みなれども、お侍ひ様のお情にて、今年中、來春二三月の頃までも、わたしに逢うて下さんして、彼の人の來る度々に邪魔をして、期を延して下さんしたら、自ら手も切れる道理。それで向うも殺さず、わたしも命助かるといふもの。なんの因果で死ぬる約束した事ぞ、と思へば口惜しい、口惜しうござんすわいなア。
〽口と心は裏表、絞る袂は雨露の、膝に凭れて泣き居たる。
孫右　表が近い、人や見る。
〽格子の障子ばた／＼と、立聞く治兵衛は氣も狂亂。
治兵　流石、賣り物、安物め。切らうか突かうか。
〽どう障子にうつる、二人の横顔。
アレ／＼、何を吐かすやら、うなづき合ひ、あのマア吠える態わいやい。もう料簡が。
〽心も急きに關の孫六、一尺七寸拔放し、格子の間より小春が脇腹、爰ぞと見極め、ぐつと突くに、座は遠く、侍ひ透さず飛びかゝり、刀の下緒で手ばしかく、格子の

柱こ括りつけ。
ト治兵衛、刀を抜き、格子の間へ突ッ込む。孫右衛門手を引入れ、下緒にて格子へ括りつける。此うち奥よりお杉出て見て、悔り、手を叩き
すぎ　ア、、申し〳〵、誰れぞちやつと來て下さんせ。格子の間から、刃物を突ッ込む暴れ者。皆さん、ちよつと來て下さんせ。
孫右　ア、、コレ〳〵騷ぐな。格子の間より刃物を突ッ込む程の暴れ者。身が腕を縛しめ置きたれば、氣遣ひはない。サア、小春、行て寢よう。
小春　アイ。
〽あいとは云へど、見知りある脇差の、突かれぬ胸にはつと貫き。
こりや慥かに治兵衛さん。イヤサ、慈悲といふ事を知らねば、人は難儀するげな。あんまり酒を飲み過して、斯ういふ事は色里にはある習ひ。もう大概なら、沙汰なしに、解いて去なして、上げさんした方が、よさゝうなものぢやぞえ。
すぎ　オ、、それ〳〵、いつそわたしが解いて上げようわいなア。

孫右　ア、、コリヤ〳〵、その繩解くな。仔細あつて身が縛しめた。身共に任して奥へ行きや。
小春　それぢやと云うて。
孫右　ハテサテ、行けといふに。
〽と侍ひは、跡にも心置く露の、打連立つて、奥の間へ。
ト孫右衛門、小春、お杉を連れ、こなしあつて、奥へ入る。治兵衛、口惜しきこなしあつて
治兵　エ、、四足を一思ひと思ひしに、仕損なうたが口惜しい口惜しい。ハア、、。
〽格子手桛に繞けば締り、身は煩惱に繋がるゝ、犬に劣つた生耻を、覺悟極めし血の涙、絞り泣くこそ不便なれ、ぞめき戻りの身すがら太兵衛、善六伴ひ立歸る。
ト善六、太兵衛、酒に醉うたる思ひ入れにて出て來り
善六　太兵衛さん〳〵、向うに誰れやら居るぜ〳〵。
太兵　また最前の侍ひぢやないか。
善六　イヤ〳〵、慥かに今度は治兵衛めぢや。
太兵　一體どこに居るのぢや。
善六　向うの格子の際に、ちよつくぼつて居る。
太兵　ありや犬ぢやないか。
善六　何を云ふぞい。

太兵　そんなら貴樣行て見てくれ。

善六　よし／＼、おれが行て見て來よう。ちよつと爰に待つて居てくれ。

太兵　よし／＼。もし侍ひなら、早う知らせてくれ。おりや先へ逃げる。

善六　何を云ふぞい。

オイ／＼太兵衛さん、紙屑ぢや／＼。

ト舞臺へ來て、治兵衛を見て。

太兵　そんなら、ほんまに治兵衛めか。

善六　早う金を戻してもらへ／＼。

ト兩人、舞臺へ來る。

太兵　サア治兵衛、二十兩の金いま戻せ／＼。

治兵　ナニ、二十兩の金とは。

善六　コレ／＼、呆けまい／＼。

太兵　そんな事云はさん爲、待て／＼。ソレ、慥かに證文が取つてあるわえ。エヽ、一つ、金二十兩なり、右は今日入用につき、難儀いたし候ふ處、お取替へ下され候ふ段、御慈悲の程忘れ申さず、有り難く存じ奉り候ふ、何時なりともこの手形を以て、キッと返濟申すべく候ふ。跡はお定まりぢや。江戸屋太兵衛どの、紙屋治兵衛・判。

こりや、われが直筆ぢやぞよ。

ト證文を出して見せる。

治兵　そりやこの間石町の隱居樣に。

太兵　エヽ、何を吐かすのぢや。この證文が確な、證據ぢやわえ。

善六　太兵衛さん、そんな事云うて居ずと、代官所へ引ッ張つて行かう／＼。

太兵　サア、きり／＼うせい。

ト善六、太兵衛、手を縛られて居る治兵衛を引ッ張る。治兵衛、痛いといふ思ひ入れ。

治兵　アイタヽヽヽ。

善六　なんぢや、治兵衛が痛いと云うて居る。ちよつと待つてや。アヽ、治兵衛の手が、格子の間に括つてあるワ。

太兵　なんぢや、手が括つてある。アヽ知れた、大方治兵衛めは、こゝを働きやると見える。

善六　オヽ、さうぢや／＼。

治兵　どこでおれが盜人した。

太兵　何を吐かすのぢや。盜人せんものが、なんで手を格子の間へ括つてあるえ。

善六　アノ茲な大騙りめ。

太兵　強盜め。

善六　紙屑がこそを働いた。盜人ぢや。生捕賊ぢや。皆來い皆來い。

ト治兵衞を蹴飛し、殴り廻し、大聲にて云ふ。橋がゝりより大勢棒を持ち出て。

〽呼はり喚けば行きこふ人、あたり近所も駈け集まる、内より侍ひ飛んで出で、善六、太兵衞を突き飛し。

ト孫右衞門、奧より慌てゝ出て留める。善六、太兵衞を打ちにかゝる。トゞ善六を突き飛ばし、太兵衞内へ逃げて入る。門口を内より締めて、いろ〳〵あつて

孫右　ヤイ、この治兵衞が何を盜んだ。イヤサ、何を騙つた。その譯云へ。サ、早く申せ〳〵。

善六　サア、その盜んだは。

孫右　仔細あつて、某が縛め置いた、それをうぬらが土足に掛け、盜人呼はり。おのれ、何を以てこの狼藉、盜み騙りとは、なんぞ慥かな證據でもあるか。

善六　その證據と申しまするは。オイ〳〵、太兵衞さん太兵衞さん、どこに居るのぢや。太兵衞さん〳〵。

太兵　オイ〳〵、爰ぢや〳〵。

善六　太兵衞さん、早う來て證據を見せてんか。

太兵　よし〳〵、今見せる。

ト怖々外へ出て、孫右衞門と顔見合せ。

孫右　サア早く見せえ、

太兵　ヘエ、卽ち證據はこれでござります。二十兩の證文。慥かな證據。この通りに書いたものがござります。

孫右　その證文、これへ見せい。

ト太兵衞の持つて居るのを、孫右衞門引取る。

太兵　なんと慥な證據でござりませうがな。

孫右　誠にこりや、慥かな證文ぢや。

ト云ひ〳〵引破る、太兵衞、悄なし。

太兵　エ、滅相な。二十兩の證文、こりや、どうたるのぢや。

孫右　サアよいわい、いま金を戻すわえ。

太兵　金も出さずに、大切の證文を破るとは、あんまり無茶ぢやござりませぬか。

孫兵　ハテ、よいと申すに。ソレ二十兩受取れ。

ト二十兩包みを出し。

サア、キリ〳〵と持つてうせう。

ト投げる。兩人こなしあつて。

太兵　オ、持つて行かいで、只貰ふのぢやあるまいし、お

れが貸した金を取るのに、なんの遠慮があるものか。
ト取りにかゝり、孫右衛門と顏見合はせ、氣味惡きこなしあつて。
ナア善六、あの金ちよつと取つてんか。
善六　よし〳〵、かした金を取るのに、其やうに遠慮はいらぬ事。
ト行きかけて。
ナア太兵衛さん、お前が貸した金ぢや。すりや、矢ッ張りお前が取りんかいなア。
太兵　そんな事云はずと、エヽ、なんぢや〳〵、おれの金をおれが取るのに、遠慮もへちまもあるものか。
ト云ひながら足にて取り。
取つた、サアお出で。
善六　オヽ、よう取つた。サア行かう〳〵。
ト捨ぜりふにて行きかゝるを、孫右衛門、思ひ入れあつて。
孫右　コリヤ、待て〳〵。
兩人　まだ用がございますか。
孫右　後で小言のないやうに、一兩々々改めて行きやれ。
太兵　ヘイ〳〵、なんのお前さん、金改めるには及びませぬ。
孫右　さうでない。改めた上にて立歸れ。お侍ひ樣といふものは義の堅い。
ト行燈の傍にて改め見て。
ヘイヘイ、慥かに受取り申しました。
孫右　この治兵衛に云ひ分ないか。
太兵　なんの〳〵、金さへ受取りますれば、云ひ分はござりませぬ。
孫右　いよ〳〵これなる治兵衛に、申し分はないな。
兩人　ヘイ〳〵、ございませぬ。
孫右　その方に云ひ分なくば、此方に申し分があるのぢや。
ト兩人の首筋を押へ。
場所が場所ゆゑ、今日はさし免す。以後はキッと愼み居らうぞ。
ト兩人を突き放す。ひやいなることなしにて向うへ逃げ入る。後より大勢追ひ駈けて入る。孫右衛門向うを見て、
〽人立ちすれば孫右衛門、立歸つて縛り目解き。
紙治とやら、さぞ窮屈であつたであらう。

治兵　これは〳〵、どなた樣かは存じませぬが、難儀の所をお救ひ下され、有り難うござります。
孫右　身が面體を、とつくりと見やれ。
〽頭巾を取捨て。
治兵　大枚の金子をお立替へ下され。何れ近日の内に金子を調へ、急ぎお禮に上がります。さうしてあなた樣のお屋敷はどこで、お名前は何と仰しやりまする。
ト孫右衛門の顔を見て。
オヽ、お前は、兄者人ぢやないか。
孫右　治兵衛。
治兵　御免なされておくれなされ。
ト花道へ逃げようとするを
孫右　エヽ、動き居るまい。門中でみともない。
治兵　兄者人、どうぞ料簡して下さりませ。
トまた逃げかゝるを、引留め
孫右　云ふ事がある。みともない、内へ入れ。
ト治兵衛を内へ引入れ、孫右衛門、門口を締め、思ひ入れ。
治兵　アヽ、面目ない〳〵。
〽小春は奥より走り出で。

小春　さては、兄御樣かいの。
治兵　エヽ、畜生め、狐め。太兵衛より先に、うぬを。
〽足を上ぐれば孫右衛門。
ト治兵衛、小春を引付け、打擲し、足を上げて蹴ようとするを、孫右衛門よろしく留めて
孫右　ヤイ〳〵、其たわけから事が起る。マア待て待て。コリヤ、人を誑すは遊女の習ひ、それをおのれは今氣が付いたか。この孫右衛門は、たつた今一見なれど、逢うた女郎の心底を見拔いて居るわい。小春を蹴る隙でうろたへた、そのおのれが根性をなぜ踏まぬ。われに云つて聞かす事がある。マア待て。エヽ、キリ〳〵と待ち居らうぞ。
ト無理に坐らせ。
ハヽアしんど。
ト誂らへの合ひ方になる。
弟とは云ひながら、三十に押ッかゝり、勘太郎お末といふ六つと四つの子の親、六間々口の家を持ち、その身代の潰れるといふところへ、氣が付かぬか。兄の意見を請くる事か、舅は叔母聟、姑は叔母者人、親同然、女房おさんは其方が爲にも從弟同志。がんじがらみに結び合う

た、重ね／＼の縁者、親子仲。一家一門の參會にも、おのれが曾根崎通ひの悔みより、外に話しの出た事はありやせんわい。おいとしいは叔母者人、連合ひ五左衞門はにべもない昔氣質。女房の甥御にかゝつて、娘一人を棒に振つた、おさんを取返し、天滿中に耻かゝさんとのお腹立ちを、叔母者人一人が敵となり味方となり、病になる程心を苦しめ、おのれが耻を包まるゝ、それを思はぬ恩知らずめ。この踏たつた一つでも、碌な事はありやすまい。アヽ、所詮これぢやア家は立つまい、小春に逢うてとつくりと心底見屆け、その上での一思案と、爰の亭主に工面してもらうて、そちが病の源を、おりやよく見て置いた。成る程、女房子に見替へるだけあつて、天晴れな女郎ぢや。イヤサ、天晴れなお女郎さまぢやなア。アヽ、お手柄／＼。マア結構な弟を持つて、人にも知られた紙屋の孫右衞門、祭の練り樂か、氣狂ひか、ついに差さぬ大小ぼッこみ、藏屋敷の役人と。

〽歌舞伎役者の眞似をして、馬鹿を盡したこの刀。おりやゝ。

〽捨て所がないわいやい。

小腹が立つやら、をかしいやら、餘りの事で、エヽ、胸が痛いわい／＼。

〽胸が痛いと、齒ぎりし、泣顏隱す澁面に、小春は始終むせ返り、我が身の上は得も云はず、兄の意見と母親の、心遣ひを思ひやり、皆御道理とばかりにて、詞も涙に暮れにける。治兵衞涙を押拭ひ。

　トよろしく思ひ入れあつて

治兵　アヽ、あやまつた／＼、あやまりました兄者人。ナア申し兄さん、どうぞ堪忍して下され。どうぞ御料簡なされて下さりまし。

　ト合ひ方になり

三年この方、あの古狸に魅されて、妻子は元より一家一門袖になし、身代の手纏れも、小春といふ屋尻切りに誑されて。アヽ、今といふ今目が覺めた。ナア申し、これえ。ほんまに今思ひ知りました。皆私しが惡うござりました。が、まだ迷ひますする。あんた顏はして居ますけれど、あれでも元來すわつた奴でござりますぜ。僕かあんた、五六遍、イヤサ、二度か三度行たら、モウちやんとこんな事云ひますのぢや。申し、治兵衞さん、わたしのやうな者でも贔屓にして、こないに呼んでもらふのは、誠に嬉しいけれど、なんぼうわたしが思うたところが、

お前様にはいとしいお子はあるし、美しいお家さんはあるし、所詮末の遂げぬ話ぢやに依つて、モウ辛氣で辛氣でならん、と云ふに依つて。ハ、阿房らしい、なんのお前さへ、さういふ氣なら、あんな女房はとつとゝ暇やつてしまひ、さうしてお前と夫婦になつて、二人一緒に。イエ、そんな事、誰れが云うたえ。イヤサ、おれは云はぬが。この間は何と云うた。あのモウ嫌ひで／＼ならん太兵衛や善六が、わたしを呼び出して、なんのかのと云ふに依つて、そんな事したら、治兵衛さんに濟みませぬと、ぽんと云うたら、サア腹を立て、そんならおれもあの治兵衛への面當てに、いつその事身請けして、女房にすると親方へ金の相談。もしそんな事があつた時には、お前さんも立たず、又わたしも生きて居る氣はない、と云ふに依つて、マア待て、そりやアお前、何を云ふのぢや、わしこそ義理は缺いてしまひ、世間へ顏出しはならず、死ぬる氣なら治兵衛さん、どうぞ一緒に死んで下さんせ、とはなぜ云うてくれぬ、そりやわが身水臭い、とても事に、此方も太兵衛への面當てに、派手に心中せうかと云うたら、そんなら派手に心中すると云うて、斯ういふ揃ひまで拵らへて、そんなら死んで下さんせ。イヤそんな事、いつ云うたえ。わしは云はぬが、われ云うたがな。よう今までは騙してくれた。狐め、狸め、今日といふ今日、思ひ切つた。オヽ、思ひ切つた。ナア申し、兄さん、今といふ今、ほんまに思ひ切りました。今までは大きに御心配をかけました。もうフッツリと思ひ切りました。モウ／＼、こんな所へ、足向けする事ぢやござりません。どうぞ兄さん、料簡して下さりませ。

孫右　コリヤ治兵衛、そんならお前、何と云ふのぢや。今日と云ふ今日、フッツリと思ひ切つたに依つて、どうぞ堪忍してくれいと云ふのぢやな。あゝさうか、が、治兵衛、そりやお前、何遍云うた。イヤサ何遍云うた。モウ今度ばかりは、そんな事は聞きたうない。措いて下され。わしのやうな者ぢやというて、あんまり何遍も／＼騙してくれたな。ようマアそんな事が云はれたものぢや。じやらじやらと阿房らしい。人を馬鹿にするも程がある。アタ、阿房らしい。

治兵　そりやマア、今までに二遍や、三遍の事やおまへんに依つて、そないに仰しやるは無理はおまへん、けれどナア、さうやというて、あんた、思ひ切つたと云ふより外に、なんにも云ふ事がありやしまへんがな。

ト云ひながら、懐を見て
よろしうおます。そんなら兄さん、ほんまに思ひ切つたといふ、わたしが證據を見せますワ。オヽ、證據を見せますワ。オヽ、證據を。
ト小春に當てゝいふ。
孫右 なんぢや、證據を見せる。こりや面白い。サア、證據見ませう。
治兵 ほんまに思ひ切つたといふ、慥かな證據を見せませう。
孫右 オヽ、どんな證據ぢや。サア、早う見せいなア。
治兵 いま見せます。
孫右 サア／＼、證據を早う見せい／＼。
治兵 そないに、やかましう云ひなはんないなア。
孫右 證據を見せると云ふに依つて、早う見せと云ふのぢや。
治兵 いま見せます。忙しないお方ぢやなァ。
ト云ひながら、守り袋より起請を前へ出して。
サア、見ておくれなされませ。
孫右 なんぢやいな、心の悪い。血のべと／＼付いた、こんな物、證據の何のかのと、じやら／＼とした、アタ心わるい。
治兵 モシ／＼、勿體ない事、云ひなはんないなア。並大抵の事で、これが貰へるもんやと、思うて居なはるか。コリヤ、ナ申し、日本國の神々さまへ、誓ひをかけてナ、互ひの心變らぬやうと取交してナ、又もこの上に變らぬやうと、月頭に一枚づゝ取交しますのや。
孫右 なんぢや、まだあるのか。
治兵 エヽ、モウ、皆見せますワ。
孫右 オヽ、わたしの解るやうに云うて、皆見せておくれ。こんな物が、有り難いものやら結構なものやら、さつぱり譯が解らぬ。わしの腹へ入るやうに、聞かしておくれ。
治兵 ナア申し、兄さん、足掛け三年に、月頭に一枚づゝ取交して、三十枚おますのや。これをあんたに見せるのは、わしの潔白でおます。どうぞ、これをば、彼奴に歸しておくんなはれ。
孫右 アヽ、よし／＼。
治兵 さうしてなア、兄さん、私の方からも、矢ッ張り彼奴に、こんだけ行ておますのや。それをば此方へ取返した跡は、燒くなりと破るなりと、どうなと勝手にしなは

れ。

孫右　そんなら何か、これをば小春に返して、さうしてわが身の方から行てあるのを、此方へ取返してくれいと云ふのか。よし〳〵、さうわが身がやうに云やると、わしぢやて、兄の事ぢやもの、お前の引けの取るやうな事はしやせぬ。わしに任して置きや。

治兵　ハイ。

孫右　なんの、わが身の引けを取るやうな事、わしがせう。兄が附いて居る。ヂッとして居や。

治兵　ハイ。

ト孫右衛門こなしあつて

孫右　情ない、これを持つて行かんならんかいなア。

ト起請を持ち、小春の側へ行き、それを置き。

サア小春どの、いま聞いての通り、弟はわしが意見で、結構なお前の事はフッツリと、思ひ切つたと云うて居るに依つて、ナア小春どの、こりやアノ起證といふ物ぢやさうな。數改めて受取つておくれ。さうしてあの弟からお前の方へも、こんだけ行てあるさうな、それをば此方へ貰ふのが、わしへの弟が潔白ぢや、と云うて居るに依つて、どうぞ、それを此方へ返しておくれ。

ト小春、否と云ふこなし。

コレ小春どの、それでは互ひに氣が殘つて、いかんに依つて、どうぞ此方へ返しておくれ。

治兵　申し〳〵兄さん、そんな優しい事で行きやしません。殴り倒して引ッたくりなされ。

孫右　サア〳〵、えゝと云つたら、わしに任して置かんかいなア。小春どの、弟があのやうに云うて居るに依つて、早う此方へ返しておくれ。わしの意見で、弟はお前の事を思ひ切つたと云うて居る。その思ひ切つた男の起證を、大事にかけて持つて居ても、どうも仕樣がないぢやないか。小春どの、三年が間、ようお前、あんな弟ぢやと思うて　よう付合うてやつておくれだなア。その禮はキッと云ひますぞや。イヤサその禮は、わしがキッと云ひます。モウ長い短いはいらんに依つて、それを此方へ返して。小春どの、お前出さぬと云ふと、懐へ手を入れても取るぞえ。小春どの、小春どの、返して下され。

ト小春、懐へ手を入れ。

ア、これ程持つてゐながら、ごて〳〵云つて出さぬに依つて、懐へ手を入れたりせんならん。なんぢや、手紙、……紀伊國屋小春さま參る、紙屋内より。

ト孫右衛門讀むを、小春惡いといふこなし。治兵衛耳立て

治兵　コレ兄さん、なんでおますのや。

孫右　なんでもあらせん〳〵。

治兵　手紙とはどこから來たのぢや。イ、イヤ、どこの客から來た手紙ぢや。ちよつと見せておくれなされまし。

孫右　イヤ、なんでもありやせん〳〵。

治兵　ちよつと見せておくんなはれなア。

孫右　なんぢやいなア。たつた今思ひ切つた女の手紙、どこから來やうと、彼處から來やうと、構ふ事ありやせん。チツとして居んか。わしに任して置きと云ふに。なんの文のと、アタしつこい、ごてごて〳〵。

ト云ひ〳〵手紙を讀んで。

そんなら、この手紙の客人へ、義理を立て。

小春　アモシ。

ト孫右衛門の袂を引く。

孫右　こりや見せともながる筈ぢや。小春どの、最前は侍ひ冥利、今は粉屋の孫右衛門商ひ冥利、女房子に限つて、わしや見せやせん。起請と共に火にくべる。てもマアお前は。勤めの中にもそれ程までに、眞實な。イヤサ、眞實のないは女郎の常。ナア、ちつとも知らず、うか〳〵と、あんまりの事、おりやをかしいわえ、ハ、、、、。ハ、、、。ハ、、、、。

〽笑ひに紛らす眞實は、口に云はれぬ心の禮。

小春　それで、わしも立ちますわいなア。

〽また伏し沈めば。

治兵　なんぢやい、立つの立たぬのと、あんまり人間らしい事云ふない。申し兄さん、今の状、ちよつと見せて下されいなア。

孫右　なんぢやいなア。ひつこい。なんでもありやせんと云うたら、なんで、其やうにわしの云ふ事を聞かんのぢや。イ、ヤイ、わしの云ふ事が、なんで聞かれぬのぢや。

ト氣を替へて云ふ。

治兵　そないに、ぽん〳〵云ふものやおまへん。惡いと思やこそ、あやまつて居るやおまへんか。それをば兄甲斐にぽん〳〵。

孫右　何もわしかて、ぽん〳〵云ひたい事はありやせんけれど、お前がひつこう云ふに依つて、ツイわしがて、ぽんぽん云ふのぢや。

治兵　ナア兄さん、わしも思ひ切つた女の所に居るのは、

ふつ〳〵嫌やに依つて、もう去にませうか。

孫右　オヽ、さうぢや、去なう〳〵。

治兵　サア、去にませう〳〵。

ト孫右衛門の手を引ッ張る。

孫右　ちよつと待ち。羽織を着んならん。お前先へ出かけ。直ぐにわしは出る。

治兵　サア、早う行きませう。早うお出でなされいな。

孫右　よし〳〵。羽織さへ着たら、直ぐに出る。

治兵　わし、先へ出かけますぞ。

ト治兵衛、先へ出る。孫右衛門行かんとするを、小春、袂を控へる。治兵衛の事頼むと云ふこなし。孫右衛門、呑み込んで居るといふ思ひ入れ。治兵衛側へ行き

兄さん、早うお出でなはらんかいなア。

孫右　アヽ、よし〳〵。ナア弟や。わしの意見を聞いて、よう思ひ切りやつた。内へ去んで、この事、叔母者人に話しをしたら、定めてお喜びになるであらう、よう得心してたもつた。わしも誠に嬉しう思ひます。併し弟、わが身も今夜は、定めて氣がむしやくしやして居るであらう。斯うしや。これから去んで一杯つけてもらうて、さうして四方山の話しをして。さうぢや、今夜は、わが身の内で、わしや泊めてもらふ。

ト云ひながら治兵衛の脊中を撫でる。治兵衛、氣の済まぬこなし。孫右衛門見て

治兵衛、今までは去なう〳〵とやかましう、云うて居て。治兵衛、どこぞ惡いのかえ。腹でも痛むといふやうな事ぢやないか。どうぞしたか。

治兵　イヤ、どうもしやしませぬけれど、ナア申し兄さん、一言、云ひ殘した事がありますのんやがな。これを云はんと、どうも胸がさばけませんのやがな。ちよつと云うたら惡うおますか。

孫右　そりやお前、さうお云ひぢやけれどな、今夜は、はなやひが惡い。どうぞ今夜は此まゝ去んでおくれ。その代りに、二三日したら、わしが連れて來る。その時に、お前、何なりと云ふがよい。

ト云ひながら、治兵衛の脊を撫でさする。治兵衛、孫右衛門を振り切る。孫右衛門、思ひ入れあつて

そないに、お前のやうに云うたかて、どうも仕様がありやんせがな。そないに思うて居る事を、云はさんのも惡い。そんなら、えゝ、ちつと位の事なら、云てお出で。やつて上げる。

治兵　そんなら、やつておくれなはるか。

ト治兵衛行きかゝるを。

孫右　オイ〳〵、ちよつと待ち。

治兵　なんでおます。

孫右　なんでおますやあらへんがな。ナアお前、最前あの小春を蹴つたり踏んだりしやつたが、あんな事おかんか。ひよつと目鼻でも瑕うたら、お前どうしようと思うてや。あんな事しやんなや。

治兵　よろしうおますがな。わしも思ひ切つたと云うたら、思ひ切つたのでおます。

孫右　サア、ちよつと云ふだけならよいが、手荒い事はしなや。

治兵　どうもしやしませぬ。ちよつと云うたら直ぐに出ます。ちつとの間、そこに待つて居ておくれなはれ。

孫右　云ふだけならよいが、手荒い事すると、わしや案じるに依つて、それで云ふ事は云はんならん。

ト云ひながら、治兵衛の後を付いて行く。

治兵　モシ〳〵兄さん、あんた、おいなはつたら、何も云ふ事が云はれやしませぬが。

孫右　それでも、わしや案じるに依つて、ツイ付いて行くのぢや。

治兵　ちつとの間、そこに待つて居ておくれなはれ、と云うて居るのに。聞分けのない、茶屋の二階へ上がつた事のない人といふ者は、せうのない不粋な。ちつとの間位。待つておくれなされなア。おいなはんなや。

孫右　ハイ〳〵、行きやしませぬ。

ト云ひながら、治兵衛内へ入る。後より孫右衛門、門口にて見て居る。治兵衛、小春の胸をつかまへ

治兵　足掛け三年この方、戀し床しも、いとし可愛も、今といふ今、エ、愛想が盡きた。

ト手を握り振り上げるを、孫右衛門見て

孫右　オイ〳〵、治兵衛々々々、そりやなんぢや。

治兵　なんでおますのや。

孫右　今、斯う振り上げた手は何ぢや。

治兵　なんにもしてやしませぬが。ちやんと膝に手を置いて居ますがな。

トいろ〳〵こなしあつて

今生の思ひ出に、たつた一つ。ヤイ赤狸め、たつたこの足一本の暇乞ひ。

〽と額際を、ハツタと蹴て、わつと泣出す男氣を、思ひ

やる程堪え兼ねて。

小春　こりや、モウいつそ。

孫右　ア、コレ、蹴られうが叩かれうが、そこを、チツと辛抱せずば、この状の容へ義理が立つまい。立つまいがの、小春どの。

ト孫右衛門、小春、双方よろしくあつて

〽孫右衛門に制せられ。

兩人　ハア、。

〽はつとばかりに泣き別れ、歸る姿もいた／＼しく、後を見送り聲を上げ、歎く小春も酷らしき、不心中か、心中か、誠の心は女房の、その一筆の奥深く、誰が文も見ぬ戀の道。

ト孫右衛門、治兵衛の姿を見て思ひ入れ、羽織を着せる。治兵衛いやといふ思ひ入れ。小春、莨入れより櫛を出し、孫右衛門に渡す。孫右衛門は治兵衛の髪を撫でつける。治兵衛その櫛を取り、小春へ投げようとするを、孫右衛門よろしく留めて、小春へこなし。小春もいろ／＼あつて

小春　ア、モシ。

〽別れてこそは。

ト双方よろしく思ひ入れあつて、三重にて。　幕

[illegible]の場

役名 ― 紙屋治兵衛。粉屋孫右衛門。治兵衛悴、勘太郎。丁稚、三五郎。舅、五左衛門。紀伊國屋才兵衛。江戸屋太兵衛。五貫屋善六。ちよんがれ坊主、傳梅。治兵衛女房、おさん。娘、お末。紀伊國屋小春。

本舞臺、三間の二重、向う店戸棚、納戸口、暖簾、鼠壁、狀差し、諸帳面の書割り、帳箱、上手折り廻して障子屋體、下手落間、後へ寄せて中庭口、爰に柿色の暖簾、紙屋と記しある。店戸棚にいろ／＼の紙類積み重ねし書割り、すべて天滿紙屋店の體。通り神樂にて幕明く。

ト爰に三五郎、縞の着附け、紺前垂れ、丁稚の形にて人形廻して傅をしてゐる、箱にいろ／＼の人形、風車など入れあり、側に勘太郎、人形を持ち、お末、折鶴

な持つて遊び居る見得。

三五　コレ、坊さん泣かんすな。この間淨瑠璃で見て來た、三十三間堂棟木の由來、柳のお柳を一段語つて、人形を使うて見せるぞや。東西〳〵。この所にて相勤めまするは三十三間堂棟木の由來、平太郎住家の段、始まり左樣。

ト拍子木を鳴らす事あつて、口三味で。

和歌の浦には名所がござる、一に權現、二に玉津島、三に下り松、四に鹽竈よ、ヨウイ〳〵ヨイヤサ。

ト人形を使ひ、淨瑠璃を語り居る。此うち下手より仕出し出て

仕出　ヘイ、御免なされませ〳〵。

ト　やかましく云ふ。三五郎、夢中になつて淨瑠璃を語り、人形を使ふ。

コレイナ申し、御免なされ。

三五　エ、誰れぢや。恟りするわい。

仕出　恟りするもないものぢや。最前からあれ程云うて居るに、えらい小僧さんぢやな。

三五　さうして、なんぢや。

仕出　半紙二折と、ついだ卷紙二本下され。

三五　エ、邪魔を云ふ人ぢやな。

仕出　お客樣を摑まへて、邪魔とはなんぢや。

三五　今、柳のお柳の木遣音頭の性根場ぢや。アタ邪魔。

ト　ぼやき〳〵、店戸棚のうちより、半紙二折、卷紙二本取り來り。

サア〳〵半紙が四十八文、卷紙が二十四文ぢや。

ト　仕出し錢を出し

仕出　オイ〳〵、四十八文に二十四文、〆めて七十二文。

錢を渡して、半紙と卷紙を受取る。

大きにお邪魔でござりました。

三五　邪魔は始めから解つて居るわい。

ト　唄になり、仕出し下手へ入る。

三五　サア〳〵、これから今の續きぢや。コレ〳〵孃樣孃樣、お前樣は、マア、おとなしいお方ぢや。最前から押默つて、鶴を折つて居なさるが、おとなしいお子ぢやわい。その鶴が折れましたら、糸を引ッ張つて、鶴の宙釣りをして、お目にかけませうわい。

すゑ　この鶴が折れたら、この背中へ秀之助を乘せて、芝居でもして見せて下されや。

三五　芝居事なら、何なりともお望み次第ぢや。

勘太　コレ、早う、坊に見せてや。

三五　オッと、承知々々。

ト人形を持ち、こなしあつて。

いよ〳〵、この所、只今の續き、その爲口上左樣。

トロ三味線にて、人形を使ふ。

母の柳を、都へ送る、ヨウイ〳〵ヨイヤサ。

ト淨瑠璃を語り、いろ〳〵と人形を使ふ。此うち下手より、ちよんがれ坊主傳海、破れ衣、小形の木魚二つ持ち出る。後より善六、尻からげ頰冠り、三味線彈きの體にて出て來り

傳海　歸命頂禮、やれ〳〵〳〵皆さん、聞いてもくれねえ、傳說阿房陀羅經。

善六　ノコ〳〵サイ〳〵。

ト善六、三味線を彈き、傳海、木魚を叩き、やかましく云ふ。

三五　通れ〳〵。

傳海　オイ相棒、通れとやい。

善六　通れとあらば、通らうぢやあるまいか。

傳海　通れ〳〵。

ト兩人ズッと上手へ通り、よき所へ住ふ。

三五　ヤイ〳〵、薄汚い形をして、何處へ通るのぢや。キリキリと出さらぬかい。

傳海　そこな丁稚め、通れと吐かすゆゑ通つたのぢや。ハハアン解つた。內で阿房陀羅經云はして聞く氣ぢやな。

善六　さうであらう〳〵。お好きとあれば、さらば妾で、やらかし申す。オイ和尙、一調子はり上げてやり給へ。

傳海　オッと合點。エヘン、これはこの頃、町中は申すに及ばず、色里は專ら御評判の阿房陀羅經、新物の始まり始まり。

トこれにて善六、三味線を取上げ、傳海、木魚を叩く。

やれ〳〵〳〵、歸命頂禮、どら如來、やれ〳〵〳〵、皆さま聞いてもくんさい。花の浪花の新地の小春に、貧乏紙屋の治兵衞が馴染んで、惡性狂ひが杉原紙でナ、節季は斷わり、仕切は延紙、得意は塵紙、內には小半紙、一束ならで、二束三文に負けてしまつた。着類着そげも茄子の淺漬、糠味噌くさい、內のお嬶に愛想もこつそり、盆も正月も小春の屋形へ、忍び紙とはうるさいこんだよ。

善六　ノコ〳〵サイ〳〵、野良サイ〳〵。

傳海　おやま狂ひに男は濡紙、小春は高土佐、內儀は結構な阿房の唐紙、これが天滿で噂の書置。

三五　ヤイ〱おのれ、そりや何を云ふのぢや。うぬら、誰れぞに頼まれて、内の旦那の治兵衛どのゝ惡口を吐かすのか。やかましうてならぬわい。

傳海　やかましいもないもんぢや。やかましう云ふのが惡けりや、なんで通れと云うたのぢや。

善六　さうぢや〱。又この文句は、誰れにも頼まれもせぬ、この節の流行り文句ぢやわい。

傳海　治兵衛と云うて、爰一軒ぢやあるまいし、この内の事やら、誰れが事やら知らぬが佛、阿房陀羅經。

善六　唄うて貰はにや喰はれぬ、此方の商賣。

傳海　この文句、さう唄うても惡いと、お上からお觸れもなければ、御法度といふお達しもなし。

善六　さうぢや〱。これだけ喋つて、一文も貰はずには去なれぬ。爰な旦那か、お家樣に逢うて錢貰ふまで、爰で一服しようぢやあるまいか。

傳海　それがいゝ〱。コレ素丁稚、莨盆なと貸して、咽喉も渇いた、茶を汲んで來い。

三五　エヽ、知らぬわい、勝手にさんせ。

ト善六、傳海、莨をのむ。誂らへの合ひ方になり、向うより太兵衛、羽織着流しにて出て、直ぐに本舞臺へ來り

太兵　治兵衛、内にゐるか。サア、金受取らう。こんな似せ金はいらぬ。正眞正銘の金返してもらはうかい。

三五　ヤイ〱、今日は怪體な日ぢやわい。旦那の惡口を云うて來る阿房陀羅經やら、旦那に金を返せと喚いてうせるやら、一體、おのれは何者ぢや。

ト太兵衛、ズツと内へ入り、傳海、善六と顏を見合せて思ひ入れ。

太兵　エヽ、おのれが何云ふぞい。コリヤ、治兵衛が内に居るなら、奥へ行て、太兵衛さまがお越しなされましたと云うて來い。

三五　否ぢやわい。用があるなら、このおれ樣に、事の次第を有やうに吐かせ。仕儀に依つたら取次いでくれるワ。

太兵　此奴、忌々しい素丁稚ぢやなア。この太兵衛さまが出て來た用と云ふは、この間治兵衛から受取つた廿兩は似せ金ぢや。今日問屋の仕切に遣つたれば、その尻が割れて、この太兵衛までが疑はれる。小春と腐りついたる二人の仲、揚代にせばまれて、ぎちかはして居るを氣の毒に思ひ、貸してやつた廿兩、似せ金を摑ませるとは太い奴ぢや。何かい、こりや侍ひめと云ひ合せて、この太

兵衛をやつたのぢやな。その侍めも、先刻に道でチラりと見た。大方爰らにへちまうて居らう。合點の行かぬさふめぢやと思うた。何ぢやゝら、人に背打ちを喰はしやアがつて、サア、その侍ひに逢はう。爰へ出され。似せ金師の大盗人め。ヤイ、權押しに騙りをひろぐか。

三五　えらさうにポン／＼云ひな。今日はナ、朝からお客樣があるに依つて、旦那樣もお家樣も奥に話してござるのぢや。そこでこの三五郎が店番をしてござるに、いろいろな奴めが出てうせてからに、こんな事云うて來て、何奴も此奴も怪體な奴等ぢや。待つてけつかれ。

　ト云ひながら、勘太郎、お末を連れ奥へ入る、後に三人思ひ入れあつて莨をのむ。合ひ方になり、向うより紀伊國屋才兵衛、茶屋亭主の拵らへにて出る。

才兵　どうぞ、太兵衛さまに逢ひたいものぢやなア。

　ト本舞臺に來り、

オヽ、太兵衛さま、爰にか。お前樣の在所を尋ねた事ぢやござりません。

　ト内へ入る。

太兵　尋ねたとは、何の用ぢや。

才兵　何の用かも凄まじい。濟ました顔付きで、コレこの廿五兩は返しまする。ようマア小春に惡性根を附けて、駈落をさせてくれた。サア、臺詞は後に廻して置いて、マア、何より小春を出してもらひませう。

太兵　ヤイ／＼才兵衛、手水を使うて來い。寢呆けて、何を寢言吐かすぞい。小春を駈落ちさせたの何ぞのと、そりやマア何の事ぢや。

才兵　何の事とは、てもさても、厚皮な物ぢや。ごて／＼云はずと、小春を返してもらはうかい。

太兵　コリヤ、小春を返せの出せのと、この太兵衛が隱したやうな云ひ分。これには何ぞ、慥かな證據があるかい。

才兵　證據のない事云はうか。キッとした證據があるのぢや。

太兵　面白い。ならば見ようか。

才兵　見せいで。慥かな證據は、この書置。

　ト懷中より書置を出し、

これ讀んで見さんせ。

　ト太兵衛の前へ投げつける。太兵衛取つて見て

太兵　何ぢや、小春の書置ぢや。へゝ、書置と云や、爰の治兵衛の胸に堪へやうわい。さらば、これにて讀み上げてやらうわい。

ト書置を開き。
ナニ〳〵、耻かしながら書き殘し參らせ候ふ、これまで厚うお世話になり候ふ身に候へども、いとしい人の顔立ち申さず、是非なく駈落ち致し參らせ候ふ。

傳海　忌々しい衒妻ぢやなア。

善六　それから後は、なんと書いてあるな。

太兵　待つたり〳〵。何ぢや。今まで紙治さまと、深う云ひ交せしは。

傳海　どうやら、文句が合ひさうなぞよ。

太兵　今まで紙治さまと深う云ひ交せしは、みな嘘にて候ふ。ヤア〳〵。

善傳　ヤア〳〵。

太兵　これまでつれなう當りしは、眞實ある太兵衞さまに張を持たし、請出されてほん〴〵の女夫になつて、末永う添ひ通したき願ひにて、わざとつれなく致し參らせ候ふ。ヤア〳〵、こりや、大分風が變つて來たぞよ。

傳海　太兵衞さん、どうやら色事師のやうに見えて來たぞえ。

善六　小春の眞實が見えて來た。何やら甘くさい文句ぢやなア。

傳海　後が聞きたい、早う讀んで

善傳　聞かしたり〳〵。

トやかましく云ふ。此うち上手障子屋體の内には孫右衞門、納戸口よりは治兵衞、立聞きして居るこなし。治兵衞、だん〳〵腹の立つ思ひ入れ。太兵衞、嬉しきこなしにて讀み續ける。

太兵　ハテ、忙しない。どうやら胸がどき〳〵と、何ぢやら、勝手が違うたやうな。エ、なんぢや。今まで紙治さまに云うたは皆嘘、誠は主に添ひたい心、その太兵衞さまが親方様へ廿五兩の手付け金、皆々よろしからぬお心にて候へば、所詮添はせては下さんすまい……なんの添はぬ事があるものか。添はいぢや〳〵。オヽ、可愛い奴なう……この身に飽き果て候ふゆゑ、私しばかり死ぬる心に極め參らせ候ふ。ヤア〳〵、そんならおれゆゑ、一人死ぬる氣かいやい。尤もぢや〳〵。エヽ、くれ〴〵酷いは太兵衞さま、身請さんすが眞實か、但しはわたしを騙すのか。なんの騙さうぞいやい〳〵。オヽ、可愛や、可愛や。どうか心が濟み申さず候ふゆゑ、太兵衞さまの存じよりの方へ駈落ち致し、暫く忍び參らせ候ふ。オヽ、可愛や〳〵。エヽ、もしも願ひが叶はずば、この文をと

くと御覧下され、せめて御回向願ひ上げ參らせ候ふ。アア、南無阿彌陀佛々々々々々。オ、、可愛や〳〵。
〽あゝ可愛やと大聲上げ、發り上げ〳〵、赤子の時に泣いたまゝ、廿餘年の溜め涙。
傳海　オ、、尤もぢや〳〵。
善六　オ、、道理ぢや〳〵。
〽側の二人も貰ひ泣き、身を揉む太兵衞が袂より、落つる狀を孫右衞門、拾ひ取るとも知らばこそ。
ト此うち太兵衞、袂より狀を落す。孫右衞門、三五郞を呼び、ソツと囁く。三五郞心得、落ちたる狀を拾ひ孫右衞門へ渡す事あつて奧へ入る。
太兵　コレ才兵衞、おりや小春の書置を見たので、癪が差込む。アイタ、、、。コレ傳海、貴樣の世話にして下さつたも、元はこれから。
傳海　サ、、さうぢや〳〵、太兵衞さま、こりや手延びになつたら、死ぬるぞえ、早う身請けをさんせい。
善六　今の書置に書いてあつた、お前の存じの處とは、心當りが
傳善　ござりますかな。
太兵　サア、その心當りは、これまで夢中の心意氣、存じの方とは、とんとないてや。ナア才兵衞。
才兵　イ、ヤ、さうは拔けさせませぬ。この書置が慥かな證據。サア、代官所へ連れて行て、この詮議をするのぢや。
ト引立てにかゝる。
太兵　マア、待つてくれ〳〵。さう思ふのも尤もぢやが、ア、、時に心當りとは、オ、、兎にも角にも落ちついては居られぬ。コレ、傳海も善六も來てくれ。
傳海　早く、小春の命を
善六　取留めねば、
太兵　安心ならぬ。
傳善　サア、行きませう。
ト三人行きかゝる。孫右衞門、思ひ入れあつて、上手から出る。
孫右　太兵衞どの、待つた、二人の奴等も用がある。
太兵　なんぢや。
傳善　わしらに。
孫右　オ、、用がある。性根を据ゑて、キリ〳〵そこへ出をらぬか。
太兵　ハ、ア。

ト誂らへの合ひ方。三人顔見合せて、ハッと下に居る。
孫右衛門こなしあつて、好きところへ來て住ふ。

孫右　コリヤ、坊主、われが名は傳海と云ふんぢやな。

傳海　ハイ、それがどうぞ致しましたか。

孫右　コリヤ、この間、坊主客になつて、石町の隱居と僞はり、宛名のない二十兩の證文を書かしたのはおのれぢやな。

傳海　エヽ。

孫右　太兵衛と一つ穴の賣僧坊主であらうがな。

傳海　イエ〳〵滅相な、太兵衛とやら、太郎兵衛とやら、ついに見た事もない。

孫右　その見た事もない太兵衛が、コレ傳海、貴様の世話にして下さつたも、元はこれから、オヽさうぢや太兵衛さま、こりや手延びにしたら死ぬるぞえ、早う身請けをさんせとは。

太傳　ヤア。

孫右　なぜ吐かした。

兩人　サアそれは。

孫右　それはとは。まだ〳〵見せる物がある。

ト以前の狀を出し開く。太兵衛見て、いろ〳〵こなし。

ちよつと申し上げ候ふ、この間浮無瀬にて賜はり候ふ拾兩、最早この頃の丁半に、なめられてしまひ候ふ、今日紙治方にて、彼の預かり手形の儀、首尾よく參り候はゞ、拾兩お貸し下さるべく候ふ。直に申すも如何と、お願ひ斯くの如くに御座候ふ。太兵衛さま、傳海より。なんとこれでも知らぬと云ふか。

兩人　サアそれは。

孫右　サア。

兩人　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

孫右　なんと、動きは取れまいがな。

太兵　もう白棄ぢや。ソレ。

兩人　合點ぢや。

ト傳海、善六打つてかゝるを、孫右衛門引ツ外し、太兵衛が帶にて打つてかゝるを、引つたくり、三人を散散に打ち据ゑる。

孫右　騙りひろいだ白紙の僞筆、うぬ等が企みを有やうに、サア吐かせ。吐かさにや猶も帶の峰打ち。ドゞどうぢやえ。

傳海　マア〳〵、待つて下さりませや。吐かします〳〵。

アイ〳〵、太兵衛さまに頼まれて、坊主客になつたは自分ぢやわいな。
孫右　オヽ、よう吐かした。サア善六、その時小春の身請けの客と吐かしたは、おのれであらうな。
善六　斯うなるからは、隱し立は致しません、お察しの通り。
孫右　ムウ、よし〳〵。そこな色事師どのも、手次手に。
太兵　ハイ〳〵、イヤモウ、その通りでござります。これまで小春が靡かなんだ色の意趣、ほんまにヤレ〳〵、アア、戀程切ないものはないわい。
孫右　うぬ等三人も、よい獄門道具ぢやわい。
善六　これはお見立、
三人　有り難う。
孫右　コリヤ、三人ども代官所へ引摺つて行く奴なれど、格別の情で何にも云はぬ。この上治兵衛に云ひ分はあるまいがな。
太兵　イヽエ勿體ない。なんのマア、申し分がござりませう。今では結局治兵衛から、わたしにお恨みはあらうけれど、イヤ申し紙治さま、小春がわしへの心中をお聞きなされて、ほんにヤレ〳〵。オヽ、さぞお腹が立ちませう。けれども、こりやもう惚れられたがわしの因果と、お諦らめ下されませや。
孫右　エヽ、ごて〳〵云はずと、とつとゝ早う歸らぬかい。
ト三人を門口へ突き出す。三人、いろ〳〵こなしあつて外へ出る。才兵衛、ウロ〳〵する。
コレ、小春の親方、お前樣には云ひ分はない。心配せずと去んだ〳〵。
才兵　ハイ〳〵、初めて參じまして、えらくおやかましう存じまする。
ト云ひながら、下手へ行つて、門口へ出て三人と顏見合せこなし。
コレイナ太兵衛さま、身請けが遲いと、小春は死ぬるぞえ。さうなつたら下手人、其まゝでは濟まさぬぞや濟まさぬぞや。
太兵　オツと、それはよう合點して居るわいの。
才兵　キツと念を押しましたぞよ。
ト下手へ入る。
太兵　色ゆゑに醜い目に遭ふは、色事師のお仕着。役者で云うたら、二枚目の色立役ぢや。
傳海　その色事師のお相伴で

善六　どえらい締の御馳走。
太兵　この見すぼらしい太兵衛の姿。
傳海　それも誰れゆゑ。
善六　元の起りは、
兩人　小春どの。
太兵　戀は切ないものぢやナア。
〽何を云ふやら魂ひと、共に投げたる腰の骨、互ひにいたはりいたはつて、跛ちが〳〵歸りける。後見送つて孫右衛門。
ト三人、なかしみのこなしにて向うへ入る。孫右衛門、思ひ入れあつて
孫右　コレ三五郎、治兵衛とおさんを呼んで來てくれ。
三五　ヘイ。旦那さん、お家樣、堂島の旦那が呼んでござりまする。
ト納戸の内にて
治兵　ハイ、只今それへ參りまする。
〽納戸を出づる主の治兵衛、後におさんも附添うて、面目なげに立出づれば。
ト治兵衛出て來り、後よりおさん、好みの形にて出て來り、下手に住ふ。

孫右　コレ治兵衛、最前からの樣子、殘らず聞いたであらうな。
治兵　一間の内で、始終の樣子を聞きましてござりまする。
孫右　聞いたとあれば、改めて云ふには及ばぬ。あのやうに云うて去んだからは、小春の身請けは太兵衛がするに極つた。コレ治兵衛、あの小春の文を見て、よもや心は殘るまいがなう。
さん　ほんにわたしも聞いて居りました。あれではよもや、小春さんの事は思ひ切らしやんしたに違ひはあるまい。こればかりはこちの人に、微塵も嘘はござりますまい。その證據にはわたしが立ちまする。
孫右　それ聞いて、この兄も安心しましたが、親仁樣や阿母は、昔氣質の御氣性ゆゑ、つい口先ばかりでは、御得心はなさるまい。親仁樣の疑ひを晴らす爲、なんと誓紙を書いてはくれまいか。
治兵　何がさて、誓紙なれば、何枚なりとも。
孫右　さうなうてはならぬ筈。ソレ、おさん、硯箱を。
さん　ハイ〳〵。
〽硯と紙を差出せば、比翼の誓紙に引替へて、今は天罰

起請文、小春に緣切る、思ひ切る、僞はりならぬ文言は、神や佛へ誓ひの一書、やう〳〵に書き終り。

ト治兵衞、起請文を認め、小刀にて指を切り、血判据ゑる。

治兵　これ御覽じて下されませや。

孫右　オヽ、これでよし〳〵。これも親仁樣や、阿母への心休めぢや。

さん　兄さんのお庇で、わたしも落ちつきました。子仲なして、ついに見ぬ固め事。これで二人の子供も仕合せといふものでござんすわいなア。

孫右　この氣になれば、商賣も繁昌しやう。得意大切、一家親族の喜び、此やうにやきもきと云ふも皆治兵衞が爲、家の爲、兄弟の子供が可愛さ。オヽ、子供の事で思ひ出した。誰れしも孫には目のないもの。この誓紙もわしが持つて去なうより、孫の手から、親仁樣の前へ出すが納まりがよい。お末を呼んで下され。

さん　アイ〳〵。

ト納戸へ向ひ、

お末〳〵。

すゑ　アイ〳〵、母樣。呼んでかいなア。

ト納戸から出て來る。

さん　オヽ、其方は叔父樣と一緒に、祖父樣の所へ行ておぢや。

すゑ　アイ〳〵、そんなら叔父樣と一緒に、お祖父樣の內へ行くのかえ。

さん　さうぢやわいなう。

孫右　それぢや、お末を治兵衞の名代に、この誓紙を持たして、親仁樣へ詫び言さゝう。

トお末の手を引き下手へ行く。兩人見送るこなし。

治兵　それでは、もうお歸りでござりまするか。今日は何かと、いかうお世話をかけまして。

孫右　なんの、禮に及ぶ事。他人ではあるまいし、いつ何時、この孫右衞門が世話になるやら、明日の事は、知れぬで持つた憂き世の中。

治兵　變り易い人心。

さん　變らぬものは、親子の情愛。

孫右　夫婦仲を睦まじう、商賣大事にして下されや。

治兵　左樣なれば、兄者人。

孫右　治兵衞、おさん、おさらばでござるぞや。

兩人　ようお出でなされました。

〽お末の手を引き立歸る。
ト孫右衛門、お末の手を引き向うへ入る。治兵衛、おさん思ひ入れあつて

治兵　アヽ、最前からのもやくやで、ほつくりと氣が盡きた。ドレ、一寢入りして來よう。

〽濟まぬ心の納戸口、暖簾押しあけ、奥へ行く、折からひよこすか三五郎。

トこれにて、治兵衛、納戸口へ入る、ト三五郎、目をこすりながら中庭から出て來り

三五　お家樣〳〵、もう何時でござります。

さん　三五郎とした事が、夜夜中のやうに何事ぞ。日も暮れるに間もあるまい。いつものやうに店を締めて火を點し、神明へも燈明上げましや。

三五　オツと合點。承知仕つて畏まり候ふ。

さん　ても、詞數の多い子ではある。さうして勘太郎は。

三五　坊さんは奥の炬燵で、わしが添乳をして居て、いつの間にやら、ツイうと〳〵と寢て居るうち、道頓堀の芝居を見物に行た夢を見た。コレお家樣、明日は芝居を見にやつて下されませや。

さん　何を云やるやら。最前からのどさくさを知らずに、寢て居たのかや。

三五　なんぢや、どさくさぢや。鼠を猫が追ひ廻すより外に、どさくさと云ふ事は知らぬのぢや。

さん　てもマア困つた子ぢやなア。

ト唄になり、おさん、こなしあつて、納戸の内へ入る。

三五　何が困るのか、とんと合點が行かぬわい。

トあたりを見て、傳海が忘れて行つた木魚を見付けてこなし。

こりや何ぢや。ヨウ、木魚が二つ。これは阿房陀羅經の持つてゐる木魚ぢや。成る程、いごらいごらと遊んでゐる者を阿房と云ふ。そこで阿房陀羅經。この間千日前で聞いて來た、なんたら心中の阿房陀羅經、さらば、これからお經の文句にかゝらうか。

ト三五郎をかしみの見得よろしく、道具廻る。

本舞臺、平舞臺、向う小形の襖、上手折り廻し障子屋體。下手、塀、格子戸の嵌りし入口、こゝに紙屋勝手口と記せし表札、その側に用水桶、取合ひに板の塀、すべて紙屋内奥座敷の體。爰に炬燵に蒲團をかけ、丸行燈、莨盆、などよろしく、治兵衛、炬燵

に寢て居る。側におさん、針箱を置き、針仕事の體。この見得よろしく幕明く。ト直ぐ床の淨瑠璃になり

〽門送りさへ、そこ／＼に、治兵衞は側に有り合す、定木を枕、轉寐の、あたる炬燵の小春時、まだ曾根崎を忘れずかと、退ける蒲團の內さへも、淚に濕るその風情、おさんは呆れ、つく／＼と、顏打まもり／＼。

さん　これいな申し、治兵衞さん、よう誓紙を書いて下さんした。わたしもこれで落ちつきましたわいなア。

　トおさん思ひ入れあつて、炬燵の蒲團をのける。治兵衞こなし。

エヽ、あんまりぢやぞえ、治兵衞さん。それほど名殘が惜しいなら、誓紙書かぬがようござんす。なぜにお前は其やうに、わたしが憎うござんすえ。

　トおさん泣く。治兵衞、起き上がつて思ひ入れ。

治兵　コレ／＼、そりやマア何を云やるぞいなう。子までなした仲に。

さん　イエ／＼、憎いさうな／＼、憎ましやんすが、嘘かいなア。

〽一昨年の十月、中の亥の子に、炬燵明けた祝儀とて、これ妥で枕並べてこの方は、女房の懷には、鬼が住むか蛇が住むか、それ程心殘りなら、泣かしやんせ／＼、その淚が蜆川へ流れたら、小春が汲んで飲みやらうぞ、あんまり酷い治兵衞さん、なんぼうお前がどのやうな、切ない義理があるとても。

〽二人の子供は、お前、なんともないかいな。

〽心の限り口說き立て、恨み嘆くぞ誠なる。

　トおさんよろしく泣き落す。治兵衞、さうぢやないといふこなしあつて

治兵　オヽ、尤もぢや／＼わいの。悲しい淚は目より出で。無念な淚は耳からなりとも出るならば、云はずと心見すべきに、同じ目からこぼるゝ淚、足掛け三年がその間

〽露ほども悋氣せぬ、其方に云ふも恥かしながら。

マア聞いてたも。この間も曾根崎で殘らず聞いた、小春めが不心中。今といふ今夢も覺め、思ひ切つては居るけれど、ソレ、先刻にも話せし如く、あの太兵衞めが急に身請けをするとの事。退いて十日も立たぬうち、請け出さるゝ義理知らずの、小春めが事は心殘らねど。

〽問屋中の付合ひにも、金の工面の盡きしゆゑ、小春を退いたのなんのと、得知らぬ奴の口の端にかゝる無念さ。口惜しいと、思はず淚を流したわいなう。

〽聞いて、おさんは摺寄つて。

トこれにておさん、思ひ入れあつて

さん　エヽ、そんなら、ほんまに小春さまは、お前に愛想つかしを云うて、太兵衞が處へ行く筈でござんすかいなう。

治兵　ハテ、きよと〱しい、その聲わいなう。

さん　オヽ、そんなら、小春さんは、生きて居る氣ぢやないわいな。死なしやんすわいなア。こりやどうせう。なんとせうぞいなア。

〽と立ちつ居つ、騷ぐ女房、騷がぬ夫。

治兵　ハテサテ、なんぼう發明でも、流石は町の女房ぢや。あの不心中者が、なんの死なうぞ。

さん　イエ〱、さうぢやござんせぬ。小春さんに不心中は、芥子程もないけれど、いつぞやよりお前の素振り、何を云うてもうか〱と。

〽悲しい目を見ようかと、案じ過して。

小春さんへ、いとしいと思はしやんす、治兵衞どのゝ爲ぢや程に、思ひ切つて下さんせと、掻口說いてやつた文。

〽退かれぬ義理と合點して、親にも替へぬ戀なれど、思ひ切るとの嬉しい返事。

これ程の心で、なんの太兵衞の所へ行かしやんしよ。請け出されたら其まゝに、死ぬる覺悟に違ひはない。

〽小春さんを殺しては、このさんが義理立たず。

どうぞ命が助けたい、思案して下さんせ。

〽初めて明かす女房の誠。

治兵　ムウ、そんなら、アノ不心中と見せたは、其方の頼みか。

さん　アイナア。

〽聞いて惘り。

治兵　ムウ。すりや、矢ッ張りおれを大切から

〽さうとは知らず、今までも。

義理知らずの、畜生のと、恨んだ心が恥かしい。

さん　アヽ、コレ、さう云ふ手間で、こなさん行つて、どうぞ殺さぬやうにして進ぜて下さんせいなア。

〽と急き立つ女房。

治兵　と云うて、小春が命助けるは百五十兩、せめて半金なりとも手付けを渡し、取留むるより外はないが、何を云うても、金の工面に盡きたこの身。

〽途方に暮るれば、おさんは摺寄り。

さん　ナウ仰山な。それで濟むなら、易い事ぢやわいなア。

〽立つて簞笥の小抽出し、開けて取出す綴交ぜの、紐つき袱紗押開き。

ト此うち、おさん、向う見付けの小襖を開ける。中に白木の簞笥。おさん、抽出しより、袱紗に包みし五十兩を出し、治兵衛の前に置く。治兵衛、恟りこなし。

治兵　ヤア、こりや五十兩。どうして、マア其方が。

さん　サア、この金の出所も、後で語れば知れる事。この晦日に、岩國の仕切の金に、才覺はしたれども、それは兄御と談合して、商ひの尾は見せぬわなア。小春さんの方は急な事、その五十兩と、後の殘りは。

〽と掻立つて、明けて取出す染小袖、兼ねて斯うとは白茶裏、黒羽二重も色變へぬ、淺紫の糸目結ひ、たつた鹿の子も惜氣なう、子供の物も掻き集め、内端に見ても二十兩。

これだけあれば。

〽よもや貸さぬと云ふ事は、ないものまでも有り顔に、夫の恥と我が義理を、一つに包む風呂敷の、内に情ぞ籠もりける。

わたしや子供は何着いでも、兎角男は世間が大事。小春さんを身請けして、あの太兵衛めに、一分立てゝ下さんせ。

〽と云へど、いらへも涙聲、治兵衛思はず手を合せ。

トおさん、よろしくこなしあつて、治兵衛の着る物を出し、治兵衛、思ひ入れあつて着る。おさん手傳うて着せる。

治兵　オヽ、過分なぞや。シタが、手付け渡して取留め、請出して圍うて置くか、内へ入れるにしてからが、マア、其方は、なんと。

〽云ひさして打萎るれば。

さん　マヽ、なんのいなア、必ず案じて下さんすなえ。ハテ、モウ、子供の乳母か、飯炊か、面倒ながら眞實の妹、持つたと思うて下さんせいなア。

〽云ふも胸まで突きかける、涙呑み込み〳〵て、夫に立てる貞節は、傍で見る目もいぢらしき。

治兵　何にも云はぬわいなう。コレおさん、親の罰、天の罰、神佛の罰は當らずとも、女房の罰が恐ろしい。

〽免してくれとばかりにて、伏拝む手を。

ト治兵衛、手を合せて拜む。

さん　アヽ、コレ〳〵、勿體ないわいな〳〵。手足の爪を剝しても、皆夫への爲ぢやもの、後の聞では詮ない

事。サア〳〵早う。コレ、三五郎。

トおさん、治兵衛の手を取つて泣き落し、思ひ入れあつて急くこなし。三五郎を呼ぶ。

三五　お家さん、何ぢやな。

ト出て來る。

さん　其方、これを持つて、旦那樣のお供して行きや。

三五　旦那樣のお供なら、北の新地か。其奴は嬉しい〳〵。

治兵　コレ、無駄口云はずと、この風呂敷包みを脊負ふのぢや。

〽渡す風呂敷、懷へ、金押入れて立出づる。

ト此うち治兵衛、金包みを懷中する。三五郎、風呂敷包みを脊負ふ。此うち五左衛門、親仁の拵らへにて出て來り、勝手口より入り、奥の間より出る。

五左　治兵衛どの、お宿にか。

〽ずつと入れば、夫婦はうぢ〳〵。

トこれにて、治兵衛、おさん、悔りこなし。

治兵　これは舅どの。

さん　父さん、なんと思うて、惡い所へ。

五左　ヤア。

治兵　ようお出でなされましたなア。

〽三五郎が脊負うたる、風呂敷見付けて。

五左　コリヤ阿房め、その包みを何處へ持つて行く。また質屋へうせるのか。此方へおこせ。

〽引つたくられ、悔り拍子、拔參りの、脊に知れたる心地にて、一間の内へ入りにけり。

ト此うち、五左衛門、三五郎が脊負ひし風呂敷包みを無理に引下ろす。これはと寄るを五左衛門、睨めつける。三五郎、悔りして奥へ逃げて入る。

大方斯うであらうと思うたわい。よう聞きさらせよ。着類着そげを質に入れて、お山狂ひに仕上げるのぢやなア。コリヤヤイ、女郎の誠とな、鬼瓦の笑顔とは無いものぢやぞよ。サア、手短かにおさんに暇やりや。女子の子は母へ付くのが世間の大法。お末は先刻に孫右衛門が連れて戻つた。その時に何ぢや。

ト懷より誓紙を出し。

コレ、この誓紙を、ひけらかしておれに見せた。ア、、えらいやうでも、何處か若い。こんなで行くのぢやないぞよ。誓紙の代りに去り狀書け。誓紙は役に立たぬわい。

〽引裂き〳〵、治兵衛が顏に打ちつけて、上へどつさり大臼形、おさんは聞き兼ね。

トこれにて、誓紙を引裂き捨て、キッとなる。おさん、思ひ入れ。

さん　コレ父さん、そりやお前、聞えませぬわいな／＼。此方の内の身代の衰へたのも、皆お前から起つた事。ないもせぬ銀山に掛つたと云うて、三十兩借り、五十兩借り、果句にはその銀山が潰れたとやら、元も子もないやうにしてしまはしやんしたぞえ。男氣な治兵衞どの、舅の事なり、云ひ出せば此方の耻と、證文を殘らず戻し、濟ましやんしたその時には、コレ、その怖い顏に涙を溢して、おれが爲の氏神樣ぢや、と喜ばしやんした事を、お前、よもや忘れはさしやんすまいがなう。また主の惡所通ひも、元の起りは、こなさんから起つた事。歷と仕分けて貰うた身代、マア何にして金が減つたぞ、と本家の不審が立つた時、ハテ、舅どのに取られましたと、鼻毛らしう云はれもせず、口へこそ出して云ひこそさつしやらぬ、志しを推量して、初手の間の茶屋通ひは、世間への聞えでさつしやるかと、ほんにやれ／＼、行かしやんす度々に、わたしや、コレ、うしろから拜んで居たわいな居たわいな。その大恩を打忘れ、阿房ぢやの、イヤたわけのと、假初めにも勿體ない。堪へて下され、こちの人。父樣、去んで下さんせ。

〽宥めつ叱りつ、兩方へ、我が身一つの切なさ辛さ、思ひやられて道理なる、思ひは同じ憂き思ひ、身の云ひ譯に紀伊國屋、小春は爰へ來かゝりて、樣子ありげな内の體、逢うては如何と、用水の、蔭に隱れて聞き居たる、とは知らずして、治兵衞は手を突き。

トこれにて、向うより小春、好みの拵らへ、頭巾をかむり出て來り、勝手口にて内の樣子を窺ひ、思ひ入れあつて下手へ忍ぶ。治兵衞こなしあつて

治兵　御立腹の段は御尤も。シタガ、おさんが申すは皆無駄言。私しが心に存ぜぬ事。おさんとは、どうぞ此まゝ添はせて下さりませ。

ト云ひかけるを、押冠せて、五左衞門、捨ぜりふよろしくこなし。

五左　イヽヤ、ならぬわい、何にも云ふ事、聞く事ないわい。おさんを戻せば事は濟む。併し、拵らへおこせし道具衣裳、改めて封付けて置かうわい。

トずんと立つ。

〽立上がれば、おさんは驚き。

さん　ア、コレ父樣、衣類道具も揃うてある。改めるには

及ばぬわいな。
〽駈け塞がれば、突き飛ばし、ぐつと引出し。
トこれにて治兵衛立ち上がらうとして、立ち惱むこなし。おさん立ち塞がるを、五左衛門突き退け、捨ぜりふにて簞笥の抽出しを明ける。
五左　ヤア、こりや、どうぢや。
〽一重二重抽出しの、數もありたけ押入れまで、底を叩いて五左衛門、口あんぐりとあき入れ物、さすにもさゝれぬ詞さへ、暫し呆れて居たりける。治兵衛とつくと心を定め、
ト此うち五左衛門、簞笥の抽出し殘らず明け、中を見て惘り、呆れたるこなし。治兵衛キッと思ひ入れ。
治兵　コレ舅どの、この五十兩は、女房おさんが衣類諸道具の代り、不足にはあらうが、もつてござれ。
ト以前の金包みを差出す。五左衛門こなしあつて、金包みを取上げ
五左　持つて歸らいでか。イヤ、まだ何と云うても大身代ぢや。シタガ、あの體裁を見るからは、いよ／＼娘は連れて去ぬ。サア／＼立たう。
〽と引立つれば。

さん　モシ、あゝ云ひ出しては聞かぬ父樣。わたしや、マア歸ります。云ふまでもないけれど、勘太郎が事頼みますぞえ。朝飯前に忘れずと、桑山の丸子、どうぞ服まして下さんせえ。
ト泣く。
治兵　オヽ、氣遣ひしやんな。思ひも寄らぬ今この仕儀。とんと心も落ちつかねど、そんなら暫く別れて居ませう。舅どのも、娘の事、まんざら酷うもさつしやるまい。つい戻るやうになろぞいなう。
ト治兵衛、よろしくこなしある。
さん　コレ、治兵衛さん、必らず短氣の出ぬやうに。
五左　エヽ、小面倒な暇乞ひ。キリ／＼と行かぬかい。
〽聲に目覺ます勘太郎。
勘太　母樣いなう／＼。
〽聞捨てに、後に見捨てる、子を捨てる、藪に夫婦の二股竹、長き別れと出でゝ行く。
トこれにて、炬燵に寢居りし勘太郎起きて、よろ／＼縺れる。おさんが抱かうとするを、五左衛門、割つて入り、勘太を酷く突き飛ばす。治兵衛、これを抱き起し、おさんと顏を見合せて愁ひのこなし。おさん後へ

引かゝるこなしにて、後へ戻らうとするを、五左衛門睨めつける。

五左　コリヤ、何をめそ〳〵泣く事がある。斯ら縁切つたら赤の他人。例へ明日が日、何處で逢うても、女房などと云うたなら、聞く事ぢやないぞよ。

〽口では云へど五左衛門、心殘して出で行く。

トこれにて五左衛門先に、おさん、奥へ入り、下手の勝手口より出て、泣く〳〵急き立てられて、向うへ入る。

〽後影、見送り〳〵、としや遲しと駈け入る小春。

ト下手の用水桶の蔭より、小春、兩人を見送つてこなし。勝手口より駈け入り、奥より出る。

小春　治兵衛さん、逢ひたかつたわいなア。

治兵　其方は小春、爰へはどうして。

ト思ひ入れ。

勘太　母様いなう。

〽慕ふ子を、見るに二人は、いとゞ猶、思ひ崩折れ、抱きしめ、賺せばすやすや、幼な子を、いぶりながらも口說き事。

ト勘太郎泣くを、小春抱き上げていぶりつけ、炬燵の中へ寝かす。

小春　何から云はうぞ、治兵衛さんいつぞや曾根崎で、愛想づかしの悲しいお別れ。思ひ切つては居るけれど、太兵衛に身請けしられては、所詮生きては居ぬ覺悟。この世の名殘にたつた一目と、來る事は來ても、折惡しく立聞きした內の様子。あれほど貞女なおさんさんに、あふぎの別れさせますも、皆わたしから起つた事、堪忍して下さんせいなア。

治兵　眞實な入譯を、聞けば聞く程、この身の誤まり。あのやうな女房が、三千世界にあらうかいなう。この云ひ譯には、其方もわしも。

小春　そんならお前も。

治兵　おいの。

小春　嬉しうござんす。

〽抱きしめたる泣じやくり、胸と胸とに云はせけり。

トこの時、奥にて三五郎謠ふ。

三五　高砂や、この金箱に餅入れて。

〽片言まじり、阿房の三五郎、机に載せし三つ具足、兩手に抱へ、二人が眞中。

トこれにて、奥より、三五郎、經机の上に、佛壇の鶴

瓶の花瓶、供物臺に、白餅の供物載せしを、目八分に
差上げ、片手に銚子を持ち出る。

サア〳〵、けうといもんになつたぢやないかえ。あの先刻に、お家さんの云はんすには、コリヤ三五郎よ、おれが留守になつたら、大方小春さんがござんす程に、さうしたら旦那様と祝言さすのぢや。われを頼むと云うて置かんしたわいな。そこでおれが思ひついて、花瓶の松に鶴龜、酒の取つたのがなかつたに依つて、水を銚子に入れて來た。仲人役はおれ様ぢや。禮には好きな虎屋の饅頭。コレ、今から阿房と云はんすなえ。サア〳〵、早う飲まんせ〳〵。

〽云へど二人はいらへさへ、死なねばならぬ知らせかと、覺悟ながらも今更に、目はうろうろとなりにける。

ハア、こりや二人ながら泣かんすの。コレ、泣かんすないの〳〵。ハヽン、さては嬉し涙ぢやなア。

小春　サイナア、其方の云やる通り、嬉し涙がこぼれたわいなう。さりながら、治兵衛さんと祝言しては、どうも、おさん様に。

三五　エヽ、なんの濟まぬ事はごんせぬわいの。お家さんは出し殼になつて、これ程甘い鰹節を、お前にやらんすこつちやもの。志しを無足にせずと、キリ〳〵飲んで獻さんせいなう。

治兵　ナヽ、こりや三五郎が云ふ通り、祝言ぢやと思や、無理もある。互ひに末期の水杯。

三五　オヽ、さらば、お酌を申さうかい。

〽涙ながらに取上ぐる、酒と水とは土器の、土になるまで葬禮の、一本花や鶴龜の、蠟燭立も消ゆる身と、思へばいとゞ胸せまる。

ト此うち、三五郎、土器を取つて酌する。小春、治兵衛飲むこなし。

サア〳〵、めでたうなつて來た。誰れぞマア、唄うたひが來いでな。

〽見やる外面へ、七つ子の、墨の衣に草鞋がけ。

トこれにて、下手より、お末、白着附け、墨染の衣、網代笠を冠り出て、勝手口へ來る。

すゑ　安養寺尼寺、常念はつち。

ト大きな聲にて云ふ。

三五　ソリヤこそ來たり。

〽と阿房は駈け出で、連れて入るを、顔見て恟り。

トこれにて三五郎、お末を連れて入る。皆々顔見て恟

りこなし。

治兵　ヤア、お末ぢやないか。わが身一人戻つたか。さうしてマア、變つた形をして。

すゑ　アイ、祖父様に、こんな美しいべゝ着せてもらうた。あまり此べゝは白いによつて、何やらたんと書いて下さつた。この書いたのを、父様や小母様に、ちよつと見せて來いと云うて、祖父様が、そこまで連れて來て下さつたわいなう。

治兵　ナニ、書いたのを見てもらへとは、ドレ〱。

〽あたふた脱がす墨染の、下には何か白無垢に、おさんが筆の散らし書。

ト小春、治兵衛立寄つて、お末の衣を脱がす。白無垢の着附けに、何か書いてあるを見て、兩人こなしある。治兵衛讀む。

ナニ〱、涙ながらに一筆しめし參らせ候ふ、先程、父樣と連立ち歸り候ふ節、小春さま御忍ばせの委悉かに見受け候へども、御存じの譯合ゆゑ、お目もじもなり難く、書き殘し申し上げ參らせ候ふ。

小春　ア、コレ申し、治兵衛さん、わたしにも讀まして下さんせ下さんせいなア。エヽ、兎角連合ひの命が助けたさ、小春さまへ、わりなきお願ひ申し上げ候ひしに、お聞き屆け賜はる嬉しさ、海山にも替へまほしく、なんぼう忝なう存じ參らせ候ふ。

治兵　ア、。この御恩を送り候ふには、末々お二人を御夫婦となし參らせ候ふより、外なく候ふ。

小春　その上、父様の眞實を聞き、私し事は、これまでの縁と諦らめ參らせ候ふ。また、お末ことは、こなたの乳にて育て申すべく候ふ、勘太郎が事を小春さまへ、くれぐれも願ひ上げ參らせ候ふ。

トこなしある。

エヽ、何の事ぢやぞいなう。こりやマア何の事ぢやぞいなう。そりや聞えませぬ。おさんさま、わしやお禮うける覺えはない。こりや、わたしをば術ながらすのかいな。わたしやよう諦めて居る程になア。ちよつと戻つて下さんせいなあ。コレ治兵衛さん、呼び戻して下さんせいなア。

〽立つて見、居て見、うろ〱と、譯も涙にくれ居たる、治兵衛は又も取上げて。

治兵　ナニ〱、舅五左衛門申し入れ候ふ、エ、なんの、アノ舅親仁の恩知らずめ。うぬが、なんの、碌な事を書

上げるものぢや。エナニ〳〵、舅五左衞門申し入れ候ふ、六年以前、あたはぬ銀山にかゝり、御損失をかけ候ふ所ろ、舅の出緣を以て、證文殘らず返し下され、千萬忝なう存じ奉り候ふ。エエ、そりや知れたこつちやわい。エ、、金子の減少、本家への聞えを思し召し、それゆゑの遊所通ひ、初めの嘘が實となるは、我れ人、若年の時を思ひ出し申し候ふ。ムゥ。先頃、娘に右の入譯、委細に承知仕り候ふゆゑ、輕少ながら金子百五拾兩、先刻衣裝相改め候ふ節、簞笥の大抽出しへ差入れ置き申し候ふ。エ、、すりや、金子を簞笥の抽出へ。オ、コレ、コレイノ、その簞笥の抽出を明けて見や。エ、、その下の方ぢやわいなう。

ト治兵衛、小春へこなし。小春、うろ〳〵抽出を明けて、金包みを取出す。

小春　オ、、爰にござんした。

治兵　オ、あつたか。エ、、右の金子を以て、小春どのを請け出し、長くお添ひ下さるべく候ふ。

小春　そんなら、先刻の無慈悲な事も、みんな情でござんしたかいなア。

治兵　ナニ〳〵、娘さん事は、お末諸とも、今日尼に致し。

オ、コレ、小春いなう〳〵、おさんが尼になつたといなア。

ト泣く。

小春　エ、、おさんさまが尼にならしやんしたら、わたしや、何とせうぞいなア。

ト泣き沈む。

治兵　ても、おさんは尼になつたといなう〳〵。

ト泣く。

エ、、娘さん事は、お末諸とも、今日尼に致し、貞玉、智月と法名つけ、天下茶屋尼寺、安養寺へ連れ行き、先刻下されし五十兩は、二人の者の飯料、即ち寺へ祠堂金に上げ申し候ふ。

〽皆まで讀まず、兩人は、わつとばかりに聲を上げ。

治兵　そりや胴慾ぢや、コレおさん。そりやわしを術ならすのぢや〳〵。所詮死なねばならぬこの身、子供の養育は誰れがする。聞えぬぞや、コレおさん。

〽情が仇となるわいやいと、悔み嘆けば、阿房も涙、小春は涙にむせ返り。

小春　そりや胴慾な。

〽おさんさま。

これまで悋氣もなされずに、逢はしてたまはるその御恩、こまぐ〳〵文のお頼みを、聞入れたのが枷になり。
〽こんな事ならその時に、なぜさう云うて下さんせぬ。
コレナア申し、治兵衞さん。
〽おさんさまを呼び戻し、千年も萬年も、添へ遂げて下さんせ。
その身ばかりか、此やうな。
〽この子は可愛う、エヽマアないかいな、見れば見る程いたいけな、愛に溺るゝ幼な子の、乳房を離るゝいぢらしさ、孤子となしたるも、皆わたしから起つた事。
堪忍して下さんせいなア。
〽堪忍してとばかりにて、取亂したる詫び涙、晴れ間も分かず降りしきる。折からうそ〳〵善六、太兵衞。
ト小春こなしあつて泣き落す。治兵衞思ひ入れ。下手より太兵衞、善六出て來り、勝手口から捨ぜりふよろしく入り、奥より出て來て。
太兵　ヤイ、治兵衞め、大方こんな事であらうと思うた。おれが請け出して女房にする小春。うぬは又、なんで引込んだ。
善六　コレ太兵衞さん、細言云ふにや及ばぬ。これまで重重意趣ある治兵衞め、捩り殺して腹癒せなされませや。
太兵　オヽ、合點ぢや。
〽双方より打つてかゝるを、こなたも爰ぞ一生懸命、さへぎる利腕、しつかと捕へ。
ト太兵衞、善六の兩人、脇差を抜いて切つてかゝる。治兵衞よろしくこなしあつて立廻つて、
治兵　コリヤ三五郎、お末、勘太郎を連れて、堂島の舅の所へ。
三五　それでも、わしが居ぬと、便りなからうがな。
治兵　エヽ、阿房云はずと、早う行け。
三五　合點ぢや。
〽おつと心得、三五郎、手早く二人を伴うて、表の方へ出でゝ行く。
ト治兵衞、小春を庇うて、太兵衞、善六の兩人と立廻りのうち、三五郎、勘太郎を脊負ひ、お末の手を引いて、勝手口から出て、下手へ入る。
太兵　コレ善六。
善六　オッと心得た。
〽云ふうち打込む善六太兵衞、折よく外せば、二人は同士打ち。

太兵　コリヤ治兵衛めが、切り居つた。

〽云ふに恟り、氣も顛倒、日頃の意趣に滅多打ち、乘り掛つて止めの刀。

トよろしくごつちやの立廻りあつて、トゞ太兵衛、善六、同士打ちしてへたる。治兵衛、顫へながら止めをさす。小春、恟りこなし。

小春　アレ。

治兵　小春、怖い事は何にもない。チツとして居や。

ト小春、治兵衛に抱きつく。治兵衛思ひ入れ。

小春　ヤア、すりや、二人を。

治兵　ア、コレ。

ト合ひ方、メリヤスになる。

コレ小春、怖い事はない。もう斯うなる上は是非に及ばぬ。かねて云ひ合した通り、最期所は網島の大長寺。そんなら直ぐに。

小春　人なきうちに。

治兵　サア、おぢや。

〽手を引き急ぐ悪縁の、末は涙の藻汐草、噂の種となりにけり。

ト治兵衛、小春の手を取つて、勝手口へ出る。この見得よろしく。

心中天網島（をはり）

伊賀越道中双六
（いがごえだうちうすごろく）



中村芝翫の澤井股五郎

伊賀越道中双六

序幕　荏柄天神鳥居先の場

役名――上杉春太郎。和田志津馬。荒巻伴作。伊木傳吾。村瀬新藏。池添孫八。奴、實內。本庄屋定七。輕業師、浮世與之介。同、山本小きん。新造、濱芝。澤井股五郎。

本舞臺、三間の間、荏柄天神鳥居前、向う高き朱の玉垣、これに引割れの幕を張り廻し、下手張番所、これも幕を張り、突棒刺叉の飾りつけよろしく、爰に若殿春太郎、羽織、袴を着し、鉢卷をして、上下に杭を打ち、これへ仕掛けの綱を張り、この上へ渡り、番傘をさし、扇を開き、輕業綱渡りの見得。側に浮世與之助、これを教へて居る。荒巻伴作、桃色の太夫扇を持つて口上を云ふ見得。輕業師小きん、桃色の肩衣をかけ、三味線弾きにて、控へ居る。村瀬新藏、拍子木を持つてゐる。輕業の鳴り物にて、賑やかに幕明く。

伴作　東西々々、いよ／＼太夫、支度にかゝりますれば、綱元へさしかゝらせます。

　トこの口上にて、春太郎、綱の上にてシャンと立つ。

モシ若殿樣、そこでお掛け聲／＼。

春太　ハットウ。

　ト歩行きして、ぐら／＼する。

小き　オッと、腰の固めが肝心々々。

春太　合點だや／＼。

伴作　只今お目にかけまするは、即ち牛若丸、五條の橋にて、辨慶と出會ひ、千人斬りの所でござりまする。

春太　ハットウ。

伴作　さて／＼／＼、さて又次の輕業は、その體、綱を放れまする。これを名けて獅子の洞入り洞返り、ズッと立つたは即ち、野中の一本杉。アリャ／＼／＼どつと譽めたり／＼……。

　ト春太郎、綱の上にてよろしくあるべし。

はて／＼／＼、また次の輕業は、足を放してしやんとと

まりまする。これを名けて、達磨大師は座禪の形。後は
車々々。
ト始終、下座の合ひ方。春太郎よろしくあつて、トゞ
綱より落ちる。皆々、立ち上がつて
皆々　オヽ、お危なうござります〳〵。
女皆　お怪我なされはしませぬか〳〵。
春太　イヤ、なんともない〳〵。
女皆　殿様、お白湯ぢや。
ト銀の茶碗に湯を出す。取つて飲む事
春太　足も腰も、めり〳〵する。撫つてくれ〳〵。
トこれにて綱を取りのけ、皆々、床几にかゝる。かすめて大拍子。
小き　左様なら、私しが鞠の曲をお目にかけませう。
トこれより、山本小きん、手鞠の曲にかゝる事よろしくあつて
作作　おれも咽喉がひツつくやうだ。
新藏　そんなら、おれが代つてやらう。
トそこへ代りに直り
最初、御覧に入れまするは、お染久松、相生の鞠。サアそれより、天上より片落しに下りまするが、龍門の瀧下りより鯉の瀧登り〳〵。
ト口上を云つてゐるうち、向うより和田志津馬、上下、衣裳にて、ツカ〳〵と出て来る。傳吾は、麻上下、大小にて、これを留めながら、花道にて、ちよつと立廻りあつて留まり
志津　コリヤ、何ゆゑあつて、志津馬が出仕を留めさつしやる。
傳吾　イヤ、誰れであらうと、御前へは叶はぬとの仰せゆゑ。
志津　何をたわけた。
ト振り拂ひ、舞臺へ来り
こりや、若殿春太郎さまには、なんと致したお身持ちでござります。
春太　コリヤ〳〵志津馬、目に角立てゝ何を云ふのぢや。
志津　モシ、爰を何れと思し召す。エヽ、あなた様はなア。
ト合ひ方。
お館でのお遊びさへ、あのやうな事をお好み遊ばさるゝと、常日頃御意見を申し上ぐるぢやござりませぬか。今日勅使御下向とあつて、大殿様の御名代、御勅使饗應の

お役目ぢやござりませぬか。それに、場所のお辨まへもなく、人も入込む荏柄天神の鳥居先で、輕業の學びをしての御遊興は、マア、どうしたものでござりまする。伴作どの、何れも御供してござりながら、飛んだり刎ねたりなぜお留め申しさつしやらぬ。誰れあらう、山内の執權、上杉家の若殿が、綱渡り、ほんに呆れて、物が云はれませぬわいの。

伴作　イヤモウ、志津馬どのゝ、其やうに云はれては、伴作、穴へも入りたい心持ちでござる。新藏、傳吾も、ともどもお留め申せど、お聞入れなき春太郎さまの御意ゆゑに

新藏　是非なうお相手になつて居る所を、貴殿に見付けられ

傳吾　面目を失ひましてござる。

與之　若殿様、ソレ御覽遊ばせ。爰は場所が惡うござりまする。お歸り遊ばしてから遊ばしませと、小きんや私しが、あれ程お止め申したぢやござりませぬか。

小き　私しどもの商賣が商賣ぢやに依つて、人につもらるるも、恥かしうござりまするわいなア。

ト兩人、こなし。

志津　イヤ、兩人ともに、何も其方達が存じた事でない。氣遣ひには決して及ばぬ。

春太　いつもは、氣に入りの志津馬ぢやが、今日は大分堅うなつたゆゑ、あれらが氣ぶさいに思ふわいやい。

ト小きん、こなし。

小き　モシ、志津馬さま、兼ね〴〵あなた様も御存じの通り、伴作さまのお引付けにて、先達て、フトお屋敷へ召されまして、あられもない、ひよんな藝が御意に叶ひまして、毎日々々お屋敷へ入込んで居りまする。

與之　御忠臣の御方々様には、定めて、ようない事をお進め申し上げますやうにも、思し召さうと、召さるゝ度々に、二人してその事ばかり

兩人　申し暮らして居りまする。

春太　氣に入りの志津馬が、爰で騷いでは惡いといふ事なら、止めう〳〵。併し、勅使のわたらせらるゝまで、安閑として居るも退屈、小きんも與之介も、これから、何をして遊ばう。思ひ付きはないか〳〵。

小き　されば、何がよろしうございませうやら。

伴作　モシ、よい事がござります。昨日小きんが差出した浮世繪合せを、寫してお遊びなされませぬか。

傳新　これはよろしうござりませう。
春太　サア／＼、料紙硯、繪の入つた文庫を持て／＼。
傳新　ハア、。
ト傳吾、新藏、料紙硯、繪の入りし文庫を持つて出て開き
春太　小きん、與之介、その繪を一枚づゝ取つて、見せい見せい。
ト與之介、小きん、文庫の内より錦繪を取出し、傳吾、新藏、紙を出し、墨を磨る。三味線入り、砂天になる。
與之　これが、扇屋の花紫といふ太夫が、外八文字道中の所でござります。
ト春太郎、取つて見る。
小き　これが、歌舞伎役者の阪東三津五郎が、源太になりましたところの錦繪、この振りを御覽じませ。
與之　とんと生きて動いて居るやうでござります。
ト春太郎、取つて見る。
春太　ノウ、源太とは、梶原源太の事か。
新藏　左樣でござります。淨瑠璃にも語る通り、阪東一の若武者と、みな人事にゆふべから
傳吾　通ひ詰めたる神崎の梅ケ枝。
小き　仲之町へ客をお送りして出た時の姿、これは松葉屋の瀨川。
與之　これが鶴屋の菅原。
ト段々と云ひ立て並べるを、一々手に取つて見る事あつて
春太　フウ、そんなら、寸分違はず、この通りぢやの。
小き　皆さん、御覽じませ。豐國といふ畫師は、似顏をよう書きましたぢやござりませぬか。
春太　それ／＼、志津馬、見い／＼。
ト志津馬に見せる。
志津　成る程、よう畫きました。なか／＼名人でござる。
伴作　イヤ、又、繪空事とは云へど、吉原の花魁ばかりは、繪に畫いたよりは生のものゝ方が、遙かに增つた美しう見えまするて。
ト春太郎は、この話しに乘つて、思ひ入れあつて
春太　コレ／＼伴作、すりや、その吉原の花魁とやらは、この繪に書いた姿形より、遙か增つて美しいと申すか。
伴作　ア、、この松葉屋の瀨川を御前にお目にかけたいなア例へ揚貴妃小町でも、及びませぬ美人々々。

春太　取分け予が氣に入つたは、松葉屋の瀬川とやら。
ト錦繪を取つて、チッとこなし。志津馬、思ひ入れ。
志津馬、氣に入りの其方ぢやが、なんと、この瀬川を、妾に抱へてはくれまいか。
志津　すりや、浮世繪のこの瀬川を。
小き　殿樣の御意に入つたも尤も。
傳新　志津馬さま身請けしてあげさつしやれ。
志津　各々、そりや何を云はつしやる。例へ御意に叶へばとて、傾城遊女が、上杉家の妾にせらるゝものか。
春太　ぢやと云うて、氣に入つた女郎ぢやもの。
志津　ハテ、廣い世界、この繪を以て尋ねなば、瀬川に勝つた女は、いくらも尋ね求めて差上げまする。
春太　傾城遊女は、妾にならぬゆゑ、彼れに勝つた女を尋ねてくれうとは、尤も／＼。でも、志津馬は、孔明ぢや孔明ぢや。
志津　然らば、勅使のお入りまで
伴作　神職方に御休息。
春太　これから酒ぢや。みな來い／＼／＼。
皆々　先づお入りあられませう。
ト三味線入り、大拍子になり、春太郎先に、小きん、與之介、伴作、新藏、傳吾、いづれも志津馬に思ひ入れあつて、鳥居の内へ入る。後に志津馬殘り、こなしあつて
志津　よく／＼思ひ廻すれば、若殿春太郎さまのお身の上御學問ばかりに御心を凝らされ、當春よりぶら／＼との御煩らひを、大殿樣御夫婦にて御案じ遊ばし、御心の晴るゝやうにと、御遊興をお許し。唄三味線でもする事か、荒々しき輕業の學び、朝早く入込む小きん、與之介。今更それをお諫め申せば、浮世繪の傾城、瀬川にお目がとまり、妾に抱へくれとのお頼み、當座の間に合せ、似寄りの女を尋ね求めんと、申しなだめて置いたれども、何かにつけて愚かしきお生れ。これをお止め申すには、一應には參るまい。ハテ、よい思案がありさうなものぢやなア。
ト思案のこなし。砂天、三味線入りになり。向ふより池添孫八、菖蒲革の袴、大小にて出て來り、志津馬を見て、ツカ／＼と來り
孫八　オヽ、若旦那志津馬さま、これに御座なされましたか。
志津　オヽ、孫八、其方は、供をして參るかと存ぜしが、

何として遲れ居つたぞ。

孫八 左樣でござります。先程、お屋敷を出ます時分から、何とも以て、實内めが素振り、合點ゆかずと存じます折柄、途中にて小路隱れ致しましたゆゑ、後追ひかけて尋ねましたが、たうとう姿を見失ひまするうち、あなた樣には早この社へお入りと承はり、どこがどうやら急いで參じました。遲刻の段は眞平御免なされて下さりませ。

志津 わしや又、何をして居つたと思うた。大儀々々。

孫八 イヤ、それにつきまして申し上げまするは、私し事は、誠に幼少より大旦那に召使はれ、成長いたしたにつけ、只今は御門弟の數に差加へられたる大恩は、山よりも高ければ、その若旦那のあなた樣ゆゑ、日頃から齒に絹着せず申し上げますが、必らず／＼お心にさへられますな。あなたの癖は御酒さへあがると、萬事をお忘れなさるゝ御性分で、大旦那が前々より御懇意とて、お世話遊ばすお心の知れぬ股五郎さまなぞと、あまりお心安うなされぬがよろしうござります。色と酒とは敵にせよとは、賢者の戒め。常にこの儀を、必らずお忘れ遊ばされまするな。

ト思ひ入れ。志津馬、こなしあつて

志津 深切なる孫八の意見、仇には思はぬ。忝ない。取分け今日は、勅使が御入りとあれば、キッと愼しみ居れば、必らずともに案じぬがよいぞや。

孫八 左樣仰しやつて下さりますれば、御意見を申し上げた私しめも大慶。勅使の御入りには、まだ暫らく間もござりませう。御膳所の樣子、何かの事は、私しが先へ參つて見廻り致しまするでござりませう。

志津 それは大儀、勅使御入りの樣子が知れたら、早速に知らせてくりやれ。

孫八 畏まつてござりまする。左樣ならば若旦那樣。

志津 そんなら孫八。

孫八 後程お目にかゝりませう。

ト大拍子にて孫八、思ひ入れあつて、鳥居の内へ入る。直ぐに向うにて

足輕 下がれ／＼、下がり居らう。

定七 ヘイ／＼、どうぞお通しなされて下さりませ。

ト矢張り右の鳴り物にて、羽織、着流し、町人の拵らへの本庄屋定七、これを足輕二人、六尺棒を突き、下がれ／＼と捨ぜりふにて、直ぐに舞臺の下手へ來る。

かすめし大拍子。

足一　ヤイ〳〵、勅使御下向のこの境内

足二　おのれ、ツカ〳〵どこへ行くのだ推參千萬。

兩人　下がり居らう。

定七　イヤ、私しは、切通しの町人、本庄屋定七と申して和田さまへお出入りの者でござりまするが、志津馬さまにお目にかゝらうと存じて、參じました者でございます。

ト此の様子を、志津馬聞きつけ

志津　コリヤ〳〵、下郎ども、咎めるは尤もなれど、苦しうない者ぢや。許せ〳〵……イヤ、定七、大儀であつた。近う〳〵。

定七　イヤ、これは志津馬さま、好い所でお目にかゝりました……左様なら御免なされて下さりませ。

ト志津馬の側なる床几へかける。

志津　今日は、勅使お入りの境内ゆゑ、一々人の出入りを改める折柄、其方が參りしは何事ぢや。

定七　イヤ、別の儀ではござりませぬ。彼の金子の儀につきまして。

志津　ア、、コリヤ〳〵。

ト云つては惡いとこなし。下部に思ひ入れあつて

イヤ、下部ども、其方達は、南の門へ參つて、必らず人を通すまいぞ。

足二　畏まつてござりまする。

トこれにて、足輕、下手へ入る。

定七　イカサマ、金銀は内證事。爰で申すは不調法。御免なされて下さりませ。

志津　イヤ〳〵、契約の日限が延引いたしたれば、無理とは存ぜぬが、この事は、股五郎どのを頼み置くが、未だ逢はつしやらぬか。

定七　ヘイ、まだお目にかゝりませぬ。

志津　いづれ、一兩日は、猶豫いたしてもらはずばなりますまい。

定七　待つてくれいと仰しやるのでござりますかな。

志津　如何にも。

ト定七、こなし。三味線入り、砂天になり、向うより股五郎、ぶッ裂き羽織、地袴にて、後より新造濱芝、禿の女浪、男浪兩人附き添ひ、この後に奴實内、笹の葉に鯉を通し、これを提げて出て來る。

濱芝　コレイナア、澤さんえ。花魁の云はつしやるには、

この文を、志津馬さんに逢うて、お渡し申せと云はんしておざんすわいなア。

股五　ハア、忙しない。志津馬に逢はしてやらうと思へばこそ、實内に云ひつけて、この社内まで連れて參つたのぢやわい。

吞雨　モシ、濱芝さん、志津馬さんは、あそこにござんすわいなア。

濱芝　ほんに、あそこにござんした……そんなら、あそこへ。

ト行かうとする。

股五　イヤ／＼待ちやれ。氣ぶさいな定七が居れば。

ト股五郎、新造に囁く。これにて濱芝、吞み込み、袖頭巾を冠り、禿も兩人と下手へ忍ぶ、股五郎、實内は本舞臺へ來る。

オヽ、誰かと思へば本庄屋定七か。

トこれにて定七、揉み手して、下手へ下がり

定七　イヤ、股五郎さまでござりまするか。

股五　おてまへのござつた筋は、この股五郎が吞み込んで居る。部屋住みの志津馬どの、吉原通ひの内證金。他聞を憚る、密かに／＼。いま御用立ておけば、兼ね／＼おてまへの願うて居るお國元の掛屋の御用が足さるゝ譯サ。

定七　さう聞きましては、惡い催促は出來ませぬ。今の願ひが何より第一。

志津　これは、股五郎どのには、いつに變らぬ拙者をお世話下さる段、有り難う存じまする。して、今日は、いづれへお越しなされましたな。

股五　イヤ、身共、遊漁が執心ゆゑ、滑川の邊りから境川あたりを網を打たせましたところ、御覽下され、あの如く鯉を三本打ち當てました。鯉は出世鯉と申しまするゆゑ、即ち、携へましてござる。

志津　それは好い、お樂しみでござりました。

股五　時に志津馬どの、貴殿に拙者が、折入つて賴みがござるが、なんとお聞き下されうや。

志津　斯ほど懇意の仲にて、これは又、改まつたお詞、何なりとも。

股五　サア、外の儀でもござらぬ。拙者が懇意に致す女、今日勅使の御入りと聞き、都人の裝束姿、拜ませてくれと、よん所なく願ふにつき、コッソリと最前、社内へ入れ置いた。爰は粹な貴殿、なんと大目に見てはおくり

やるまいか。

志津　アヽイヤ〳〵、股五郎どの、町人たる者、殊に女、左樣の儀を政道いたすが拙者どもが今日の役目、外の者の存ぜぬうち、一時も早くお歸しなされい〳〵。

股五　ハテ、そこが頼みぢや。さう堅う云ふものぢやござらぬ。好きな女、なんであらうと廓から寄越した便り、まんざら知らぬ者でもござるまい。

ト云ひながら、以前の濱芝と禿を前へ突き出す。矢張り砂天。

濱芝　志津馬さん、わたしでござんすわいなア。

ト袖頭巾を取る。

志津　ヤア、其方は瀨川が新造。

ト惘りこなし。

濱芝　モシエ、花魁からのお文で、早うあなたをお連れ申せとお迎ひに參じました。

股五　なんと、股五郎は粹か〳〵。なにが、一日逢はねば百日も逢はぬやうに、吸ひつき合つて居る仲。身共とは違うて親持ちの身分。この間より御前勤めに間がなうて廓へ行かぬを女氣で、もしや心變りでもしたかと案じ煩らうてさ、それで禿を附けて迎ひに寄越したと、實内に云ひつけて、ソッと爰まで連れて來たは、なんと、きついものか〳〵。

實内　併し、私しも御門を通る思案に困り、股五郎さまと御相談申して、勅使設けの御膳道具を運ぶを幸ひ、長持の中へ禿と一緒に打込んで、御膳所の荷物に紛れ、難なく社内へ入込ませ、最前より待たせ置いたも、志津馬さまのお笑ひ顔を見たいばかり。なんと結ぶの神でござりませうがな。

志津　エヽ、非常を糺すこの境内。おのれ實内め、憎い奴。とは云ふものゝ、おれも便りが聞きたかつたわい。

股五　ハヽヽヽ、さう解つて見れば、廓の座敷も同然。身共が持參の、ソレ、實内。

實内　ドレ、お持たせを開きませうか。

ト提げ重の中より、徳利杯を出す。前へ並べる。矢張り右砂天にて、股五郎飲んで、志津馬にさす。

股五　サヽ、一つ慮外ながら。

志津　イヤ、今日は誠に禁酒でござる。

股五　おやと申して、斯うなつた所で、殊に瀨川が新造の顔を見ては、どう飲まずに居られうぞ。サヽ、一つ。

實内　一つ二つは、御心配を休めまする御保養に相成りま

せうて。

志津　そんなら實内、只一つぢやぞ。

　ト一つ受けて飲む。

股五　ムウ、その杯、あまり見事。あれに居る本庄屋定七に遣はされい。

定七　ヘイ〳〵、これは有り難うござりまする。

志津　慮外申さう。一つ飲みやれ。

　トこれより杯事いろ〳〵あつて

股五　さて、杯は差措いて、おてまへ願ふ事、餘の儀でない。知らるゝ通り、志津馬どのと太夫が仲、所にさるお大身から身請けの御相談がかゝつたぢや。向うは千兩、二千兩の金子に差支へなき由。そこは人間、親方がそれへ遣りたいと云ふも尤もぢやが、先約なれば、是非志津馬が方へ五百兩で請けさするると、この股五郎が突ッ張つて置いたれど、今日明日に日限りの金。これまで取替へもある上なれど、今度のは格別の入用なれば、只管用立つてくりやるまいか。

定七　そりやハヤ、あなた樣のお頼み、如何やうとも致して上げませうと申したけれど、お部屋住みの志津馬さまといひ、大枚五百兩と申す金、なんで慥かなお引立がなければ。

股五　ムウ、その思案もして置いた……サ、、今一つ重ねて飲みやれ。

　ト定七、杯を受け、飲む事。股五郎も飲む事。

イヤ〳〵、これぢやあまりに小杯。こつぷに致さう。

濱芝　サア〳〵、これでお上がりなされませいなア。

　トこつぷを取つて、股五郎へ遣る。

股五　ムウ、この事〳〵……。

　ト一つ飲んで思ひ入れ。

こりや、お相を願はずばなるまい。

　ト志津馬へさす。志津馬、飲む事。

和田家には、重代の一振、正宗の名作がござるが、貴所御存じか。

定七　成る程、承はり及んで居りまする。

股五　その正宗を、質物に入れさせう。なんと、これほど慥かな引當はござるまいが。

　ト志津馬、こつぷを股五郎が前へ戻し

志津　サ、お相いたしませ。

　ト股五郎引受け飲む事

股五郎どの、その正宗は、先祖より傳はり、常の差し料

にも致さぬ重寶。なか〳〵寶物などには。

股五　ハテ、一つ鍋の物喰つて居る拙者、その大切なる刀なればこそ、五百兩の質に預からうと申すのぢやござらぬか。ほんの當座の間に合す金さへ濟ませば、事は濟むと申すもの。今度武將の若君、御元服の御祝儀、諸大名より銘作の劍、献上あるべき折柄、正宗多きその中にも和田行家が正宗は、勝れて無双の名作、殿より御所望あるは必定。その時無ければならぬ大切の刀、暫らく用立て、其うちには股五郎が親類は歴々、才覺して取戻して進ぜますワ。

實内　左樣とも〳〵。股五郎さまの御親類は、城五郎さまと云つて、足利家の眤近にござれば、五百兩や千兩は、ついこの奴が、お使ひに參つても出來る金。

股五　氣遣ひせずと、サア、志津馬どの、その趣き、一札書いて渡さつしやれ。

志津　如何にも。

　ト鼻紙へ、さら〳〵と書いて渡す。

股五　覺え。一つ、五百兩の金子御持參下され候はゞ、重代の正宗を引替へに相渡し申すべく候ふ、以上、月日、本庄屋定七どのへ、和田志津馬。

　ト定七、この一札を受取り、懷中して

定七　左樣ならば、早々金子調達いたし、股五郎さままで持參いたすでござりませう。その時、必らず正宗とお引替へを。

股五　氣遣ひ致すな。身が金鐵ぢや。

定七　モシ、云はぬ事は聞えませぬが、利足は二割、三月限りでござりますぞ。

股五　オヽ、それも承知々々。なんと和田氏、よい手筈であらうが。めでたい〳〵。

實門　めでたい次手に、打つて置け。

皆々　アヽ、ヨイ〳〵ヨイ。

　ト皆々手を打つ。

股五　祝ひにも一つ。

　ト大杯にて、グッと呑み

サア志津馬どの、これから太平に呑んだり〳〵。

　ト云つても、志津馬トロ〳〵醉が廻りしこなし。眠りの思ひ入れ。

濱芝　これはしたり、志津馬さん、きつう酒が過ぎたさうな……ムウ、それ〳〵、この間、花魁がきつう酒に醉はしんた時、藥の入つた印籠を預けて戻らしやんしたを、

今日持つて來たこそ幸ひ。
ト濱芝、懷中より印籠を出して
この中にある紫金錠。醉醒ましに。
ト印籠の中より藥を出し、志津馬へ服ませ。
この印籠は、股五郎さん、キッとお前に戻しますぞえ。
股五　オ、印籠、慥かに受取つた。
ト股五郎、印籠取つて、腰へ下げる。
定七　ドリヤ、私しは、もうお暇申しませう。
股五　定七、とくと合點か。
定七　委細畏まりました。
股五　實内、來やれ。
實門　サア、ござりませ。
ト唄になり、股五郎、實内を連れて、鳥居の內へ入る。
定七、向うへ入る。
濱芝　モシ、志津馬さま。花魁のお待ちかね。
禿二　早う廓へごさんせいなア。
ト三味線入りの拍子になり、鳥居の內より、春太郎、伴作、傳吾、新藏、小きん、與之介、いづれも出て來る。
春太　志津馬、どれへ參つた。
小與　志津馬さま〱。
ト志津馬、覺めぬ思ひ入れ。
伴作　ヤア、志津馬どの、勅使お入りのこの境內、それに居る女は。
傳新　そりや何者でござる。
志津　サア、この者は。
トあたりの文を新藏、見附けて
新藏　伴作どの、見さつしやい。志津馬さま參る、川よりといふ文が、爰にあるからは。
伴作　さては瀨川が所から使ひにうせた女だな。
春太　フヽ、そんなら、志津馬は、瀨川に。
新藏　志津馬どの、最前、春太郎さまへ御意見申し上げられた、舌も乾かぬ其のうちに。
傳吾　廓の者を引き込んで、身持ち放埒。
春太　フウ、すりや、この文は、瀨川が方より、志津馬の所へ寄越した文か……コリヤヤイ、おのれ、傾城遊女を、妾にさす事はならぬと、わしをやり込めて、瀨川をわれが色にしおつたな。おりや、腹が立つて腹が立つてならぬわいなう。
志津　イヤ、春太郎さま、全く左樣な儀でも。

伴作　ヤア、云はつしやるな。兼ね〴〵貴殿と瀬川が事は一家中に誰れ知らぬ者はござらぬ。その女の所から來た使ひを、勅使お入りの境内へ入込ませて、事が濟まうと思はつしやるか。

新藏　御親父行家どのゝ耳へ入つたら

傳新　濟みますまいぞ。

志津　イヤ、伴作どの始め、いづれもに見咎められしは、この身の不運ではござれども、この者どもを、私しが呼び寄せたと申す儀でもござりませぬ。これには、樣子が。

春太　默れ〳〵、不屆き者め。コリヤ志津馬、向後、目通り叶はぬぞ。

志津　ナニ、お咎めゆゑ、お目通りを、

トこなし。

伴作　お目通りとは、まだ〳〵、若殿樣のお慈悲、大殿さま上聞に達せば、すぐに

傳新　縛り繩は知れた事。

ト小きん、思ひ入れあつて

小き　憚り乍ら、御意に叶ひ御奉公に私しなき志津馬さまなれば、決して御前の御意をお背き遊ばさるゝと申しまする事ではござりますまい。この女中の、この場へ見えたには定めて深い樣子もござりませうが、皆樣が口々に仰しやつては、斯ういふ譯ぢやといふ事も、あからさまには仰しやられませぬ事もござりますれば、まづ〳〵お靜かに譯をお聞き遊ばしませいなア。

與之　左樣でござりまするとも。只今、小金が申し上ぐる通り、これには譯がなければ叶はぬ。それに伴作さまのやうに、荒々しう仰しやつた時には、例へ若殿樣へ差上げらるゝお心でも、是非なう御自分の不義になつて、御難儀を引受けておしまひ遊ばす事も、世間にある習ひ。

小き　伴作さま。

春太郎さま。

兩人　なんと、左樣ぢやござりませぬか。

ト思ひ入れ。足輕、向うより出て來る。

足輕　ハツ、申し上げます。只今、勅使千草の少將さま、櫻の馬場まで御着でござりまする。

春太　早お勅使の御着とな。

伴作　馬場の先までお出迎ひ。

春太　伴作は、御膳所、萬事志津馬になり代り

志津　すりや、役目の儀は、叶ひませぬか。

傳新　目通り叶はぬ。立たつしやい。
志津　ハア、。
春太　皆も一緒にお出迎ひ。
皆々　先づ御休あられませう。
　ト三味線入りの大拍子になり、春太郎、傳吾、新藏、向うへ入る。伴作は、鳥居の内へ入る。ト與之介、小きん、濱芝の三人
三人　こりや、ひよんな事になりましたなア。
志津　ナニ、小きん、なにサ。一旦若殿の御不興を蒙むるともお詫びの仕樣も思案もあらん。必らず案じぬがよい。差當つて、爰に斯うしても居られまい。何卒、廓へ。
濱芝　畏まりました。御恩になつた志津馬さまのお頼み、少しも早う。
與之　裏口から、三人して、廓へ送り届けませう。
志津　よいやうに頼んだぞ。
濱芝　左樣ならば、志津馬さま。
與小　サア、參りませう。
　ト大拍子、唄になり、濱芝、禿兩人、與之介、小きん附いて下手へ入る。志津馬、こなしあつて

志津　柔和溫和の春太郎さま、傍から寄つていろ〳〵な、惡い事をお進め申し、とゞはこの身にかゝる難儀。お目通り叶はぬとの御意なれども、お後を追うて今一度、身のお詫びを。さうぢや。
　ト三重にて、志津馬、向うへ入る。ト伴作、實內、鳥居の內より出て來る。
伴作　その手紙、見るに及ばぬ。持つて行け〳〵。
實內　これは怪しからぬお腹立ち。何は兎もあれ、股五郎さまお遣はされましたこの手紙、御覽遊ばされましたら、事は解りませうでござります。
　ト手紙を差出す。
伴作　イヤ〳〵、股五郎が辯舌に云ひ廻され、格別の金子まで用立ち遣はしたこの伴作、後を變じられては、身共武士が立たぬわい。
　ト手紙を取つて捨てる。
實內　モシ、これは大切なお手紙、投げ捨てゝよいものでござりませうか。
　ト手紙を拾ふ。この以前より、股五郎出て窺ひ居て、
股五　武士が立つの立たぬのと、伴作どの、そりや何を御意なさるゝ。

伴作　ヤ、股五郎か。おのれ、その分では置かれぬ。眞ッ二つに。

ト刀に反りを打つてかゝるを、股五郎、留めて

股五　待たつしやれ。何もおてまへに、切らるゝ覺えはござらぬぞ。

伴作　覺えがないとは、お谷が事。男を拵らへ、駈落ちをされて、身共が恥辱であるまいか。

股五　サヽ、それおやに依つて、拙者が心腹の程、詳しく認め遣はしたこの書面、なぜ讀んで御覽なされぬ。

伴作　フッ、すりや、あの手紙に。

股五　貴殿の武士の立つやうに、工風いたして置きましたて。

伴作　ドレ。

ト大拍子。手紙を取つて開き見て

ナニ〳〵一御手紙で申し上げ候ふ、行家娘お谷こと貴殿へ、兼ね〴〵御執心にて、お頼みにつき、拙者も色々骨を折り、口說き候へども、一向に聞入れなく、不義徒らにて家出いたし候ふ上は、今さら力に及び申さず候ふ。この上は貴殿の恥辱を雪ぎ候ふには、老ぼれの行家を毒殺なし、相果て候ふ後にて、兼ね〴〵行家工風を凝らし居り候ふ新田開發の儀、さつた山の諸木を伐り拂ひ、材木となし候へば、格別御益に相成り候ふ儀、その後へ直ぐに田畑を作らせ候へば、凡そ十萬石餘り、地面出來申し候ふ、これを貴殿の御工風と仰せ立てられ候はゞ、格別の御奉公にも相成り候ふ儀、千石や二千石の御加增は目のあたりに候ふ。その節は、お約束の通り、拙者へも五百石以上の御加增下され候ふやう、お取計らひ下さるべく候ふ、まつた行家を毒殺の儀は、實內に渡し置き候ふ別紙の藥種を買ひ集め、明日の茶の湯の節、相用ひ申し候ふ間、お谷が事はこれにて御料簡下さるべく候ふ以上、月日、荒巻伴作どのへ、澤井股五郎。」

股五　なんと、拙者が心底に、隔てなき所、これにて御安堵下されい。

伴作　ハヽ、股五郎どの、貴所を疑ひしは、全く伴作が足らぬところ。御免下されい〳〵。

ト兩手を突き、辭儀をする。

股五　して、毒に用ゆるその藥種は、實內、云ひつけ置いた通り、買ひ集めしか。

實內　それを忘れてよいものでござりませう。

ト懷中より小風呂敷を出す。

股五　ドレ〳〵、砒霜石。斑猫は賣買を許しませぬゆゑ、殿中に用ゆる毒藥、我が家に先祖より傳へありし秘法は五木八草に濕棒しゆうの二味を加へ、細末にして服ますれば、立ち所に命を落す妙藥、幸ひ、明日茶の湯の節、釜へ仕込んで呑ませんと、買ひ集めしこの藥種、實内五木八草濕はあれども、今一味不足いたして居るは。

ト改め見て、思ひ入れ。

實内　左樣でござります。とんと棒せうを失念仕りました。早速調へ仕込みまするでござりまする。

股五　コリヤ、一品でも不足しては、効能が薄いぞ。

件作　實内、ぬからぬやうに、圍ひの釜へ。

實内　斯ういふ事にかゝつては、五分でもやるものぢやござりませぬ。

股五　ハテ、小氣味のよい奴ぢやなア。

トばた〳〵、大拍子になる。股五郎、件作、上下へ小隱れする。孫八、ツカ〳〵と出て、實内が持つて居る手紙を取つて行かうとするを、實内、やらじとその手を押へて

實内　コリヤ孫八、物をも云はず、おれが持つたるこの手紙を、引ッたくつてどうするだ。

孫八　今朝から、うぬが怪しい所置振り、大事の場所へとんだ奴を引入れたも、大方うぬがみんな手引。怪しい手紙と見たからは、引ッたくつたが何とした。

實内　それを見られて堪るものか。

ト手紙へ手をかける。

孫八　うぬに渡してなるものか。

ト太鼓入りの鳴り物になり、手紙を枷に摑み合ひの立廻りよろしくある。この時、向うにて

呼び　お勅使のお入り。

ト兩人、これを聞いて

孫八　ナニ、お勅使のお入りとや。

實内　なにを。

トまた立廻りて、振りほどき、實内、手紙を取つて、ツカ〳〵と花道へ行く。草履を取つて、孫八目がけ、打ちつける。これを孫八、よける。この間に實内、逃がれて一散に向うへ入る。

孫八　南無三、彼奴を。

ト行かうとする。上下より以前の股五郎、件作出て、孫八をちよつと突廻して支へる。また向うにて

呼び　勅使のお入り。

三人　ハツ。

ト是非なく三人、ハツとこなし。孫八は、無念のこなし、下がり葉になり、この仕組みよろしく。

幕

二幕目　和田行家屋敷の場

役名――和田行家。同妻、柴垣。同娘、お谷。若黨柘榴武助。同、池添孫八。腰元、千種。同、小萩。伊木傳吾。村瀨新藏。奴、實內。荒卷伴作。佐々木丹右衞門。澤井股五郎。

本舞臺、三間の間、常足。二重、大形の唐紙、壁に竹刀木刀掛けてあり、上手九尺の圍ひ、枝折り門、いつもより餘程大振りにて、門の戶に太布を張り、これに鐵物の書き落し、しやんと閂しめるやうにして、門の外、見越しの松、水門の入口、高塀。すべて行家屋敷のかゝり。爰に柴垣、老けたる女房の拵らへ、紋付きの着付け、帶付きの形にて、圍ひの風呂に、炭火をさして居る。この側に腰元兩人、箱より茶の湯道具、一つ〳〵出して居る。平舞臺に、新藏傳吾、袴、股立ちの拵らへにて、面小手、木刀を傍へ置き控へる。下手に孫八、袴、大小の拵らへにて控へる。

新藏　今日は、先生の御不快は少しはお心よい方でござるかな。

傳吾　兩人の者、お見舞ひかた〴〵、稽古に參つたと

兩人　申してくりやれ。

腰兩　畏まりました。

ト腰元、手をつき、こなしあつて

千種　村瀨新藏さま

小萩　伊木傳吾さま

兩人　お見舞ひでござりまする。

ト上手の柴垣は、こなしあつて

柴垣　これは〳〵、新藏さま、傳吾さま、ようこそお見舞ひ下されました。用事に取りかゝつて居りましたれば、お心安いに任せ、これより御挨拶申し上げまする。お許しなされて下さりませ。

新藏　見ますれば、お風呂の炭火をなされてぢやが、お客でもござりまするか。

柴垣　左樣でござりまする。夫行家事も、一兩日は、ちと心よい方にござりますゆゑ、保養がてら、茶を立てゝ樂しみたいと申されますゆゑ、只今、圍ひの飾りを致して居りますやうにござりまする。

傳吾　それは重疊。茶でも立つて御覽なされようとあるは、餘程お開きが附きましたと見えまする。

新藏　然らば、稽古場へ參つて、二人していがみ合ひまするでござる。

柴垣　隨分とも、御精をお出し遊ばしませ。

兩人　左樣なら、御免下されい。

ト合ひ方にて、傳吾、新藏、奧へ入る。孫八は、兩人の腰元に、取次いでくれろと仕方で賴む。腰元、呑み込んで

千種　申し奧樣、最前から孫八どのが、何やらあなた樣にお願ひ申し上げたい事がござりますとて、控へて居られまする。

小萩　ちやつとお逢ひなされて遣はされませいなア。

柴垣　ナニ、孫八がわしに逢ひ度く申して、待つて居るとか。

ト云ひながら、此うち飾り付をしまひ、圍ひより出て

オヽ、孫八か。なんの用ぢや。爰へおぢや〳〵。

孫八　ヘイ〳〵。

ト孫八、思ひ入れ、二重の下の前へ進み出て

奧樣、大變な儀に相成りました。あなた樣の御心中、お察し申し上げまする。

柴垣　サア、昨日は勅使設けの場所にて、云はうやうもなき志津馬が放埓、若殿樣を初め、一家中の目にかゝつた上は、打ち放しても飽き足らぬ奴なれど、部屋住みながらも、御知行戴いて居れば、なか〳〵、我が子ながらも、手前の自由に計られぬとあつて、今朝も夜明けぬうちから、丹右衞門さまを、お賴み申して、伺ひ立てられたからは、よもや命には及ぶまいが、所詮、內へとては思ひもよらず、お爺が家出しやつた上に、また志津馬まで勘當せにやならぬ仕儀になつたわいの。

孫八　すりや、丹右衞門さまを以て、伺ひを立てられましたとな。エヽ、情ない事になりました。そりや、これがお身に障り、大旦那の御病氣が重らねばよいが、これが又一倍、苦勞に相成りますて。

柴垣　サア、わしもそれを案じ過したが、聞いて下され。

また男は男だけの料簡。旦那どのには、一向苦にもさつしやらぬ樣子。晩には茶をするとて云うて、それの支度をなされてぢやわいの。

孫八　そりや、我慢にも仰しやりませうが、お心の内が思ひやられまするて。

ト兩人、しかく云ふ。合ひ方になり、向ふより股五郎、馬乘り袴、大小にて、後より奴實内、紺看板、木刀差し出て來る。

實内　モシ、股五郎さま、ちよつと申さにやならぬ事がござります。マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。

股五　云はねばならぬ事とは、そりや何事だ。云ひ合せた手都合はどうぢや。

實内　サア、その中でござります。藥種は殘らず擣ひましたが、昨日孫八が、何やら書きつけた樣子ゆゑ、彼奴に出逢はぬやうに、今朝からはつき歩いて居りますから、どうも仕込む間がござりませぬ。

股五　ナニ、孫八が書いた樣子ぢや。

ト考へる事あつて

そんなら斯うせい。われは外に待つて居て、身が内へ入つて、何か孫八に用事を云ひつけて、脇へ追ひやるワ。その後へ入込んだら、十分に計られやうがの。

實内　彼奴さへ居らねば、どんな事でも出來まする。

股五　そんなら、外に待つて居れ。

實内　心得ました。

ト舞臺へ來り、股五郎、スツと内へ入る。

股五　さて〳〵柴垣さま、何とも申し上げまする詞もござらぬ。志津馬どのお身の上、承はつて驚ろき入りましてござる。

柴垣　御推量なされて下さりませ。親の顏へ泥を塗りました志津馬が放埒。喰ひ裂いても猶飽足らぬでござりまする。

股五　イヤ、それも若氣の至り、世間にない習ひでもござらぬ。ハヽヽヽ。それについて孫八、今日は稽古も休み日かと心得居つたところ、門弟中、追ひ〳〵詣り越したと承はつて、立歸つてござる。

孫八　仰せの通り、旦那のお心は、親子と申せど、別々に御知行下し置かるれば、悴の放埒を以て、一家中の稽古怠るは、猶々以て申し譯立ち難しと、お稽古は矢張り平日の通りでござります。

股五　それは、ハヤ、御氣丈な儀と申すは表向き、御病後

の事、定めてお疲れもござらう。爰が彼の幼少の時分より、格別のお世話、居候ふに居る御恩送り・拙者、先生に代つて、代稽古いたすでござらう。

柴垣　それは近頃御親切。左様なら、稽古場の儀は、よろしうお頼み申しまする。

股五　委細承知仕つてござりまする。

柴垣　左様なら、お出での趣き、行家へ申し聞かしますでござりませう。

股五　イヤ、孫八、それについて、ちと貴所に、密々相談が致したい儀もあれば、稽古場へ同道いたしてくれまいか。

孫八　畏まりました。私しも、又あなた様へ。

股五　それは幸ひ。サア、來やれ。

柴垣　そんなら、御一緒に。

孫八　先づ、お出でなされませ。

ト合ひ方になり、柴垣、股五郎、孫八、奥へ入る。ト以前の實內、門の樣子を窺ひ、思ひ入れあつて、ソツと戸を開き、內へ入り、思ひ入れ。

實內　昨日孫八めが見付けて、すんでの事に捲き上げられやうとした大切なこの手紙も、首尾よう此方へ納まつた。

ト手紙を見物に見せて、懷中して、藥包みを出して

これからこの手段。まんまと行きや、この實內も知行取り、うまい〳〵……。

ト爐へ行つて、釜の湯へ毒を仕込み出て來り

孫八めに出逢はぬうち、これから爰を梵天國。

ト外へ出ようとする、所へ孫八、奥よりツカ〳〵出て門口をしやんと締め切り

孫八　奥で御用を聞くうちに、頻りにして來た胸騷ぎ、心れらず來て見れば、別れた朋輩の實內。よく立戻つてうせたなア。持つて居るその一通、キリ〳〵おれに渡してしまへ。

實內　イ、ヤ、宵越しの錢は、遣つた事のない奴だ。今まで持つて居るものか。

孫八　怪しい懷中。

實內　何を此奴が。

ト兩人立廻りある。此うち調べになり、向ふより佐々木丹右衞門、上下、大小にて、草履取りを連れ、出て來り、この體を見て、思ひ入れ。此うち孫八、手紙を引ツたくるを、丹右衞門、外よりこの手紙を取り、內

丹右　へ入ろ。實内、ハッと思ひ入れ。
孫八、一通は丹右衛門が受取つた。

實内　南無三方。

ト振り切つて、一散に向うへ逃げて入ろ。

丹右　其奴、逃がすな。

孫八　心得ました。

ト孫八、實内を追ひかけ、向うへ入ろ。丹右衛門、この一通を開き見て

丹右　ヤ、、、こりや、コレ、今日のお茶の湯に仕掛ける毒藥。ハテ、危ない事であつたよなア。

ト思ひ入れあつて、懐中する。合ひ方にて奥より腰元兩人出て

千種　これは丹右衛門さま、ようこそお出で遊ばしました。

丹右　して、行家どのは。

小萩　先づ〳〵こちらへ。

丹右　御免下されい。

ト調べにて、丹右衛門、二重へ住ひ

拙者が參つた由を、行家どのへ。

兩人　畏まりました。

ト立ち上がらんとする。この時、奥にて

行家　知らせに及ばぬ。聞いた〳〵。

ト調べ合ひ方になり、奥より袴、羽織、大小の行家、以前の柴垣附き添ひ出て、よろしく住ふ。

行家　これは〳〵丹右衛門どの、昨夜からのお世話。女房ども、ようお禮申上げい。

丹右　イヤ、行家どの、師弟の間柄、斯やうな時にお世話仕るが御懇意と申すもの。其やうに御叮嚀な御挨拶には及びませぬ。柴垣どの、決してお構ひ下さるゝな。

柴垣　モウ〳〵、此やうな事を申しますれば、愚痴な者ぢやと思し召しませうが、志津馬がこの度の越度。元の起りは、あの股五郎どのがそゝのかして、傾城を進め込んだばかり。たうとう親の内にも入られぬやうにさして置いて、自分はどこを風が吹くかと云ふやうに、素知らぬ顔して居る水臭い根性。常からあの衆との附合ひが、氣に入りませぬ。なんでも、友に依つた者でござります。

行家　そりや何を申す。例へ人が勸むるとも、手前が實體にさへ致し居れば、仕落ちのあらう謂れがない。必らず人を恨むな。志津馬が一生の癖といふは、一口でも酒さ

へ飲めば、前後を忘却する馬鹿者。股五郎が知つた事でもあるまいサ。

柴垣　そんなら、あなたは、股五郎を、好い人ぢやと思し召してお出でなされまするか。

行家　サア、悪い人とも好い人とも思うては居らねど、折折の振舞ひは、若い者の習ひ、大目に見て居てやらねばならぬ。

柴垣　丹右衛門さま、お聞きなされませ。股五郎どのゝ事さへ云ひ出せば、我が子に替へても、兎角贔屓に致されます。ほんにお相縁奇縁というて、不思議なものでござりまする。

丹右　そりやハヤ、彼れが親、又左衛門が、今際にくれ〴〵お頼み申して、相果てしより、我が子も同然にお世話なされ遣されど、却つてその者は、迷惑に存じ、左程には存ぜぬものでござれば、この上大抵、寄らず障らずなされて置きなさるゝがようござらうて。

行家　成る程、云はるれば左様なもの。誠に、さま〴〵の事にかゝつて、風雅の道さへ忘却いたした。女ども、湯はたぎつて居るか。囲ひの炭を見て参れ。

千種　畏まりました。

ト腰元、立ち上がらんとする。丹右衛門、思ひ入れ。

丹右　アイヤ女中、待たつしやれ。

ト腰元、控へる。

先生、折角お約束ではござれど、ちと仔細あれば、今日のお茶はお斷わり申しまする。止めになされて下されい。

行家　そりや、何ぞ御用でも。

丹右　イヤ、左様ではござらねど、定めて先生も、お疲れと存ずるゆゑ。

行家　ア、流石は丹右衛門どの、お詞にも委せませう。侍ひの表を飾り居れども、有やうは、昨夜よりほつと致した。ア、此やうによい年をして、恥を掻きまするも子ゆゑの闇。成人の子もありながら、谷と申し、志津馬と申し、親の顔へ泥を塗る不届き者。ア、これを存ずれば、子のない者が、遙か増しと申すもの。

〽それと云はねど心には、泣き入る父が胸の内。お谷は始終食ひしばり、涙押へるばかりなり。

ト鼻をかんで思ひ入れ。この時、門の外に、お谷、絹物、屋敷風、娘の拵らへにて窺ひ居て、ア、と泣く。柴垣、これを制する。和田武助若黨の形にて附いて居

て、こなし。行家、聞き耳立てこなし。

行家　表に誰れやら人の聲が。

柴垣　イエ、ありや、何でもござんせぬ。

丹右　イヤ、ナニ先生、只今のお詞を聞き、申しますではござらねど、志津馬どのは、世間へぱつと、殿様のお耳にまで入つた事ゆゑ、内聞では濟まされねど、お谷さまの儀は、外に云ひ約束のござつたと申すお身分ではなし、おてまへ様の御料簡一つで相濟む事なれば、この丹右衛門も、とも〲、お詫び仕る。お逢ひなされて遣はされまいか。

行家　イヤ、人は知らぬと存ずるは不覺。政右衛門は天晴れの達人、浪人させて置くも惜しいと存じ、お上へ吹擧いたさんと思ふうち、娘谷を連れての出奔。女の身で、親の許さぬ不義徒ら、言語に絶せし二人の者。恩を知らぬは畜生同然。犬に劣つた不屆き者め。

〽ドる娘が不便さに、恩愛隱す親の慈悲。

たに　なんぼ親甲斐ぢやというて、あのやうに云うて下さんす事はない。そりや、あんまりぢや〱〱。

武助　お前樣の、腹をお立てなさるも御尤ぢやが、人も知らぬあなたとの譯合ひは、内聞で濟む事を、むづかしう仰しやつたゆゑ起つた事。何も政右衛門さまを、畜生に譬へて仰しやつて下さるには及びさうもない。今のを聞いては、この武助さへ、腹が立つて〱、なるこつちやござりませぬ。

たに　親ぢやというて、理窟は理窟、こりや内へ踏ん込んで、譯を立つてもらはにやならぬ。

ト内へ行かうとするを、武助、留める。柴垣は、門口へ來り

柴垣　コレ、必らず短氣を出すまいぞ。一徹な親御の氣風、知らぬものかなんぞのやうに、内へ踏ん込み、手討にしようと仰しやつた時、其方はそれでよからうが、それぢや生さぬ仲のわしが濟まぬ。母が身に替へても、詫び事する程に、マア、わしに任せて置きやいなう。

武助　ほんに申すおやござらぬが、股五郎がやうな奴をば可愛がり、實のお子達に當りの惡いといふは、成る程、餘ッぽど旦那は、茶人でござりまするわいの。

柴垣　密かに〱。

行家　柴垣、そこに居るは、そりや犬か。

柴垣　アイ。

行家　犬ならば、早う追ひ去なせ〱……。イヤナニ、丹右

右衛門どの、貴殿なぞも股五郎を、手前が世話いたすを不快にも思し召さりやうが、先年、正宗を試さんと、抜き放せし折、家の棟を渡る蛇、自然と二つに切れて落ちたる所を、刀の徳なりと賞美いたせしが、その頭、臺子の釜に入りしを存せず、その湯を呑まんとせしを、股五郎が父又左衛門、これを見たりとあつて止めしゆゑ、その時一命を助かつたるこの行家。又左衛門を命の親と存ずるところ、相果てしゆゑ、股五郎の世話するも、全くその時の恩を謝する我が心。それをも知らずに、雀のちやちやくちやと、耳に逆らふ。追ひ去なせ〳〵。

ト武助、無念のこなし。

柴垣　イエ、モシ、行家どの、お前はそれでも済みませうが、それではどうも、この母が済みませぬ。志津馬が事は家にもかゝる程の事ぢやに依つて、何とも云ひ出しはしませぬが、お谷の事は、こなさんの料簡で済ませば済みまする。どうぞ免すと只一口云うて、喜ばして去なして下さりませいなア。

丹右　柴垣どの、仰せらるゝ通り、政右衛門は、天晴れ劍術の達人、それに連れ添ふお谷どのの儀は、御不承あつて、勘當はお免しなされい。二人が二人ながら家にござらいでは、成る程、柴垣どのが相立ちますまい。御料簡なされい〳〵。

行家　丹右衛門どの始め、柴垣が詞なれど、劍術の達人と、不義せしを免せば、不義も不義にならねば、天下の掟なきも同然。たゞ免せでは免されぬ。コリヤ……とくと思案をして見やれ。

丹右　サア、四季に咲く草木だに、その時々の時はあると、兎角時が至らねば、花は咲かぬ。柴垣どの、御合點が參りしか。

ト柴垣、こなしあつて

柴垣　父上の御心底、丹右衛門どのゝお詞、よう聞き分けて戻つてたも。

たに　サア、聞けば無理とも云はれぬお詞。

武助　兎角あなたが頼みの綱。

たに　たゞ何事もよいやうに。

柴垣　そんなら、其方は。

たに　戻りませずばなりますまい。

柴垣　可愛や、ちつと……無事に時節を待つて居や。

ト戸を明けようとする。行家、咳を咳き、こなし。

たに　段々厚きお情に

柴垣　必らず、時節を。

たに　エ。

柴垣　待つて居や。

たに　アイ。

ト唄になり、お谷、武助、思ひ入れあつて、向うへ入る。

丹右　イヤ、ナニ行家どの、貴殿は又左衛門の恩を謝するとやら仰せでござれど、それに引替へ、恩を恩とも存ぜぬと申すは、股五郎が事でござる。

行家　フム、股五郎が恩を知らぬとは。

丹右　御不審あらば、この手紙、讀んで御覧なされい。

ト丹右衛門、以前の手紙を出し、行家に渡す。開き見て

行家　ナニ〳〵、「御手紙にて申し上げ候、兼ね〴〵貴殿、行家娘お谷へ御執心にて、お頼みにつき、拙者もいろ〳〵骨折り、口説候へども、一向聞き入れ申さず、剰さへ、不義徒らにて家出いたし候ふ上は、今さら力に及び申さず候ふ、この上は、貴殿の恥辱を雪ぎ候ふは、老ぼれの行家を毒害なし。

ト思ひ入れ。

丹右　この後が、猶大切な文意。

ト丹右衛門、手紙を取つて

毒害なし、相果て候ふ後にて、年來行家工風を凝らし置き候ふ新田開發、さつた山の諸木を伐り拂ひ、材木となし候へば格別の御益に相成り候ふ儀、その後へ田畑を作らせ候へば、凡そ十萬石餘の地面出來申し候ふ、これを貴殿、御工風と仰せ立てられなば、格別の御奉公にも相成り候ふ儀、千石二千石の御加増は目のあたりに候ふ、その節は、お約束の通り、拙者へも五百石以上の御加増下し置かれ候ふやう、御執成し下さるべし。先づは、行家毒殺の儀は、藥種を買ひ集め、明日の茶の湯の節、相用ひ候ふ間、お谷が事は、これにて御料簡下さるべく候ふ。以上。月日、荒卷伴作どのへ、澤井股五郎。」

柴垣　エヽ。

ト愕り、こなし

丹右　先刻、茶の湯をお止め申せしも、この一通が手に入りしゆゑ。

行家　おのれ股五郎、言語に絶せし憎くい奴め。これへ呼び出せ。

小萩　ハツ……股五郎どの〳〵。

ト呼びながら、[illegible]元雨人、奥へ入る。奥にて

股五　ハツ〳〵、拙者をお呼びなされしは。

ト奥より、股五郎、稽古の形、以前の侍者、新藏、附いて出る。

股五　先刻より代稽古を仕り居つたところ、只今お呼びなさるる由。何御用でござりまするな。

ト行家、こなし。丹右衛門、思ひ入れあつて、合ひ方。

丹右　イヤ、股五郎どの、只今、先生お呼びなされしは、別の儀でござらぬ。志津馬どの儀は、拙者伺ひを立てましたところ、追ての御沙汰とある事ゆゑ、先づ當分は、この丹右衛門が預かりましてござる。それにつけ、一條に申すではござらねど、貴殿とても母、鳴海どの丶勘氣を受け、若年の時分より、行家どの丶お世話になつて、押しつけ親御又左衛門どの丶格式をも、踏まる丶やうにならつしやる御身分。隨分とも、恩を忘却せぬやうに召され。得て忘れ易いものでござる。

股五　イヤ、モウ、御深切なそのお詞。忝なう存じます。誠に幼年より行家どの丶お世話になつた儀を、忘れてよいものでござりませう。それゆゑ、志津馬どの丶傾城狂ひも、度々御意見を加へましたれども、つい染り易きは色の道、斯やうな事になつた上は、拙者なぞお勸めも申したやうに思し召すかと存ずれば、甚だ以て氣の毒千萬に存じまする。

柴垣　イヤ、そりや仰しやんな、股五郎さま。度々お前と連れ立つて、吉原通ひ致した事もよう存じて居ります。ようも〳〵志津馬を放埒者に進め込んで下されたの。

股五　モシ、柴垣さま、それは、何とも迷惑千萬。何しに拙者、志津馬どのをそ丶のかして、吉原通ひを致しませうぞ。全く覺えござらねど……さう仰しやれば、春の事でもござつたが、雨の降るのに夜九つ時分から、志津馬どのたつた一人で行かつしやるにつき、今夜はよしにさつしやれと、留めても留まらず、行かつしやるゆゑ、一人やつては心元ないと、後からお送りがてら附いて參つて早々歸らうと存じたなれど、雨は強う降るし、八ツの鐘をも承はつたゆゑ、もう一時ぢや夜を明かして戻れと皆が達て止めまするゆゑ、よんどころなく夜を明かして歸りましたより外に、一晩でも、御同道いたした覺えはござらぬ。定めて斯やうな節には、無い事もあるやうに、

申しまする人の口。決して、なんと申さうともお取上げなされぬが、ようございまする。

新藏　左様々々、股五郎さまの申さるゝ通り、人の口には戸が立てられぬと申す譬への通り。

傳吾　銘々の身にかゝらぬ事をば、兎角申したがるもの。

兩人　お取上げなされぬが、ようございます。

行家　イヤ股五郎。林志津馬が事は兎も角も、所詮は勘當いたす奴、今さら申したとて、何の役に立たぬ事サ。それは格別、さつた山の諸木を伐り拂ひ、新田十萬石餘、開發いたさんとの一件、おてまへは、どうして知つてお居やる。

股五　イヤ、その儀は、オヽ、それ／＼、折節は、お草臥れ休めと、お體をひねつたり、お腰を撫つたり致し居る度々、お硯箱の抽出しに入つてあつた、御工風の書付けを拜見いたし、成る程、先生は、劍術ばかりでもなく、諸事に行き渡つた工風ぢや、智惠者と譽めました儀もござれど、それより外に、他言いたした覺えは決してござらぬが、誰れぞ話しましたといふ噂でも、お聞きなされましたか。

ト丹右衛門、一通を出して

丹右　如何にも、貴殿の口たゝいた事。この手紙に書いてある。

股五　ナニ、その手紙は。

丹右　荒卷伴作どのへ、澤井股五郎。

股五　ヤ。

丹右　文意は一々讀むに及ばぬ。お谷どのを取持た人との事まで、一々認めあるからは、動きは取れぬ、股五郎。

股五　ウム。

行家　其の方が親、又左衛門より預かる正宗を、返しくれよと度々の懇望なれど、まだ魂ひを見定めぬ汝ゆゑ、渡し得させぬ。それを遺恨に思うてか。

丹右　幼年より大恩請けた、實に親なり、師匠なり。

柴垣　その夫を、毒害せうとは、なぜしやつた。

股五　サア、それは。

皆々　サア／＼／＼。

股五　もう爰には。

ト逃げ出す澤井が髻摑へ、片手に一通持つたるまゝ、膝に引敷き行家が大音。

行家　この文意を、一々讀めば大罪人。逃げるとて逃がさうか。

丹右　ト丹右衛門、股五郎が襟髪取つて、拳骨はし
狐狼のおのれに、申し聞かすは無法なれども、過ぎ
行かれし又左衛門どの、故あつて澤井正宗と名づけしあ
の刀、行家どのへ讓られし由緒を以て、幼少よりお世話
なされし高恩を忘れ、種々無量の惡企み、御子息志津馬
どのに、切腹させうとまでひろいだなア。茲な股五郎の
極惡人め。
トきつと突き放す。股五郎を、行家引ッ捕へて
行家　賤人間になつたなら、讓り得させんと思ふを待ちか
ね、本庄助定七を語らひ、うま〳〵と正宗を引上げんと
企んだな。何かにつけ、某に仇なす汝が性根、まだ〳〵、
年は寄つてもおのれが手にあふ行家ぢやない。舌でも嚙
んでくたばり居らう。
ト手強く突き放す。股五郎、無念のこなしにて
股五　もう堪忍が。
〽切つてかゝるを身を交し、透かさぬ行家が腕先に、澤
井が刀打ち落せば、うんとのつけに眞の當。
トいら立つて、一腰拔き、行家にかゝり、立廻りあつ
てトヾ行家に當てられ、ウンと悶絶する。
行家　丹右衛門どの、見さつしやれ。是事に手前に刃向ふ
所存、ア、、不便な事でござる。
丹右　向後の懲らしめ、御門弟中、股五郎が面體へ、犬と
いふ字を書いて遣はせ。
傳新　イカサマ。
ト硯箱を持ち出し
行家　股五郎が額へは……。
ト行家、筆を持つて、犬といふ字を書く事。
いづれも、御覽なされい、飼ひ犬に手を喰はれし譬へ。
相弟子のよしみ、とてもの事に畚へ、此奴を乘せて、門
前へ捨て下されい。
傳新　承知いたしてござる。この上の耻辱はござらぬ。
丹右　誠に、いづれも、股五郎が顏を御覽なされい……家
來ども、これへ參れ。
供廻　ハア、。
トこの時、侍ひ一人、中間二人出て、下手に控へる。
丹右　然らば、某も、これよりこの趣きを、大殿樣へ申し
上げるでござらう。
柴垣　何から何まで、丹右衛門さま。
行家　御苦勞ながら、
丹右　サア、いづれも、參りませう。

行家　恥面かきし、澤井があの態。
柴垣　モシ、マア、笑止な顏わいの。
丹右　然らば、これより殿へ言上。
行家　ハテ、人外もあるものぢやなア。
ト唄になり、丹右衛門、先に立ち、後より傳吾、新藏は、股五郎を丸腰にして、畚へ乘せ、丹右衛門の供も手傳ひ、これを皆々して舁き、門口へ出る、行家、柴垣、門を締め切り、思ひ入れして、奥へ入る。丹右衛門は、しづ〳〵と向うへ入る事。股五郎、畚より落ちるゆゑ、其まゝ捨てゝ門弟も下手へ入る。股五郎は、花道に捨てられ居る。バタ〳〵にて、向うより、以前の實内、走り出て、花道にて思ひ入れあつて、舞臺へ來りて、股五郎に踏み爪づき、これにて股五郎、フッと心附き、兩人は、これを互ひに顏見合せ。
實内　ヤ、股五郎さまぢやござりませぬか。
股五　オヽ、其方は實内。
實内　して、樣子は。
股五　エヽ、うぬが一通を捲き上げられたばかりで、飛んだ目に遭つた。もう股五郎が武士はすたつた。
ト股五郎の顏を、實内見て
實内　ヤヽ、あなたの額に、犬といふ字が。
股五　アノ、おれが額へ。
ト手拭にて拭き取り、墨の付きしを見て
おのれ行家め。もう生けては置かれぬわえ……來い。
ト兩人、門の側へ來り、戸を明けんとすれども、明かぬゆゑ
股五　實内、門内へ入込む手段は。
實内　あなたは、この松ヶ枝を傳はつて、塀を乘り越え
股五　して、其方は。
實内　水門から泉水へ。
股五　巧い手つがひ……ソレ。
實内　合點だ。
ト實内、水門の口から忍び込む事。股五郎は松の立木へ登りかけて、落ちて、腰を打ちし思ひ入れ、一向に起きられぬこなしにて困つて居る。此うち實内、泉水へ傳はつて出て來る事。門の外にて唸る聲するゆゑ、聞き耳立て、門を明け、ソッと内へ股五郎を入れる。股五郎、咽喉が乾くゆゑ、何ぞ呑みたいと仕方するゆゑ、實内、圍ひの釜を持つて來て。股五郎、柄杓にて飲まうとする。實内、ハッと心附き、イヤ〳〵惡いと

仕方する。なぜと仕方にて尋ねるゆゑ、囁く。股五郎俯りして、そつと泉水の水を飲み、こなし。此うち、藪疊を押しわけ、荒卷伴作、着流し、大小、頬冠り、尻からげにて出て、門を窺ひ

伴作　實内、首尾は。

實内　丁度よい時。コリヤ。

ト囁く。伴作うなづき

伴作　呑み込んだ。

ト伴作は奥へ、そろ〳〵忍び入る。此うち、實内、床下へ忍び、股五郎、下手に窺つて居る。バタ〳〵にて奥より伴作、正宗の箱を抱へ出て來る。後より行家、押取り刀にて、駈け出て來り

行家　正宗を奪はんとする横道者。覺悟なせ。

ト箱を引ッたくる。

伴作　さう云ふうぬから。

ト抜いて切つてかゝる。伴作、行家と立廻りのうち、行家、追ひかけんとする。二重の下より、實内、行家が足を引くゆゑ、行家、かつくりとなる所へ切りつける。行家、倒れながら、伴作を切りさうにする。この時、後より窺ひゐる股五郎、覺えたかと切りつける。

この刀をしやんと握る。始終、ごん。凄き合ひ方。

行家　ヤア、何奴なれば、騙し討とは卑怯な奴。名を名乘れ。

股五　オヽ、聞きたくば云つて聞かさう。世話にした恩に着せ、我が面體へ犬といふ字を書き、剰さへ畚に乘せて、よくも恥辱を與へたなア。

行家　アハヽ、人畜の股五郎、遺恨に思はゞ、なぜ名乘り合して勝負せぬ。騙し討とは卑怯至極。

ト股五郎、伴作、實内の三人

三人　こま言吐かさず、くたばつてしまやがれ。

トまた立廻りのうち、股五郎、眉間を一刀切られる事、

トヾ行家を切り倒し、股五郎、止めを刺し

股五　犬といふ字の返報は、おのれが面へも。

ト行家の額へも犬といふ字を書く。正宗の箱をそこへ出し、蓋を明けて見て

ヤア、この中に正宗は。

トこの中に、一通のあるを見て

伴作　ナニ、一通とは。

ト開き、股五郎、見て

股五　正宗の刀、仔細あつて、私し方へ預かり申すところ

實正也。和田行家どのへ、佐々木丹右衞門判。
伴作　すりや、正宗は丹右衞門めが。
股五　エヽ、無益に骨を折らしやがつた。
　ト手疵を鉢卷にてしめる。奥、バタ〳〵の音する。
柴垣　狼藉者が入つた。出合へ〳〵。
皆々　ハア、。
　ト以前の腰元、手燭を持ち、柴垣附いて出るゆゑ、敵役の三人ともに、水門と、數疊へ影を隱す。向うバタバタにて、孫八、提灯を灯し、丹右衞門、息を切つて出來り、双方一時に舞臺にて落ち合ひ、丹右衞門、行家に爪づく。
丹右　ヤア、行家どのを、こりや、何者が。
孫八　ナニ、旦那樣が。
　ト立ち寄る所を、伴作、實内、觀念と切つてかゝる。立廻りよろしく、丹右衞門、伴作を切り倒し、孫八は、實内を切り倒し、双方キッと
孫八　敵の相搚り。
　ト實内をば、止めを刺しにかゝる。
丹右　後日の證據、止めは控へい。
孫八　ハツ。
　ト此うち、そろ〳〵と、股五郎、花道へ逃げて行く。透かし見て
柴垣　アレ、あの人影は。
丹右　慥かに澤井股五郎。
股五　エイ。
　ト花道にて、手裏劍を打つ。
丹右　合點だ。
　ト小柄をしやんと握る。チョンと木の頭。ゴン〳〵、三重になり、股五郎は、向うへ遁れて入る。丹右衞門は小柄を透し見る。孫八は、無念のこなし。双方よろしく。

拍子幕

三幕目　圓覺寺の場

役名――澤井城五郎。澤井股五郎。同母、鳴海。遠藤野守。海田一角。矢部孫九郎。荒川兵部。池添孫八。佐々木丹右衞門。呉服屋重兵衞。

本舞臺、三間の間、結構なる欄間、鍍金鋲物、金襖

上手、床の間、大軸物、この前、銀地の衝立、左右とも、杉戸出入り。平舞臺、一面に高麗緣の薄べり。向う揚げ幕、大形の襖、出入りある事。すべて圓覺寺、大廣間の模樣。誂らへの通りよろしく、爰に遠藤野守、矢部孫九郎、海田一角、荒川兵部、大小袴にて竝よく居竝び、この側に住僧、緋の衣、珠數、中啓持ち、この後に伴僧、黑衣にて附き添ひゐる。好みの通りよろしく、鳴り物、三味線入りの音樂にて、幕明く。

〽されば澤井股五郎、行家を討つて立退くより、直ぐに駈け込む圓覺寺、門戸を閉ぢて若殿原、上松より寄せ來るとも、引き返さし弓鐵砲、佛の說きし法の庭、平等大會に引き替へて、修羅の巷の大評定、方丈狹しと詰めかけたり。

ト始終、この淨瑠璃に冠せ、音樂見計らひ。

野守　我れ〳〵が賴みに依つて、澤井をお匿まひ下さる段、誠に貴僧のお心遣ひ。

侍四　千萬忝なうござる。

住僧　これは〳〵、お歷々の御禮のお詞。澤井氏にも御不自由にござらう。兎角、世話の譬への通り、木の下蔭に露の舍り、雨を凌ぐと申す分。殊に今日は何やら御評定ござるとの事。

一角　アイヤ、他聞を憚かる評議。我れ〳〵これにて會合の事。

兵部　御知音の檀家と云ふとも

孫九　必らず御沙汰、御無用に賴み存ずる。

住僧　斯くお賴みの澤井氏、何しに人に申さんや。御用もござらば、これらの者へ、仰せ談じられ下されい。

野守　委細は後程、暫時書院を拜借いたす。

住僧　お心措きなく、然らば後刻。

四人　御意得申さう。

トよろしく、會釋して音樂になり、住僧、伴僧附き、杉戸の內へ入る。

野守　何は兎もあれ今日の評定、股五郎は申すに及ばず、萬一上松の威に怖ぢる時は、昵近の我れ〳〵までが、生涯瑕瑾の名を殘すも殘念至極。

一角　遠藤氏の仰せの通り、身にかゝる大切の評議。

〽評議半へ股五郎。

ト音樂にて、股五郎、袴、大小の拵らへにて出て、四人に辭儀をして

股五　者數ならぬ陪臣の拙者、城五郎どのは一家のよしみ、その縁に連なるお歴々の昵近衆、お匿まひ下さる段身に取つての面目、この上なし。併しながら、主人上杉、憤り深く、拙者が母を人質に捕へ置き、股五郎を渡さずば母を成敗するとの難題、私しゆゑに、一人の母を殺すも不孝、且はよしみもなき昵近方、斯く騷動に及ぶも氣の毒、矢張拙者を上杉へ、お渡しなされて下さりませ。

〽邪智を隱せし賢人顏、遠藤野守進み出で、

野守　その遠慮には及ばぬ事。この度、我れ〳〵が荷擔は、おてまへの爲ばかりでない。上杉には此方、年來の遺恨あり、武將の御先祖尊氏公より、譜代相傳の昵近の武士、元弘建武の古へ、尊氏公に粉骨を盡し、忠義を勵みし我れ我れが家筋、我れは讒に高祿を取り、昵近衆を蔑ろに輕しむる日頃の存外、事がなあれと思ふ折節、おてまへを匿まうたは、上杉に瑕を與へる爲。案の如く上杉、この事を憤り、追ツつけこれへ押寄せんと、軍評定の最中の由。いま太平に納まつて、茶の湯遊興に日を送り、鎧兜の着やうも知らぬ國大名、何程の事あらん。

一角　オ、サ、野守どのゝ仰せの如く、日頃斯やうな事を待ち設け、武藝鍛練いたす我れ〳〵。

兵部　一まくりに蹴散らして、昵近武士の遺恨を晴らすは今この時。敵方より寄せぬ先、此方から逆寄せにして、上杉に一泡吹かせん。

孫九　高の知れたる鄕侍ひ。イザ、御同心仕らうか。

〽オ、尤もと立ち騷ぐ。

　トこの時、奧にて

城五　いづれも、暫らく〳〵。お控へなされい。

〽聲をかけ、しづ〳〵出づる城五郎。

野守　貴殿は澤井

四人　城五郎どの。

野守　して、お留めなされし御所存は。

　ト音樂になる。

城五　イヤ、別儀でもござらぬが、某が由緒ある股五郎をお庇ひあるいづれも。御深切忝なう存ずる。さりながら、行家を討つたる事の起りは、この城五郎が頼みし事。

野守　すりや、股五郎どのが一料簡でなく。

城五　さればサ。この度武將の公達、御仕官の御祝儀につき、諸大名より銘劍を献ぜらるゝ。然るに、行家が家に持ち傳へし正宗の名作あり、主從の事なれば、上杉これ

を取つて献上すべし。さればいよ〳〵、上松が鼻高く、威を振はん事心外至極。何卒この刀を奪ひ取つて、某が手より献上すれば、我れは勿論、昵近衆の手柄にもなると存じ、股五郎と云ひ合せ、行家めをぶち殺させしは、正宗を奪ふ爲ばかりと思ひの外、この刀は行家めが手に無く、佐々木丹右衛門が預かり居る由。股五郎を受取りたくば、老母が命を助け、並びに、正宗の刀を此方へ渡せよと難題の使者を立てたれば、この返事のあるまでは、暫らくいづれも、お扣へなされい。

〽云ふ間程なく走せ來る門番。

トばた〳〵にて、菖蒲革の侍ひ、走り出て

侍ひ　ハツ、申し上げます。佐々木丹右衛門より、今夜の御返答。

城五　これへ持て。

ト侍ひ、城五郎へ渡す。封押切つて、一通をさら〳〵と讀み終り

ホヽオ、城五郎が思ふ壺。股五郎をお渡しあらば、母鳴海が命を免し、正宗の刀を遣はすべし。追ツつけ、二品とも丹右衛門、持參いたさんとの文意。後刻お出でを相待ち居ると、口上を以て、返答せよ。

ト侍ひへ狀箱を渡す。

〽蓋ひきしめる空文箱、取るより早く走り行く。

一角　イヤサ、城五郎どの、一旦匿まつた股五郎、今更のめのめと、上松へ渡して、それで武士が立ちまするか。

野守　オヽ、我れ〳〵も、その意を得ぬ。貴殿は上松が恐ろしいか。イヤサ、臆病神が取りついたか。

兵部　卑怯至極だ、城五郎。昵近武士の名の穢れ。

孫九　治世の祿をうか〳〵喰ふ城五郎。弓矢八幡、その座は立たせぬ。

野守　城五郎とて容赦はせぬ。度胸の性根を。

四人　定めてくれうか。

トきつとなつて、立ちかゝる。

〽詰めかくるを、股五郎、押し鎭め。

股五　いづれも樣には、お鎭まり下さりませう。

ト四人、思ひ入れあつて、扣へる。

イヤ、城五郎どの、拙者が命は惜しみはせねど、武士の意地を立ち拔く貴殿が、今になつて腑甲斐なく、上松へ渡さうとは、ア、聞えた、行家をぶち殺したばかりで、お頼みの正宗、手に入らぬ御立腹の思し召しでござらう……イヤサ、それゆゑでござらう。

四人　イカサマ、左樣でござらう。

ト城五郎、思ひ入り、始終、音樂あしらひ

城五　全く左樣な事ではござらぬ。いま合戰を取結ぶともたゞ世上を騷がすばかり。望みの刀が手に入らねば、無益の沙汰。一旦和睦に事を納め、母の鳴海と正宗を受取つた上、御身に繩打ち、心よく打渡し、使者の歸りを思ひがけなく、多勢を以て引ッ包み、奪ひ返す我が工夫。

野守　すりや、無難にこの場は受取り渡し

城五　如何にも。この事御合點參る上は、必らずともにこの座きり。

孫九　何しに他言仕らう。

野守　然らば、各々、その用意。

ヘ騷ぐを押へて。

城五　血氣に逸るは匹夫の勇、謀り事は密なるをよしとす。拙者が詞を致すまで、いづれもお控へ下さるべし。股五郎が後の災ひ、遁がれさする屈強の忍び所は、九州相良。密かに落す用意萬端……ムウ、次に控へし呉服屋重兵衞、これへ參れ。

重兵　ハア、。

ト音樂になり、下手杉戸より呉服屋重兵衞、着流し、合羽、一本引き下げ、商人風にて、出來り、下に住ふ。

ヘハッと答へて次の間より、小腰かゞめて並居る中、怯めず臆せず畏まる。

重兵　これは／＼、お歷々樣のお傍近う冥加御免下さりませ。股五郎さまのお身の上、委細とつくり承はりました。城五郎さまへは數年來、お出入りの私し。相良へ商ひに每年下る道、案內見込んで賴むと、大切のお供、畏まつたと商人冥加。多年の御恩報じなれば、ちつともお心措かれますな。町人でこそあれ、心は金鐵、二人や三人は苦には致さぬ腕に受合ひ。一厘も掛値は、決して申さぬ呉服屋。お心強う思し召し下されませ。

ヘ滅多に引かぬ太織縞の、男一疋頼もしゝ、股五郎は片頰に笑み。

股五　さて／＼氣味のよい男。敵持つ身の供すれば、腰に刀は離されぬ。行家を仕留めた時、コレ見よ、弓手に二ケ所の疵、忽ち治したるこの藥は、城五郎どのゝ家に傳はる南蠻國傳來の妙藥、身共同道の人々へは、いづれもこれを懷中さする。おてまへも、まさかの用意、この印籠を與ふるが、股五郎が一命をお賴み申すといふ印。ま

げて御受納下さるやう。偏へに頼み存ずる。
〽頼む印と手に渡せば。
重兵　これは／＼御挨拶、有り難う頂戴いたしまする。結構なお薬、お下げ物でござります。怪我と病氣はいつ知れぬ道中の肝心は、兎角薬が第一でござりまする。
〽受け納めたる折こそあれ、又も駈け來る遠見の侍ひ。
ト向うバタ／＼にし、股立ちの侍ひ、走り出て
侍ひ　申し上げます。上杉家の御使者、佐々木丹右衛門どの網乘り物一挺、供は僅かに二三人。只今當寺の門前まで、乘られましてござりまする。
城五　ムウ、よし／＼。門を開き、隨分神妙に取計らひ、この所へ通しませい。
侍ひ　ハッ。
ト侍ひ、引返して、向うへ入る。
城五　いづれも、裏門より先へ廻つて、最前の御用意御用意。
四人　心得ました。
ト音樂になり、四人の侍ひ、奥へ入る。
〽はやり男の武士、我れ一急ぐ裏門口。
重兵　ヘイ／＼、左やうなら、御發足の日限は。
股五　コレ。
重兵　委細、畏まりました。何かの事は、お直々詳しく御意をば伺ひませう。
城五　萬事よろしく。
重兵　ナニ、お氣遣ひ下されまするな。
〽詞一つに重兵衛は、萬事を悟る男氣の、引連れ奥に入りにける。
ト三味線入りの禪のツトメになり、矢張り淨瑠璃にかぶせて
〽琴を調べて敵を避く、窈窕として檻穽の謀り事もやあるらんと、心ゆるさぬ丹右衛門、使者の禮儀の上下も、四角四面に方丈へ、網乘り物を舁き入れさせ、靜々と打通れば。
ト網乘り物一挺、菖蒲革の侍ひ四人、駕籠を舁き、後より股立ち侍ひ二人附き添ひ、その後に佐々木丹右衛門附き、上下、大小にて出て來る。乘り物は、下手に扣へ、丹右衛門、よろしく舞臺へ住ふ。
城五　ホヽオヽ、聞き及ぶ、御邊が佐々木丹右衛門どのとな。今日の御使者、御大儀千萬。今朝も申し越せし通り、武士の意氣地、爭論に及ぶと雖ども、靜謐に治まりし代に、

私しの遺恨にて合戰を取結ぶは、武將へ畏れあり。罪は罪なり、股五郎はお望みに任せ、お渡し申さん。此方よりも望みの通り、正宗の刀、並びに老母鳴海が事、上松家より定めて送られ連れられしよな。

丹右　成る程〳〵、主人上杉景定、怒りの元は股五郎、逆磔刑の刑に行ひ、國の政道を糺すべき存念。股五郎だにお渡しあらば、外に曾て仔細はなし。即ち、これこそ、お望みの正宗、並びに老母を誘引いたす。イザ、お改め下されい。

〽箱に納めし持參の刀、差出せば、手に取上げ、切尖物打ち鍔元、とくと改め、鞘に納め。

城五　刀の眞僞は存ぜねど、天晴れなるこの名作。慥かに落手仕る。

〽刀引提げ立ち上がる、丹右衛門、引きとゞめ。

丹右　こは粗忽なり城五郎どの、股五郎をこれへ出し、老母と互ひに取替へざるうちは、むざと刀は渡し申さぬ……サア、下手人の股五郎、繩打つてお渡し下されい。近頃我慢千萬な。

〽眼を配る勇氣の面色。

城五　オヽ、御尤もなるその御一言。身共が粗忽、お免し下されい。然らば刀は暫らくお預け申す。追ッつけ下手人お渡し申さう。先づ其方の囚人、老母鳴海が變らぬ體を。

ト駕籠へ思ひ入れするな、ちよつと隔てゝ

丹右　オヽ、母に科なければ、最早、繩目に及ばぬ。

〽乘り物の網戸を排ひ引出す姿縛り繩、子ゆゑに科を老の身に、恥と鳴海が憂き思ひ、是非も繩目をほどき捨て、丹右衛門、老母に向ひ。

ト鳴海、繩にかゝり、乘り物の内より出る。

丹右　イヤ老母、子息股五郎をこの所にて、受取る上は、其許が命を助け、城五郎どのへ渡すべきは、今朝殿より仰せの通り。いよ〳〵承知いたされよ。

〽聞いて鳴海は顏を上げ。

トこれより本調子、木魚入りの合ひ方になる。

鳴海　誠に悴が不所存ゆゑ、あなたこなたへ御苦勞かけ、憎い奴とは思へども、天地の間に親一人、子一人の股五郎、未練とも卑怯とも、笑ふ人は笑ひもせよ、どうぞ助けてやりたいと、思ふが親の身の因果、御主人へ對しては、不忠者の悴なれども、母が命を助けう爲、繩かゝつて出やうと云ふは、この親に不孝の中のせめての孝行。

年よつたこの母が、詮ない命生き延びて、我が子が刑罰に行はれるを、眺めてなんと嬉しかろ。お情却つて恨めしい。ヤイ、股五郎、この母がどのやうな憂目に遭はうが、殺されうが、ちつとも構はぬ、いとひはせぬ。必らず爰へ出てくれなよ。ならう事ならこの母を、代りに殺して股五郎が、命をお助け下さりませ。悪人でも産んだ子に違ひはなければ、いぢらしい。

ヘお慈悲〳〵と恩愛の、子ゆゑに迷ふ憂き涙。止めかねてぞ見えにける。

ア、思へば誰れも恨みなし。この科の起りは、よしない刀に念をかけ、刑罰に遭ふも、名作の剣は我が子の敵、この身の仇ぞ

ヘ云ひつゝ這ひより様躰を、ずいと抜く手も見せばこそ、笛のくさりを、掻き切つたり、これはと駈けよる城五郎、佐々木も仰天乘り物へ、手負ひを打込みしつかと押へ、城五郎に目を放さず、底意を探る碇綱、又も大事と見えにける。澤井はわざと空とぼけ。

城五　コレサ丹右衛門、契約の通り、鳴海を受取り申さうか。

丹右　如何にも、科人股五郎を受取り、代りに母が命は助くべしと、契約申したれど、御覧の通り、只今老母は自害いたした。併し、此方の手で、殺しは致さぬ。我れと我が手に相果てた。某は存ぜぬ事。

城五　黙れ丹右衛門、匿まうた股五郎を一料簡いたして渡すは何ゆゑ。老母を受取らう爲ばかり。親の命を子に替へる大切の鳴海、なぜ殺した。元の如く生けて渡せ。さなくば澤井股五郎も、いつかな〳〵渡し申さぬ。サア、老母を早く受取らうか。

丹右　サア、それは。

兩人　サア〳〵〳〵。

城五　返答が承はりたい。

ヘ丹右衛門、ちつとも動ぜず。

丹右　鳴海が自害、云うて返らず。弟子として、師匠を殺す極悪人の股五郎、目の前で親が死にたればとて悲しむやうな奴でなし。まして縁者の城五郎どの、鳴海が最期を、それ程惜しみなさるゝやうがござらぬ。老母が事は附けたり、正宗の刀がお望みでござらうがな。

城五　サア、それは。

丹右　但し、刀は要らぬとな。

城五　サア、それは。

丹右　老母を生けて返せとあらば、拙者とても詮方なし。約束變替へ、元の白地へ罷り歸つて、この趣きを主人上杉に言上いたし、一家中これへ押寄せ、鑓先を以つて、股五郎を生捕りにする分の事。人非人の澤井が母、死神の付いたは、これ天罰。軍の血祭り、早くくたばれ。

ヽ手負ひの刀、ぐつと引きぬき。

正宗の刀の切れ味、お望みならば、御相伴召されぬか。

ヽ寄らば切らんず勢ひに、勢ひ拉がれ城五郎。

城五　ア、、コレサ、丹右衛門どの、此方より事に好まぬ。ムウ、イカサマ、思へば、自分覺悟の鳴海が最期。全く御身が業でない。刀さへお渡しあらば、申し出した武士の意地、さつぱりと立つといふもの。

丹右　ムウ、すりや、股五郎をお渡しあるか。

城五　渡さいで何と致さう。元より彼れも覺悟の上。ヤアヤア股五郎、最期の時刻近附きたり。尋常にこれへ出でませい。

ヽトきつと云ふ。竹笛入り、合ひ方になり、上の杉戸より、股五郎、無刀、着流し、以前の侍ひ四人、附き添ひて出て來り

股五　疾より支度仕る。

ヽ返答立派に騒がぬ澤井、滋田。荒川。矢部。前後を圍ひ、その身は丸腰、悪びれず、悠々と座に直り。

お使者御大儀。傍輩を討つた意趣の元はと云へば、外でもない、老ぼれの和田行家。年に免じて立てやれば附け上がり、この股五郎を劍術の弟子などゝ、師匠顔が聢の悪さ。何の苦もなく討ち果した。御身達如きに易々と、捕め取らるゝ股五郎でなけれども、身共ゆゑに、一國の騒ぎとなるが氣の毒さ。命惜しまぬ武士の覺悟。城五郎イザ、御政道に行はれよ。

ヽむんづと手を組み、手を廻す。

城五　天晴れ〱。其方が命一つで、騒動治まる。國家の爲、恨みと思ふな。股五郎、捕つた。

ヽト城五郎、股五郎に繩をかける。

緣に繋がる身共が潔白。お見屆けあれ、丹右衛門どの。

丹右　これで主人が心も滿足。さて、この老母の死骸を、進上申さうか。

城五　死人は要らぬ、持つて行かれい。然らば科人とその刀を、只今取替へ、受取り申さう。

丹右　イザ。

城五　イザ。

ト双方、股五郎の繩付きと、正宗の刀、受取り合ひよろしく
〽互ひに渡す目配り氣配り。
兩人　これで、双方遺恨もさつぱり。
丹右　老母が死骸は、乘り物に矢張り、此まゝ屋敷へ急げ。
ソレ、繩付きを引ッ立てい。
侍二　立たう。
〽おさらばさらばと目禮も龍の腮を出でゝ行く。
ト三味線入り、禪のツトメになり、丹右衞門、股五郎を先に引立させ、乘り物を先に、後より丹右衞門、向うへ入る。後に城五郎、一角、兵部、孫九郎、後を見送り、思ひ入れあつて
三人　城五郎どの。
城五　コリヤ。
ト双方へ囁く。三人とも呑み込んで
一角　すりや、最前の手筈の如く
孫九　この裏手なる、場所よき所に待ちうけて
城五　必らず、萬事ぬからぬやうに。御合點か。
三人　心得ました。
ト城五郎、行けとこなし。これにて、三人、向うへ一散に入る。後にて城五郎、あたり見廻し、下の方、杉戸の内より、絃のかゝりし弓矢を持ち出し、思ひ入れあつて、につこり笑ふ。始終、時の鐘にて、キッとこなし。寺鐘、打ち込み、これにて、この道具、ぶん廻す。
本舞臺、三間の間、向ふ一面の筋塀、上の方、大樹の松、この塀の内より、破風の正面を見せたる書院の屋根の心にて、その外、盡心の松の吊り枝。鳴り物、ゴン、蜩の聲にて道具納まる。
ト矢張り右鳴り物にて、下手より城五郎先に、野守外三人、いづれも着流し、大小、尻からげ、頰冠りにて出て來り、向うを見て、囁き合ひ、思ひ入れあつて、この人數、上下へ忍ぶ。城五郎は弓矢を持ち、上手の松の立ち木へ登り、書院の屋根に忍ぶ事よろしくあつて靜かになる禪のツトメ、三味線入りになり、向うより、以前の網乘り物先に、繩付きの股五郎を、侍ひ引立て、後より丹右衞門、供を連れ出て來り
丹右　思はぬ事に手間どる使ひ。黄昏時の往來に、非常を守る大事の繩付き、家來ども、心を附けて警固いたせ。

侍ひ　畏まつてござりまする。

ト花道際まで來ると、忍びし敵役、皆々出て、先手の提灯を打ち落し、丹右衛門に切つてかゝる。この時早めて禪のツトメになる。丹右衛門、一角をちよつと當てる。孫九郎、此うちに、股五郎が繩を解く。これにて股五郎、花道へ逃げて入る。丹右衛門、孫九郎を引き据ゑる。ト城五郎、松の蔭より、矢を放すと、丹右衛門が股へ立つ。傷手ながら、丹右衛門、入り亂れにて皆々を追ひ散らし、追ひかけんとすると、上下より矢來る。丹右衛門、いろ／＼と切り拂ふ事。また四人出て丹右衛門にかゝる。立廻りながら、上手へ入る。城五郎、この間に、松より下りて、一角に活を入れる。囁き、行けとこなし。一角は下手へ、城五郎は刀を納め、上手へ行きかける。太刀音するゆゑ、向うへこなし。用水へ小隱れする。

〽遲ればせなり孫七は、敵に荷擔のあぶれ者、いどみ會ふこそ」

ト早目やうの合ひ方にて、池添孫八、前幕の形、肌脱ぎにて、三階の浪人者の二人を相手に、立廻りながら出て、舞臺へ來る。此うち、後より城五郎、窺ひ居て孫八を突き倒し、浪人者を押しやり、花道へ遁がれて入る。仕組みよろしく

〽多勢を相手に丹右衛門、遁がしはせじと追ひ來り。

トのり早き鳴り物にて、以前の敵役を相手に丹右衛門立廻りながら出て來り、孫八の立廻りとごつちやになり、入り亂れにて、双方へ追ひ散らし、敵役は切り捨てられ、或ひは逃げて、上下へ追ひ散らし、兩人タヂタヂとなり、行き當り、ちよつと立廻りゝ、切り結んで、星明りにて透かし見て

丹右　孫八にてはあらざるか。

孫八　お聲は慥か、丹右衛門さま。

丹右　其方には怪我は、なかつたか……ムウ、、、。

ト撞と下に居る。孫八、こなし。

孫八　どうやら深手のこの御様子……して／＼股五郎は。

丹右　不覺を取つて取逃がした。

孫八　エ、、、ムウ、ソレ。

ト息込んで、上手へ行くこなしあつて

〽手負ひは屈せず引き止め。

丹右　コリヤ、血相して、いづれへ參る。

孫八　ハテ、圓覺寺に屯ろなす、股五郎に荷擔の城五郎、

浪士の奴原引ッ捕へ、探索とげ、運拙くばその場を去らず、切り死なして、花々しく。

〽行くを又も引き戻し。

丹右　ヤレ待て孫七。股五郎を奪ひ取らるゝは最初より覺悟の前。

孫八　ヤ、、、なんと。

ト竹笛入り、合ひ方になる。

丹右　股五郎を取逃がせしも、一つの計策。今この所にて彼れを討つては、天下の罪人、首尾よく打ち負ふせたところが、敵討には相成らぬ。それゆゑ、わざと取逃がし時節を待つて、志津馬が手より、主人へ差上げ、まつた上杉公より武将へ献上ある時は、お家の誉れ。これを功に敵討の願ひを立てん我か所存。明けて云はれぬ誠の正宗は、先達て、初瀬院内にて、僧侶を語らひし似せ物正宗。これなる孫八が手より、我れへの内通。武士は相身互ひと和田家の落目、心を砕くも師匠のよしみ。丹右衛門、七尺下がりし恩返し。

〽初めて心を明かすにぞ、鳴海も遣ひ出て、絶え絶えに。

ト鳴海、乗り物より這ひ出て

鳴海　股五郎が親の身で、丹右衛門さまと云ひ合せ、城五郎を騙かりしは、どうで非道な倅めが、命は所詮遁がれぬとも、殿様のお手に渡れば、竹鋸、磔刑の御成敗は知れた事。せめて武士らしく志津馬どのと敵討の勝負で死なば、なんぼうか嬉しい親心。この場を見遁がし下されとお頼み申して今日の仕儀。

丹右　オヽサ、老母の頼みはなくとも、志津馬に討たさにやならぬ敵。わざと敵へ奪ひ取らせ、丹右衛門一人が、誤まりになつて相果てなば、月日を待つて本望遂げよ。敵の首を、先生の位牌の前と、身が墓へも手向けてくりやれ、コレ、頼むぞよ。

〽最期の際まで師弟の義理、我れゆゑ、命を捨てらるる。

孫八　この大恩はいつの世に。返す〲も残念なは、敵股五郎を志津馬さまが、助太刀の後見、頼むあなたにお別れ申す、孫八が心の本意なさ。御推量下さりませ。

トほろりと思ひ入れ。丹右衛門、キッとなり

丹右　ア、、甲斐なき孫八どの、丹右衛門は死するとも、無念の魂ひはこの世を去らず、郡山の政右衛門こそ、我れに十倍まさりし達人。力と頼むはこの人ならで外にあ

るまじ。仁義を守る生得なれば、頼みに違背はよもあるまじ……ア、もしや敵の壁に耳。ちつとも早く、この場を早う。

ト行けと思ひ入れ。

〽この世のさらば、未來の門出。

鳴海　丹右衛門さま。

丹右　鳴海どの。

鳴海　思へば今日の云ひ合せ。

丹右　敵と敵が修羅の道連れ。

鳴海　止めは互ひに一刀。

〽落ちたる刀差添へを、よろめきながら取上げて、眼はくらめど胸と胸、差し貫きたる義士貞女、嘆く孫八目もくれて、足進まねば泣く／＼も。

ト鳴海、たぢろぎ、丹右衛門の側へ寄らうとする、孫八、これを介抱する。この時、以前の孫九郎、うぬと孫八に切つてかゝる。丹右衛門、見事にこれを切り倒し、撞と下に居る。

〽家來が肩に敵の圍み、歯を喰ひしばつて立歸る。心の內こそ哀れなり。

ト鳴海と丹右衛門、落入る。鳴海は、孫八に介抱うけ、愁ひのこなし、よろしく見得。三重、ごんにて　幕

四　幕　目　宇佐美五右衛門屋敷の場

役名――宇佐美五右衛門。鳥羽源之丞。若黨、權介。中間、文平。飛脚、松介。櫻井林左衛門。政右衛門妻、お谷。

本舞臺、三重の間、常足の二重。半分は中仕切り、杉戸立てきり、正面は屋敷唐紙、右二重の半分、敷臺の付きたる玄關のかゝり、ズッと通しの軒に、櫺子窓、すべて家中長家の體。幕の內より上の方、源之丞、麻上下、一本差しの拵らへにて立ちかゝりゐる。權介、麻の袴、一本差しの付ひ、取次いでゐる。この仕組み、張り扇の音、本行の太鼓地、鳴り物にて幕明く。

權介　これは／＼、源之丞さまには、折角のお出でのところ、未だ主人五右衛門、御殿より歸宅いたさねば、今暫らくお控へ下さりませう。

源之　イヤ、拙者事、今日は親式部の名代として、若宮八幡に於いてお能を勤め、即ち滞りなく相濟まし、お屆け旁々、殿にも御滿足の體、五右衛門さまにお目に懸り、お話し申さんと、それゆゑ、お能の歸りがけ、罷り越してござりまする。

權介　やがて歸宅に間もござりますまい。

源之　左樣御座らば、折角の事、お歸宅まで、一服いたしてお待ち申さう。

ト矢張り、能扇、稽古の音になり、向うより、飛脚の拵らへ、松介、旅狀箱を持つて出て來り、門口に佇み

松介　ハツ、お頼み申しませう。こなた樣へ、主人櫻井林左衛門、見えられましたでござりまするか。

權介　ヤ、櫻井さまの御家來、松介どのか。まだ今日は、林左衛門さまは、一度もお出でなされぬが、なんぞ急な御用でもござつてかな。

松介　イヤ／＼、急と申す事でもござらねど、お旦那の甥御、澤井股五郎さまより、御狀が參りましたゆゑ、お手渡しに差上げねばならぬ右の御用向き。それゆゑ、お長屋中を尋ねて居るのでござる。

權介　ハア、そんなら、あの股五郎さまの伯父御と云ふはアノ林左衛門さまか。

松介　左樣ださうでござりまする。

權介　伯父甥の仲といふ事は、初めて知つた。ハテ、意地の悪い所は、爭はれぬものだ。

松介　左樣なら、また外を尋ねませう。

權介　もしお見えなされたら、早速申し上げるでござらう。

松介　それは大きに、お世話でござります。ドリヤ、一遍お長屋を尋ねませうか。

ト矢張り右鳴り物にて、松介、引ツ返して向うへ入る。

源之　只今櫻井さまの中間衆の話しにて、拙者も初めて承はつた、股五郎どのと伯父甥の近しき仲とは、知らぬ事とて、只今まで、滅多に人の噂は申されぬものでござる。

ト唄になり、向うよりお谷、屋敷風女房拵へ、帯、淺黄袱紗に刀を包み、これを抱へ出て來り、花道にて

たに　ほんにマア、縁といふものは、盡きぬものとは云ひながら、いつ何時どのやうな事があらうやら、女子ほど

果敢ないものはない。もしや夫の心に……その時はマア、どうしたらよからうやら。思ふまい／＼、心急くまま後や先、それよりは又右衛門さまにお目にかゝり、何かのお話し。少しも早う。さうぢや／＼。

ト舞臺へ來り、内を覗いて見て

ハイ、五右衛門さまは、お宅でござりますかえ。

ト權介、お谷を見て

權介　ヤ、あなたは、政右衛門さまの御内室、お谷さま、よう入らつしやりました。サア／＼、これへお通りなされませ。

たに　見れば、お客樣もあるやうな。して、五右衛門さまはえ。

權介　やがてお下がりでござりませう。

たに　ちとお目にかゝり、お話し申さにやならぬ譯あつて、わざ／＼まゐりましたが。

ト云ひ兼ねるこなし。

權介　何の御遠慮はござりませぬから、お歸りまで、奥でゆるりと。

たに　お待ち申して、何かのお話し。

源之　拙者もお歸りを、お待ち申して居りませう

たに　左樣なら、あなた、これにゆるりとお出でなされませ。

ト唄になり、お谷、こなしあつて、袱紗に包みし大小抱へ、奥へ入る。床淨瑠璃になる。

〽お能終つて御供は、指南の棒を振り廻し、鼻高々と入り來るは、櫻井林左衛門。

ト調べになり、向うより林左衛門、羽織、袴、大小の拵らへ、中間一人附き添ひ出て來る。直ぐに舞臺へ來たり

中間　宇佐美五右衛門さま、お宅でござりまするか。

ト權介、出て

權介　これは、櫻井林左衛門さま。まだ五右衛門は、詰所でござりまする。

林左　ムウ、いつ來ても在宿のないは折惡い。今日罷り越したは、先達てより殿へ願ひ出せし、政右衛門との立合ひの儀、これまで延引の譯、仔細があらうと、その儀を具さに承はらうと存じ、わざ／＼、若宮の歸りがけ、立寄つたと申しておくりやれ。

源之　今日のお能、首尾よく相濟み、御苦勞千萬。先づ／＼これへ。

ト林左衞門、上手へ通る。

林左　今日は、最上吉日とは申せど、一入天氣も快晴なれば、この上とも、殿の御滿足、御祈願の奉納、お能相濟み、貴殿の親御式部どのゝ御丹精屆き、さぞ喜ばしうござらう。

源之　全く、親ども病中ゆゑ、父に代つて、役目相勤めましたも、一重に貴殿のお執成しと、御指南申す家の面目、如何ばかり有り難き、仕合せに存じまする。

權介　イヤ、モウ、御家中は申すに及ばず、お能、滯りなう相濟み、我れ〳〵どもまで恐悦に存じまする。

林左　それにつけ、五右衞門どの、未だ歸宅延引は、何か仔細でもある事か。何とも合點のゆかぬ儀でござる。

源之　先刻より餘程の間、最早や御歸宅に間もござりますまい。

權介　私しが一走り御玄關まで。

ト立ちかゝる。

源之　それは御苦勞。拙者も、お能の番組伺うた上、歸宅いたさんと、お待ち申し罷りあれば、何分、貴所樣、お賴み申しまする。

權介　最早やお下がりでござりませう。お二方樣のお待受けの趣きを。

林左　少しも早う、賴み存ずる。

權介　畏まつてござりまする。

ト權介、向うへ行きかゝる。唄になり、向うより五右衞門、老けたる拵らへ、大小、羽織にて出て來る。中間文平附き添ひ出て、花道にて權介と行き違ひ

五右　其の方は、家來權介、いづれへ參る。

權介　ハツ、御主人のお迎ひ、途中まで。

五右　して、待ち受けし客來でもあつてか。

權介　林左衞門さま始め、外にも珍客。

五右　それは定めし取込みであらう。サア、參れ。

ト權介、入れ代つて、五右衞門先に、本舞臺へ來り、内へ入る。

これは〳〵、林左衞門どの源之丞どのを始め、ようぞや御入來。先刻よりお待受け。失禮の段は、御容赦下されい。

林左　なんの〳〵、拙者も貴殿に御面談の上。

源之　また御奉納お能の番組、承はりたき儀ござつて。

林左　御歸宅を相待ち罷り居つた。

ト五右衞門、こなしあつて

五右　さて〳〵、何の風情もなき所へ、先日も御入來の砌り、折惡しく他行。コリヤ〳〵權介、文平、其方達は、勝手へ行て、何はなくとも御酒一ツ、用意しやれ。

權文　ハツ、畏まりました。

文平　この文平が料理の庖丁、また箸の遣ひ方、鹽梅は勿論、鹽の辛い事は、舌が縮んで物云はれぬ所が賞翫。その鹽梅のよい所を上げたい〳〵。

五右　何をたわけめが。

ト睨みつける。

文平　ハイ〳〵。

ト悄げる。

五右　次へ立て〳〵。

文權　ハイ〳〵。

ト文平、權介、呑み込み、奥へ入る。

五右　イヤモウ、國元と違うて、この度初めて殿の御入府につき、上府仕つて、男暮らしといふものは、なかなか不自由なものでござるて。ハヽヽヽヽ。

源之　先刻より申し上げんと存ぜしは、殿様、近々若宮八幡へ奉納のお能。春日龍神、並びに外御能番組、差上ぐるやうに仰せられあれば、この儀、お届け申さんと、それゆゑ、お待受け致してござりまする。

五右　これは〳〵、御念の入つた仰せ。早速御家老中へも、此の趣き申し達しまするでござりませう。

林左　時に、貴殿に承はりたいは、外の儀でもござらぬが、先達て、殿様へ御推擧なさるゝ唐木政右衞門どの、身共と立合ひの儀、疾より上へも願ひ立てられしと申す噂。まだ延引の趣き、その政右衞門、身共を恐れて立合ひ致さぬのか。さすれば、推擧なされた貴殿も、殿へ對して相濟まぬ譯。これには仔細でもござる事か。その儀が承はりたい。

五右　仔細なぞと申す儀もござらぬ。その儀につきまして。

ト思ひ入れ。

林左　アヽ、コレ〳〵、宇佐美どの、殿へ對して畏れ多い願ひ。いらざる事の取持ち。身共とても、その政右衞門どのと立合ひ致す時節あらうけれど、一旦殿へも願ひ出した儀、延引の譯は、門弟中も知らぬ事。拙者が卑怯未練に思はれては、一家中へ對して面目ないと申すもの。そこの道理を辨まへて、早々立合ひの儀お取持ち下されい。

ト林左衛門、たけり立つて云ふを、五右衛門、落ちつきたるこなし。

〽せり立てられてもさあらぬ體、一言一句も思案の五右衛門。

ト五右衛門、悠々と莨をのんで居る。

源之　誠に、拙者なぞは、遊藝を持つ身として、武術のお話し、及ばぬ序につらなつて、申し上げるも如何なれど、林左衛門さまとのお立合ひ、御延引との事。こりや、政右衛門さまのお心の內が、何とやら思はれまする。

林左　五右衛門どのゝお世話ぢやに依つて、劍術を申し立て、當家へ御奉公に出られた唐木氏。武士は相身互ひ。いつ何時にても相手になつて進ぜませうが、なか〳〵身共なぞには及ばぬ事、彼の蟷螂が斧とやら。

ト五右衛門、外らさぬ體にて

五右　そりや、殿へ師範なさるゝ貴殿なれば、政右衛門なぞは、及ばぬ事とは存ずれども、一旦願ひ出して立合ひの儀ゆゑ。

林左　拙者、劍術申し立て、勝負延引に及ばゞ、立合はぬ先から、一二を爭ふ劍術が、申し立てにならうか。この林左衛門が相手には、餘り大人氣なけれど、摑み拉ぐは知れた事。それを達て推擧召さるゝ貴殿の胸中。こりやお世話なされて、政右衛門から、扶持方の分米でも、取らつしやるやうに見えまするワ。アハヽヽヽ。

ト嘲笑ふ。

〽おのが高慢高らかに、鼻怒らして獨り笑み。五右衛門は素知らぬ體。

ト五右衛門、こなしあつて。

五右　殿へ對して畏れあれど、政右衛門を不鍛練なぞと、もし影口でも申す者あらば、左樣な者に、御知行を賜はつては、取次ぎ致したこの五右衛門、一家中へ相濟み申さぬ。これに依つて今朝も、御家老職へ、お願ひ申し、政右衛門に立合ひのお願ひ、申し上げよと申し聞かせど、彼れも新參の儀ゆゑ、辭退仕る。それゆゑ某、直にお願ひ申せど、殿樣には遊藝を好ませ給へば、武の道に心置かれず、そこを只管願うたれば、殿よりも改めて立合ひの儀、いよ〳〵仰せつけられ、拙者が面目、この上なし。

林左　すりや、政右衛門の立合ひ、貴殿が願ひ召されたか。

五右　オ、サ、首尾よく仰せつけられ、この身の安堵。

〽語るも宇佐美が面目と、忝け涙に平伏せば

ト五右衛門、思ひ入れあり。源之丞、五右衛門に向ひ

源之　宇佐美さまには念願届き、さぞ御滿足。奉納のお能も伺ひし上は、拙者はお暇。

ト立ち上がり、こなし。

林左　身共に向ひ、政右衛門が立合ひなぞとは、及ばぬ事。併し、殿へも願うた儀なれば、不便と存じ、稽古の爲、立合うては遣はすが、心得違ひのないやうに、よく云つて聞かせるがようござらう。最早黄昏近ければ、身共は道まで同道。

五右　然らば御兩所。

林左　立合ひの席にて。

五右　その節面談。

源之　イザ、途中まで

林左　ドリヤ、歸宅いたすでござらう。

〽云ひ捨て立つて行きかける。横にはびこる櫻井が、後に引き添ふ源之丞、伴うてこそ歸りける。

ト時の鐘になり、林左衛門先に、源之丞、以前の中間付いて向うへ入る。五右衛門、後見送り、思ひ入れ。

〽後見送つて五右衛門は獨り言。

五右　ア、、思へば憎くき林左衛門め。高慢の鼻、拉いでくれるは瞬くうち。政右衛門が立合ひ延引の譯知らず、急き込んで來たは、彼奴が卑怯未練より起りし事。腰拔け武士の禄、やはかおのれに取らさんや。

ト奧より以前の權介出て、下手に手をつかへ

權介　ハツ、先刻より申し上げんと存ぜしところ、お客人御至來にて、差控へ居りましたが、政右衛門さまの御内室、お谷さまお歸りをお待ちなされてござりまする。

五右　ナニ、政右衛門さまの内室が來られしとや、定めし樣子仔細があらう。早うこれへ。

權介　畏まりました。

ト權介、奧へ入る。

五右　ハテ、氣遣はしいお谷が入來。何とも合點が。

ト思案のこなし。合ひ方になり、奧よりお谷、以前の袱紗包みの大小を持ち出て來り

たに　これは〳〵五右衛門さま、先刻お歸りの樣子、奧にて承はりましてござりまする。私しは、あなた樣に、お話し申したい事がござりまして、お歸りをお待ち申して居りました。

五右　何か仔細は存ぜねど、某へ話しとは、定めて家内の譯合ひでがなあらう。早速ながら、國元の騷動、さぞかし其方も愁傷、察し入る。かゝる時節のそのゆゑに。

ト思ひ入れ。

たに　お話し申さぬ其うちに、何事も御推量なされて下さりませ。

トこの時、五右衛門、お谷が顔をよく／＼見て

五右　ヤ、見れば其方の顔色といひ、樣子あり氣なこの物の仕儀。

〽氣遣はしやと尋ねれば、お谷は涙押拭ひ。

トお谷、こなしあつて、五右衛門が側へ寄り

たに　何をお隱し申しませう。今日あなたへ參りましたといふ譯は、政右衛門どの、國元から歸られてより、夫の心底變り、出るにも入るにも、以前と事變り、不機嫌のその顔つき。この刀を差出して、仔細は云はず、これを持つて五右衛門方へ行けと云うたばかりにて、物を云はぬ心の内、どういふ譯やら合點ゆかずと、問ひ返さんにも日頃の氣質、お前に逢うて樣子を云はうと、其まゝ立つてお長家へ來る事は來ても、先刻からお客の樣子。一間の内に忍んで、今までお待ち申しましたわいなア。

〽刀取出し差俯向き、暫し詞もなかりけり。

トお谷刀を取出し、こなし、五右衛門、思ひ入れあつて

〽宇佐美はつく／゛＼打眺め。

ト五右衛門、刀を見て

五右　ハテ心得ぬ。ムウ、それ／＼、こりや、コレ、我が祕藏せし長船の一腰。其方が親代りなしたる印に、政右衛門方へ遣はせしに、持たせ越したは、ハテ、合點のゆかぬ。

〽引拔き見れば物打ちに、卷き添へし一通、こはこは如何にと解ほどき、見るより恟り。

ト五右衛門、袱紗包みを取り見る。中より刀に卷き添へし去り狀出る。これを見て恟り、思ひ入れ。

こりやコレ、こなたへ政右衛門より暇の一通。サ、、定めてこれには樣子があらう。サ、、どうぢやどうぢや。

〽詞にお谷も仰天し。

トお谷、恟りこなしあつて

たに　アノ、私しへの去り狀とは。

ト取つて見て

五右　サ、、定めしこれには、深い仔細があらう。隱さず

とも、云うて聞かせい。どうぢや／＼。
ト急き込んで云ふ。
たに　イエ／＼、去らるゝ覺えは微塵もござりませぬ。エ
エ、聞えぬぞや、政右衛門どの。ようマア、科もない身をむごらしう、去るといふ事誰れが始めた。お腹には、十月宿したお前の胤、只でもない身を情ない、なぜ其やうな胴慾な氣にはなつて下さんした。科があるならあるやうに、云うて聞かせてくれもせで、あんまりむごい、去つたとは、胴慾でござんすわいなア／＼。
〽情なやと、がつぱと伏して泣き居たる。
トお谷、いろ／＼泣き伏して、こなし。五右衛門、思ひ入れあつて
五右　エ、、こなたも武士の娘でないか。魂ひの腐つた政右衛門、後を慕ふ事はない。エ、、口惜しい。我が目の見えぬが誤まり、天晴れ器量のある奴と、睨んだ目が腐つたか。何卒出世をさせんと思ひ、いま出頭する林左衛門と、一勝負立合はさせ、武藝の器量を現はし、一家中の手本とせん。さすれば殿にも遊藝を捨てなされ、武道の道にお心を寄せ給はゞ、お家の御爲と思ひしゆゑ、林左衛門と立合ひを進むれども、辭退するは、臆病風に引かされた大腰拔けめが、此まゝ止めになる時は、一家中の物笑ひ。願ひをあげし御前の手前も云ひ譯なし。エエ腑甲斐ない心にはなり居つたなア。
〽腑甲斐なやとばかりにて、撞と座を組み居たりける。
お谷も共に泣きくどき。
たに　コレ申し、どうぞ夫が心の直るやう、卑怯者と云はれぬやう、あなたのお思案はござりませぬかいなア。
五右　オ、、さう思やるも尤もぢや／＼。最前も林左衛門が某に向ひ、彼れを相手に立合ひは、大人氣なしと、人も無氣なる雜言過言。聞かぬ顏は何ゆゑぞ。お家のお爲、二つには、おのれを出世させんものと、思ひし事も恩を仇、但しは、國元の騷動を聞いて、一家の緣を切る所存か。おのれゆゑには、勘當受けしこのお谷に、某が親となり、女房に持たせしに、科なき者まで疵を附け、追ひ出して寄越すのみか、親となつた印に遣つたるこの刀に添へて寄越した暇の狀、卷きつけし心は、我れを欺むく憎い仕方。肝にこたへて料簡ならぬ。武士の意地は立たぬ。宇佐美五右衛門、瘦せ腕なれど、鍛き刃金の、切れ味を見せてくれん。
ト五右衛門、身繕ひして立ちかゝる。

〽一圖に凝つた國侍ひ、お谷は取りつき。
　ト お谷、五右衞門に取りついて、こなし。
たに　マア〱、お待ちなされて下さりませ。
五右　ヤア〱、愚か〱。一先づこなたは屋敷へ歸り…
…コリヤ。
　ト お谷へ囁く。
たに　そんなら、私しは。
五右　何氣なく持ち歸れよ。我れは後より用意して、政右衞門が宅へ押しかけて。
たに　事に依らば夫の命。
五右　コレ……先手を取つて切りかけん。その時こなたもこの刀で。
　ト お谷に件の刀を渡して、こなし。
たに　兼ねて覺悟の。
　ト こなし。
五右　尋常に自害せよ。
たに　云ふにや及ぶ。この世のお暇。
　ト 行きかゝるを、突き廻し
五右　未練に心殘されな。
　ト 思ひ入れ。

〽詞立派に云ひ放す、夫の心善惡をと、小褄凛々しく帶引きしめ。
　ト お谷、身拵らへして、花道へ行きかゝる。
少しも早う。
たに　合點でござんす。
〽勇まぬ心取り直し、勇み進んで行く足も、爪づく石に心せき、思案に胸も解き兼ぬる、思ひ直して出でゝ行く
　ト この文句にて、お谷、足早に向うへ入る。五右衞門後見送り、思ひ入れあつて
五右　勇ましき彼れが心底、某も直さま用意……權介權介。
　ト 出る。
權介　御用でござりまするか。
五右　コリヤ、其方は、着替への衣服上下、持て。
權介　ハッ。
　ト 二重の上より、廣蓋に衣服大小、上下のせ、持つて出る。
五右　コリヤ〱、まだ外に申しつける用向き。
　ト 五右衞門、急いたる心にて、後や先の臺詞あつて、

衣服、上下を着る事よろしく、此うち、奥より以前の文平、鉢の中に刺身を作り、これを持つて來い

文平　先刻仰せつけられたるお肴、只今やう／＼。

五右　もし、手にあまるその時は、ムウ。

ト獨り言云うて、考へ／＼上下を着る事よろしくあつて、刀の目釘をしめして、勇ましく行かうとする。

文平　モシ／＼お旦那、手際の刺身庖丁を御覽に入れたう。

ト五右衞門が目先へ出す。五右衞門、見て

五右　何をたわけめ。それどころではない。

ト思はず鉢を叩き落す。文平が頭へ、刺身かゝる。文平、これにはと寄るを

エ、ゝ面倒な。そこ退け。

ト文平を突き退け、花道の方へ行きかける。舞臺の兩人は、ハア、と倒れる。

〽心得まかせと身づくろひ、心も空に慕ひ行く。

ト三重の送りになり、五右衞門、よろしくあつて、一散に向うへ入る。

幕

幕五目　　政右衞門屋敷の場

役名 ― 宇佐美五右衞門。若黨、柘榴武助。政右衞門女房、お谷。行家妻、柴垣。行家娘、おのち。乳母、おもと。腰元、立田。同、時雨。唐木政右衞門。

本舞臺、三間の間二重。見付け中形屋敷襖。上手、一間の折り廻し障子屋體、いつもの所に門口。これに唐木政右衞門と記せし表札を懸け、爰に若黨の拵らへにて柘榴武助、爼板庖丁にて肴を料理して居る。鳴り物、鐵輪の謠の切れにて幕明く。

〽昔は山の跡なれや、今も名のみは郡山、家中屋敷も繕はず、直な唐木の征目ある、家の柱はのき去りに、奥樣役の留守預かり、柘榴武助は忠義者、常の奉公の裏表、内證賄ひ忙しき。

ト矢張り鳴り物のあしらひ。武助、肴拵らへあつて

武助　お隣り屋敷の亂舞の稽古は、ありや鐵輪、後妻打つ折も折、時も時と、お旦那政右衞門さまには、譯のあるお谷さまを追ひ出し、今宵俄かに嫁入り支度。日頃のお

氣に似合はぬ事ながら、祝言に女きれがないゆゑ、隣りの與家老樣へお願ひ申したら、よいやうに御承知ぢやが、ハテ、打つたり舞つたり、一人ではいけぬわえ。

〽臺所より腰元どもが、ばら〳〵と立出でゝ。

ト奧より立田、時雨、腰元の形にて出て來り

立田　モシ武助とやら、今夜はお内方に嫁御樣がお出で遊ばすげな。お手傳ひに御祝言のお振舞ひ。

時雨　わたしどももあやかるやうに、お手傳ひに參りました。

武助　イヤ、これは御苦勞々々。御存しの通り小身の旦那、中間一人下女一人、若黨のこの武助が、料理人やら御家老やら。あんまり人手がなさに、待女郎にも、お酌にも、お前方をお頼み申す。

立田　イエ、同じお給仕でも、御祝言と聞けば、氣がしよき〳〵。

時雨　イヤモシ、お噂を聞きますれば、合點のゆかぬ事はお谷さまといふ御新造樣、お里歸りなされてから去られたげな。まだ温まりも冷めぬうち、新しい嫁御をお入れ遊ばすとは、あんまりな手廻し。

立田　サレバイナ、今度の御新造樣は、何處からお出でなさるのぢやえ。

武助　イヤモウ、我れらもかつふつ存ぜぬ。何だか知らぬが旦那が一人呑み込んで、今夜嫁を呼ぶほどに、祝言の拵らへせいと云ひつけられたから、俄に料理拵らへ。少しばかり聞きはづゝた海老の舟盛、沖鱠沖鳥などゝいふ、しちむづかしい事は取措き、鯣の吸ひ物、腹合せは新枕の心ぢやげな。肝心な嶋臺を忘れて、正月のお杯を組み替へて間に合はす。おれ程の者がいかぬは、銚子くはへの折り方、お前方知つてなら、こればかり折つてもらひたい。

時雨　ナンノマア、そのやうに儀式せいでも大事ござりますまい。お話しの樣子では、お仲人さへない嫁入り、今まで何處ぞでこつそりと、圍つてあつた女中であらう。

立田　ほんにマア政右衛門さまも、お顔に似合はぬ色事師。先の御新造樣はお腹が立たう。馴染の御新造を暇取らして、後へ來る嫁づらは、どんなお顔ぢや、見てやりたい。

時雨　さうぢやわいなア。

〽さがない女子の口々に、うたて浮世の高話し。憂き事の思ひの種を身に持つて、我が家ながら心置く、夫の留

守を窺ひ足。

ト此うちお谷、前幕の形にて出て來り、直ぐに門口へ來り、内を窺ふ。武助は見付けて、

武助　ヤア、お谷さま。

たに　武助々々。

ト門口にて手招きする。

〽腰元は目早く見て、

ト腰元兩人この體を見て、

立田　お谷さまと仰しやるは先の御新造。

時雨　ようお出でなされました。マア〳〵これへ。

〽と云ふに武助も押下がり。

ト皆々よろしく、お谷、上手へ通る。

武助　お谷さま、ようお出でなされました。幸ひ只今旦那のお留守。お歸りならばお知らせ申しませう。マヽ、御ゆるりとなされませ。

〽あしらふ程、いとゞ重なる憂さ辛さ。

たに　イヤナウ武助、共白髮までと云ひ交した、人の心も變れば變る、我が家へよう來たと云はれるやうになつたわいなう。身に覺えはなけれども、假親の五右衛門さま、どのやうな誤まりをしたぞ、假の印のこの一腰、譯が立たねば受取らぬと、それは〳〵お腹立ち。お屋敷へも置かれねば、立寄る方もない身の上。

武助　御尤もでござります。譯のあるあなた、何の仕落ちがござりませう。私しめもさつぱり合點が參らぬながらまた致しやうもござりませう程に、必らずお心遣ひなされまするな。

たに　それはさうと、見ればいから賑かなが、お振舞ひでもあるのかや。

〽問はれてそれを云ひかねる、後先見ずの女中達。

立田　お谷さま、今宵は此お屋敷へ。

時雨　お嫁入りがござりまする。

たに　ヤア、嫁入りとは誰れが嫁。コレ武助、よもやさうではあるまいと思へども、もしや旦那どのに、嫁御が來るのぢやないかや。

武助　イエ、その儀は。

立田　エヽ、武助どの、隱してもどうでも知れる事。政右衛門さまの御新造でござりまする。下地からどうでも譯のある事かして、今夜俄の御祝言。私しどもはお隣の、奥家老様よりのお頼みで、お給仕に雇はれて參りました。

時雨　お前様は先の御新造様、てつきりお姿に見替へられ

なされたに、相違はござりませぬ。
兩人　ぐつと御悋氣なされませ。
〽身にもかゝらぬ下々の、法界悋氣に焚つけられて、いとゞ重たる口惜しさ、包みかぬれば見て取る武助。
武助　ア、コレお女中方、役にも立たぬ事云はずと、お臺所に人がない。爐の炭でもついでもらひませう。
立田　アイ〳〵、合點ぢや〳〵。旦那樣のお歸りを待女郎。
時雨　此方も嫁御の相伴で、よい夢見よう。サアござんせ。
〽打連れて、立つて行く間を待ちかねて。
ト腰元兩人、奥へ入る。
たに　エヽ、政右衞門どの情ない、一方ならぬ譯ある仲を引裂いて、直ぐに今宵嫁入りとは、そりやあんまりぢや、胴慾ぢやわいなア。
〽かつぱと伏して泣き居たる。
ト　お谷泣き落す。合ひ方。
武助　オヽ、お道理でござります。御尤もぢや〳〵〳〵。シヽガお谷さま、必らず御悋氣なされまするな。
たに　あの云やる事わいなア。悋氣とは一通りの事。非業な死をなされた父樣、弟志津馬が敵討の、力と頼むはたつた一人、その夫政右衞門どのと緣切れば、誰れを頼みに大敵の股五郎、いつ本望が遂げられう。力も綱も切れ果てしと、思へば胸が張り裂けるわいなう。
〽歎けば共に泣じやくり。
武助　お氣遣ひなされまするな。例へ旦那がどう仰しやつても、拙者めが命に代へて、この御緣は切らしませぬ。悋氣なされなとはそこの事。お前樣のお腹には、政右衞門さまのお世繼がござりますぞえ。去り狀お取りなされうが、後連れが入らうが、その若樣さへ御平産なさるれば、切つても切れぬ血筋の御緣。政右衞門さま敵討の助太刀も、頼みの種と人參子、御臨月に氣を揉んで、過ちあらば如何なさる。迫ッつけお旦那がお歸りあらば、悋氣がましい顏をなされず、兎角この御當家を動かぬやうになされませ。御合點がまゐりましたか。とは云ふものの、義理あるお前を去つて、嫁入りの祝言のとは、旦那は、どうしたお心ぢややら。拙者も一切合點がゆかぬ。ほんにこの蜂花形を、私しは折りやうを存じませぬ。お前樣、お頼み申しまする。
〽云はれて手には取りながら。

トお谷、紙を取り、折る事よろしくあつて

たに　見す〳〵夫を寢取らるゝ、アタ憎てらしい蝶花形。

〽大骨折つて隼の、䳄の餌になる春の雉子、外に夫の聲聞え。

トお谷、折形をしまひ、武助門口より向うを見て

武助　アレ〳〵、向うへ旦那のお歸り。暫らく忍んで何かの樣子。

たに　何事もよいやうに、武助頼むぞや。

〽家來が情を力草、逢ひたい夫に隱るゝも、寐持つ心柄紙を押明け忍び入りにけり。

トお谷、思ひ入れあつて奧へ入る。

〽心掛けある侍ひは、地を御ふ蟲も氣をゆるさぬ、唐木政右衛門、伊達を好まぬ刀の柄、人に勝れし袴の幅、上屋敷より歸り足、武助手を突き。

ト此うち花道より政右衛門、上下衣裳にて出て來り、直ぐに内へ入る。武助出迎へ、よろしくあつて

武助　お旦那只今お下りなされましたか。殊の外のお[illegible]入り。御用の趣きは、如何體の儀でござりまするな。

政右　されば〳〵、この間から辭退申し上げる櫻井林左衛門と武藝の試み、明朝正六ツ、御前に於て立合ひ致せと押つけての御家老の云ひ渡し。今晩妻を迎へまする、婚禮あるゆゑ、一兩日お延ばし下されと願うても、いつかなお聞入れなく、女房呼ぶは私し事、明日は延ばされぬと、さりとは心ない家老どの。此方は内へ氣が急く。もゝ尻をしてやう〳〵只今。して、祝言の拵らへ、用意は出來たか。

武助　ハツあらまし拙者が調へましてござりまする。

政右　よし〳〵。ヤレ〳〵、知行取りに飽き果てた。嫁の來るまで上下を脱いで休息せう。誰れぞ枕持て。女子ども。

たに　ハイ。

〽あいと返事も差足に、顏を隱せし塗り枕、そつと傍に奧樣が、腰元代りの見え隱れ、袴は解けど胸解かず、鏡い常の侍ひ肩衣、折つて疊んで取り直す、詫びの種とは見付ける夫。

ト此うち奧よりお谷、枕を持ち出て來り、ソツと差出す。政右衛門、上下を脱ぐ。お谷、疊む。兩人よろしくあつて

政右　ヤイ武助、あの女子は何者ぢや。

たに　エ、。

武助　イヤ、あれは、アノ、今日御見得に參つた新參の女中で、ナア。

ト双方へ吞み込ませこなし。

たに　ハイ、旦那樣、お目掛けられて下さりませ。

政右　フム、すりや奉公人ぢやな。見掛けから愚鈍さうな不束な女なれど、使うて見てくれう。コリヤヤイ女、今夜は身共が妻を呼び迎へるが、祝言の給仕申し付けるぞ。

たに　アノ、嫁御とお杯の給仕をせいとは、そりや又あんまり。

政右　どう致したと。

たに　イエ、餘り急な御祝言、不調法な私しが。

政右　給仕をせずば奉公叶はぬ。立歸れ。

たに　イエ〳〵申し。何でも御意は背きませぬ。お使ひなされて下さりませ。

〽下女になつても夫の家、離れかねたる心根を、察して武助が吞み込む涙。

武助　さうだ〳〵。御奉公は辛抱が大事、何仰しやらうとアイ〳〵。そこらを程よう塩梅加減。ドレ、お杯の用意を仕らう。

〽料理を椽に立つて行く。

ト武助思ひ入れあつて奥へ入る。引違へて下手より中間一人走り出て、門口へ來り。

中間　申し上げます、宇佐美五右衞門さまお出でゞござりまする。

ト云ひ捨てゝ下手へ入る。

政右　ハヽア、また堅藏がわせられた。誰れぞ羽織を持て。

〽云はれぬ先から心得て、勝手覺えし女房が德、機轉利かして後から、着せる羽織をひつしよなく。

トお谷、手早く奧より羽織を取つて來り、政右衞門の後から着せるを

エヽ、子供ではないぞ。差出た女め。次へ立て〳〵。

トお谷から羽織を引ッたくり着ながら、

キリキリ立て。

〽睨めつけられて是非なくも、立つ間忙しく。

トお谷、チッとこなしあつて奧へ入る。

〽入り來る五右衞門、彌左衞門裁の上下、硬張り切つてむんずと坐し。

ト此うち花道より宇佐美五右衞門、上下衣裳にて出

て、直ぐに舞臺へ來り門口より

五右　罷り通る、御免下され。

ト云ひながら內へ入り、上手へ住ふ。

政右　これは〳〵五右衞門どの、ようこそお出で下された。

五右　仰せに及ばず、早速ながら政右衞門どの、承れば今晩其許へ、嫁御入來との由、御祝儀に參つた。老人の寸志、御覽下されい。

〽一通を差置けば。

ト五右衞門、懷中より一通を出し、政右衞門が前へ置く。

政右　これは〳〵、拙者婚禮をお祝し下され、御發句でがな。先づ以て忝なし。

〽押開き見て不思議顏、暫し詞もなかりしが。

フム、こりや拙者への果し狀でござるな。ハテ存じ寄らぬ。先づその意趣の次第はな、

五右　知れた事、科ない妻めをなぜ去つた。

政右　これは迷惑。拙者が妻を拙者が去るに、おてまへが何ゆゑの御立腹。

五右　アヽ云ふまい。尤もお谷は上松の家中、和田行家が娘なれど、お身と密通して二人連れ、この郡山へ駈け込んで浪々の體、元より行家とは武藝の相談の友ゆゑ、早速內々にて申し入れたれば、殊ない立腹。なか〳〵急々の沙汰に思はず、不便に思ひ、先づおてまへに近附き、樣子を窺ひ根性を見込み、殿へ御推擧申し上げ、當家へありつかせたはこの五右衞門。それもお谷が緣より起る。その上勘當受けて親許のないお谷、行家方より貰ひ受け、身共が娘分にして、改めてお身にくれたれば、以前は行家が娘にもせよ、今は身が娘。少しの見落しあるとても、去られる義理ではないぞよ。一旦の恩を忘れ、外より妻を持ち替へるは、五右衞門を踏つけた仕方、堪忍ならぬ。それともお谷に餘儀ない科でもあるか。それ聞かう。返答次第その座は立たせぬ。サヽなんと。

〽鍔打ち叩いて詰めかけたり。

政右　御立腹の段々承り、イヤモ、重々尤も千萬。お谷に微塵も科はなし。去つた仔細は別儀でもござらぬが、飽きました。女房といふものは、飽きてからは、もう〳〵片時も置かるゝものではござらぬ。

五右　なんと云はるゝ。

政右　サヽ、マア、お聞きなされい。御立腹は御尤もぢや

が、いま拙者を討ち果されては、御主君へ不忠になりますぞ

五右　なんと。

政右　今日上より御意あつて、明朝御前に於て櫻井林左衛門と、劍術の勝負を致すこの政右衛門。これまで拙者を推擧なされ、明日も勝負檢分の役目を仰せ付けられた其許が、その立合ひも致さぬうちに、拙者をさつぱり切つておしまひなされたら、御自分樣の意の趣きは立たうが、殿へは何と云ひ譯はなさるゝ。

五右　サ、それは。

政右　是非憤り晴れぬとあらば、何と致さう武士の因果。明日御前の試合を勤め、その後にてお望みに任せ、お手にかゝりませう程に、今暫らく御宥免下さるやうに、願はしう存じまする。

〽理に詰められてさしもの五右衛門。

五右　フム、上を重んじ表を立てる心は尤、さりながら、期を延ばせしとて、鬱憤は止まぬ武士の意地。しかと御前の立合ひ終らば。

政右　云ふに及ばぬ。その時こそは運命を天に任せて。

五右　キツと詞を番ひ申した。

政右　二言はござらぬ。

五右　約諾の上は、遺恨は遺恨御用は御用。明日までは傍輩の役目、仲よし〳〵。

政右　すりや御得心下さるゝか。

五右　年は寄つても宇佐美五右衛門、まだ顚倒は仕らぬ。

政右　ア、忝ない〳〵。今日参る嫁、イヤ又その器量の好さ。誠に雪と墨との違ひ。妻のお谷めは不器量の上に因果と早う身籠りして、正眞の鰒の横飛び。飽きたを無理とは思し召し下さるな。

〽愛想づかしを立聞きの、障子に齒形も入るばかり、差込む癪の折もあれ。

ト此うちお谷障子屋體より立聞き、チツと思ひ入れ。奥より以前の腰元兩人出て來り

立田　申し上げます。お嫁御樣、早これへお渡りでござりまする。

ト皆々これを聞いてこなし

政右　ナニ嫁が。待ち兼ねた。早う通せ。

ト腰元兩人引返して入る。

コリヤ女子ども、燭臺に火を點せ。早く〳〵。

兩人　ハイ〳〵。
　ト云ひながら、燭臺銚子島臺を持ち出て、よき所へ置いて入る。
政右　五右衛門どの、最早嫁が參つてござる。
五右　これは早急、暦でお見さつしやればよいに。
政右　見ました〳〵。最上吉日でござる。
五右　でも日が暮れぬに。
政右　善は急げでござる。
五右　ナニ、急ぐ程の事がござらう。
政右　これは〳〵御挨拶。
〽騒ぐ程、猶五右衛門がむかつく顔、玄關より奥座敷、直ぐに手繰りの鋲乘り物、對の簞笥に染め込みの、覆ひも愛持つ介添女房。
　ト此うち奥より鋲打ち乘り物一挺、侍ひ手引きにして出る。これに乳母おもと、縮やつし屋敷模樣にて附添ひ出て來り、よき所へ直す。後より對の簞笥、子持筋の覆ひのかゝりしをよき所へ直す。政右衛門見て
政右　オヽ、大儀々々。イヤ宇佐美氏、只今御覽の如く彼の妻が參つた。お喜び下されい。
五右　ア、めでたい儀でござる。

政右　御推量下されい。貴公には御退屈。コリヤ〳〵、あなたに御酒上げいよ。
五右　イヤ、拙者御酒を食べると胸が惡くござる。
政右　それは氣の毒。然らばお菓子々々。
たに　畏まりました。
　トお谷、高坏に饅頭その他蒸菓子を積み、これを持ち出て五右衛門が前へ置き直し、思ひ入れ。
五右　イヤサ、お構ひ御無用。
政右　ハて堅苦しい。何がな御馳走。ヤイ、コリヤ、新參の女、何をうぢ〳〵まご〳〵と、その不調法では祝言の酌は得せまい。お客の膽入り。ソレ、お脊中でも揉んで上げい。
たに　ハイ〳〵。
　ト立ちかゝる。
五右　エヽ、構ふな〳〵。
〽云ふ程腹の立波に、音も泣く千鳥四海波。
　トお谷五右衛門思ひ入れ。政右衛門構はず
政右　さて我れら今晩の花聟、上下を着る筈なれど、頭から打解けるやうに、角菱廢めて此まゝ見參。サアサア早う嫁御のお顔が見たい〳〵。

もと　オヽ、心易い聟樣で、嫁御樣のお仕合せ。恥かしおつてござらずと、サア、お出でなされませ。

〽乘り物明くれば綿帽子、綿より先は埋もれて、七つばかりのいと稚御寮、尺にも合はぬ襠ほら〳〵、帶につられて座敷にとんと。

ト女形立ちかゝり戸を明ける。内より行家娘おのち、芥子坊主の娘の形、裲襠衣裳にて綿帽子、好みの拵らへにて、乳母おもと、介抱して出て來り、よき所へ住ひ

のち　乳母、これ取つて〳〵。

ト綿帽子へ手をかける。

もと　マアその綿帽子、お杯の濟むまで冠してござれ。

政右　アヽ、イヤ、うつとしからう。取つてやりやれ。ドレ、聟女房の御面相を。

〽帽子取らせば尺長も、しまらぬ芥子の花嫁御、直す三方土器を、乳母が持添へ頂かせ。

ト此うち政右衞門おもと、おのちの帽子を取らせ、おもと介抱して杯事あり。皆々思ひ入れ。

もと　ハイ、聟君樣へ上げまする。

ト三方の土器を政右衞門へさす。

政右　忝ない〳〵、女子ども皆見てくれ。なんとちよつこりとして、何處に置いてもマア邪魔にならぬ、よい女房であらうがな。

立田　イヤモウ、先御新造樣とお見替へなされた花嫁樣。

時雨　お噂より見て恟り。

たに　思ひ違のも程のある。こりやマアどうした祝言。

政右　神武以來下々では無い圖な婚禮。物好きといふもあんまりで、開いた口さへ塞がれ申さぬ。

時雨　そのお口取には、用意のお肴がござんす。

ト云ひながら兩人思ひ入れして奧へ入る。

政右　肴とは出かす〳〵。先づ何よりは嫁御の杯、めでたう一つ。

〽めでたう一つ、次の間より。

ト政右衞門、杯を受けてお谷酌する。奧にて、

柴垣　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

〽と唄聲、裲襠の袖に一通取載せ立ち出づる。

ト奧より柴垣、襠裲衣裳にて出て來る。お谷これを見て

たに　ヤア、お前は母樣柴垣さま。

〽驚ろくお谷に目もやらず、政右衞門に打向ひ。

柴垣　お願ひの通り、頑是ないこの娘を妻となし下され、この上の本望なし。聟引手のこの目録は、御主人上松様より志津馬へ下されし敵討御免の御書、いよ〳〵助太刀なされて下さるお心ぢやな。

政右　お尋ねに及ばず、承知いたして罷りある。

柴垣　ヱヽ、忝ない。

〽喜ぶ母に不審の二人。

政右　コリヤ新参の女、よつく聞け。身共には先妻があつたれどナ、親の許さぬ密通、行家どのゝ勘當の娘、どれあひ女夫の悲しさは、表立つて聟舅とは云ふ事はならぬぞよ。いま郡山の扶持を頂く政右衛門が、よしみもない他人の助太刀がなるべきか。コレ此おのちは、世間晴れての行家どのゝ忘れ形見、志津馬が妹に違ひない。この幼ない者と祝言すれば、これぞ誠の聟舅、舅の敵、小舅の助太刀仕ると、殿へ願ひ奉らんには、よも不届きとは思し召されまじ。彼方此方を思ひ計つて、科もない女房を、去つた譯はこの通り。義理といふ色香に迷うて、五年の馴染に見替へた心汲み分けて、五右衛門どの御立腹の段々は眞平御免下さりませ。

ト鹿爪らしくこなし。

イヤ、我れらもう酔ひました〳〵。何を申したやら他愛他愛。偏に御免下されい〳〵。

〽酒に紛らす本性の、云ひ譯聞いて手を合せ。

たに　ヱヽ、有り難い政右衛門どの、よう去つて下さんした。その誠をちつとの間も、恨んだ女子の廻り氣を、堪忍して下さんせ。

五右　オヽ、サ、委細を聞いて我も角も、一時に折れ申した。身共までがよい年をして疑ひの悪口、面目ない。所存の程感じても餘りあり。天晴れ武士かな政右衛門どの、この祝言は敵討の門出、武士道も立ち家も立ち、よい嫁を迎へられた。さて〳〵めでたい婚禮。我れらも共々お取持ち。

〽始めの腹立打替へて、一度に顔の色直し。

政右　お心が解けたれば、いよ〳〵替らぬ政右衛門が、後連れのおのちや。二世かけた其方の夫、今夜から抱いて寝るぞや。コレ女房ども〳〵。

〽云へどおのちは欠伸まじり。

のち　乳母、もう去にたうなつたわいなう。

柴垣　これは娘とした事が、嫁入り早々去んでなるものぞいなう。三々九度のまだ済まぬ殿御、お杯頂くものぢ

や。

のち　イヤ、お魚は嫌ぢや。乳母、あれ欲しい。

もと　あれとは、ムウ、お饅かえ。さもしいお嫁御様ではあるぞえ。おとなしうお行儀に。

政右　イヤ〳〵、道理ぢや〳〵。可愛い妻に何惜しからん。併し一つは過ぎる。半分は身が預かる。これが夫婦の固めぢやぞ。

ト高坏の饅頭を引裂き、おのちに遣る。

〽持たせればほや〳〵饅頭笑顔。

ほんに忘れた。嫁君の御持参。肝心のお道具を、ドリヤ、やりませう。

〽箪笥の抽出広蓋に、取並べたる持遊びの、市松人形風車。

ト政右衛門、箪笥の抽出より広蓋にいろ〳〵の手遊びを並べ取つて、おのちの前へ置き、人形など持つて思ひ入れ。

柴垣　七つになる子に、とのを持たせ済ました。

柴も　しやん〳〵〳〵。

〽濱松の音はざゞんざ。

ト皆々思ひ入れあつて、

柴垣　ほんになア、座は替らねど我が夫を、夫と云はれぬお谷の心根を、思ひ遣つて居るわいなう。そもじとは生さぬ仲。ほんの娘の此お後を替へさした、継母が聟どのに、悪い性根をつけたとて、恨んでばし下さるなや。

たに　幼稚ない事仰しやりませ。わたしが縁の切れたるは、父様へ不孝の云ひ譯。また政右衛門どの、いつまでも、あの子と添うて下さるが、家の爲志津馬が爲、わしや死ぬるまで去られて居るが、嬉しうござりまするわいなう。

〽嬉しいわいのと明かし合ひ、親子の貞心三國一、思ひは富士の裾山、解けて涙を汲み交す、酒も理に入りじめじめと、夜も更け渡る幼な子が。

のち　乳母、もう寝よう。

〽と乳捜す。

トおのち、おもとに取りつき思ひ入れあり。

もと　オヽ、この子わいなう。七つになるまで乳くはへる子があるものか。殿御の手前もお恥ぢなされ。

政右　イヤ、大事ない〳〵。これから新枕。ソレ、女子ども床を取れ。身共も追ツ付け寝る。コレお乳母、女房どもに尿やつて寝さしてやりやれ。

もと　ハイ／＼、左樣なら、サア花嫁樣。

〽いたはり心付き／＼に、乳母のおもとが抱きかゝへ、寢所へ伴ひ入りければ

トおもと會釋して、おのちを抱き、奥へ入る。

〽政右衛門は宇佐美が前へ手を突いて。

政右　改めて五右衛門どの、お頼み申し上げたき樣子あり。お聞届け下されうや。

五右　これは又改まつた。斯く奥底なき上は、サヽ、役には立たずと宇佐美五右衛門、お力になりたい。何なりとも遠慮なう承はらう。どうか／＼。

政右　先づ以て御深切忝ない。申し兼ねたる事ながら、其許樣には明日より、暫らくのうち武士道を捨て、汚名を請けて下されい。

五右　何と仰せらるゝ。

政右　サヽ、その仔細といふは、明朝六ツ時、櫻井林左衛門と立合ひ仰せ付けられし、この勝負に、見事拙者が負けまする。

五右　ヤヽ、なぜでござる。

政右　サヽ、知れてある林左衛門が手の内、打つて／＼打ち伏せるは覺えあり。勝つては御前の御意に叶ひ、これより一家中の師範にてもおほせつけられ、お暇が出ぬ時は、助太刀の望みも叶はず、存念も水の泡。さるに依つて御前の仕合ひ。政右衛門は物の見事に負けて、それを越度に知行を差上げ浪人して、思ふ儘に小身の助太刀いたす所存。先には拙者が劍術も、推擧なされた其許樣、負けたる拙者が恥よりも、見損なうた御恥辱武士道立たず、目利違ひの汚名取らせまするが、人外の致し方。これまで厚う御贔屓下され、樣々の御恩に與かりし、恩を仇と申さうか。右の心底申し出すは、五臟の血を吐くより苦しけれども、舅の敵が討ちたさ、志津馬に本望遂げさせたいばつかりに、斯樣の不屆きを申し上げる。木石とも、畜生とも思し召され、偏へに御免お聞届け下されい。

〽鬼を欺く政右衛門、わつと泣きたる眞實に、感じ入つて。

五右　ムウ。重々尤も／＼。お望みの通り宇佐美五右衛門、一分進上申す。何よりも易い事。さりながら、只殘念なは林左衛門めに、恥面掻かせんと思ひしに、却つて面目を失なひ、暫しがうちも殿を始め、一家中への申し譯は、

政右　如何なさるゝな。
五右　そりや拙者が胸にござる。老は先立つこの五右衛門、面目を失うて、相果つるは口惜しけれど、貴殿が本望遂ぐる時、敵の上で身が恥も、その時雪ぐ暫時の無念。これも繰言、誠ある侍ひの爲に、一分捨てゝ役に立つは、身に取つて大慶々々。
〽口で云はねど切腹と、死ぬるを常の武士氣質。
政右　アレ聞いたか、武士の一分を捨てゝ我れ〳〵に下さる、有り難いと御禮申せ女房ども、とは云はれぬ表。
柴垣　親子とも、云はぬが孝行。
五右　勝つべき勝を負けるも義心。
たに　恥辱をとつて下さるも。
政右　侍ひ同志の
たに　お情ぢやなア。
〽互ひに禮儀のなか〳〵に、涙催ほす八つの鐘、時計の七ッ忙しなく。
ト皆々愁ひのこなし。奥にて七ッの時計鳴る事。
五右　アヽ、早勝負の刻限近し。身は先へ登城いたす。用意あれ政右衛門。貴殿のお暇出づるを合圖に、身共が存念。イヤ、御邊は直さま鎌倉へ出立。老の思ひ出、冥土の出立。はや參らう。
政右　すりや、いよ〳〵武道を。
柴垣　立てるも義ゆゑに。
たに　あなたのお命。
五右　捨つるは切腹。
政右　ヤ。
五右　御前で逢ひ申さう。
ト互ひに會釋して五右衛門、花道へ入る。いづれも見送り。
〽勇んで御前へ。
ト殘りし三人、愁ひのこなし、三重にてよろしく
ト引きつける。あと鳴り物調べにてツナギ。　幕

六幕目　譽田館の場

役名　譽田大内記。宇佐美五右衛門。櫻井林左衛門。奥方、久方御前。政右衛門妻、お谷。行家妻、柴垣。同娘、おのち。唐木政右衛門。

本舞臺、三間の間、常足二重。見付け金襖、欅欄間。前側半簾、よき所に鈴を吊りかけてあり。すべて上段の體。爰に大内記の奥方久方御前、裲襠衣裳にて褥を敷き、側に老けたる近習一人。下手に腰元立田、時雨、控へて居る。久方御前、文を見て居る。琴唄にて幕明く。

近習　仰せ付けられました女子ども、只今立歸りましてござりまする。

久方　自分が附人根野銀兵衛より、隣家政右衛門俄かの婚禮心得ず、幸ひ給仕の女子を頼みの樣子、新參ゆゑ身元を糺すによい折からと申すにつけて、二人の者を遣はしたが、今宵の樣子は。

立田　ハッ、銀兵衛どの申されました通り、隣家の女子の心算で參りましたところ、

時雨　政右衛門どのには、先妻を離縁いたしまして、俄に今宵祝言の嫁御といふは、七つばかりの幼ない者でござりまする。

久方　ハテ、不行跡の上色香に迷ひ、故なう先妻を追出して祝言かと思ひの外、まだ頑是ない子供を迎へるとは。

時雨　先の内證お谷と申すも、參り合はして居りましたが。

立田　結納杯も濟みましたゆゑ、私しどもは

兩人　開きましてござりまする。

久方　一體政右衛門事は、武術鍛錬の者ゆゑ、宇佐美五右衛門推擧に依つて、師範にお抱へ遊ばされしも家老どもの心は、亂舞に奢り遊ばす殿大内記さま、何卒武道へ誘引させまして、行く〱格別にお取立、殿の御師範諸家中もお預けあらんとの評議ゆゑ、身元の樣子も糺さねば。とは云へ銀兵衛よりのこの文體、未だ身元の善惡は。

兩人　左樣ならば今一度。

ト兩人の腰元立ちかゝるを。

久方　アヽコレ、沙汰ばししやるな。密かに〱。

ト唄にてよろしく、この道具廻る。

本舞臺、三間の間書院がゝり、高足の二重。見付け大紋の襖。上手、振りよき形の立ち木。人登る事あり、この下に手桶に水を湛り、二重の上に譽田大内記、殿の拵らへ、袴羽織にて褥の上に坐し、小姓三人刀を持ち控へゐる。平舞臺に政右衛門、木太刀、林左衛門、稽古槍を持ち、兩人試合の見得。よき所

に五右衛門、これを見て居る。上下に侍ひ高股立ちにてこれを固めの見得。鳴り物白囃子・掛け声にてよろしく道具納まる。

ト右鳴り物にて両人、試合の立廻り程よく、床の浄瑠璃になる。

〽兼ねて期したる政右衛門、櫻井が槍先を、あしらひかねて手の狂ひ、竹刀からりと巻き落され、槍に脾腹をうんとばかり、がばと倒れて俯向しに、面目なうこそ見えにけれ、槍掻込んで林左衛門。

ト立廻りよろしく、林左衛門政右衛門が竹刀を打ち落し、其まゝ脾腹を突く。これにて政右衛門悶絶する。林左衛門立ちかゝりキッとなり。

林左　なんと、いづれも御覧じたか。人前で高言は誰れでも申す。斯様に晴れの勝負になつては、生兵法が役に立つものではない。昨日もわざ／＼お断わり申したは爰の事。まだ／＼拙者が容赦いたしたればこそ斯様なもの。もそつと棒を入れると、政右衛門が身体は、ばら／＼と粉になつて飛んでしまふ。此やうな拔作をお取持ちなされた五右衛門どの、第一身分に関はるが、なんと今御覧じて、御合点がまゐつたか。イヤハヤ天晴れのお目利目利、

〽嘲弄譏りも覚悟の前、御前に向ひ謹んで。

五右　不鍛錬の政右衛門を推挙いたせし不調法、畏れ入つたる申し訳。

〽云ひも敢へず肩衣撥ね退け、差添に手をかくれば。

ト五右衛門、切腹なさんと刀へ手をかける。大内記思ひ入れ。

大内　ヤレ待て五右衛門、アレ止めよ。

小姓　御意でござる。お止まりなされ。

〽近習の輩々はつとばかりに、轄し控へて平伏せば。

大内　櫻井林左衛門、唐木政右衛門、両人ともこれへ参れ。

林左　ハ、ア。

〽はつと一度に答へさへ、肩で風切る櫻井と、唐木は枯れし萎れ様、見窄らしげに蹲る。

ト此うち五右衛門、政右衛門を引起し心付け、両人こなしあつて前へ直る。大内記思ひ入れあつて

大内　如何に政右衛門、只今の勝負、大内記これにて逐一見届けたり。其方が致し方、神妙に思ふぞよ。

政右　ハッ。

〽はつとばかり夢見し心地、一座の不審。

大内　イヤサ、五右衛門を始め、其方どもは今の立合ひを何と見た。尤も勝負には政右衛門負けなれども、始めより熟々見るに、身構へ太刀捌き、よく鍛へし誠の達人。林左衛門がたか〲及ぶ所に非ず、彼れが心を察するに新參の身を以て、古參の者に恥辱を與へるは武士の本意に非ずと、わざと勝を讓りしは、劍術ばかりか心まで奥床し頼もしゝ。併しながら、これまで遊藝を樂しみ、武藝に疎き大名と云はれし大内記、劍術の批判覺束なしとも云ふべきが、弓馬の家に生れし身が、武藝を知らぬ樣あらんや。然れども弓を袋にし太刀を鞘に納むるは泰平の掟。いま足利一統に治まつたる御代、靜謐の世に弦を引き鏑矢を研ぎ、鎧よ弓よと犇めくは、上への畏れ家廢る徵の基。爰を慮つて、茶の湯亂舞に日を暮らせども、心に捨てざる劍術武道、よく存じて居る。余が眼相違はあらじ。政右衛門を取持ちし五右衛門、家の爲に天晴れ忠義、誤りと思ふべからず。また林左衛門は怪我の勝をそれとも存ぜず、いかめしう罵りしは、我が警我が手に見えぬ不鍛錬千萬。知行くれるは國の冗費。暇を遣はす。勝手に屋敷を立退き居らう。

林左　すりや、打勝ちし拙者めを。

大内　物數申すな。おのれが恥ぢや。

〽案の外なる御上意に、林左衛門一句も上らず、鋭き殿の御賢慮に、畏れ入つたる一家中。

小姓　御前に叶はぬ林左衛門どの。

皆々　早立ち召され。

林左　エヽ、忌々しい。

〽せり立てられ、したゝかな目に大廣間、一人すご〲立ちて行く。

ト林左衛門、こなしあつて、花道へ入る。

大内　重ねて政右衛門に云ふべきは、新參ながら其方が、武藝の鍛錬感じ入り、二百石の加增申しつくる。黒書院にて改めて杯せん。今より一家中の師範となり、いよいよ忠義を勵んでくれよ。役目大儀。

〽懇ろに仰せあり、靜々御座を御太刀持の、小姓引連れ入り給ふ。

ト大内記思ひ入れあつて、小姓兩人附いて奥へ入る。この時侍ひも上下へ別れ、侍ひ立ちかゝり。

〽近習銘々さゞめき渡り。

侍一　さりとては政右衛門どの、怪しからぬ御首尾、めで

たい〳〵。
侍二　我れ〳〵もあやかる爲、お杯が頂きたい。
侍三　詰所に相待ち居ります。
四人　さて〳〵お手柄々々。
　ト云ひ捨てゝ侍ひ四人引續いて入る。
〽挨拶喜び受ける程、ぐわらりと違ふ胸算用、二人は顔を見合すばかり、只うつとりと手を組んで。
五右　政右衛門どの。
政右　五右衛門どの、これではお暇は願はれぬ。
五右　さればサ、夜前のお願ひ承知の上は、貴殿のお暇出次第切腹なして、武士道を立てる覺悟の腹が、ひねになるワ。
政右　こりやマア何と仕らう。
〽こりやまアどうと腰も拔け、一度に溜息次の間の、襖もあらはに妻お谷、肩にかゝりし柴垣が、咽喉の懐劍突詰めし、母の自害に幼な子の、おのちも後におろおろ目許、二人は驚ろき。
七右　ヤ、、こりや女房ども、柴垣さま。
五右　何ゆゑのこの生害。
柴垣　イヤナウこれは覺悟の上、唐木どのゝ頼もしい心底を聞く上は、この世に用のない體。未來へ參つてお谷が勘當のお詫び、今日の樣子を見屆けてと、この大廣間のお次まで、隱れ忍んで委細の譯。思ひの外の立身で、お暇の出ぬは是非もなし。この上ながら姉も妹も、矢張りこなたの妻と思ひ、敵討には行かれずとも、心の助太刀を蔭ながら、志津馬が力になつてたべ。皆樣、姉妹、さらば。
〽顔を見上げ見下ろして、盛りの梅と蕾の櫻、後に殘して息絶ゆる。
　ト柴垣、よろしく思ひ入れ落入る。お谷おのち取りつき
たに　モシ母樣、お心慥かに。エ、モ、絆は切れたか。
〽これなうこれと取りついて、泣く聲人や菊の間より、大内記どの奧方久方御前、立出で給ひ。
　ト奧より久方御前、以前の腰元に刀箱を持たせ出て來る。皆々これを見て座を改めこなし。
久方　改めて殿樣よりの御上意。
皆々　ハ、ア。
　ト皆々平伏する。
久方　政右衛門が今日の仕方、定めて樣子あるべしと、お



八世片岡我童の政右衛門

伺ひなされしところ、心底に望みあり、わざと我が手練を隠し、主を騙りし趣き、殊に御座の次の間へ女子を引入れ、御殿を穢せし科に依つて、お暇を遣はさるゝ。さりながら暫時も扶持し置かれし家来、浪人の糧に盡きるも不便なれば、刀一腰下さるゝ。殿様御秘蔵の信國の名作、敵討の餞別とは仰しやらねども、賣り代なして世渡りの助けにせいとの御意。お慈悲有り難う頂戴せい。

〽持たせし一振手づからに。

ト久方御前、腰元より刀箱を取つて政右衛門に遣る。

政右　打明け申さぬ心の底、しろし召されし御眼力。チェエ、有り難う頂戴仕る。これにつけても相果てし志津馬が母、今少し生き延びて、この御上意を聞くならば。ア、是非もない。

〽止めかねたる有り難涙、奥方も御落涙。

久方　父にも母にも遅れたる、その幼な子は手づから育つる三世の縁、殊更姉は只ならぬ、お腹を持たし大事の身、假の親里五右衛門の、屋敷で介抱如才なう、本望遂げて立歸り、元の主従、對面を待つて居るぞや。

〽つど／＼に、仰せも重き亡骸は。

五右　宇佐美が屋敷で野邊送りせん。

ト此うち下手へ柘榴武助出て窺ひ居て

武助　お供に控へしこの武助。

ト死骸を片寄せる。

たに　この世の名殘。

ト死骸へこなし。

政右　御殿の名殘。

〽始めの妻と後の妻、産れぬ子にも惹かるれど。返す／＼も主恩の。

〽御前を拜し立ち出づる。

ト政右衛門思ひ入れよろしく退かうとする。この時奥より

大内　ヤレ待て唐木政右衛門。退參叶はぬ、マ、控へい。

ト大小の合ひ方になり、奥より大内記、摑み股立ち、大身の槍を持ち、ツカ／＼と出て、二重眞中に立ちかかる。

五右　ヤ、、御前様。

大内　ヤア、憎くき政右衛門。おのれ心中に望みあつて、我れを騙かる不忠の侍ひ。其まゝ退參さすべきや。大内記が成敗の槍、覺悟せよ。

ト云ひながら槍の鞘を外し、政右衛門是非なく扇子な

持つてあしらひ、ぢつと留める。誂らへの合ひ方になり、體を固め、扇子にて槍先を塞ぐ。これにて大内記、隙なく、槍を繰出されぬ思ひ入れ。兩人構へを取り、よき見得。

政右　これが一身無明の固め。

ト立廻りほぐす。

大内　心得た。

ト槍を引いて手早く繰出すと、政右衛門、扇子にて槍を平身に留める、大内記しごくに引かれぬ思ひ入れ。

政右　神影の印信。

大内　天晴れ。

ト又ほぐして大内記、重く突出す。政右衛門、扇子を捨て、平手にて槍先をキッと留め、兩人氣味合ひよろしく

政右　これが眞刀三箇の大事。

ト思ひ入れあつて

神影の奧儀秘事口傳

ト槍を撥ねのけ

とくと御會得あられませう。

ト退つて思ひ入れ、大内記、槍を引きそばめ

大内　ホヽウ、流石は政右衛門、云はず語らず心の望み、それと察して傳授せし、大内記が身の喜び。恩をあかなふ師へ賜物。

ト立て文を抛る。五右衛門取つて政右衛門に渡す。政右衛門、手早く開き見る。お谷も心ならず立寄つて見ることなし。

政右　こりや仇討の

三人　御添翰。

大内　コリヤ。

ト押へるをチョンと木の頭。皆々窺ふ。

政右　有り難うござりまする。

ト押頂く。双方よろしき仕組み。キザミにて

ひやうし幕

七　幕　目

三島宿棒鼻の場
沼津平作住家の場
千本松原の場

役名――雲助、平作。池添孫八。古着屋、嘉助。道具屋、市兵衛。下男、安兵衛。平作娘、お米。

呉服屋、重兵衛。

本舞臺、三間の間、眞中に一里塚の大榎。上の方、高札場、後ろ淺黄幕。すべて東海道三島宿棒鼻の體、爰に馬士駕籠舁き、旅人を呼びかけて居る。驛路入り、馬士唄にて幕明く。

ト東西の花道より仕出し、旅人の體にて二三人出て來り茶店へ腰かける。亭主出て

茶亭　これは皆さん、大分お早うござりまする。

旅一　どうぞ茶を一つ下され。

茶亭　ヘイ、畏まりました。

旅二　なんとこれから原泊りぢや、早からうぢやアないか。吉原までやりませう。

旅三　どうしてさうは歩けぬワ。峠を越した足だから、原泊りでよい仕事。

旅四　なんでも内の綺麗な、たぼのある所へ泊りますべえ。

兩人　大きにそれサ。

旅一　モシお茶屋の。原の宿ぢやア何處がよからうね。

茶亭　左樣でござります。あの宿では幸手屋が一番でござります。

旅一　たぼはよいのがあるかえ。

茶亭　大ありでござります。しかも江戸者のよいのが居りまする。

旅二　そいつア奇妙だ。

駕舁　モシ、駕籠をやりませうかね。

馬士　馬はどうだね。

旅一　足を見て物を云ひねえ、又下りにしようよ。

駕舁　さう云はずと乘つておくんなせえ。

馬士　立場なしに廉くやんべえ。

旅一　サア〳〵、そろ〳〵出掛けよう。

旅四　ハイ、お喧ましうござります。

茶亭　有り難うござります。又お下りにお願ひ申します。

皆々　サア、行きませう。

ト旅人の後へ附きて駕籠屋馬士、捨ぜりふにて上手へ入る。仕出し引込へ入る。

〽浮世渡りは樣々に、草の種かや人目には、荷物もしやんと供廻り、泊りを急ぐ二人連れ。

ト床の淨瑠璃、驛路をかぶせ、花道より呉服屋重兵衞、旅の形、町人にて、一本差し。菅笠を持ち、後よ

り下男安兵衛、供の形にて柳行李渋紙包みの両掛けを擔ぎ附添ひ出て來り、重兵衛、花道にて思ひ入れあつて

重兵　これはしたり、大事の事を忘れて來た。コレ安兵衛お主は大儀ながら、わしが今寄つた所まで、ちよつと一走り行つて來てくれ。エ、麁忽な事をした。

ト云ひながら矢立を出し、鼻紙へ手紙を書いて

コレ、急ぎの用だから早く行つてくれ。

安兵　ハイ〳〵、畏まりました。

重兵　ドレ、その荷は此方へ寄越しな。

ト安兵衛に手紙を渡し荷物を取り

安兵　モシ、お前さんがこれを。

重兵　よし〳〵。そろ〳〵と先へ行くから、早く行つて來て下つし。何處でも印にこの笠を置くぜ。

安兵　畏まりました。

重兵　エヽ、餘計な事をしたな。

安兵　ドレ、行つて參りませう。

〽足早にこそ急ぎ行く、稲叢蔭より。

ト安兵衛は引返して入る。重兵衛は件の荷を擔ぎ、舞臺へ來る。この以前より稲叢の蔭に雲助平作、息杖を持ち、頬冠りして屈み居てこの時前へ出て

平作　モシ旦那様、お泊りまで參りませう。

重兵　ナニ、こればかりの荷だ。

平作　どうぞ持たしてやつて下さりませ。今朝からまだ一文も錢の顔を見ませぬ。どうぞお慈悲に、お持たせなされて下さりませ。

重兵　サア、さうでもあらうが、わしは今夜は、夜に入つても吉原まで。

平作　サ、そこが慈悲でござりまする。一日儲けませねば、その日が行きかねる貧乏な雲助ぢや。モシ旦那様、どうぞ持たして下さりませ。

〽頼みかけられ是非もなく。

重兵　サア、そんなら吉原まで、いくらで行くえ。

平作　エヽ、お前さんもマア、わしが方から頼んで持たしてもらふ荷物、なんぼなと、よい程に下さりませ。

重兵　サア〳〵、そんならやつてもらひませう。

平作　アヽ、そんなら持たして下さりまするか。そりや有り難うござります。ハイ〳〵。ヤツトまかせとナ。

ト平作荷を受取り、重さうに擔ぎ

サア、お出でなされませ。

ト床の合ひ方になり、重兵衛先に立ち思ひ入れ。

重兵　エヽ、年寄りのよしにすればよい事に。

平作　イエ〳〵、空身より荷を持ちますと、歩きようござります。ヤットまかせとナ。

〽やつとまかせは聲ばかり、一足行つては立どまり。

ト東の花道へかゝり。

アヽ、今日は結構なお天氣でござりまするな。

重兵　さうさの。併し、あの雲が悪いて。

平作　左樣でござりまする。ヤットまかせとナ。

重兵　飛んだ聾話しだ。

〽二足行つては息を吐き。

平作　モシ旦那樣、向うの立場に泥鰌の名物がござりまする。上がりませぬか。

重兵　ムウ。泥鰌は隨分わしも好きだが、道中はどうも酒が悪いので困るての。

平作　左樣なら中汲はどうでござりまする。ハヽヽヽヽ。

ヤットまかせとナ。

〽杖する度の追從口、深田に下りし白鷺の、餌食みをするに異らず、見るに氣の毒。

重兵　コレ親仁どの、ちつと持つでやりませうか。

平作　イエ〳〵、なんのお前樣に。

重兵　それでもどうか足許が。

平作　なんの、こりや私しが足の癖でござります。ヤレヤレ、マア今日は、旦那樣のお庇で、内入りがようござります。

重兵　さうして親仁どのは、幾歲になんなさるえ。

平作　ハイ、七十に手が屆いて居りまする。

ト云ひながら、平作よろめく。

重兵　アヽ、それ〳〵、胡散な足取だぞえ。

平作　イエ〳〵、お案じなされまするな。ナンのこれしきの荷物。モシ、斯う見えても若い時にに小角力の一番取りました親仁でござりまする。ヤットまかせとナ。

〽云ふ下道の爪先上り、木の根に躓き、ひよろ〳〵〳〵。

トこれまでの内間の步みへかゝり、本花道へ來る。舞臺の道具は知らせなしに在體の遠見に廻る。文句の通り花道にて平作躓き轉ぶ。重兵衛立寄り

アイタヽヽヽ。

重兵　それ見た事か。それだに依つて替つてやらうと云ふのだ。

ト平作を介抱する。

平作　イエ〳〵、ちつとばかりでござります。
重兵　なんのこれがちつとばかり、親指の爪蹴欠いたワ。オヽ強い事の。
ト平作病むこなし。重兵衛鼻紙を出し。
よい〳〵。わしが直ぐに治してやりませう、マア此紙で其處を押へるがよい。
ト紙を遣り、腰より印籠を出し、藥をつけて紙にて卷いて
〽用意の藥取り出だし、つけると其まゝ、
飛んでもねえ事をしたな。サア〳〵、これで直に治る。
平作　イヤモ、有り難うござります。もう私しが致しまするでござりませう。
重兵　ハテサテ遠慮はいらぬ事。
ト介抱してやる。
平作　ハイ〳〵、これはお慮外樣でござりまする。有り難うござりまする。
重兵　なんと、もう痛みは止つたであらうがの。
ト云はれて平作心付き
平作　ハイ、とんと物を云はれぬ程の痛みが、今のお藥を付けると其まゝ、痛みはさつぱり止りました。結構なお藥でござりまするな。
重兵　なんと奇妙であらう。もうそれで何ともない。イヤ危ない事〳〵。
平作　ハイ〳〵、もう千人力でござりまする。サア〳〵お出でなされませ。
重兵　イヤ〳〵、荷はわしが持つてやりませう。
平作　なんの滅相な、勿體ない。私しが擔いで參りまする。
重兵　イヤサ、氣遣ひさつしやるな、駄賃は進ぜる。モウモウこなたの足許が危なくて〳〵。荷を持つ方がズッと氣樂な。サア〳〵、話しながら行きませう。
ト荷を擔ぐ。
平作　でも、結構なお藥をお貰ひ申したさへあるに、お荷物まであなたに。
重兵　ハテ大事ない。サア〳〵、行きませう。
平作　これはトア冥加ない。モシ、杖を上げませうか。
重兵　これで大分よくなつた。サア、行きませう。
〽平作は千鳥足、しんどが利になるこんにやくの、砂になるかと悲しさに、小腰屈めて。
モシ旦那、一肩やりませうかい。

重兵　イヤ／＼、これで大分歩きよいて。
平作　旦那はお達者でござりまするな。
　ト歩きながら
重兵　こなたの足取りを狂言師にでも見せたなら、亂れとか何とか名を附けて、傳授事になりさうな事だ。
兩人　ハヽヽヽ。
〽道の伽する笑ひ草、草踏み分けて來る道も。
ト舞臺へ來る。段々に道具廻る。
〽菊の折枝持ち添へて、見合はす顏は。
ト下手より平作娘お米、世話形の娘にて、菊の花を持ち出て來り、門口にて行き逢ひ
よね　父さんかいな。
平作　オヽ、お米、何處へ行た。
よね　アイ、今宵のお逮夜に、佛樣へ上げようと思うて、彼處まで行た次手、お母さんの墓に咲いたこの花、貰うて來たわいな。
平作　オヽ、そりやよかつた。イヤ佛樣の次手に、今日は結構な旦那樣のお供して、荷は持たずに、大抵お世話になつた事ぢやない。ようお禮申してくれ。
よね　アイ／＼。こりやマアあなた、有り難うございます

る。幸ひ彼處が私しの内。見苦しくともお茶一つ、お上がりなされませ。
重兵　アイ／＼。
　トお米を見る事あつて
親仁どのの娘御かえ。
平作　ハア、家内はあれと私しばかりでござります。穢い内ではござりまするが、大事なくばお寄りなされて、休んでお出でなされませ。
重兵　イカサマ、後から供の來る間、足を休めて行きませう。
平作　左樣なされませ。サア／＼娘、先へ行け。
よね　お靜かにお出でなされませ。
〽とつかはとして急ぎ行く。
　トこれより捨ゼリフあつて
重兵　差向ひか。
平作　左樣でござります。
重兵　〆めた。先へ行くぜ。
　ト重兵衛、荷を擔ぎ、逸散に上手へ入る。平作殘り、あたりを見て恟り。さてはと思ひ入れあつて
平作　旦那さん、お早いお御足なア。

〽伴ひ入るや西日影。

ト迯りになり、麦搗唄。鼻をかむ思ひ入れよろしく上へ行く、迯りになり道具廻る。

本舞臺、三間の間、常足の貧家。上の方、反故貼り障子。下手に竈場。釜をかけ、正面鼠壁、臺所道具の書き起し。古き野良疊。いつもの所門口、誂らへの通りに道具納まる。

ト下手より重兵衛を先に平作附いて出て來り、重兵衛は構はず花道へ行くを呼びかけ

平作　モシ〳〵、爰が内でござります。

重兵　なんだ爰か。おらア納屋かと思つた。

よね　あなた、ようマアお出でなされました。サア〳〵、お草鞋をお取りなされませ。

重兵　笠は何處にしよう。

〽門の柱に印の笠。

トいろ〳〵セリフあつて

〽親父が馳走娘が愛、前垂の藍薄くとも。

よね　マアお茶一つ。

〽と差出す。

ト麦搗唄。

重兵　アイ〳〵。

よね　折惡う湯が沸かず、水でなとお御足を。

平作　オ、さうせい〳〵。

ト重兵衛此うちお米へ見惚れるこなし。

重兵　イヤ〳〵、構はつしやるな〳〵。後の宿で草鞋を替へたばかりだから、足は汚れやしませぬ。

よね　それはようござりまする。

重兵　さて親仁どの、お前の娘御は、いゝ器量だの。不躾ながらこの内に置くのは深山の櫻。何處ぞの庭へ植ゑて見たいわい

トお米、恥かしきこなし。

平作　ハイ、どなたも左樣に仰しやつてござります。自慢で作つて置きましたれども、近頃は手入れが惡さに、いかう田地が荒れました。何が身なりにも構はず賃仕事。嬶めは去年の冬死にまして、親一人子一人、何が貧乏を苦にもせず、それは孝行にしてくれまする。それで私しが年寄つての雲助も、せめて三文なと肩休めと、餘りあれが可憐らしさでござりまする。

よね　コレ父さん、始めてのお方に其やうな事までを。

平作　ほんにさうぢやた。
三人　ハヽヽヽ。
重兵　イヤ、とんと隠しがのない親仁どの。
平作　時にお米、今日は大きな怪我をしてナ、コレ〳〵見やれ、爪が剝れてあるぞや。
ト平作、足の怪我を見せる。お米見て
よね　ほんにマア、こりや大抵な事ぢやござんせぬ。さぞかし痛いでござんせう。
平作　サア〳〵、世には希代な藥もあればあるものぢや。あなた樣に頂いた妙藥で、附けると其まゝ痛いのが忘れたやうに癒つた。
よね　すりや、あなたのお藥で。
平作　モシあなた、そのマアお印籠のお藥は、何といふ妙藥でござります。
重兵　サア、これは少と大事の藥で、先づ第一が金瘡は、その場で癒る妙藥ゆゑ、武家方で尋ねらるゝが、さる方の秘法ゆゑ、なか〳〵金銀づくでは手に入らぬ大切な妙藥なれど、差掛つたのがこなたの疵ゆゑ。イヤモ、おれが連立つて居たのが親仁どの仕合せ。
平作　イヤモ、仕合せどころぢやござりませぬ。あのやうに覿面に癒るものぢやござりませぬ。
ト　お米この話しを聞き居て思ひ入れあつて
よね　そんならあなたの、アノお印籠のお藥で。
平作　サイナウ。
ト　お米氣を替へ
よね　モシ、そりやお前、仕合せぐらゐの事ぢやござんせぬ。あなたがお出でなされたのが、父さんの爲には命の親。これが一日や二日で、お禮が云ひ盡される事ぢやないぞえ。モシあなた、有り難う存じまする。ならう事なら今宵は爰に、穢苦しうはござりますれど、どうか御逗留なされて。
平作　ア、何云ふぞい。こんな内に泊めまして、肴と云や干物一枚ありはせず、虱より腥物はない不自由な所へマア。
ト重兵衞思ひ入れあつて
重兵　イヤ、不自由はしつけて居るゆゑ、そんな事は構はぬが、娘御の愛想のよさに、禮を云はれる心はないが、今日は箱根を越したので、足も痛むやうな。大事なくば、いつそ泊めてもらはうかい。
平作　イエ、お御足の痛みまするに、我慢してお歩きなさ

るは惡うございます。此やうな所にお泊りなさるも、亦話の種でございませうか。

重兵　そんなら泊めて下さるか。

よね　お枕を上げませうか。

重兵　そりや有り難い。

〽目鞘の拔けし商人も、上手な娘のもてなしに、ころりとなればお枕と、油氣のない親身の馳走、これも一樹の笠宿り。

ト此うち重兵衞、手枕して寢轉ぶ、お米、枕を出してあてがふ。平作思ひ入れ。てんつゝになる。花道より以前の下男安兵衞、足早に出て來り、門口の笠を見て

安兵　オヽ、あるワ〳〵、なんでもあの笠が印に違ひない。

ト門口へ來て

オヽ旦那、爰にお出でござりましたか。遠目にちらとこの笠が見えましたから、慥かにそれと急いで參りました。サア參りませう。お立ちなされませ。

ト重兵衞起き上がり

重兵　オヽ安兵衞か、御苦勞々々。とんだ早かつた。コレ、おれに構はず、お主はその荷物を持つて、吉原の鍵屋へ行つて宿を取らつし。

安兵　ハイ、さうしてあなたは。

重兵　おれはちつと足が痛むから、無理に爰へ泊めてもらつた。

安兵　モシ、こんな穢い内へ。

重兵　コレサ〳〵、何を云ふのだ。

ト安兵衞心付き、氣の毒な思ひ入れ。

安兵　モシ、御足が痛いのなら、駕籠でも召しまして。

重兵　ハテ、役にも立たねえ事を指圖する男だ。駕籠に乘るをお主に教はるものか。

安兵　でも、今夜の天氣は知れませぬぜ。ちつとも早く先へお出でなされて。

重兵　それをお主に云はれるものか。よくこの男は要らざる事を。

安兵　ハイ〳〵、左樣ならお先へ參りませうか、私しは其方がよからうと存じまして。

重兵　エヽ、まだ何か云つてゐるのか。早く行かつしと云ふに。

安兵　ハイ〳〵、そんなら明朝鍵屋でお待ち申しまする。なんだかさつぱり解らねえ。

よね　マア、お茶でも上がつてお出でなされませ。
安兵　イヤモウ、直ぐに參りませう。
平作　そりや御苦勞でござりまする。
　ト矢張りくんつゝになり、安兵衛、荷を擔ぎ
安兵　なんぼ所が東海道でも、島田を金谷で金轡、今夜泊つて朝興津で、とんでこ舞坂やらかしても、彼方は吉田で四日市、此方は先へ白須賀佛、心も闇の泣く子と地藏。ア、、困つたものぢやなア。
〽雨具の用意は吉原の、鍵屋を指して急ぎ行く。
　トいろ〳〵捨ゼリフにて花道へ入る。平作、思ひ入れあつて、
平作　エ、、御家來樣も泊めませうものを、何を云ふにも家が廣いので。ハ、、、、。
　ト云ふうち重兵衛、錢を三百文出して
重兵　サア親仁どの、これは今日のお骨折よ。
　ト平作へ遣る。
平作　滅相な。宿賃は要りませぬ。
重兵　ハテサ、宿賃よりは今日の駄賃を。
平作　でも、荷も持たいで此やうに。マア〳〵、左樣なら何ぢや彼や、二三十頂きませうか。
　ト錢を緡より拔き取る。重兵衛、留めて
重兵　そんな事を云はずとも、マア〳〵、取つて置きなさいな。
平作　それぢやとて、お藥をお貰ひ申したり、又その上に。
重兵　ハテマア寸志だ。取つて置かつしやい。
平作　ハイ〳〵。左樣なら、頂きますでござりませう。
よね　モシ父さん、あなたに何ぞ拵らへて、御膳をおあげ申さうかいなア。
平作　オ、さうせい。併し、此方が喰ふ麥飯はあげられまい。米の飯を炊いて、菜のおひたし物でナ。
重兵　コレ〳〵、そんな世話をさつしやるな。その麥飯が珍しくてよからう。
平作　アノ麥飯を上がりますか。そんなら芋汁でも暖めて、コレお米、お椀を綺麗にして膳立せいや。
　ト云ひながら、平作、鍋の下へ松葉を燻べて焚きつける。
よね　アイ〳〵、でもあんまりお粗末ぢやに依つて、何ぞおかずを。

平作　ハテ、そりやほんの無いもの食ふぢや。マヽ、そんな事云はずと膳立せい。もう汁は温まつたか。御膳を上げませう。

よね　アイ〱。

トよろしく日光膳へ茶碗汁椀など並べ

誠にお恥かしい品なれども、たんとお上がりなされて下さりませ。

重兵　アイ〱。

ト膳を引寄せ箸を取り、思ひ入れあつて

ハヽア、汁は玉味噌だの。

ト顔を横にする。

よね　ちと、あなた方には。

重兵　イヤ、玉味噌大好きサ。

平作　それでは旦那樣も、麥飯を上がるとようござります。全體折々は、麥飯を上がりなさりますが、お藥でござりまする。アハヽヽヽ。お米、精出して替へてお上げ申せ。

重兵　すんでの事、麥飯と心中しようとした。

ト重兵衞、飯を喰ふ事。お米平作、いろ〱捨ゼリフにて給仕をする。よき程にてんつゝになり、花道より

嘉助　古手屋嘉助、足早に出て來り

平作どのは内にかな。古着屋の嘉助が來ました。

ト内へ入る。

平作　ほんに古手屋の嘉助さま、ようござりました。

嘉助　イヤ、餘りようも來ません。コレ平作どの、お娘が着て居たあの着物、一ト〆寄越して、後は明日の明後日のと。

よね　ア、モシ〱、お客もお出でござりますれば、どうぞ靜かに仰しやつて。

嘉助　イヽヤ、靜かに云ひますまい。さうべん〱と釣られては、此方の顎が干上がりますわいの。

ト喚く。此うち平作お米、重兵衞へ氣の毒のこなし。

平作　サア〱御尤もでござります。あなたには段々の義理もござりますれば、例へ家財を賣つてなりと、御損は掛けませぬ程に。

嘉助　サア〱、そんなら今賣つて寄越さつしやれ。

平作　そこをどうぞ今少々。

トいろ〱詫びる。重兵衞此うち氣の毒なる思ひ入れ。飯をまづさうに喰つて居る。てんつゝになり、花道より、道具屋市兵衞出て來り

市兵　平作どのはお内か。

平作　ホヽオ、これは市兵衛さん、御苦勞に、ようこそようこそ。

市兵　それは此方も商賣づく。昨日こなたの云はつしやるには、急な事で錢三貫、道具諸式を踏みまして、取つてくれいと云はれたが、マア代物を見てからと、手附けにその時三百進ぜて、殘りの錢を妥へ持つて來たのだ。駄賃を出しては合はぬ仕事。價が出來たらこなさん、擔ぎ込んで下さるか。

平作　そりやツイ、私しが運びまするのでござりませう。

嘉助　コレ／＼、そんなら家財を賣つてと云ふ、その諸道具は市兵衛さんに。

市兵　オヽ、こりや古着屋の嘉助さん、御免なさい。時に道具といふは、斯う見渡した通りの、こりやア聞いたとは強い違ひ。マア第一に放し惜いと云はしやつたゆゑ、見込みに思つた佛壇は、こりやア三百ばかりがものしかない。

嘉助　コレ／＼、まだしもと思ふ諸道具を、市兵衛さんに渡して、おれが方はどうして片を附ける心だ。

平作　ハイ、あなたへも内入りを上げたし、何や彼やでござりまする。

三人　始まり／＼。

市兵　マア／＼、それでちよつと一つ置いて見よう。

　ト懐中より十露盤を出して

土竈に鍋釜かけて先づ二百五十文と入れて、古疊六疊で三百よ。鼠入らずの膳棚が百五十文、流しは腐つて役に立たず、破れ障子二枚で二十八文、緣の取れた角行燈が八文。先づあらましこんなものかいの。内ぐるみ壞して取つた所が一貫足らず、と云つて手附けの三百は、飛んでしまつてもうあるまい。

平作　左樣でござります。

市兵　とんだ口へ引ッかゝつた。仕方がない、三百の踏みだ。疊でも持つて行かう。コレ若いお人、少し退いて下さい。

　ト重兵衛の居る疊を上げにかゝる。重兵衛、膽を潰し膳を持つて立ちかゝる。お米見かねて留める。

よね　モシ、マア待つて下さりませ。父さん、お前のお錢を此お方へちやつと上げてしまはんせいなア。

　ト平作心付き。

平作　モシ市兵衛さん、錢が出來ずば是非がござりませ

ぬ。三百の手附けお返し申します程に、歸らしやつて下さりませ。

ト最前の錢を出す。

嘉助　ドッコイこの錢はおれが內入りサ。後の四百六十文はどうしてくれる。

ト件の錢を嘉助取つて懷へ入れる。市兵衛思ひ入れあつて

市兵　手早い人だぞ。コレ平作どの、今の錢はあの通りだ。サア、おれが方の三百はどうしてくれる。

ト平作思ひ入れあつて

嘉助　後の出來るまで賣つて、褞袍を引剝がうか。

平作　サ、お二人とも、さう御しやるは御尤も。お道理でござりまするが、どうぞ今夜の所をば、

市兵　イヤ、ならぬワ〳〵。此方は疊で算用するワ。

嘉助　サア〳〵お娘、脱いでもらひませう〳〵。

〽着物脱がせる、疊をばた〳〵。

ト嘉助、疊を上げにかゝる。重兵衛、錢を持つて此方へ來る。市兵衛、お米の着物を脱がせる。ト平作、これを押へて

平作　マア〳〵待つて下さりませ。お慈悲でござりまする。お情でござりまする。

よね　どうぞ今宵は聞き分けて。

平作　明日の朝まで。

市嘉　ならぬ〳〵。

トこの時家主五兵衛來り

五兵　コレ平作どの、この間から度々呼びに寄越しても、ついぞ一度來もせいで、コレ聞かつしやれ、何ケ月家賃が滯つて居ると思はつしやる。もう勘辨がならぬ。とつとゝ明けて立たつしやれ。

平作　コレ大家樣、御覽の通りのこの仕末、どうぞ偏へに。

五兵　イヤ、ならぬ〳〵。とつとゝ明けねば、この大家の役目が立たぬワ。

〽親子が詫びる氣の毒より、ひよんな所へ掛り合ひ。

ト重兵衛見かねて中へ入り

重兵　コレ〳〵三人の衆、わしは今夜爰へ泊つた者ぢやが、惡い所へ來合はせて、マア煤拂ひに茶屋へ行つたと同じ事。どうせ埃はかゝりうちだ。手附けも何も返しませう。疊は其まゝ、古着屋どのも、サア、これを取らつしやい。

ト二朱銀を出して渡す。

平よ　ア、モシ、それでは。

重兵　ハテ、よいわいの。

ト嘉助、金を受取り家主に渡す。

五兵　これではお釣が參ります。

重兵　ナニ釣には及ばぬ。取つて置くがいゝや。

嘉助　なモシ、大家さん、折角だから、お貰ひ申して置きなさいな。

市兵　御用が濟んだら、歸りに何處ぞで一口やりませうか。

嘉助　よく飲みたがる人だなア。

五兵　サア／＼皆さん、お暇と致しませう。

嘉助　これはお客樣。

三人　有り難うござります。

ト三人出かけるを、重兵衛こなしあつて

重兵　アヽ、申し／＼、此やうに道具を出し散らされては後が困る。元の通り片附けて行つてもらひたいものだ。

五兵　成る程これはあやまりました。そんなら二人の衆、今のお釣を駄賃にして。

嘉助　サア／＼、掃除の始まり／＼。

トしころの合ひ方になり掃除する事あつて

三人　これでよろしうござりますか。

重兵　大きに御苦勞々々。

市兵　コレ、平作どの、貧乏神の居ないやう掃除をしましたぞ。

五兵　爰の內の疊のやうに。

嘉助　藁の出ぬうち。

三人　お暇いたしませう。

ト捨ゼリフあつて、三人花道揚げ幕へ入る。

〽爪づき廻つて立歸る、親子一度に手を合せ。

ト平作お米、こなしあつて

よね　ほんにマア、ひよんなマアひよんな所へお泊りなされて、恥かしい事お聞かせ申し。

平作　有り難いやら面目ないやら、嬉しいと術ない淚がこつちやになつて、お禮の申しやうもござりませぬ。

よね　有り難う存じまする。

〽お禮の詞も出ませぬと、破れ疊に食ひつけば。

重兵　これはどうだ、埒もない。今のはあれは今夜の宿賃。なんのそれを其やうに、高の知れた世帶の物まで、賣り代なさうとは、よく／＼何ぞ差詰つた難儀な事があ

るのでごんせう。

よね　サア、これにはどうも申されませぬ譯ある事で、それゆゑに。

平作　イヤモウ、一生あなたの御恩は忘れは致しませぬ。有り難う存じまする。

重兵　親仁どの、ちつと話しがあるが、なんと聞いては下さるまいか。

平作　そりやモウ、あなたの仰しやる事、何なりと承りまするでござりませう。

重兵　外でもないこの娘御の事サ。

ト お米へ思ひ入れ。

平作　へヱ、、お米めが、どうぞ致しましたかな。

重兵　サア、なんと物は相談、わしが所へ下さらぬか。

よね　ヱ。

ト 不思議なる思ひ入れ。佛壇の花立を持ち、流しの方へ來る。

平作　そりや奉公にでも上げますのでござりますかナ。

重兵　イヤ／＼、まだわしは獨身者、丁度幸ひ悧口な娘御、商人の女房には極上々の羽二重地、得心して下さる氣なら、仕拵らへは此方から。爰に少々持ち合せ。これを置いて行きまする。何も緣づく。なんと女房には下されぬかの。

ト 此うち お米、持つて來た菊の花を花立へ挿して居る。

よね　モシ父さん、あの方早う去なして下さんせいな。貧しう暮らせばとて、アタなめ過ぎた。阿房らしい人さんぢやわいなア。

〽打つて變りし腹立ち顏。

平作　サア／＼よいわい。何を其やうに腹立てる事があつて。ハ、、、、、イヤモシ旦那様、見る影もない雲助の娘に、其やうに仰しやつて下さりまするは、有り難うござりまするが、何がさてこの米も、人様の女房にと、いうてはどうも上げられませぬ。ちと譯がござりまして。

重兵　そりやどういふ譯で。

平作　ハイ、定まつた男がござりまする。しかも歴々、様子あつて今は御流浪。そのお人から預かつて居りますれば、主のあるあれが體。それゆゑにどうも女房というては上げられませぬ。譯と申すはハイ、この通りでござりまする。

重兵　ハ、ア、そんな事とはつい知らずに。コレ／＼、今

のはほんの座興。ア、氣の毒な。眞平々々。コレ娘御、
腹が立つたら、料簡して下さい〳〵。

平作　なんのお前様、娘がなんで腹を立てまするもので、アハヽヽ。イヤ何事もわしが證人。マア、そんな事仰しやらずとお横におなりなされませ。お蒲團を敷いて上げませい。コリヤヤイ、何を俯向いて居る。今あなたの仰しやつた事は御座興に、われを嬲らしやつたのぢやわい。

よね　そんなら今のは。……ほんに在所者をお嬲りなさるをさうとは知らず、誠の事ぢやと、ホヽヽヽ、モシあなた、御免なされて下さりませ。

平作　ハヽヽヽ。

よね　ホヽヽヽ。

重兵　ヘヽヽヽ。

〽笑ひに心打解ける。

重兵　安兵衛にあゝは云つてやつたが、今夜爰へ泊つては、明日の都合が。イヤモシ、わしは直ぐに立ちませう。

平作　ア、モシ〳〵、お前様も泊らうと仰しやつて、さうしてマア日暮れて餘程になります。夜道は危なうござります。よしになされませ〳〵。

重兵　なにサ、外と違うて東海道は、いつ歩いたとて、

平作　ハテサテ、なんぼ東海道でも、夜に入つては物騒でござります。是非今夜はお泊りなされて。

重兵　サア、さうだが、そんな事を云ひ出して、今では泊るとこなさん方が。

平作　イエ〳〵、その爲に親のわしが附いて居ります。あなたに麁相のないやう、サ、蒲團敷いてあげます。

よね　あなたのお裾へ、お前のどんざを

ト上の方へ紙の當りし蒲團を敷き、上にどんざを置いて

平作　話しに紛れてすつぽりと、日の暮れてあるに氣が付かなんだ。お月夜で行燈は要らず、御燈を倒にして辻堂の雨宿り。お客様ももうお休み。足延ばすと壁に支へる奥座敷、ゆるりと縮かまつて御寢なりませ。わしはこの臺所。コリヤ娘、其方へ寢いよ。旦那様はお堅いけれど、時のはずみでは主のある池へ踏込みなされうも知れぬ。用心には網を張れぢや。今夜はおれが股引を穿いて寢や。穢けれど、あなたには。

〽わしがどんざを裾になと、追風持て來る鐘の聲、いと

しん／＼と聞え來る。
トこの間重兵衛、平作、お米、よろしく寢る事あつて
〽お米は一人物思ひ、心にかゝる夫の病氣、我が手で介抱する事も、浮世の義理に隔てられ、秋の螢の消え殘る、佛壇の灯も細々と、嵐にふつと氣の付く娘。
よね　奇妙に癒つた父さんのあの痕。今でも敵の手懸りが知れてから、あの病氣では思ひも依らず。ムム。
トいろ／＼思ひ入れある。これにて差し金の蟲飛び來て佛壇の灯を消す。
〽灯の消えたるは天の與へ。
ムウ。
〽夫の爲と拔足差足探り寄り、印籠取上げ立退く足、躓く音に目覺ます重兵衛、思はず高聲何者と、裾を捉へて引留めれば、わつと泣入る娘の聲、平作も恟りし、起上がつても眞暗がり。
トお米、蒲團へ窺ひ寄り、印籠を盜む拍子に、屏風をこかす。重兵衛起き上がつて捕へ「泥坊ぢや／＼」と喚く。平作、恟りして起きて
平作　お米／＼。
〽云ひつゝ捜す、籠の埋み火。

ト平作行燈へ灯を點す事あつて
〽附木に移し顏見合せ。
トお米の顏を見て
重兵　ヤ、お主は。
よね　父さん。
ト重兵衛もお米の顏を見て恟り。
平作　旦那樣。
重兵　親仁どん。
平作　モシ旦那樣、何も紛失物はござりませぬか。
重兵　何も紛失はないが、印籠が見えませぬ。
平作　ナニ印籠がござりませぬ。サア、持つてゐるなら爰へ出せ／＼。
トお米の持つて居る印籠を取つて
ト重兵衛に印籠を出す。重兵衛取つて見て
あなたの仰しやるは、これでござりますか。
重兵　オヽ、これぢや／＼。
平作　アイ、それでござりますか。
ト思ひ入れあつて平作、お米を引据ゑ
マア、おのれはなア。
ト合ひ方。

何ゆゑにこの有樣。エヽ、何の因果で此やうな、情ない氣になり居つたぞやい。コリヤヤイ、この親はナ、その日暮しの者ぢやけれど、人樣の物もじきなか、盗まうといふ氣は出さぬわやい。エヽ、親の顏まで汚し居つたなア。

〽わつとばかりに泣き居たる、重兵衞は氣の毒顏。

重兵　金銀を取つたといふ譯ではなし、これには何ぞ譯があらう。その樣子はマア、どうでござる。

〽問はれてお米は顏を上げ。

よね　恥かしながら、お聞きなされて下さりませ。私しも元は流れの身、樣子あつて云ひ交せし、夫の名は申されませぬが、わたくしゆゑに騷動起り、その場へ立合ひ手疵を負ひ。

〽一旦本復あつたれど、この頃は頻りに痛み、いろ〳〵介抱盡せども驗なく、立寄る方も旅の空。

この近所で御養生、長しい間に路銀も盡き、その貢ぎに身の廻り、

〽櫛笄まで賣り拂ひ、悲しい銀の才覺も、男の病が癒したさ。

先程のお話しに、金銀づくではないとの噂。燈火の消えしより。

〽あの妙藥をどうがなと、思ひつきしが身の因果、どうぞお慈悲にコレ申し。

今宵の事はこの場ぎり。

〽お年寄られしお前まで、苦勞をかけし不孝の罪。

今日や死なうか。

〽明日の夜は、我が身の瀨川に身を投げてと、思ひし事も幾度か。

死んだ後でもお前の嘆きと、一日暮しに日を送る、果敢ないわたしが心の內、不便なりと思し召し、どうぞお慈悲に御料簡を。

〽東育ちの張も拔け、戀の意氣地に身を碎く、心ぞ思ひやられけり。嘆きの端々つく〴〵と、聞き取る重兵衞。

重兵　コレ姐御、こなさんは江戶の吉原で、松葉屋の瀨川とは云はなんだか。

よね　ハイ。でも、よう御存じでござりますな。

重兵　アノ瀨川どの。こなたの夫の爲に……夫の手疵を癒す藥欲しいは尤も。進ぜたいものなれども、これは人の預かり物。この藥の事は思ひ切らしやれ。時に親仁どん、この娘御より外に、もう子供はないかの。

平作　ハイ、この米が上に男の子が一人あつたけれど、二歳の年に養子にやりましたが、又その親の手を離れ、今は鎌倉の御屋敷へお出入り、よい商人になつて居るとの噂。それを聞いて、とんと思ひ切りました。

重兵　そりや又なぜに。

平作　ハテ、一旦人に遣つたれば捨てたも同然、我が子ながらも義理あるもの。今その伜が身上がよいとて、尋ねて行て箸片し貰うては、人間の道が濟みませぬ。いま出逢うても赤の他人、子といふは、この娘ばかりでござりまする。

重兵　ムウ。それも尤も。して、その兄貴は今何歳位ぢやの。

平作　ハイ、エヽ、カウツ。丁度今年廿八、鎌倉八幡宮の氏地に産れ、母の名はとよと書つけ、守り袋に入れてやりましたが、そののちこのお米を産んで母も相果て、即ち今日が命日で、孝行な娘が水手向。花の立て方、御覽じやつて下さりませ。

〽何心なき話の合ひ紋、一々胸にこたゆる重兵衛、思ひ合せば覺えある、さては産みの親仁樣、血を分けた我が妹が貧苦の有樣、有り合せた路用の金、なま中親子と名乘つては、受けぬ氣質を何とがな、金の遣りたい屈托に、胸を痛めて。

ト此うち重兵衛思ひ入れあつて

重兵　そんなら母者は、疾に死なれたのかえ。

平作　ハイ、左樣でござります。

重兵　便り少ない事ぢやなう。

平作　御推量なされて下さりませ。

重兵　オヽ、もう寢られもしまい。そろ〳〵と出掛けませう。それについて、見かけてこなさんに頼みがある。今こなた衆の話しの通り、わしも又恩を受けた、イヤサ、その恩を受けた人の爲に、石塔一つ寄進がしたい。なんと世話して下さるまいか。

平作　ハイ〳〵、心易い事でござります。いつなりとも世話いたしませう。わしも來年は嬶が年忌。勸むる功德、共に成佛とやら、是非お世話いたすでござります。

重兵　どうぞ今度の下りまで、違はぬやうに頼みます。兼ねての願ひに書付けもこの中に詳しうござる。金も爰にある。コレ、必ず頼んだぞや。

平作　ハイ〳〵、畏まりましてござります。

よね　詰らぬ事をお聞かせ申し、お恥かしうござります。

重兵　笠を取つて下され。提灯と草鞋はそこらにないかの。

ト いろ〳〵平作お米に用を頼むうち、金を出し臍の緒書を出し、書附けを書く事。印籠を蒲團の下へ入れろ。セリフのうちお米、笠を持ち、平作、提灯を點けて出す事。重兵衞、支度をして提灯と笠とを受取つて

重兵　コレ親仁どん、わしが行つたその後で、あの蒲團をよう拂つて、そして又、火の用心をようさつしやれや。

平作　ハイ、畏まりましてござりまする。

重兵　もう夜明けにも間もあるまい。随分無事で親仁どん。娘御。いかい苦勞を……さらば。

〽とばかりに、心に一物、荷物は先へ、道を早めて急ぎ行く。

ト かすめし時の鐘にて、重兵衞提灯を持ち、花道へ入る。

平作　お靜かにお出でなされませえ。

〽後に親子は顔見合せ。

よね　父さん、今鳴るのは七ツでござんせう。ちつとお休みなさんせいなア。

平作　イカサマ、とろ〳〵とやらうわい。蒲團を此方へ敷き直して、わが身から寢や〳〵。

よね　アイ〳〵。

ト 蒲團を此方へやらうとする。下より印籠と打がへ出る。

平作　この印籠は今の旦那の、こりや忘れてござつたか。

ト 印籠を取上げる。

よね　爰にも打がへ。

ト お米、取上げる。

平作　ドレ。

ト 印籠を下に置き、打がへを取つて思ひ入れ。お米、印籠を見て思ひ入れあつて

よね　この印籠は、どうやら覺えの。

〽それかこれかとよく〳〵詠め。

ほんにソレ、こりや澤井股五郎が、常々持ちし覺えの印籠。

平作　金包みに。何ぢや、金子三十兩石塔料。この書附けは。ムウ。

〽はて不思議なと、平作も、よく〳〵見れば。

鎌倉八幡宮の氏地の產れ、幼な名は平三郎、母の名は豐。

ト思ひ入れあつて
こりや我が子に付けて送つた書附け。

よね　そんなら最前からの深切は。

平作　それとは云はずこの金を、貢いでくれた石塔代。

よね　そんなら今のお方は、わたしが爲には兄さんかいな。

平作　オヽ、我が子の平三であつたかいやい。

よね　父さん。

平作　娘。

〽不思議の縁と親と子は、暫し呆れて居たりしが、お米は、印籠手に持つて、裙端折つて驅け出す。

よね　さうぢや。

平作　コリヤ待て、何處へ行くぞ。

よね　何處へとは、この印籠を持つて居る、兄さんの後追ひかけて、股五郎の在所を尋ね、志津馬さまへ。

平作　サ、尤もぢや、が、そりやわれでは行かぬ。年は寄つてもおれが行く。親の高下で云はして見せう。

よね　すりや、父さんが。

平作　われも續いて後から來い。敵の在所聞くまでは大事のところ。木蔭に忍んで立聞きせい。ぢやが、どのやうな事があつても必らず出るなよ。

よね　アイ〳〵。

ト平作、印籠と打がへを持つて

平作　本海道は廻り道、三枚橋の濱づたひ、勝手覺えし拔け道を。

よね　怪我せぬやうに。

平作　合點ぢや。

〽子ゆゑに迷ふ三惡道、こけつ轉びつ走り行く、後にお米は身拵らへ、續いて出でんとする所へ。

ト平作、向うへ入る。お米帯を締め直し、行かうとする所へ、禪のツトメにて、下手より池添孫八、尻揚げ一本差にて走り出て來り、門口にて行き逢ひ

孫八　瀨川さまか。

よね　オヽ、孫八どの、よい所へござんした。今夜泊つた客人で、敵の手筋が知れさうな。詮議の爲に吉原まで、父さんが行かしやんした。

孫八　チエ、忝ない。して、その行く筋は。

よね　吉原まではよも行くまい。

孫八　何かの事は道にて聞かん。

よね　孫八どの。

孫六　瀬川さま。サヽ、ござりませ。

〽瀬川に續く池添も、足にまかせて。

ト三重になり、兩人、花道揚げ幕へ入ると、寺鐘になり、この道具ぶんまはす。

本舞臺、一面の松並木、所々に稻叢。後ろ黒幕。すべて千本松原の體。向う黒幕。時の鐘にて道具納まる。

〽慕ひ行く、實に人ごゝろ樣々に、町人なれど重兵衞は、武士も及ばぬ丈夫の魂ひ、千本松に差かゝる。

ト時の鐘、風の音、合ひ方にて重兵衞出て來り。後より

平作　オヽイ／＼。

〽おゝい／＼と聲を限り、杖を力に息すた／＼。

ト呼びながら平作、走り出て來り

申し／＼旦那樣、お早いお足でござります。

ト重兵衞見返り、立ちとまり。

重兵　ムウ、いま呼んだのはこなたか。さうしてマア消魂しい。何の用で。

平作　イヤ、外の事でもござりませぬ。今のお金を戻しに參りました。

重兵　ヤ。

平作　サ、わざと忘れてござりました大枚の金と印籠、その日暮しの雲助に、下さるも譯があらう。また受けまするにも譯があるぢや。けれどもこの金をお前から受けましては、さる人が立たぬ義理がござりまする。夫れで、こりやお返し申しに參りました。

ト件の金と印籠とを其處へ出す。

重兵　サア、此方にもちと譯があつて、忘れて置いた金と印籠。それを其方が。

平作　イエ／＼、なか／＼無には致しませぬ。印籠は頂戴いたしまするが、この金子はお返し申します。その代りにちとあなたにお賴みがござりまする。お聞きなされて下されませ。

重兵　ハテ、一夜さ泊るもなんぞの約束。樣子に依つては賴まれまいものでもないが。

〽夕闇の夜の聲しるべ、後に窺ふ池添瀬川。

ト下手よりお米、孫八出て來り、忍び入れあつて稻叢の蔭に窺ふ。重兵衞、提灯を松の枝に引ッかけて

親仁どの、して、賴みのその樣子は。

平作　ハイ、仰しやつて下さりませ。
重兵　そりや何を。
ト平作、印籠を重兵衛に見せて
平作　この印籠の持主の在所をば。
重兵　エ。
ト思ひ入れあつて
平作　承りたうござります。
ト雨車、合ひ方。
サ、これを知りたいばつかりに、様々流浪いたすお人。それゆゑ娘も廓を出ての憂き艱難、これが知れると本望成就、娘につれて私しまで、モウこの上の喜びはござりませぬ。二十か三十の端下銭で、露命を繋ぐこの親仁が死ぬるまで安楽に暮らせる程の三十両、その金銀に替へてのお頼み。七十になつて雲助が、肩に叶はぬ重荷を持つ。
ト雨車、
〽それはまだ休みもする、子の可愛といふ重荷は。寝た
〽間も休まぬ。
一生の、苦痛を助ける薬の名、お前様の親御様があらば子ゆゑには愚痴になるものぢやと。
〽思し召しやられて。
この願ひを、どうぞ叶へて下さりませ。コレ申し、旦那様。
〽血筋と義理の道分石、分けて血の緒の三界に、踏み迷ふこそ道理なれ、親の心を察しやり。
ト重兵衛、思ひ入れあつてホロリとして
重兵　ムウ、さうあらう、心底至極尤もぢやが、これはつかりはどうも云はれぬ。といふ訳は、しがないわしは商人だが、上下僅か六七人、その暮らしをば安楽に、世過ぎの出来るもお出入りの、お屋敷方の皆お蔭。その恩のあるお方から頼まれた男づく。この印籠もその筋から、わしが貰つた品なれど、そこが切ない恩と義理。其方の人が大切なら、此方も亦大切。よしんば又在所を聞いても、命がなうては本望は遂げられまい。其方の内に落してあつた主のない印籠の、その妙薬で養生、ナ。
ト思ひ入れあつて
サ、達者になつたその上では、望みの叶ふ時節もあらう。親仁どの、なんと、さうぢやないか。
〽心の掛籠、一重明けぬ重兵衛が情の詞。

平作　サヽ、それ程お慈悲のあるお方、とても事なら藥の持ち主。

重兵　イヤサ、コレ、惡い合點だ。この藥の持ち主は、其方の病人とは大敵藥。卅兩のその金も、敵の恩を受けまい爲、ソレ、戻したではごんせぬか。この持ち主の名を云へば、敵の藥で癒本腹、恩を受けては眞逆の時の、切尖が鈍らうも知れぬぞや。矢ッ張り拾つた藥にして、心措きなう養生さしたが、よさゝうなものだぞえ。

〽聞いて平作感じ入り。

ト平作思ひ入れ、お米孫八もムウと思ひ入れ。

平作　アヽ、さても／＼お前樣は、恐ろしい程發明なお人樣だやなう。さう聞きましては、モウ／＼申さうやうもござりませぬ。左樣なら私しは歸りまするでござりませう。

ト思ひ入れあつて

〽これがこの世の旦那樣、おさらばでござりまする。

〽云ひつゝ探つて重兵衞が、脇差拔取り、腹へぐつと突立つる。

ト平作、重兵衞の脇差拔き取り、手早く我が腹へ突き立て、ワッと苦しむ。重兵衞驚ろき。

重兵　ヤヽ、どうしたのぢや／＼。

ト探り見て

オヽ、こりや腹切つてか、何ゆゑに。

トお米孫八も驚ろく。

平作　コレ、おりやこなたの手にかゝり、死ぬるのぢやわい／＼。

重兵　勿體ない／＼。

ト平作を介抱する

〽誰れを恨んで勿體なやと、うろ／＼涙驚ろく娘、聲に手當てる池添が、泣き聲止むる孝鷲、草に喰つき泣くばかり。

ト文句の通り双方よろしく竹笛入りになり

平作　サア、こなたとおれは敵同志、志津馬どのに緣あるこの親仁、こなたのこの脇差を、斯う突ッ込んだれば、賴まれた先樣へ、一つの義理は立たうがの。

重兵　ムウ。

平作　コレ／＼、この上の情には、この親父が未來の土産に敵の在所を聞かして下され。外に聞く者は誰れもない。今死ぬる者に遠慮はあるまい。

〽不思議に始めて逢うた人、どうした緣やら我が子のや

うに思ふもの。
なんのこなたに退け取らす様な事、親が、サこの親仁が致しませう。これが一生の別れ、一生の頼み、聞かずに死んでは迷ひますわいの／＼。コレ、拜みます／＼旦那どの。
〽子故の闇も二道に、分けて命を塵芥、須彌大海にも優つたる、誠の親に始めて逢ひ、名乘りもならぬ浮世の義理孝行の爲納め。
ト重兵衛思ひ入れあつて
重兵　親仁樣、ではない知らぬお人。
ト思ひ入れ。
何處に誰れが聞いて居まいものでもないが、この重兵衛から云ふは、死んで行くこなさんへの餞別。臨終の耳によく聞かつしやれや。
トあたりへ思ひ入れあつて、聞けといふこなし。お米、袖を當て泣き居る。孫八も思ひ入れ。
コレ、澤井股五郎が落ち行く先は九州相良、道中筋は三州の、吉田で逢ひしと人の噂々々。
ト思ひ入れあつて
〽もう堪忍して下さりませ。

ト泣き落す。この以前、松ケ枝の提灯消える仕掛け。
平作　エヽ、辱ない／＼。あれ聞いたか。
ト思ひ入れあつて。
イヤ／＼、誰れもない／＼。外に聞く人誰れもない。
ト思ひ入れあつて
聞いたは死んで行くこの親仁一人、それで成佛しますわいの／＼。名僧知識の引導より、吾が子の口から今の一言、嬉しうござる。エヽコレ、顔見合せて名乘り合ひ、この世の暇を告げたいに。
重兵　逢ひ初めの。
〽逢ひ納め。
親父樣。
平作　兄。
ト重兵衛に取縋つて
顔が見たい／＼。顔が見たいわいやい。
重兵　南無阿彌陀佛々々々々々々。
〽唱ふる千念重兵衛が、堪え兼ねたる悲嘆の涙、始終窺ふ池添が、小石拾うて白刃の金、合す火影は親子の名殘後に見捨て、
トこの時孫八、思ひ入れあつて、小石を拾ひ刀と打ち

合せ、パッ／＼と火を打つ。この明りにて平作重兵衛顔見合せる。この時お米も走り來る。これにて重兵衛ちやつと飛退く。平作苦しむ。

よれ　モシ。

ト重兵衛を引留め、平作へこなし。孫八支へる。重兵衛、ツカ／＼と下手へ來り、振返り手を合す。これを木の頭。平作落入る。お米介抱する。重兵衛、涙を隱し此方へ振り向く。双方よろしく。

ひやうし幕

七幕目　藤川新關の場

役名——和田志津馬。星合團四郎。奴、助平。娘お袖。唐木政右衛門。

本舞臺、三間の間、上手、柵矢來、關所の大門。下手、出茶屋、床几など並べあり。下手、關所前に、遠眼鏡を臺に載せ、飾りある。すべて東海道、藤川新關の體。幕の内より、お袖、振り袖衣裳にて茶を酌んで居る。仕出し大勢、床几にかゝり居る。川越し唄にて幕明く。

仕一　これは／＼、毎度お世話さまになりまする。もうお暇申しまする。

そで　左樣なら、ようお出でなされました。

ト皆々、捨ぜりふ云ひながら

仕二　雪の降らぬうち、急いで歸りませう。

ト仕出し入る。お袖茶碗など、ふき／＼思ひ入れあり。

〽父の教へを守らざる、その罪科の降り積る、雪氣の空もいとひなく、姿をやつす和田志津馬、敵の行くへ知れざれば、空しく過ぎる光陰の、矢竹に心關所前。

トこの淨瑠璃のうち、向うより志津馬旅形にて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

志津　コレ／＼茶店の女中、最前よりこの茶店で、待ち合す體の人は見えなんだか。

そで　ハイ。

ト見惚れたるこなし。

志津　但しはこれへ見えましたか。

そで　ハイ……イ、エ、左樣なお方は、お見請け申しませぬ。

志津　然らば、暫らく爰を借用を申す。
そで　サア〳〵、お掛けなされませ。
ト志津馬床几へかける。お袖、茶、煙草盆を出し、始終捨ぜりふ、見惚れたる思ひ入れ。志津馬、遠眼鏡を見て
志津　見れば、爰に遠眼鏡がござるが、こりや、定めて往來の慰みであらうかな。
そで　イエ〳〵そりや慰みぢやござんせぬ。わたしが父さんは、このお關所の下役。もし、切手なしに拔け道を通る人もあらうかと、吟味するとやら。その爲に、あの遠眼鏡でござんす。
〽聞いて志津馬が心の當惑、差當つたる切手の用意。
志津　ムウ。
ト思ひ入れ。
〽はてどうがなと思案顔、お袖は一心志津馬が顔、ても好い男と思ひ染め、いとしい事も娘氣の、口へ出かぬる藤の花香、茶碗ばかりを手に持つて、
ト此うち、お袖、志津馬に思ひ入れあつて、茶碗を盆に載せて
そで　ハイ、お茶をお上がりなされませ。

〽差出す心の思惑、酌んで知れかし目遣ひに。
志津　これは〳〵きつい御馳走。
ト茶碗を取つて見て、茶がなきゆゑ
イヤ、とてもの事に、誠のお茶が貰ひたい。
〽思はぬお茶の捨て詞。
そで　ほんにこりや、麁相な。ドレ、ほんまのお茶をあげませう。
〽と顔は上氣の初紅葉、男の生粹一森に、戀の出花と見えにけり。志津馬はさてはと心附き、我れに心をかけしこそ幸ひ、切手の手がゝりと心でうなづき、擂り寄つて
ト志津馬お袖に寄り添ひて
志津　コレ女中、ちと頼みたい無心があるが、なんと聞いてはくれまいか。
〽思うた壺へ和らかに、云ひかけられて返答さへ、詞に詰まるが女子の情。
そで　私しも、お前にお頼みが。
ト思ひ入れ
志津　サヽ、どのやうな事なりと、頼みとあれば引きはせぬ。

そで　エヽ、有り難い。私しも、お前ゆゑならば、どのやうなお頼みでも、いとひはせぬわいなア。

〽いとはぬわいのと寄り添へば。

志津　それ聞いて、先づは安堵。頼みと云ふは、何を隠さう、我が身の上。今夜中に、この關を通らねば、我が一命にかゝる事。こなたの覺えし抜け道を、何卒教へてもらひ度い。その代りには、命にかけ死んでも忘れぬ。コレ、女中、どうぞ教へて下されいの。

〽色で仕掛ける我が身の大事、ぢつと締めれば締返し、恥かしいやら嬉しいやら、抱きついては締めかへす、袖は人目の關の門。

そで　暮れ六ツから、通路のならぬこの新關。それまでには私しが働らきで、お前をお通し申しませう。

志津　そりや、アノほんまの事かいの。

そで　なんの嘘を申しませう。シタが、モシ、間違つたら私しがお供して、立退きませう。必らず／＼氣遣ひ遊ばすなえ。

〽思ひ合うたる他生の縁、二人が望みは二道の、一筋道を急ぎの道中。

ト　お袖、志津馬、よろしく思ひ入れ。韋駄天になり、向うより助平、飛脚の拵らへにて出て來り

助平　エッサッサ／＼／＼。

ト　直ぐに舞臺へ來り、お袖に思ひ入れ。

そで　申し飛脚様、お休みなされませぬか。

〽云へば奴が立ちどまり。

ト　床几へかけ、志津馬へ思ひ入れあつて

助平　申しお侍ひ、御免下されい。

〽よんやまかしよと腰打かけ、云へば志津馬も何氣なう。

志津　見ますれば、急ぎのお飛脚には、どれからどれへお出でゝござるな。

助平　イヤ、拙者は、鎌倉扇ヶ谷の四つ辻、切通しより參る者。夜前濱松で泊りました。イヤ、日が短くて、やうやう爰まで參つたのでござる。

〽聞くより志津馬は心當り、騙して問はんと傍に寄り。

志津　それは／＼お早い事。私しどもは何として／＼。エエ、お羨やましいお達者な儀でござりますな。

助平　イヤ、これは、御挨拶でござる。

ト　お袖、茶を酌んで、助平に出す。

そで　ハイ、お茶をお上がりなされませ。

助平　どう〱、かつちけない〱。

ト お袖が顔を見る事あつて

〽一目見るより餘念なく、お袖が側にぐにやとなり。

イヤ、いつ見ても〱、あでやかな好い器量ぢやな。白歯娘の煮花の初穂、その薄茶より身共が濃茶、一目見るより惚れ茶が因果、茶かすのぢやない、コレお娘、どうぞ、そさまのお茶こを、二度とは云はぬ、たつた一もり一杯、呑ませてくれる氣は奈良茶。色よい煎じ茶は、どうぢや〱。

〽どうぢや〱としなだれつく。

ト よろしく思ひ入れ。

そで　エ、モ、てんがうなさんすな。

助平　イヤ、てんがうとはどうぢやい。お主をちよつぽり見染めたは、今やちやつとのこつ茶ないワ。上り下りの足休め、この茶店で茶を呑んだり、そさまの顔を見る茶が樂しみ。あい茶い見茶いは飛び茶つばかり。お茶がいの心が解け合うたれば、まんざら否でもあるまいし。いちやいちや云はずとわつちやりと、ムウと云うてくれ。コレ、茶のむ〱。

〽寄り添へば

ト よろしく思ひ入れ。

志津　オ、お飛脚には、お顔に似合はぬ〱。

ト 思ひ入れ。

助平　イヤ、これは不躾な。憚りながら色事するは顔ぢやない、爰ばかりぢや〱。

ト 胸を叩く。

先づ色一通りはこつちやの得手者、後家尼、人の女房から、段々の口説きやう。女を得心さするは、四つ目屋の長命丸、まだ今流行の蠑螈の黒燒なんどをば、ほつ〱と振りかけると、どんな堅い女でも、ついヅル〱と身共に靡く。今業平とは身共が事でござるてや。へ、、、へ。

そで　申し、今云はしやつたその蠑螈の黒燒とやらいふ物は、女子の方から、殿御へ振りかけても利くものでござりますかえ。

助平　オ、サ、おつな物を聞きたがるの。それを聞いて何にする。

そで　サア、その藥が、ちつと欲しいものでござんす。わたしや、ちつと入用がござんすわいなア。

助平　おつな物を欲しがるの。よいワ。さういふ事なら、

今度の下りに持つて來てやらうか、コリヤお娘、それよりはまだ妙な藥があるわえ。
そで　妙な藥とは、なんでござんすえ。
　ト助平、懷より藥袋を出し
助平　こりや、和蘭秘法の笑ひ藥というて、この藥を、一振りパッと振りかけるが最後、どんな怖い閻魔が、せんぶりを嘗めたやうな顏の人でも、つい、ゲラ／＼と、正體を失うて、笑ひ入るといふ、妙な藥よ。
そで　その妙なお藥を、何の爲に持つてござんした。
助平　こりや、斯ういふ譯ぢや。今度の道中は、急ぎのお飛脚、しかも密事のお使ひゆゑ、もし、ひよつと先の關者に聞きつけられでもする時に、この藥を振りつけて、正體を失はして置いて、その場を駈け拔けるといふ計り事の爲に、持つて來たこの笑ひ藥ぢやわいやい。
そで　それはマア、好いお藥でござりますな。
助平　イヤ、好いお藥より、好い御器量ぢや。そもじの顏へ、この藥をかけて、笑ひ顏が見たいわいなう。
　トしなだれる。
そで　アレ、そんな事せうよりは、モシ、こんな面白いもの、見る氣はござんせぬか。吉田の茶屋の女郎さん方が見えるわいなア。
〽眼鏡の側へ突きやれば、助平は差覗き。
　ト袖、思ひ入れあつて、助平を眼鏡の側へ連れ行く。
　眼鏡へ思ひ入れ
助平　イヤ、こりや、なか／＼面白い。なんだ、山があつて川がある。ハヽア、吉田の川ぢやな。なんだ、女が一人、川縁に立つて居る。身でも投げるのではないか。コリヤ危ないぞ／＼。なんだ、ムウ、後から野郎が、辨當を脊負つて、その後からおさんどんが來る。ハヽア、此奴、主從三人連れで、不動樣へ參詣と見えるわえ。ハヽア、なんだ、娘が裾をば捲つたな／＼。ハヽア川を渡るか、コリヤ、危ないぞ／＼。後から來るおさんどんの足は、太い足ぢやなア。しつかい大道臼へ、練馬大根を縛りつけたやうぢや。又あの野郎は、意氣地のない奴ぢやなア。ソレ、手拭が川へ流れるわい、それ／＼。アヽ、手拭かと思うたりや、彼奴が褌の前をおつ解いて、川水に流して居るわい。褌の半分の洗濯と來て居るな。ハヽ、ヤア、たうとうこれで三人は川を渡つたな。ヤレ、安堵した……ヤ、こちらへ見えるは、ハヽア、藤屋の二階ぢやな。家勢騒ぎ居るぞ。こんなに騒いで錢はあるかえ。

ハヽヽ　アヽ眞中に居る太つたのが客ぢやな。肴はなんだ。赤貝の味噌煮に鰕の貝煎りか。刺身はなんだ、鱸が關か。どうも鰹の色鹽梅が悪いぞ。一口喰つたら、頭へ輪の入りさうな色鹽梅だぞ。オヽヽナニ、拳を打つ。ゴウゴウ、チエヽ〳〵、カイ〳〵、ヤア、あの女は、どうも見たやうな女だが、オヽヽさうだ〳〵。コリヤ、矢ッ張りさうだ〳〵。

〽一目見るより血相變へ。

ヤイ、コリヤ、わりや、おきのぢやないか。コレ、おのれナア、おれに起證までおこして置いて、その態はなんだ。コリヤ、おのれ、なんと云うた。コレ、助平さんえ、お前とわたしと夫婦になつて、骨がなけりや一つになりたいと、云うたぢやないか。それにぢや依つて、お頭へ舐うて、正月には一分遣り、二月には二分遣り、三月には三分遣り、四月には四分遣り、五月には五分遣り、ろくなものを喰ひもせず、給金から扶持米まで遣つたぢや。それにおのれ、そんな事をして済むかいやい済むかいやい。ヤイおのれ、刺身の喰ひうけを喰ひ居つたな。コリヤ、もう料簡が……コリヤ、澤井の家來助平というては、色男の開山だワ。

〽駈け出せしが。

ト駈け出して、キヨロ〳〵する。お袖、こなし。

そでアヽ申し、ありや吉田の茶屋の二階。爰からは、一里もある所、もう好い加減になされませ。

助平　ほんにさうぢや。爰から悋氣をするは、川へ投げ金、聾に耳ッとうをするやうなもの。併しながら、口惜しいわい〳〵。

〽また差覗き現になれば、さては澤井の家來よなと、一通ひ取り素知らぬ顏。

ト志津馬思ひ入れあつて、旅狀箱を解き密書を出し、素知らぬ顏にて居る。助平、これを知らず、夢中になり。

アヽコレ〳〵、口を吸ふかい〳〵。アヽアレアレ。

ト尻を振る。

アヽヽアレ〳〵、あんな事をするワ〳〵。

トお袖を捕へ、抱きつく。お袖、振り放して、吹竹を渡す。助平、吹竹を眼鏡と心得覗き見て、一向見えぬゆゑ、キヨロ〳〵して、トヾ、眼鏡の側へ行く。

ア、〳〵〳〵、蒲團を敷いたな〳〵。コリヤ、おのれ、それで済むかいやい〳〵。

ト助平、いろ〳〵あつて、トヤ、ウンと悶絶する。この時、切手を落す。
〽古木の如くしやちばり返り、のぼり詰めたる奴凧、糸目の切れし如くなり、側に落ちたる關所の切手、見るにお袖は飛び立つ思ひ。
ト お袖、切手を志津馬に渡す。
そで 〽結びの神のこの切手。モシ。
〽志津馬に渡せば懐中し。
志津 我が身の難儀は遁がれても、斯うして置かれぬ奴どの。こりや、癲癇と見える。コレ、顔へその水、吹きかけた〳〵。
〽云ふにお袖はうろたへて沸き起つたる茶釜の湯、頭へさつぷり打ちかくれば、惘り氣の附く助平が、あたり見廻し起き上がり、さも苦しげに聲慄はし。
ト この淨瑠璃のうち、お袖、茶釜の湯を、助平の頭へかける。これにて起き上がり、よろしく思ひ入れ。
助平 どなた樣かは存じませぬが、有り難う存じまする。イヤモウ、生れついた悴めが早耳、時々起るほうさう子に、今のお水で助かりました。有り難う存じまする……。
〽話せば二人は顔見合せ、をかしさ隱すばかりなり。

ト この時關所の内にて、七ツの拍子木鳴る。
〽時も違へず關所には、打つ拍子木に助平が、一つ二つと指折つて。
ト 助平指折り數へて、惘りして
ヤア〳〵、ありや七ツの時代り、大切なこの狀箱、一時も早くお屆け申さん。關所の切手は慥かこの中に。
〽紙入れの内を探せど。
ハテ面妖な。ムウ、南無三方、後の茶屋で落したワ。ハテ、面妖な。こりや斯うしては居られぬわい。
〽どりや一走りと立ち出づれば、水氣取られし川太郎奴、ふたら〳〵池水の、埃に合うたる如くにて、元來し道へ引返へす。
ト 助平、よろしく向うへ入る。お袖、思ひ入れ。
〽お袖は後を見送りて。
そで サ、この間に早うお關所を。
志津 何から何までいかい世話。
そで なんのお禮に及びませう。どうぞこの末、お見捨てなう。
志津 たんの、忘れてよいものか。
そで エヽ、嬉しうござんす。

〽見飽きぬ目鏡の戀男、志津馬は一心敵の手がゝり、白歯娘が手を引いて、岡崎さして。

トお袖、志津馬よろしく、關所の内へ入る。

〽歸りける。鎌倉の奥女中、お里歸りの道中と、人目に見せる鋲乘り物、關所の前へ舁き据ゑる。

ト驛鈴入り、川越し唄になり、向うより乘り物、これに付ひ二人、中間、挾み箱持ち、後より星合團四郎、深編笠、大小の形。後より、蛇の目眼八、馬士形にて出て來る。直ぐに本舞臺へ來る。

團四　コレ／＼、いづれも。股五郎どのゝ乘り物は、直さま關所を打起し召されい。拙者は後より。サヽ、早う早う。

トこれにて、皆々關所の内へ入る。團四郎、眼八殘り思ひ入れ。

イヤ、蛇の目の眼八とやら、大儀々々。

眼八　して、私しへのお頼みと仰しやるは。

團四　外の事でもない。某は星合團四郎と申して、櫻井林左衞門どのとは一家なれば、いま附添ひし、あの女乘り物こそ、人目を忍ぶ股五郎どの。手にも足らぬ奴なれども、敵と狙ふ和田唐木。其方を男と見込み、頼むは兩人、彼奴等と見るなら、合點か。

眼八　イヤ、モウ、そんなお頼みなら、この海道の人喰ひ馬。そこが蛇の目の眼八だ。見遁がす事ぢやござりませぬ。お氣遣ひなされますな。

團四　馬士に似合はぬ大丈夫。

ト懷中より金を取出し

當座の褒美、取つて置きやれ。

眼八　ハイ／＼、當座の御褒美。こりや、忝ない……。

ト金を改めて

ヨウ／＼、久し振りのこのお金。馬士に千疋とは。こいつは、まんが直つて來たわえ。

ト時の鐘鳴る。

ア、申し旦那、鐘が鳴ります。少しも早くお出でなされませ。

團四　イカサマ、左樣いたさう。必らずぬかるな。

眼八　合點でござります。

團四　サ、來やれ／＼。

〽門内さして入相の、鐘諸ともに關の内。

ト矢張り時の鐘。關所の内にて

番人　締まります。

〽門はつしと締める音

　トこれにて、關所の締める拍子木鳴る。

〽街を走つて政右衞門、關所の前に立ち寄れば、門戸固めて出入りもならず。

　トこの時、バタ／＼になり、向うより政右衞門、走り出て來り、直ぐに舞臺へ來り、いろ／＼思ひ入れあつて

政右　暮れ時で、しかとは解らねど、最前通りしは、慥かに澤井股五郎。今一人は星合團四郎に極まつたわえ。エエ、コレ、附け狙ふ敵を取逃がせしか。チエ、、口惜しいわえ。

〽無念涙にくれ居たる。

　トよろしく思ひ入れ。

オ、、それよ。志津馬と爰で出合ふ約束。但しは先へ入込みしか。何にもせよ、出合ふ所は一筋道、今夜中にこの關所を越さねば、最早敵は手に入らぬ……ヤ、コレ、志津馬には、關を越してしまうたか。

〽行きつ戻りつ、思案を定め。

　トよろしく思ひ入れ

ムウ、兼ねて聞き居る拔け道は、慥かに竹の林の中。押分け行けば山傳ひ。オ、、さうだ。

〽探り廻りし眞暗がり、うろ／＼眼に助平が、これも窺ふ拔け道を、透かし見れば雲突くやうな大男、悔り驚ろき身を忍ぶ、探り當りし政右衞門、竹藪押し分け忍び行く、とくと見屆け助平が、狀箱腰に括りつけ、巧い／＼と拔け道の、後慕うて。

　トこの淨瑠璃のうち、政右衞門、思ひ入れあつて、正面の藪を押し分け、入る。雪颪しのうち、ごん送りにて、この道具よろしくぶん廻す。

本舞臺、一面高藪、松の立ち樹、同じく吊り枝。雪繁く降り居る。後は黑幕、雪颪しにて納まる。

ト鳴子の音する。政右衞門、窺ひ出る。

〽急ぎ行く、不敵なるかな政右衞門、天に一命抛つて、目ざすも知らぬ眞の闇、降り來る雪の道踏みつけ、裏道傳ひ一町ばかり、行くかと見えしが、關所の内に聲高く

番人　ヤア、忍びの鳴子に音するは、裏道を越える曲者あり。ソレ、組子ども／＼。

大勢　ハア、。

〽兼ねて用意の高提灯、人数を配つて取巻きしは、危ふかりける次第なり

トどん／＼になり、下手藪より、六尺棒、十手など持ち、皆々よろしく出て、此うち、政右衛門、正面の藪を押し分け、舞臺へ下りる。皆々、政右衛門を捕へ、あちこち引ッ張る。政右衛門、これを蹴倒す。この時助平、同じく藪を押し分け出て、この中へ入る。これにて政右衛門、摺りぬけて、東の花道へかゝる。皆々、助平を政右衛門と心得、よろしく思ひ入れ。政右衛門は舞臺の方を睨んで、東の揚げ幕へ入る。

〽詞には似ぬ組子ども、後を見ずして逃げ散つたり、逃げるを追はず政右衛門、道の案内はこの提灯と、勝手覚えし杣道の、足跡しるべに慕ひ行く。

ト助平を、皆々引摺つて、上手の藪へ入る。始終、ドンドンにて、助平、眞中の藪を押し分け、裸身へ鉢巻し、鼻紙袋を胸に掛け、出る。中通りの捕り手六人、うぬトかゝるを、見事に投げて、また藪を出て、見得。誂らへの太鼓入り、合ひ方になり、助平、思ひ入れあつて、鼻紙袋にある、笑ひ薬を押し出し、嬉しき思ひ入れにて、これより六人を相手に笑ひ薬の立廻り、をかしみよろしくあつて、トゞ、捕り手、案山子の簑をきせる。これにて皆々恐れる思ひ入れ。これにて、助平、花道へかゝる。

捕手　うぬ。

ト十手を振り上げる。助平、ツッと立つた木の頭。

助平　ム、へ、、、、。

ト笑ふ。きざみよろしく、幕一ぱいに、助平笑ふ。向うへ入る。拍子、

幕

九幕目　岡崎の場

役名　唐木政右衛門。和田志津馬。蛇の目の眼八。夜番時介。宿歩き市介。政右衛門女房、お谷。幸兵衛女房、おつや。同娘、お袖。山田幸兵衛。

本舞臺、三間の間、綺麗なる世話場。眞中に暖簾口。上の方、一間の障子屋體、茶壁、下のよき所に、明け荷二つ積み重ね、平舞臺に圍爐裏、側に柴たばね、藁あり。いつもの所に門口。この外に、藪疊、

藁葺きの軒に、雪を積らせ、門口より花道へかけ、雲板、雪布を、揚げ幕まで敷き詰める。すべて岡崎宿、郷士住居の體。爰に、世話形母おつや、行燈を置き、糸車を取り居る。時の鐘、雪颪しにて、よろしく幕明く。

ト直ぐに淨瑠璃。

〽いとし殿御を三河の澤よ、戀の棧橋文杜若、更けて忍ばゞ夜は八つ橋の、水も洩らさぬお手枕、鄙も都も小娘の、誰れ数へねど戀草を、見染め馴れ染め打ちつけに、雪の夜道の氣散じは、互ひに手先折り添へる、傘の志津馬にもつれ合ひ、じやらくら話しいつの間に。

トこの淨瑠璃のうち向うより、前幕の茶屋娘お袖、志津馬と相合傘にて出て來り、口舌模様よろしく、門口へ來り

そで　オ、辛氣。いつもは遠う覺えたに、意地惡う今夜の短かさ。モシ、まだ話しが殘つた程に、後へ戻つて下さんせぬかえ。

志津　ハて、譯もない事を、日は暮れる草臥足。後へも先へも雪の道、鉢の木の焚火とり、温かなそもじの身で、暖めてもらふが御馳走。早うお宿が御無心申したいの。

〽じやれよ詞にどう云うて、よいか惡いか白歯の娘。

そで　どうであなたになぶられると、知りつゝ、嬉しい今宵のお宿。

志津　なんの、そもじをなぶらうぞいの。

ト傘の手をしめる。

そで　アレ、まだ矢ッ張り。

トこちらへ引くはずみに、傘、門口へ來る。

つや　誰れおや〳〵。

トこれにて、兩人、恟り思ひ入れ。

そで　アイ〳〵、母さん、わたしでござんす。

ト門口を明ける。

つや　オ、、お袖とした事が、この寒いのに何してゐやつた。戻りが遲さに、待ち兼ねました、サ、、早う入りやいなう。

〽母親の詞をしほに内に入り。

ト志津馬に思ひ入りあつて、お袖ばかり内に入り

そで　サア、店を片附けるが遲うなつて、夜には入る。惱かつたが、幸ひと道連れのお方があつて、送つておもらひ申したわいなア。

つや　ムウ、道連れのお方とは、定めし近所の。

そで　イエ〳〵、行きかけられし旅のお方。それは〳〵御難儀。それでアノ、今宵一夜さ、此方の家に泊めてあげて下さんせいなア。モシ、苦しうはござりませぬ。此方へお入りなされませ。

〽呼ばれて志津馬はおづ〳〵と、小腰かゞめて。

ト志津馬、捨ぜりふ云ひながら、内へ入る。

志津　お許しなされませ。獨り旅の浪人者、日は暮れる、足は損なふ。詮方盡きてお宿の御無心。近頃わりない事ながら、今宵一夜をお頼み申す。

〽云ふも心に、荷物の葛籠、お袖見るより。

トお袖、葛籠を見付けて

そで　母さん、父さんの旅葛籠、あそこに戻つてござんすは。

つや　オヽ、父様も、今日暮れ前に歸らしやつたわいの……

……。

トお袖、思ひ入れ。

いま旅疲れで、よう寐てぢやわいの。

そで　エヽ、なんの、遲うても大事ないに。早うお歸りなさんしたなア。

ト志津馬と顔見合せ、思ひ入れ。母親は、この體を見て取り

つや　日頃から兩親がちよつと出てさへ、戻りを案じる其方が、父さまが、歸らつしやつたと聞いて、不興な顔つきは、堅い父御の氣質ゆゑ、折角貸しませうと、お連れ申した道連れ様へ、モシ約束が違うたと案じての事であらうが、例へ父御が得心でも、マア、この婆が不得心。なぜと云や。今でこそ茶店の娘、去年までは、鎌倉のお屋敷で腰元奉公、御主人様のお指圖で、さる武家方へ末末は、緣に付かうと堅い約束。その云ひ號けの夫を嫌ひ、無理に暇を貰うて家へ戻り、間もなう、淫らな事があつては、以前のお主人ばかりぢやない、顔は知らねど約束した、聟どのへ云ひ譯が。サア、斯うは云ふものゝ、其方に限り、さうした事はあるまいけれど、時分の來た若い娘のある内へ、若い男を泊めましては、戸の立てられぬ人の口。その上父御は、國守よりのお目鏡で、新關の下役を、勤めさつしやりや侍ひ同然、物事正しうするのも役柄。コレ、必らず悪う聞きやんなや。

〽云はれて何と返事さへ、お袖が意見の相伴に、志津馬も手持ち投首を、見る氣の毒さ、母親も。

トこの意見のうち、お袖、もぢ〳〵、志津馬も塵を捻

つてある。母は兩人を見て
此やうに意見するも、轉ばぬ先の杖とやら。イヤ、ナウ、御浪人さま、お心に障へて下さりまするな。泊めます事はならずとも、せめてお茶なと、ドレ、入れ花して上げませうか。
〽一つ上げうと尻輕に、勝手へ行く間待ち兼ねて、娘はおづ／＼志津馬が側。
トおつや、奥へ入る。お袖、奥を見ながら側へ上がり
そで　サ、モシ、誰れも來ぬ間に、云ひ殘した話しの殘りを、あの納戸で。
〽手を取れば振り放し。
志津　見る影もない旅の者に、關所での情といひ、道すがらも、アタ嬉しい詞を誠と思ひの外、云ひ號けがあるからは、主ある花に落花狼藉。もし、見つけられたら間男なぞと、重ねて置いて……イヤ、もう、四ツに間もござるまい。夜の更けぬうち、宿取つて。
〽立ち上がる袂に縋り。
そで　アヽ、モシ、あつて過ぎたる緣定め。今さら兎やかう母さんが、云はしやんしたがお心に障つて、わたしへの當言を、無理とはさら／＼思はねど。

〽恥かしながら今日までも、殿御に惚れたといふ事に、知らぬあどない不束な、在所育ちのこの身でも、結ぶの神の御利生で、お顏見るから思ひ染め、どうぞ女夫になりたいと、胸はしがらむ白河の、關は越えても越えかねる戀の峠の新枕、交さぬうちに胴慾な、つれない事を云ふ手間で、つい可愛いと一口に。
ト此うち、兩人、さはりよろしくあつて
〽云はれぬかいたと縋り寄り、しども涙のかこち言。岩木ならねば流石にも、振り捨て難き戀の畏、かゝる折柄門口へ、息せき來る蛇の目の眼八。
ト向うにて
眼八　やかましいわえ。ほてッ腹め……。
トこの聲にて、おそで、門口より伺ひ見て、志津馬に囁き、無理に障子屋體の内へ、志津馬を入れて思ひ入れ、あと馬士唄になり、向うより、眼八、出て來り、直ぐに門口へ來り、内を覗いて
ヤア、うまいぞ／＼。毛蟲の親仁や阿母も居ず、お娘一人は有り難い。
〽入るや否や後から、帶際むんづとひつ拖へ。
トお袖、一人思案の所へ、眼八、入り、後より抱きし

める。

そで　アヽ、モシ、惡い事を。

　ト振り拂ひ、否がる。

眼八　シッ／＼。なんの惡い事。常から目顔で知らせても、びんしやん／＼刎ね廻る、馬より氣強いお袖さん、さりとては胴慾な。否應なしにちよこ／＼と、どうぢや／＼。

そで　ア、モシ、穢ない、マア、爰を。

　ト突きつけると、また眼八、引きとめて、をかしみの合ひ方。

眼八　サア、誰れでも初めては否と云ふが、味を覺えると、やめられるものぢやアない。それとも否なら、おれも意地だ。今夜藤川の關所を破つて、忍び道を通つた奴、召捕らうと、岡崎中は上を下へと詮議の胴中。胡散な奴との相合傘、仲間の奴等が睨んで置いた。そこは蛇の目の眼八が、蛇の目を灰汁で洗つた詮議。引摺り出して吠面かゝすが、それでも否か。

そで　サア、それは。

眼八　但し、おれが云ふ事きくか。

そで　サア。

兩人　サア／＼／＼。

眼八　エ、面倒な。

　ト障子屋體へかゝるを、お袖、引きとめる。

〽駈け入る向うへ立ちふさがる、お袖を突きのけ立ち切りし、障子引明け見て恟り。

　ト立廻つて、障子の内へ入る。

アイタ、、、。

〽利腕捻ぢ上げ立ち出づる、主の幸兵衞。

　ト幸兵衞、着流し、老けたる拵らへにて、眼八の手を捻ぢ上げて出て來る。

そで　ヤ、お前は父さん。

　ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

幸兵　百姓なれども新關の、下役勤める身共が居間へ、泥脛切り込む狼藉者、料簡ならぬ所なれども、所存あるゆゑ免してくれる。この以後、キッと嗜なみ居らう。

〽投げ付けらるゝと思ひの外、突き放したる手強さに、底氣味惡くうぢ／＼もだ／＼、見るにお袖が嬉しさと、いとしい人の納まりを、案じいやます思ひなり。

　トこれにて眼八、思ひ入れ。

眼八　コレ、役目々々と云はつしやるが、大切な關所を拔けた科人。爰の娘が連れて戻つた旅の侍ひ、引込んで置

きながら、詮議するこの眼八を、なぜ縮め上げて手籠めにしたのだ。イヤサ、なぜ手籠めにしたのかい。

幸兵　ムウ、娘が連れ立ち歸つたとは、その侍ひは、いづくに居る。

眼八　ヤア、先刻慥かに爰の内へと。

幸兵　黙り居らう。うぬ、お袖にうツ惚れて、最前より法外の有り條。承引せぬゆゑ無法の當推。よし又その侍ひとやら、この内へ來たにもせよ、鎌倉通行の東海道、數限りもなき旅人の往來、これぞと云ふべき證據もなく、侍ひとさへ云や悉く引つ捕へ、關所破りと云ふべきか。勿論、おのれは當所の馬追ひ。誰れが許して詮議する。

眼八　サア、そりやア。

幸兵　ナ、なんとぢや。

トきつと云ふ。

眼八　ア、モシ〳〵、お氣の短かい、商賣が馬方だけ、豆から起つたいざこざで、親仁樣の寢所まで踏み馬御免でござりまする。

ト悄げてこなし。

幸兵　ハヽヽ、すりや誤まつたと申すのか。よいワ〳〵。今日の所は免してくれる。この以後、キツと愼しみ居らうぞ。

ト下へ坐る。

眼八　ハイ〳〵、キツと愼しみませう……ヤレ〳〵、すんでの事に、とんだ目に。併し、コレ、はずみ切つた太鼓の撥、ちよつと聖天神田丸、大間に一番囃させて。

トお袖へこなし。

そで　ア、モウ、しつこい。ちやつと歸らしやんせな。

眼八　なんぼ歸れと云つたとて、これが此まゝ。

ト又かゝる。

幸兵　ヤア、まだ歸らずば、縛し上げうか。

眼八　イエ、もうそれには及びませぬて。ヘヽヽヽ。

〽後をも見ずして立歸る。

ト木魚入り、合ひ方にて、眼八、花道まで行きかける。また引返して思ひ入れ。門口外の藪屋へ忍び込む。

〽後見送りて落ちつく娘、忍ぶ志津馬も一間を立出で。

ト志津馬、障子の内より出て來り、下へ來て、幸兵衛に手を突き、こなしあつて

志津　覺えなきに身に關破りとの疑ひ受け、今の危難を遁がれしは、御亭主樣の御厚志ゆゑ、忝なう存じまする。

幸兵　イヤ、これは〳〵痛み入る。先づ、お手を上げられ

い。サ、、平に〳〵。して、承はれば御浪人とな。定めて仕官のお望みにて、上方へ御旅行かな。

志津　アイヤ〳〵、拙者めは、樣子あつて世を忍ぶ獨り旅。即ち、當所岡崎にて、山田幸兵衛どの方へ、密々に參る浪人でござるて。

そで　ヘエ、そんなら、アノ、お前さんは。

ト此うち、幸兵衛、志津馬に思ひ入れあつて

幸兵　ア、、コリヤ〳〵……ムウ、山田幸兵衛は、即ち身共でござるが、して、其許はいづ方から。

志津　ナニ、すりや、貴殿が幸兵衛どのとな。これは〳〵。拙者は鎌倉武士にて、澤井城五郎どのに緣ある者。委細の事は、この書面に。

幸兵　ナニ、御狀とな。

ト前幕の手紙を出す。

志津　御披見下され。

〽委細はこれと藤川にて、手に入る一通手渡せば、封押切つて老眼に、つぶ〳〵讀むも口の內、樣子知らねば氣遣ふお袖、幸兵衛とく〳〵讀み終り。

幸兵　こりや、某が性根を見込み、和田行家を討つて、立退く澤井股五郎が力となつてくれよとある、お賴みの書面の趣き、先達て、鎌倉の樣子、承はりし砌りより、待ちに待つたるこのお賴み。慥かに承知仕つた。遠路の所、御大儀〳〵々々。この便りを勤めらるゝ、其許は、城五郎どのゝ御家來かな

〽尋ぬる詞に敵の手筋、これ幸ひと氣色を糺し。

志津　ハツ、幸兵衛どのゝ御懇切、承はる上からは、何をかお隱し申さん。刀の遺恨やむ事を得ず、和田行家を手にかけし、澤井股五郎と申す者。

そで　エ、。

ト志津馬を見て思ひ入れ。

幸兵　ナニ、御自分がアノ股五郎どのとな。

ト思ひ入れ。

志津　如何にも左樣でござる。鎌倉出立いたせし折、附人數多ござつたれど、人目立も如何と存じ、別れ〳〵に罷り上る。城五郎どのには、前以て御懇意の幸兵衛どの、何卒御助力下さらば、この上もなき拙者が喜び。偏へに賴み存じまする。

ト幸兵衛、此うち、思ひ入れあつて

幸兵　ムウ。さすれば、貴殿が股五郎どのか……イヤ、これまで互ひに御意得ねば、双方共に知らぬ同志。コリヤ

コリヤ娘、云ひ號けの聟どのぢやわやい。

ト志津馬へ思ひ入れ。お袖いそ〳〵して

こてサア、今のお話し承はつて居りました。そんならわたしが、鎌倉へ御奉公の其うちに。

幸兵 オヽサ、城五郎どのお勸めゆゑ、其方を遣はさうと面談には及ばねど、約束いたした花聟どの。

ト志津馬を見る。

志津 ヘヽヽ。

ト顔をそむけて苦笑ひする。

幸兵 ようこそ尋ねて下されたなア。

〽喜ぶ聲の洩れ聞え、母も立ち出で。

ト奥より、母、出て來る。

つや ヤレ〳〵マア、思ひがけない。こなさんが聟どのであつたかいの。知らぬ事とて先刻には。シタが、氣にはさへて下されな。云ひ號けはありながら、股五郎といふ名を嫌うて、これまで娘の不心得、それゆゑ疎遠に打過ぎましたが、聞いたとは違うて、ても好い男。此やうな聟どのでも、娘、其方は矢ッ張り否かいなう。

そで オヽ、勿體ない事仰しやりませ。云ひ號けの殿御ぢやと知らいでさへ、添いたうて〳〵ならぬもの。縁は切れてもお主のお指圖、父さんや母さんの、お許しの出た股五郎さん。どうしてわたしが嫌ふもの。モウ〳〵、二世も三世も變らぬ女夫、これからは、どつちへもやる事ではござんせぬ。いつまでも爰に居て、可愛がつて下さんせえ。

〽心に思ふありたけは、云はで思ひを押包む、お袖は嬉しさ兩親も、共にほた〳〵喜び顔。

ト志津馬、思ひ入れあつて

志津 イカサマ、さう仰しやれば、上松に仕官のうち、城五郎どのゝお指圖にて、顔は知らねど云ひ號けの、お袖どのであつたよな。然る上は一方ならぬ縁者の某、二世の大事に及ぶ時節。お匿まひ下さらば、生々世々の御厚志と、有り難う存じまする。

ト身をへり下がつて辭儀なする。

幸兵 イヤモ、ナニ、さて〳〵、狩人すら、懐に逃げ入る鳥は助くる習ひ、まして聟どのゝお頼み。ないとて違背は致さぬ。年こそ寄つたれ、幸兵衛が、命にかけて匿まふからは、志津馬づれが附け狙ふとも、何程の事やあらん。併し、爰は端近。幸ひ奥に別家もあれば、心置きなく打寛ろいで、ソレ、二人ともに、稀れの珍客、何はな

くとも杯の用意しやれ。

志津　ア、イヤ〳〵、そのお心遣ひ、却つて迷惑。御無用になされませ。

つや　ハテ、聟殿の他人がましい。舅入りやら聟入りやら、祝言もごつちや煮の在所料理。むしり肴の祝ひ盛りより外に、馳走は手入らずの娘お袖の、初物の一種で。

そで　アレ、母さんの。

つや　ホヽヽヽヽ。

幸兵　イカサマ、母の云やる通り、敵持ちの聟どのに、七十五日生き延びるとは、これも吉左右。めでたいめでたい。ドレ〳〵、案内いたさうか。

つや　サア〳〵、娘、聟どのも一緒に。

志津　御同道いたしませう。

そで　モウ〳〵、こんな。

ト喜ぶ。

幸兵　ハテ、嬉しがる事はいやい。ハヽヽヽ。

ト唄になり、幸兵衛先に、母、志津馬は、お袖附き添ひ、志津馬思ひ入れあつて、皆々奥へ入る。あと風の音、九ツの鐘鳴る。

〽はや九つのかねてより、内の案内は知つたる眼八……

ト以前、忍びし眼八、藪より出て内へ入り、窺ひ

〽思はず爪づく空がらの、駄荷の葛籠を幸ひと、あたふた押明け忍び込み、鼻息もせず窺ひゐる。

ト眼八明け荷を明ける。この中へ入り、我が手に蓋をして忍ぶ。

〽斯くとは人もしら雪の、道もいとはぬ政右衛門、心も闇か忍びの道。

ト烈しく雪颪し。日覆より雪降る。バタ〳〵になりて向うより政右衛門、前幕の形にて走り出て、前後へ思ひ入れあつて

〽遁がれて急ぐ後よりも、数多の捕り手が見え隠れ、慕ふ足跡機転の唐木、両腰そつと道端の、雪掻き集め押隠す。

ト政右衛門、花道の雪板の蔭へ、大小を取つて隠し、この上へあたりの雪を集め、見えぬやうに隠し、思ひ入れ。矢張り雪颪しにて、花道より、捕り手八人、後より捕り手頭附き添ひ、ひそ〳〵と出て来り、捕り手頭、ソレと声をかける。皆々来り、政右衛門を取巻く。

捕八　縄かゝれ。

ト政右衛門、思ひ入れあつて

政右　ヤア、仔細も云はず、理不盡に、繩かゝる覺えはないぞ。

捕頭　ヤア、覺えないとは野太い奴。關破りの科人。サア速かに。腕廻せ。

〽捕つたとかゝるを引はづし、苦もなく首筋一摑みに、一振り振つた右左、弱腰蹴据ゑてゐのこ投げ、透間を得たりと二番手が、腕がらみを振りほどき、ほぐれを取つて眞逆樣、づでん胴骨雪道に、打ちつけられて叶はじと入れ代つたる三番手、打込む十手かいくゞり、脾腹を丁と眞の當、烈しき手練にさしもの組子、左右なくも寄りつけず、後ずさりするばかりなり。

トこの立廻りのうち、物音を聞いて、奥より幸兵衛、手燭を持ち、出て來り、戸に寄り、これを窺ひ見る。

組頭　ヤア、御諚に依つて向ひし我れ〳〵。手向ひなすは關所破りの浪人者に相違はない。サア、尋常に

八人　腕廻せ。

政右　ヤレ、麁忽なり、お役人。急用あつてこの如く、夜道を急ぐ旅の者、丸腰の某を、關所を破りし浪人とは、身に取つて覺えぬ御難題。外を御詮議なされませ。

〽ちつとも恐れぬ丈夫の振舞ひ。

組頭　イヤ、その云ひ譯は役所で致せ。爭はずとも

八人　繩かゝれ。

ト十手を振り上げ、取卷く。この時、幸兵衛、ツカ〳〵と出て

幸兵　ア、イヤ、憚りながら、お役人へ申し上げまする。關破りの御詮議なかば、深夜に一人歩行の旅人、お疑ひは御尤も。併しこの者は鎌倉飛脚、仔細あつてこの幸兵衛よく存じ居ります。あの者の慮外の段々は、御容赦あつて、無難にお通し下さらば、私しに於ても有り難き仕合せ。

ト此うち、政右衛門も思ひ入れあつて

政右　ムウ。して、さいふこなた樣は。

幸兵　ア、イヤサ、コリヤ、身に覺えないにもせよ。お役人へ慮外の手向ひ、不屆き至極。控へて居やらぞ。

ト叱りながら、政右衛門へ思ひ入れあつて、倒れゐる捕り手の側へ寄り、引起し、活を入れる。これにて、氣絶したる捕り手八人とも、心附きキッとこなし、幸兵衛思ひ入れ。

いづれも、お心慥かにござるか。お役目御苦勞に存じまする。

〽苦い挨拶、氣の付く捕り手、幸兵衞猶も威儀を糺し。

承はれば、關所を破りし科人は、帶刀の浪人者。彼れは町人、人違ひ。斯やうな儀に隙どるうち、彼の曲者を取逃がさば詮なき事。早くお手當なされたら、よろしからうと存じまする。

組頭　ムウ。すりや、おてまへが存ぜし者と申すからは、相違もあるまい。ナニサマ、これより山手へかゝり、彼の曲者を召捕らん。

幸兵　それが肝要。

組頭　者ども、續け。

八人　ハツ。

〽元來し道へ引返す。影見送りて政右衞門。

ト捕り手皆々向うへ入る。政右衞門、埋めし大小を取出し、腰にぼツ込み、幸兵衞に向ひ

政右　誠に、危ふき場所を遁がれし事、全く貴公の御厚志ゆゑ。お禮は重ねて申し述べん。心も急けば失禮ながらお暇申す。

〽と立ち上がれば。

幸兵　ア、イヤ／＼、心急きは御尤も。ちと、お尋ね申す仔細もあれば、見苦しけれど身共が宅へ。

政右　すりや、拙者にな。

ト思ひ入れ。

幸兵　お隙は取らせぬ、暫時のうち。

政右　ムウ……然らば御免下されい。

〽然らば御免と打通れば、門の戸引立て主の幸兵衞、側近く差寄つて。

ト兩人、よろしく内へ入り、住ふ。

幸兵　早速に申さうは、多勢を相手に今の働らき、感心の餘り、役人を欺むき、難儀を救ふは、聊か寸志。それにつけ、いぶかしきは貴殿の柔術。正しく拙者が流儀に同じき神影の極意、手練せられし旅人は。

政右　ハテ、我が柔術の神影の極意、手練と見極められし御老人の御眼力。

〽はて心憎しと双方が、ためつすがめつ見合す顏。

ムウ、お別れ申して十餘年、相好は變れども、生國は勢州山田にて、武術の御指南下されし、要さまではござりませぬか。

幸兵　オヽ、その詞で思ひ出した。我れ勢州にありし節、

幼少より、育て上げし、庄太郎であらうがな。
政右　成る程、左樣でござる。然らばあなたが。
幸兵　其方が。
兩人　イヤ、これは〳〵。
〽これは〳〵と手を打つて、盡きぬ師弟の遠州行燈、掻き立て〳〵打眺め。
幸兵　オヽ、幼な顔に覺えある。庄太郎に相違ない。ハテサテ、健やかに生ひ立ちしたな。
政右　ハツ、誠に〳〵、久々にて、先づ先生にも御健勝で。
幸兵　オヽ、サ〳〵、無事の對面、互ひに滿足。さりながら、ア、思ひ廻せば過ぎ行く月日。其方は山田の神職、荒木田宮内が倅なれども、幼少の砌り父母に離れ、孤子となつたる不便さに、引取つて育つるところ、幼な立より武藝を好むは、末頼もしと思ふより、門弟どもへ稽古の次手、一手二手と教へるうちを、一を聞いて十を知る頓智といひ、器用といひ、十五以下にて槍術劍術、鎖鎌、體術、柔術に至るまで、諸歴々の弟子を追ひぬき、神影の奧儀を極むる無双の達人。何卒大家へ仕官させ、親の氏を嗣がせんと、心頼みに思ふうち、未熟の師匠と見限りしか、家出いたして十五年、便りなければ折にふれ、この庄太郎は如何なりしと、雨につけ風につけ、思ひ出さぬ事もなく、夫婦打寄り其方が噂。して、只今の住所はいづく。まだ相應の有りつきもないか。どうぢや〳〵。
ト思ひ入れ。
〽師匠の慈愛に政右衞門、思はずハツと手をつかへ。
政右　さほどまでに、思し召さるゝ、親にも增る大恩の師匠を見限り家出せしと、お疑ひはさる事なれど、常々武術の講釋小耳に覺えしその中に、一派に心を凝らさんより、諸流に渡り修業なすこそこの道の心掛けと、御教訓ありし事、心魂に沁み渡り、十五歳にて國を出で、普ねく諸國を遍歷いたし、武術を磨く武者修行。天運叶ひ、一度は然るべき主取り致せしかど、生れつきたる好色亂酒に、その主人の機嫌を損じ、只今は元の浪人。便るべき方もなければ、もし上方にありつきもと、心ざして參る所。思ひがけなく先生に、かゝる、仕儀にてお目にかかり、面目次第もござりませぬ。
ト思ひ入れ。
〽遠慮にそれと身の上を、云はぬ底意は白髮の母、樣子聞いてや一間を立出で。

ト母親、いそ〳〵して、奥より出て來り

つや　ヤレ〳〵、マア、庄太郎、ても、成人しやつたなう。仔細はあれから聞きました。連合ひの目鏡違はず、武藝の上達。サア、それについて、その器量を見込み、早急ながら頼みたい仔細があるが、なんと聞いて下さるか。

政右　これは〳〵、お世話になりし其まゝにて、久しぶりのあなたのお頼み、身に叶ひました事ならば。

つや　そりや忝ない。頼みは其方の家出した時、やうやく三つ子の娘のお袖、もう十七になるわいの。緣あつて云ひ號けその聟どの、親の敵と狙ふ者があるに依つて、まさかの時には後楯、力になつて下さらば、餘の人千八萬人より、増つて嬉しう思ひまする。

幸兵　オヽ、如何にもさうぢや。庄太郎と知らぬ先、難儀を救ひ、恩をかけしも、この儀を頼まん下心。

ト政右衛門、思ひ入れ。

政右　ムウ、して、拙者めを後楯と……して、その附け狙ふ敵の假名は。

ト云ひながら、幸兵衛に摺り寄つて、こなし

幸兵　サア、聟といふは、上杉の家來、澤井股五郎といふ侍ひ。附け狙ふは、和田志津馬と聞いたばかり。面體は知らねども、高で知れたる若輩者、我が片腕にも足らぬ相手なれども、爰に一つの難儀といふは、彼奴が姉聟、唐木政右衛門といふ奴。音に聞えし武術の達人。五十人百人加勢ありとても、政右衛門には何として。最前の手練を見るに、まだしも唐木に立合はんは、其方ならで外にはない。何卒聟に力を添へて、助太刀頼む、庄太郎。

〽餘儀なき頼みに政右衛門。

政右　何がさて、先生に内緣ある股五郎どのに、力を添へれば、少しは師恩を報ずる理り。如何にも、助太刀仕らう。サヽ、この上は、澤井どのゝその隱れ家へ御案内。

ト身繕ろひする。

ト眼八覗くを幸兵衛見て思ひ入れ。

〽急き立つ唐木、忍びの眼八、蓋押明けて差覗く、顔をちらりと見付ける幸兵衛。

つや　ヤレ〳〵嬉しや。庄太郎の今の詞を聞いたからは、もう案じはない、千人力ぢや、ドレ、聟どのに。

ト立ち上がる。

幸兵　ハテサテ、いらざる女の差出。股五郎どの行くへは知らぬ。

つや　エ。

ト不思議なこなし。政右衞門、思ひ入れあつて
幸兵　ハテ、サテ、壁に耳ある世の諺。それと慥かに知られども、云ひ聞かすには折があらうな。
ト母へこなし。
サ、迂濶にそれと明かされぬ、話しの蓋は取らぬが秘密。ナア、庄太郎、さうではないか。
トわざと外らす。
政右　ヘエイ。
〽どこやら一物、あるきの小助、門の戸叩いて。
ト花道より、歩き一人、足早に出て、門口へ來り
歩行　モシ〳〵、庄屋どのから、急な御用、ちよつとお出でなされませ〳〵。
幸兵　エヽ、また關所破りの事であらう。否と云はれぬ役目の不肖。ソレ、羽織々々。
つや　アイ〳〵。
ト羽織を取つて、幸兵衛に着せる。此うち、淨瑠璃。
〽嗜なむ大太刀差しこなし、葛籠の上に片しの葛籠、しつかと乘せて。
ト此うち、政右衞門、母、捨ぜりふにて、足駄を直し、傘を出す。

幸兵　コリヤ女房、今も云うた話しの蓋、戻つて來るまで明けぬやう、心に卸ろしたこの錠前。ナ合點か。庄太郎、行て來て逢はう。
政右　お早うお歸りなされませ。
幸兵　サア、先へ行きやれ。
〽雪道いとはぬ高足駄、さす傘の骨組みも、人に勝れし頑丈作り、心を殘して出て行く。
ト歩きを先に、弓張り提灯持ち、案內して、幸兵衞、向うへ入る。政右衞門、後見送り
政右　エヽ、昔に變らぬお達者な事ではある。イヤモシ、あなたは、もうお休みなされませぬか。
つや　イヤ〳〵、主の留守に、寐られもせまい。仕掛けた絲をつむぎながら、昔の事など話しませう。
政右　ハテ、あなたも上根な。マア、火におたりなされませ。私しも、これから下男同然に、お使ひなされて下さりませ。
つや　ナンノイナウ。こなさんは大事のお客。マア、寐轉んで、莨でものんだがよい。
ト云ひながら、糸車を我が前へ出す。
政右　イヤ〳〵勿體ない、師匠の內。イヤ、莨と云へば、

この莨は。

ト軒に束ねてある莨の葉にこなし。

つや　そりや主が旅戻りに、貰うてござつた上方莨ぢや。

政右　ヘエ、あなたのお口に合ふのなら、大方、服部か國府か。この天氣に斯うして置いたら、しめりませう。幸ひ爰に切り臺もあり、留守に刻んで見ませうか。

つや　アヽなんの、明日の事がよからうぞいの。

政右　でも、手を束ねて居やうより、ドレ、刻んで見ませうか。

トあり合ふ切り臺、庖丁、道具出し、莨の葉を下ろし、小箒にて葉の砂を掃いて、葉とりにかゝる。

〽底に劒の葉拵らへ、敵を聞き出す莨の小口、葉巻き手早くきり／＼と、大の體を小廻りの、奉公振りも哀れなり。

ト雪颪し、順禮唄になり、向うよりお谷、細物、そぼろの着付けへ、笈摺を着て、抱子を懐に入れて、この上に糸立をまとひ着て、菅笠をかざし、杖を突き、癪の發りし思ひ入れにて、雪を凌ぎ、たど／＼出て來る。

〽外は音せで降る雪に、無慘や肌も郡山の、國に殘りし女房の、思ひの種の生れ子を、抱いてはる／＼海山を。

ト此うち、お谷、たど／＼花道、よき所まで來り、思ひ入れあつて

たに　思へば浮世の人の身ほど、定めないものはない。父さんの横死より、夫婦兄弟別れ／＼。敵の行くへ白雪の降るにもいづくと當途さへ、非人に劣りし今の境界。もう何時であらうしらん。どこぞ爰らに蔭を求めて……アイタ……、折り惡いこの癪わいの。

〽辿り／＼て岡崎の、宿より先に日は暮れて、いづくを宿と定めなく、がばと轉べばわつと泣く、子をすかす手も冷え凍る。

ト轉ぶ事。赤子、泣く事あつて、藪の側へ來り

〽雪の蒲團に添乳の枕、いんのこ／＼／＼に、友さそふ犬の聲／＼、夜番が見附ける小提灯。

ト此うち、お谷、糸立を敷き、その上にて、子をいぶりつけて居る。よき程に、向うより、夜廻りの番人、ばつてう笠を冠り、割り竹と、岡崎宿と記せし提灯を引下げ出て來る。内には政右衛門、葉巻きをして、莨刻みかゝる。母は糸を取つて居る。此うち、始終、犬の啼き聲あつて、雪颪しあしらふ。日覆より、雪を所

所へ降らす事、夜廻りは出て來り

夜廻 火の廻り〳〵。

ト鉾臺へ來り、お谷を見附けて

ヤイ〳〵、なぜそこに寐るのだ。置く事はならない、キリキリと行け〳〵。

ト割り竹を打ち散らし、キッと叱りつける。お谷、思ひ入れ。

たに ハイ〳〵、私しは秩父坂東を廻る、順禮でござります。癪でお腹を痛めまする。ちつとの間、どうぞ。爰へ。

夜廻 イヤ〳〵、順禮でも幽靈でも、在の内に寐かす事はならぬ〳〵。

たに 左樣でもござりませうが、どうぞお願ひでござりまする。

夜廻 うぬ、性の惡い女郎だ。キリ〳〵うせぬと、割り竹だぞ。

〽提灯附きつけよく〳〵見て、爪はづれの尋常さ、睨んだ眼うつかりと、細目に明ける戸の透間、內から覗く夫婦の緣、思ひがけなき女房お谷。

ト此うち、政右衛門、夜廻りが聲に何事と、戸を少し明け、お谷を見て

〽ハッと恟り差合せ、包む我が名の顯はれ口、惡い所へ切りかけた、莨の刃金、胸を刻むと人知らず。

ト夜廻りが方を見て、思ひ入れあつて、門口を締め、切り臺にかゝり、莨を刻む。此うち、夜廻り、お谷に思ひ入れあつて

斯う見た所が、小盗みもするやうな風體とも見えぬ。この雪に乳呑子抱へて、アヽ、難儀な事であらうな。どこぞ後生氣な所を賴んで、泊めてもらはつしやれ。ほんに見れば見る程好い器量な女順禮。獨り寐かすは惜しいものぢやが、此方も寒氣にとぢられて、瘦せ畑の鬼灯。精進日に看貰うたやうで、あつたら者ぢやが、喰はれぬわい。

〽つぶやき歸るも賴みなき、人の詞もせめての賴み、火影を力に戸口に這ひ寄り。

ト此うち、夜番、火の用心と云ひながら、向うへ入る。お谷は、癪を押へながら、門口へ這ひ寄つて

たに 幼い者を連れました、順禮でござりまする。お情に今宵一夜、どうぞお庭の端になりと。

〽お庭の端にとばかりにて、癪に苦しむ息切れの、聲に

主は涙もろく。
　ト內にて、これを聞いて
つや　アレ、女の聲で順禮とやら。さうして、いとしや纔持ちさうな。この雪に、門口に寐ては堪るまい。ドレドレ、泊めて進ぜませう。
　ト立つて行きかける。政右衛門、南無三方と留めて
政右　ア、、モシ〳〵、これは又、どうしたもの。このお觸れの嚴しいのに、殊にはお役柄、この內へ、どこの者やら知れもせぬに、滅多無性に引入れて、モシ、後の難儀はどうなされます。ア、、よしになされませ〳〵。
つや　でも、女子の事なら、氣遣ひも
政右　イヤサ、その女の癖に夜夜中、一人歩くやうな奴。ろくな者ぢやござりませぬ。戸を明けずと、其まゝほいやつたがようござります。
つや　イカサマナウ、幸兵衛どの留守の內は、用心が肝心ぢやの。
政右　左樣でござりまする。
　ト母、戸の側へ來て、內より
つや　コレ〳〵順禮どの、いとしけれども獨り旅を、泊めるはきつい所の法度。とても城下の中は、軒下にも寐る事はなるまい程に、そろ〳〵とこの野外れの森の中へ行て寐やさつしやれや……ア、、ほんに可哀さうに。
〽和らかに、云うて引き出す糸車。
　トまた母、糸車をかける事。政右衛門は、表へ聞き耳立て、思ひ入れ。お谷も此うち、思ひ入れあつて
〽來いと云うたとて行かれる道か、道は四十五里浪の上。
たに　ハア、どこへ行ても、一人旅は泊めてくれうやうもなし。はる〴〵海山も、この子の顏を旦那どのに、見せたいと思ふ精力で、産み落すからこの巳之助、やう〳〵忌も明くや明かず、國を出てからつい一夜さ、家の中で寐た事がなけりや、身は習はしと山寺の、鐘が鳴れば寐る事にして、星の光を燈火と、思うて寐入れど今夜の寒さ。氷のやうなこの肌で、寐苦しいは道理ぢやわいの。その上、癪で乳は脹らす。雪に凍へ、雨に打たるゝ、辛さは骨身に堪ゆれど、旦那どのや弟が、敵を尋ねる辛勞は、まだ〳〵こんな事ではあるまいに、その艱難に比べては、雪は愚か、劍の上にも寐るのが、せめて女房の役と、氣は張りつめてもこの癪の、重るにつけて二人の身に、疲れの病は出はせぬか、ひよつと悲しい便りなど、

聞いたら何とせうぞいたう。お頼み申すは觀音樣。夫や弟の武道長久。我が子の命息災に、ならう事なら私しも、この子を夫へ無事に渡すまで、どうぞ死にたうござりませぬ。生きて夫や弟に……と云ふうちもこの癪で……ア、、死にともない〳〵。

ト癪に苦しむこなしよろしく

〽側に夫のあるぞとも、知らぬ不便さ喰ひしばる、咽喉に熱湯内外に、水火の責苦雪霙、子を濡らさじと抱きしめ〳〵、天道哀れ白雪の、積り重なる病勞れ、癪と寒氣に閉ぢられて

ト苦しむ事いろ〳〵あつて、アツと倒れる。赤子泣く。

〽あつと一聲氣を失ひ、撻と倒れし物音は、肝にこたへて。

ト政右衛門、これまで涙を隱し居て、この音にハツと思ひ入れ。

〽南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛も口の內。

ト目を閉ぢてこなし。母、此うち、思ひ入れあつて

つや　ハテ、今の音は、何であらうぞ。

ト其まゝ立つて戸を明ける。

〽戸を引明ければ、ばつたりと、身は濡れ鷺の目は暈みたり。

ト戸に倒れかゝりしお谷、ばつたりと內へ倒れる。母、驚ろき。

オ、、こりや、眩暈が來たのぢやないか。エ、、いぢらしい。コレ庄太郎、どうせう〳〵。

トうろたへ介抱する。政右衛門、ヂツと堪へる。

オ、、幸ひ氣付けが。

トとつかは文庫より氣付けを出す。政右衛門、思ひ入れ。

政右　ア、、モシ〳〵〳〵、そりや御無用になされませ。

つや　なぜ〳〵、こりや。主が道中で持たしやつた結構な氣付けぢや。

政右　サア、その結構な氣付けを、非人同然の者に服まして、それでも氣の付かぬ時は、掛り合ひになりまするぞ。

つや　ヤ。

ト思ひ入れ。赤子、頻りに泣く。

政右　サ、それぢやに依つて、此まゝにして、表へ拋し出すがようござりまする。

つや　ぢやというて、どう見捨てゝ。アレ、可哀や、乳を探して泣いてわいの。ムウ、そんならせめて子なりとも、殺さぬやうに奧の炬燵で、溫めてやりませう。

政右　そりや大事もござりますまい。

　ト思ひ入れ。

つや　そんなら、ドレ〳〵、ヤレ〳〵可哀や。

〽風に當てじと藁卷の襦袢、赤の他人は慈悲深く、比翼と交す女房を、むごう引出し戸を引立て。

　ト此うち、母、抱子を取上げいぶりつけながら、奧へ入る。政右衞門、お谷をむごく外へ引出して、戸を締める。此うち、母の奧へ入るを見て思ひ入れ。かすめて時の鐘。

〽奧口見廻しさし足し、勝手は見置く釜の前、附木の明りに見咎めて、人は何とかいひ柴を、そつと隱して門の口、臥したる妻に氣を付ける、柴の焚火の溫まり、かみしめる齒を押割つて、雫にうるほす氣付けの一滴、耳に口寄せ聲かすめ。

　ト此うち、政右衞門、いろ〳〵あつて、柴に火をうつし、お谷を抱き上げて、藥を服ませる。

政右　お谷やアい。

〽と云ふも憚りて、心の中で呼び活ける、夫の誠の通じてや。

　トお谷、ウンと心付きしこなし。

コリヤ、氣が付いたか、女房ども。

　トお谷、政右衞門を見て

たに　ヤア、政右衞門どのかいなア。

政右　コリヤ。

　ト口に手を當て、思ひ入れ。

なんにも云ふな、敵の在所、手がゝりに取り付いたぞ。

たに　すりや、アノ、敵が。

政右　コリヤ、この家の內へ、身共が本名を、けぶらいでも知らされぬ大事の所、其方が居ては大望の妨げ。苦しくとも爰を堪へて、一丁南の辻堂まで、どうなりとして行つてくれ。コレ、吉左右を知らすまで、氣をしつかりと張り詰めて、必らず死ぬるな。

たに　アイ……アイ。

政右　サヽ、早く行く〳〵。

〽夫の詞は千人力。

たに　觀音さまのお引き合せ、お前に逢うたは、人參熊の膽、もう死ぬ事ぢやござんせぬ。エヽ、有り難い〳〵、

が、坊はどこへ。

　トあたりを尋ねる。

政右　氣遣ひするな、坊主は奥へ寢さして置いた……アレ

アレ、向うへ來る提灯、見付けられるな、早く〱。

〽早う〱とせり立てれば、この年月の悲しさと、嬉しさ嵩じて足立たず、杖を力に立ちかぬると。

　トお谷また倒れる事。此うち、向うより幸兵衛、提灯を提げ、出て來る。政右衛門、思ひ入れ。

〽とや詮かたへに脱ぎ捨てし、菰に積りし雪のまゝ、着せて人目を暗き夜を、ぽか〱戻る達者親仁。

　ト政右衛門、有り合ふ以前の糸立を、お谷に打ちかけ、心遣ひ。此うち幸兵衛、直ぐに舞臺へ來り、政右衛門と顔見合せる。

政右　オヽ、お歸りでござりけまするか。

　ト思ひ入れ。

幸兵　オヽ、サ、庄太郎か。寒いに門に何して居る。

政右　アイヤ、お歸りが遲いゆゑ、お迎ひに參るところ。

　トお谷の體を、見えぬやうに、こなし。

幸兵　なんの迎ひに及ぶもので……ムヽ、こりや、門口に柴の燃えさし。また非人どもが業であらう。アヽ、不用心な。

〽と見廻す提灯。

政右　イエ、私しが。

　ト取るはずみに、わざと提灯を取落し、消す。

これは麁相を。

　ト思ひ入れ。

幸兵　大事ない〱。今も風で、すんでの事、道で取られうとしたところ。まだよい所で火が消えたわい。

〽云ふもこたへる底持つ足、天氣も大方上り口、庭から足拭く下駄直す。師匠思ひに機嫌顔。

　ト此うち、幸兵衛、二重に住ふ。

イヤ、世に馴染みほど、結構なものはない。久しく逢はぬ其方なれど、ちつとも心に變りはない。これからゆるりと夜とともに話さう。して、いよ〱最前頼んだ事、違變はないか。

政右　これはお師匠とも覺えぬ、くどいお尋ね。一旦頼まれし拙者が性根、覺束ならうとも思し召さば、なまくらでない魂ひをば、只今金打。

　ト刀に手をかける。ちやつと留め

幸兵　ア、コレ、なんのそれに及ぶ事。

政右　イヤ、及ばぬと仰しやつても、お頼みなさる本當の股五郎どのゝ在所をば、御存じないと仰しやるは、師匠の詞に鞘があるかと存じられ、頼まれるに力がない。なんと左樣ぢやござりませぬか。

〽探る心の奥より女房、幼な子抱き走り出で。

ト母は抱子を抱へ、走り出て

つや　コレ〳〵、親仁どの。最前爰へ、行き倒れの女順禮が、抱いて居たこの乳呑み子、可哀さうにと炬燵に溫め、いま肌を明けて見たれば、守の內にこの書付け、和州郡山唐木政右衞門忰巳之助と、書いてあるわいの。

ト政右衞門、ギツクリ。

政右　ヤア。

ト立寄りて、よく〳〵見て

誠に〳〵、好い物が手に入つたぞ。敵の胤のこの子忰、人質に取つて置けば、此方に八分の强み、敵に八分の弱みあり。ハレ、股五郎どのゝ運の强さ。その餓鬼、隨分大事にかけ、乳母を取つて育てるが、計略の奥の手。コレ、磨り粉でも、ちやつと〳〵……

〽喜び勇めば政右衞門、さつと寄つて幼な子引寄せ、咽喉笛貫く小柄の切先。

ト母を追ひ立てるやうに云ふ。政右衞門、この時、ツカツカと行つて、抱子を引取り、直ぐに小柄にて咽喉をグツと刺し通す。幸兵衞、母も、驚ろいて

コリヤ庄太郎、大事の人質。

幸母　なぜ殺した。

政右　ハヽヽヽ、この忰を留め置いて、敵の鉾先挫かうと、思し召す先生の御思案、ちとお年の加減かちと捻りが戻りましたな。

幸兵　ムウ。

ト政右衞門、思ひ入れ。

政右　武士と武士との噯業に、人質とつて勝負する臆病者。卑怯者と後々まで、人の嘲けり笑ひ草。少分ながら股五郎どのゝ、お力になるこの庄太郎。人質へ頼りに仕らぬ。先つこの如く血祭りに、刺し殺したが、頼まれし拙者が金打。へヽヽ、先生、御覽下されしな。

〽死骸を庭へ投げ捨てたり。

ト幸兵衞、手を打つて

幸兵　ア、ア、尤も。その大丈夫な魂ひを見屆けたれば、何を隱さう、股五郎は先刻より、奥へ來て居るわえ。

政右　ヤ。

幸兵　コレ、婆、聟どのを起して、股五郎の片腕になる、頼もしい人が來たと云うて、ちやつと爰へ同道せい。
つや　合點ぢや。聟どのを呼んで來う。
　ト上手屋體へ入る。政右衛門、思ひ入れ。
政右　すりや、股五郎どのは、この内に。ムウ……して、外に連れの衆でも。
幸兵　イヤ／＼、供もなし、たつた一人。奥庭なら話すがよい。
政右　へエ、。
〽打明け語るは思ふ壺、何條知れたる股五郎、手取りにするは安かりなんと、手くすね引いて待ち大膽、志津馬は女房が案内で、股五郎が片腕とは、何奴なりとも只一打ちと、鯉口くつろげ居合ひ腰。目配り氣配り、互ひにきつと。
　ト此うち、上手屋體、障子引明ける。母、捨ぜりふ。志津馬、刀の目釘しめし、身構へして、こなし。
ヤ、其方は。
志津　こなたは。
兩人　ホウ。
〽一度に仰天、幸兵衛むんづと居直り。

　ト幸兵衛は、どつかと眞中に座して
幸兵　唐木政右衛門、和田志津馬、不思議の對面、滿足であらうがな。
〽先がけられし二人より、思ひがけなき女房が、心どきまぎ不審顏。
　ト袖は、ヤヽ、と驚ろく。政右衛門、志津馬へ思ひ入れ。此うち、外のお谷は心附き、思ひ入れ。
なんと、老人の目利き、よもや違ひはせまいがな……今宵、澤井股五郎と名乘つて來る年配恰好、聞き及びしとは拔群の違ひ。さては却つて附け狙ふ志津馬か、但しは餘類の者か、肌ゆるさせて詮議せんと、わざと一ぱい喰うた顏。三寸俎板で見拔いたれど、我が弟子の庄太郎が、政右衛門といふ事を、知つたはやうやくたつた今。骨柄といひ手練といひ、天晴れ股五郎が片腕にせんものと、頼めば早速承知しながら、股五郎が在家を、根を押して聞きたがるは、しや心得ずと思ひしが、子を一抉りに刺し殺し、立派に云ひ放した目の内に、一滴浮かむ涙の色。隱しても隱されぬ、肉身の恩愛に、初めてそれと悟りしぞよ。澤井にきせる恩はなけれど、娘お袖を城五郎方へ奉公にやつた時、筋目ある人の娘、末々は我が

一家の股五郎と娶合せん、オヽ如何にもお頼み申すと、ツィ云つた一言が、今さら引かれぬ因果の緣。その後、娘めは奉公引いて、歸りしかど、いま落目になつた股五郎、見放されぬは侍ひの義理。匿まふ幸兵衛、狙ふは我が弟子。惡人に組みしてくれと頼むに引かれず、現在我が子を一思ひに殺したは、劍術無双の政右衛門、手ほどきのこの師匠への云ひ譯。さりとては、過分なぞや。この志しに感じ入り、敵の肩持つ片意地も、最早これぎり、只の百姓。町人も侍ひも、變らぬものは子の可愛さ。

ト母親はこれを見て

つや　サア、こなたは男の諦らめもあらうが、思ひ合はすは、最前ちらりと見た順禮の、母御の心が察しやらる事わいなう。

〽悔めば門に堪へかねて、わつと泣き聲門よりも、明ける戸、直ぐにまろび入り、敢へなき死骸を抱き上げて。

ト堪え居たりしお谷、この時、走り入り、死骸を抱き取り

たに　コレ巳之助、物云うてたも。母ぢやわいの〳〵。昨夜までも今朝までも、憂い辛いその中にも、手打ちしたり憂づくし、父御によう似た顏見せて、自慢せうと樂しんだもの。逢ふと其まゝ、刺し殺す、むごらしい父さんを、恨むにも恨まれぬ。前世にどんな罪なして、侍ひの子には生れしぞ。こんな事なら先刻の時、わしが死んだら、この悲しみは見まいもの。佛のお慈悲あるならば、今一度生れ返つて、乳呑んでたもいのう。

〽庭に轉びつ這ひ廻り、抱き締めたる我れが身も、雪と消ゆべき風情なり。

トいろ〳〵あつて泣き伏す。皆々も、愁ひの思ひ入れ。政右衛門、キツとなり

政右　ヤア、悴が死したゆゑにこそ、實父の敵の行くへもそれと。

志津　イカサマ……この上は包まんやうはなし。察しの通り某こそ、和田志津馬、とても事に敵の在所を。

幸兵　何がさて、此方に隱しはせぬ。有やうは、この幸兵衛最前庄屋へ呼ばれた時、股五郎に逢うて來た。

志津　すりや、敵は庄屋方に……ソレ。

ト刀を押取り、其まゝ駈け出す。

政右　ヤレ待て志津馬。愚か〳〵、我れ〳〵爰にありと聞き、暫時もこの地に足を留めうか。早五六里行き過ぎ

て、もう此あたりに敵は居ぬ。尙行く先も用心して、海道筋はもう行くまい。道を替へて落ちたと見える……先生、なんと左樣でござらうな。

幸兵　シタリ、黑屋、その通り。とても非道の股五郎、天道の御罰にて、どうで討たるゝものなれども、この岡崎にて勝負すれば、肩持たねばならぬ幸兵衞。藥師堂の山越しに、中仙道へ落したは、城五郎どのゝ緣もこれまで、思はぬ手段が緣になり、志津馬どのと云ひ交した、娘が身の果。ナウお婆。

つや　サア、喜んでした祝言が、ひよんな事やら不便やら。

　トこの時、奧にて

そで　その色直しの曠小袖、似合うたかいな、見て下さんせ。

　ト合ひ方になり、奧よりお袖、切り髮、白き振り袖の身を脫ぎ、袈裟を掛け、水晶の珠數を持つて出て來る。

志津　ヤ、その姿は。

幸兵　オヽ、出かした。惡人の股五郎に、假にも女房と名の付いた、その間違ひが、其方が不運。

つや　可哀や盛りの黑髮を、ようマア、思ひ

そで　アヽモシ、何にも申しませぬ。顏は見ねども云ひ號け、男持つのがうるさゝに、屋敷を戾つたその時から、尼になる氣で袈裟衣、今日一日に氣が變り、染めちがうたら鐵漿つけも、元の白齒と墨染めに、染め直しても剃がしても、思ひ染めたら煩惱の、心は剝げぬ佛さま。お免しなされて下さりませ。

　ト思ひ入れ。

〽おゆるされてと身を背け、泣かぬ氣を泣く親心、

　ト幸兵衞も母も思ひ入れ。此うち、政右衞門も、愁ひのこなし。

政右　股五郎にも志津馬にも、緣を離れたお袖道心。袖振り合ふも他生の緣。

　トお袖へこなし。

たに　ほんに、丁度子に別れた、順禮に、菩提の道連れ。

幸兵　それ〳〵、幸ひ關役人の我が娘、關所々々も切手いらず、中仙道への案內者。

志津　イザ、この上は直ぐさま出立。

政右　オヽ、サ、後よりぼッつき敵討。

たに　サア、道の案內を。

そこで　父さん、母さん。

ト共々に立ち上がる。

つや　ヤレ……一度は迷ひし色の道。

幸兵　未來の契り鉦撞木。

〽涙で渡す父母の、惠みも深き觀世音。

ト幸兵衛、鉦撞木を、お袖に渡す。母は抱子の死骸を抱き上げ、皆々愁ひのこなし。

皆々　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀。

〽我が子は冥途の道しるべ、志津馬唐木も恥合うて、悄れぬ表へ武士の禮。

トお袖先に、お谷、志津馬、門口外へ出かける。

政右　然らば先生。

ト辭儀して、續いて出ようとする。

幸兵　イヤ、師弟は内證。

志津　敵同士。

幸兵　此まゝ歸るは卑怯者。

〽返せと一聲切りつけるを、てうと受けたる半蓋の、下荷ほぐれて忍びし眼八。

ト政右衛門、有り合ふ明荷にて受けとめる。その間に下の明荷より、以前の眼八出て

眼八　政右衛門、志津馬、この通りを。

ト駈け出すを透かさず、政右衛門、引ッ捕へる。また切つてくる幸兵衛に突きつける。幸兵衛、直ぐに眼八を袈裟に切る。お袖、これを見て

そで　アヤ、こりや、あの眼八を。

幸兵　まつ此やうに。

ト頤にて向うへこなし。志津馬、お谷、お袖の三人

三人　股五郎を。

政右　ア、コレ。

ト制すはずみに手を放す。眼八、ばつたり、これと一時に、政右衛門、下に居るを、チョンと木の頭。

先生、まだ手の内は、狂ひませぬなア。

ト幸兵衛へ思ひ入れ。幸兵衛、につたり思ひ入れ。皆皆も思ひ入れよろしく、

拍子幕

大詰

伊賀上野敵討の場

役名　唐木政右衛門。和田志津馬。深井股五郎。櫻井林左衛門。柘榴武助。海田一角。池添孫

八。

本舞臺、三間の間、一面の板松の並木、上下、藪疊松の吊り枝、すべて伊賀の上野海道の體。時の鐘、鷄笛、馬士唄にて、よろしく幕明く。

ト矢張り右鳴り物にて、向うよりと下座より、口々より、旅人の仕出し、思ひ〳〵、大勢出て、入り違ひ入る。向うより雲助二人、菰包みの長持を擔ぎ、後より雲助一人、糸立包みの數鎗を大分擔ぎ、この後より又一人、雨掛け荷物擔ぎ、いづれも荷物に相良荷物と記せし札を打ちつけある。これに侍ひ二人、中間二人、皆々捨ぜりふにて、舞臺へ來り、いづれも息杖を入れて休む事あつて

雲一 なんとみんなや、昨夜伏見の白木屋へお泊りの、この荷物の旦那衆、きつい大もてだの。

雲二 それ〳〵、あのやうに、錢を遣つて道中したら、面白からうの。

雲三 併し合點がいかぬは、九州の相良へござるに、この伊賀越へかゝらつしやるは。

侍ひ それは斯うぢや。本當は大坂へかゝるが順當道なれど、差合ひがあるゆゑ、志州鳥羽からお船ぢやて。

雲一 これはひどい船廻しだの。

侍ひ 物云はずと急げ〳〵。

皆々 合點だ〳〵。

ト右鳴り物にて、この人數、上手へ入る。矢張り右鳴り物にて、政右衛門、野袴、ぶッ裂き、大小の拵らへ。志津馬も、同じ拵らへ。この後より武助、孫八、下部の拵らへ、一本差しにて、いづれも旅形にて出て、直ぐに舞臺へ來り

政右 只今の先供は、敵の荷物。大坂へ出られては、手廣にして難儀ゆゑ、某、聊か計略を廻らし見るところ、案の如く、昨夜、伏見泊りより、鳥羽へ赴かんと、この伊賀路へかゝる上は、最早手に入る袋の鼠。

志津 多年の本懷達する今この時。例へ股五郎、天地に隱るゝ術ありとも

武助 數ならねども柘植武助。

孫八 池添孫八、我れ〳〵が太刀と命の續かんだけ

武助 兼ねて期したる今日只今。

孫八 切つて切り死、御用意々々々。

政右 ヤア、仰々しい。兼ねて股五郎には、數多附き人あれば、孫八武助は我れ〳〵に構はず、志津馬に附き添

ひ邪魔する奴等を切り拂ひ、股五郎と心よく勝負せよ。目ざす敵は只一人。例へ助太刀何百何十ありとても、何程の事あらん。安堵おしやれ。

トこの時、向うにて、長持ち唄聞える。皆々これを聞いて

武孫　ヤ、あの同勢は。

志津　正しく敵の。

ト三人キッとなる。

政右　ヤレ早まるな。心靜かに、用意々々。

三人　心得申した。

ト政右衞門、制して四人とも、上手へ入る。馬士唄、風の音になる。向うより櫻井林左衞門、野袴、ぶッ裂き羽織、大小の旅形、葛籠馬に乘り、これを馬士、口を取り、後より股五郎、馬に乘り、同じ拵らへ。海田一角附き、鎗持ち奴、旅形にて若黨四人、旅形にて、いづれも出て來り、花道にて

股五　林左衞門どのは格別、諸士の方々、長の道中お見送りの段、忝なう存じまする。

林左　兼ねては、昨夜の伏見泊りより、大坂へ出るが順道なれど、彼の奴等が、網を張つて居るであらうが、恐れはたけれど、七面倒さ。引違へて、鳥羽よりの乘船いたし、政右衞門めに泡吹かせうも亦一興。

一角　何にサ〳〵、その海田一角、見送りの爲附き添へば、ちと政右衞門や志津馬めに、出逢つて見たい。

馬士　股樣、物云ひがいさくさなら、どの海道でも通りものゝ馬士だ。大丈夫に思つて、乘つて行かつしやい。

同　旦那方の肩を持つて、働らきを見せたうごんす。

侍ひ　下樣と姿をやつす我れ〳〵も

同　一流を極めし途中の警固。

同　お氣遣ひはござりませぬ。

股五　イカサマ、頼もしき御方々。これも一重に海田のお庇。

一角　お禮は相良で。サヽ、急ぎませう〳〵。

ト右鳴り物にて、皆々、本舞臺へ來る。下座より、以前の志津馬、政右衞門、武助、孫八、いづれも敵討の拵らへになり、出て立ちさがり

志津　ヤア、これへ來るは、澤井股五郎と見たは僻目か。先年汝が手にかけし、和田行家が一子志津馬。

武助　同じく、家來栢樫武助。

孫八　池添孫八。
志津　先刻より待ちうけたり。サア、尋常に
三人　勝負なせ。
股五　ヤ、、、上坂と思ひし汝等が
侍ひ　すりや、騙かられたか。
兩人　口惜しい。
　ト附き添ふ皆々、キッとこなし。
政右　ホ、オ、久しや櫻井林左衛門。この所へ引き出した
　は某が計略。郡山にて、偽はりの勝を讓りしも、誠の
　勝負は今日に對する胸中。サア、覺悟なせ。
股五　斯くなる上は是非に及ばぬ。
林左　警固いづれも。
皆々　心得ました。
　ト志津馬、武助、孫八の三人
三人　何を小癪な。
　ト股五郎、林左衛門、上より飛び下り、直ぐにドン／＼
　になり、奴が持ちし鎗を取つて突きかける。皆々、入
　り亂れの戰ひになる。志津馬は股五郎と立廻りなが
　ら下手へ入る。政右衛門、大勢を下手へ、立廻りなが
　ら追ひ込む。武助は馬士方雲助などを相手にして立廻
　りちよつとあつて、この人數を、向うへ追ひ込む。入
　る。ト、孫八は、鑓持ちの四人と立廻り。大太鼓入
　り鳴り物にて、好みの立廻りあるべし。ト、この人
　數を双方へ切り散らし、行きかける。後より馬士、打
　つてかゝるを、心得て、早き立廻りにて、馬士を切り
　倒し、孫八、この上に馬乘りにて、止めを刺し、上手
　へ入る。ドン／＼にて、板松を上下へ引いて取り、黒
　幕、切つて落す。
　本舞臺、三間の間、上野入口、喰ひ違ひの土手、誂
　らへの通り。後ろ黒幕、松の立ち木、吊り枝、この道
　具よろゝく。爰に政右衛門、以前の四人の侍ひ、鑓襖
　にて取卷いて居る。上の方に林左衛門、身拵らへし
　て詰めかけてゐる見得。ドン／＼にて道具納まる。
林左　政右衛門一人討ち取れば、後の奴等は氣遣ひない。
　働らけ／＼。
政右　何を小癪な。
　ト鑓を制れる。また突きかける。政右衛門、始終、無
　刀のあしらひ。どつこいと好みの鳴り物になり、四人
　手を負ひ倒れる。林左衛門、透かさず鑓にて突きかけ

るを、政右衛門、鑓を奪ひ取り捨てる。林左衛門、刀を抜いて切りつけるを、ちよつと立廻り、この刀を取つて、林左衛門を切り倒す。また四人は起き上がりてかゝるを、政右衛門、これを追ひ、下手へ入る。ドンドンのあしらひ。チヨン／＼と、正面の黒幕を切つて落す。

本舞臺、一面の打抜き、城の遠見。上下の前遮りは、以前の喰ひ違ひ。松並木。土手は殘りある。好みの通り。ドン／＼にて納まる。

ト直ぐに鳴り物、カケリになり、股五郎、志津馬、以前のまゝ、立廻りながら、向うより出て、花道にて、ちよつと立廻り、とまり

志津　ヤア、卑怯なり股五郎、いづく／＼へ逃げる。逃がさうか。

股五　卑怯とは事をかしや。返り討だ。觀念なせ。

トまた切り結びながら、舞臺へ來り、鳴り物變つて、立廻りあつて、どつこいとゝまると、下座より政右衛門先に、孫八、武助、拔刀引提げ、走り出て來り

政右　加勢は殘らず討取つたり。殘るは其奴たゞ一人。心勇んで。

孫武　勝負々々。

ト三人詰めかける。これにて股五郎ひるむ。志津馬、附け入り、烈しくあつて、トゞ、股五郎を一かせ切りつける。これにて武助、孫八も、一かせづゝ切りつける。トゞ、三人、股五郎が腹へ突ッ込みキッと見得。政右衛門、詰め寄り居る。

志津　父の敵。

政右　舅の仇。

武孫　主人の恨み

四人　思ひ知つたか。

ト四人して股五郎を切り倒し、のしかゝつて止めを刺す事。

政右　今ぞ本望、めでたい／＼。

ト双方ともよろしき見得。正面より、日の出引出す。一セイ風の音、鷄笛にて

先づ今日はこれぎり。

伊賀越道中双六（終り）

「伊賀越」書替へ狂言

伊賀越乗掛合羽　志賀の敵討　柳生流伊賀水月

敵討上野譽　日本晴伊賀報讐　花卯木伊賀兩刀

初紅葉二樹仇討　取雜石碁盡　敵討劍組帶

魁駒曾我道双六　花摘籠五十三驛　鶴亀荒木新舞臺

茜染野中の隱井



大正七年明治座所演舞臺圖

嵐吉三郎の山兵衛　市川小太夫の長吉　坂東秀調の小梅

茜染野中の隱井

序幕　左内屋敷の場

役名——唐琴左内。同女房、お蘭。同妹、お吉。三上團平次。内田伴七。古手屋三婦。妻木勝次郎。妻木勝之進。

造り物、二重舞臺、向う一面の金襖、下座の方障子屋體。よき所に床の間、手水鉢植込みなどよろしく、幕の内より二重舞臺に、三上團平次、妻木勝次郎、着附け麻裃にて煙草盆控へ居る。平舞臺には、唐琴左内、襷がけ、股立ちにて、新身の刀を構へて居る。奴一人、手桶の水をかけて居る。片脇に二つ胴の死骸あり、この見得、白囃子にて幕開く。と直ぐに刀を清め、鞘に納める。團平次こなしあつて

團平　ホヽウ、天晴れなるお手の内。當國伊豫の城主、主人松江修理太夫さま、將軍家へ御獻上に、凌木藤四郎の刀お求めなされ、切れ味を糺さん爲、死の罪に極まる科人を試し見よと、貴殿へ仰せつけられ、今日我れ〳〵檢分の役目。すつぱりと二つ胴の心よさ。見物いたして大儀大儀。

左内　成る程、團平次さまの御意の通り、仰せを蒙むつて、身が屋敷で試し者。御覽の如く、いと易き切れ味。手の内ならぬ天晴れの名作。

勝次　御意の通り、お刀も業物なれども、御手練の程、憚りながら、驚き入りましてござりまする。

左内　これは〳〵御挨拶。

勝次　イザ、先づ、御休息あられませう。

左内　ソレ、下部ども、死骸片附けい。

奴　ナイ。

ト奴皆々、死骸片附ける。左内、右の刀を床の間へ直し、姿を繕ろひ、座に直る。此うち奥より、お蘭、裲襠衣裳にて出て來て手をつかへ

らん　これは〳〵、お二方樣、未明よりのお役目、御苦勞に存じまする。

勝次　これは御叮嚀なるお詞。我れ〳〵よりは左内さまの御大役、あなたにもさぞお心遣ひでござりませう。

らん　イヤ、モウ、御推量下さりませ。

團平　イヤナニ、奥方、今日はお庭の穢れ御厄介。併し、お刀の切れ味明白いたして、大悦に存ずる。さて、喜び次手にお話し申さう。御存じの通り、拙者無妻で居れば、左内どのゝお妹御、お吉どのを女房に申し請けたき兼ねての存念。幸ひ今日は日柄もよし、お蘭どのへ、よろしく頼み存じまする。

らん　ホヽヽ。これはマア、思ひも依らぬお詞。縁組みは互ひの縁、お吉さまの心入れ、誰れと女夫になりたいと思うてござるやら。

　ト勝次郎へこなしあつて云ふ。

早速お請けは、申し憎うござりまする。

團平　ムウ、こりや御尤も。併し、斯う云ひ出したらば武士の意地。お吉どのゝ心にも、どうやらの色取り男めに、ぴらしやらと舌たるい互ひの目遣ひ。見る度毎に、むか〳〵と腹が立つわい。

　ト勝次郎へこなし。

らん　イヤ、申し、そりや何を仰しやりますえ。

團平　イヤ、これは。

らん　なんでござりまする。

團平　サア、これは。それ〳〵、法界悋氣の下稽古仕る。イヤナニ、左内どの、斯やうに申すも妹御を、申し請けたいばかり。サ、御得心の返答が、承はりたう存じまする。

左内　ハヽヽ、如何にお若いと申して、辨まへもなき御一言。

團平　辨まへがないとはな。

左内　されば、今日は大切な殿の御用、貴殿は檢分の役目でないか。それになんぞや私用の取沙汰、辨まへがないと申すが、誤りてござるかな。

團平　イヤ、その儀は。

左内　内談は追つての事。刀の試み相濟む上は、勝次郎どのゝ御舍兄、勝之進どの、午の上刻に刀受取りにお越しあれば、御兩所とも暫らく奥へ。

勝次　兄の入來に間もあるまじ。

らん　それまでは御酒一獻。

團平　お心遣ひは必らず御無用。

左内　然らば此まゝ、御兩所とも。

團平　御案内、頼み存ずる。

左内　イザ、お越しあられませう。

　ト唄になり、團平次先に、勝次郎、左内、おらんも附き、皆々、奥へ入る。こなたの一間より、お吉、出て來て

きち　今日は刀の御用につき、勝次郎さまのお越し。好き首尾を見て思ひの丈を。さりながら、憎てらしい團平次面が、附けつ廻しつ。好い事には寸善尺魔と、ほんに辛氣な事ではあるぞ。

　トこなし。此うち、奥より、勝次郎、出て

勝次　そこにお居やるは、お吉どのではないか。

きち　勝次郎さま、逢ひたかつたわいなア。この間は、とんと便りもなく、どうぞお顔が見たいと思へど、法度嚴しい屋敷の内。今日は殿樣のお刀を、お試しなされた上、お求めなさるゝ時は、おめでたがあるとの事。その時は兄樣に願うて。

勝次　サア、わしも逢ひたく思うたれど、何がこの間はお刀の儀につき、御用繁きゆゑ、よう來なんだ。シタガ、其方も、わしも御法度の不義した事が、ひよつと知れたら、どうせうと思うて見ると……ア、、イヤ、マア、左内どの御夫婦に、お願ひ申して見や。御得心あつた上では、ハテ、誰れ憚る事もなう。

きち　イエ〳〵、よい手な事云はしやんせ。今お前の云はしやんすは、お前とわたしと不義した事が、知れたらどうさしやんすえ。

勝次　どうと云うては、其方の心次第。

きち　何を噓ばかり。互ひに變るな變るまいと、堅ういひ交し、コレ、見やしやんせ。

　ト守り袋より起請を出し

取交したこの起請。お前は大方、捨てゝしまはしやんしたであらうなア。

勝次　どうしていの。

きち　この間から久しう逢はぬうち、どうで外に、なんぞ面白い事があつてゞござんせう。

　トぴんとする。

勝次　エヽ、白々しい。いま奥で聞けば、團平次が貰ひかけで居るげな。また左内どのも御得心かして、長話しがあつた。どうでこちらは表へ出ぬもの……イヤ、追ツつけ輿入れの御祝儀、申し入れませうわい。

きち　コレイナア。味いな事云はしやんす。もし兄樣やお

蘭さまが、合點さしやんして、團平次と女夫になれと云はしやんして、わしがアイと云うたらば、どうさしやんす。

勝次　ハテ、話しが極まらば、團平次さまの奥樣に違ひない事。ハイ、おめでたうござります。

きち　エヽ、穢らはしい。そんな事云うて下さんすな。わしやそんな事知らぬわいなア。お前より外、餘の殿御は。

勝次　コレ、聲が高いわいの。

きち　高うても大事ござんせん。

勝次　さりとては、奥へ聞える。これか知れたら互ひの身の上。云ふ事があるなら靜かに云やいの。

きち　イエ／＼、譯立てにや措かぬ／＼。

ト縋りつく。

勝次　これは又、人が見たら爲にならぬ。爰放しや。

ト此せりふのうち、團平次、立聞して居る。

きち　イエ／＼、なんぢやら、いろ／＼の覺えもない事云はしやんすに依つて、わしがみだらな事するかせんか、お前に證據でも見せうわいな。シタガ、其やうに云はしやんすは、どうでも奥樣が出來たのぢやな。サア、どこの女中とぢや。有やうに云はしやんせ／＼。

ト此の時、團平次、そろ／＼出る。

勝次　これは又無理な。マア／＼、爰放しや。

きち　イエ／＼、放さぬ／＼。

トいろ／＼あつて勝次郎、振り切り入る。とお吉、團平次を捉へて

サア、有やうに云はしやんせ。こな樣は／＼。

ト振り廻す。

團平　お吉、こりや、どう召さる。

トお吉、顏見て

きち　團平次さま。

ト逃げようとする。

團平　どこへ行くのぢや。

きち　エヽ、放していなア。

團平　イヤ、放さぬ。窮鳥懷に入る時は、狩人もこれを見捨ぬと云ふ譬へ。其方からお出では天の與へ。日頃の本望。返事はどうぢや／＼。

きち　お嗜なみなされませ。お前も堅い顏してござつてから、アタ嫌らしい。そこ退いて下さんせいな。

團平　イヤ、退かぬ。人が默つて立つて居る所へ來て、何

ゆゑに抱きついた。
きち　そりや人達へぢやわいなア。
團平　誰れと人達へぢや。
きち　それはな。
團平　人達へなら、その人達への仁を聞きたい。
ト引寄せて抱きつく。
きち　そんな事は存じませぬわいなア。
ト突き退けて逃げ歩くを追ひ廻す。よき所にて、お蘭、花盆に花を載せ持ち出る。團平次、抱きつき、顔を見て慴り。
團平　左內どのゝ御內室。
らん　團平次さま。
きち　オヽ、お蘭さま、よい所へ。先刻にからわたしを提へて。
らん　サア、よいわいな。幸ひの所へ、お吉さま。御上使お成りの座敷。この花は御苦勞ながら。
きち　滅相な事仰しやりまする。不束なわたしが、マア。
らん　なんのマア、大事ござりませぬ。手活けの花と床の間に、ナ、この菖蒲の、引きぞわづらふと、みだらな五月雨がな。それぢやに依つて、早う床の間へ、久し振りで花を見たり見せたり、心を和らげたがよからうぞえ。
きち　アイ〳〵。そんなら床の間に。
ト花活けを取り
この花でお心を和らげなさるゝやうに。
らん　それ〳〵、早う床の間に。
きち　アイ〳〵。そんなら團平次さま、これで御緩りと、お心をお和らげなされませ。
トお吉、奥へ入る。
團平　お和らげどころか、紫色にしやき張つてある。ハ、ハ、。イヤナニ、お蘭どの、こなたの手前も面目なけれど、あのお吉は、モウ〳〵、どうも斯うもならぬ程。
らん　お前様が
團平　サア、首丈と云はうか、根からずつぷりと。
らん　見かけには依らぬものでござりますなア。
團平　時に人を頼み、文を遣はすけれど、今に一度の返事もえゝしませぬぢや。
らん　それでわたしに、お頼みなさるゝのかえ。
團平　サア、そこは同家中のよしみ。こなたのお世話を以て、何卒拙者が妻に申し請けたいぢや。奥方、戀も情けも御存じの上の事。どうぞ其許のお世話を以て。

ト此うちお蘭、ソッと奧へ入る。と三婦、旅姿にて出て來る。これを知らず
色よき返事でも致しくれますやう、偏へにお賴み申し上げます。
三婦　申し、團平次さまぢやござりませんか。
團平　サア、たつた一度の契りでも。心を和らげ下されうならば、弓矢八幡刀冥利。
三婦　申し、團平次さまぢやござりやせぬかいな。
團平　これ程慕ふ心を、哀れ不便と思し召し。
三婦　エヽ、コレ、申し、團平次さま。
ト大きな聲で云ふ。
團平　オヽ、そちや古手屋の三婦。
三婦　お前たつた一人、何云うてぢやいな。
ト團平次あたりを見て
團平　南無三、外されたか。エヽ、忌々しい。
ト落ちてある起證を拾ひ、ムッと思ひ入れあつて懷中する。
三婦　なんのこつちやいな。嗜なましやりませ〳〵。
團平　イヤ、モウ、面目次第もない。何は然れ、其方も無事で重疊。

三婦　イヤ、モウ、達者でなけりやア、それも取れぬぢやが、團平次さま、覺えてござりまするか。
團平　成る程、浪人の節は、萬事世話にあづかり、當所の屋敷へ去年ありつき、早速書狀と存じて居る所に、何が殿の御用繁きゆゑ、彼れこれと延引のうち
三婦　アヽ、コレ〳〵、長口上聞きたうない。其許のお宅へ參つたれば、爰へお出でと聞いたゆゑ、尋ねて來た。コレ、浪人の間の世話は勿論、當所へありつく身の廻り仕拵らへから飯代かけ、積り上げた所が小判で丁度六十兩。早速渡そと云ふ約束を、一年經つても便宜もせず、暑さ忘れりや蔭忘るゝと、義理をかけても濟みまするか。あんまりむか〳〵するゆゑに、長道中抱へて金受取りに來たのぢや。コレ、そんなで行く三婦ぢやない。サア、金受取らう。どうでごんすな。
團平　サヽ、重々尤も。ありつき次第、金子戾さうと、拵らへたところ、彼れこれと延引。その段は眞平眞平。とても事に今暫らく。
三婦　アヽ、コレ〳〵、なりませぬ。待つ氣なら、なんの爲はるばるの大坂から、路銀を使うて來るもので。もう半日も待たれませぬぞ。

團平　サア、そこをどうぞ。
三婦　エヽ、しつこい。ならぬわいの。
團平　スリヤ、どうあつても。
三婦　くどい。
團平　ムウ。
　ト思案して、床の間の刀箱に目を附け、思ひ入れあつて
成る程、立腹の上なれば、まんざら素手でも待たされまい。
三婦　知れた事いの。
團平　ぢやに依つて抵當を渡そ。
三婦　して、その代物は。
團平　アレ、あの床の間に、萬兩にもなる代物、金の代りに其方に渡さう。
三婦　面白い。暫しの似せ物。
團平　あたりへ心。
三婦　合點ぢや／＼。
　ト此うち奥にて、人音するゆゑ、兩人恟りして囁き合ひ、柴垣へ隱れる。奥より、勝次郎、走り出るを、お吉、追ひかけ出て引きとめ

きち　待たしやんせ、勝次郎さま。お前はそれで濟みますかいなア。
勝次　サア、濟むも濟まぬも、團平次が貰ひかけ、左内どの御得心なら、嫁入りせねばなるまいがの。さすれば互ひに益なき事ぢやに依つて、緣を切るのが勝次郎が誤りか。
きち　又そんな事を云はしやんす。なんぼ兄さんが得心さしやんしても、わたしが嫌でござんす。アイ、金輪際嫌ぢやわいなア。
勝次　でも、兄親の詞は背かれまい。
きち　イヽエ、背きまする。
勝次　ヤア。
きち　背くも皆お前ゆゑ。互ひに變るな變らじと、誓ひを立てしわたしが起請、書いて置いたを見やしやんせ。外へ嫁入りする氣はない。又この上にも疑ひ晴れずば、いつそお前の手にかけて、殺して下さんせ。わしや死にたいわいな／＼。
　ト泣く。勝次郎、思ひ入れあつて
勝次　もうよい。泣きやんな。さう云ふ心底見た上は、疑ひ晴れた。堪忍しや。

きち　そんならアノ、疑ひ晴れたかえ。
勝次　これが晴れいで、なんとせうぞいの。
きち　エ、、嬉しうござんす。と云ふもの丶、餘り腹が立つたゆゑ、どうやら痞へが。
勝次　幸ひ藥はこの印籠。
　ト手をかけるを留めて
きち　イエ／＼、藥では癒らぬ／＼。
勝次　ぢやと云うて、外に仕やうは。
きち　ハテ、お前の苦手で擦つて欲しい。
勝次　ヤ。
きち　幸ひのあの茶の間。
勝次　滅相な。それがマア。
きち　そんなら嫌かえ。
勝次　嫌ではなけれど。
きち　なけれどならば。
勝次　これは迷惑。
きち　ハテ、ござんせいなア。
　ト唄になり、お吉、恥かしさうに、勝次郎が手を引き、兩人こなしあつて障子屋體へ入る。と柴垣より、團平次、三婦、窺ひ出て、お吉が起證を取上げ

團平　こりや、お吉が起證、
三婦　それを持つて。
團平　コレヤ。
　ト押へる。始終合ひ方。三婦あたりへ心を附ける。團平次は床の間の刀箱より刀を出し、そろ／＼とこなたへ來て
　いま小蔭で話した通り、男氣見込み、萬事は其方を頼むぞよ。
　ト右の刀を渡す。三婦、受取つて
三婦　成る程、値打のある代物。呑み込んで持つて歸りませう。違はぬ證據は、それ／＼。
　ト腰の矢立を取出し、一札を書いて、團平次に渡す。
團平　なんぢや一札の事。一つ、凌木藤四郎の刀一腰、慥かに受取り、大坂にて賣り拂ひ申す可く候、月日、三上團平次さま、古手屋三婦……これは。
三婦　ハテ、念の爲、その受取り。
團平　イヤ、チウ、これには及ばぬ事。併し、互ひの念の爲なれば、宛名の所は要らぬもの。
　ト引裂き捨て
　これで、やう／＼。人の見ぬ間に、早う歸りやれ。

ト懷中する。三婦こなしあつて。
三婦　然らば、これより直ぐにお暇。
團平　首尾なり次第に早速狀通。
三婦　心得ました。
團平　便りを待つぞよ。
三婦　ドリヤお暇申さうか。
ト唄になり、三婦、右の刀を持つて、向うへ入る。團平次、後を見送り
團平　これで心が落ちついた。曩の意趣ある勝次郎、このお吉が起證を以て。
トこなしあつて
巧い〳〵。
ト向うより
呼び　御上使。
團平　上使と云ふは、勝次郎が兄、勝之進。刀の紛失、この起證を證據に。ムウ。
ト思ひ入れあつて
何れも、御上使とござる。お出迎ひなされい。
ト奥より、左內、お蘭、侍ひ、皆々、出て
左內　團平次どの、御上使のお入りとな。ソレ、皆無禮のなきやうに致せ。
ト皆々並び
皆々　御上使これへ、お通りあられませう。
ト太鼓謠になり、勝之進、衣裳麻裃。內田伴七衣裳麻裃。家來大勢連れ、花道よき所にてとまり
團平　內田伴七どの。
皆々　お役目、御苦勞に存じまする。
勝之　これは何れも、お出迎ひ御苦勞千萬。今日は殿の名代として、これなる伴七どのを始め、伺候仕つてござります。
伴七　上使でござれは、上座御免下されい。
皆々　先づあれへ、お通り下さりませう。
ト矢張り太鼓謠ひにて、本舞臺へ通り、上座へ直る。皆々並よく並ぶ。と太鼓謠打ち上げる。
勝之　左內どの、貴殿にも今日は、大切なるお役目、御苦勞に存ずる。して、お刀の切れ味はな。
左內　イヤ、モウ、二つ胴は草を薙ぐより心安く、鋭き金味、天晴れの名作でござりまする。
勝之　それは重疊。定めて殿にもお喜びでござらう。
伴七　左やうでござる。莫耶が劍も持ち手に依ると、秘藏

ある殿のお道具。例へ左内どのがお役目を蒙むらしやれいでも、太守の御威光ばかりでも、二つ胴は愚か、鐵の柵でも、獨りと切れる道理でござる。

團平　成る程、內田どのゝ御意の通り、すつぱりとした切れ味も、刀の正銘、拙者も大悅に存じまする。

らん　イヤ、申し、團平次さま、最前より聞きますれば、なんとやら左內どのゝ譽れを、さみるゝやうなお詞。

左内　コリヤ／＼、そりや何を云ふ。御上使の前とも憚らず、控へて居いサ。

らん　それでも。

左内　ハテサテ、控へい。ハ、、、。イヤ、御兩所樣には御退屈にもござりませう。ソレ、お茶でも申しつけやれ。

勝之　イヤ／＼、それは御無用に存ずる。何は然れ、合點參らぬは、弟勝次郎も同役なるに、この座席に何ゆゑ居りませぬな。

團平　イヤ／＼、勝之進さま、御舍弟勝次郎どのは、御出精でござる。づんと出勤はお堅い。きついものでござるて。

らん　左樣でござりまする。團平次さまの仰しやる通り、お堅いお勤めなれど、ちと只今は內用がござりまして。

伴七　ム、。なんと云はつしやる。內用があるとな。今日のお役目は、私しの計らひではござらぬに、なんぢや、內用がある。勝之進どのは御舍弟の儀であれば、兎もあれ、斯く申す拙者へは無禮至極。例へ兄弟たりとも、上使に立つは殿樣も同然。ハテ、御出精でござるよなア。

團平　イカサマ、さう見えます。何は兎もあれ、刀受取り渡しの刻限も怠る。イザ、左內どの、お刀お渡しなされい。

左內　成る程。大切なるお刀、勝之進どの、お受取り下されい。

勝之　急いでこれへ。

左內　ハツ。

ト床の間の刀箱を持つて來て

念の爲でござれば、改めてお渡し申す。

勝之　御尤も。

ト此うち、左內、刀箱の蓋を取り、恟りして

左內　ヤア、こりや、コレ、刀が。

伴七　刀が、なんと致した。

らん　どう致しましてござりまする。

左內　イヤサ、大切な刀が。
團平　ナ、、なんと致した。
ト左內、思ひ入れあつて
左內　紛失仕つてござります。
らん　エ、、、、。
ト驚ろく。
勝之　ナニ、刀が紛失とな。
ト左內、いろ／＼あつて
左內　ホイ。
ト當惑顏。團平次、仕濟まし顏にて
團平　イヤサ、コレ、左內どの、大切のお刀、紛失とばかりでは濟みますまい。箱のあつたはこの床の間。
ト起請を見附け、こなしあつて
何れも、喜び召され。詮議の手がゝりがござるぞ。
三人　ナニ、手がゝりとは。
團平　刀の盜賊は知れましたぞ。
左內　ムウ。して、その盜賊は何者。
團平　オヽ、盜賊を捕へて見れば我が子なりと、貴殿の妹お吉と、勝之進どの、こなたの舍弟勝次郎と、兩人に極まりました。

勝之　ヤア、大切なる一言、身が弟勝次郎。
左內　拙者が妹お吉、兩人を盜賊とは、なんぞ慥かな。
兩人　證據があるか。
團平　オヽ、その證據は慥かな事。次手に盜賊御覧に入れん。
ト障子屋體の內より、勝次郎、お吉が首筋引き出し、舞臺へ突き放す。皆々見て
勝之　ヤア、そちや弟勝次郎。
左內　妹お吉。
團平　なんと肝がひしげたか。ム、、ハ、、、。御法度の徒らかわき、臍で茶を炊く茶の間の出合ひ。不義者と云ひ刀の盜賊、兩人とも覺悟せい。
ト各々こなし。
勝次　顯るゝ上は是非に及ばぬ。さりながら、刀を盜みし覺えなきに、何を以て盜賊とは。
團平　ヤア、盜人猛々しい。その證據はこの起請。
ト懷中より取出す。お吉見て。
きち　ア、、コレ、それを。
ト寄るを、團平次、引きつけ
團平　イヤ、ほてくろしい文言。左內どの、これ讀んで見

さつしやれ。

ト左内が前へ抛りつける。

勝吉　ア、コレ、それは。

ト立ち寄る。お吉、勝次郎を、團平次引きつける。お蘭、左内こなしあつて一札を取上げ

左内　一札の事、一つ、湊木藤四郎の刀一腰、慥かに受取り、大坂にて賣り拂ひ申すべく候ふ。

團平　ヤア、それは。

左内　ムウ、宛名を破りしこの一通。

勝之　ハテ、變つた起證ぢやよなア。

團平　ア、イヤ、その一通が起證ともに、床の間でたつた今、拾うた歳の起證は、コレ、爰に。

トまた懐より出し

勝さま參る、吉より。

皆々　なんと。

團平　サア、コレ、この二通が床の間に落ちてあつた、慥かな證據。御法度の不義徒ら、刀を盜み路銀に當て、大坂へ馳ける企み。但し盜まぬと云ふには、なんぞ慥かな證據があるか。

きち　サア、それは。

皆々　サア〳〵。

團平　どうぢや。

トいろ〳〵あつて

左勝　ホイ。

ト勝之進、勝次郎が襟髪摑んで引寄せ、扇にて散々に打ち伏せ。

勝之　ヤイ、玆な不孝者めが。大切なる役目を受け、不義を働く不忠者。主人へ申し譯は、この場に於て身共が手討ち。

ト刀の柄に手をかくる。お吉留め

きち　マア〳〵、待つて下さりませ。元この起りはわたくしゆゑ。あなたに微塵も科はない。申し譯にはこのお吉を、ずた〳〵に切つてなりとも、勝次郎さまはお助けなされて下されませいなア。

伴七　ヤア、法度を背きし徒ら女、左内どの、妹とて容赦はなるまい。このお裁きが、見たい〳〵。

左内　成る程、伴七どの〻仰せの通り、憎き女め。併し、不義の政道糺す時は、團平次どの、貴殿も同罪。サア、尋常に覺悟召されい。

團平　ヤア、身を不義者とは何を以て。

左内　ハヽヽヽ、知るまいと思ふか。お吉へ其方が送りし艶書。女房が合點か。
らん　團平次どの、こなたが度々送りし濡文。あの子が兼ねてわたしへの話し。コレ、その文は爰にある。サア、これでも不義の詮議する氣か。
團平　サア、それは。
左内　眞二つにぶち放さうか。
らん　但しは文を讀み上げうか。
團平　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
左内　返答打ちやれサ。
らん　どうでござんす。
團平　サア、それは、なんぢやわい。われ〳〵、ほんの惚れた出來心。そんならよいわサ。不義の詮議は互ひに隱密。
らん　ちつとさうもござんすまい。
勝之　伴七どの、如何仕らうな。
伴七　不義は格別、殿御秘藏ありし刀の盗賊、生けて置かれぬ勝次郎。首お討ちなされい、勝之進どの。
左内　イヤ〳〵、伴七どの、證據になるべき一通も、宛名なければ、勝次郎と極りし事もない。刀の在所知れるまでは、殺す事も、マア、なるまいかと存じまする。
團平　ムウ、これや、理窟御尤も。然らば貴殿は、刀盗まれたゆゑの云ひ譯、腹なされずはなるまい。
勝之　ハテ、異な事の差出口。刀受取る役目は身共。但し貴殿のお役目かな。
團平　イヤサ、その儀は。
勝之　日延べの願ひ申し上げ、その間に刀詮議。要らざるお世話、御無用々々。
團平　ムウ。
ト行き詰る。
勝之　伴七どの、貴殿も相役の事なれば、お執成しお頼み申す。
伴七　なんの〳〵、其許の勝手に召され。
勝之　こりや、斯うありさうなものでござる。
ト左内、立ち上がり、お吉が小腕取つて舞臺へ突き出し。
左内　勘當ぢや。出てうせう。
きち　エヽ、すりや、わたしを御勘當。
ト思ひ入れあつて。

ハヽア。

ト泣き落す。お蘭、こなしあつて

らん　イヤ、申し、左内どの、不義の事さへ納まつたら、勘當には及ぶまい。こればつかりばどうぞ。

左内　ヤア、默れ。不義の科は遁がれても、刀の詮議にかかり合ひ。胡亂なるこの一札。吟味した上で不義の科、御前で露顯する時は、生けて置かれぬ二人が命。無事で納めて日延べの願ひ。この左内は閉門の身。されば刀の詮議とならず、女なれども我れに代り、大坂へ立越えて、刀を詮議し持參せい。その時こそは元の兄弟。ナア、合點行たか。

きち　アイ／＼。

左内　合點が行たら、立つてうせう。

ト兩人こなし。この時、勝之進、立ち上がり、勝次郎が大小を挽いで二重舞臺より突き落す。

勝之　勘當ぢや。立つてうせう。

勝次　そりや、私しも御勘當とな。

勝之　同じ科なるこの場の仕儀。いま左内どの、仰せの通り、證據になるべきあの一札、大坂とあるが詮議の第一。日を追つて詮議を遂げ、今の惡名を雪ぐやう、お吉どのゝ力となり、詮議し出すが身の云ひ譯。親人お果てなされてより、兄一人、弟一人、兄弟は他人の始まり。ナ、他人となつて某が、日延の願ひ、首尾よく刀の手に入らば、めでたう對面。マア、それまでは勘當ぢや。

勝次　不義の惡名、刀の紛失、皆私しから起る事。兄親への不孝の段、幾重にもお免しなされて下さりませ。

きち　由ない戀路に搦まれて、重なる難儀も心から、この身はいとひもせぬけれど、科もない勝次郎さま、御勘當とはお情ない。どうぞ堪忍遊ばして下さりませいなア。

勝之　ヤア、叶はぬ願ひ。只この上は刀の詮議を。それが即ち身の云ひ譯サ。

きち　おやと云うて。

勝之　未練な事を。

らん　思ひがけなき御勘當。屋敷を離れて一日も、泊り定めぬ旅の空。道の便りも覺束ない。

左内　それも皆心から。この一通は詮議の手がゝり。心得たか。

ト　お吉に渡す。

きち　アイ／＼。

伴七　役にも立たぬ隙入りに、時刻が移る。勝之進どの、

イザ、お立ちなされい。
勝之　然らば御前へ。
伴七　如何にも。
左内　御苦勞千萬。
勝吉　そんなら、これが。
ト行かうとする。お蘭、引退け
らん　ハテ、二人一緒に。
左内　勘當の印。
ト包みの金を抛る。勝次郎、取上げ
勝次　この金子は。
左内　情の餞け。
勝次　エヽ、忝ない。
伴團　とは云ふものゝ。
ト行かうとするを、お蘭は團平次、勝之進は伴七を引退け、左内と顔見合せ、思ひ入れあつて
左内　お別れ申す。
ト目禮にて、　よろしく幕

二幕目　新地信濃屋の場

役者　梅の由兵衞。同女房、小梅。一六屋本八。
藝子、お吉。研屋左助。

造り物、三間の間、二重舞臺。向う赤壁、納戸口。臆病口の方、一間の障子屋體。竹縁の下、人の這ひ入る事あり、よき所に門口。橋がゝりの方、貸家の體。夜の景色、行燈灯しあり、淨瑠璃にて幕明く。

〽難波津に貸家この程借り住居、女主の一世帯、新地へ通ふ若い衆の、色の小宿に心よき、お吉の笑顔鐘ならで、人を呼屋と賑はしき、黄昏過ぎて薄黒き、綿帽子にて顔包み、對着の儘の裲襠褄、連れて男が立ちどまり。

ト向うより本八、小梅連れ立ち出て

本八　コレ、由兵衞のお内儀小梅さん。道々も云ふ通り、四の五のなしに應と云や、おれも一六屋本八と云うて、大坂で顔の知れた男。無理な色はせぬぞや。其方の男の由兵衞は、お吉と云ふ手かけを拵らへ、片時も内には居ぬ。すりや、貴樣は捨てられたと云ふもの。ところを拾ふこの鼻。なんと惡うはあるまいが。自體わが身に惚れ

て居りやこそ、今まで其方の内へ金も貸した。又この上にも其方さへ、應と云やると、身代ありたけ貸して遣る氣ぢやわいの。

小梅　成る程、モウ、わしがやうな者でも、いろ／＼との心遣ひ。なんの憎うは思ひませぬわいな。兎角心得ぬは由兵衛どの、主に限つて、手かけ狂ひをするやうな。

本八　ハテ、堅意地な。それぢやに依つて、今夜連れて行て、慥かな證據を見せるわいなう。その代りに、由兵衛と先の女子が、女夫ぢやと云うたらば、わが身はおれが女房にするぞや。合點か。

小梅　ハテ、マア、そりやその時の事いなア。マア、一時も早う連れて行て下さんせ。

本八　イヤ、急くまい／＼。猿智惠の由兵衛、どう云ひ合せて置いたも知れまい。お吉が口から、わしは由兵衛の女房でござると云ひ居るまい。門になと隱れて居たがよいぞや。

小梅　そりや呑み込んで居るわいなア。

本八　よし／＼。なんでもおれに任して置いたがよい。ドリヤ、やりかけうか。

ト門口覗き、咳拂ひして、誰れも居ぬゆゑ頷き

けうとい間ぢや。入つた／＼。

小梅　誰れも居ぬかえ。

本八　大方奥へ入つて居るのぢや。

ト あたり見廻し

幸ひあの縁の下には、蹴込みも板も嵌めずにある。あそこに隱れて居たがよい。なんであらうと、好い時分には、おれが足で知らしてやる。ちつと窮屈にあらうけれど、とつくりと樣子を見屆けや。

小梅　そんなら、よいやうに賴むぞえ。

本八　そりや呑み込んで居るわいなう。

ト小梅、下緣へ入る。本八はわざと門の外へ出て

若い者どもは來ましたかの。

ト內へ入る。

〽ずつと入れば立ち出づる、主のお吉は上手者。

トお吉出て

きち　オヽ、本八さん早かつたなア。まだ誰れも見えませぬわいなア。マア、上がつて煙草あがれ。

〽云ふにこなたは上がり口、離れもやらず長うなり。

本八　コレ、お吉さん、何時見ても笑顔のよいお人ではあるわいの。こなんの一人斯うして居やんすので、爰な内

へ入込む若い者どもは、茶屋の色跣足にして、皆がこなんに下心。ひよつと其うちに氣の短い奴が、どんな事せうも知れぬ。畢竟用心の爲にもなるが、なんと、わしと心意氣で、附合うて見る氣はないかいの。

きち　イエ／＼、わしやそんな自墮落な事をするのは、嫌ひでござんすわいなア。

本八　イヤ／＼、仰しやんな／＼。獨り身の女子と、取置きの菓に、虫の入らぬはないものぢや。云ひかゝつて刎ねられては男が立たぬ。是非とも叶へてもらはにやならぬぞえ。

〽心も體も横車、押しつけ口說く折からに、新地あたらし花珍らしと、世に唄はれし由兵衞が、今宵も來る門の口、本八は起き上がり。

ト由兵衞出て、門口に窺ふ

本八　まだ／＼云うて隙入るより、現銀に致さうわい。

ト帶解きにかゝるを振り放し

きち　アヽ、コレ、惡洒落ぢやと思へば滅相な。よう思うても見たがよい。わしには主のある身ぢやぞえ。

本八　サア／＼／＼、その主が聞きたいわいの。

きち　ハテ、知れた事。梅の由兵衞と云うて、歷とした男があるわいな。

本八　ムヽ、こなたの男は梅の由兵衞か。

きち　知れた事いなア。

本八　ソリヤ見たか。由兵衞の女房ぢやと／＼。

ト小梅、出ようとする。

早いぞ／＼。まだ出まい／＼。

きち　コレ、本八さん、そりや何を出なと云はしやんす。

本八　イヤ、その出るなと云うたは、オヽ、それ／＼、お前の腰へ手をかけたゆゑ、持ち合せの彼れめが頭を上げようとするゆゑ、まだ早い、出やい／＼と云うたのぢや。コレ、由兵衞には小梅と云ふ女房があるぞや。

きち　それもよう知つて居るわいな。小梅でも青梅でも、由兵衞どのは、わしが男に違ひはないもせぬもの。

本八　アノ、貴樣のか。

ト手を打つて

それで聞えた。梅の由兵衞は二人の女房、悋氣諍ひあるときや小梅。こりや、どうも堪らぬワ。

ト抱きつくを、由兵衞、つか／＼と入り、本八を見事に下へ投げる。起き上がり

オヽ、由兵衞ぢやな。

由兵　本八、あじやらもあんまりしつこいと、好い仲も惡うなる。また酒が過ぎたな。もう去んで寐い／＼。

本八　イヤ、納めないやい。おりや妥なお吉に惚れて居るに依つて、味やりもするが、わりや又なんで邪魔するのぢや。

由兵　オヽ、お吉はおれが女房ぢや。ほてさすと腕立てるぞ。

本八　なんぢや、お吉はわれが女房ぢや。

由兵　知れた事。

本八　アレ、女房ぢや／＼。

ト小梅に知らすこなし。小梅、出ようとするを、立ち塞がり、出るなと云ふこなしゆゑ、小梅、本八が足を抓る。

本八　アイタヽヽヽ。

きち　コレイナア、お前はどこが痛いえ。

本八　イヤヽヽヽ、あんまりお堅うて、腹が痛いのぢや。梅や嶋づれが、女房二人は、肝がひしやげて臍が飛ぶ。それともお吉が女房なら、本妻の小梅に暇やれ。

由兵　男には七人あてがひ、女房二人が苦になるか。

本八　オヽ、おれがやうな態は、樂やましうて小腹が立つわい。コレ、妾狂ひさるゝ由兵衛の分限者樣、銀で返してもらうかい。

由兵　金とは。

本八　恍けなやい／＼。この冬、何所やらから、目安が附いて、その扱ひ銀が出來いで、ぢり／＼舞ひ。小梅が泣いて頼むゆゑ、せう事なさに取替へたぞよ。證文書いたを忘れたか。利息揃へて、サア、今戻せ、受取らうわい。

由兵　若いが不便や老耄したな。その金は節季に濟ます約束ぢやわい。

本八　イヤ／＼、約束變替へ常の慣ひ。只今銀子が入用な。それがならざ小梅に暇やれ。どちらなりとも、キリキリ返事してしまへやい。

ト由兵衛、本八が胸倉取つて引据ゑ

由兵　此奴が／＼。先刻にから云はして置けば附け上つて、面妖、小梅を去らしたがる。わりや物臭い奴ぢやぞよ。

本八　誰れぢやと思ふぞい。一六屋の本ぢやわい。にじりかすり喰ふのぢやないぞよ。男の胸倉取つて、猪子才な。

ト振りほどき、叩きにかゝる。立廻りあつて又見事に

由兵　投げろ。起き上がる所を踏む。コリヤ、よう聞け。借りた金は踏まぬ。うぬを斯う踏みのめすのぢや。キリ〳〵うせい。あのべら坊めが。

ト構はず煙草のみ居る。本八、よう起きぬ思ひ入れ。

本八　なんぢやゝら、おのが以前一膳極めたてゝ、人を踏むのを自慢ぢやな。しやほんに、金貸して投げられて、その上を踏まれて、オヽ、さうぢやあらうぞ。よいワ。今夜は沙汰なしに去んでやる。取る所で取つて見しよ。おのれ、マア、アイタヽヽ。こりや、腰が伸びぬ。

〽犬の逃げ吠え縁の下、恨めしさうに。

さばや。

〽明日逢はうと何處へやら、暇乞ひして逃げ歸る、思ひの外に由兵衞は、お吉が側に畏まり、行儀正しく小聲になり。

ト本八入る。由兵衞、思ひ入れあつて手を突き

由兵　申し奥様、最前より由ない事にお心も結ぼれん。世の憂き節とは申しながら、由兵衞が女房ぢやの、妾のと申す事、僞りにもせよ勿體ない。併し、これも旦那のお爲と思し召し、お免されて下さりませう。

きち　ほんに、國で其方を使うてた時は、何主らしい事もなく、まさかの時には主顏して、何から何まで世話になります。冥加の程が恐ろしい。哀れ夫の武運に叶ひ、失ひし殿樣のお刀、再び妻の手に入らば、戴く知行を皆遣つても、其方に飽きはないわいなう。頼むぞや。

由兵　これは〳〵、勿體ないお詞。お國で御奉公いたせし砌り、大恩受けし拙者め。何卒御恩送りと思ふところに、この度の御難儀。殊には腑甲斐ない私しに、頼むとあつて、この地へお出で下さるゝ段、冥加至極もござりませぬ。何卒刀の在所をば聞き出さんと存じ、商ひの得意先、研屋刀屋は云ふに及ばす、隨分氣を附け居りまする。お前樣と私しが、念なりとも刀の行くへは知れませう。必らずお氣遣ひなされぬがようござりまする。

〽思ひがけなきこの場の仕儀、小梅は夢か、こは如何にと、聞けば聞く程哀れさの、涙も出端を失へり。

ト小梅、緣の下より出て

小梅　由兵衞どの、あやまりました。堪忍して下さんせいなう。

ト由兵衞、お吉、愕りする。

由兵　迷ひの者か、變化の物か、正體を顯はせ。

小梅　迷ひの者でも變化の物でもない。わしぢやわいな

う。

由兵　ヤア、わりや女房。どうしてそこに入つて居た。

小梅　面白ないわいの。恥かしいわいなう。免して下され由兵衛どの。奥様とこなさんの事を、本八がいろ〳〵と云うたゆゑ、こんな事とは露知らず、宵から爰に隠れて居りましたのでござんす。今のお二人の様子を聞いてから、出るにも出られず、引つ込まれもせず、わしや、モウ、あそこへ消えたかつたわいなア。悋氣妬みは女子の癖ぢやと思うて、堪忍して下さんせ。

　ト泣く。

きち　これはしたり、さてはこなさんがお内儀かいの。疾に逢うて禮も云ひたいと頼みしを、由兵衛の留めやるゆゑ、挨拶もない今の氣の毒。いとしや宵からあそこで、さぞ冷えたであらうなア。

小梅　これはマア、有り難いお詞に、あづかりましてござります。この上はわたしも、こちの人同然に、思し召し下されませ。

由兵　悋氣が却つてお目見得の種。出かした〳〵。様子は下簾で聞く通り、必らず沙汰のないやうに、合點か。もう夜も更けた。其方は泊つてお伽申しや。

きち　ほんに、初めての事なれば、何かを頼む爲、今宵はゆるりと寝て話さう。

小梅　そんなら左様に致しせう。

　ト研屋左助出る。

左助　信濃屋とは爰ぢやないかな。

由兵　爰でござんす。

　ト顔見合せ

オヽ、左助さまではござりませぬか。

左助　ハア、こりや、由兵衛どのか。こなたの云うた代物、寸尺も柄も似寄りの物が今夜出て、明日は早々お屋敷へ見せる筈。もし出たらば爰の内まで知らしてくれと、くれ〴〵の頼みゆゑ、夜が更けたれど、わざ〳〵来ました。見る氣ならば、これから直ぐに此方へござれ。

由兵　それは忝なうござりまする。今そこへ追つきませう。お先へお歸りなされて下さりませ。

左助　そんなら、今ござれや。

　ト云ひ〳〵入る。

由兵　奥様、どうやら好い手がゝりが。

きち　オヽ、聞いた〳〵。一時も早う行てたも。

由兵　然らば奥様、行て参りませう。

〽西を指してぞ。
ト三重にて

幕

三幕目

生玉の場
野中の場

役名　梅の由兵衛。同女房、小梅。同弟、長吉。天滿屋小兵衛。同娘、おみち。同下女、おはま。同手代、忠助。古手屋三婦。一六屋本八。三上團平次。藝子、お吉。妻木勝之進。

造り物、見附け淺黄幕、石の鳥居半分見せ、かけ松の木など植ゑあり、すべて生玉門前筋の模樣よろしく、神樂にて幕明く。

ト仕出し、いろ／＼あつて捨ぜりふいろ／＼、別れ入る。團平次、客の形。お吉、着流し、太鼓持ちその外、藝子、仲居、わい／＼云ひながら出て來て

藝子　コレイナア、團さん、あの機關的を云つて見やしやんせいな。

仲居　ほんに、あの機關的は、いろ／＼化物が出て、大抵面白いものぢやないぞえ。

團平　出た次手に裏八、われも聞いたであろが、どこの國にか、八十の婆が子を產んだげなア。

太鼓　左やうでござりまする。その生れた子が、おはらひ樣になつたと云うて、下脇から嚴しい伊勢詣りがござまするげな。

きち　ほんに珍らしい事でござんすなア。

團平　それはさうと、この邊のお山藝子、皆おれに注文なれど、南の奴等は、とんと嫌ひぢや。それで氣を替へて、北へ通ふも、お吉、少しは心あると思へ。

藝子　ほんに、團さまの顏に似合はぬ色事師。

太鼓　イヤ、又、當世は粹顏して惚られたより、不粹な男が性根でござりますぞえ。

きち　成る程さうぢやわいな。人は見目より心が大事。

團平　おやに依つて、正直正當なこの團平次、殊にあんまり惡い男でもなし。

太鼓　イヤ、モウ、水際が立つてござりまする。

きち　ホヽヽヽ、よい男か知らねども、返事がならぬ私しが體。その譯をよう知つて居ながら、口說かしやんすお

前の心、本八さんと一つになり、僅かの金を囮に戀のせりふ。どうやらむさらござんすわいなア。

團平　イヤ、そりやわが身の料簡違ひ。あの金の事は、本八に取替へて貸した金。おれが手前が濟まぬと思ひ、由兵衛から取戻し、おれに戻した。金と云へば僅か二百兩程の事。

きち　サア、それも意氣づくになつたと見たゆゑ、わしらが調へてやつた金。餘り恩に着せておくれないなア。

太鼓　ハテサテ、これはどこでござりまする。その金のせりふが、爰へ出る事でござりますかいなア。

仲居　ソレイナ、お吉さんも機嫌直して、なんとこれから野中へ行て、藤の盛りを見て、呑み直さうぢやあるまいかいなア。

藝子　ほんに、それがようござんすわいなア。

團平　成る程、そんなら、これから野中の觀音へ行て、一杯呑まふか。

きち　そんなら皆さん。

太鼓　サア、旦那、お出でなされませ。

團平　ア、イヤ／＼、おれはちつと爰で待ち合す人がある。斯うしてくれ。われ達は先へ行て、待つて居い／＼。

藝子　そんなら先へ參ります程に、早うござんせえ。

團平　合點ぢや／＼。

太鼓　そんなら旦那、お先へ參じます。

皆々　お早うお出でなさんせえ。

ト神樂になり、皆々、わや／＼云うて、橋がゝりへ入る。

團平　先づ彼奴等はまいてしまつたが、この三婦は何して居るやら。來さうなものぢやが。

ト云ふうち、橋がゝりより、三婦、出て來て

三婦　團平次さまぢやござりませぬか。

團平　古手屋の三婦、最前から待ち兼ねたわい。

三婦　ハイ、私しも今日は、角の芝居見物に參じませうと存じましたところ、何かは知らぬ、急な用がある、ちよつと生玉まで來いと、お人を下さりましたゆゑ、最前から生玉の內を、一遍尋ねて居りました。御用とは、なんでござりまする。

團平　イヤ、用事と云うて外でもないが、彼の國元で渡した藤四郎の刀、何とやら聞いたゆゑ、樣子を聞かうと思うて、それで呼び寄せたのぢや。

三婦　成る程、その事は、この大坂へ歸ると其まゝ、五

兩の質物に入れ置きました。即ち判方は本八と私しでござります。所に一昨夜、新地のお吉が所へ遊びに參り、フト致した事で、その質札をお吉めに見附けられ、慥かに勝次郎が手に入れましたやうに存じまするが、それからの思ひ付き。事の破れぬその先に、質屋の手代に呑み込ませ、此方へ取戻す魂膽。今でも勝次郎めが、金五十兩拵らへて、質屋へ札と一緒に持つて行き居つたら、直ぐに彼奴が手に入ると云ふもの。どうぞあつちへ渡さぬやうの魂膽を。

團平　成る程、それこそは一大事。おれが戀の妨げになるは、あの勝次郎め。それゆゑにこそ科を拵らへ、國元は追ひ拂はしたが、合點の行かぬは勝次郎が兄勝之進、病氣と云ひ立て、出勤せぬも心がゝり。どうぞ勝次郎をしまうて取る工風はあるまいか。

三婦　それも大方、魂膽を致して置きました。

團平　して、その思案は。

三婦　ア、イヤ〳〵、爰は人立ち。斯う致しませう。何かの事は、野中の田樂茶屋で。

團平　成る程、然らば三婦。

三婦　サア、お供仕りませう。

ト唄になり、兩人、思ひ入れあつて、團平次、先に三婦、臆病口へ入る。返し。

造り物、正面、講釋場。下座、障子の一間、橋がゝりの方、湯豆腐屋の入り口の體。茶店に藤の棚、見事にあり、紙子仕立ての裝束、羽織浪人らしき體にて、勝之進、講釋して居る。仕出し大勢、床几に腰かけ、ちやるめら入りの輕業にて、幕明く。

勝之　只今申す通りぢや。なか〳〵關羽張飛なぞが勇力は甚だしいと云へども、玄德の仁心を以て招かずしては、孔明の如き軍師は手に入りませぬ。それさへ以て玄德、風雨を凌ぎ、三度新野の茅屋に歩を枉げられた。これを以て見る時は、物は只辛抱が大事ぢやて。その辛抱には智が要る、仁が要る、勇が要る、智仁勇の三德に依つて、たうとう諸葛孔明、玄德に仕へられました。さてこれよりは孔明、居ながら天下を三國に分くるの意を述べられまする所なれども、下拙今日は内分に私用ござつて、今日の席はこれぎりで果しまする。明くる明後日は孔明荊州に移られまするにつき、趙雲、長坂坡に勇を振ふ所を說きませう間、今日は先づこれぎりでござる。

ト茶を呑み居る。
仕出　エ、、殘り多い所ぢやな。モウ〳〵、孔明が味方に付いたら、それこそ曹操は益體になるて。
同　これかから三國誌の骨ぢや。それはさうと好い辯者のあの人に、先代萩が聞きたい。
同　ほんに、中の芝居で先代萩をするげなの。角の芝居も鐘庖丁とやら。えらいなまぢやげなて。
同　サア、座摩の芝居にも、對面とやらえらい外題ども出し居るの。これからいつそ芝居と出かけうかい。
同　そんならぶら〳〵、座摩の芝居へ行て、拾文がのほたへさそう。
皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。
ト入る。
茶屋　今日は早うおしまひなされました。なんで急な御用が出來ましてござりますか。
勝之　イヤ〳〵、さして用事はなけれども、最前より頭痛が致して、玄德が孔明を、何と云うて賴まれたやら、どうぢややら、益體であつたで、ハ、、、。暫くの間座敷を借りませう。
茶屋　それは御難儀。サア〳〵、あれで御ゆるりとお休みなされませ。
勝之　太郎兵衞どの、後程逢ひませう。
ト勝之進入る。唄になり、天滿屋小兵衞、娘おみち、下女おはま、丁稚長吉、野がけの體にて來る。
小兵　てもさても、日は長い事ぢや。野中の方を一遍くるりと廻つたけれど、矢つ張り陽はあそこにござる。餘程の道であつたが、娘、其方は辛どうないか。
みち　イエ〳〵、わたしや野を歩くのが面白うござんすさかい辛どうはござんせぬ。長吉や、其方も野が面白いかや。
長吉　ハイ、左樣でござりまする。お前樣は道々も、美しい花があると、摘み〳〵お歩ひなされますゆゑ、お辛どうはござりますまいけれど、旦那樣はずい〳〵とおひろひなされますゆゑ、おしんどうござりませう。サア、おはまどん。
はま　ソレイノ、御寮人樣の花摘むとて、後へなり〳〵なさるは、こなさんのやうな可愛らしい花が摘みたいので、ホ、、、。わたしとした事か、つけ〳〵と、オ、笑止やの。
みち　おはまとした事が、をかしい事を。ナウ長吉、美し

い花がたんとあつたさかいで、摘んでたもと云つても、根つから思ひやうにもない。ナウ、長吉や。

長吉　ハイ。

　ト氣の毒さうに云ふ。茶店の亭主出て

亭主　ちとおかけなされませ。お支度でもなされますなら、座敷が空いてござります。マア、お茶一つお上がりなされませ。

　ト茶を酌んで出す。

小兵　ドレ、ちつと休みませうか。サア、皆も休みや〳〵、なんと、見事な藤ぢやないか。

みち　ほんに、見事な花でござんすわいなア。

亭主　この下で御覽なさるより、あの座敷から御覽なされますと、又どうも云へませぬて。

小兵　さうであらう。餘の花とは違うて、マア、下では眺めるに首が痛む。ドレ〳〵、暫らく座敷を借りませう。

亭主　サア〳〵、お出でなされませ。

小兵　さうしませう。サア、娘もおぢや。

みち　アイ、おはまも長吉もおぢや。

長は　ハイ。

　ト唄になり、四人入る。由兵衛女房小梅出る。

小梅　さても見事に咲いた事わいの。イカサマ、一時の榮華に千年を延ぶるとやら云ふが、この花の盛りを見て、心の結ぼれを、ちつと晴らしませう。

　ト眺め居る。ト長吉、出て來る。

長吉　申し、お前は姉樣ぢやござりませぬか。

小梅　オヽ、其方は長吉かいなう。

長吉　ハイ。

小梅　ちつとの間見ぬうちに、大きうなりやつた事わいの。マア、變る事もなささうで嬉しいが、わが身はどうして爰に。エヽ、お供しておぢやつたのぢやの。

長吉　ハイ、今日は旦那樣や御寮人樣が、野がけにお出で遊ばしたゆゑ、お供いたして參りましたのでござりまする。

小梅　ムウ、さうぢやあろ〳〵。それはマア、結構なお供におぢやつたなう。旦那樣も御寮人さんも、爰へお出でなされでござるかや。

長吉　ハイ、この水茶屋の座敷に、お遊びなされてござりまする。

小梅　イヤモウ、今日は天氣も好し、そりやマア好い慰みおぢや。さうして番頭さんも、どなた樣も御息災なかや。

長吉　ハイ、皆お變りなさるゝ事はござりませぬ。お前樣にも、御無事で嬉しうござりまする。由兵衛さまも、お達者にござりますかえ。

小梅　イヤモ、達者な事は、主も達者なが、ちつとこの間から、屈託な事が出來て、あの人さんもわしも、大抵苦に病んで居る事ではないわいなう。

長吉　そりやマア、なんとしてえ。

小梅　なんと云ふたら金事ぢやわいなう。由兵衛どのゝ國に居られた時の、お主樣の事について、急に五十兩と云ふ金が無ければ、どうもならぬ義理合ひ。と云うて何をどうする當もなけれど、大恩あるお主樣の事なり、足手かいさまにして才覺すれど、何云ふても大枚の金ゆゑ、つい心安う出來はせず、それに氣の早い由兵衛どのなり、うち／＼駈け廻らしやんすを見ては、モウとんと頭の毛が拔けるやうなわいの。こんな事其方に云ふ事ではなけれども、話すも其方の爲ぢや。兎角お主樣と云ふものは、大切なものぢや程に、隨分奉公大事にしや。取分け朋輩衆や出入りの衆にも、憎まれぬやうに、林の中でも高い木は、風に折らるゝと云ふ譬へ。如才なう隨分と、皆に可愛がられるやうに勤めたがよいぞや。皆其方の身の爲になる事ぢや。これを思へば由兵衛どのは前生で、なんぞ惡い事があつたものであらうぞいの。

長吉　それはマア、いかい御苦勞なされますなア。父さんや母さんと云うてはなし、力にするはお前ばかりぢやさかいで、必ず煩らひの出ぬやうにして下さりませえ。

小梅　オヽ、親身とてよう云うてたもつたなう。然しながら、どうぞならんと云ふ事もあるまいぞいなう。わしも今日は此方邊へ、その事について行くのぢやさかいで、心も急く。其方もお呼びなされたら惡い。座敷へ行きや。旦那樣にもどなたにも、逢つたとは云はぬがよいぞや。また近いうちにお暇貰うて遊びにおぢやつたら、方方へ連れ立つて行かうし、座摩樣にも開帳があるさかいで、連れ立つて參らうぞや。

長吉　そんならモウ、お出でなされますか。

小梅　其方も煩らぬやうにして、隨分と精出しや。ドリヤ、行て來ませう。

長吉　申し姉さん。

小梅　なんぞ用があるか。

長吉　イヽエ、そんなら行てお出でなされませえ。

小梅　オヽ、あの子とした事が、今のやうに云うたので、

里心が出來たのか。ホヽヽ。ドレ、行て來ませう。アア、どうぞ埒が明けばよいが。

ト唄になり、小梅入ろ。奥よりおみち出てあたりを見廻し、恥かしきこなしにて、長吉が後に立ち、この間始終面白き合ひ方。

みち　長吉や〱。

長吉　ハイ、これはおみちさま、なんぞ御用でございますかえ。

みち　サア、その用はの。

長吉　ハイ、御用は。

みち　御用は。

長吉　御用は。

みち　御用は。

長吉　エ、飛脚のやうな事ばかり仰しやります。なんの御用でございまする。

みち　イヽヤイナウ、其方に用は、アヽ、オヽ、それ〱、先刻にから爰に、何して居やつたや。

長吉　ハイ、私しは先刻にから爰に、アノ、遊んで居りましてございまする。

みち　そんならわが身は、遊んで居やつたかや。そりやマア、よう遊んで居やつたなう。アノ長吉や、わしや伊勢詣りがしたいわいなう。

長吉　ハイ、そりや旦那樣のお詣りなされます時、さう仰しやつて、連れ立つてお詣りなされませ。

みち　イヽヤ、わしや父さんでなしに、わが身とわしとたつた二人、詣りたいと云ふ事いなう。

長吉　そんな事したら、人が笑ひますわいな。

みち　なんで笑ふや。

長吉　お前と私しとたつた二人り、參りましたら、大方ありや女夫事ぢやないかてゝ。

みち　さう云うたら、わが身は嫌かや。

長吉　さうではないけれど、一體道を存じませぬ。

みち　それでもわしより小さい子が、なんぼも參つて來るぢやないかいなう。

長吉　ハイありや抜け詣りでございまする。

みち　サア、その抜け詣りをしてからに、二人手を引いてからにの。夜さりは寢てからに、そしてからに。

ト云ひ〱側へ寄り、恥かしさうにして

參りたいわいなう。

長吉　エヽ、其やうな事は、根から知りもせぬものを。

ト思ひ入れある所へ、向うより、手代忠助、出る。二人は恥かしさうに別れる。

忠助　どうぞお目にかゝればよいが。

ト云ひ〳〵本舞臺へ通る。

オヽ、おみちさま、爰にござりますか、一遍と野中を尋ねましてござりまする。好い所でお目にかゝりやした。そして旦那は、どれにござります。急用あつて參りました。

みち　父さんはあそこに居てぢやわいなう。ちやつと行きやいなう。

ト内より、小兵衛、おはま出る。

小兵　イヤ〳〵、其所へ行かう。オヽ、忠助、急用とは、どんな用事ぢや。

忠助　昨日の下のお客が見えまして、あの相談をとつくりと致したい急用で、晩に下へ下るとの儀。番頭どのは屋敷の御用に行かれまする。旦那にも追ッついてござりませうと申しても、いかうお急きなさるゝゆゑ、是非なうお迎ひに參りましてござりまする。

小兵　オヽ、それは大事の用。今夜下るとあれば急な事、行かねばならぬ。そんなら何せい、娘は出た次手ぢや程にまつと遊んで、後から戻りや。おりや心が急くゆゑ、道で駕籠かつて先へ去なう。娘、そんなら後から戻りや。

忠助　成る程、左樣がようござりませう。大切の御寮人さんなれば、殘つてお供して去なう。長吉、わが身は旦那樣にお供して、先に去にや。

長吉　ハイ、そんならおみちさま、お先へ歸りまする。

忠助　ハテサテ、早う行きやいなう。旦那樣はもうお出なされたが、埒の明かぬ。

ト長吉をおみち眺め、爰に居いと云ふ仕方。長吉、うぢうぢして居る。小兵衛、向うへ入る。

これはしたり、行かぬのか。

ト叱る。長吉、恟りして走る。

忠助　コレおはま、おみちさまはまだお遊びなさる。その間に國太夫でも聞いて來たがよい。おみちさまは、わしが居るさかい、氣遣ひはない。

はま　そんなら御寮人さん、少しの間、ちよつと其所らへ行て參じませう。

トおはまいそ〳〵して入る。

みち　コレ、おはま、其方が行きやるなら、わしも一緒に

行かうわいなう。
ト行かうとするを忠助隔てゝ
忠助　待つた。斯く智謀を振つて皆をまき、お前とわしが殘つた、アレあの籐のやうに、藤のからだに這ひ絡はれて、一夜の情に遭ひたやな。
ト抱きつく。
みち　エヽ、嫌らしい。何しやるぞいなう。
忠助　何するとは曲がない。おみちさん、お前を思ひ初めたのは、今日この頃の事ではない。小さい時から抱きかかへしたわしぢや。五六年前から今日の首尾を待つて居た。内中の女子を離なうて靡かすこの忠助。元より器量は倂びなし。なんと憎うはあるまいが。
ト抱きつく。
みち　エヽ、何をしやるぞいなう。
ト突き退け、しか／＼云ふうち、由兵衞、來かゝり立聞きして居る。
忠助　コレ、おみちさん、お前、ズッと心の底は、わしにほの字ぢやあらうがな。イヤ／＼、隱さんすな。常々の目付きで知つて居る。それに、さうぴん／＼は、エヽ、術なからうと案じるのか。コレ、忠助ぢやわいの／＼。其所らはあしらふわいの。赤い瓢箪ではなけれども、少しも憎みなく面白い事を。
ト抱きつく。
みち　エヽ、なんぢやの。アタ嫌らしい。
ト叩く。
忠助　アイタヽヽ。こりやどうするのぢや。そりや可愛いのぢやない、憎いのぢや。お主の娘を唆かしたと浮名が立つても、お前ゆゑならコレ、いとやせぬわいのいとやせぬわいの。
トいろ／＼嫌らしく付き纏ふ。おみち、嫌がり逃げうとする。しか／＼揉み合ふうち、由兵衞、忠助を引摺り退ける。忠助、由兵衞に抱き付く。この間におみち、逃げて入る。
由兵　エヽ、汚ない。何するのぢやい。
ト忠助、恟りして
忠助　エヽ、汚ない、何したのぢやい。
由兵　これはマア、歴としたお手代の、今のぢな付きはなんでごんす。嗜なんだがようごんすわい。
忠助　誰れぢやと思や、長吉が請け人の由兵衞。なめ過ぎた嗜なめとは何を嗜なめぢや。

由兵　何とはまが／＼しい。今アタ臭い口を突きつけたぢやないかいの。

忠助　ヤア、。

由兵　ヤア、どころか。先刻にから聞いて居る。そりや可愛いのぢやない憎いのぢや。ハ、、、、。

忠助　エ、、。

　ト唄になり、面目なささうに、こそ／＼と忠助入る。

由兵　主の娘を慰み物のやうに、あんな奴に給銀やつて飯喰はすは、國家の費え。それはさうと小梅は、もう戻りさうなものぢやが。爰で待ち合すやうに云うたが、よもや先へ去にもせまい。ア、、どうぞ首尾ようしてくれればよいが。

　ト獨り云うて居る。揚豆腐屋より、三婦、本八、出て

三婦　由兵衛ぢやないか。好い所で逢つた。新地から上町三界、人に足を幾度引かす。お吉が新地の宿入り、疊から椀折敷、寢道具、竈、莨盆、がらくたかけて五十種、駄賃込みに百九十匁。又この夏、小梅に買つた帷衣と抱へ帶、ソレその着て居る袴羽織、三種の代の三十匁も、一緒に後の晦日に堅う濟さうと、くわんたにかけ、晦日過ぎて、行ても／＼毎日留主。今日金渡すか、但しは又、埒が明かねば新地へ行て、疊を上げ、諸道具もやつさにかけて賣り拂ひ、足らぬ所はお吉を月限り。その嵌めにも大方ある。金が今なか、これから直ぐにお吉が所へ連れ立つて行かうか。幸ひぢや。コリヤ本八、貴樣もとも／＼世話してくれ。

本八　イヤ、三婦どん、こちにも今日切迫する金があるで、サア由兵衛、われが女房小梅がナ、ちよつぼくさの口請合ひ、行き方つくなら待つてもやるが、先度は新地のお吉が所で、ようも酷い目に遭はしたなア。よう思うて見る程、金貸しながら踏まれては、この本八が一分立たぬ。サア、今返すか、但し又、金が無けりや小梅に暇やれ。サア／＼、どうぢやい。

由兵　成る程／＼、一々皆其方のが尤もぢや。お吉が所での達引は、ほんのおれも一杯機嫌の張合ひ。腹が立つたぢやあらう。眞平々々。

本八　イヤ、拜み倒し嫌ぢやわい。サア、金戻すか。但し小梅に暇やるか。

由兵　金の事は相對づく。又しても小梅に暇やれと、暇やつたら又どうするのぢや。

本八　平たう云へば女房にする。

由兵　ヤア。
本八　そんなら金を今受取らう。
由兵　サア、その金は。
本八　金は無いか。そんなら小梅を去つてしまへ。此方も金よりや女房が望みぢや。金の代りに女房になれと、せがみ立てられ返事もならずと、博多にさへ唄ふぢやないか。なんぼもこれまである格ぢや。今更の事ぢやない。美しう去つてしまへ。コレ、證文も爰にある。去り狀書いたら引替へぢや。嫌と云や引ッ剝いでも今受取る。思案して返事せい。
由兵　コレ本八、わが身も男ぢやないか。借錢は借錢、金の代りに女房去つて、由兵衞が立つものかい。マア、去り狀はエ、書くまい。
本八　ムウ。借錢は借錢とは、わりや横に寐ると云ふ心か。一六屋本八ぢや。三百匁のうち、けちりんでも缺けては取らぬ。サア渡せ。無いか。それでも強い事云ふかい。男が立つか立たぬかと、われが男は立つてあると思ふか。ハヽヽヽ。阿房盡さずと、どちらへなりと譯立てい。
三婦　サア由兵衞、この三婦が取替へ金、今受取らう。嫌と云や、お吉が所の家財賣り拂ふか。
由兵　サア、それでは。
三婦　そんなら戻すか。
本八　女房去るかサア。
兩人　サア、どうぢやい。
ト由兵衞、途方に暮れし體。俯向き居る。
本八　どうで埓の明かぬどう掏摸め。いつそ手短かに丸裸にして、せめてもの腹癒せ。サア、脱ぎ居らう。
ト本八、剝ぎにかゝる。コリヤなんとすると立廻りあつて、取つて投げる。
本八　コリヤ、投げ居つたな。重ね〲、もう料簡がならぬ。
ト見廻し、講釋場の見臺振り上げ、眉間を割る。
由兵　うぬを。
ト行かうとする。三婦隔たり
三婦　わりや、おれが連れの本八を投げたぞよ。金の書入れは格別、この三婦が連を、強い事してもだんないか。手向ひがしたくばして見い。お吉が所はおれが借請けで世話してやつた。何時でもお吉めは追ひ出さうと、どうせうと儘ぢや。これから新地の家主へ行つて、今直ぐ立

たしてしまふ。さう思うて居い。
由兵　サア、それをさうしてもらひましては。
三婦　そんなら、なんで手向ひする。
本八　うぬはなんで手向ひひろぐ。
ト兩人して打擲して居る。由兵衛、無念を堪へるこなし。小梅、戻りかゝり引分ける。
小梅　マア〳〵待つて下さんせ。
ト宥め。
勘八　由兵衛どの。
由兵　小梅か。
ト振仰ぐ。
小梅　ヤア、その疵は。
ト由兵衛、無念なるこなし。
エヽ、胴慾なお前方。如何に金が濟まぬとて、男の顔へあのやうに。由兵衛どの、さぞ無念にあらう。口惜しうござんせうなア。
本八　コリヤ〳〵、小梅、おいらがなんで胴慾か。命から二番目の金貸して、戻せと云ふが胴慾か。胴慾とはわれが事ぢや。由兵衛どの、無念にござんせう、口惜しうござんせうなアと、アタ胸の悪い。又しても〳〵、あの貧乏神を庇ひ立て。せめてその氣を百分一。
ト抱きつくを突き退け
小梅　又しても嫌らしい。サア、受取らしやんせ。金渡しませう。
本八　金渡さうとは平たう出たな。美人局でもして來たのか。どうで碌な金ぢやアあるまい。
ト小梅、懐中よりこま金出し、本八が前に置く。
しめてこれだけか。おきやアがれ。仰山さうに。
小梅　サア、足るまいけれど、マア、これ取つて置いてくれたがよい。
本八　なにを。皆も返すやうに吐かして、これだけやなんぞの日懸り金、あんだらつくせ、と拵る所なれど、それも古い。よいワ、内取りに。
ト數改め
書付けに十六匁七分。一月の歩だけはある。慈悲ぢやと思うて今日の所は、これで待つてこまさうわい。
小梅　そんならちよつと念の爲。
本八　受取くれいか。ませると云ふものではない。三婦さん矢立がごんすか。
三婦　ソレ矢立。

本八　ト差出す。本八、さら〳〵と受取りしてやる。
　　ソリヤ、これ取つて置け。
　　ト小梅へ渡す。
三婦　本八が出入りは、マア濟んだやうなものぢやが、由兵衞、おれが出入りはどうするのぢや。
由兵　サア、その儀は。
三婦　無いか。これから又、お吉が所のせいらくせうわい。
由兵　申し、それをさうなされて下さりましては、今更どうも。
三婦　そんなら金せう。
由兵　サア、それは。
三婦　エヽ、愚悶々と。
　　ト足にて蹴飛ばし、行かうとする。最前より、講釋師、立聞きして居る。
勝之　コレ〳〵御兩人、待たれい。
三本　誰れぢや。おいらが事か。
勝之　如何にも、貴公達の事サ。
兩人　おいらに用とは、なんでござる。
　　ト寄る所を拔打ちに兩人を背打ちくらはす。
本八　なんぢや。コリヤ、人に合點もさせずに。なんで酷い目に遭すのぢや。
勝之　頰桁たゝくな。こな盜賊めらが。
三婦　人を打擲した上に、盜賊とは、何が盜賊、それ吐かせ。
勝之　うぬらア、あれが目にかゝらぬか。身は尾羽打枯らした浪人。軍書講釋にその日を送れば、コレこの見臺は武士の看板。何ゆゑこの見臺を以て、その者の眉間を打割り、血をあやした。それゆゑぶつたが云ひ分あるか。
三婦　サア、それは。
本八　それはさうで、此方の誤まり。ぶたれたら五分々々ぢやが、盜賊とはなんで云うた。
勝之　最前よりこれにて聞けば、銀子の出入りが暗い〳〵。それゆゑ盜賊と云うたが誤まりか。
本八　オヽ、誤まりぢや。出入りが暗いと云ふが何が暗い。コリヤ見い。三百匁と云ふ證文が、暗うて何が明るい。あんだら盡したら、どたまかぶり缺くぞ。
勝之　ヤア、その證文が暗い〳〵。
　　ト本八、證文を突きつけ
本八　無筆かは知らねども、これが讀めるか。讀めるなら

読んで見い。三百匁。わいらが心に比べで、ツカ〳〵云ふな。一六屋の本八と云ふ男ぢやわい。
ト證文をとつくと見て、講釈師、懐中する。
本八　コリヤ、どうするのぢや。證文をなんとする。
勝之　この證文は反古ぢやわやい。
本八　いろ〳〵の事をほざく。なんで反古ぢや。
勝之　歩銀は一歩半が天下の大法。それになんぞや最前より見れば、銀子三百匁に、一ケ月の歩として十六匁七分とやら五歩とやら、受取りしたが反古の第一。
本八　ヤア、なんと。
勝之　云ひ分あらば、渡世の妨げしたる其方達、法に背いたこの證文諸共に、代官所へ訴へようか。
本八　サア、それは。
勝之　その上に、主ある女に戀慕の大罪。此まゝに歸つたが仕合せであらう。
本八　エヽ、怪體の悪い。三婦どん、どうせう。
三婦　どうと云うたら、本八、いつそ。
本八　合點ぢや。
ト兩人かゝる。立廻りあつて見事に投げる。
勝之　重々の慮外者、この上に手向ひせば、手は見せぬぞ。泥坊めらが。
ト兩人、つぶやき逃げ歸る。
由兵　これは〳〵、どなたかは存じませぬが、この場の難儀お救ひ下さる段、忝なう存じまする。
勝之　禮には及びませぬ。貴殿は由兵衞どのとな。此方よりお禮申さねばならぬ。
由兵　さう仰しやるは、どなた樣でござりまする。
勝之　こなたの主、妻木勝次郎が兄でござる。
由兵　そんなら妻木勝之進さまでござりまするか。
勝之　成る程、弟がこの度の難儀、刀の盜賊は大坂にと、密かに聞くより病氣を云ひ立て、この地へ來り、密かに詮議いたすところ、弟嫁お吉が身の上。以前の家來由兵衞が世話するとの事。何卒逢うて一禮をと、思ふうちに今日の對面。主の爲に頭を割られても、堪忍辛抱が却つて大丈夫。オヽ、頼もしい〳〵。
由兵　ハア、これは〳〵有り難いお詞。お世話申すとは慮外。ほんの心ばかりの儀でござりまする。
勝之　オヽ、過分々々。今三婦とやらが詞の端。お吉が身の上心元ない。まさかの時は身が借宅へ同道あれ。最早お別れ申さう。

由兵　して、あなた樣のお所は。
勝之　中福島の貸座敷。
由兵　お刀を尋ね出し、よろしい吉左右。
勝之　松を目當に。
由兵　ハア。
勝之　尋ねて來やれ。
ト唄になり、行かうとして立戻り、印籠の藥取出し、蒔繪につけてやり、悠々と入る。
由兵　ハテ、思ひも依らぬお方にお目にかゝつた事ではある。
小梅　そんならあの方が、浦右衞門さまの兄御かえ。
由兵　サア、お國が違うてあるゆゑ、ついにお目にかゝつた事はないわいの。それはさうと今の所は。
トしかじか云ふうち、娘おみち、奥より逃げ出る。
小梅　ヤア、お前は天滿屋の御寮人樣、なんとなされましたえ。
みち　サイナウ、手代の忠助が嫌らしい、又奥で惡い事ばつかり。それで逃げて來たわいなう。
由兵　性懲りもない惡性手代。あんな奴が供しては覺束ない。女房、御寮人さま送つて上げましや。何かの話しは内で云はう。サア／＼、早う／＼。
小梅　合點でござんす。
ト娘を連れて行かうとする。奥より、忠助出て
忠助　それやつては。
ト追ひかけうとする。由兵衞、引戻し、立廻りある所へ三婦本八引返し
三婦　講釋師めは去に居つたか。元の起りは由兵衞め、疊んでしまへ。
本八　合點ぢや。
忠助　戀の仇する由兵衞め、おれも加勢ぢや。二人の衆。
三婦　コリヤ、させぬワ。
ト三人相手に由兵衞タテになり、三婦本八を當て、こなし。
由兵　女房ども、早う。
ト由兵衞、行かうとする。忠助、留める。立廻りにてくる／＼と廻し、花道へ駈けて行く。忠助、ムク／＼と起きて。
忠助　アレ／＼／＼、ソレ／＼／＼、ア、、咲いたワ／＼。ヤア／＼／＼。
ト氣の狂うたる身振りにて、扇を開き、ひらひらと煽ぶ

ぎ入る。

大詰

由兵衛内の場
野中の場

幕

役名――梅の由兵衛。同女房小梅。同弟、長吉。伯母おさよ。妻木勝次郎。

造り物、二重舞臺、向う赤壁納戸口、下座の方、障子屋體。いつもの所に門口、外には染め物干してある體。幕の内より、小梅、襷がけ前垂れ、置き手拭にて、染め物を干して居る見得。在郷唄にて、幕明く。

ト橋がゝりより、下男一人出て

下男　由兵衛さんはお宿にかな。

小梅　イヽエ、主は商ひに出られましたが、なんの御用でございまする。

下男　イヤ、私しは堂島の、紀伊國屋から參りました。この間に染め物出來ましたら、受取つて來いとの事でござりまする。

小梅　これはマア／＼、遲なはりましてござりまする。とうとう今日染め上がりましてござりまする。そんならお渡し申しまする。

ト紙包みを渡す。

下男　ハイ／＼、慥かに受取りましてござりまする。

小梅　ようお出でなされました。

トまた在郷唄になり、男は橋がゝりへ入る。向うより伯母おさよ、杖を突き、珠數繰りながら福助を連れ出て門口にとまり

さよ　オヽ、小梅女郎、精が出まする。通りがけの足休め。仕事の邪魔しに寄りました。

小梅　これは伯母さん、ようこそ／＼。由兵衛どのは商ひに出られ、留主の小仕事してもせいでも大事ない事。ドレ、茶を入れて上げませう。

さよ　イヤ／＼、構うて下さんな。コリヤ福助よ、其方は去んで日暮過ぎ、提灯持つて迎ひにおぢや。

福助　ハイ、畏まりました。

ト橋がゝりへ入る。

小梅　大儀でござんす。サア／＼、これへお出なされま

せ。

ト莨盆持つて來る。おさよ上座へ直り

さよ　コレ嫁女、ちつと話す事がある程に、爰へござれござれ。

小梅　ハイ、畏まりましてござります。私しへのお話しとは、マア、どのやうな事でごりまする。

さよ　サア、話しと云ふは外でもない。今日寺詣りをかこつけ、わざ〳〵來たは、こなた衆夫婦をわめきに來た。聞けば甥の由兵衛は、お吉と云ふ妾を拵らへ、鼻毛をよまれ樂しむげな。道理こそこの中も、見込みもないこの婆に、五十兩と云ふ金の無心。ならぬと云うたらねれけ者、悄々として歸るゆゑ、ア、可哀や、あらば遣らうに、腑甲斐ない伯母持つたと思ふであらう。ハテどうがなと、奉加銀貳百匁、これなりともと渡したりや、どこの端へも足らぬ顏。罰が當つて道でまき、不思議に此方の親父が拾はれて二度貰ひ。性根を誰れに奪はれしと、その時から氣が付いた。妾狂ひと知つたらば、遣るまいものを。コレ小梅、悋氣せぬ女房と、酢の利かぬ鱠とは、今の世の廢り物。ちつとは生薑の辛味も持つたがよい。あんまりで齒痒いわいなう。

小梅　オヽ、なんの事かと思へば、伯母さんの譯もない。主に限つて妾狂ひ、跡方もない事。これぱつかりはわたしが證據でござりまする。

さよ　アレ、まだいなう。ニヽ、こなたはいかい結構ぢや。何所にどうしてどのやうな、暮しで居ると云ふ事まで、知つて居るゆゑ意見に來た。由兵衛の戻りやるまで腰据ゑて寐て待たう。枕一つとあの一間借りますぞや。

小梅　そんなら夫の歸りまで、暫らく奧でお休み遊ばせ。

さよ　由兵衛が戻つたら、ちやつと知らして下されや。

小梅　畏まりましてござります。

さよ　そんなら嫁女。

小梅　伯母樣。

さよ　後に逢ひませう。

ト唄になり、おさよ、思ひ入れあつて、納戸口へ入る。後に小梅、こなしあつて

小梅　伯母さんの今のお詞、割つて云はれぬお吉さまのお身の上。ハテ、どうしたらよからうぞ。

ト思案する。此うち、向うより勝次郎、着流し、羽織を肩にかけ、息せき出て來て

勝次　由兵衛は內に居るか〳〵。

ト急いて云ふ。

小梅　お前は勝次郎さま。何事を其やうに、息を切つてお出でなされました。氣遣ひな事ぢやござりませぬか。

勝次　サア、あんまり氣遣ひでない事もない。こなさんも知つての通り、この中不思議に在所の知れた藤四郎の刀、五十兩の質に入れある由。この月中に金拵らへ請け戻す程に、その質屋へ手を廻し、もし置き主から請け戻さうと云ひはせぬか、つくろへと云はしやつたゆゑ、それで質屋へ手を廻し、毎日々々聞きつくらふ所に、明日中に請け出す人があるとの事。それで心も心ならず、由兵衞どのへこの譯を、云はうと思うて來ましたわいの。

小梅　オヽ、そりやマア大抵の事ぢやない。シタガ、主も歸られませう。戻られたら又あの人の思案もあらう。マア、其やうにお案じなされぬがようござりまする。

勝次　サア、それでもどうも心が濟まぬ。あの刀がこちらが手に入らねば、幾人の命にかゝる事やら。マア、わしは新地へ行て、お吉にも話しませう。戻らしやつたらこの通り、由兵衞に話して下され。

小梅　合點でござりまする。由兵衞どのが居られますれば、惡いやうには致しませぬ程に、お吉さんもお案じなされぬやう、仰しやつて下さりませ。

勝次　そんなら其方を頼んだぞや。

小梅　モシ、必らず短氣なお心を、お出しなされますなえ。

勝次　合點ぢやわいなう。

小梅　そんなら早う。

勝次　行て來うぞや。

ト唄になり、勝次郎、こなしあつて、向うへ入る。小梅、後を見送り。

小梅　お心柄とは云ひながら、なされもつけぬ御奉公。今の話しのあの刀、外へ遣つては夫が立たず。とは云へ急に金はなし。今日に限つて由兵衞どの、戻りの遲いも氣にかゝる。早う戻つてくれたがよい。ほんに辛氣な事ではあるぞ。

ト淨瑠璃。

〽戻りの遲やと門へ出て、立戻つては及ばずも、思案しがくの金事も、胸も心も一時に、裂けるより猶辛かりし。早入相の鐘ゆゑに、命取らるゝ長吉は、夏の蟲かや灯し火を、灯す時分に來かゝりて。

ト長吉出て

長吉　姉樣內にござりますか。
　ト內へ入る。
小梅　オヽ長吉か、ようおぢやつたなう。ほんに、いつ見えても愛想もなし。布子の表も染めて置いた。近いうちに仕立てゝやらう。如才はなけれど急がしさ。推量してたもいなう。
ヘ斷わり云へば長吉は、姉の顏を打眺め。
長吉　それは道理でござりまする。見ればお顏の色も惡し、なんぞ苦にでもなりますか。必らず煩らうて下さりますなえ。
小梅　オヽ、兄弟とて、よう云うてたもつたなう。この中其方にも話した通り、大切な刀も、金渡さねば手に入らず。外へやつては一分立たぬと、主もわしもその事ばかり。これを思へばお主程世に大切な者はない。コレ長吉。云ふまでもなけれども、隨分と奉公大切。親方の物塵一本、必らず粗末にしやんなや。お使ひの戻りならば、早う去んでお返事云や。早う〳〵。
ヘ意見と共に去なしかけ、弟所へ行かぬ苦を、又も案じて居たりける。
吉　イエ〳〵、わたしや晝から平野へ、爲替の金受取りに行て、日が暮れたら爰にでも、又先にでも泊つて來いと、番頭どのが云ひ付け。卽ち金もコレ爰に。
ヘ首に掛けたる小財布を、どつかり下ろせば小梅が恟り。
小梅　ムウ。してその金は、なんぼ程あるぞいなう。
長吉　アイ、小判で丁度五十兩。
小梅　アノ、その金が。
長吉　アイ。
小梅　ハテナウ。有る所には有り餘る。子供の其方に持ち歩かせ、なんとも思はぬ身代に、半時でもなつて見たい。コレ〳〵、人が見たらツイ取るぞや。見せるは目の毒。ちやつと首に掛けて居や。晝から出たら飢じからう。茶を入れて飯喰はしませう。
長吉　イエ〳〵、飯はわしが拵らへます。茶のある所も知つて居れば、ツイ沸かして、お前にも上げませう。
小梅　そんなら勝手に沸かして食べや。
長吉　アイ〳〵、合點でござんす。
ヘ勝手へ立て釜の下、焚きに行く後影、見送る姉は悄れ顏。
小梅　ほんにマア、ならう事ならあの金を、とは思へども

人の物。手詰めになつた金の才覺。主はどうして遲い事。早う戻つてくれたがよい。
〽見やる表へうと〳〵と、一荷の桶に明礬の、筒や箒を看板に、我が門までも。
由兵　梅や澁茜。
〽金の才覺がてらには、日暮れて道も急がしく、戻るや否や。
小梅　コレ〳〵由兵衞どの、商ひどころぢやござんせぬ。急な事があるわいなア〳〵。
由兵　これは消魂ましい。急な事とは、なんぢや〳〵、
小梅　さればいなア。お前の留主の間へ、勝次郎さまがお出でなされ、明日中に刀を受取る人があると、質屋の噂。それをお前に知らさうと、云うて來てゞあつたわいなア。
由兵　ヤ、なんと云ふ。そんならアノ、外に請ける人があると、質屋のが吐かしたとな。
小梅　アイナア。
由兵　それ請けさして堪るものか。そしてアノ勝次郎さまは。
小梅　サア、お吉にもこの譯話すと、蜆川へ行かしやんした。
由兵　エ、新地へござつたとて埒は明くまい。又お吉さんが苦になされう。明日と云うてももう今夜一夜さ。大枚の金の才覺、ハテどうしたらよからうなア。
〽手を拱ねいて美術向き、思案途方に暮れ居たる。女房おづ〳〵側に寄り、
小梅　わしが差出た事ながら、元あの刀は盜み物。置き主を吟味して、お上の沙汰にするならば、當分は金要らず、手に入る事もあるまいぢやござんせぬか。
由兵　成る程、女子氣でさう思ふは尤もながら、爰で物が露顯しては、その盜人が風を喰ひ、詮議の筋を失ふ道理。マア五十兩金拵らへ、刀さへ請け戻せば、この詮議は何時でもなる事。と云うてその金のあだてはなし。あの刀を請け戻し、勝次郎さまを歸參さしませねば、これまで盡した志しも水の泡。由兵衞が忠義は立たぬわいやい。忠義が立たねば腹切つて。サア、おりや死ぬる。云はゞ輕い命なれど、この刀が手に入らねば、大恩のお主の家は斷絶。お氣遣ひなされますな。この由兵衞が命に替へ、御歸參をさせませうと、お請合ひ申した詞も反古になる。エ、思へば〳〵口惜しわいやい。

〽男泣きにぞ泣き居たる、共に悄るゝ女房も、涙隱して

小梅　道理でござんす。尤でござんず。四百四病の病より、貧程辛いものはないと、よう云うたものでござんす。どうぞ外へやらぬやう、お刀を取りとめる、思案がござんせんかいなア。

由兵　サア、おれもいろ〳〵と思案して見ても、とんと工面が出來ぬ。いつそ伯母貴にでも無心云うて見ようかいなう。

小梅　イヽエイナ。その伯母さんも來てぢやわいなア。

由兵　ナニ、伯母貴が來て居らるゝか。

小梅　アイナア。

由兵　ムウ。さうして、もう去なれたか。

小梅　イヽヱ、奥に寐てぢやわいなア。お前が妄狂ひと聞いて、意見すると云うて。

由兵　ホイ、しまうた。これも行かぬ。エヽ口惜しい。僅か五十兩の金の工面も、えゝせぬと云ふは、腑甲斐ないと思やらうが、高の知れた茜や澁の細い商ひ。と云うて貸してくれ手もないこの時節。エヽ、口惜しいわいなう。

小梅　さう思はしやんすは尤もでござんす。最前弟の長吉が、爲替の金五十兩、受取つて來ましたと、見せた時のその欲しさ。餘所の子ならば捥ぎ取つて、お前に遣つて喜ばせ、苦を休めて進ぜうかと、ふつと思うた横着氣、罪を作るも金が欲しさ。こんな事を思ふと、世界に娘を殺したの、イヤ子を殺したのと噂するも、皆金が敵の世の中ぢや。皆こちらがやうに、金の欲しい衆であらうぞいなア。

由兵　ヤ、なんと云ふ。アノ長吉が金持つて來たと云ふか。

小梅　アイナア。

由兵　さうして、もう去んだか。

小梅　イエ〳〵、道の用心を思ひ、今夜は此方に泊つて居ますわいなア。

由兵　ムウ……オヽ、そりやよう泊めやつた。好い思案。取分けこの頃は物騷な。明日去んだがまし〳〵。イヤ、さてと何しよかい。今の事も今夜とつくりと思案して、是非とも出來ずば質屋へ渡つて、わが身の云やる通りの臺詞にせうわいの。

小梅　オヽ、それが上分別。一寸延びれば尋延びるとやら、

案じてひよつとお前が、煩らうてなど下さんしたら、わたしは元より、勝次郎さまやお吉さまは、誰れを力になさるゝ人はござんせぬわいな。これからはわつさりと、一つ呑んで、氣をはつたりとしたがよいわいな。
〽云へども何と答へさへ、女房の噂に長吉が、持參の金にとつおいつ、思案巷に分け迷ふ、思はず知らず女房が。

小梅　コレイナア、お前もマア、何を其やうに辛氣な顏して居やしやんすぞいなア。其やうに思案して案じたとて、今爰へ金があらう道理もなし、其やうに思はしやんせずと、酒一つ呑ましやんせんかと云ふ事いなア。

由兵　オヽ、成る程、氣休めに一杯呑まうわいの。酒があるか。

小梅　イエ〳〵、取つたのはござんせん。行て買うて來うわいな。

由兵　そんならこなから買うておぢや。

小梅　アイ〳〵。

ト德利を持つて、思ひ入れあつて

ツイ行て來ませうわいなア。

由兵　アヽ、イヤ〳〵、爰らの酒は惡い程に、アノ農人橋の酒屋で買うて來てたも。

小梅　アイ〳〵。

由兵　大儀ながら、一走り行てたも。

小梅　アノこちの人、遲いがよいかいな。

由兵　隨分遲いがよいわいの……酒がよう採めるさかい。

ト小梅、愁ひを隱し

小梅　そんなら行て來ませうわいなア。

ト門へ出て

由兵衞どの、長吉が來て居ます程に、氣を付けて下さんせえ……ドリヤ、行て來うか。

ト合ひ方。門の戸を由兵衞思ひ入れあつて、あたり見廻し門の戸を明ける。小梅、立つて居る。双方、顏見合せ、思ひ入れあつて

由兵　女房ども、まだ行かぬか。

小梅　エ、……サア、由兵衞どの、味な星がついと。

由兵　ヤア。

小梅　ドリヤ、行て來うか。

ト唄になり、小梅、ツイと走り入る。由兵衞、見送りて、こなしある所へ、長吉奧より出て

長吉　姉樣〳〵。

ト云ひ〳〵出る。由兵衞、ちやつと莨盆扣へろ。
オヽ、由兵衞さま。姉様は何所にでござりますえ。
由兵　オ　長吉、ようおぢやつたなう。
長吉　アイ、久しうお目にかゝりませぬ。お前様もお達者でおめでたう存じまする。
由兵　オヽ、わが身も達者でめでたい。今日はどつちへ行きやつた。
長吉　今日は平野へ、爲替の金を受取りに參りました。そして姉様には、何所へお出でなされましたえ。
由兵　イヤ、小梅は今使ひにやつた。長吉、爰へおぢや。
長吉　ハイ。
トうぢ〳〵する。
由兵　マア〳〵、爰へおぢやいの。
ト長吉、側へ行く。
そしてわが身は、今夜行かぬか。
長吉　イエ〳〵、夜が更けたれば内方に泊れと、番頭どのの云ひつけでござりまする。
由兵　ムウ、それがよい。もう日暮れ過ぎ。用心時分、ドレ、おれが寐床してやらう。
長吉　イエ〳〵、私しが好い時分にふせります。

由兵　ハテサテ、此方に泊る時は、マア安氣にしや。遠慮はない。ドレ〳〵。
ト押入れより蒲團を出し、ソッと脇差を出して後に隱し、蒲團を敷き、いろ〳〵あつて
サア、長吉、もう寐やらぬか。
長吉　イヽエ、まだふせりたうはござりませぬ。
由兵　ムウ、まだ寐たうないか。それもさうかい。まだ初夜で、爰では寐られもせまいか。長吉、今のはあるか。
長吉　今のとはえ。
由兵　ハテ、小判は其所に持つて居やるかと云ふ事いの。
長吉　アイ、爰に持つて居りまする。
由兵　ムウ、親方の物。隨分大事にかけたがよいぞや。
長吉　アイ、それおやに依つて肌身離さず、首に掛けて居りまする。コレ、御覽じませ。
〽見せたが因果をぞ髮の、立つ程欲しく女房の、歸らぬうちと脇差に、手をかけてはちつと引き、拔きかけては押し返す心は刃金時の鐘、初夜か半時氣は半亂。
由兵　ヤ、ナニ長吉斯うせうわいの。今からおれが送つてやるさかい、そろ〳〵去んだがよい。
長吉　イエ〳〵、明日でも大事ござりませぬ。姉様にもさ

う云うて置きましたわいな。
由兵　サア、泊める分は構はねど、ソレ、その持つて居やる物があるに依つて、もし盗人が入つて取られて見や、わが身も親方に云ひ譯がない。おれも又小兵衛さまへ濟まぬと云ふもの。マア／＼平に今夜は去にや／＼／＼。
長吉　イエ／＼、番頭どのが泊つて來いとの、云ひつけでござりまする。
由兵　サア、さう云はしやつても、おれが氣が休まらぬ。マア／＼、平に／＼。
トこの間合ひ方、いろ／＼臺詞あつて、無理に手を取つて花道へ連れ行く。
〽無理に引立て連れ行くも、家の騒ぎと近所の手前、途中で斯うと胸を据ゑ、連れ立ち出て二足三足。
由兵　イヤ／＼、矢ッ張り泊つたがよい。マア、ひよつと道で引ッたくられては、矢ッ張りおれが誤まり。
長吉　ハイ。
由兵　ムウ。よし／＼。マア／＼、戻りや／＼。
〽家へ誘ひ門口の、かけ金締めて打寛ろぎ。
サア／＼、ゆるりと居や／＼。ア、、この女房は、もう戻りさうなものぢやが。

〽云へど心は亂れ燒、拔きかけたる折柄に、蟲が知らすかとつかはと、戻りかゝりし女房小梅、門の戸けはしく打ち叩き。
トこれにて小梅戻り來る。
小梅　サア、戻つた明けて下さんせ／＼。
ト叩く。
長吉　ヤア、姉樣か。
ト行かうとする。
由兵　是非に及ばぬ。
ト長吉に切りつける。
〽急きに急いたる三方四方、うんとのつけに反り返る。胸に應へて門の戸を、引きしやなぐればかけ金外れ、明いた口さへ塞ぐ間の、ないにうろたへ由兵衛は、有り合ふ染め物手負ひにかぶせ。
由兵　オ、、サ、、酒を買うておぢやつたか。早かつた早かつた。
〽齒の根も合はぬ慄ひ聲、あたりの糊に驚ろく小梅。
小梅　由兵衛どの、長吉はどうしたぞいなう。
〽と云ふもうろ／＼駈け寄つて、それと見るより仰天し。

オヽ、長吉か。可哀や〳〵。

〽餘りの事に涙も出ず。死骸にひしと抱きつき、わつとばかりに泣き出す。

由兵　コリヤ、聲が高い。近所へ聞える。小の蟲を殺して大恩を報ずる今宵の仕儀。穩便にしてくれい。刀さへ取戻さば、弟の敵、存分になる程に、堪へてくれ女房。

〽事を分け理を分けし、詞に女房涙を押へ。

小梅　そりや聞えぬ由兵衞どの。お前の爲に御主人なれば、わしが爲にも御主人樣、その大事に及んだ今宵。わしさへ欲しいと思うた金、殺さしやんしたは、さら〳〵無理おやござんせぬ。さりながら、天にも地にも掛替へのない、たつた一人の弟を、見殺しにするわしが心、推量して下さんせ。コレ〳〵、コレ長吉、姉ぢや、小梅ぢややわいなう。さぞわしどもが憎からうが、コレ、妾をよう聞いてたも。最前話した刀の事、外の手へ請けさすと、お國のお主御一家中は、どうおなりなされうやら、其方が死んでこの金が、御用に立てばの、幾人ともなう命助かり、佛も及ばぬ慈悲善根。それをせめての心ゆかしに、コレ、お念佛申してたもや。

〽縋り嘆けば眼を開き。

長吉　姉樣、わしや切られいでも、死なねばならぬ事があるわいなア。

小梅　ムウ。なんと云やる。死なねばならぬ事があるとは、そりや又、何ゆゑに、どう云ふ譯。

長吉　さればいなう。この中お前に逢つた時、段々の話し。痩せるも金ゆゑ貧ゆゑと、聞いた時の悲しさ。どうぞと思へど心に任せず。この金は、盜んで來たわいなア。

由兵　ヤヽ、なんと。

小梅　そりや又、どうしていなう〳〵。

長吉　サア、奉公に行た時より、御寮人のおみちさまが仰しやるには、わしが云ふ事聞くならば、なんなと其方の欲しい物やらうとふ事。又わたしは親方の娘御、咬なかしては濟まぬと思ひ、返事もせずに居ましたが、この間お前の話し、金が要ると云はしやんす。見ればお顔もたんとやつれる。もし煩らうて下さんしてはと、おみちさまを頼み、お前の仰しやる事、なんなりとも承りませう程に、どうぞ金五十兩下さりませと云うて、勿體ない、御寮人樣を騙して、盜んでもらひましたわいなア。

小梅　ヤア〳〵、さう云ふ事であつたかいなう〳〵。

ト泣く。

長吉　サア、來ると進ぜうと思へども、親方の物臘一本、粗末にすなとの御意見、どうも遣らうとえゝ云へず、もし叱らしやんすかと思うて居たわいの。たつた一人の姉様、なんぼ權孝行にしても仕飽きない……この金をお前に渡し、お前の手から由兵衞さまへ上げまして、隨分達者で仲ようして下さりませえ。お前に渡したその後で、わしや直ぐに身を投げて、最期は小橋の野中の井戸……わしや來しなに死ぬる所まで、見て來ましたわいなう。

〽しやくり上げたる有樣に、小橋は身も世もあらればこそ。

小橋　コレ、由兵衞どの、聞いてかいなア。こちらが難儀が悲しさに、遣らうと思うて貰ふた金ぢやといの。

〽その優しい志し、聞けば聞く程惨らしい。

由兵　兩親に別れてより、其方もわしも難行苦行。もうこれ間で年が明く。

〽年は幾つと指を折り。數へて待つたこの姉が。

〽連れ添ふ夫が殺すとは、釋迦でもよもや御存じあるまい。

〽世界の因果が固まつて、夫婦ともなり、兄弟とも、

〽生れて來たかと身をもだへ、泣くこそ道理なれ。由兵衞は長吉が、志しを聞くにつけ、胸に磐石押さるゝ心地、涙隱して。

由兵　コリヤ長吉、思ひ設けし事なれば、どのやうに恨まれても、無理とはさら〳〵思はねども、追ツつけ繩目の恥を請け、後より續くこの體。切れども突けども今は云はぬ。恨みは冥途で晴らしてくれ。コリヤ、堪忍してくれいよ。

長吉　どうで死ぬるこの體。お前のお手にかゝるは本望。便りのない姉樣を、頼むは由兵衞さま、見捨てゝ進ぜて下さりますなえ。

由兵　オヽ〳〵、長吉、外に云ひ置きたい事はないか。なんなと云や〳〵。

長吉　アイ、云ひ置きたい事はなけれども、たつた一つの氣がゝりは、おみちさまを騙したが。

〽後云ひさして懐の、金投げ出して落入れば、わつと泣き出す小橋を押へ。

由兵　コリヤ女房、その泣き聲が外へ洩れては、惨い目見た甲斐がないがや。

〽制し宥むる折柄に、渡邊橋より伯母の迎ひ、提灯下げ

て門口より。
福助　木橋屋のお家様、お迎ひに參じました。
〽耳を突裂くどつてう聲、奥へ聞えて立出づる、伯母は涙の障子押開け。
さよ　コレ由兵衞、先刻にから爰に居て、殘らず聞いた今宵の譯。武士の奉公した程あつて、町人の汚ない氣とは、格別違うた夫婦の心。その上に長吉とやらの志し、姉を思ひお主を思ふ、思ひは伯母が思ひの種。只この上はコレ、由兵衞爰ばかりに日は照らぬ。江戸長崎へも立越え、身を全う持つてくれ。野口や芝田で顔見やうかと、思へば思へばコレ、逆樣に回向をさしてたもんなや。
〽わつと嘆けば由兵衞も、これ今生のお別れと、云はず別るゝ伯母甥の、嘆きは果しなかりける、涙を拭ひ氣を取り直し。
コレ、夫婦の衆、そんならもう去にまする。ア、、思へば夢の世の中。ア、、南無阿彌陀佛々々々々々々。
〽回向する身と白髪の伯母、小者引連れ立歸る、後見送りて由兵衞は。
　トおさよ歸る。由兵衞、思ひ入れあつて
由兵　コリヤ女房、人の見ぬ間にこの死骸を、早う〳〵。

小梅　ほんにさうでござんす。我れと我が手に死場所を、見て來たと云うたが遺言。野中の井戸へ葬むつてやつて下さんせ。わたしもとも〴〵野邊送り。
〽押入れ明けて取り出す、結構はつこの下帷子、この子に着しようとて買ひ置いたが、經帷子になつたるかと、涙ながらに着せ替へる、水はぢきにと由兵衞が、澁紙出して上包み、天秤の代り澁桶の、蓋はなくとも二人して、擔うて行くが葬禮の、志しぞと抱へ入れ。
斯うならうとは知らずして、姉樣わしはこの暮れに、宿を入れたら大人役。もうお前の苦にならぬと、嬉しがるのを聞くにつけ、來る正月の藪入りに、おとなしい顔見やうものと、思うた事も皆仇事。
由兵　思へば因果な姉弟持ち、敢へない最期遂げるとは、不便ともいぢらしいとも、云ふに云はれぬ今宵の仕儀。由兵衞が身に迫る、切ない事を聞き兼ねて、救ふ心で見せた金。ほんの譬へのかさに水。あまり欲しさの出來心。これも忠義が立てたいばかり。
小梅　お主の爲、夫の爲、弟一人に替へはしませぬ。
由兵　人目に立てば長吉が、心も無足、迷ひの種。
小梅　何事も約束事。後弔らふが未來の爲。

由兵　サア〱、早う野邊送り。

〽勇められても立ち兼ぬる、夫を先へ押立てゝ、歩むは野中死出の道、涙ながらに回向もん。

兩人　南無阿彌陀佛。

〽頼むは彌陀の極樂や、聚樂の町の夜の露、消えなん身こそ。

ト三重にて、返し。

造り物、手摺り三段、見付け遠見の庵室。杉松稻村など、すべて小橋野中の體。在郷唄になり、道具とまると、見付けの庵寺に火を灯し、坊主の影法師にて、叩き鉦を打つ。トこのキッカケにて

〽心も空も闇の道、果敢なき梅の由兵衞は、金が敵か憎からぬ、妻の弟の長吉を、無慘ながらも手にかけて、殺す刃の主思ひ、殺されし身は姉思ひ、夫思ひにかきくれし、小梅はせめて弟の、望みも叶へ明けぬ闇と、何のしがくも亡骸を、隱す人目の澁荷桶、差擔ひたるもろ涙、夫婦が肩を入れ違ひ、右と左の手には珠數、繰り事ながらとぼ〱と、心ばかりの野邊送り、小橋をさして行く道の、爪先上がり高原の、煙に包む瓦竈、明りの立たぬ我れ〱と、咽びくゆる胸の内、いづれ果敢なき野嵐の、吹かぬその間の身に浸みて、惜しや暫しの薄き縁、名殘りの涙せきかねて、歩み惱みつ行き惱む、兎かう詞もないじやくり、肩と肩とに闇つゝき、こたへて下へどつさりと、落す澁荷は仇し野の、露と消えにし長吉が、死骸に取りつき縋りつき、夫婦は顏を見合せて、涙しぶしの樋の緒に、したふ雫の雨やさめ、さめ〲涙に咽びけり。

ト右の唄のうち、由兵衞、小梅、澁桶を荷ひ出て、心意氣の仕打ちにてよろしくある。道具は始終靜かに引いて居る模樣。好き所にてとまる。臆病口の方へ井戸突き出す。遠見、野中の觀音の體になり、合ひ方よろしくあつて

小梅　ナウ由兵衞どの、こなたが手にかけ殺さいでも、どうでこの子はその金ゆゑ、死ぬる合點と末期の詞。

〽例へ得心せぬとても、大事の〱お主の爲に、可愛い男の苦に病んで、才覺ならぬ手詰めの役に、立つて死んだらわしや嬉しいと、返らぬ事をくど〱と、女心の遣る瀬なき、喞ち涙ぞ哀れなり。

由兵　その嘆きは理り。おれも可哀や長吉を、露聊かも殺

す氣は、なんのあらうぞ。其方の爲に弟なら、おれが爲には子も同然。なんの憎う思はうぞ。退引きならぬ手詰めの難儀。金ゆゑに命を取られたも、金が敵と諦めて、コリヤ、せめて未來の成佛してくれいよ。貧苦なおれに繋がつた、其方も因果、殺された

トあたりを見て

長吉は猶因果。この金で刀さへ取返し、勝次郎さまさへ世に出しましたら、その上で命の恩は、この由兵衞が命で送るぞよ。女房、長吉の敵を取つてやつてたも。

トいろ〱愁ひのこなし。

小梅　エヽ、そりや聞えぬ由兵衞どの。敵を討つ心なら、なんの命まで斯うして居ましよ。お主の爲にさんした事、なんの惡う思ひましよ。短氣な事云はずとも、命全うして下さんせいなア。

由兵　イヤ〱、例へわが身の弟にもせよ、手にかけたれば科は遁がれぬ。天道の網のかゝらぬうち、この死骸を葬むつて、その後でのおれが思案。マヽ、泣かずとサア早う。

ト云ふ間にもしや餘の人に、見咎められては長吉が、願ひも背く迷ひの種、おれも泣くまいこなたもと、勇められても立ちかぬる、我れが嘆きの後ろ影、見する辛さに後方も、かき亂したる縺れ足、小橋をさして急ぎ行く。

トまた道具引き、好き所にてとまる。ト内より返せ太鼓。この音に驚ろき、兩人、桶を荷ひて、よろしく立ち身、よき見得にて。

幕

茜染野中の隠井（終り）

「茜染野中の隱井」初演太夫連名

上の卷　豐竹湊太夫
　　　　豐竹和佐太夫

中の卷　豐竹河內太夫
　　　　豐竹越前少掾

下の卷　道行　豐竹越前少掾
　　　　ワキ　豐竹駒太夫

おそめ
久松（ひさまつ）

新板歌祭文（しんばんうたざいもん）



澤村訥升の娘お染

新板歌祭文

野崎村の場

役名――野崎村の久作。丁稚、久松。手代、小助。油屋娘、お染。母、おしづ。下女、およし。母、お常。娘、お光。

本舞臺、三間の間、中足、藁葺き屋根、本縁附き。正面暖簾口、上手三尺の佛壇、內に六字の懸け物、小机に古き打敷、この上に鶴龜の蠟燭立、松を差したる花瓶、香爐など佛具よろしく飾り、この下押入れ戸棚、下手鼠壁、破れたる屛風を立て、大和風呂に藥土瓶を掛け、丸盆に茶碗、藥包み載せあり、上の方に一間の障子屋體、いつもの所、藁葺きの門口、この側に臺幹の梅。下手蘆原、後ろ在體、川ある遠見。すべて野崎村久作內の體。爰に百姓麥六、同畔作、袖無し羽織、象股引、百姓にて煙草をのみ居る。在鄕唄にて幕明く。

〽年の內に春を迎へて初梅の、花も時知る野崎村、久作といふ小百姓、忙しき中に女房が、膈の病に村方から、見舞に來る、百姓仲間。

麥六　なんと畔作、この家の久作どのは、もう六十でもあらうのに、ついに煩うた事のない頑丈な人ぢやて。

畔作　その代り又阿母が、年が年中藥三昧、たうとうしまひが、百日限りの膈の病。

麥六　去年の秋からぶら／＼して、長々の病氣だに、感心なのはお光坊。親子とは云ひながら、よう介抱をするではないか。

畔作　ほんに器量と云ひ心立て、よう介抱をする。この在所には惜しいもの。それを今に女房に持つ、あの久松は仕合せ者。

麥六　ところが人の噂を聞けば、奉公に行た油屋の內のお染とやらと乳繰り合つて居るとの事。可哀さうなはお光坊だ。

畔作　それでは今に年季が明けても、この在所へは歸るま

い。その油屋へ縁婚で、娘と夫婦になるであらう。

麥六　斯う云ふ譯のある事も、内では誰れも知らぬかして、年が明けて歸るのを、指折り數へて待つての樣子。

畔作　そりや氣の毒な事ぢやな。

〽賤牛ゝ中の間から、娘お光は立ち出で、

ト奧よりお光、在所娘、好みの拵らへにて、盆に茶碗を載せ、持ち出て

みつ　オゝ、こりや誰れかと思うたら、麥六さんに畔作さん、ようお出でなさんしたな。

麥六　雪催ひで寒いゆゑ、阿母はどうぢやかと、ちよつと見舞ひに寄りました。

畔作　變る事はござらぬかな。

みつ　お醫者樣のお加減で、この二三日は食事も進み、マアよい方でござんすわいなア。

麥六　それは何よりよい事だ。一夜明くれば段々と、暖かにもなつて來れば、病も去つて癒るであらう。

畔作　定めて如在もあるまいが、神や佛を信心して、御利益を願ふがよい。

みつ　アノ觀音樣へ去年から、日參をして居りますわいな。

麥六　只さへ忙しい年の暮、神信心や藥の世話、さぞ忙しい事であらう。

畔作　さうして久作どのは、内でござるか。

みつ　アノ父さんは寒いので、炬燵に寢てゞござんすゆゑ、ちよと起して來ようわいな。

畔作　アゝ、イヤ〳〵、起すには及ばぬわいの。目が覺めたら二人して見舞ひに來たと、云つて下され。

麥六　今年とてももう僅か。うか〳〵しては居られぬわい。

ト門口へ出る。

みつ　そんならもう、お歸りてござんすか。

二人　また明日尋ねませう。

〽鍬をかたげて霜解けの、道をはか〳〵立歸る。

ト麥六門口の鍬を擔ぎ、畔作附いて下手へ入る。お光、組板庖刀を出し、笊に入れたる人參大根を出し皮を剝ぎ居る。

〽冬編笠もふすぼり三味線、壺も素股の彈き語り。

ト在鄕唄の合ひ方になり、花道より讀賣、背流し下駄がけ編笠をかぶり、三味線を彈きながら出て來り、直ぐに無禮門口へ來て

讀賣　サア／＼、これは御評判の繁太夫節、お夏清十郎の道行。お子様方にも讀み易き、中は平假名五行本、上下綴本で僅か十二錢のお手取り。先づ一くさりやりませう。

ト三味線を彈き。語る。

〽東からげのかいしよなき、こんな形でも五里十里。

ト淨瑠璃を語る。お光、これを聞き

母さんの煩ひで、三味線どころではござんせぬ。まして仕掛けた用があつて、手が塞がつて居れば、通らしやんせ。

トこれに構はず

讀賣　〽清十郎涙ぐみ、お夏が手を取り顏打眺め、同じ戀とはいひながら、お主の娘を連れて退く、これより上の罪はなし。

ト里芋の皮を剝きながら、これを聞きお光、氣になる思ひ入れにて

みつ　オヽ、コレ、聞きともないその淨瑠璃、通れと云うたら通らぬかいの。

〽通りや通りやと云ふ聲に、久作納戸を立ち出でて。

ト暖簾口より久作、着流し、好みの拵らへ、藁苞を持ち出て來り。

久作　オヽ、あの讀賣の淨瑠璃は、いま大坂中で專ら流行りの歌祭文。其方にも聞かせたけれど、病人の氣に障るであらう。せめて本なと買うてやらう。讀んで氣晴らししやいの。

〽義理ある中も子を思ふ、惠みは厚き古合羽、煙草入れを探り見て。

ト此うち久作、二重へ苞を置き、門口へ來て讀賣に

コレ／＼讀賣どの、一册買ひませう。いくらぢや。

讀賣　それは有り難うござります。十二銅でござります。

久作　オヽ、煙草入れに十二文位あつたわい。

ト腰の煙草入れより錢を出し

板行はよいかの。

ト錢と本とを引換へにする。

讀賣　新版に出來たばかり、二三日後から賣り出しました。

久作　日短かでこなた衆も、在所廻りは大儀ぢやの。

讀賣　どうで遊び半分でござります。サア／＼これは評判の繁太夫節ぢや。お夏清十郎の道行ぢや、道行ぢや。

〽呼び聲高く讀賣は、隣り村へと急ぎ行く。

ト讀賣よろしく、三味線を弾きながら下手へ入る。

〽後には久作本打見やり。

ト作の本を見て

久作　なんぢや、「お夏淸十郎、道行戀の濡草鞋」コレお光、さ見やれ。この本に書いてある、お夏が手代の淸十郎と、念頃をして姬路をば、駈落ちをするその道行。ア、同じ娘でも世は樣々。感心なのはお光、其方ぢや。この在所の娘達は、開帳參りぢやの、遊山ぢやのと出歩くうちに、其方に限つて、芝居一つ見に行かず、去年からの大病に、目の見えぬ婆の介抱。達者なおれが食物まで氣を附けてくれる孝行娘。もし疲れでも出ようかと、おりやそれが案じられるわいの。

みつ　ア、勿體ない事云はしやんせ。煩うて居やしやんす母さんより、まめなあなたのお心苦勞。せめてもの手助けと、思うてばかり役には立たず、そんな事苦に病んで、わたしよりモシ父さん、お前煩うて下さんすな。

久作　なんのおれが煩はう。生れてから今日が日まで藥服んだ事がない。イヤ、藥と云へば婆の大病、百日といふ限りのある腸の病も、玄庵どのゝ加減の藥で、今朝から粥に輕く盛り、重湯が二杯通つたが、見かけによらぬ巧者な醫者ぢや。

みつ　ほんに、さうでござんす。玄庵さまのお藥が、性に合つたか少しでも、心持ちがよい樣子。

久作　オヽ、よい次手に丁度幸ひ、日和もよければ今から、久松の親方へ、歲暮の禮に行つて來る程に、婆に氣を附けてくりやれ。

〽云ひつゝ脚絆草鞋がけ、紐引きしむれば。

ト久作、戶棚より脚絆甲掛けを出し、二重の下にて支度する。

みつ　エ、マア、父さんとした事が、もう晝過ぎでござんせうに、この短い日に瓦町まで、明日の事になさんせいなア。

久作　イヤ／＼、思ひ立つたが吉日ぢや。年こそ寄つたれ大丈夫、この足に覺えがある。日暮までには戾つて來るぞや。

みつ　そんならどうでも、行かしやんすか。

久作　又と云つても日が無ければ、ちよと行つて來ようわいの。

みつ　さうして、お歲暮の御祝儀には。

久作　御祝儀には、掘つて置いた山の芋のこの藁苞。

ト以前の藁苞を見せ、草鞋を穿きながら
ほんに山の芋は鰻になる。主は今に久松が、年が明けば
女房になる。それ樂しみに、よう留守せい。
トよろしく門口へ出て
ヤ、えいとこな。
〽藁苞脊負ひ、表へ出でゝ立ちどまり。
今年は取分けいつもより、早う咲いた庭の梅、何よりか
より好い土産。
ト云ひつゝ門口へ出て梅を折り、苞へ差し苞を脊負ふ
事あつて
ヤ、ヨコリヤシ。
〽藁苞肩に表へ出でしが、又立ちどまり。
そんなら娘、行て來るぞよ。
みつ　早う戻つて下さんせ。
久作　一時三里は犬走りぢや。
〽足もひよこ〳〵野崎村、後に見なして出でゝゆく。
ト久作、手洟をかみ、思ひ入れあつて花道へ入る。
〽影見ゆるまで見送りて。
ト床の合ひ方になる。
みつ　賴みに思ふ母さんは、膈の病に兎や角と、心も心な
らぬのに、年が明けたら女房にせうと、アノ父さんは云
はしやんすが、噂を聞けば久松さん、お娘御のお染さん
と、疾から譯があるとやら。在所育ちのその上に、不束
なわたしゆゑ、嫌はれるのは知れてはあれど、さうなつ
たら母さんが、さぞや氣をば揉ましやんせう。どうぞ病
に障らぬやう。惡い事はなるたけに、聞かしともないも
のぢや。ほんに詰まらぬ事で、二服目のお藥が遲うなつ
た。ドレ、煎じにかゝらうか。
〽お光は明暮れ久松が、事のみ思ひ兎や角と、胸に一杯
半分の、水量り込む藥鍋、一へぎ入れる生薑より、辛い
面つき手代の小助。
ト此うちお光、藥土瓶へ水を量り入れ、藥を仕掛ける。
よき所にて在郷唄になり、花道より久松、着流しにて、
悄々と出て來り、後より小助、羽織尻端折り股引にて、
久松をせりたて出て來る。
小助　コレサ〳〵久松、日は短かいに、さうのろ〳〵と歩
かずと、もつとサッサと歩かねえか。さうして內へは、
まだ餘ツぽどあるのか。どこまで行くのだ。
久松　サアもう直でござります。つい向うに見えますのが、
あれが內でござります。

小助　ムウ、成る程、門口の梅が印だと聞いたが、あの梅の事か。そんなら直だ。サッサと行くがいゝ。
久松　ハイ〱。參りませう。
小助　サア、早く行け。
〽久松引立て門口から。
　ト二人よろしく門口へ來て
小助　久作どのは、内にござるか。
みつ　アイ、どちらからお出でなされました。
小助　オヽ、油屋から來ました。
〽云ひつゝヅッと内へ入れば、お光は見るより。
　ト小助、久松を突きやり内へ入る。お光見て
みつ　ヤ、久松さんか。
久松　お光どの。
　ト面目なき思ひ入れ。
みつ　ようマア、戻つて下さんしたなア。
　ト小助を見て
定めてあなたは送りのお人、ぬるくともお茶一つ。
〽お茶よ煙草と嬉しさに、立つたり居たり氣もそゞろ。
　トこれより砧の入りし合ひ方。お光はいそ〱思ひ入れ。

小助　エヽ、やかましい。靜かにせぬかい。薄汚ない在所の茶を、この小助は飲みには來ぬ。追從せずと聞いて置け。この久松は大それた、親方の金を、一貫五百匁くすねたゆゑ、今日内へ連れて來たは。久作と三つ鼎で、その金を詮議するのだ。サア、親仁を出せ〱。
〽と辰巳上がり、身の誤りに久松が、差俯いて詞さへ、ないのはもしやと思ひながら。
　ト久松チッと思ひ入れ。お光、もしやと思ひ入れ。
みつ　なんのマア久松さんに限つて、よもやさうした事はござんすまい。大方それは何ぞの間違ひ。コン、久松さん、覺えがなくばないといふ、ツイ云ひ譯して下さんせいなア。
小助　エヽ、いゝ加減に喋べりやアがれ。コリヤヤイ、頭こそ前髮だが、その素早さといふものは、傍輩に遠慮もなく、箱入りのお娘まで。サア、この後は云はずとも、大概知れたお定まり。主ある者を盜む程な、泥坊根性のある素丁稚め、なんの云ひ譯あるものか。小倉の屋敷で受取つた、爲替の金の一貫五百匁、お役人から改めて、渡つた金は正眞だが、内へ歸つて出したは銅脈。歸り道で摺替へた、これが品玉の太夫、早咲久松でござりす。

ト これにて久松ムッとする。

なんだ〳〵、この小助を睨んで、斯う云はれるが口惜しいか。

久松 サア。

小助 口惜しくば、金を返せ。

久松 サア。

小助 その金はあるまいがな。

久松 サア。

小助 所詮わいらでは解らぬ話しだ。サア、久作はどこに居る。

みつ サア、その父さんは、留守でござんす。

小助 なんの居ぬ事があるものか。出さずばおれが引出してくれう。

〽駈け行く袂を、久松引きとめ。

ト 行かうとするを久松とめて

久松 成る程、金を摺替へられたは、この久松が不調法ゆゑ、身の明りの立つまでは、在所へ行けと有り難い、後家御様の思し召し。それを其方が此やうに。

小助 ヤイ〳〵、そりや何を吐かすのだ。手前勝手の間違ひ、おれには詮議をしぬいて來いと、後家御様から内證の云ひつけ。それだに依つて詮議をするのだ。

〽大聲上げるを、お光は押へ。

みつ さう云ふ事なら仕方もなけれど、煩うて居る母さんに、よい事でもない事を、聞かせましたら病の障り。どうぞもつとお靜かに。

小助 イヤ、靜かには云はれない。家内中へ聞えるやうに、大きな聲で奴鳴るのに、聞えぬ振りをして居るからは、親仁も共謀の仕事だな。

みつ イエ〳〵、父さんはあなたの方へ、歳暮の御禮に行かれましたが、どうして道が違うたやら、もし持病でも起りはせぬか。

〽外も氣がゝり病人の、聞えも氣遣ひ久松が、身の云ひ譯に差込みたる、癪を覺えるばかりなり、折から親の久作が、道引返して息せき、歸る我が家の門の口、内には小助が弱身を付け込み。

ト 此うち久松は是非なく俯向いて居る。お光、心遣ひのこなし。

小助 さて〳〵女子供といふものは、譯の解らぬ者だわえ。いま聞きやア大坂まで行つたと云ふが、誠に大坂へ行つたなら、否でも應でも來る道で、逢はねばならぬ久作、

だ。そんな間に合せを食ふものかえ。ドレ、家捜しをしてくれう。

みつ　マア／＼待つて下さんせ。

小助　エヽ、面倒な。

〽邪魔ひろぐなとお光を引きのけ、取りつく久松面倒なと、踏むやら蹴るやら無法の打擲、なんと詮方なき折から、門口窺ふ久作が、小助を引きのけ突き飛ばし。

ト此うち小助、奥へ行かうとする。お光久松支へる立廻り。よき程に花道より以前の久作、足早に出て來り、門口よりツカ／＼と内へ入り、小助を突き倒す。はずみにてボンとかへる。久作キツとなり。

久作　留守の間へ來て、わつぱさつぱ。樣子に依つては免さぬぞ。

〽腹立ち紛れの掃き掃除。

ト お光、箒を持ち掃き下ろす。久作、埃を拂ふ。

久松　ようマア、戻つて下さつたな。

みつ　さうしてお前は、どうして内へ。

久作　用外れの曲り角で、道が違うて留守の間へ、お前の息子が歸つて來たと、若い者が知らしてくれたで、引返して戻つて來たわえ。

みつ　オヽ、よう戻つて下さんした。最前から久松さんを。

久作　オヽ、よいてや。久作が戻るからは、何も恐ろしい事はない。

小助　一貫五百匁引負はした、この久松を詮議に來た。小助は云はゞ主人の名代、それをわりやなんで投げた。

久作　これは又迷惑な、ひばり骨見るやうな手で、血氣盛んなこなさんを、なんでわしが投げようぞ。

小助　それでもたつた今。

久作　ハテ、投げたのではない。今のは怪我ぢや／＼。それそれ、そこへ爪づいて轉んだのぢや。ナウ娘。

みつ　アイ／＼、さうでござんす。

久作　ハヽヽヽ。

小助　なんだかだみに醉つたやうだ。

久作　それはさうと久松は、引負ひゆゑ戻つたのか。

久松　ハイ。

ト 面目なき思ひ入れ。

久作　アヽ、それ聞いて落ちついた。マア／＼、何は差措いて、傍輩衆のお世話であらうと、蔭ながら云うて居ました。寒い時分に久松を、よう連れて來て下さつた。コ

レお光よ、茶なと酌んであげぬかい。

小助　エヽ、落ちつき自慢措いてくれ。コレ、夢にも見た事もあるまいが、金高は一貫五百匁、子の科は親にもかかる、耳を揃へて金を出すか。但しはお上へ願はうか。二つに一つの返事を聞かうか。

久作　ハテ、よいわいの。其やうに息精張るは大きな毒。兎角人間はゆつくりと、氣を長く持つのが藥ぢや。ヤ、その藥で思ひ出した。土産にせうと持つて行た、この山の芋をとろゝにして、出來合ひの麥飯を參らんかの。

ト以前の藁苞を出す。

小助　エヽ、いゝ加減にしろ。見掛けばかりの正直倒れ。麥飯のとろゝと、ぬら〳〵とは抜けさせぬ。

〽あんだら臭いと蹴散らす藁苞、破れてガラリと出る丁銀。

ト小助、藁苞を蹴返す。中より金包み出る。

ヤア、この金は。

久作　ソレ、久松が引負ひした、金渡したら云へ分があるまい。とッとゝ持つて云なつしやれ。

〽聞いてお光も久松も、思ひがけなき驚きに、小助もぎよつとしながらも、包みを改め。

ト久松お光思ひ入れ。小助、金包みを改め

小助　思ひがけない一貫五百匁、出惜い所からよう出たな。受取るからは云ひ分ない。

久作　オヽ、其方の云ひ分なくば、此方にグッと云ひ分がある。

小助　ヤ。

ト悔り思ひ入れ。

久作　とサア、云ふも古いものぢや。これ迄長く久松めが、お世話になつた親方様、御恩こそあれ恨みはなけれど、人に騙され取られた金、惡遣ひの引負ひのと、惡い名を附けられては、どうも世間の手前が濟まぬ、と云うで無理暇取らうと云ふではない。親のわしがしつかりと、預かつて置く程に、この通り云うて下され。アヽ、もう二十年おれが若いと、われにはしつかり馳走もあれど、それも入らぬ殺生ゆゑ、サア〳〵早く歸らつしやれ。

〽云はれてどうやら、底氣味惡く。

小助　ムウ、金の出入りさへ濟んでしまやア、外に用事はない。さらばお暇申さうか。

〽打違取出し捻込み押込み。

ト胴卷を出し金を入れながら

ハアテ、命冥加な一貫五百匁、内へ歸つて出した時、蟇蛙にならにやいゝが。

久作　エヽ、いらぬ仇口まかずとも、足許の明るいうち。

小助　オヽ、歸らいでどうするもので。この金はお主の物、體は頭の天邊から、足の爪先までおれの物。おれが足でおれが歩いて、おれが歸るに、グッとでも云ひ分はない筈だ。

〽減らず口してとつぱくさ。門口柱で頭をかつちり。

アイタヽヽ。

ト門口で頭を打つ。

久松　どうぞなされましたか。

小助　エヽ、どうせうといらざる世話だ。おれが頭でおれがぶつたのだ。うぬらの世話になるものか。グッとでも云つて見ろ。

〽あいたし小助は足早に、大坂さして立歸る。

ト小助、頭を押へ、足早に花道へ入る。

〽お光は親の氣を兼ねて、いらへなければ久松摺りより。

ト あと合ひ方になり、久松、思ひ入れあつて

久松　親仁樣にお目にかゝるも、面目なきこの身の越度。覺えなけれど引負ひとて手詰めになりし爲替の金、お辨まへ下されたので、今の難儀は遁がれたが、少しの金でもある事か。此お暮しで一貫五百匁、定めて後の御難儀か。

久作　ハテ、おれぢやとてそれ相應、用意して置くまいものか。今渡したあの金は、始末して貯めて置いた、御本山へ上げる冥加金。まだあればかりでもない程に、必らず氣遣ひせぬがよい。イヤ、改めて云ふではなけれども、末は女夫にする約束で、婆が連れ子のこのお光、もう年頃にもなつたれば、折もあれば親方へ、暇の事を願はうと、疾から思うて居たところ。これがほんの勿怪の幸ひ。もうお店へは返しはせぬ。早速ながら日柄もよし、今日祝言の杯さすぞよ。

久松　エヽ、すりや、お光どのと。

ト 恟りしたるこなし。

久作　かねての約束、承知であらうな。

久松　ハヽア。

ト 當惑の思ひ入れ。

久作　なんとお光、嬉しいか。

みつ　これが嬉しうなうて、なんとしませう。

久作 早う二人に世を渡し、この白髪をば剃りこぼち、頭を丸めて後生願ひ、疾からお寺へお願ひ申し、袈裟や衣も受けて置いた。幸の餅は搗いてあるし、酒も組重も正月前で、ちやんと用意がしてあるわえ。

〽藪から棒を突きかけた、親の詞に吐胸の久松、知らぬ娘は嬉しいやら、又恥かしき殿まうけ、顔は上氣の茜裏、袂くはへるお初心さを、見るにつけても今更に、否應ならぬ親の前、急に思案も出ぬ口の、鬱にいの字をかき一
〽重。

ト此うち三人はよろしく心々の思ひ入れ。

こちらの事に取紛れ、婆が一人で淋しかろ、久しぶりで久松にも、逢うてこの事聞かしたら、藥よりも利目があらう。コレお光、俯向いてばかり居ずと、鱠でも刻んで置け。サア、久松おぢや。

〽喜び勇む親の氣を、知つて破らぬ間に合紙、襖引立て入りにける。

ト久作先に、久松、是非なき思ひ入れあつて、上手屋體へ入る。

〽後に娘は氣もいそ〳〵。

みつ 日頃の願ひ叶うたも、天神様や觀音様、第一には親のお蔭。ヱヽ、こんな事なら今朝あたり、髪も結うて置かうもの。

〽鐵漿の附けやう挨拶も。

どう云うて、よからうやら。

〽覺束なます拵らへも、祝ふ大根の友白髪、末菜刀と氣も勇み、手許も輕うちよき〳〵〳〵、切つても切れぬ戀衣、元の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、後を慕うて野崎村、堤傳ひにやう〳〵と、梅を目當に軒のつま。

ト此うちお光、以前の俎板にて大根を刻み居る。花道よりお染、振り袖、好みの拵らへ。およし、着流しにて甲斐絹の風呂敷包みを持ち、日傘を相合ひにさして出て來り、花道にて

そめ コレおよし。早う久松に逢ひたいが、久松の内はまだかや。

よし 寒い時分の野崎參りも、觀音様より久松どのが、御信心でのお參りゆゑ、いま舟の上り場で聞いて參つた戸の梅、慥かにあれでござりませう。

そめ そんなら向うの家かいなう。

よし 外に家もござりませぬ。向うに違ひござりませぬ。

ちよつと聞いて參りませう。

そめ　ア、コレ、靜かにしやいなう。久松に逢ひたさに、來る事は來ても在所の事。人目に立つては惡いゆゑ、其方は舟で待つて居や。

よし　イエ〳〵大事の御寮人樣、どうして一人あげられませう。

そめ　ハテもう、向うが家なれば、案じる事はないわいの。

よし　そんならちよつと門口まで、お送り申して參りませう。

そめ　イヤ〳〵それには及ばぬ程に、早う舟へ行きやいの。

よし　それ程に仰しやいますなら、これでお別れ申しませう。

そめ　オヽ、さうしてたもいなう。

よし　ドレ、お舟でお待ち申しませう。

〽とつかは舟場へ急ぎ行く。

　トおよし、引返して花道へ入る。

〽後にお染は立ち寄る門口。

　トお染、門の外へ來り、よろしく思ひ入れあつて

そめ　申し、ちとお頼み申しまする。

〽云ふも怖々門口越し。

みつ　どなたでござんすか。御用なら、お入りなされませ。

そめ　アノ、久松さんといふは、內方でござんすかえ。

みつ　アイ、此方の家でござんす。

　トこれにてお染、門口を明け

そめ　左やうなら、久松といふ人が、今日戾つて見えた筈。ちよつと逢はして下さんせ。

〽云ふ詞つき形かたち、常々聞いた油屋の、さてはお染と悋氣の初物、胸はもや〳〵かき交ぜ鱠、爼板押しやり戶口に立ち寄り。

　トお光、二重より下り、お染を見て、悋氣の思ひ入れあつて、また二重へ上り、上手を屏風にて仕切り、見えぬやうにして、庖刀を持ち叩き立てる。お染は見えぬ振りして居る。

みつ　ア、見れば見る程美しい、アタ可愛らしいその顏で、久松さんに逢はしてくれ。そんなお方はこちや知らぬ。餘所を尋ねて見やしやんせ。

〽阿房らしいと腹立ち聲、心附かねば、

そめ　ほんにマア、なんぞ土産と思うたれど、急な事ゆゑ
コレ女子衆、さもしけれども、これなりと。
ト云ふ。又お光二重より下りてこなし。
〽夢にもそれと白玉が、露を袱紗に包みの儘に差出せば。
ト お染思ひ入れあつて、懐中より緋の袱紗包みの香箱を出し、門口より出すを、お光ひッたくり
みつ　こりやなんでござんすえ。大所の御寮人様、様、様と云はれても、心が到らぬ措かしやんせ、在所の女子と侮つてか、欲しくばお前に上げうわいなア。
〽やら腹立に門口へ、抛ればほぐれてばら〳〵と、草に露銀芥子人形、微塵に香箱われ出した、中へほか〳〵親子連れ、出て來る久松、
ト お光、腹の立つ思ひ入れにて袱紗包みを門口へ抛り出す。袱紗解けて香箱より小粒出る。これにてお染、恟り思ひ入れ。上手の屋臺より久作久松出て
久作　コレお光よ。もう鱠は出來たであらうな。今も奧で祝言の事、婆に云うて聞かしたら、それはそれはきつい喜び。早う隱居がしたいわえ。丈夫なやうでも取る年で、先刻のやッさもッさから頭痛がして、いかう肩がつかへて來た。ア、橙の數は爭はれぬものぢやわい。
久松　肩のつかへは切ないもの。さゝはせまいがそろ〳〵と、わたしが揉んであげませうか。
久作　そりや久松忝ない。兎角老いては子に隨へぢや。孝行も二人して、片身恨みのないやうに、お光よ、三里を据ゑてくれ。
みつ　アイ〳〵、いま据ゑてあげませう。ドレ、風の來ぬやうに
〽何かな表へあたり眼、門の戸びつしやりさし艾、燃ゆる思ひは娘氣の、細き線香に立つ煙り。
ト 此うちお染、門口より覗かうとする思ひ入れ。お光門口を閉め、二重へ上り、佛壇より艾線香を出し、丸盆へ艾を載せて來る、久作思ひ入れ。
久作　サア〳〵、親子中に遠慮はない。灸も痃癖も一時に大掃にやつてくれ。
久松　ハイ〳〵。ドレ、揉んであげませうか。
ト 久作、二重へ腰をかける。久松、後へ廻り、肩を揉みながら
こりや、きつううつかえてござりますぞえ。
久作　オヽ、さうであらう、さうであらう。こりや、なか

なか巧いものぢや。次手に七九もやつてたも。オッと、こたへるぞ〳〵。

トお光、硯箱を出し墨をつけ、線香に火を移し、

みつ　サア父さん、据ゑますぞえ。

久作　サア〳〵、据ゑてくれ〳〵。

ト足を出す。お光、二重の下にて三里へ灸を据ゑかゝる。此うち、お染、門口をソッと明け、内を覗く。久松、顔を見合せハッと思ひ入れ。

久作　アッツツ、、、、。

トこの聲に恟りなし、肩を叩く。

ア、、えらいぞ〳〵、明日が日おれが死なうとも、火葬はやめにしてもらはう。

みつ　ア、、忌はしい、其やうな事云うて。

久作　なんの忌はしい事があらう。丈夫に見えても、もう古家、屋根も根太も腐らぬうち、一時に割普請ぢや。

ト此うち久松お染いろ〳〵思ひ入れ。お光、又据ゑる。

アッツツ、、、。こりや堪らぬ、堪らぬ。

みつ　エ、モ、父さんの仰山な、皮切りはしまひでござんす。

久作　なんぢや知らぬが、滅法に熱い。よう五右衛門は辛抱した事ぢや。

みつ　其やうに熱いのは、風が當るせゐでござんす。

久作　ほんに風が當ると云や、誰れやら表を明けたさうな。

ト久作ちよつとお染を見て、よろしく思ひ入れ。

みつ　ドレ、閉めて參りませう。

トお光立ちかゝるを

久作　ア、コレ、鬱陶しい。閉めるには及ばぬ、なう久松。

ト此うち久松お染へ思ひ入れ。脇の方をたゝき居るを久作振りかへり見て

久松々々、これ久松。

ト大きく言ふ。久松びつくりして

久松　はい……。

ト肩を叩く。

久作　餘所見ばかりして居ずと、しつかり揉まぬかい。

久松　イエ〳〵餘所見はしませぬけれど。

トお染へ思ひ入れあつて

ア、コレ、覗くが悪い〳〵。

〽悪い悪いと円顔が仕方。

ト久松、お染へこなし。

久作　なんぢや、悪いの覗くのとは、足に灸こそ据ゑて居れ、どこもお光は覗きはせぬに、悪い〳〵とは何が悪いのぢや。

久松　サア、アノ悪いと云ひましたは、オヽ、それ〳〵、慥かに今日は瘟瘽日、それゆゑ灸は、悪い〳〵と云うたのでござります。

久作　エヽ、愚痴な事を云ひ居るな。此やうに達者なは、ちよこ〳〵と灸を据ゑ、身體の作りをやるゆゑぢや。そこでおれが名も久作。アツヽツ。アコレ、わがみ達も、達者なやうに、灸をば据ゑてくれるのが、この親への孝行ぢやぞや。

みつ　オヽ、さうでござんすとも。久松さんには振り袖の、美しい持病があつて、招いたり呼び出したり、憎らしいあの病ひづらが、入らぬ様に敷石の上に、大きな灸を、据ゑて置きませうわいなア。

ト我れを忘れて、久作の頭へ灸を据ゑる。久作、吃りして拂ひのけ

久作　アツヽツ……、こりや、頭ぢやわい。コレ、頭に三里があるかいやい。

久松　コレ、お光どの、振り袖の持病のと、いろ〳〵の當こすり。端下ない事、聞いては居ぬぞや。

みつ　ホヽヽ。變つた事が、其やうになんでお氣に障りますえ。

久松　オヽ、これが障らずに居るものか。

みつ　こりやをかしい、その譯聞きたいわいなア。

久松　云はいでかいの。

〽我れを忘れていさかひを、外に聞く身の氣の毒さ、振の肌着に玉の汗、久作もてあつかひ。

ト此うちお染思ひ入れ。久松、腹立ちまぎれにひどく叩く。お光、無暗に灸を据ゑる。

久作　アツヽツ、アイタタ。

ト兩人を拂ひのけ

こりや肩もひり〳〵するがな。まだ祝言もせぬ先から、女夫喧嘩の取越しするのか。灸薬のその代り、喧嘩の行司さすのかい。コレ、二人ながら、嗜め、嗜め。

みつ　イエ〳〵、構うて下さんすな。今のやうな愛想づかしも、病ひ面めが云はすゆゑ。

久松　まだマア、そんな當言を。

ト立ちかゝるを久作とめて

久作　ア、コレ、二人とも、おれが貰つた。なんにも云ふたよ。よ。この喧嘩の仲直りが、直ぐに祝言の取結び。めでたく杯さす程に、髪を結うたり鐵漿も附けたり、早う支度をしやいの。

みつ　それぢやというて、久松さんが。

久作　ハテ、何にも云はず、湯でも遣ひ。

みつ　エ。

久作　コリヤ、美しう扮りやいの。

〽おどけ交りに打笑ひ、無理に納戸へ連れて行く。

ト久作、お光の手を取り、奥へ連れて入る。

〽その間遅しと駈け入るお染。

トお染つか／＼と内へ入る。

久松　お染さまか。

お染　久松、逢ひたかつたわいの。

〽縋りつけば。

ト久松に縋りつく。

久松　ア、モシ、聲が高うござりまする。

トあたりへ思ひ入れあつて

思ひがけない、爰へはどうして。譯を聞かして下さりませ。

〽問はれてやう／＼顔を上げ。

そめ　譯は其方に覺えがあらう。わたしの事は思ひ切り、山家屋へ嫁入りせいと、残して置きやつた、コレこの文。

ト懐中から文を出し

其方は思ひ切る氣でも、わしや。

〽なんぼでもえゝ切らぬ。あんまり逢ひたさなつかしさ、勿體ない事ながら、觀音樣をかこつけに、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所もいとひはせぬ、二人一緒に添はうなら、飯も炊かうし織り紡ぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女子の道を、背けとは。

〽聞えぬわいの胴慾と、恨みのたけを友禪の、振の袂に北時雨、晴間は更になかりけり。

ト此うちお染こなしあつて

〽縋りがちなる久松も、脊撫で擦り聲ひそめ。

久松　そのお恨みは無理ならねど、十の年からお世話になり、船車にも積まれぬ御恩。仇で返す身のいたづら、冥加の程も恐ろしければ。

委細は文に殘した通り、山家屋へござるのが、母御へ孝行、お家の爲。よう得心なされませ。

〽云へど答へもなみだ聲。

そめ　エ、嫌ぢや、嫌ぢや、嫌ぢやわいの。今となつてさう云やるは、云ひ號けの娘御と、女夫になりたい心ぢやの。

〽是非山家屋へ行けならば。

覺悟は極めて居るわいの。

〽用意の剃刀取り直せば、久松あわて押しとゞめ。

トお染、懷中より剃刀を出し、死なうとする。久松とめて

久松　ア、コレ危ない、お染さま、早まつた事なされまするな。

そめ　イヤ／＼、其方に別れ片時も、なに樂しみに生きて居やう。留めずと殺してたもいなう。

〽思ひ詰めたるその風情。

久松　すりや、これ程に申しても、お聞き分けはござりませぬか。

そめ　サア、添はれぬ時は死なうといふ。

〽誓紙に嘘がつかれうかいの。

久松　そんならあなたは眞實に、命にかへても私しを。

そめ　思ふが無理か、女夫ぢやもの。

久松　此まゝ殺さば主殺し。是非に及ばぬ共々に。

そめ　わしと一緒に死んでたもるか。

久松　如何にも、この世で添はれねば

そめ　あの世とやらの

久松　蓮の臺で、

そめ　女夫の樂しみ。

久松　お染さま。

そめ　久松。

久松　思へば果敢ない

そめ　縁ぢやなア。

〽互ひに手に手取り交す、惡緣深き契りかや、始終後に立ち聞く親。

ト二人手を取りかはし、よろしく思ひ入れ。奥より久作出て

久作　イヤ、その思案惡からう。

〽云はれてはつと久松お染、驚くを押へ。

ア、、その驚き尤もぢやが、大事ない、大事ない。

ト下へ下りて

お染さま、久松、マア下に居て下され。

久染　ハイヽ。

ト二人下に居る。砧入りの合ひ方になり、久作思ひ入れあつて

久作　アヽ、因縁とは云ひながら、和泉の國石津の御家中、相良丈太夫さまといふ、二本差しの息子どの、仔細あつて家が潰れ、皆散り〴〵になつたところ、其方の乳母はわしが妹、その縁に依り三つから、十の年まで育て上げた、この久作は後の親。義理ある仲ゆゑ猶更に、草深い在所に置かうより、他人の中を見せたさに、智慧づけの爲丁稚奉公。これ程までに成人して、商人の道讀み書きまで、人並々になつたのは、こりや云はずともお主のお蔭、その大恩も又義理も辨まへぬのは、コレ見や、先刻買うたこの本ぢや。

ト懐中より以前の本を出し

お夏清十郎の道行、嬶入りの極まつてある、お主の娘をそゝのかす、道知らずの人でなし。

トきつと思ひ入れあつて

サア、こりや清十郎の話ぢやわい。疾から意見もしたかつたが、今のやうな事があるかと、それが苦勞に一日延ばし、二日延ばしするうちに、降つて湧いた金の揉め事。これを云ひ立てに暇をもらひ、分けて置くのが上分別と、その引負ひの金の工面、心は矢竹に思へども、高の知れた水呑み百姓、僅かな田地着類着そげ、不便やお光が嗜なみの、櫛笄まで賣り代なし、やう〳〵出來た先刻の金。

〽生さぬ仲ではあるけれど、親子の縁を結ぶからは、肉身分けた子も同然、可愛うなうて何とせう。

トよろしく思ひ入れあつて、お染に向ひ

コレお染さま、ではない、この本のお夏とやら。お前様が清十郎を、可愛がつて下さるは、嬉しいやうで恨めしい。聞いての通りお光めと、女夫にするを樂しみに、死ぬる病の苦みも、堪へて居るあの婆に、今のやうな事聞かしたら、直ぐに命はござりませぬ。水の出端にそこらの義理は、糸瓜の皮と投げやつて、末始終こなさんと、添ひ遂げられるにしてからが、戸は立てられぬ世間の口。あの久松めは義理知らず、辛抱した女房を嫌ひ、身上のよい油屋の、婿になつたは榮耀がしたさ、元はと云へば慾からぢや、人の皮着た畜生めと。

〽この在所は云ふに及ばず、大坂中で指さゝれ、人交は

りかなりませうかいのコレ。
〽爰の道理を聞分けて。
思ひ切つて下さりませ。コレ、拜みます、拜みますわいの。これ程云うても聞入れず、親御達が滿足に、産みつけて置かしやつた、その祝言へ疵をつけ、淺ましう死ぬるのが、女子の道でござりまするか。サア、久松もその通り、不義間男の惡名受け、親の名を汚すばかりか、世間の義理もお主の恩も、無茶苦茶にしてしまふのが、侍ひの子か、人間かやい。
〽返事次第で思案がきはまる、心を定めて。
返事をしやれ。
〽貞實貞身の強意見、骨身にこたへて久松お染、なんと返事もないじやくり
ト此うち双方よろしく、二人俯向き泣き居る。
これ程云うても返事のないは、二人ながら不得心かやの。
久松　アヽ、勿體ない事仰しやりませ。實の親にも勝つたる、御恩を送らず此やうに、御苦勞をかけるも不所存から。
そめ　イヤ／＼其方の科ではない、みんなわたしのいたづらから。親にも身にも更へまいと、思ひ詰めたも世の中の、義理にはどうも替へられぬ、ふッつり思ひ切りませう。
ト思ひ入れにて云ふ。久松も思ひ入れあつて、
久松　お前樣がそのお心なら、わたしもさつぱり思ひ切り、お光と祝言いたしませう。
そめ　其方が祝言しやるなら、わたしもこれから山家屋へ。
久松　そんならあなたも。
そめ　久松、其方も
久松　さつぱり思ひ
久松　切りませう。
〽互ひに目と目で知らせ合ふ。心の覺悟は白髪の親仁。
ト二人、顏にて互ひに覺悟の思ひ入れ。
久作　ムウ、すりや、さつぱりと思ひ切り、お光と祝言してたもるか。
久松　ハイ、致しまするでござりまする。
久作　して娘御も、今の詞に、僞りはござらぬか。
そめ　アイ、わたしも嫁入りするわいの。
久作　オヽ、出來ました、出來ました。むくつけな親仁め

と、腹も立てず其やうに、よう聞入れて下された。隔の病で晩までも、知れぬ命の婆が煩らひ、息のあるうち祝言済んだと、聞かして下さるが、何よりのそれが大善根。善は急げ今宵で、祝言の杯さそう。コレ、お光は何してぞ。お光、お光。

〽お光〳〵と呼び立つる、聲聞えてや病所より、母はやうやう探り出で。

ト上手の障子を明ける。夜着蒲團くゝり枕。婆お幸、老けたる目病み、病人の拵らへにて探り出る。この間久作は暖簾口へ入る。

お幸　親仁どの、久松もそこにか。

久松　ハイ、爰に居ります。

お幸　待ちに待つた娘が祝言、嬉しうて嬉しうて、この頃にない氣色のよさ。大煩らひのその上に、目まで潰れた因果者、佛様のお迎ひを、今日か明日かと待ちかねたに、つれない命があつたばかり、喜ぶ聲を聞くといふも、久松が孝行ゆゑ、不束な在所生れ、氣には入るまいけれど、末の面倒見て下され。コレ、頼みます、頼みますわいの。

〽頼みまするといふうちも、痰火は胸にせきのぼせば。

ト お幸咳入るを、久松介抱しながら

久松　この寒いのに端近で、冷えては悪うござります。寢所へお出でなされませ。

〽抱きかゝへて久松が、介抱如在納戸より、親子の仲も丸盆に、載せた杯銚子鍋、久作は持ち運び。

ト 久松お幸の介抱なす。此うち久作は、丸盆へ杯を載せ、燗銚子を持ち出て來り

久作　コレお婆、矢ツ張り床に寢て居ればよいに。併し、島臺のない代り、其方とおれが尉と姥、生きて居るのは新らしい。目の見えぬのはめでたい秀句ぢや。ハヽヽヽ、めでたい、めでたい。併し、この嫁はどこに居る。お光、お光。

〽と呼ぶ聲に。

ト 奥にて

みつ　アイ。

〽云ひつゝ納戸を立ち出づる、お光は一世の身の晴れに、飾る儀式の綿帽子。見るより久作手を取りて

ト 此うちお光、綿帽子を被り、出て來り、久作、手を取つて

久作　オヽ、先刻から待ちかねた。サア〳〵、嫁の座へ直

つた直つた。
トお光、二重の上手へ坐る。
それはさうと一家一門、着たまゝの祝言に、あらたまつた綿帽子、鬱陶しいから取つてしまやれ。
〽脱がすはずみに笄も、抜けて惜しげも投島田、根よりふッつと切り髪を、見るに驚く久松お染。
ト久作、綿帽子を脱がす。この時笄抜けの、島田のない切り髪鬘になる。三人見て恟りなし
久松　ヤ、お光どのゝ。
そめ　この髪は。
久作　こりや、どうぢや。
〽と云ふを押へて。
トお幸を憚り
みつ　ア、モシ、お二人さんも父さんも、なんにも云うて下さんすな。最前から何事も、残らず聞いて居りました。思ひ切つたと云はしやんすは、義理に迫つた表向、底の心はお二人ながら、死ぬる覚悟でござんせうが。
久染　エ。
みつ　サア、死ぬる覚悟で居やしやんす、母さんの御大病、どうぞ命が取りとめたさに、わしやさつぱり思ひ切つた。サア切つて祝うた髪かたち。これを見て下さんせいなア。
〽云ひつゝお光が兩肌を、脱いだ下着は白無垢の、首に懸けたる五條袈裟、思ひ切つたる目の内に、浮む涙は水晶の、玉より清き貞心に、今さら何と詞さへ、涙呑込み呑み込んで、堪ゆる辛さ久松お染、久作も手を合せ。
ト此うちお光は兩肌を脱ぐ、下には白の振り袖、墨の袈裟をかけ居る。皆々見て恟りなし。久作お幸を憚り手を合せ。
久作　なんにも云はぬ、この通りぢや。女夫にしたいばッかりに、そこらあたりに心も附かず、莟の花を散らしてのけたは。皆おれが鈍なから。
〽ゆるしてくれも口の内、聞え憚かり忍び泣き。
みつ　ア、冥加ない事仰しやりませ。所詮望みは叶ふまいと、思ひの外に祝言の、杯さそうと云はしやんして、嬉しかつたもたつた半時。無理に祝言しようとすれば、死なしやんすを知りながら、どう杯がなりませう。
お幸　ア、コレお光、何を云やる。女夫になるをこの母も、喜びこそすれ、なんの死なう。ナウ、親仁どの。
久作　オヽ、さうぢやわいの。とてもこの世は無い縁でも

せめて未來は。

お幸　エ。

久作　イヤサ、未來までも變らぬといふ、祝言の杯させう。

〽口に唱名ぶつ〳〵と、佛壇開けて取り出す、花瓶の松に鶴龜も、あの世を契る心の島臺。

ト久作、佛壇より小机の儘、花立、燭臺立を出し、よき所へ置く。合ひ方。

サア〳〵、斯うしてなりと杯さすのがせめてもの心ゆかし。アヽ、云ひたい事だらけぢやけれど、此やうな座敷をば、食べつけぬこの親仁、早々くどうは云はぬが花嫁。一つ飲んで久松へ。

トお光に杯を持たせ、酒をつぎ、お光飲んで久松へさす。また久作酌をして、久松飲んでお光へさす。此うち裏らへの合ひ方。花道より駕籠舁き二人、垂れを下ろせし駕籠を擔ぎ出て、門口へ下ろし、駕籠の内へ思ひ入れあつて下手へ入る。

久作　ア、めでたい。聟めがさぞ嬉しからう。

お幸　おゝ、嬉しい段ぢやござらぬわいの。一世一度の娘が嫁入、定めて髪も美しう出來た事であらう。さき笄に結やつたか。

みつ　イヽエ。

お幸　そんなら、兩輪か。

久作　オヽ、兩輪とも、兩輪とも、思ひがけなうすつぱりと。

お幸　エ。

久作　イヤサ、すつぱりと、よう出來たわい。

お幸　親仁どのゝ云はつしやる通り、自慢ぢやないが髪結ひは、子供のうちから上手であつた。ほんに前方、大坂行きの土産に貰うた蒔繪の簪、今日の晴に差しやつたか。

みつ　アイ。

お幸　着る物は取つて置きの、花色加賀の裾模様、あれを着て居やるか。

みつ　アイナア。

お幸　オヽ、あれはわがみによう似合うた。とてもの事に鐵漿つけて、顏直しやつたを、只一目見て死んだなら、善光寺樣の御印文にも勝つて、未來は極樂往生。

ト お幸、愁ひの思ひ入れあつて氣を替へる。

ホヽヽヽ、わしとした事が、めでたい中で忌はしい事。

コレ久松、必らず氣にかけてたもんなや。

∼と子に迷ふ、暗き盲目のそれぞとも、知らず喜ぶ母親の、心を察し誰れ〳〵も、泣聲せじとくひしばる、四人の涙八つの袖、爰に入間の落し水、膝の堤や越えぬらん。

ト皆々お幸に思ひ入れあつて、忍び泣きに愁ひの仕組み。

∼見開く辛さに忍びかね、お染は覺悟の以前の剃刀。

トお染思ひ入れあつて、また剃刀を取出し

そめ　南無阿彌陀佛。

∼と自害の鐘、久作あわて押しとゞめ。

トお染死なうとする。久作とめて

久作　アコレ娘御、待たつしやい、何が不足で死ぬるのぢや。

∼聞き間違うて娘ぞと、母は驚き。

お幸　ア、コレお光、待つた待つた待つた。

∼待つた待つたと這ひ寄つて、探る手先に五條袈裟。

トお幸、お光に探りつき、思はず袈裟を探り、思ひ入れあつて、頭を探り惘りなし

ヤ、この袈裟といひ、この頭、どうしてどうして髪を切つたのぢや。こりや親仁どの、譯を聞かしてたもいの。

∼急けば急く程咳きのぼし、病苦に惱む母親を、見るに娘は猶悲しく。

みつ　コレ母さん、勘忍して下さんせ。添ふに添はれぬ所になり、わたしや尼になつたわいなア。

お幸　エ、、そんなら先刻から云うた事は、母が心を休めう爲か。

久作　オイナウ、來世の縁を結ぶ杯、この世の縁は切れてあるわい。

お幸　ハア、、。

ト泣き伏す。

久作　オ、、尤もぢや、尤もぢや。が見えぬ其方がいつそまし。側でまじ〳〵見て居る心、推量しやいなう。

∼云ふ聲咽喉へ詰らせば。

そめ　サア、その悲しみをかけるのも、この染から起つた事。せめて死ぬるのが身の云ひ譯。

久松　イヤ〳〵、死なねばならぬはこの久松。わしから先へ。

∼と駈けよるを、久作剃刀ひつたくり。

ト久松お染死なうとするを、久作とめて

久作　これ程云うても聞入れず、是非死にたくばおれから先へ、死んで見せうか。
染久　サア、それは。
みつ　父さんが死なしやんすりや、わたしも生きては居ませぬぞえ。
お幸　オ、娘、出かしやつた。むさい在所に育つても、貞女の道を辨まへて、よう尼になりやつた。そこにござるが、噂に聞いたお染さまでござりまするか。お前様や久松か、殺しともないばッかりに、蝶よ花よと樂しんだ、獨りの娘を尼にして、出來したといふ心の內、思ひやりがあるならば、なぜ長らへては下されぬ。折角の娘が志し、無駄にするとは二人とも、そりや胴慾でござるわいの。
〽堪えし淚一時に、わッとばかりに取亂せば
久作　サア、どうあつても死にたくば、婆も娘もおれも死ぬる。三人ながら見殺しにする氣か。
染久　サア、それは、
お幸　思ひとまつて下さるか。
染久　サア、それは。
みつ　但しは死ならうか。
染久　サア。
三人　サア。
皆々　サア／＼／＼。
トいぜんの駕籠よりお常、餘所行きの女房にて窺ひ居る。
〽義理と情と恩愛の、しめ木にかゝる久松お染。
久松　すりや死ぬるにも。
そめ　死なれぬか。
二人　ハア、、。
ト泣き伏す。
〽死ぬる事さへ叶はぬは、如何なる過去の約いぞと、前後正體泣き倒れ、むせ返るこそ道理なれ。久作淚押拭ひ
ト兩人よろしく思ひ入れ。久作もこなしあつて
久作　どうやら斯うやら二人とも、どうか合點がいた樣子、さぞ母樣が案じてござらう。早うお內へ戾したいが、大事の娘御、慥かな者に
〽云ふ折門に聲あつて。
トこの以前より窺ひ居るお常、門口を明け
つね　イヤ、その娘ならお氣遣ひには及びませぬ。母かし

つかり受取りました。

〽云ひつゝ入るを見るよりも。

ト お常、内へ入るを兩人見て

そめ　お前は母さん。

久松　お内儀樣。

〽はつとばかりに詞なく、差俯向けば、

久作　これは〳〵思ひがけない、ようこそお出でなされました。まづ〳〵これへ。

つれ　久作どの、許して下され。

ト 二重の上手へ住ひ。

コレお染、およしを連れて野崎參りに、行つたと聞いて氣遣ひさ。イヤ、氣慰めによからうと、跡追うて來て何事も、樣子は殘らず聞きました。夫婦の衆の御深切、お光どのゝ志し、餘りの事で最前から、わたしや拜んで居ましたわいなう。死ぬる覺悟の二人の者に、怪我あやまちのなかつたは、觀音樣の御利益ゆゑ。これから直ぐに連れ立つて、お禮參りをせねばならぬ。

ト この時以前の駕籠舁き、風呂敷包の菓子折を出し

駕舁　モシ、御新造樣、お包みが。

ト 側へ包を持ち行く。

つれ　これはさもしい品ながら、御病人への見舞ひの印。久作どの、お口直しにお納め下され。

〽と詞數、云はず出すぎぬ杉の折。

ト お常、風呂敷を取り、久作の前に出す。

久作　これは〳〵冥加ない、私し風情にこのお見舞ひ。有り難う頂戴しまする。

〽戴きますと取上ぐる、手許はづれて取落せば、中より出づる以前の金。

ト 久作、折を取上げようとし、誤まつて落す。中より以前の金出る、

ヤ、こりや先刻に渡した金。これをどうして私しへ。

つれ　サア、久松の引負ひも表向きで油屋へ、一旦取れば世間も濟むゆゑ、今改ためて返さうと、持つて來たこの金は、丁度幸ひ尼御へ布施物。

久作　すりや、親方樣からこの金は。

つれ　返すもお染が冥加の爲。また久松も失つた、金の明りが立つ上は、以前に變らず年期の內、戻つてめでたう、正月したがよいわいの。

久松　有り難うござりまする。

つれ　イヤ、只さへ忙しき年の暮、取込みの中、長居は不

遠慮。もうお暇いたしませう。
久作　それはあんまりお麁末。マアお茶なりと。
つれ　イヤ、また其うちに参りませう。サア、お染來やれ。
〽手を取り出づれば久作も、門送りして。
　ト　お常、お染の手を取り、下手へ來る。
久作　これはマア、なんとお禮を申しませうやら。お辭儀いたすも却つて不躾。お志しは戴きます。せめてものお土産に、折つて置いたこの早咲。
　ト　以前の梅の枝を差出し
めでたい春を松竹梅と、お家も榮える蓬萊の、幾久松が御奉公、大事に勤めて、この御恩。
〽忘れぬ印と差出せば。
　ト　件の梅をお常取つて
つれ　心ありげなこの早咲き、例へて云はゞ雨露の、惠みをうけぬ室咲きは、萎むも早く香も薄い。盛りの春を待てといふ、二人へのよい教訓。殊更内には口さがない、店の者の手前もあり、何かに遠慮。幸ひわしが乘つて來た、あの駕籠で久松は、堤傳ひを戻るがよい。お染は舟で川續き、別れ〱に戻るのが、世間の手前、心の遠慮。
久作　オヽ、それがよろしうござります。サア久松、其方はあなたのお駕籠へ。
久松　それぢやというて。
　ト　お染へ思ひ入れ。
久作　ハテ、お志しぢや。乘つて行きやれ。
つれ　サア、お染は舟へ。
〽詞に否も云ひかねる、鴛鴦の片羽の片々に、別れ〱て。
　ト　お常、お染の手を引き、下手蘆原の蔭へ入る。この時、二人の駕籠舁き、駕籠を下手へ直し、久松の乘るのを待遠なるこなし。久作、久松の世話をなし、駕籠へ乘せる。お幸お光こなし。
お幸　そんなら久松、もう行きやるか。來る正月の藪入りを、母も必らず待つて居るぞよ。
みつ　兄さん、おまめで。
〽と詞まで、早改まるお光尼、哀れを餘所に水馴れ棹、舟にも積まれぬお主の御恩。
　ト　此うち駕籠に乘せ上手へ來る。
久松　親の惠みの冥加ない、取分けてお光どの、斯くなり

行くも前の世の、定まり事と諦めて、お年よられた親達の。

〽介抱頼むと云ひさして、泣く音伏籠の面ぶせ、舟と堤は隔たれど、縁を引綱一筋に。

ト此うち屋體は知らせなしに上手へ斜に廻り、下手へ蘆原を引出す。この間より跳らへの屋根舟出る。浴衣なりの船頭、舟を漕ぎ出し、花道附け際へ引き出す。柱に梅の枝を結びつけある事。花道へは一面に揚げ幕まで波布を張り、浪の音のあしらひ、よき程に舟とまる。舟の簾を上げる。内に以前のお染お常、見返り居る。久松の駕籠は東の假花道へかゝる。久作、眞中にて双方こなし。

そめ　よしないわしゆゑお光さんの、縁を切らしたお憎しみ。堪忍して下さんせいなア。

みつ　アヽ、わッけもない、お染さま。

〽浮世離れた尼おやもの、そんな心はない程に、わたしへ入らぬ義理立に、短氣な事して下さんすな。

久作　オヽ、こりや娘が云ふ通り、死んで花實は咲かぬ梅。一本花にならぬやう。

つれ　もう今年とても僅か四五日、節分さへも近ければ。

久作　これまであつたもや〳〵は、その身の罪と諦らめて。

お幸　たゞ何事も西の海。

久松　さらりと流して睦まじう

みつ　心の鬼の角も折れ

そめ　あかぬ別れの

つれ　赤鰯。

久作　互ひにまめで

お幸　年を越し

つれ　また春永に

皆々　逢ひませう。

〽さらば〳〵も遠ざかる、思ひ合うたる縁中も、義理の柵　情のかせ杭、駕籠は比翼を引きわくる、心心ぞ。

ト此うち浪の音、本釣り鐘、道具は段々廻り、横向きの屋體になり、向う折拔き在體の遠見。久松は二重へ上がり、見送りながらお幸をなだめる。お光は二重、角の柱にもたれ見送る。駕籠は東の假花道、舟は花道お染久松は顔見交しこなし。二重の三人はこれを見送り、久作、落ちかゝり、撞となる。お幸泣き伏す。お

光伸び上がり見送る。久松お染お常双方見合ひ、よろしくあつて、駕籠の垂れと舟簾を下ろす。双方三重、浪の音にて、

よろしく幕

新板歌祭文（終り）

姉は宮城野
妹は信夫

碁太平記白石噺



五世松本幸四郎の大福屋惣六

碁太平記白石噺

序　幕

白坂鎭守祭禮の場
明神の森の場

役名――金井谷五郎。志賀臺七。同下部、與平。同、丹助。同、運八。百姓、與茂作。組頭、佐次兵衞。娘、おのぶ。庄屋、七郎兵衞。宇治兵部之助常悦。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕、上手、石の鳥居、正面に鎭守明神と書きし額を掛け、七五三繩を張り、同じく石の玉垣、下の方松の大樹、日覆より同じく吊り枝。すべて明神祭禮夜の體。立提灯に火をともし、篝など焚き、爰に組頭佐次兵衞、百姓大勢立ちかゝり居る見得。宮神樂にてよろしく幕明く。

佐次　サア〳〵、提灯は立つし、この明神樣のお祭り、一年に三度ぢやが、なんと賑やかな事ぢやないか。

百姓　此やうに、賑やかな事はない、誠に

皆々　めでたい事でござるなう。

百一　それ〳〵、めでたいと云や、年中の物なりを守つて下さるこの神樣、大事に祀らにやならぬてや。

百二　イヤ又、この白坂の明神樣は、鳥居は爰にあつて、御本社と言や山の麓、十町も向うにござる。

百三　そこで祭には、いつも本社にかゝはらず、この鳥居先で禰宜どのが、幣帛を捧げるぢや、なんと珍らしい事ぢやないか。

百五　イヤ、珍らしいと云や、近年のやうに、豐年の續く事も珍しい事ぢや。これといふも皆、鎭守樣のお蔭ぢやぞや。なんと有り難いぢやないか。

皆々　有り難いとも〳〵。

ト銘々腰より火打ち袋を取出し、煙草をのみながら、

百四　そりやさうと、この年の年行司はあの與茂作、ともども手傳はにやならぬのに、どうした事で來ぬぞいの。

百五　さればいの。與茂作は常々からの信心者、一番に來る筈なれど、家の娘がこの春からの煩ひで、いかい氣遣ひ。それでがな暇どるであらうわいの。

佐次　伜し、おのぶといふ娘もあり、嬶衆の兄弟といや庄屋どのなり。何も案じられた身の上でもござらぬてや。

百一　オヽ、さうとも〳〵。

ト向うを見て、

アレ〳〵、うはさをすれば影さすと、向うから來るは慥かに與茂作どの。

五人　ほんに、それ〳〵。しかも娘のおのぶ女郎を、連れて來るワ〳〵。

皆々　オヽイ〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて向うへ思ひ入れ。在郷唄になり、百姓與茂作、木綿やつしの拵らへ、後よりおのぶ、同じく木綿やつし振り袖にて、木具に供へ物を載せてこれを持ち、兩人とも花道に立ちとまり

與茂　オヽ、皆の衆揃うてか。何やらごて〳〵して、隙どつて遲うなつたわい。サアおのぶ、早う來い〳〵。

のぶ　アイ〳〵、明神樣のお供へを拵らへて居たうちに遲れました。皆さん、堪忍して下さんせえ。

佐次　なんの〳〵、斷わるに及ぶ事か。サヽ、年頭の與茂作どの。お娘どのを連れて、早く〳〵。

與茂　そんなら行かうかい。サア、おのぶ、來や〳〵。

ト おのぶ與茂作舞臺へ來る。皆々思ひ入れあつて、

百五　與茂作どの、こなたも好い子持ちで、さぞ樂しみでござらうなう。

百一　それ〳〵、おのぶ女郎は、在所に稀れな好い器量。

百四　今の今とてその噂、嬶衆は庄屋殿の妹といひ、申し分のない果報者。

皆々　アヽ、羨やましい身の上ぢやなア。

與茂　ハヽア、何を云はつしやるぞいの。この與茂作も元は上方で、刀も差いた者なれど、フトした事で浪人となり、侍ひやめてこの奥州路へ來ての百姓業。如在はせぬと思うても、稼ぐに追ひつく貧乏神、身貧に追はれて八年あと、姉めは江戸へ勤め奉公、おのれやれ土に喰ひついても、稼ぎ溜めて金調へ、姉が身の上を取返しませうと思ふうち、嬶は病氣、人手はなし、それで年行司に當つても、勿體ない明神樣の飾りつけにも、今來る位の仕儀。なんの羨まれる事がござらう。皆の衆、推量して下されいなう。

のぶ　いま父さんの云はしやんす通り、わたしとても女の子、どこぞから男の子を貰うてなと、早う樂しみにして下さんせと、云うて居る事でござんす。

佐次　成る程、こりやお娘の云ふのが、尤もぢやわいの。
與茂　サヽ、その息子を貰ふのも當があるぢやて。ずつと前方、侍ひの時分に、姉のおきのが生れると、直ぐに傍輩衆の男の子と云ひ號けして置いたが、これもその後便りも聞かず、この婿どのゝ在所が知れたところが、肝心の姉と云や、江戸の新吉原とやらに勤め奉公。そこでこのおのぶが大きうなつたら、これに婿どのを貰ひ受けうと、これが大きうなるを、苗の伸びるやうに、待ち兼ねて居りますわい。
百五　オヽ、それ〲、おのぶ女郎も、もう來年か再來年は、婿を貰うてもよい時分、嬶衆の病氣も、其うちには癒らうぞえ。
百一　それに又、何と云うても庄屋の七郎兵衛どのが控へて居やれば、何もくよ〲と案じる事はないといふもの。
百二　その上庄屋どのは慈悲深い結構なお人。それに引替へ、忌々しいは、あの代官の臺七づら。根性の意地惡さ。
百三　イヤ又、あの弟の臺藏といひ、こちらが膏を絞つて作るものを、ヤレ年貢だの村入用のと、その取立てのむごさといひ。
百四　ほんに面の憎い代官づら。あの慈悲深い庄屋どのゝ爪の垢なと嘗めさせてやりたいなア。
佐次　イヤ、爪の垢より鍬の柄で、横面を打ちいがめてこましたいわえ。
與茂　ア、コレ〲、あんまり大きい聲で云ふまいぞ、いま爰へ來る道で、代官の臺七どのが、年詣でにがな來られたぞや。
のぶ　あの意地惡が久六さまの門口で、そこら中を睨み廻して居やしやんしたぞえ。
百五　コウ〲。出てうせたら又お目玉ぢや。でも、ひやいな事の。
與茂　時に明神様のお宮へお供へをあげて、飾らうぢやござるまいか。
百一　それ〲、こちらもとも〲手傳ひませう。
與茂　さうして下され。そんなら皆の衆。
皆々　與茂作どの。
與茂　おのぶも共に、早うおぢや。
皆々　サヽ、ござれ〲。
ト三味線入りの神樂になり、與茂作先におのぶ、皆々

鳥居の内へ入る。引違へて向うより志賀臺七、野袴大小。運八、木綿大小にて出て、花道にて

臺七　エヽ、なんだやかましい鎭守の祭禮。太鼓の音が耳に障り、ろくに話もなる事ぢやないわえ。

運八　左樣でござりまする。村中のうぢ虫どもめが騷し立てるので、氣のぼせが致しまする。して、かねての一儀は。

臺七　委は道中、あの鳥居前にて申し合はさう。

運八　左やうならば、旦那樣。

臺七　運八、來やれ。

ト右鳴り物にて舞臺へ來り、あたりを見廻し。

臺七　イヤナニ運八、其方も知る通り、元この臺七は石堂家の家來、今は當所の代官なれど、かねて梶原普傳どのゝ叛逆に一味なし、五十四郡を横領なさんと、味方を集むるその爲に、普傳どのより預りし蒸藥の秘書。天眼鏡

ト懷中より鏡と一卷を取出す。運八思ひ入れあつて

運八　その二品にて人をなづけ、大望成就なす時は、我れ我れどもまで立身出世。

臺七　云ふまでもないその時は、五十四郡の主は身共。たゞ憎くきは細川勝元、密かに詮議なすとの事。この一卷は懷中もなるが、天眼鏡を暫しのうち、どこぞへ隱して置きたいものだ。

運八　その儀はお案じなされまするな。拙者がお預かり申しませう。

臺七　イヤ〳〵、其方に預け置くも、人目あれば心がゝり、イヤ、それよりも其の方に、申し付ける仔細がある。今宮岩手の館へ忍び、寶藏に秘めあるところの、眠りの獅子を奪ひくれ。首尾よく致さば骨は盜まぬ。褒美は望み次第なるぞ。

運八　イヤモウ、御家來にさへなる事なら、まんまとお手に入れませう。してその鏡は如何なされまするな。

臺七　ムウ。よい隱し所を思ひついた。コレ。

ト運八に囁く、

運八　すりや鎭守の祠に飾りある、神鏡と掏替へて。

臺七　飾り置かば大丈夫、人の氣に附く事はない。これにつけても當の寶藏、四五日あとより行くへが知れず、貫平丹助兩人に、在所を尋ねにやつたるが、今に便宜のないといふは、心がゝりの事ぢやて。

運八　されば二人の者共も、諸々方々を尋ね申せど、かいくれお行くへが知れぬとの事。

臺七　神隱しにでも逢ひはせぬか。それは兎もあれ最早夕刻、其方は少しも早く。
運八　心得ました。旦那樣にも御油斷なく。
臺七　承知いたした。
運八　左やうなれば、これより直ぐに。
臺七　急いで行きやれ。
運八　ハツ。
ト大拍子にて臺七は上手、運八は花道へ走り入る。上手より以前の百姓皆々出で來り、
佐次　コレ／＼皆の衆や、例のお代官が、睨み廻して出て來たぞや。
百一　その上、意地の惡い人でも、なんぞ願ひがあるかして、鎭守をえらう拜んで居たぞや。
百二　あの人の願ひなら、明神樣も知らぬ顏してござるであらうぞえ。
百三　併し年行司ではあり、元が侍ひの與茂作どのだけ側に居ておぢや。
百四　あんな奴には、よい加減につきあつて置くがいゝぞ。彼れこれするうち、もう夕暮ぢや。
皆々　ほんに、さうぢや／＼。
百五　あの與茂作殿も連れ立つて、去なうぢやあるまいかえ。
佐次　オヽ、それがよいわい／＼。
皆々　與茂作どの／＼。
ト皆々上手へ思ひ入れして呼ぶ。在鄕唄、宮神樂になり、與茂作先に、おのぶ、三方を持ち出で來り
與茂　オヽ皆の衆、さぞ待遠でござつたらう。いつもこの明神樣の仕來りで、祭禮の宵宮には、ざつと神前に飾つて置いたこの鏡を、年行司の内へ一晩とめるが毎年の吉例。そこへお代官がござつて、なんぢやむづかしい事を云うて拜んで居られたゆゑ、暫らく見合せて、卽ち神鏡は袋とも、この與茂作が守護して來ました。
のぶ　今夜は家に飾つて置いて、母さんの病氣の癒るやうに願をかけ、明日は早う御神前へ、持つて參りませう。
與茂　オヽ、さうとも／＼。この三ヶ村の年行司といふも、なか／＼三年や五年で廻つて來ず、人間は老少不定と云うて、いま煩うて居る嬶の病氣が癒り、達者なおれが先へころりと死ぬまいものでもないぞ。さう思つて見ると、鏡のお宿をするも、今年が名殘りであらうも知れぬ。ナウ、皆の衆。

皆々　エヽ、心細い、何云はつしやるぞいの。
のぶ　父してもく、そんな事云うて下さんすな。アタ縁起の悪い。エヽ、野へ行け、山へ行けく。
　トおのぶ袖を拂ひ思ひ入れ。
與茂　ハヽヽヽ、こりやおれが悪かつた。神いさめの中で、云うても云はいでもの事。アヽ、年寄ると兎角云ふ事が愚痴になるぢや。それはさうと、コレ娘よ、おれはこれから皆の衆と、例年の通り別當所で、御神酒を開いて戻る程に、大切なその鏡は、おれが持つて去なうわいの、嬶が一人で困るであらうに依つて、わが身は一走り先へ行て、薬でも世話してたも。
のぶ　アイく、そんなら父さん、この鏡はお前、後から持つてござれや。
與茂　ヤレく、賢い者ぢやなう。
　トおのぶより三方の鏡を受取り、
　コリヤ娘よ。云ふまではなけれど、嬶の病は殊ない大病ぢや。マア十が九ツあつちのもの。かてゝ加へて、おれもこの節の持病の疲れ。もし嬶よりおれが。ぽつこり行つたらどうするぞ。
のぶ　サア、その時は、わしや泣くわいなア。

與茂　ハヽヽヽ、皆の衆、聞かつしやれ。子供といふものは他愛もない。こりや泣いたとて喚いたとて、死んだ者は返らぬわい。いつ何時か、知れぬで持つた世の中ぢやわえ。
　トこれより床にかゝる。
〽云ふも女房が煩ひを、今から云うて覺悟さす、心と見えて哀れなり、與茂作は心附き。
ほんに思ひ出した。内に薬を煎じかけて置いた、煎りつかぬうち、われ一走り去んで、一番煎じを嬶に服ましてくれぬか。
のぶ　アイく。
佐次　オヽ、そんなら、おのぶ女郎は先へ去ぬか。
百一　内へ去んだら阿母に
皆々　よう云うて下されや。
のぶ　アイく。
　ト行きかけ思ひ入れあつて、
　そんなら行くぞえ。
與茂　早う行かぬかえ。
のぶ　サア、行くは行くけれど、必らず怪我して下さんすなえ。

與茂　エヽ、何を案じる事があるぞ。おれよりもわれ又、腋見して怪我するなよ。

のぶ　アイ〳〵、何ぢややら、わしや去にともない。

與茂　ハテ、何をうぢ〳〵。母への孝行忘れたか。

のぶ　イエ、さうではなけれど。一緒に歸つて下さんせ。

與茂　これはしたり、聞分けのない、おれは別當所へ廻つて行くゆゑ、わが身は藥のつまらぬうち、先へ去ねと云ふに。

のぶ　それぢやと云うて。

百二　ア、コレ、おのぶ女郎、與茂作どのはわしらが一緒に。

百三　内へ送つて行く程に、必らず後を案じずと。

皆々　早う内へ去んだがよい。

トこれにておのぶ是非なく、

のぶ　そんなら父さん、早う戻つて下さんせ、わしやモウ行くぞえ。

與茂　オヽ、さうしてくれ〳〵。

〽親と子が見送り見返り畔づたひ、これぞこの世の別れとは、後にぞ思ひ知られたり。

トおのぶ心を殘し、振返り〳〵花道へ入る。與茂作、見送り

ソレ、市畑であぶないぞや。久六が畔は滑るぞよ。隱居の田へ廻つて行けよ。

佐次　ア、コレ與茂作どの、案じさつしやる娘より、こなたの足許が危ないわいの。

百四　サア〳〵、暮れぬうちに別當所へ。

皆々　早く行かうではござらぬか。

與茂　イヤ、おれは年寄りの道捗ゆかねば、こなた衆と一緒では、氣がいらくらと忙しない。後からゆる〳〵行く程に、こなた衆は先へ行き、神酒を開いて待つて居て下され。

百一　そんならわしらは先へ行て、お神酒を開いて待つて居や。

與茂　オヽ、さうして下されや。

百二　イヤモウ、酒と聞いては早いが勝ぢや。

皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。

〽皆々打連れ急ぎ行く。

ト皆々花道へ入る。

與茂　アヽ、若い者を先へやつたれば、これからゆる〳〵別當所へ、ドレ、鏡を守護して行きませう。

〽立歸らんとする所へ、

ト鏡の三方を持ち行きかける。この時、上手より宅七出て來り、この體を見て慟くり思ひ入れ。

宅七　ヤイ／＼土ほぜりめ、その鏡を何とするのだ。

與茂　エヽ、年行司の與茂作が、今夜一よさ内で祀るは每年定例。それをお前がどうぞしたかな。

宅七　ヤア、事わきまへぬ老ぼれ親仁め、うぬ等が持つて無用の物、キリ／＼と返し居らう。

ト宅七、鏡に手をかけるを、ちよつと突き廻し

與茂　ハヽヽヽ、こりやお代官様、この鏡を渡せとは、何を仰しやります。每年廻り持ちの村役人が預かり。これはあなたもよう御存じでありながら、でも事々しい御立腹。わしは慟くり致しましたわいなう。

宅七　エヽ、又しても口強情な土百姓め。その鏡には仔細がある　其方づれが持つ物でない。早く此方へ渡し居らう。

與茂　イヤ、そりやこなさんが無理といふもの。家例の通り持つて歸り、明日神前へ飾るまでは、此方の役。なんぼお代官様でも、さう無體にはなりますまい。

宅七　エヽ、面倒な土百姓め。明神様の鏡と取替へて、それやア大切な。イヤサ、大切なこの神鏡、身共が受取るには云ひ分あるまい。

與茂　イヤ、云ひ分がないでもござらぬ。へヽヽヽ、滅多無性に欲しがらさつしやるこの鏡、ハヽア、こりや知れた事、いま内陣に奴とのが、ごて／＼して居たが、さてはその時に。

宅七　ナヽなんと。イヤサ、どう致した。

與茂　石堂さまの寶物の内に、何とやら云ふ鏡が紛失と聞いたが、こりや合點のゆかぬ代物、此方から殿様へ持つて出て伺ひまする。キリ／＼お歸しなされませ。

〽逃げ行く首筋引戻す手、放せやらじとせり合ふはずみ、鏡は飛んで流れの中。

トちよつと立廻りあるうちに、鏡は前なる溝の中へ取落す、宅七それをと取りに行くを、突き廻し、與茂作取りに行くを、宅七、拔身にて與茂作の後から袈裟に切る。與茂作、苦しみながら

エヽ、非道な／＼宅七どの、こりやわしを殺さつしやるのか。

宅七　四の五のと面倒な。キリ／＼とくたばりをらう。

與茂　今わしが死んではの、娘は明日をも知れぬ大煩ひ。なりや娘一人が路頭に迷ひますわいの。それおやに依つ

て命は助けて下さりませ。ヤイ、娘やい、おのぶやい。
ト呼びながら苦しむを、臺七思ひ入れあつて、トヾ乗ツかゝり止めを刺す。この時バタ〳〵にて下手よりおのぶ出るゆゑ、臺七この足音を聞きつけ、手早く刀を拭ひよろしくこなし。下手よりおのぶ出て來り、與茂作の死骸を見て、恟りこなしあつて

のぶ　ヤア、父樣を誰れが殺した。父樣イなう〳〵。コレ、母樣はあのやうに煩うてなり、お前に別れて、わしや何とせう、どうせうぞいなア。

〽足搔りしたるいぢらしさ、涙ながらにあたりを見廻し。
ト與茂作の死骸に取りつき泣き落す。此うち臺七、そろそろ下手へ行かうとする。おのぶフト目を附けて、
お前樣はお代官の臺七さま、爰にござるといひ、すりや父樣を殺したは、お前ぢやなア。

臺七　ヤア默らう、此奴。身共は知らぬ、覺えはない。慮外を申さば免さぬぞ。

〽外らさぬ顔で嚇しても、いつかなこなたは耳にもかけず。
ト行かうとするを、おのぶキッと止めて、

のぶ　イヤ、お前ぢや〳〵。コレ、人殺しぢや。皆來て下さんせいなア。

〽ありあふ泥を打ちつけ〳〵、ヤレ人殺しと呼ばゝる聲、よせ來る人々一村在所。
ト呼び立てる。臺七キッとなるを構はず呼び立てる。臺七、刀を引拔き、切り付けようとする。おのぶ見て、あたりの土を投げつけながら立廻り。トヾ危ふき所へ下手より、以前の百姓皆々出て來り

佐次　ヤア、與茂作を殺したは臺七さまか。

百一　なんぼ代官樣でも、人を殺しては、滅多にや濟むまい。

百二　それ〳〵この子の加勢はなか〳〵の事ぢやない。村中一統、サア與茂作を

百三　元のやうにして返しや。

百四　なんで殺した。その譯聞かう。

佐次　サア、臺七づらめ。イヤ、づらぢやない臺七さとよ、殺した譯を

皆々　聞かうわいの〳〵。

〽田舍育ちの高調子、聞きつけ出で來る七郎兵衞、爭ふ中へ割つて入り。
トこの時バタ〳〵になり、花道より七郎兵衞、素襖袴、

のこちらへにて出て來り

七郎　コレ〳〵村の衆、待つた〳〵。庄屋の七郎兵衛が來たからは、惡うは計らはぬ程に、マア〳〵待つた、待つしやれ〳〵。

皆々　ヤア、庄屋どのか〳〵。

佐次　コレ〳〵七郎兵衛どの、與茂作が殺されて居ますわいたう〳〵。

七郎　サア、その譯も、聞いて悔り、驅け付けたこの七郎兵衛。マア何にしろわしに任して下され。任して下され。

百五　庄屋どのが呑みこんだと云ふから、マア、靜かにしろ靜かにしろ。

七郎　イヤ申しお代官樣、イヤサ臺七さま、どういふ譯で與茂作を、むごたらしうお手討になされました。日頃から正直なあの男、無禮を致さうやうもなし、樣子に依つたら願うても、キッと吟味をせにやなりませぬ。

臺七　ヤイ〳〵〳〵、默り居らう、與茂作とやらが殺されたるその場所へ、來かゝつた某。なんぢや身共が殺した。ヤイ、それには何ぞ證據があるか。土ほぜりの分際で慮外の振舞か。まつた女郎め親の敵と、譯をも云はず泥を打ちつけ、こりや見よ、侍ひの面體へ泥を塗つたる慮外者、眞二つに討ち放す。そこ退き居らう。

〽反打ちかければ止むる庄屋、娘を圍ふ百姓ども。

ト臺七、刀へ手をかけキッとなる、百姓皆々おのぶを圍ふ。

佐次　ヤア、なんぼでも切らしはせぬぞ〳〵。

百一　オヽ、それ〳〵、非道な事に人が切られるか、切つて見や〳〵。

百二　代官でもせうくわんでも、怖い事に少しもないぞ。

皆々　オヽ、さうぢや〳〵、叩きのめせ〳〵。

ト皆々立ちかゝるを、七郎兵衛よろしくとめて、

七郎　コレ〳〵皆の衆、待つた〳〵。靜かにさつしやれ靜かにさつしやれ。

ト皆々を制して七郎兵衛思ひ入れあつて、

モシ臺七さま、娘の慮外と仰しやりますが、申さばこりやコレ子供の事。それにマアお手討などゝは、あまり御人體に釣合ひませぬ。また與茂作が殺されて居た所へ、お出でなされましたが、あなたの不仕合せと申すもの。マアあなた樣もかゝり合ひ、この趣きはこの通り、お屋敷樣へ村中一統訴へます。

〽理窟親仁に云ひ込められ、返答しがなのその折柄、貫平丹助兩人は、臺藏が死骸を戸板に載せ、息を切つて駈け來り。

トこの時バタ／＼にて、上手より下部貫平丹助、戸板の上へ臺藏の死骸を載せ持ち出て來り

お旦那、これにお越しなされましたか。

臺七　オヽ、丹助貫平、あわたゞしい、何事ぢや。

丹助　モシ、騷動でござりまする。御舍弟臺藏さまは、人手にかゝつてお果てなされました。

貫平　下郎めと丹助が、參りかゝつた明神の森に、袈裟に切つたるこの死骸、打棄てゝあるからは。

丹助　なんでも泥坊の業に相違はござりますまい。それゆゑお死骸をこの所へ。

貫平　やう／＼持參いたしましてござります。

〽差出す死骸に驚く臺七。

ト此うち臺七、死骸を見て、いろ／＼こなし、

臺七　誠に、こりやコレ弟臺藏、明神の森の內に殺されて居つたとは、チエヽヽ、何者の仕業なるぞ。

〽行かんとせしが庄屋に向ひ。

ト花道へ行かうとして思ひ入れあつて、

コレ見よ、庄屋を始め百姓ども、身が弟臺藏は、今閒く通り森の內にて、殺されしも今夜の事、これを思へば、人を殺めしあぶれ者、この近邊に徘徊なすに疑ひなし。こりや與茂作を殺したも、大方同じ奴と思はるゝ。見れば數ヶ所の刀疵、百姓づれが手際でない。浪人者など尾羽打枯らし、暴れ歩くに相違なし、なんと與茂作は身が殺さぬといふ潔白は、これで疑ひは晴れたであらう。

〽頓智の佞姦、辯舌に云ひ廻され、流石の庄屋も百姓も、理の當然に詞の一理。

七郎　サア、さう聞きますれば、お前様とも思はれず。

のぶ　さうした時は父さんは、犬死かいなア。ハア。

トおのぶ、泣き落す。

皆々　オヽ、悲しからう。尤もぢや／＼。

〽臺七はしすまし顏。

臺七　ア、思ひも依らぬこの災難。七郎兵衞、身が心察してくりやれ。與茂作とやらも不便な最期。娘が嘆きも思ひやらるゝ。これとても皆因緣づく。ナニ貫平丹助、弟が死骸を身が屋敷へ持ち歸れ。

兩人　畏まりました。

〽この場をくろめる間に合ひ詞、善と惡とは紛はねど、

惜し蔵りも天道の、節に心殘れども、家來引連れ立歸る、後に泣き入る娘のおのぶ。

トこの文句にて、臺七こなしあつて、ちよつと舌を出し、貫平丹助、板に死骸を載せてこれを持ち、三人とも花道へ入る。後におのぶワツと泣き出し

のぶ　伯父樣、どうせう〳〵、どうせうぞいなア。

〽庄屋も涙の目を擦り。

ト七郎兵衞百姓皆々、おのぶを介抱して

七郎　オヽ、尤もぢや〳〵が、いま臺七の云ひやうでは、萬更あの人でもない樣子。なりや違ても云はれもせず。と云うて皆の衆も知つての通り、與茂作の女房はおれが妹、この春からの大病、その中へ與茂作は、切られて死んだと云うたら、直ぐに泣き死するであらう。どうで一度は云はにやならぬ事ぢやが、一日半時でもまめで置いてやりたいが、爰に斯うしても居られまい。皆の衆、御苦勞ながら、マアこの死骸、今夜は此方の内へ舁き込んで下され。サア〳〵、皆の衆、頼みます〳〵。

ト皆々愁ひの思ひ入れ。戸板の内へ與茂作の死骸を載せる。

コレ、おのぶ女郎よ、今夜は此方の内へとめて置いて、明日内へ去なうとも、與茂作が死んだ事は、これぢやこれぢや。

〽庄屋が指圖に在所者。あたりの板を引きはなし、死骸を載せて舁き上ぐれば。

ト酒に醉うたる體をして見せる。おのぶ、呑みこみ思ひ入れあつて、

ト戸板の上へ死骸を載せ、皆々にて舁き上げる。

皆々　そんなら死骸は此まゝに。

七郎　御苦勞ながら庄屋の内まで。

皆々　合點でござる〳〵。

七郎　さうして置いて、今夜は誰れぞ與茂作の内へやらにやなるまい。サア〳〵皆の衆。

皆々　サア〳〵、去にませう〳〵。

〽まだいとけなき子心に、思ひ詰めたる孝行の、念力通す大磐石、敵は誰れとも白石や、石に立つ矢の例しとて、可惜も引き方在所中、田の面の畦なきつれて、我が家へこそは立歸る。

トおのぶ泣き入るを介抱して、七郎兵衞先に、皆々付き添ひ花道へ入る。

〽はや黄昏の畦道を、うそ〳〵戻る臺七が、あたり見廻

し見覺えの、澤にきらめく名鏡を、忝なしと押戴く、後へぬつと忍びの曲者、鏡もぎとり臺七が、脾腹を一當、逸散に跡を晦まし。

ト時の鐘、バタ／＼になり、花道より臺七、尻からげ、大小にて、忍び／＼出て來り、以前の鏡を取出し押し戴く。この時後より宇治兵部介常悅忍び姿、好みの拵らへにて出て來り、臺七の鏡を楯に兩人立廻りよろしくあつて、常悅鏡を取り、ツカ／＼と花道へ行く。臺七それをト立ちかゝるを、常悅遠當に臺七を當てる。これにて臺七撞と下に居るを木の頭。常悅は鏡を持ち花道へ入る。これと一緒に時の鐘の送り、よろしく、

ト時の鐘にてツナギ、直ぐに引返す。　　拍子　幕

本舞臺、正面上手へ寄せて二間、常足の二重、さびたる明神の宮。藁屋根、本緣附き、狐格子の扉明けたてあり、眞中に楠の大樹、所々に杉の立ち木、石燈籠、日覆より杉の吊り枝。すべて明神の森の體よろしく、山颪にて幕明く。

ト山颪、夜神樂になり、花道より運八、尻端折り大小、頰冠りにて出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、懷中より袱紗包みを出して、

運八　御主人臺七さまと心を合せ、出世の種を盜み取り、石堂家へ預かりの、眠り獅子の御判、これを以て人をなづけ、鎌倉殿は御主人の心の儘。さすれば身共も立身出世。チエ、忝ない。

ト戴く。此うち松の木の間より金井谷五郞、着流し大小、旅形、風呂敷包みを脊負ひ窺ひ出て、この時後より右の御判を探りながらソッと取る。運八惘りして、この時谷五郞を見て、

おのれ曲者。

ト切つてかゝるを、つけ廻し投げのけ、キッと構へる。この時半月出る。右の御判を月影に透し見て

谷五　我が推量に違はず、ハテ、よくも似せ居つたわい。

ト右の御判を捨てる。此のうち運八隙を窺ひ、谷五郞の片膝をちよつと切る。谷五郞惘りして直ぐに引ッ捕へ。

騙し討とは卑怯な奴。コリヤ、この所の首塚も、不便やうぬに極まつたわやい。

運八　なにを。

トまた切りつけるを立廻つて刀をもぎ取り、ポンと首を切る。この時、明神の宮の扉左右に開き、内に宇治兵部介常悦裁附け大小、好みの拵らへにて、これを窺ひ居る、谷五郎はあたりを見廻し。下の方よき所の岩臺へ右の首を載せ、立ち木の枝を切り取り、二つに割つて、一國に一ケ所の首塚と書き記す。此うち常悦思ひ入れあつて平舞臺へ下り、右の首をソツと取つて來て、上手に首を差出し、立ち身にてヂツとして居る。谷五郎これを知らず、右の書き記したる枝を首の傍へ立てに行く。首なきゆゑ合點のゆかぬこなしにて、いろ／＼尋ねる。常悦こなしあつて谷五郎の前へ右の首を差出す。谷五郎探りながら、フト右の首に探り當り、宙にあるゆゑ恟りして、段々常悦が腕まで探り廻り、さてはといふこなしにて、ムツとして直ぐに首を引ツたくり、下の方へ行き穴を掘り、首を埋め、書附けしたる右の記しの枝を立て念を押し

谷五　某諸國武者修行の印として、一國に一ケ所の首塚を築く。最早當國もこれにて相濟んだり。大願成就、チエヽ、忝ない。

ト手を合し、塵打拂ひ、こなしあつて靜々と花道へ行きかゝる。常悦始終を窺ひ居て、この時ツカ／＼と寄つて、後より谷五郎の刀の鐺を引きとめる。谷五郎、振りはなし兩人キツと見得。誂らへの鳴り物になり、上下より黑衣の忍び六人、鐵砲を持ちバラ／＼と出て

六人　ヤア、御主人に手向ひなさば許さぬぞ。

ト鐵炮の筒先を向ける。

谷五　ヤア、妖術を以て人をまどはし、歸伏させんとは片腹痛し。その邪では、滅多に人はなづけられまい。

トこなし。常悦も思ひ入れあつて、

常悦　ホヽ、オ、尤もの一言。我れ去ぬる頃西國天草に於て、森宗意軒と云へる者に出逢ひ、師弟の契約をなし、我れに傳へし呂洞賓が妖術なれども、誠の勇士のなさゞるところと、今までこれをば捨て置きしが、今用ひしは貴殿の器量試さん爲、元へ返せば正路の奇術。

印を戻す、黑幕を振り落し、忍びを消す、常悦思ひ入れあつて

イザ、この上は誠の武術、眞劍の勝負を試みん。

谷五　オ、サ、その儀は、此方にても望むところ。

常悦　ソレ、用意の召され。

ト谷五郎下げ緒にて襷をかけ用意する。此うち常悦木

の葉を集め燧火打ちにて火を打ちかけ、篝を焚く。谷五郎は支度して常悦の側へ行き、刀を抜き、キッと構へる。常悦、篝にてヂッと見て

ハテ天晴れの骨柄、日角月角かどだつて、山根に節あり。天帝に青雲の氣を含みしは、自然と備はる智勇の相貌。その上段の太刀筋と云ひ、ホ、オ見事。

ト感心のこなし。谷五郎これに構はず切つてかゝる。常悦、鐵扇にて立廻り、よき所にて常悦鐵扇を打ちつける。谷五郎これを切りとめる。誂らへの鳴り物になり、双方抜き放し、いろ／＼面白き立廻りあつて、トド谷五郎、太刀先の弱りしこなしあつて、よろしくとまり、

谷五　ハ、ア、斯くまで御手練ありし其許樣、我が師匠と賴むとも恥かしからず。この上は何卒師弟のよしみ、且は御姓名の程承はりたし。

ト兩人刀を引き鞘に納め、谷五郎常悦を敬ふ。

常悦　アイヤ、語るに及ばぬ、我が俗姓は。

ト思ひ入れあつて、橘の枝を鐵扇にて打ち折り、谷五郎の前へ出す。谷五郎これを見て

谷五　この橘を姓名とは、フム、さては楠家の。

常悦　ア、コレ。

ト押へ、懐中より菊水の白旗を出し、さらりと開く、谷五郎、菅笠にて篝火を押へる。この途端一時に木の頭、常悦菊水を見せ

よつく見られよ。

ト旗を差上げる。谷五郎ハッとこなし。双方よろしく山颪し、カケリにて、　ひやうし幕

二番目　逆井村の場

役名――金井谷五郎。志賀台七。下部、貫平。同、丹助。庄屋七郎兵衞。百姓七助。妹、信夫。母、おさよ。日雇ひ女お乘。宇治兵部之介常悦。

本舞臺三間の間二重舞臺、向ふ赤壁納戸口、上手一間の附け屋體、反古貼り障子を立て、明けたてあり、下の方藪疊、いつもの所門口、すべて百姓家の體、幕の内より母おさよ、病人の拵らへにて、病鉢卷をして蒲團によりかゝり、二枚折屏風引き廻し居る。

この見得よろしく、麥搗き唄にて幕明く。

〽陸奥の、何國はあれど鹽釜の、煙りも細き白石の、城下に近き逆井村、妻は春よりぶら〳〵の、枕も床も塵つもる、山田の畔は見晴らせど、忍ぶ涙に六畝七畝、やせ百姓の氣も浮かで、水に汗をや絞るらん。

ト矢張り右の合ひ方になり、下手より七助、百姓の拵らへ、お兼、同じく在所娘の形にて、直ぐに内に入り

七助　どうぢやお内儀、ちと氣合ひはようごんすかの。

かね　次手ながら、ちよつと見舞ひに來ましたぞえ。

〽云ふ聲聞いて女房おさよ、やう〳〵枕を上げながら。

さよ　オヽ、誰れかと思へば七助どの、おかね女郎も一緒に、ようマア深切に見舞つて下さつたの。

七助　サア、氣にかゝつてあれど、刈込時分で、思ふやうに尋ねもしませぬわいなう。

かね　サア、わしも手すきには、せめて藥でも煎じて來うと思はぬではないが、折惡う刈込み、とんと隙がないわいなア。そしてマア、この頃はどんな具合ぢやぞえ。

さよ　イヤモウ、果しのゆかぬこの病、別に變つた事はなけれど、昨日から頭痛も、大分よい方でござんす。

かね　それは何よりようござんす。今日は母さんの代りに見舞ひに來ましたが、よいと聞いて嬉しいわいなア。

七助　わしも共々喜びますぞや。それはさうと與茂作どのは、野良にでも行かつしやつたかな。

さよ　イエ〳〵、明神樣の祭禮で、昨夜から歸りませぬが、大方兄の七郎兵衞どのゝ内で、神鏡のお宿などしたものであらう。それにしても、おのぶは、なぜに歸らぬやら。

七助　案じさつしやるな、親子連れなり、兄御の内なり、氣遣ひもござるまい。

かね　シタガ、お前一人で、さぞ不自由であらうわいな。

さよ　イヤ〳〵、仕合せと、フトした事でお泊め申したお侍ひ樣、それは〳〵深切なお方で、藥まで煎じて下され、それゆゑ、別に不自由な事もござらぬ。

〽話し半へ立歸る、藥求めて谷五郎、浪人姿扶持に、五千石とは見えすく骨柄。

ト矢張り麥搗き唄になり、花道より金井谷五郎、着流し大小にて出て來り、直ぐに門口に來り内に入り、

谷五　オヽ、これは在所のお衆達、お見舞ひにお越しなされたか。イヤ、御免下され。アイタヽヽ。

トこなし。

七助　ハヽア、そんなら今、こなたの話で聞いた御浪人樣

か。さてはお足が痛むので、お氣の毒でござりますの。

谷五　これは御挨拶、祝着に存ずる。某ことは諸國を經めぐる浪人者でござるが、フト足踏み損じ、昨夜より當家に逗留、殊に御病人もある中へさしかゝつて、思はずお世話になり申す。近頃お氣の毒に存ずる。それは格別、其許達にお尋ね申したきは、元は上方邊の御浪人、今はこの邊にて百姓を業となし、以前の名は杉本甚内と申すお人でござるが、もし御存じではござるまいか。

七助　されば、もと上方の浪人で、今は百姓して居る人なら、ナウおさよどの。

さよ　成る程、心當りがないでもなけれど。

　トこなし。

七助　とんと聞いた事がない、わいなう。

谷五　御存じないとな。

七助　されば甚内は知らぬが、錢内なら爰ら一面、銀内ちやん内かく内お望み次第。内々尋ねても知れますが、甚内とは聞いた事がござりませぬ。

かれ　もし隣り村におやござんせぬかえ。

谷五　イヤイヤ、この逆井村ぢやと承はつたが。

かれ　イエイエ、そりや大方村の名を、お忘れなされたのでござりませうぞえ。

七助　イヤモウ、忘れたで思ひ出した。肝腎の仕事をとんと忘れてのけた。

かれ　ほんに、わたしも、内にしさしの機を、織り上げてしまはうわいな。

七助　ドリヤ去にませう。サア、ござれござれ。

〽打連れ表へ急ぎ行く。

　ト矢張り右の合ひ方にて、兩人下手へ入る。

谷五　アヽ、流石は田舍氣質の正直一遍。シタガ、斯程に尋ねても、在所の知れぬとは、フム。

　ト思ひ入れ

〽はてどうがなと思案の體、樣子聞き居る女房おさよ、靜々立つて側に寄り。

　ト合ひ方になり

さよ　イヤ申し御浪人樣、お足の痛みもおいとひなく、藥まで求めて下さるお志し、忘れは措きませぬ、忝なうござります。

谷五　ハテサテ、なにお禮に及ぶ事。一人旅の迷惑は、迂濶に宿を許さず、或る時は野に伏し山に寢ね、既に昨夜

も明神の森にて、一夜を明かさんと致せしところ、足の悩みにこの家を便り、夜更けてよりお宿の無心。見受けますれば人手とても内證のお暮し、あまり見る目も笑止さに、介抱いたすも有やうは、お宿を借りし心の返禮。

さよ　これはマア、迷惑なそのお詞、其やうに氣兼ねなされずとも、お心安うごゆるりと、御逗留なされませ。

谷五　それは近頃過分に存ずる。見らるゝ通りこの足の痛みでは、今一兩日逗留いたしたく、お宿の御無心申さずば相成りますまい。

さよ　ハテ、幾日なりともお心任せに、御養生なさるゝがようござります。イヤ又それはさうと、只今お話しなされた、杉本甚内とお尋ねなさるゝが、なんぞ御用でもあつての事でござりますか。

谷五　されば、斯く申す拙者、甚内どのゝ面は見知らねど、少と仔細あつてわざ〳〵尋ね逢はんと、心を盡すその樣子は、もと杉本甚内と申す人は河内の浪人、身が親共と至つて懇意の仲、尤も幼少の砌り、その甚内どのゝ娘と某を、夫婦になさんと云ふ契約、然るにフト致した事より浪人いたされ、只今にては此あたりにござるとの風聞、風の頼りに承はり、手前親共とても相果て、斯く流浪の拙者、何卒お目にかゝらんと、尋ね求むる甚内どのゝ在所、殆と相知れ申さぬての。

さよ　フム、さう仰しやる、あなたのお名は。

谷五　お尋ねの上は何をか包まん、某が身の上は、もと備家の浪人、金井勘兵衛と申す者の悴、同名谷五郎と申す者。

　トおさよ、これを聞いて、

さよ　エヽ、そんなら、あなたが、谷五郎さまでござりましたか。

谷五　すりや、某の身の上を。

さよ　オヽ、知らいでなりませうか。コレ、申し、あなたがお尋ねなされる、杉本甚内といふのは、わたしが夫、與茂作どのでござりますわいなう。

谷五　ナニ、すりや、アノ、與茂作どのが舅甚内どのとな。

さよ　如何にも。いよ〳〵お前樣が、谷五郎さまでござりましたか。

谷五　さうとは知らず昨夜より。

さよ　只餘所外の他人あしらひ。

谷五　思ひも依らず名乘り合ひ。

さよ　盡きせぬ縁の婿舅。

谷五　先づは堅固で。
さよ　ようマア無事で。
谷五　不思議な對面。
兩人　これはしたり。
さよ　ほんにマア、よう尋ねて來て下さつたなう。ヤレヤレ、今にも夫與茂作どのが戻られて、この事を聞かしたら。さぞ喜ばれませうわいなう。
谷五　イヤモウ、身共とても尋ね當りし心の安堵、斯樣な喜ばしい儀はござらぬて。
さよ　そりや此方とても同じ事、今の話でどうやらイソイソして、氣合ひもようなつた樣子にござるわいの。
谷五　誠に燈臺元暗しとやら、この家の主與茂作どのが、舅どのであらうとは、今の今まで存じませず、それは格別夜前より、斯う見受けまするところ、その以前某しと、云ひ約束いたせし御息女が、相見えぬが、何處にござるな。
〽尋ねられてハアハツと、吐胸をつきつめ、何と返事もどぎまぎと。
さよ　サア、その姉のおきのは。
谷五　如何いたされましたな。

さよ　アノ今は、家には居りませねど。
谷五　フム、すりや外々へ緣組みでも、致されましたか。
さよ　なんのマア、ムウ、それ〳〵、さるお屋敷に御奉公に遣はしました。これとても追ッつけお暇貰ひ、こな樣とめでたく祝言させませう。
谷五　それは重疊、然らば與茂作どのが歸られ次第、何かの事を打明けて。
さよ　そりや云ふまでもない、改めて婿舅のお杯。それにつけても折の惡いこの病氣。ア、早うおのぶが戻つたら、何かの用意も。
谷五　アイヤ〳〵、その用意は入らぬ事、酒は身共が調へて參りませう程に、必らず氣を揉まつしやらぬがようござる。
さよ　でも、それも餘り憚り。
谷五　ハテサテ、遠慮に及ばぬ。昨日までは旅の浪人。
さよ　今日からは此方の花婿どの。
谷五　それもやう〳〵、たつた今。
さよ　程なう夫も戻られたら。
谷五　その時こそは因みの杯。
さよ　めでたく納まる三々九度。

谷五　然らば姑御。
さよ　婿どの。
谷五　ドリヤ、行て參りませうか。
女房うつとりと、暫し詞もなかりしが。
ヘ德利とく〳〵引提げて、酒屋へこそは急ぎ行く、後に
ト谷五郞、德利を提げ、こなしあつて花道へ入る。お
さよ思ひ入れあつて、
さよ　世の中の、苦は色かゆる習はしと、誰がいつの世に云ひ染めしぞ。元は楠家譜代の家來、杉本甚內とも云はれし侍ひ、如何に時代といひながら、浪々の身の世渡りに、百姓とまでなり下り、本名包む其うちにも、姉のおきのが云ひ號け、以前の傍輩、今井勘兵衞どのゝ御子息、谷五郞どのに廻り合ひ、どうぞ女夫にせんものと、思ふ願ひも過ぎにし年、水損日損の瘦せ百姓、仕馴れぬ業の辛苦に迫り、未進の爲に君傾城の浮き勤め、谷五郞どのに義理立たねど、親の水牢助けんと、孝行ゆゑの勤め奉公、やう〳〵未進の金調へ、地頭はそれで納まつても、納まりかねたる貧の病、さうとは知らず娘が心、さぞや案じて居やらうが、今日や迎ひに來る事か、明日は身請けをせらるゝかと、待ちかねてがな居るであらう。思へば片時夜も寢られず、永の年月戀ひ焦れ、床しう思うた婿どのに、たま〳〵廻り合ひながら、顏さへ見せぬ面目なさ。云ひ號けの娘はと、聞かれし時の當惑さ、なんと返事のなるものぞ。親の爲とは云ひながら。
ヘ憂き川竹の。
君傾城、多くの人に肌觸れて、今ではかうと有體に、谷五郞どのへ聞かしたら、もしや愛想も盡きやうかと、思ひ過して間に合ひ詞、その場合はそれで濟んだれども、濟まぬはわたしが心の中。どうぞ谷五郞どのゝ戾られぬうち、早う相談してともかうも、仕樣もやうのない事か。ア、コレ早う與茂作どのが、戾られて下されぬ事かいなう。エヽ、氣の揉める事ではあるぞ。
ヘ女心のやる瀨なき、どうかかうかと、とつおいつ。
オヽ、さうぢや。姉の代りに妹の、あのおのぶでも勤め奉公に。イヤ〳〵、年端もゆかぬ妹を、なんで手放しやられうぞ。如何に貧苦に迫ればとて、姉といひ妹まで、勤めにやるは不便さ可愛さ、あんまりむごい親心、只さへ母が胸の內、いぢらしいとも非道とも、辛苦艱苦の七重八重、なんと命が續かうぞ。エヽ、コレ、折も折とて相談相手の與茂作どのは、いつにない戾りの遲さ。何

をして居さつしやる事やら、此方の思ふやうにもない、早う戻つたがよい事、斯う云ふうちも心が急く、こちの人、與茂作どのイなう。

〽病に弱る女氣に、夫はこの世を去りしとは、知らで焦る丶胸の火に、涙の湯玉わきかへる。

與茂作どのイなう〳〵。こりや待遠な事ぢやわいなう、與茂作どの〳〵〳〵。

〽叫びあこがれ泣き倒れ、病みつかれては泣き寢入り、果なき夢や結ぶらん、只さへも秋は物憂きものなるに、いとゞ哀れを身に知りて、泣き入るおのぶが手を引いて、しを〳〵戻る我が家の内、後から戸板に空しくも、死骸を載せて在所者。

ト文句の通りよろしくある。矢張り麥搗き唄になり、おのぶ泣きながら七郎兵衞に手を引かれ出る。後より百姓三人、戸板に與茂作が死骸を載せ、後より附き添ひ出て花道にて

百姓　ア、、南無阿彌陀佛々々々々々々。

百一　コレ庄屋様、この佛を内へ入れたら、直ぐにお寺の坊様を。

七郎　ア、コレ、シイ〳〵、聲が高いわいの。お寺や何やかやは、組頭の佐次兵衞に任して置いたれば、世話好きな男ゆゑ、好いやうにしてくれやう。こなた衆は昨夜から云ひ合はした通り頼みますぞや。知つての通り與茂作が女房は、おれが妹、春からの大煩ひ、この土用は持つまいと案じる程の病の中へ、與茂作が切られて死んだと聞いたら、一層直ぐに泣き死。どうせ云はにやならぬ事ぢやが、せめて一日半時なりと健で置きたい。コリヤおのぶ、よう聞け。いま家へ入つてもな、與茂作が死んだ事は、これぢやで、酒に醉うて寢て居ると云ふ程に、必らずわれも母に泣き顏見せなよ。サ、、悲しいは道理ぢや、無理ぢやないわい。いま知らすと母は直ぐに死んでのける。一時に兩親に離れた後われが途方にくれ、うろうろするであらうと思や、思ひ過しがせられて涙がはらはら。イヤナウ皆の衆、一村の束ねもする者が、女子供のやうに、めろ〳〵泣くと、笑うてばし下さるなや。シタガ又、この佛のやうに不仕合せな男はないわいの、その癖正直で神信心。これを思へば世の中に、神も佛もおりや、ないと思ひます。

〽悔み涙にくれければ、おのぶも泣く〳〵目を拭ひ。

のぶ　姉様は遠い所へ行つてなり、只さへ便りない上に、

母さんの大煩ひ、杖柱とも思うてゐる、父さんには此やうな、儚ない別れ。まだこの上に母さんが、もしもの事があるならば、わしやどうせう、どうせうぞいナア。

〽わつと泣き出す口に袖。

七郎　これはしたり、今も今とて云うて聞かすに。コリヤ。第一母へ不孝ぢやぞよ。泣くも孝行泣かぬも孝行。オヽ、賢い者ぢや、聞き分けよ。アヽ、親ぢやもの子ぢやもの、泣くが無理ではないわいやい。

〽可愛の者やと抱きしめて、庄屋が涙は一村の、時雨にまさる貰ひ泣き、氣を取り直し涙を拂ひ。

ア、泣くまい〳〵。もう〳〵泣かぬ。サア〳〵皆の衆、そんなら内へ舁き入れてもらひませう。もらひませう。

〽泣き顔隱し内に入り。

ト百姓皆々戸板を持ち内へ入り、七郎兵衞、おさよを見て、

コレ〳〵滅相な。その大病で端近へ出て堪るものか。オオ寢て居るか。それも幸ひ、サア、この間に早う。

百一　ハイ〳〵、そんならお寺へ行て。

七郎　ハテサテ、何も云はずと、去んだ〳〵。

〽云ふに皆々立歸る。

トこなしあつて云ふ、皆々捨ぜりふにて花道へ入る。

コレおのぶ、蒲團を出して父に着せて置くがいゝ。オヽ、さうぢや〳〵、ソツと着せて置かつしやれ。

〽とも〴〵打着せ妹が寢姿、つく〴〵と打守り。

コリヤ〳〵おさよ、風吹きに滅相な。サヽ、床へ入つて夜着でも着やしやれ。コリヤおさよ。

〽揺り起されて振仰向き。

さよ　ヤ、お前は兄さん。

七郎　オヽ、どうぢやの。大分氣色もよささうで、嬉しい嬉しい。

さよ　アイ、さうしてお前はいつの間に。

七郎　イヤ、たつた今來たのぢや。さうしておのぶも、コレ爰に。

さよ　オヽ、おのぶ、わが身は父さんと一緒に戻りやつたか。

のぶ　アイ、母さん、精出して藥を服み、どうぞ早う達者になり、いつまでも長生きして下さんせ。わしや便りなうござんすわいなア。

〽しやくり上ぐれば。

さよ　何んで其やうな事云ふぞいの。七郎兵衞どのと云ふ

伯父様もあり、なに便りない事があるぞいの。そして、父様はどこにぢや。

のぶ　アイ。

さよ　エヽコレ、どこにぢやぞいの、急な用があるわいなう。

七郎　オヽ、用もあらうが與茂作は、稲荷様へ参つての南無阿彌陀。エヽ、初午でめでたいと云うて、南無阿彌陀、アノお神酒に醉うて、それは〳〵好い機嫌で、あのやうに寢て居るわいの。モウモウどんな急な用があつても、あれではもう間に合ふまい程に、おれに相談するがよからう。急な用とは何の事ぢや。

さよ　オヽ、與茂作どのは、酒に醉うて、寢て居さつしやるかえ。

七郎　オヽ、寢て居るとも〳〵、百年經つても起きる事ぢやないわいの。

さよ　エヽ、時も時とて、今日に限つて寢やしやるとは。アヽ、そんならお前に相談しませう。コレ、最前こちらの内へ見えた旅のお人は、婿殿の金井谷五郎どのでござるわいなう。

七郎　ヤア、ムウ、して〳〵、それがどうした。

さよ　サア、そのお人もこちらを尋ねて、やう〳〵と今の先刻話し合ひ、廻り合うたその嬉しさ、酒取て來るとて隣り村へ。

七郎　ムウ。マア、よし〳〵。

さよ　サア、それにつけても、お前も知つての通り、谷五郎どのと云ひ號けの、姉のおきのは八年以前、勤め奉公。

七郎　オヽサ、それも親の爲ぢやもの、大事ない〳〵。

さよ　イエ〳〵、それでも婿どのゝ手前はさうも云はれず、お屋敷へ奉公にと云ひくろめ、當分はそれで濟めども、ゆく〳〵取戻さねば、婿どのは元より、親達への聞えもあり。

七郎　オヽ、立たぬは尤もぢや。

さよ　と云うて金の出來るあだてはなし、わしが思ふには、いつそあの妹のおのぶを、不便ながら代りに遣つて。

七郎　アヽモウ、そんな事云やんな、年端もゆかぬ者を可哀さうに。

さよ　イエ〳〵、それでも早う取戻さにや、傾城に賣つた事が、ひよつと婿どのに聞えたら、日頃堅い與茂作どのの氣質では、谷五郎どのゝ手前を恥ぢ、短氣な心でも起らうかと、百姓なれども以前は武士、姉を勤めにやる時

さへ、腹切るのなんのと突きつめた侍ひ氣質、わしが煩うて居るその中へ、もし其やうな事があつたら、わしから先へ死にまする。コレ兄様、どうぞ好い料簡つけて下さんせ。

七郎　オヽ、合點ぢやが、おれぢやと云うてどうならうぞい。マア、此やうな悲しい事の數々が、一時に出來るといふ、因果な事の聞き役は、今日一日で百年の。

〽命が縮みさうなわいの。

アヽ、可愛や妹、何にも知らず。

さよ　コレ〳〵兄さん、好い思案がついたかえ。サヽ、どうぞいな〳〵。

七郎　オヽ、尤もぢやが、どうせうぞ。

さよ　お前の子でないゆゑに、返事のないは尤もでござんす。コレ〳〵、親仁どの、起きて下さんせ〳〵。

七郎　マア〳〵、起さずに置くがよい。

さよ　イエ〳〵、お前は何事も遠慮がある。親仁どのには相談せにやならぬ。コレ〳〵親仁どの〳〵。

七郎　ハテサテ、寢かして置きやいなう。

〽一入氣を揉む七郎兵衞。

さよ　イエ〳〵、今にでも婿どのが戻られたら、談合が出來ぬわいなア。

〽隔てる兄を押しのけ〳〵、よろぼひ立ち寄る死骸の側。

こりやどうぢや、合點のゆかぬ。

〽ひきまくる蒲團の內。

こりや、親仁様は、切られてゐますわいなう。切られてゐますわいなう。

〽うんと見詰める病人を、抱きかゝへて七郎兵衞。

七郎　コリヤ妹、氣をしつかり持つてくれ〳〵。

のぶ　母様イなう〳〵。

七郎　おさよやアい〳〵、てつきり斯うであらうと思つた事。エヽ、どうせうぞい〳〵。おのぶよ、水を氣付けに、茶碗へ一口、早う〳〵。

何を云ふやらうろたへ騷ぎ。

のぶ　母様イなう〳〵。

七郎　おさよやアい〳〵。

〽伯父姪聲の續くだけ、息を限りに呼びたつれば、やうやうに目を開き。

さよ　兄さんか。

七郎　オヽ、兄ぢやや。七郎兵衞ぢや、氣をしつかり持たつし

やれ。
さよ　アイ、さうしておのぶは。
のぶ　アイ〳〵、爰に居りますわいな。
さよ　オヽおのぶか。もうよい〳〵、氣ははつきりとなりました。兄さん、與茂作どのは誰れが殺しました。コレおのぶ、父樣を誰れが切つた。なんで母に隱しやるぞ。コレ〳〵七郎兵衞どの、敵はどこの何者ぞ。おのぶ知らぬか、知つて居やるか。サヽどうぢや。どうぢやぞいやい。
のぶ　アイ、父さんはな。
〽云はんとすれど、泣いじやくり。
さよ　なんで母に隱すのぢや。不孝者め。
のぶ　アイ〳〵、コレ母樣、最前父樣を呼びに行けば、此やうに死んで居やんす。お代官の臺七さまが來やしやれたれど。誰れが切つたとも、しつかりと知れませぬ。
さよ　ヤア、そんなら切り手は知れぬのか。コレイナウ兄樣、どうぞ早う詮議して、敵を取つて下されいなう。
〽さてもいとしや與茂作どの、どういふ事で此やうな、傍ない死をさしやつたぞいの。
晝も晝とて行きしなに、茶飲めの何食へのとこなたの介抱、コレ、わしや手を合せて拜んでばかり居たわいなう。わしこそ此やうに病みほうけ、役にも立たぬ娑婆ふさげ、後に殘つて何とせう。
〽どうせうぞいの親仁どの。定めて最期のその時に、わしや子供が顏見たかろ、云ひたい事があつたであろ。口惜しかつたでござんせうなう。思へば晝の後影、どうやら傍なう思うたも、知らせであつたか、情なや。
〽空しき死骸を押し動かし、嘆けば娘は只うろ〳〵、見るに堪らず七郎兵衞、怺へ怺へし溜め淚、思はずわつと聲をあげ、前後正體泣き叫ぶは、目もあてられず哀れなり、兄はやうやく眼を拭ひ。
七郎　コレ〳〵マア、待たつしやい。急かずと後を聞くがよい。おれも畑で聞いて居たら、おのぶが泣き聲、行つて見ればこの體裁。臺七どのゝ氣質といひ、てつきり手討にやられたと、思へどそれといふ證據もなく、村の衆も一同におのぶが肩持つて、めつきしやつきのその所へ、臺七どのゝ弟の臺藏どのが隣り村の、明神の森で切り殺されてあつたと家來の注進。すりや與茂作を殺したも、同じ切手に極まると、臺七どのゝ詞も一理。なんでもこ

の近邊に居るあぶれ者か、但し浪人者か。又は武者修行
といふやうな、奴の仕業と思はるゝわいなう。
〽噂の中に谷五郎が、以前の話しに氣のつく母。
さよ　ムウ。すりや隣り村の明神の森の中で、アノ昨夜。
七郎　オイナウ。
さよ　エ、、嬉しや兄さん、敵が知れた、おのぶ、喜びや。
七郎　ヤ、、敵が知れたとは、ド、、どこの何奴。
さよ　イヤ外でもない、婿の谷五郎。
七郎　ヤア、とは又どうして。
さよ　最前話しのうちに、昨夜明神の森で一夜を明かした
とツイ云うた話しも耳にとまり、今思ひ當りしも、矢ツ
張り佛の引合せ。その上に袖や褄先に、血の附いてある
も見付け置いた。わしが爲には夫の敵、この子の爲には
親の敵。兄さん、どうぞ二人が力となつて、敵を討たせ
て下さんせ。賴むはお前ばつかりぢやわいはア。
〽手を合すれば、
七郎　エ、、賴むとは何事ぢや。おれが身にもかゝつてあ
る事、氣遣ひするな。おのれヤレ、年こそよつたれ七郎
兵衞、おのぶも必らず油斷すな。侍ひでも浪人でも騙す
に手なし。ぢやがマア、病人は危ない／＼。おれに任し
て奥へ行かつしやれ。
ト奥へおさよをやる、
〽サア、マア奥へと進めやり、障子をはたと引立てゝ。
サア、これからは身拵らへ。おのぶ、合點か、早う／＼。
〽鉢卷しつかと身拵らへ、百姓業はなま中に、錆刀より
棒三昧、娘は手馴れし草刈鎌、帶引締めて谷五郎が、歸
りを今やと納戸口、身をひそめたる心根は、健氣にも
又。
ト七郎兵衞、おのぶ身拵らへしてよろしく兩人奥へ入
る。
〽しをらしや、秋の入日の暮れやすく。
ト此うち暮れ六ツの鐘鳴る。
迷ふ山道谷五郎、やう／＼戻る表口、後よりつけ來る忍
びの武士、てん手に十手拔足さし足、とは知らずして內
へ入り。
ト右の淨瑠璃にて、花道より谷五郎、以前の形に戻つ
て來る。後より貫平丹助、十手を持ち　窺ひながら附
き添ひ出る。次に志賀臺七、着付け野袴、ぶつ裂き大
小、兜頭巾にて、同じく窺ひながら附き添ひ出る。谷
五郎これに氣の附かぬこなしにて、何心なく內へ入る

ろ。三人は表に窺うて居る。

谷五　イヤ、只今歸りました。不知案内の道に迷ひ、その上足は痛む、思ひの外隙取りました。さぞお待ちかねでござらう。與茂作どのも最早お歸りでござらう。これはしたり、日も暮れしに火も灯さず、何事でござるな。ドレドレ、拙者が火を灯して進ぜうか。

ト探り寄る後へぬつと七郎兵衞、薙ぎ倒さんとよる棒の、早速をきかして蹴飛ばすこなた、親の敵と打ちかくる、娘の小腕なぐり鎌、こは心得ずと谷五郎、身をかはしてぐつと引寄すれば、わつと泣く聲女房が、差出す行燈七郎兵衞、肝を冷して力み居る。

トこの時奥より、七郎兵衞、以前の形にて六尺棒を持ち、おのぶ、草苅り鎌を持ち、窺ひ〳〵出て、いきなり谷五郎へ打つてかゝり、文句通りの立廻り。此うちよき程に、おさよ、行燈を持ち出て來り、灯を差出す。立廻りのうち七郎兵衞の棒を踏まへ、おのぶを引きつける。

谷五　ヤア、物をも云はず某へ、打つてかゝるは仔細ぞあらん。樣子を語れ、ナ、なんと。

七郎　オヽ、云はいでならうか。樣子といふは外でもない。昨夜明神の鳥居先にて、與茂作を殺したは、おのれであらうがな。

谷五　ナニ、與茂作どのを殺したとは、何を以てこの谷五郎が。

さよ　ヤア、知らぬとは白々しい。退引きならぬ證據といふは、これ〳〵、こなたの小袖褄先、血潮のよごれ、二つには、昨夜明神の森の中で、一夜を明かしたと、最前こなたの物語り。

七郎　サア、その森の中で侍ひを殺したも、おのれが仕業であらうがな。なりや遁がれぬ與茂作が敵、武士に似合はぬ卑怯の爭ひ。

さよ　サア、この上は尋常に。

のぶ　父樣の敵。

七郎　一家の助太刀。

さよ　サア、名乘つて勝負するか。

のぶ　サア。

七郎　サア。

さよ　サア。

三人　サア〳〵〳〵。なんと〳〵。

谷五　ホ、ウ、天晴れの志し、この場に於て云ひ譯は、未

練には似たれども、與茂作どのゝ儀は神以て覺えなし。尤も昨日夕暮に白坂のほとりにて一人を害し、まつた夜に入り明神の森にて、今一人殺めしは、斯く云ふ金井谷五郎。

臺七　家來、ソリヤ。

丹助　ハ、ア。

　トこの時バラ／＼と、臺七先に貫平丹助、谷五郎を取卷く。

谷五　ヤア、何奴なればこの狼藉。

〽云はせも立てず。

臺七　ヤア、狼藉とは何のたわ言、今うぬが口から自身の白狀、昨日白坂のほとりにて、我が弟臺藏、まつた昨夜明神の森にて、家來運八を手にかけし、金井谷五郎とやら斯く云ふ我れは志賀臺七といふ者。弟の敵、家來の仇、遁がれぬ所ぢや。覺悟いたせ。

〽覺悟せよと詰めかゝれば、谷五郎かんら／＼と打笑ひ。

谷五　與茂作どのゝ敵と切りかけしは、女童の健氣な働き。それに引替へ、臺七とやらんが敵呼ばゝり、相手に取つて面白し。我武者修業の願ひをたて、遍く日本六十餘州を經廻り、我れに勝りし者に出會はんと、一國に一ケ所の首塚を立て、殘らず手に合ふ者に出會はず。然るに昨夜森の中にて、一人を手にかけ、首を手向けし感應にや、天晴れ勇々しき武士に出會ひ、師弟の約をなしたり。斯く一人を切り取れば、意趣遺恨なきこの家の主、與茂作どのを何の爲に害すべき、卑怯未練に包み隱す谷五郎ならず。まつたうぬらが如きへろ／＼武士、この谷五郎を相手に取り、敵呼ばゝり事をかしや、ならば手柄に打つて見よ。何を小癪な。

〽一度にかゝれと身構へたり。

臺七　ヤア、人もなげなる憎くい廣言。物な云はせそ、討つて取れ。

貫丹　心得ました。うぬ動くな。

〽下知に從ひ一二のかけ聲、左右に組みつく丹助貫平、首筋摑んでゐのころ投げ、手練の手なみにさしもの臺七、騙し討たんと引きかへす、遁がさじものと駈け出す金井谷五郎、どつこいさうはと帶際しつかり、とりつく貫平丹助を、蹴飛ばす金井が金臑に、叶はぬゆるせと逃げ出す二人が、襟際ぐつと引据ゑて。

　トこの立廻りのうち、よろしき時分、臺七、門口へ忍

び出て拔足にて花道へ引返して入ろ。トゞ立廻りあつて兩人を引きつけ、

谷五　察するところこの家の主、與茂作どのを殺害せしは、うぬらが主と頼む、志賀臺七であらうがな。

兩人　イヤサ、その儀は、

谷五　ヤア、知らぬとは云はれまい。何科あつて手にかけた。サア、眞直に白狀せよ。

兩人　イヤ知らぬ、覺えはない。

谷五　ヤア、しぶとい下郎め、これでも云はぬか。

兩人　アヽ、申します／＼。どうぞゆるめて下され／＼。

谷五　サア／＼、キリ／＼吐かせ。

貫平　この上は何をか隱しませう、臺七さまが盜み取らつしやりました寶の鏡、餘り詮議が嚴しさに、明神の神鏡と摺替へたを、爰な與茂作に見付けられてのこの體裁。

丹助　私しどもは何にも知らぬ事。どうぞ命ばかり、お助けなされて、

兩人　下さりませ、お慈悲／＼。

〽泣き喚くこそ道理なり。

谷五　オヽ、よく吐かした。何といづれも、もうこの上は某に疑ひは。

さよ　オヽ、晴れましたとも／＼。さうとは知らず片時でも、こなた樣を疑うたは女子の淺はか。

七郎　最前よりの無禮の段々。

のぶ　お免しなされて下さりませ。

さよ　オヽ、よう云うた。必らず／＼氣にさへて下さりますな。與茂作どのゝ敵といふは、志賀臺七とやらいふ今の侍ひ。

七郎　敵の知れしもあなたのお庇。

三人　エヽ、有り難う存じまする。

谷五　イデこの上は當座の腹癒せ、敵につらなる二人の下郎、この谷五郎が舅どのへ、取りも直さず追善供養。

〽ぐつと一しめ目をむき出し、手足を踠き死んでけり。

猶この上は志賀臺七、遠くは行くまじ後ぼッかけて、イデ本望の遂げさしくれん。オヽ、それ。

〽追駈け出づる向うに臺七。

トこの時臺七、鐵砲を持ち、花道へ窺ひ出ろ。下手の藪疊より、宇治兵部介常悅、忍び裝束にて出かけ、窺ひ居て印を結ぶ。これにてドロ／＼になり、臺七が持つたる鐵砲、空へ上がる。臺七、恟りして空へ目を付けるうち、常悅出て前幕の鏡を臺七の手にしつかりと

渡す。これにて又悔りして鏡を押戴き。こなしあつて引返して入る。よき所へ谷五郎出て、臺七を追ひ駈け行かうとする。この時

常悦　ヤレ待たれよ、金井谷五郎。

〽覆面頭巾投げ捨つれば。

谷五　ヤア、貴殿は昨夜明神の森に於て。

常悦　如何にも、義を鐵石と結びたる、宇治兵部之介常悦。

谷五　フム、して又何ゆゑ臺七を、見遁がし召されしその仔細は。

常悦　ホヽウ、不審な尤も、さりながら、貴殿の爲には眼前、舅の仇敵とは云ひながら、勢ひ盛んなる北朝を打ち亡ぼし、南朝の御世を取りたてんと、義兵の大義思ひ立つ者が、斯程の小事にかゝはらんや。卑怯未練の臺七なれども、アレ今の如く飛道具にて取圍めば、貴殿に孫呉の術ありとも、などかこれに敵すべきか。大功は細瑾をかへり見ず、殊に臺七には楠原普傳が秘法の毒藥、傳授の一卷所持すれば、何卒それを聞き傳へん爲、我が手に入りし天眼鏡も、思へば邪宗不祥の器、天下を治める寶にあらず、それゆゑわざと彼れに返して思を見せ、この場を無事に見遁がしたり。只この上は與茂作が、娘どもに力を添へて、敵を討たすが肝要ならん。まつた敵臺七とても、當所に居がたく、鎌倉へ逃げ行かんは必定ならん。我れもこれより由井ケ濱に立歸り、猶も味方と謀し合はさん。七郎兵衞殿とやら、何かの樣子はあれにて聞く。愁傷の段察し入る。中陰事なう相濟まば、必らず訪ね來るべし。姉娘も江戸にとあれば、何かの用事も承はらん。必らず心措かれなよ。

〽慈悲の詞寛仁大度。

七郎　エヽ、重々のお志し、有り難う。

三人　存じまする。

〽ハッと兄妹忝け涙、谷五郎も理に服し。

谷五　ハヽア、誤つたり〳〵、臺七如きが鼠賊を、相手にとるは大人氣なし。敵討ちは姉妹の娘、お頼み申すは兵部之介どの、まつた某事は、この程の一儀、貴殿の下知に從うて、浪花浦の總大將、四天王寺の東門に、陣を構へ、寄せ來る諸軍。

〽仁木細川吉良石堂、北朝無二の賊臣ども、三津の濱邊の眞砂の數や、潮の如く起るとも。

習ひ覺えし諸家の軍法。

〽魚鱗鶴翼龍虎破軍、進戰退闘利變の術。

堅きを碎き銳きを取挫き、奇正突衝立花八陣、五位の兼備、四十八ヶ條七十二種、
〽二百八十四條の兵略、爰に亂れ彼處より寄せ、變に應じ奇に臨み、時に大江の岸打つ浪、浪花の葦の浦千鳥、むら〳〵ぱつとまくり立て、名を高天に輝かさん。もし天運至らずば、圍みの場所を一足去らず、腹
〽かつさばき討死の、末世に手本を見せ申さん、詞も正に當れるかな、反逆露顯の時至り、四天王寺の東門に、骸は晒せど名は朽ちぬ、金井が義心ぞ勇ましき。

常悅　ホ、ウ、面白し〳〵、某も鎌倉にて、志賀臺七に廻り逢ひ、楠原普傳が秘法の毒藥、手段を以て受け傳へ、その後二人に力を合せ
〽姉は長刀妹は、田舍に育てば手馴れし八重鎌。晝夜鍛錬修行を積み、親の敵を討たせん事、この兵部之介が方寸にあり。必らず氣遣ひ致されなよ。
〽實に賴もしき武士の、花は三吉野南朝に、二代の忠臣菊水の、流れは代々にかんばしき、涙拂うて七郎兵衞。

七郎　ハ、ア、勇ましきお話しを、聞くにつけても儚いは與茂作どの、元は矢ッ張り楠家の浪人、谷五郎への云ひ號けの、姉のおきのは吉原へ、傾城奉公の憂き勤め、これも矢ッ張り親への孝行。必らずお見捨てなう、お賴み申し上げまする。

さよ　また兵部之介さまにもこの娘、姉と一緒に親の敵、お討たせなされて下さりませ。
〽目には淚の陸奧や、末の松山千代かけて、女夫の固め經陀羅尼、願ひを金井谷五郎。

谷五　今日より父の名を繼いで、金井勘兵衞正國と名乘るべし。

常悅　ホ、ウ、我れもこれより諸國を廻り、鎌倉へ立越えて、姿を變ゆる一つの手段。宇治の常悅正雪と。
〽尋ねられよと互の誓ひ。

谷五　すりや萬事の手はずは、鎌倉にて。

常悅　何れも、その亡骸、野邊送りの營み致されよ。この常悅も心ばかりの弔ひは。
〽云はぬ色なる一包み、黃金花咲く山おろし。
ト袱紗に包みし金を七郎兵衞に渡す。この時、本釣り鐘鳴る。皆々こなし。

七郎　夜もしら〳〵と白石の

さよ　親の敵の

谷五　孝行一心。

常悦　五十四郡や。
皆々　六十餘州。
〽旭の勢ひ由井ヶ濱、一天四海に菊水の、武勇の旗を。
常悦　さらば。
ト常悦、谷五郎、兩人靜々行きかゝる。
皆々　おさらば。
ト皆々こなし。よき所にて七郎兵衞、死骸を抱き起して見せると、常悦、谷五郎ふりかへり見て、おさよ、おのぶ顔見合せ、思はずハア、と泣き落す。この見得よろしく。
〽なびかせり。
ト段切れにて皆々愁ひの思ひ入れにて、　幕

三　幕　目　　新吉原大福屋の場

役名――傾城、宮城野。同妹、おのぶ。新造、宮里。同、宮柴。やり手、おまき。禿、しげり。同たより。大福屋惣六。

本舞臺、一面の二階、上手の屋體、葭戸たてあり、この内をすかし見える屋體、正面は簞笥、黒塗り金物打ち、この上夜具棚にして、友禪見事なる夜具を飾り、宮城野の紋つきし油單をかけ、この次床の間、花生け軸をかけ、違ひ棚に地袋、佛壇しこみある事、よき所に衣桁に裲襠かけてあり、いつもの所に隔ての緣張り障子。下手は廊下、奥深に見せ、奥より出て來る事あり、花道際に二階の上がり口、手摺りを取りつけ、すべて大福屋二階の體、石橋の切れにて幕明く。
〽はや晝見世も入相に、二階座敷は身拵らへ、新造禿てんでんに、運ぶ櫛箱鏡臺に、その面影を寫しては、花の姿を宮城野とて、本原の萩の露おもみ、障らば落ちん愛敬は、廓に名高き情知り、紋日も餘所に宮里が。
ト二階の上がり口より、宮里、宮柴、新造の拵らへにて、禿の兩人も附き出て來り、
宮里　モシ花魁え、先刻、本屋の金さんが、この間お借りなんした、曾我物語の後ぢやと云うて置きなんしたぞえ。
イヤ、ほんに宮柴さん、今日の客人は仲の町の蔦屋から、二人一座で身拵らへしてお出でなんしたとやら、遣り手

衆が云うたぞえ。
宮柴　オヽ、忙しない、今身拵らへして行きんす。シタガ、知つた顔でもありんすまい。
宮里　イエ〳〵、どれも〳〵侍ひ衆、一人はよいが外の一人は憎てらしい侍ひ。目玉の大きい髭面のが客ぢやと、吉野屋の兄さんが云ひなんした。
宮柴　そりやマア、好かぬ客人でござんすなア。
〽惡う云ふのも褒めるのも、にべなき新造の後生樂。
トこの時、葭障子の内にて、
宮城　コレ〳〵、そんな事云うて、遣り手衆に叱られうぞえ。お前方はマア、座敷へ行きなんし。
宮里　イエ〳〵、お前と一緒に參りんす。座敷では幇間の五町さんがおどけ、ほんにをかしうありんす。
宮柴　オヽ、をかしい次手に宮里さん、今日旦那さんの連れてお出でなんした奉公人は、をかしい物の云ひやうぢやないかいな。
宮里　サイナア、遠い國から來たと云うて、仲居衆が尋ねれば、姉を尋ねて來た者だと、姉えを知らせてくんせえと、云うては泣かんす。
宮柴　モシ花魁、今ちよつと呼んで來て、お聞かせ申しんす。
宮里　それ〳〵、花魁にはよい慰み、宮柴さん、ござんせいなア。
〽打連れ下へ立つて行く、宮城野は打笑ひ。
ト新造兩人こなしあつて下へ下りる。此うち上より宮城野、裲襠の衣裳にて出て、文臺の片脇へ住ひ見送りこなし。
宮城　ほんにあの衆とした事が、ひよこすかと苦勞のない、よい機嫌ではあるわいなう。コレしげりや、この手拭も絞つて置きや。半挿も欞子へ出しや。
禿　アイ。
〽アイと禿がまめやかに、取片付けるその所へ。
ト禿兩人、半挿手拭を片付ける。トこの時階段の下にて、
兩人　サア〳〵、此方へ來やいなう。
ト踊り地になり、宮里宮柴、嫌がるおのぶを、二階の上がり口より、石持ち田舍染めの腰の女にて引連れ出て來る。おのぶあたりを見て恟りして、逃げて下へ入るを、新造兩人こなしあつて、階段の口へ入り、直ぐに引連れ出て、宮城野の側へ無理に坐らせるこなし。

〽新造二人が伴なうて、嫌がる者を無理無體、突き出されたる田舎の娘、あたりきよろ〱ついに見ぬ、錦の小べり三つ蒲團。

のぶ　コレ、女郎サア達、人の寢そべつて居る所を、用サアあるから早く來いと、二階サアぶち上げて、こりやマアあんたる所ぢやア、どこもかしこも光り申して、おしやらくの櫛サア見るやうに塗りこべつた簞笥サア、その上に夜の物も、こりやハア金切だア、わしらア蒲團と違うて蘇芳染の色のよさ、わしらア寢まつたら、あくとの胼サア引かゝつて、うつ切れべいぢやア、おやつかな、たまげ申したア。

〽魂消申すと云ひければ。

宮柴　コレ、その子や、年は幾つになる。

宮里　國は何處で、どうして、江戸へ來やつた。サア、それを話して

兩人　聞かしやいなう。

〽なぶると見えてしぶ〱泣き。

のぶ　オヽ、わしらア國さア奥州、だどアやがアまに別れて江戸サアはえらく盛る所だアと聞き、その上姉さアは、吉原で名の高い女郎さアなつて居さるとの事、童子の身として出來ない思ひをして、尋ねて來るも、海山の物語りのある事よ。

〽聞いて哀れを添へてたべ。

宮柴　オヤ馬鹿らしい。なんだかねつから知れんせんよ。

宮里　その上吉原で名の高い。女郎衆が姉さんとは、マア滅相な尋ね物。

のぶ　サア、それだから頼み申すワ。昨日觀音さアで、目まなこの強い人が連れて行つて、逢はしてやらうと駕籠サアにぶち乘せて來申す所を、爰のお方の世話になり申して、昨夜から居申す。臑かけ申すも他生の緣、ほんに赤はらはたれ申さぬちやア。

宮柴　オヤ、ちつと聞きなんし。ちやアと云うたわいなア。

宮里　ホヽヽヽ、そして赤はらはたれぬとは、マア、をかしい話しぢやないかいなア。

〽皆々どつと打笑ふ、宮城野は氣の毒さ。

宮城　コレ、其やうに笑はぬもの。誰れも目見得のその時は、恥かしい事ばかり。今あの子の云うた、だどアやがアまといふは、父さん母さんといふ事。赤はらはたれぬとは、嘘をつかぬと云ふ事ぢやわいなア。

宮里　さつても我折れ、その譯を、お前はどうして知つて居なんすえ。

宮城　知つたも無理か、うき節は。

〽夜毎日毎に變る枕、心筑紫の果は愚か、奥のとほくのお客にも、馴れ親しんだ身の一徳。

その客衆で思ひ出した。奥の客衆もさぞ待ち兼ねてゞあらう。わたしもいま行く程に、お前方は皆さん連れてよいやうに。コレ、しげりも仲の町の蔦屋へ行つて、彌次さんに先刻の返事は來たか聞いて來や。

〽皆さん早うといふ所へ、遣手のまきが例のしやべり。

ト階段の口より遣り手出て來り、踊り地生けころし、

まき　モシ宮里さん、宮柴さん、奥のお客が呼んで出でなされる。早う〳〵。

宮柴　ほんに勤めといふものは、いづくの人にも逢はねばならぬ。

宮里　それ〳〵、花魁のお話しで、この子の事が解りました。わたしらとても外ではない、だゞアやがアまの爲に賣られて、この勤めをするからは、客衆と寢そべる度毎に。

宮柴　オヽ、それ〳〵。

〽赤はらたれて氣に入つて、紋日頼むと口々に、云うて座敷へ走り行く、後打眺め宮城野は、おのぶが側に差寄つて。

ト此うち新造よろしくあつて、禿附いて二階を下りて入る。後に宮城野、おのぶの側へ寄つて、

宮城　コレその子や。先からの話しには、姉を尋ねてこの廓へ來たと云やるが、マア、其方の國は何處で、なんと云ふ所ぢやぞいの。

のぶ　オヽ、わしらア國サア奥州で、白坂の近在、逆井村といふ所さア。

宮城　そんならその逆井村に、與茂作さまといふ人を知つてかいなア。

のぶ　その與茂作といふは、めらがだゞアサ。

宮城　ヤ、そんなら其方は、わしが妹ぢや。

〽縋り寄るを突きのけて。

のぶ　アヽ、コレ〳〵、待たつしやれ〳〵。

ト下手へ飛びのき、こなし、

イヤ〳〵、がアまが常に云はつしやるには、姉さアの方にも、キッとした印がある。それを互ひに合はせた上、心さアをぶち明けろと云ひめした。印があらば早う

見せてくんさいなう、コレ姉さア。
〽なつかしながら油斷なき。
宮城　オヽ、常々大事にかけて置く、その證據を見せうぞや。
〽立つにも急ぎそこ〳〵に、簞笥の上にうや〳〵しく、淺草寺の觀世音、あけて中より取り出す、守り袋を見るよりもこなたも首にかけまくも、思ふ壺井の御守。
ト宮城野、違ひ棚の袋戸の內より、誂らへの守を持ち來り思ひ入れ。
國を出る時母さんの話し、父さんは元楠家の浪人、河內の國壺井とやらの御守。
のぶ　ドレ、見せてくんせい。
ト襟にかけし守り袋を出し、引合はせ見て、
この守が合ふからは、そんならはんの姉さアでござんすか。
宮城　オヽ、妹か。
のぶ　逢ひたかつた、逢ひたかつた、逢ひたかつたわいなう。
〽逢ひたかつたと縋りつき、外に詞も泣くばかり、折り節亭主惣六が、覗けば內に泣き居る二人、仔細あらんと襖の蔭、身をひそめてぞ窺ひゐる、脊なでさすり宮城野は、顏つく〴〵と打守り。
トよき程に二階の口より、惣六、着流し平ぐけ帶、釣瓶形の煙草盆を提げ出て來り、この體を見て、拔き足に上手の屋體へ入り、襖を引立て窺ひ居る。宮城野、思ひ入れあつて
宮城　オヽ、妹よう尋ねて來てたもつたなう。年端もゆかぬ其方、よもや一人來はせまい。父樣か母樣か、附いてお出でなされたか。もし道ではぐれでもしやつたか。サア、ちやつと云うて聞かしやいなう。
〽云へば妹はしやくり上げ、わつとばかりに泣き沈む。
コレ〳〵、斯う廻り逢ふからは、悲しい事もなんにもない。泣いては解らぬ。なんぢやぞいなう。
〽尋ねる姉の心はそゞろ。
のぶ　そんなら遠國隔てゝ、こなたは何にも知らぬの。
宮城　コリヤ、知らぬとは、どうなされた〳〵、どうぢやぞいなう。
のぶ　コレ、だゝアは鎭守の明神の祭禮の時、代官の志賀臺七といふ惡でくな侍ひに、切られてお死にやり申したわいなう。

宮城　エヽ。
〽はつとばかりに差込む癪。
のぶ　姉さアいなう〳〵。
トおのぶは吻りする。宮城野、癪の差込む思ひ入にてウンと反る。おのぶ、仰天して有り合ふ扱帯にて宮城野の胸を締める。この時上手の屋體の惣六、ソツと藥包みを抛りやる。おのぶ、フト藥包みを見附け、思ひ入れあつて宮城野に飲ませ、あわてゝ湯沸しの湯を茶碗に汲み持ち出し、飲ませて呼びいける。やう〳〵宮城野心付き、此うちいけ殺しの踊り地。宮城野あたりを見て、おのぶの手を取り上げ、愁ひの仕組み。
コレ姉さア、心が附いたか。
宮城　オ、妹。
のぶ　姉さア。
宮城　どうせう。
のぶ　尤もだ。
宮城　どうせう〳〵〳〵ぞいなう。
のぶ　ア、、コレ〳〵、其やうに云はつしやると、胸元がつツばり申して、一つも口へ出申さぬ。まだ悲しい事があるちやア。わしもそんでに殺さるゝところ、庄屋の伯父御が駈けつけて、力んで見てもなんのマア、正銘證據がござないから、キツと敵といふ事もなけれど、そんたの云ひ號けの御亭にも尋ね逢ひ、この江戸へ歸り申した後は、わしとがアまばかり、便りない身に下地の大病。
宮城　して〳〵母樣は、御本腹あつたか。
のぶ　重り〳〵てがアまは六月十六日、悲しや遂にお死やり申したわいの。
宮城　ヤヽ、ヽ、そんなら母樣も、お果てなされたかいなう。ハア、。
のぶ　話しを聞いてさへ、そんなに嘆かつしやるもの、直ぐに見とらへたおらだけが心、コレエ、、泣かつしやるな、道理だけれど、便りに思ふ姉さア。また病氣起しては濟まぬわいなう。
宮城　イヤ〳〵案じやんな。モウ〳〵煩らふ事ぢやない。さうしてどうぢや。
のぶ　サア、なじよにもかじよにも仕樣はなし、おらだけ一人を、庄屋の伯父御が引きとつて、福島の町へ出張つて、奉公しろと云ひめすけれど。
〽なんの奉公どころかい。
口惜しいとくやしいとで、後先かまはず。

〽檀那寺へ駈け込んで。
坂東巡禮すると云つて、お寺で笈摺拵らへてもらひ、國許をつッ走り、そんたに逢うて姉妹一致に心を合せ、だだアの敵が討ちたいばつかり。
〽道中すがらの艱難も、そんたに逢ふを樂しみに。
人の軒下、やンまの中。
〽ほんに出來ない思ひして、尋ねて來たる甲斐あつて。
この姉さアに逢うたれば、がつくりと、しようッ骨が拔けたやうな。コレ、そないに泣かつしやる手間で、妹が、はる〴〵と尋ねてよう來た、めこがめらしと云つてくれめせ、コレ姉さア。
〽あやも泣き入る幼な氣に、永の旅路の憂き苦勞、思ひやる瀬も宮城野に、つづけば末の松山を、袖に波こそ涙なり、宮城野始終聞くうちにも、悲しさ辛させき來る涙おしさげて。
宮城　其やうに思やるも尤も、併し其方は父母に、長う添やつた果報者。この姉を見やいなう。年貢に迫つて父樣は水牢、その苦を助けうばつかり、コレ、この廓へ身を賣つたは、思ひ廻せば十二の歳、其方は五つ、顔見知らず、父樣の御最期や、母樣の死目にも、逢はぬと云ふ、悲しい不孝な。
〽傍ない事があらうかいなう。
斯うした事とは露知らず。
〽この妹はまめなかしらぬ、父樣母樣お煩ひでもあらうなら、よもや知らしてたもらうもの。
つらい苦界のその中に、傍輩衆の母さんが、問ひ音便の度々に、悲しい話し聞かせたり、又仕合せのよい時は、嬉しさうな顔をして、もう何年で年が明く、便りのないを。
〽杖柱、首尾よう年を勤めたら、國へ歸つてお二人に、樂させましてどうしてと、泣いて苦界の我が身の上。
廻る紋日も松の内、桃の節句に菖蒲ふく、軒の燈籠二度の月、菊の節句や俄の時。
〽仲の町へ出て居ても。
もし父樣に似た人の、あると思へば心せき、又役所の勤めにて、田舍ぞめきの見物が、覗く見世先格子先、見るのも、若しや父さんが、尋ねて逢ひにござんしても、それぞと知れる種にもと、思うて暮せばあじやらにも。
〽色や浮氣を嗜なんで、勤め大事と云ひ號けの、殿御の事や其方の事も、戀しなつかし思ふのを、樂しみ暮した

甲斐もなう。思ひ掛けない父樣は、人手にかゝつて儚ない御最期。まだその上にこの姉を、尋ねんばかりに其方まで、又この廓へ身を賣るとは、なんの因果か情ない。

〽手を取り交す姉妹が、涙々を立ち聞くも、貰ひ泣きして立わけの、暖簾も濡るゝばかりなり、嘆きのうちに宮城野は、氣を取り直し泣く目を拂ひ。

コレ妹　最前其方の話の中、云ひ號けの夫も、この鎌倉へとやら、そのお人の名所は。

のぶ　その名も所も知り申さぬ。

宮城　して敵臺七とやらの、顏は覺えてか。

のぶ　アヽ、そりやよう覺えて居申す。眼のでッかい鼻の開いた男サ。

宮城　もうよい。云やんな、壁に耳。父樣は武士の果。すりや其方とてもこの姉も。

のぶ　侍ひの筋なれば、少しも早う、敵が討ちたうござるわいなう。

宮城　アヽ、コレ。

ト踊り地へ騷ぎの鳴り物になる、互ひにこなしあつて

オヽ、よう云やつた、出かしやつた。コレ、親の敵は倶に天を戴かぬとやら。幸ひ奧の大一座、騷ぎに紛れ、この廓を駈落ちするより外はない。何かの事は一時も早う立退き、田甫の方から、私と一緒に。サアおぢや。

ト兩人身拵らへして鏡臺の剃刀を二梃出し、これを兩人隱し持ち、

惣六　花魁どこへ。

〽小褄凛々しく身づくろひ、立出でんとする所へ、

ト惣六ズッと煙草盆を提げ前へ出る。

宮城　ヤア旦那さん、いつの間に。

惣六　イヤ、おりやたつた今。慟りせいでもよい事を。これは花魁、マア下に居や。ハテマア下に居やれサ。

ト宮城野、おのぶ上下へ別れ下に居て、惣六眞中に住ふ、

マア／＼一服のみやれ、おれも爰で一服のむ。アヽ、惡いぞえ。其方はマアアノ敵、イヤサ、堅い約束した男があるゆゑ、爰を駈け落ち、ハテ、さうであらう／＼、アア、さりとては惡いぞや。又その子は其方知つてゐやるか。

宮城　アイ、先刻新造衆が、昨日から來たと云うて、連れて來ておぢやに依つて、あまり不便さ。



六世岩井半四郎の宮城野



岩井紫若のおのぶ

惣六　ムウ、それで呼んでお聞きやつたか。これも尤も。サア、二人ともに用がある。ちよつとマア爰へ來やれ。
ト云はれてなんと詮方も、さすが小さき女の魂ひ。
宮城　旦那さん、堪忍して下さりませ。
トつッかくる刃物かひくり、側に有り合ふ鏡臺の、鏡押取り打ち落し。
ト宮城野、剃刀にて突いてかゝるを、惣六、突き廻し、おのぶ、曾我物語の本を打ちつける。また宮城野突きかける。おのぶ、鏡にて打つてかゝる。惣六、鏡を引ツたくり、剃刀を落し、兩人を引きつけ、
惣六　コリヤ早まるな、急く所でない譯は、氣を急かずともマアおれが云ふ事、とつくりと聞きや、コレ姉妹。
兩人　エヽ。
ト兩人下に居る。惣六、二人の顔を見て、
惣六　イヤサこれは鏡臺。
ト誂らへの對面三重模様の合ひ方になり、
ナ、鏡に寫る二人が顔、似たりや似たり杜若花菖蒲、その五月雨の晴き夜に、敵を討つたは曾我兄弟。イヤアノ鏡臺が。
ト後の鏡臺へこなし、前なる以前の曾我物語の本を見てこれを取上げ、
ア、こりや假名本の曾我物語、第廿四の卷。こりや好い物があつた。幸ひおれが面白くなくとも、讀んで聞かさう。二人ともに聞きやれサ。
ト本を開き見て、
「光陰惜しむべし、時人を待たざるの理り、隙行く駒繋がぬ月日重なつて、一萬は十三歳になりにけり、身の不肖なるにつけても、又公方を憚る事なれば、密かに元服して繼父の名字をとり、曾我の十郎祐成と名乘りけり」こりや十郎元服の事。「又この末弟、箱王丸は、實父祐安の菩提の爲とて、母滿江の敎へにて、箱根山へ上せしを、出家を嫌ひ下山して、北條どのといふ結構な烏帽子親をとりて、曾我の五時時致と名乘りけり。」マア斯う云ふと、味な所へ曾我物語、一つも理窟が解らねえ、木へ竹を接いだやうだが、よく推量して見やれ。アレ、河津どのゝ胤でせえ、親のない身はあれこれと、繼親のヤレ烏帽子親のと賴み、サア、その憂き艱難も我が一存では行かぬぞや。其方も爰を駈落ちして。
ト大きく云ひ、あたりを見て氣を變へ、
イヤサ、その堅く約束した男を尋ねても、云はゞ女の身

の上。しつかりとした北條どのかなんかといふやうな、いゝ後立てがなければ、なか〳〵思ひは晴らされぬ。其うちには悪い魔がさして、むざ〳〵月日を送る事もある。もしやハテ、曾我殿原でさへ、大磯化粧坂の傾城に心を奪はれ、いろ〳〵との艱難辛苦、こりや春狂言に芝居で、よくある事だ。もしこの廓を逃げ負せてからが、腹を立ちやるな、遠國生れの其方が事、當分先の當もなく、うろうろするうちには、内外の者が見附けて、イヤモシ親方、あの子は地内に斯うやつて居ります、ヤレ田町に人の世話になつて居ります、根岸に衒妻前髪まで落して居ります。あんまり踏みつけた仕末ぢやアござりませぬかと、それを聞いて、いゝわい、打ッちやつて置けとはどうしても、主の身では云はれぬ。其方ばかりが親に孝行ではない、勤めする者はみんな孝行。それだに依つてあれも孝行、これも孝行孝行々々と、孝行づくめで取巻かれた日にやア、女郎屋商賣やめにやアならぬ。これも浮世の身過ぎ世過ぎだア。また例へた話しが、おらア内の野郎が、四五日見えねえワ、若い者呼びつけて、野郎が見えぬがどうした、何所へ行た、十日あまりも外を内にして、遊び所は何所だ、首玉へ繩つけて引摺つて來いと云ふワ。左様でござります、有やうは新宿、イヤ品川へ參つて居ります、どうぞ連れて參りますから、大目に御覽じませと、野郎を連れて歸つて來るワ。そりや悴が我が家の敷居が、山のやうになつて入りかねるワ。コリヤヤイ野郎め、うぬはどうしたものだ、十日も内を明けて、少し二階の取廻し、家の始末を覺えて置かねえか、勘當するぞ、久離帳につけるぞと叱りつけるワ。又人様の大事の息子達が内へござると、イヤ花魁、あの客人は爲になる、隨分大事にしなせえ、外に遊びに行かぬやうに、足を近く來るやうに、面白く遊ばせるがいゝ、外へ行かれちやア外聞が悪いぞ、大事にせいと女郎子供に云ひつける、そんな得手勝手な商賣はねえ。その商賣はして居れど、慈悲と情といふ事は、平常心に忘れやアしねえ。昨日不思議に淺草で、廻り逢うた奥州者、姉を尋ねるばかりに、この身を賣るとの事、直ぐに金を渡して連れて來たのも、二人して最前から何やら話し。さてこそと隣りの部屋で煙草のみながら切ねえ哀れな話しを聞き、悲しうて涙がこぼれ、手に持つて居る煙管の雁首上りを打忘れ、火皿で口を火傷したわえ。元より浮氣な事もなく、勤め大事にしてくれた其方の事。なんの悪く思はうぞ。

まして何にも知らぬ女の身、いま突ッかけたこの剃刀、おれにせえ打ち落される位で、どうして相手は侍ひぢやねえか。もし返り討に、サア、内へ歸つても、てまへの恥はおれの恥になる事。それぢやに依つて云ひ號けの夫か北條どのといふやうな、キッとした後立てになる人が、出來た時にやア、ハテ惣六は男だ、證文の金高は只表向き、只でもくれてやるわえ。必らずおれを人に笑はせぬやうにしてくれろ。向後、芝居の積物や、俄の世話もせぬ法もあれ、眞實誓文噓ぢやアない、曾我殿原の兄弟は、五つや六つの頃よりも、十八年の憂き艱難、それ程には行くまいが、アレ天道樣の惠みにて、今にも好い幸ひはあるめえか。コレ、身の上大事に時節を待つが上分別。

〽兎角時節を待つものだよ。

〽曾我に准へて姉妹に、道を教へる通り者、宮城野はただ泣いじやくり。

ト惣六よろしく意見あつて、兩人、思ひ入れ、

宮城　旦那さんの常からの、御氣質を知りながら、親の別れに氣も亂れ、手向ひました私しを、憎いとも仰しやらず、お慈悲深いそのお詞、有り難いとも忝ないとも、冥加の程が恐ろしい。

のぶ　御亭、怺へてくれめせぢやア。

宮城　堪忍なされて下さりませ。

〽妹も共に手を合せ、たゞ伏し拜む嬉し泣き。

惣六　ア、コレ〳〵、その禮には及ばぬ事。聞分けてさへくれりやア、おれも嬉しいわい。

〽義理を立てぬく男達、通も不通も涙なり、下座敷より遣手のまき。

ト二階の口より遣り手出て來り

まき　モシ〳〵宮城野さん、先から客人がお待ちかね。こりや、誰れぢやと思うたら旦那さん、こなたは新參の田舍者、そこに居ずと下へ行きや。

惣六　ア、コレおまき、おれが今花魁へ、假名よみの曾我物語を、二人に讀んで聞かして居た。この新參者は今二つ三つ、物の云ひざまがをかしいと云つて、おれが呼びとめて話しをして居た。宮城野は後からやらう。てまへ先へ行きやれ。

まき　アイ、そんならお客さんは、よいやうに申しますが、コレ其方も用事が濟んだら、下りるのぢやぞや。

ト云ひながら下りかける。惣六思ひ入れあつて、

惣六　ア、コレ〳〵。

ト手招きして遣り手を呼び、惣六囁く。遣り手思ひ入れあつて

まき　アイ、承知いたしました。そんなら宮城野さん、支度がよくば早うお出でなんし。

〽遣り手はとつかは走りゆく。

ト二階を下りて入る

宮城　ドレ、ちよつと顏を直して。

惣六　アヽ、直さずとも、美しいものだ。

〽褒めるも贔屓寶物に、花も實もある亭主が詞、隣り座敷に大騷ぎ。

トこの時、二挺鼓太鼓入り、座敷の騷ぎやうの、賑やかなる鳴り物聞える。おのぶ悧りする。惣六、宮城野の客が騷ぐのだと教へる。おのぶ、うろ／＼こなしある。

〽幇間末社が浮氣に乘つて、飲むやら唄ふやら、現たわいの喜見城。

トこの間、宮城野、鏡臺にて顏を直し、衣桁に掛けある裲襠を取つて宮城野に着せる。おのぶいろ／＼こなしあつて、見惚れる事よろしくあつて、宮城野立ち上がり。

宮城　そんなら旦那さん。

惣六　花魁御苦勞。

ト煙草盆を持ち、立ち上がつてこなし、

〽意見上手の親方が、餘る情に宮城野が、妹を部屋に奧座敷。

ト惣六は上手へ、宮城野、おのぶは上手へ行き違ふ。この時、禿手箱を持ち、二階上がり口より出て、上手の惣六の前へ持ち行き、直ぐに奧へ入る。この間、騷ぎの鳴り物、三味線次第にかすめて

宮城　旦那さん、行て參ります。

惣六　アヽコレ、行くなら、これを持つて行きやれ。

ト文庫より證文二通を改め出して、兩人が前へ投げてやる。證文ゆゑ宮城野おのぶ、不思議さうに證文を取つてよく見て、

宮城　ヤ、こりやコレ二人が年季證文。

惣六　アヽコレ、念には念のおれが意見、曾我兄弟の本望の、云はゞ狩場の切手代り。

宮城　お禮は詞に盡きせぬ御恩。

のぶ　そんなら姉さア。

宮城　妹おぢや。

惣六　ア、コレ、必らず急くな、まだ早い。

宮城　まだ早いとは。

惣六　ハテ、間夫に逢ふのは。

兩人　エ。

　ト兩人下に居ろ。惣六、煙管にて灰吹きを叩くを、木の頭

惣六　引けすぎがよからう。

　ト上手の提灯の唄にて、これをキザミにて、よろしく、ひやうし幕

大詰　由井ケ濱仇討の場

役名――姉、宮城野、妹、信夫 實ハおのぶ。松田彌太七。千葉勝右衛門。醫者、卜庵。志賀臺七。金井谷五郎。

本舞臺、一面の浪幕。江の島辨天を見たる遠見、上手寄りに松の實樹へ陣太鼓かけ置く事、上下ともに柵矢來、高張り提灯、所々に篝を焚き、すべて由井ケ濱の模樣、浪音にて幕明く。

　ト突棒の侍ひ四人、上下より出て來り

侍一　なんと各々方、今日は孝子姉妹に仇を討たせんと、鵜羽黑右衛門どのを晴れの仕合と僞り、この處へお引寄せに相成るは、殿のお慈悲ではござらぬか。

侍二　如何にも。艱難辛苦を致し、亡き父の恨みをば晴らすとは、女に稀れなる者でござる。

侍三　最早用意も整ひましたれば、御檢使のお出を相待ちませう。

侍四　如何にも。それがよろしうござりまする。

　ト向うより松田彌太七、千葉勝右衛門、何れも裃の拵らへにて出て來る

彌太　申しつけたる通り、用意萬端整ひしか。

侍一　仰せの如く、用意仕りましてござりまする。

勝右　して、盃等の用意も心附けしか。

侍二　萬端滯りなく、用意仕つてござりまする。

彌太　彼處に控へ居る金井谷五郎どのを、お呼び出し下されい。

侍三　ハア。

　ト下手に向ひ、

　それに控へ居らるゝ金井どの檢使のお召しでござるぞ。

谷五　ハア、、。

　卜武者修行の拵らへにて出て

宮城野姉妹、敵討の助太刀、御赦免下されしは、全く御兩所の御配慮、忝なう存じまする。

彌太　なんの／＼、その禮にては痛み入る。勝負の前方申し置くが、妹宮城野の緣に繫がる金井どの、助太刀こそは許せども、勝負は相成りませぬぞ。

谷五　委細心得てござりまする。

勝右　しかと申し渡し置きまするぞ。

谷五　ハア、。

彌太　ソレ、鵜瀬どのをお伴ひ申せ。

侍四　ハア、。

　卜上手へ入る。直ぐ黑右衞門の臺七、素網白無垢にて出て來る。

兩人　イヤナニ、黑右衞門どのか。これが即ち立合の場所でござる。

臺七　ハテナア。立合の場所は管領の御前とござるに、見れば廣々たる濱邊の體。こりや如何致した儀でござる。

彌太　されば、今朝御前に於てと、お指圖はござれど、是場よき由井ケ濱にて、諸人に見物を許し、貴殿の英名を輝かさん爲の計らひでござる。

勝右　貴殿にも心を附けて、お勝負めされ。

臺七　左樣承はれば、御尤もに存ずるが、見れば矢來を以て圍はれしも、これも管領のお指圖でござるかな。

勝右　如何にも。諸人の群集混雜もあらんかと、斯く竹矢來をしつらはせてござる。これも貴殿を大切に思し召し、管領よりの御計らひでござるぞ。

臺七　重ね／＼のお心添へ有り難く存じまする。それにつけても、これなる者は、

谷五　身共は今日御檢使のお許し受けて、敵討の助太刀いたす者でござる。

臺七　ナニ敵討とは。

谷五　汝こそ先年、百姓與茂作を殺害なし、本國逐電いたしてより、姉妹の艱難辛苦、管領家のお情に依り、僅華まさりの今日只今、尋常に勝負を致しやれ。

臺七　して、其方は、

谷五　金井谷五郎でござる。

臺七　すりや宇治常悅の

谷五　如何にも、股肱と頼まれし拙者でござる。

臺七　さいふ汝が助太刀とは。

彌太　その不埒尤も至極。金井どのこそ與茂作が、杉本甚内とて御家來公のその砌り、姉おきのなる宮城野と云ひ號けなせし養子壻、云はゞ舅の仇敵。管領職より助太刀お許されましたぞ。
臺七　して、晴れの仕合と云ひしは。
彌太　其方を誘き出し、敵を討たせん爲なるワ。
臺七　ヤア〳〵。
彌太　時刻移れば、ソレ兩人を
侍一　心得ました。
　ト下手へ向ひ
　それに控へし宮城野信夫、急いでこれへ。
　トこれにて宮城野、信夫、白裝束にて、薙刀鎖鎌を持ち、出て來り
信夫　ヤア珍らしや志賀臺七、先年父樣を討つて立退き遠國なし、行くへの知れぬそれゆゑに、姉を尋ねて東路に、
宮城　めぐり逢うて樣子を聞き、慥かに敵と思へども、手出しのならぬは女の果敢なさ
信夫　惣六どのゝ情に依り、殿樣のお慈悲を受け
宮城　云ひ號けの夫にめぐりあひ、敵討御免を受けし上は、イザ尋常に勝負しや。
臺七　スリヤこの處へ誘き出し、我れを討たさん計り事よな。管領職にも似合はざる、卑怯未練の致し方。
彌太　卑怯といふは汝が事。サア、晴の仕合に白無垢はお許しあれど、肌に著込みし鎖子帷、襷にその身を固めしは、仕合に負けしその時は、急所の當身に卑怯の、勝を取らん所存であらうがな。
臺七　ヤ。
勝右　最早叶はぬ、勝負をなすか。
臺七　サアそれは。
谷五　いつそ手籠に討つて取らうか。
臺七　サアそれは。
三人　サア〳〵。
宮城　いざ尋常に。
二人　勝負しや。
臺七　斯くなる上は是非に及ばぬ。鏡の有所を知られしゆゑ、後日の禍避けんが爲、無漸にも百姓與茂作を討つて捨てたは、斯くいふ志賀臺七。敵討などとは片腹痛し。うぬら一々返り討だ。覺悟いたせ。
　ト刀の柄へ手をかけ、キッと見得。

彌太　斯く白狀の上は式禮通り、介抱の醫者を呼び出し召
されゝ。
侍一　ハア、……それに控へし醫者卜庵、急いでこれへ。
卜庵　ハア、。
ト卜庵、醫者の拵らへにて上手より出て來る
勝右　かねて申し聞かする通り、互ひに尋常の勝負を遂げ、
双方に疲れもあらば、太鼓の合圖に介抱いたせ。
卜庵　畏まつてござりまする。
彌太　ソレ盃の用意。
侍一　ハア、。
ト手水桶、土器、三方にて双方に杯をさす。
宮城　杉本甚内が娘宮城野。
信夫　同じく妹信夫。
宮城　倶不戴天の父の仇。
二人　イザ尋常に勝負々々。
臺七　勝負呼はり片腹痛い。うぬら一々返り討だ。覺悟ひ
ろげ。
ト水を呑んで
土器破れて本の土だ。
ト土器を破る。

四人　イザ／＼。
トきつと見得になり、誂らへの鳴り物になり、よろし
く立廻りあつて、女形疲れると
皆々　ソレ、太鼓ぢや／＼。
侍一　卜庵老、早く／＼。
卜庵　ハイ／＼。
ト醫者介抱して
谷五　氣遣ひない。踏ん込め／＼。
トまた立廻りになる。妹疲れる。
侍一　ソレ、太鼓ぢや／＼。
臺七　エイ、又かいやい。
皆々　醫者ぢや／＼。
ト卜庵介抱する
谷五　氣遣ひせずと、立合へ／＼。
ト臺七少し弱る
臺七　待て／＼。太鼓打て／＼。
卜庵　太鼓は破れた／＼。
臺七　太鼓が破れりや百年目だ。
卜庵　脉も上つた／＼。
臺七　エ、おきやアがれ。

トよろしく立廻りあつて、トゞ谷五郎手裏劍を打つ。宗七たぢたぢとなるを、姉妹二人切り込み、トゞ止めを刺す。

宮城　父上の敵。

信夫　母様の仇。

谷五　舅の敵。

三人　天命思ひ、知つたるか。

彌太　斯く本望遂げし上は、金井どのには宮城野信夫を召連れられ、これより直ぐに本國へ

勝右　一先づ御歸國あつて、逆井村にて杉本甚内どのへ、後の榮えぞ肝要なるぞ。

谷五　何から何まで貴殿の御厚志、忝なう

三人　存じまする。

彌太　日頃の念願相屆き、首尾よく敵討ち負せ、めでたいなう。

皆々　ハヽア。

彌太　オヽ。

ト扇を廣げるを木の頭

めでたい／＼

ト皆々喜ぶこなし。浪の音合ひ方にて

拍子幕

碁太平記白石噺（終り）

關取二代勝負附



三世坂東三津五郎の秋津島

關取二代勝負附

序幕

天滿天神鳥居前の場

役名――關取、秋津島國右衞門。六角伊達五郎。六角要之助。傾城、茨木屋大淀。若い者、三七。仲居、およし。同、お八重。呼出し、八作。中間、重内。同、橘平。角力取、鳴岩浪藏。同、土蜘丸藏。同、籠石竹右衞門。行司、志村庄九郎。關取、鬼ケ嶽洞右衞門。

本舞臺、正面、三間の間、後ろ淺黃幕。上の方へ寄せて、丸物の石の大鳥居。誂らへの額面、晝心に下手へ同じく石の籬、所々に片蓋の石燈籠、日覆より梅の吊り枝、同じく立ち木、下手、出茶屋の出し臺、床几二脚並べ、爰に、およし、水茶屋の娘、前垂れ駒下駄にて、茶を運び居る。町人の仕出し大勢、床几にかゝり居る。すべて、天滿鳥居先の體よろしく、辻打ちにて、幕明く。

よし　ハイ、お茶をお上がりなされませ。

仕出　時に姐えや、今日はさるお屋敷で、秋津島と鬼ケ嶽と、相撲があるさうだが、どちらが勝つであらうなア。

よし　その角力は、秋津島關が勝たしやんしたと、最前云うた人がござんすわいなア。

仕出　この姐さんは氣の早い。まだどちらが勝つか知れもしねえものを。

よし　イエ／＼、例へ知れても知れいでも、あの憎らしい鬼ケ嶽さん、なんで勝たしやんすものかいな。

　トつんとする。皆々思ひ入れ。

仕出　どちらが勝つたからとて、こちらの得になる譯でもなし。ドレ、この間に參詣でもしませう。茶代は爰に置きまするぞや。

よし　左樣なれば、お歸りに御悠りとなされませ。

仕出　ドレ、お參りをして來ませう。

よし　この間に、お茶でも沸かして置きませう。

　ト大拍子になり、仕出し皆々入る。この鳴り物にて向うより、伊達五郎、敵役の若殿の形。奴重内を連れ出

て來り、直ぐに舞臺へ來て床几に腰をかける。およし、
　茶を酌み出て

よし　ハイ、お茶一つ召し上がりませ。

伊達　コリヤ〳〵、女中、これへ鬼ケ嶽と云ふ關取は參らぬか。

よし　イヽエ、どうござりましたやら、存じませぬわいなア。

伊達　それではまだ、屋敷に居ると見えるわえ。

よし　御ゆるりとなされませ。

　ト入る。

重内　モシ、若旦那、あなた樣は左樣に、鬼ケ嶽〳〵と仰しやりまするが、鬼ケ嶽より大造の身請けの事は、如何なされまする。

伊達　その儀なれば氣遣ひ致すな。母上の手箱より、ソツと盜み出してこの通り、持參いたして居るわえ。

　ト百兩出して見せる。

重内　成る程、その百兩を手附けに渡し置けば、關取が話しを致しまして、指でも差させる事ではござりませぬ。して、後金の三百兩は。

伊達　それも案じる事はない。あの床の間の獅子の香爐を、疾より盜み取り、この通り持つて居るわえ。

　ト出して見せる。

重内　ドレ、お見せなされませ。

　ト手に取つて見て

これが三百兩になれば、よろしうござりまするが。

伊達　ハテ、それで足らずば又、なんなりとも盜み出すワ。

重内　ア、モシ、左樣に無暗に盜む〳〵と仰しやりますな。人聞きが惡うござりまする……併し、お大名の若殿にして置くは、惜しいものでござりまする……さうしてアノ、七百丁の御朱印は、どうなされました。

伊達　その御朱印は、弟要之助と身共が預かりゆゑ、密かに盜み取つて、あの鬼ケ嶽に預けあれば、今にも手前が家督さへ致しなば、其方とても取立て得さすワ。

重内　イヤモウ、そればかりを樂しみに、惡い事とは知りながら、お味方いたしました。

伊達　それにつき重内、其方はこの手紙を持參なし、鬼ケ嶽を呼んで來てくれい。委細は認めあれば、直さま社內の萬屋方まで、參るやう同道いたして參れ。

重内　よろしうござります。左樣なれば一走り、行て參り

ますする。
伊達　急いで參れ。
重内　よろしうござりまする。
ト向うを見て
モシ／＼、向うより御舍弟要之助さまが、お出でござりまする。
伊達　ナニ、弟が參る……コリヤ／＼、其方は道にて弟に逢はぬやうに致せ。
重内　畏まりました。
ト向うへ入る。
伊達　コリヤ／＼女中、大きに世話に相成つた。茶代はこれに置くぞ。
よし　有り難う存じまする。
ト大拍子にて鳥居の内へ入る。
ほんに、どこやら怖らしいお侍ひ樣ぢやなア。
ト三味線入り大拍子になり、向うより、要之助、中間付き添ひ出て來り、花道にて
要之　あの秋津島が天神へ、參詣して戻るとの事。早う來てたもればよいが。
ト本舞臺へ來り
コレ／＼、わが身は爰から取つて返し、秋津島に待つて居る程に、早う來てたもと云うておぢや。
中間　ネイ／＼、畏まりました。
ト下手へ入る。
要之　わしが、下屋敷へ來るを知つて、大淀の所から、戻りに爰まで來てくれとの文。角力が濟むと其まゝ、來る事は來たなれど、あの大淀は、もう見えさうなものぢやなア。
ト思ひ入れ。誂らへの鳴り物になり、向うより大淀、他所行きの拵らへ。おつる、茶屋娘の拵らへ。おきの、仲居の拵らへ。お八重、船宿女房の拵らへ。三七、羽織着流し、若い者の拵らへ。少し後より八作、呼出し奴の拵らへ。この人數皆々出て、花道にとまり
八作　イヤ、これは茨木屋の三七。大淀さんぢやアござりませぬか。
大淀　ほんにお前は、呼出しの八作さん。
八重　申し、おさのさん八作さんは、いつ見ても、可愛らしいぢやアござんせぬか。
大淀　ほんにさうでござんすわいなア。
三七　兎も角も、先づ向うへ行かうぢやござりませんか。

八重　モシ太夫さん、見やしやんせ。向うにお出でなさんすは、檀か殿さんぢやござんせぬか。
大淀　ほんに殿さんぢやわいなア。
要之　オヽ、わが身は太夫。最前から待つて居たわいなう……よう來てたもつたなう……早うおぢや／＼。
大淀　アイ／＼。そんなら皆さん。
皆々　サア、ござんせいなア。
ト皆々本舞臺へ來て、よろしく並び
大淀　申し殿さん、いろ／＼話さねばならぬ事が、たんとござんすわいなア。
要之　サア、わたしもわが身に、話さにやならぬ事があるわいなう。
八重　要さま、この間は久しうお目にかゝりませぬ。御機嫌よろしう、おめでたうござりまする。
要之　わが身達にや變りもなうて、わしも嬉しう思ひますわいなう。
三七　時に今日は、この六角さまのお下屋敷で、角力があるとの事でござりまする。
八作　御家督定めの御前相撲。今果ての戻りがけでござります。
八重　定めて秋津島さんが、勝たしやんしたでござんせうなア。
八作　サア、ヤッと云つて立合ふと、半時ばかりも揉み合つて、勝負無しになつてしまつた。
大淀　ほんに、蔭で聞いても、惜しうござんすなア。
八重　それはさうと殿さん、聞いて下さんせ。大淀さんは、何ともない眼を惡いと云うて、日朝樣へ願がけと、親方さんへは嘘云うて、あなたに逢ひにお出でなされたのでござんしたが、實があるでござんせうがな。
八作　イヤ、畜類め。
三七　何を云ふのだ……モシ大淀さん、その眞實を少しばかりは、伊達五郎さんにお裾分けをなされませ。
大淀　エヽ、モウ、三七どん、伊達五郎さんの事は云うても下さんすな。同じ御兄弟でも、あのやうに違ふものかいなア。
三七　サア、今日中にはどちらへなりと、極めにやアなりませぬ……モシ姐さん、今にも見えたなら、茨木屋の三七が尋ねて居たと、さう云つておくんなさい。
よし　アイ、合點でござんす。
三七　イヤ、要之助さま、途中ながらお話し申しまする

は、今も申します通り、大淀さんの身請けの事でござりまする。

要之　それは其方が云はいでも、よう知つて居るわいなう。

三七　そりや御存じでもござりませうが、さうぺん／＼致して置きましてば、あの太助と私しが、親方へ濟みませぬ。どうぞお早く、方をお付けなされて下さりませ。

要之　サア、それも今に秋津島が來やると、直ぐに返事をするわいなう。

八重　申し、三七さん、殿さんが云はしやんすは、關取が見えなさんしたら、話しをすると仰しやる程に、マア、それまで待つて上げて下さんせいなア。

三七　成る程、さう云ふ事なら、それまでお待ち申しませう……併し其うち、斯うしても居られますまい。この間に天神樣へお詣り申して來ませう。其うちに太助どんも見えるであらう。

八重　どうぞ伊達五郎さんの身請けが間違うて、要さんの方へ身請けの出來るやう、大淀さんの代りに天神樣へ、お百度を上げようではござんせぬか。

八作　おいらも共々お百度を助けて上げよう。

大淀　そりや、嬉しうござんすわいなア。

よし　そんならわたしも粋を通して、御一緒に參詣いたして參りませう。

三七　わつちもさう意地惡も云はれまい。二三本助けて上げませう。

八重　そんならお二人さん。

よし　御悠りとお話し

皆々　なされませいなア。

ト辻打ちになり、皆々鳥居の中へ入る。兩人、後を見送り、合ひ方になり

大淀　モシ要さん、今も三七どんの云ふ通り、わたしが身請けを早うせねば、あの鬼ケ嶽づらが身請けして、伊達五郎さんの方へやるとの事。さうなる時は、生きては居ぬわたしの心。その時必らず恨んで下さんすなえ。

要之　そりやモウ案じやるな。わが身の身請けは、わしがキツとするわいなう。

トこの時、鳥居の内より、伊達五郎、何心なく出て、この體を見て居る。

大淀　それ聞いて落ちつきました。ほんに嬉しうござんすわいなア。

ト この時、伊達五郎、後へ廻り

伊達　ほんに嬉しうござんすわいな。

ト 兩人の中へ出る。兩人、恟りして飛び退き

要之　お前は兄者人。

大淀　伊達五郎さん。

伊達　コリヤ要之助、手が惡いぞや。この兄樣が見る前とも憚らず、今のこそ〳〵話し。ありやなんぢや。エヽ、腹が立つ〳〵。腹が立つわいやい。コレ〳〵大淀、そもじも聞えぬぞよ。この伊達五郎が……サ、伊達五郎が前で、いちや〳〵するを、見て堪えられぬ……サア、なんであらうと、其方に用事がある。ちやつとおぢや。

ト 花道へ行きかけるを

要之　アヽ、モシ〳〵、兄者人、なんぼお前が兄の高下ぢやとて、この大淀はやりませぬ。此方へおぢや〳〵。

ト 大淀の手を取り、上手へ引いて行くを

伊達　イヽヤ、そりやならぬ〳〵。

ト また引ッ張つて行くを

要之　イヽヤ、なりませぬ。

伊達　ならうがなるまいが、連れて行くのぢや。

ト 三人手を引き合うて爭ふ。トヾ伊達五郎に引摺られ、兩人、花道好き所まで行く。この途端、向うバタバタにて、中間橘平、花道好き所まで來り、見事に返る。これにて恟りする。摺り鉦入り、派手なる鳴り物。これへ角力太鼓入りになり、向うより、秋津島、好みの拵らへ、襟に手拭を卷き、鮫鞘一本差し、橘平が持ちし手紙を持ち、重内の手を捻ち上げ、花道へとまる。橘平、又うぬとかゝるを、手を捻ち上げてキッと見得。要之助、大淀、嬉しき思ひ入れ。

橘平　どうする〳〵。

要之　わが身は關取。

大淀　秋津島さん。

伊達　エヽ、惡い所へ。

要之　よう來て

大淀　下さんしたなア。

秋津　橘ケ香に、風が持て來る奴凧、味な糸口綻び口、丁度な所へ來合せて、見れば見知らぬ顏でもなし、鬼ケ嶽とばかり宛名の無いのは、胡散なこの狀。何やら味な文言の、殊に手蹟は覺えある。

ト 振りほどいて

橘平　その手紙を。

秋津　ハテ、好い物が手に入つたわい。
　ト きつと云ふ。
宛名の詮議も。
　ト云ふを
伊達　南無三宛名だ。
　ト寄るを
秋津　エヽ、うつとしい端役めら。
　ト橋平を見事に投げて
寄りやアがると、大地へ埋めるぞえ。
橋平　でも、その手紙を。
　ト手を出さうとするを支へる。
秋津　ハテマア、急かずとあれへ、お出でなされませ。
　ト伊達五郎の手を持ち添へ、本舞臺へ押し戻す。矢張り右の鳴り物にて、本舞臺へ來る。
伊達　これサ、秋津島、その手紙はアノ。
　ト云ひかゝるを
秋津　ハテ、伊達五郎さま、お前様にもお似合ひなされませぬ、手紙の詮索、一體これは、なんとなされまする。
伊達　サア、その手紙を。
秋津　ハテ、この状は、私しが預かりますれば、よろしからうと存じまする。
伊達　さうでもあらうが、ちよつとその状。
秋津　達てとあれば、この状を讀み上げませうか。
伊達　サア、それは。
秋津　モシ、伊達五郎さま、お前様もどうしたものでござりまする。たま〳〵要之助さまと大淀どのとの出合ひ。粹を利かして、天神様へでもお詣りなされませ。
伊達　イヤ、最前より天神様へは、百度詣りを致したわえ。
　ト橋平、袖を引かへ
橋平　モシ〳〵お旦那、また折もござりませう。今日の所は見遁がして。
伊達　おやと云うて、アノ大淀を。
秋津　この状開いて讀み上げませうか。
　ト状を見せる。
伊達　イヤ、それには及ばぬ……思へば〳〵。
秋津　エ。
伊達　家來、供せい。
　ト矢張り辻打ちになり、伊達五郎、橋平、重内付いて鳥居の内へ入る。あと揚弓の音になり

秋津　サア、邪魔は拂ひました。
要之　いつに替らぬ秋津島の働らき、忝ないく〵。コレ大淀、ちやつと禮を云やいなう。
大淀　これがマア、ちよつとに禮が云はれうぞいなア……モシ秋津島さん、エヽ、嬉しうござんす
要之　コレ秋津島、これぢや〳〵。
ト手を合せ拜む事よろしく
秋津　ア、モシ、なんの事でござりまする。禮に及ぶものでござりませうか。併し、途中に於て今の仕儀。大淀どのを連れまして、折惡うお兄樣と出合ひまして、今のやうな事があつては、もし隼人さまのお耳へでも入つたら、御家督の妨げ、少とお嗜なみなされませ、
要之　サア、その家督が定まつても、七百丁の御朱印の在所が知れねば。
秋津　サア、ようござりまする。お氣遣ひなされまするな。追ッつけ私しが、詮議してお手に入れまする。
要之　サア、それがあつても肝心の、太夫の身請けの四百兩と云ふ金が。
秋津　サア、それもよろしうござりまする。私しが吞み込んで居りまする。
要之　そんなら、アノ、御朱印の事も太夫が事も。
秋津　兩方とも秋津島が、しつかりと請合ひました。
要之　そりや、わが身、本心か。
秋津　ハテ、御座船に乘つたと思つて、マア、落ちついてござりませ。
ト要之助、大淀、嬉しき思ひ入れ。兩人、上の方の床几にかゝる。秋津島は眞中の床几にかゝる。ト矢張り辻打ちになり、向うより、鳴岩浪藏、角力の拵らへ、油紙包みの兩掛けをかたげ、菅笠、脚絆にて、草鞋を穿き、出て來り、本舞臺を見て
鳴岩　ヤア、其所にござるは、親方ぢやアござんせぬか。
秋津　オヽ、わりや鳴岩、九州へ下つた儘で、今戻つたか。
ト云ひながら本舞臺へ來る。
鳴岩　アイ、いま船から上がつて、皆さんの內へ行つたりや、お內儀の云はるゝには、何やら晴れな角力で、屋敷へ行かんしたとか。戻りには天神樣へ廻る筈ぢやとの事ゆゑ、直ぐに逢ひに來ましたが、いつもマアこなさんも、達者でめでたうごんすなう。
秋津　われも達者でめでたい……さうして、なんぞ急ぎの

用があつてか。

鳴岩　用と云ふは外の事でもごんせぬが、來年の角力は九州の、筋ケ濱が勸進元で、關取の弟子殘らずへ、手附け金二百兩、受取つて來ました。

秋津　ナニ、來年の相撲の金を。オヽ、受取つて戻つたのか。

鳴岩　そこで皆が云ふには、この二百兩は、此まゝ親方へ預けて置くがよからうと云ふ相談。それでわざ〳〵持つて來ましたのサ。

秋津　オヽ、さうであらう〳〵……イヤ、面倒ながら皆が頼みぢやとあらば、預かつてやらうかい。

鳴岩　さうして下んすりや忝ない……サア、二百兩、胴卷の儘渡しますぞ。

ト胴卷の儘二百兩を秋津島へ渡す。

アヽ草臥れた〳〵。

ト揚弓の音になり、鳴岩、菅笠を敷いて、その中へ腰をかけ、揚げ幕の方に向つて、草鞋の紐を結び直して居る。秋津島、大淀、要之助へこなしあつて、

秋津　モシ、先づ半金渡したら、落ちつくでごんせうかな。

鳴岩　イヤ、落つく段か、今度の角力は大入であつたと、皆落ちついて居りまする。

秋津　ハテ、半金さへ渡して置けば、後金は又どうなりと。

鳴岩　なにサ、後金は又向うから、持つて迎ひに來まするわな。

秋津　ナニ、氣遣ふ事はごんせぬ……ナ、ようごんすか。

鳴岩　ようごんすのごんせぬのと、少しも氣遣ひはごんせぬ。

秋津　一寸延びれば尋とやら。丁度な所へ。

鳴岩　丁度角力を待つて居ましたよ。

ト顏見合せ

秋津　へヽ。

兩人　へヽヽ、ハヽヽヽ。

秋津　コレ鳴岩、われもがつかりとしたであらう。おれが内へ寄つて風呂へでも。

鳴岩　イヤ、道で湯へ入つたら、又動くのが嫌にならう。草臥れ次手に直ぐに内へ行て、嬶アにも喜ばせませう。

秋津　オヽ、それもそんなもの。そんなら鳴岩、

鳴岩　ドレ、ゆつくりと足でも伸ばさうか。

ト矢張り辻打ちにて、鳴岩、引返して入る。

秋津　サア、お二人とも、氣を大丈夫にお持ちなされませ。

要之　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。コレ太夫、禮を云やいなう。

大淀　エヽ、忝なうござんす。
秋津　ハテ、勿體もない。なんの禮に及ぶものでござりませう。
トこの時、鳥居の內より、以前の三七出て來り
三七　まだ爰にござりましたか。
ト秋津島を見て
イヨウ、これは關取、御機嫌ようござりますか……イヤ、いつも〳〵お前樣のお噂ばかり。何時の角力とても、負けた事のないと云ふは、えらいものでござりまするな。
秋津　また三七の世辭かいなう。さうして何しに來た。
三七　サア、今日はいつもの通り、大淀さんのお供サ。モシ、關取、最前も要之助さまに、ちよつと申して置きましたが、あの大淀さんの身請けの事。鬼ケ嶽さんの方からは、手附け金の百兩、渡さう〳〵とやかましく申して參りまする。要之助さまの方は先約なり、殊にお前樣のお口添へなれば、どうか要之助さまの方へ、身請けの相談が致したうござりまする。何を申すも金との相談。便便と斷うしても置かれませぬ。親方の手前、掛合つた私しの迷惑……サア大淀さん、わたしと一緒にござりませ。
ト大淀の手を取る。

大淀　さうでもあらうが、爰にちつと。
三七　ちつともそつとも要りませぬ。歸りが遲ければ、わつちが親方の前が濟みませぬ。サア、早うござりませ。
ト無理に引立て行きにかゝる。此うち、要之助、いろいろ〳〵とこなし。
要之　さうでもあらうが、ちつと話さにやならぬ事があるわいなう。
三七　お前まで口をつん出さずと、大きにお世話だ、打ツちやつてお置きなせえ。お前のやうな解らねえ手合ひを相手にして居ちやア、內へ歸るのが遲くなりやす。話しも解らず、遲くなつちやア、わつちが濟みやせん……サアサア、ござりませ〳〵。
ト無理に大淀の手を取る。要之助、大淀、いろ〳〵こなし。秋津島、思ひ入れあつて
秋津　コレ三七、そんなにごて〳〵云ふにやア及ばねえ。……身請けの半金二百兩、改めて取らつしやい。
ト兩人、嬉しき思ひ入れ。
三七　そんなら半金二百兩を。
秋津　いさくさなしに身請けの半金二百兩……ソレ。
ト二百兩出して渡す。三七受取り

三七　イヨウ、これは二百兩、
　ト思ひ入れ。
　これは關取、お有り難うござりまする……成る程、世間で噂の高い關取さん程あつて、ちよつと袂から二百兩……男を磨くは斯うなけりやア行かぬ、
　ト秋津島と顔見合せ、思ひ入れあつて
ハヽヽヽ、關取、有り難うござりまする。
　ト要之助の顔を見て、
モシ若旦那、只今は誠に失禮申しまして、眞平御免なされませ……肝心の受取を、さらりと忘れた。
秋津　なんの、わしが其方に渡した金、受取には及ばぬわえ。
三七　左樣ならこの金を、親方へ渡して喜ばせませう。
秋津　掛合ひはおれが行つてする程に、マア親方へ渡してくりやれ。
三七　ハイ／＼、畏まりました……時に關取、後金の二百兩は。
秋津　それは承知だ。晩方までには屆けてやるワ。
七三　左樣でござりまするか。左樣なれば晩方までに、キツとお願ひ申しまする。
秋津　駄目を押すにやア及ばねえ。
三七　左樣なら關取、若旦那……モシ大淀さん、ゆつくりとおしげりなされませ。
秋津　よくしやべる奴だ。
三七　ハヽヽヽ。
　ト辻打ちになり、三七、足早に向うへ入る。秋津島、思ひ入れあつて
秋津　先づ好い都合に茨木屋の、一方は片付いた。
要之　コレ秋津島、何も云はぬ、忝ない、嬉しいぞや。
秋津　その嬉しい次手に、最前のもや／＼を……あのお茶屋の内で。
大淀　それぢやと云うて、あんな所で。
秋津　敵に出逢うて、なんの所を構ふもので。さりとてはまだ、御修行が足りませぬ。
大淀　それぢやと云うて。
要之　今更どうも。
秋津　エヽ、悪い合點な。
　ト要之助の背中を叩く。要之助、ひよろ／＼とする。秋津島手をかける。
これは御免なされませ。何所もお怪我は。

ト兩人、顏見合せ、思ひ入れ。要之助、膝頭を擦りながら思ひ入れ。大淀、いたはる思ひ入れあつて手を取り

大淀　サア、ちやつとござんせいなア。

ト要之助、悄けるを大淀手を取り、秋津島、介抱して葭簀の内へ入る。

秋津　骨が折れるわえ。

ト矢張り、辻打ちにて、鳥居の内より、土蛛丸藏、取的の拵らへ、鉢卷をして片肌脱ぎ、財布を背に掛け、嫌だ／＼と云ひながら出る。籠石竹右衞門、同じく取的の拵らへ、これを制しながら出て來る。

土蜘　嫌だ／＼。料簡しねえぞ。

トこれを秋津島見て

秋津　エ、、この野郎め、何を暴れやアがるのだ。べら坊め、また酒を喰やアがつたな。

土蜘　暴れなくつてどうするものか。おれに恥をかゝしやアがつて、料簡しねえ、嫌だ／＼。親方、わしやア酒に醉やしねえが、あの膏藥屋めがたつた八文の事で、恥をかかしやアがつたから。

秋津　エ、、靜にしやアがれ、見つともねえ。肌を入れろ。

土蜘　オイ。

秋津　鉢卷を取れ。

土蜘　オイ。

ト土蜘、氣味の惡きこなし。

秋津　コレ籠石、どうしたのだ。

籠石　どうと云つたら天神山で、徳平の膏藥を賣つて居やしたを、土蜘が一兩だけで、今くづした錢がねえから、一貝貸してくれろと云つたら、膏藥屋が云ふにやア、高が八文の商ひだから、一貝でも貸さねえと云ふが始まり……それからが、この出入りでござります。

秋津　聞けば聞く程、此方が惡い。何所の國にか、八文の膏藥に一兩出して、釣を寄越せと云ふ奴があるものか。馬鹿も大概にしやアがれ……そしてわりやアその金、何所から持つてうせたのだ。

土蜘　こりやアわしが給金だ。

籠石　貰ひ溜めた花の寄せ金。

土蜘　門弟仲間のこの金も、丁度親方、二百兩ござります。

秋津　アノ、その財布に二百兩。

籠石　アイサ。

秋津　フム。

ト思ひ入れ。

籠石　時に親方、今日の角力は大事の場所と、日頃から云つてござつたことなさんが。

土蜘　それ〳〵、充分勝つた今日の立合ひ。

籠石　それを五分々々に取らしやつたは、どうもわしらには合點が

兩人　行きませぬ。

秋津　ハヽヽヽその勝つた角力を、勝負なしにしたは譯のある事……さうしてその金、わいら、どうするのぢや。

土蜘　サア、わしらが持つて居たら、雨の宮風の宮に、失す話しだから、みんなが云ひ合せて、ナウ籠石。

籠石　こなさんに預ける積り。なんと預かつては下んせぬか。

秋津　オヽ、そりやいつにない料簡ぢや。おれが方へ預かつて置きやア、いつ何時でも間に合ふ金。そんなら預かつてやらうわえ。

土蜘　そんならさうして下んせ。

籠石　マア、それで金の納まり所も付いたと云ふもの……時に親方、連れ立つてもう行かうぢやア

兩人　ごんせぬか。

秋津　イヤ、まだおりや脇へ廻らねばならぬ。マア、わいらは先へ行け。

土蜘　そんなら先へ行て、寢酒の肴でも拵らへて置きませうか。

秋津　それがよい〳〵。

兩人　そんなら親方。

秋津　土蜘、また道で喧嘩でもするなよ。

土蜘　アイ〳〵。

ト矢張り辻打ちになり、兩人、向うへ入る。秋津島、思ひ入れあつて、

秋津　成る程、物は案じまいもの。差掛つた身請けの金の四百兩、どうしたものと思ふ所へ、鳴岩が二百兩、また彼奴等が二百兩。これでさらりと大淀どのゝ身請けが濟めば、若殿樣の短氣も起らぬと云ふもの。これも偏へに角力の祖神、野見の宿禰のお末たる、天滿宮の利生であらう。ドリヤ、お禮詣りして來ようかい。

ト矢張り辻打ちになり、秋津島、鳥居の内へ入る。あと艶めいたる合ひ方にて、以前の要之助、大淀、掛茶屋の内より出て、あたりを見廻し、思ひ入れ。手桶の

水にて、互ひに手を洗ひ、

要之　どうなる事かと思つたに、あの秋津島の働らきで、わが身の身請けの半金やれば、わしもマア落ちついたわいなう。

ト後を拜む。この時以前の中間出て來り、

中間　ハツ、若殿様へ申し上げまする。高倉隼人さま、何か急御用に付き、御同道申せとの儀にござりまする。

要之　なんぢや。隼人が急用がある……あの堅藏の隼人、行かずば又怒らう。ナウ大淀。

ト大淀、行ては悪いと云ふ思ひ入れにて、氣を揉むこなし。

中間　サア、少しも早くお越しなされませ。

ト要之助、行かずば悪いと云ふ思ひ入れ。氣を揉む。大淀はやるまいと云ふ思ひ入れ。思はずぴつたり寄り添ふ。

要之　供せい。

中間　ネイ。

ト唄になり、花道中頃まで行き立ちどまり、中間付き添ひ、兩人向うへ入る。大淀、伸び上がり見てこなし。

大淀　殿さんとした事が、たま／＼逢うて其やうに、お屋敷へ早うお歸りなさらないでもよい事に、マア、辛氣やなう。

トこの時、上手へ以前の伊達五郎出て窺ふ。巧いと云ふ思ひ入れにて居るを知らず

ほんに殿さん、まだたんと云はねばならぬ事がある。申しいなア、殿さんいなア……エヽ、いつそお後を慕うて。さうぢや。

ト行きにかゝる。この時、後より伊達五郎、抱きすくめる。

エヽ、誰れさんでござんす。悪い事して下さんすな。

伊達　誰れでもない。わしぢや。伊達五郎ぢや。

大淀　又しても／＼、其やうな嫌らしい事は、嫌ぢやわいなア。

伊達　ナニ、嫌らしい事は嫌ぢや。嫌で要之助と、なんで色になつた。

大淀　其やうな事は知らぬわいなア。

ト逃げかゝるを

伊達　なんぢや、知らぬわいなアと、拗ねた所が命ぢやわえ……ドツコイ／＼……コリヤ／＼、君を手に入れようと思ふばかりに、心を碎くこの伊達五郎。あんまり悪う

もあるまいがな。

ト抱きつかうとするを

大淀　エヽ、嫌らしい……アレエ、誰れぞ來て下さんせぬかいなア。

ト逃げ廻る。

伊達　なんぼう聲立てゝも叶はぬ。人の來ぬ間に日頃の本望。さうぢや〳〵。

ト大淀を追ひ廻す。庄九の廻りを二三度廻る。トヾ伊達五郎、大淀を捉へようとする。辻打ちになり、向うより、庄九郎、行司の形、羽織着流し、一本差しにて出て來り、この體を見て、驅けつけ、本舞臺へ來り、伊達五郎を突き廻し、見事に投げ退け、うぬとかゝるを手を捻ぢ上げる。

アイタヽヽ、何奴ぢや〳〵やい。

庄九　イヤ、誰れでもない。行司の庄九郎ぢや。

伊達　ヤア。

庄九　コレ女中、何も怖い事はないわい。おりや志村庄九郎と云うて、秋津島が女房の兄でござんす。

大淀　そんなら聞き及んだ、お前が庄九郎さんかいなア。

庄九　オイナウ……今お屋敷の歸りがけ、天神樣へ參詣に、來かゝる道で要之助さまにお目にかゝり、お前を早う歸してくれとの傳言ゆゑ、急いでこれへ來て見りやア、また性惡なてんがうばつかり。危ない所でごんしたなう。

ト伊達五郎、振り切る、拔打ちにかゝるを、庄九郎よろしく留めて

大淀　そんならわたしの身の上を。

庄九　何もかも秋津島から聞きやんした。爰に居て怪我でもあつてはなりませぬ。一寸お前は早く、角力の小屋へ。

ト此うち、よろしく立廻る。

大淀　アイ〳〵、さうして殿さんはえ。

庄九　イヤ、氣遣ひさんすな。もう今頃はお屋敷へごんした筈。何も案じる事はない。

大淀　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。そんならお前、ちよつと送つて下さんせいなア。

庄九　サア、連れ立つて行きたいけれど、又この色男樣が邪魔をするゆゑ、お前に道を敎へてやる程に、先へ行かんせ……アノ向うの辻を横町へ曲り、五丁程行くと、曲り角がある。それを左へ曲ると、角力小屋があるゆゑ、早く行かんせ。

大淀　アイ〳〵、そんならお前、早う來て下さんせや。

庄九　合點だ〳〵。

ト大淀、意氣地なき形にて、向うへ入る。庄九郎、思ひ入れあつて、向うを見送る。この時、伊達五郎、起き上がり、鳥居の内へソッと入る。

ソレ、横へ曲るのだ。エヽ、意氣地のねえ事だ。帶をよく締めて行きなせえ……ても嬉しさうに、宙を飛んで行くワ……イヤモシ、お前さんも、外に女のねえやうに、もういゝ加減に。

トあたりを見て

南無三、今のうちに走り居つた。ハヽア、爰を抜けて先へ廻つたと見える。エヽ、邪魔ながら、ドレ、見てやらうか。

ト庄九郎、思ひ入れあつて、向うへ行かうとする。この以前より鬼ケ嶽洞右衛門、鳥居の側に出かけ窺ひ居て、この時、

鬼嶽　オイ、行司々々。ちよつと待つてもらはうかい。

ト輕業の鳴り物になり

庄九　おれを呼んだは誰れだ。

鬼嶽　イヤ、外でもない、鬼ケ嶽ぢや。オヽ、洞右衛門ぢや。

ト庄九郎、振返り見て

庄九　オヽ、洞右衛門か。おりやアちつとさしかゝつた用が……とも云はれまい。して、おれに用とは。

ト誂らへの鳴り物になり、庄九郎、こなし。兩人床几へかゝり

鬼嶽　イヤ、別の事でもないが、今見て居りやア貴樣は、おれが旦那伊達五郎さまを、よう酷い目に遭はしたな……見事な事ぢや。イヤモウ、えらい腕先ぢや。あのやうな弱い者を相手にせずと、ちつとは食ひ手のあるこの鬼ケ嶽を斷つて見んかい。あの旦那は、おれが尻を持つ程に、マア、さう思つて其所へ直れ。

庄九　なんの直るの直らぬのと、相撲の場所では行司關取、斯う並んだら五分と五分。尻を持つとも腰を押すとも、勝手にせい。

鬼嶽　ハヽヽヽ、あやまつてもどづき殺す。あやまらいでもどづき殺す。とても死ぬなら、强い事を云うて死ね。それが勝ぢや。

庄九　ハテ、何も愚圖々々と云ふ所はない。一寸も動かぬ庄九郎ぢや。必らず後で料簡せいと云ふなよ。

鬼嶽　ハテ、知れた事をぼやくなえ。



中村芝翫の鬼ケ嶽

庄九　して、マア、わりやどうせうと思ふぞえ。
鬼嶽　おりや手短かに、斯うするわえ。
　ト庄九郎の腰を取る。これより謎らへの鳴り物になり、双方抜きつれ、面白き立廻りあつて、この時、鳥居の内より以前の秋津島出かゝり居て
秋津　鬼ケ嶽、ちよつと逢はうかえ。
鬼嶽　糅てゝ加へて、おれに逢ひたいと云ふは……秋津島ならおれも逢ひたいが、見る通り、少とこちらに取込んだ事があるわえ。われが方は明日でも聞かうわい。
秋津　今日の角力の事について、急に逢ひたい。隙は取らせぬ。ちよつと逢ひたい。
鬼嶽　庄九郎、あの通りぢや。どうせうな。
庄九　ハテ、相撲の事と云や、行司の聞捨てにもなるまい。マア逢つて聞いたがよい。
鬼嶽　そんなら、われがこの出入りは。
庄九　ちつとの間待つてやらうかい。
鬼嶽　サア、引け。
庄九　われから引け。
鬼嶽　エヽ、われから引け。
庄九　サア。
鬼嶽　サア。
兩人　サア／＼。
庄九　斯うしては居られまい。一服のんで待たうかい。
　ト兩人よろしく白刃を鞘へ納め、鬼ケ嶽、身拵らへして
鬼嶽　角力の事とは、なんの事ぢや。早う云うてしまへ。
庄九　此方も行司の役、聞かにやアなるめえよ。
　ト摺り鉦入りの鳴り物になり
秋津　そこへ行つて話さうかえ。
　ト謎らへの鳴り物。
鬼ケ嶽、外のこつちやアないが、今日の角力は味な別れぢやと云ふ事よ。
鬼嶽　ハテ、そりや兩方の浮き足。五分々々になつたも、爰に居る行司が差配。そこらあたりには、譯のある事であらうぞえ。
秋津　イヤ、行司の贔屓せいでも、スハ立合ひにかゝると、右差しの鬼ケ嶽が、左を差しかけたは。
鬼嶽　左差しの秋津島が、得手を抜かして兩手を上げ、充分に差し込まさうとするは、あらはな取り口ぢやと思うてな。

秋津　サア、その訝しいと思ふ所で、われが土俵を割つて、

鬼獄　おれが浮足を見ると、途端の拍子にわれが浮足。

秋津　互ひに負けよう負けようとしたは。

鬼獄　稀有けゝれつと云はうか。

秋津　替つた角力の

兩人　あつたなア。

鬼獄　取り口で

秋津　へ、、。

鬼獄　へ、、。

秋津　へ、、。

兩人　へ、、、ハ、、、、。

秋津　誰れあらう鬼ケ嶽が、大事の角力に負けよう／＼とするそれが聞きたい。

鬼獄　そりや云ふまい。大事の角力を振りかゝるは、秋津島、われが心にも一物あらう。マア、それからまき出してしまへ。

秋津　オ、、われが持つて居る、その御朱印が貰ひたい。

鬼獄　ヤ、なんと。

秋津　隱すなえ。表向きで詮議のならぬ大切な御朱印。何所へ吐かした。それが聞きたい。

鬼獄　そりや、なんのこつちや。角力の事なら聞いてもやらうが、御朱印なぞとは、そりや何を。

秋津　エ、、恍けなえ。慥かな證據はこの一通。

ト懷中より以前の手紙を出す。

鬼獄　ムウ。

ト取りにかゝるを、鬼ケ嶽の手を振り拂ひ、狀を披き。

秋津　「先達て盜み取り候ふ御朱印、角力の勝負附き候ふまでは、矢張り其方に預かり置き下さるべく候ふ、鬼ケ嶽どのへ、」とばかり、宛名はなけれどこの手紙、これから詮議仕出したら、知れさうなものなれど、血で血を洗ふ御兄弟のお間柄……これも好い加減にぶち出してしまへ。

鬼獄　ア、、そんなら今日の角力に勝てば、御朱印がなけりやア家督繼ぐ方が科人になるゆゑ、それでわざと負けようと取つたのぢやな。

秋津　ハテ、ごて／＼云ふな。われが方から仕掛けた事ぢや。

鬼獄　ムウ、それぢやアおれが方から仕掛けたと云ふのか。

トこの時、庄九郎、思ひ入れにて

庄九　イヤナニ鬼ケ嶽、そちらの出入りが濟んだなら、早う來ぬかえ。
鬼嶽　いま其所へ行くわえ。
秋津　イヤ、先づこの道を立てゝから行け。
鬼嶽　ハテ、立てなと云うても、立てにやアならぬわえ。
庄九　ヤイ、わりやこの庄九郎が怖さに、爰へ來ぬか。但し料簡してやらうか。
鬼嶽　何吐かすぞえ。わいらに料簡してもらふ、鬼ケ嶽ぢやアないわい。
秋津　コリヤ、譯を立てにや、わりやア盗人ぢやぞえ。
鬼嶽　うぬ、おれをいがみぢやと吐かしたな。
庄九　爰へ來ぬは、おれが怖いか。
秋津　サア、盗人と云ふが無理か。
庄九　爰へ來ぬか。
鬼嶽　行くわえ。
秋津　但し、盗人でないと云ふ證據があるか。
鬼嶽　サア、それは。
秋津　サア。
鬼嶽　サア／＼／＼。
　トきつと云ふ。鬼ケ嶽、口惜しき思ひ入れ。

秋津　拔差しならぬこの手紙。なんと慥かな據證であらうか。
　ト手紙を鬼ケ嶽の前へ差しつける。鬼ケ嶽、手早く引裂き思ひ入れ。秋津島、思ひ入れあつて、
宛名の手紙を、わりや引裂いたな。ム、ウ。
　トきつとなる。肥前節の合ひ方になり
證據の手紙を破らうが、また横紙破りに出かけても、相手はおれぢや。
鬼嶽　サア、秋津島、おれを今盗人だと云つたぞよ。なんでおれが盗人だ。その譯吐かせ。どうぢや。
秋津　ムウ。斯うして云はす。
鬼嶽　猪小才な。見事われが。
秋津　やつて見せう。
鬼嶽　何を小癪な。
　ト兩人、床几へかゝる。仕掛けあつて、其まゝ床几折れて兩人へたる。キッと見得。誂らへの鳴り物になり、双方拔きつれ、いろ／＼立廻りあつて、トゞ庄九郎、立廻りの中へ入り、前に折れし床几の片端を持つて、白刃を押へる。
庄九　待て／＼。

兩人　留めだてせずと、退いた〳〵。

庄九　イヤ、退くまい。わいら二人がその爭ひ。それで男と云はれるか。

秋津　ナニ、おいら二人が

兩人　男でないとは。

庄九　コリヤ、鬼ケ嶽、今お主が親方を、投げたり踏んだりしたこの庄九郎と、出入りを仕掛け、われが體は秋津島へ貸したぞよ……その庄九郎を脇にして、自身の出入りに命を果し、それぢやア男が立つめえが。

ト鬼ケ嶽こなし。庄九郎、秋津島へこなしあつて

また秋津島もその通り、旦那の事で詮議とやら……ナ、それになんぞや、これ式の事で、命を捨てゝ、その詮議は誰れがすると思ふのだ。

ト秋津島こなし。

家督定めの相撲をば、受取るからにやア、双方無雙に組んで、思案の臍の腹櫓、互ひに清く勝負して、投げた上で出入りをしやれ。おれもこれまでの云ひ分を、水に流して二人を、分けに入つた庄九郎……サ、行司の云ふのが誤まりか。男でないと云うたが無理か。マア、とつくりと思案をしやれサ。

秋津　ムウ、成る程、云はれて見ればそんなもの。

鬼嶽　其所へ心が付かなんだ。

庄九　合點がいたなら、互ひに白刃を。

兩人　サア〳〵〳〵。

庄九　すりや、庄九郎が詞を立て、此まゝおれに預けてくれるか。忝ない〳〵。おれも最前鬼ケ嶽と、云ひ募つたるこみやりも、胸三寸に納めた上、互ひに出入りのその時は、そのしらちをも付けようかえ。男は當つて砕けろと、譬へにも云ふ通りだ……なんと二人、そんなものぢやあるめえか。

鬼嶽　三千丁の家國と、釣替へのおれが體。

秋津　御家督定めの濟むまでは、おれが體は大切の命。

庄九　この場を濟まして。

鬼嶽　出入りは出入り。

秋津　詮議は詮議。ぶち投げて置いてしやうわい。

庄九　今度の角力に家督の弓。

鬼嶽　われが取るか。

秋津　其方へ取るか。

鬼嶽　土俵の上。

秋津　鬼ケ嶽。

鬼嶽　秋津島。
庄九　二人の關取。
兩人　其うち逢はう。
ト合ひ方になり、キツとなる。この時、本鐵砲の音する。鬼ケ嶽、倒り。秋津島、庄九郎へ思ひ入れ。
庄九　ありや、稽古の筒音よ。
鬼嶽　あつたら勝を。
秋津　へ、、なんの事だえ。
ト秋津島、嘲笑ふこなし。鬼ケ嶽、キツと見返る事よろしく、三人こなし。これをキザミ、櫓太鼓にて、よろしく拍子幕。

二幕目

秋津島内の場

役名——關取、秋津島國右衛門。同女房、お里。同一子、國松。弟子、鳴岩浪藏。同、土蜘丸藏。同、籠石竹右衛門。傾城、茨木屋大瀧。行司、庄九郎。關取、鬼ケ嶽洞右衛門。高倉隼人。

本舞臺、三間の間、佛壇、下は誂らへの戸棚、眞中暖簾口、下の方赤壁、これに札を澤山貼り、上手一面の障子屋體、いつもの所門口、幕の内より、女房お里、針箱を引寄せ、縫ひ物をして居る。この側に枕屏風、これに倅國松寢て居る。下の方に鳴岩浪藏、籠石竹右衛門、土蜘丸藏、立ちかゝり居る見得。てんつゝにて、幕明く。

三人　こりやアどうするのだ。
さと　ハテ、どうと云つて、こちの人は留主なり、何をマア其やうに、喧ましう云ふのぢやわいなう。
鳴岩　コレ、みんな聞いたか。留主だとよ。今日ばかりは留主は遣はせない。
籠石　オ、、さうだ。こりやアおいら達を、
三人　どうするのだ／＼。
さと　ア、コレ、みんな、なんぢやぞいなア。主は留主ぢやに依つて留主ぢやと云ふに、聞分けのない人達ではあるわいなア。コレ、國松が目を覺ますわいなア。夜夜中と云ひ、近所の手前、何事ぞあるやうに聞えて惡い。あんまりでござんすわいなア。
鳴岩　イヤコレお内儀、その夜夜中、三人連れ立つて來たも、明日の角力が勤まらぬゆゑ、それで聲一杯云ふのだ

わな。
土蜘　それ〳〵、それが嫌ならたつた今
三人　金を返してもらはう〳〵。
さと　モシ、その金々と云はしやんすは、マア、なんの金でござんすぞいなア。
籠石　あの白々しい顔を見や。高が斯うだワ。おいら達が二年越しの給金、貰ひ溜めた花も一つにして
土蜘　爰の關取が引摺り込んだワ。
鳴岩　オヽ、まだその上に、九州から取つた手附けの二百兩。日頃堅いを見込んで、預けたをば取込んで、一文も返さぬは、佛頼んで地獄の關取。こりやおいら達に乞食をさせても、大事ないと云ふのか。
土蜘　それ〳〵、給金を引摺り込んでも、師匠ぢやと云ふのかえ。
籠石　なんでも片を付けにやア、この屋體骨は動かさないぞ。
鳴岩　お内儀、關取を
三人　出してもらはう〳〵。
　ト口々に云ふ。
さと　モシ、靜かに云はしやんせ。この間からそんな事を、なんぢややら喧ましう云はしやんすが、マアよう思うても見やしやんせ。預かつた物を遣ふやうな、こちの人ぢやござんせぬ。主に逢はしやんしたら、ツイ譯が知れやうに大膽な、滅多な事云うて、後で詫び言頼まんしても、金輪際わたしや知らぬぞえ。
鳴岩　成る程、鬼の女房に鬼神とやら。そんな白化けを聞きにやア來ない。六つをごんと撞くと、定めの角が肝心。
土蜘　それに入用なおいらが金。返さにや仕樣があるぞ。
籠石　サア、お内儀、もう好い加減に出したがよいワ。
さと　ムウ、わたしに出せとは、そりや何を。
籠石　ハテ、知れた事爰の關取を。
さり　コレ籠石さん、何が怖うてこちの人が、隱れるもんでござんす。そんな事云はしやんすと、わたしから先へきかぬぞえ。さうして金々と、なんで性急の入用がござんずのぢやぞいなア。
鳴岩　コレ、金を引摺り込まれたり、高飛車を喰つたり、亭主が亭主なら女房まで、こりや馴合ひの仕事だな。
籠石　オヽ、さうだ〳〵。弟子の物を鍵にかけうより、いつそ手短かに盗みをばしろえ。
土蜘　サア、斯う云はれるが口惜しくば、きり〳〵出して



坂東簑助の秋津島



岩井粂三郎のお里

詫び言しろ。
鐵石　それ／＼、巾着切りか板の間を働らきやアがれ。
鳴岩　所詮出ろと云つたとて、おいら達に顔は合はされまい。いつその事家探しをして、引摺り出すがよい。
鐵石　それがよい／＼、
ト立ちかゝる
さと　待たしやんせ。どんな事があらうとも、わたしも秋津島の女房でござんす。夫の留主に家探しさせては、こちの人に云ひ譯が立たぬ。それとも是非奥へ踏み込む氣なら、わたしをば殺して置いてからしなさんせ。さもないうちは一寸でも、奥へやる事はならぬわいなア。
三人　呆れたものだ。
ト女房を引退け、行かうとするを留める。この立廻りのうち、てんつゝ、合ひ方になり、向うより、秋津島、小提灯を提げ出て來り、門口にて、この體を見て、ツカツカと内へ入り、三人を突き退ける。
さと　オヽ、こちの人、先刻にからこの衆が、いろ／＼な事を。
秋津　ハテ、何も云ふ事はない。相手にならずと、捨て置け／＼。女房ども、着物を取つてくれ。……

さと　アイ／＼。
トお里、着物を出し、秋津島、着る事あつて、此うち、三人、顔をしかめ起き上がる。
秋津　ヤレ／＼、歩いたぞ／＼。女房ども、思ひの外隙が要つたで、さぞ待ち兼ねたであらう。イヤ、待つと云へば、おれも夜食を待ち兼ねた。マア、飯を出してもらはう。
さと　アイ／＼、サア、飯も上げやうけれど、マア、聞かしやんせ。あの衆が留主へ來て、なんのかのと云うた譯を。
秋津　ハテ、よいわい。なんの、高が知れた事。マア、それよりは、飯を早く持つて來やれ。
トお里、こなしあつて、三人を見て、
さと　そりやモウ、御膳も先刻に拵らへて、待つて居ました。ドリヤ、持つて來ようか。
トこれより床の淨瑠璃になる。
〽云ふもいそ／＼女房は、勝手へ立つて入りにける、後に三人どつちよ聲。
トこの文句にて、女房お里、暖簾口へ入る。後に三人思ひ入れあつて、

鳴岩　サア、誰れからなりと、早う云はんかえ。
土蜘　サア、云ふは云はうが、ちつと待つてくれ……時に親方。
秋津　なんだ。
土蜘　今日は暖かでごんすなア。
ト もぢ〳〵して居る。秋津島、三人を睨めつけ居る。三人、氣味惡きこなし。この時、女房、膳を持ち來り、
さと　サア、なんぞ拵らへて置かうとは思うたれど、今日は合憎にしけなり、空腹い時の不味い物なしと、これで堪忍して下さんせ。
秋津　ドレ〳〵、イヤ、何がなくても、內の喰物でなければ味にならぬてなう。……
ト 箸を取り
ア、、今日の飯は大分强いぞよ。
さと　サイナア、今日は水加減が違うたさうな。お前、それが惡くば、炊き直して上げうかえ。
秋津　おれはこれでも大事ないが、坊主めに喰はせるなら、炊き直してやれ、
さと　アイ〳〵。そりやようござんす。
秋津　ドレ〳〵。平はなんだ。長芋に海老。洒落た物だ。この長芋に海老は止しやれよ。この海老と云ふ奴は、長い物には卷かれず、兎角じたばた跳ね廻つて面倒だ。こんな奴は生ながら、鬼から燒にして、腕も足もぽき〳〵とへし折つて
ト 睨め廻し、秋津島、思ひ入れ。
丸嚙りが小氣味の好いものだ。
ト 三人の方へ當てつけて云ふ。三人、腹の立つこなし。
土蜘　アレ、おら達を海老に譬へて腕も足もへし折るとよ。
籠石　アノ關取づらめ。
兩人　ト 腹の立つこなし。
鳴岩　コレ關取、あいらにもわしにも不承をかけて置いて、あんまりでござんすぞえ。
秋津　何があんまりだ。頰桁が過ぎりやア、どんな目にも遭はせる。一體秋津島は、お主達が爲にはなんだ。
三人　ハテ、知れた事。角力のお師匠さん。
秋津　それに關取づらめとは。
三人　サア、そりやア。
秋津　それぢやに依つて。
三人　イヤ、關取のお師匠樣。

秋津　さう吐かしやよいワ。

　ト汁を吸ふ。

龍石　關取のお師匠様へ申し上げまする。今度海山越えての、長崎の勸進角力、投げたり投げられたり、土俵の眞中で命を塵芥とも思はぬは、皆給金が欲しさ。

土蜘　その仲間の給金を、皆引ッ包めて、おいら達に遣ひ通しをさせぬやうにと、預かつて下されたは、天晴れなお關取様。

鳴岩　おれが九州から預かつた二百兩も、この節の入用で遣ひ果して下さりませと、度々足を擂粉木のやうにして、お願ひ申せど渡さぬのはこりや關取の方が理窟でござんすかえ。

龍石　詞が違ふに依つて、皆來て催促すれば、今のやうに投げたり拋つたり、お師匠様でも關取でも、

三人　怖い事はないぞ／＼。

秋津　ナニ、怖い事がない。オヽ、さうぢや。わいらのが皆尤も。

三人　尤もなら金返して下んせ。

秋津　エヽ、今は無いワ。

三人　無いで濟まうか。

秋津　濟まうが濟むまいが、遣うてしまうて、無ければ仕やう事がない。

三人　そりや、この金を砂にする氣か。

秋津　砂にも水にもせぬ。一月二月待て。

三人　イヽヤ、ならぬ／＼。

鳴岩　關取のお盜人様、給金を遣はれてしまつて、餓ゑ死に、死ぬ事は、マアならぬ。

秋津　ならぬと云つて、どうせうと思ふ。

鳴岩　オヽ、命がけで取つて見せるワ。

　ト胸倉を取る。突き廻して、持つて居る汁を頭へぶッかける。恟りして。

　ヤア、切つたな／＼。

　ト騒ぐゆゑ、兩人立ちかゝりて

龍石　コレ／＼、切つたのではない。お主の頭へ

鳴岩　汁が流れる。

土蜘　剝身だ／＼。

鳴岩　そりやこそ拔身か。アヽ、痛い／＼。

龍石　これサ、拔身ぢやアねえ。剝身汁をぶッかけたのだ。

鳴岩　ヤア、そんなら、切つたと見せてきらず汁か。

土蜘　何を云はつしやる。

島岩　頭を汁かけ飯にされちやア、

三人　もう料簡が。

〽取りつき縋るを毆り廻し、殘る二人が取りかゝるを、腕首摑んでぐつと持ち上げ、踏み倒されて蠢くうち、又も取りつく土鮒が、がんづか摑んで煙管の早打ち、頭へ火皿の血みどりちんがい。

トこの文句のうち、立廻りよろしくあつて、

さと　コレこちの人、腹の立つ儘、滅多な事して、坊やわたしに、嘆きをかけて下さんすな。

秋津　でも、餘りと云へば、

ト一腰を拔きかける。三人惘りして

三人　ソリヤこそ拔いたぞ。こりや堪らぬ〳〵。

トこれにて、三人うろたへ、向うへ逃げて入る。

秋津　ハヽヽ、口程にもない奴等だな。

さと　ほんにマア、弟子は子と云ふ師匠の内で、ちつとは懲りたでござんせうわいなア。

秋津　イヤモウ、何奴も〳〵、世話のやけぬ奴等は一人もないわい。茶を一つくれ。

さと　アイ〳〵。

〽云ふ折柄に箱提灯、行儀崩さぬ高倉隼人、流し鰹節魚節、家來に持たせ入り來る。

トお里、秋津島に茶を出す。向うより、奴、提灯を灯し、後より高倉隼人、繼上下、世話侍ひの形。仲間、樽鏡、松魚節、卷き物、何れも白木臺へ載せ出て、直ぐに本舞臺へ來り

奴　秋津島國右衞門どのには、在宿でござりまするか。

さと　ハイ、國右衞門は宿に居りまするが、お尋ねなさるは、どなた樣でござりまする。

隼人　アイヤ、高倉隼人でござる。

ト内へ入る。

秋津　これは六角家の御家老、高倉隼人さま、夜中と申し、見苦しい私し方へ。

さと　先づ〳〵あれへ、お通り下さりませ。

隼人　然らば許し召され。

ト上手へ通る。

秋津　ソレ、お煙草盆持て來ぬか。お茶でも入れやれ。

さと　アイ〳〵。

トあちこちと片付ける思ひ入れ。

隼人　イヤ、構ひ召さるな。早速ながら秋津島、先刻申し渡した通り、いよ〳〵明日明け六ツ時より、諸人に見物

さする勧進角力同然に、押開いたる御家督定め。大切なるお世継要之助さまの、力とするは即ち其方。改めて大殿より、秋津島へ下され物……家來、その品これへ。

奴　ハツ。

ト品々を秋津島の前へ直す。秋津島、平伏してゐる。

隼人　明日の勝負に眞先がけ、角力に勝男の譽を顯はす御家督定め。殿の心を巻き物の地合ひは元より綾錦。サア、めでたく受納いたしやれ。

ト秋津島、手を上げ

秋津　これは〳〵、冥加至極もない、有り難いそのお詞。元お屋敷様のお抱へになりましたも、これなる女房が、あなた様に御奉公いたした御縁。

さと　サア、お屋敷に勤めて居りました時分から、御恩にあづかり、この人の所へ參りましても、奥様より相變らず、お目をかけ下さりまするにつけ、あなた様の御推擧にて、お抱へ角力となり

秋津　有り難い事ぢやと、寢た間も御恩は忘れぬ所へ、この度御家督定めの角力を仰せつけられ、誠に一代の面目と存じ、摩利支天へ祈誓をかけまして、地取りに隙間はござりませぬ。命をかけた明日の角力。私しの身に取りましては、申さうやうなき立身出世。その上に隼人さまのお出でと申し、若殿様よりの下され物。ソレ女房、お禮を申せ。

さと　これと申すも奥様や、あなた様の御贔屓やら、お執成しやら。なんとお禮を申し上げませうやら。

兩人　エヽ、有り難うござりまする。

ト喜び平伏する。

隼人　イヤ〳〵、大切なる御家督定めの角力、其方より此方から、先ツこのやうに手を下げて、頼まにやァならぬ。

ト兩人へ隼人、頭を下げる。

秋津　ア、モシ、勿體ない、お手を上げられ下さりませ。お頼みならでも一世の晴れ業、心は金鐵、金剛力を出しましても、明日の角力に勝たにやなりませぬ。

隼人　オヽ、勇ましい。最前より早、身共も勝つたる心地。さりながら秋津島、御家督の相手は、佞奸邪智の伊達五郎。要之助さまのお身持ち放埒なぞも、御家門方へ惡しざまに吹聴なす。もし若殿御他行先で、左様な事はあらざるや。

秋津　なんと致して御恩の殿様、御他行先お供の折々、心

付けますれど、石部金吉の若殿樣。
隼人　お身持ち御放埒の流布あつては、これ又御家督の妨げ。
秋津　その儀は決して、お氣遣ひ遊ばしまするな。
隼人　それで身共も落ちつきました。然らば關取、直さまこれより同道して、相撲の場所へ參らうか。
秋津　サア、場所へ參る何かの用意、致しまするその間、見苦しうはござりますれど、奥の一間で。
さと　何は無くとも御酒一つ、お上がりなされて下さりませ。
隼人　それは忝ない。さりながら、明け六ツまでは餘程の間。
秋津　御退屈にはござりませうが、暫しの間御ゆるりと。
隼人　然らば左樣いたし申さう。ナニ家來ども、屋敷へ歸り、後刻迎ひに參るがよからう。
皆々　ハツ。
ト皆々橋がゝりへ入る。
秋津　ソレ、女房ども、御案内。
さと　アイ。
隼人　イヤナニ秋津島、必らず明日の角力の儀。

秋津　國右衞門が命にかけても。
隼人　ハテ、頼もしい男ぢやなア。
ト唄になり、お里、案内して隼人、奥へ入る。家來は皆々向うへ入る。秋津島、殘り、思ひ入れあつて
秋津　明日の角力はこの身の規模、これと云ふも隼人さまや若殿樣のお庇。若殿と云へば、切端詰つた太夫どのゝ身の代。一生にない横に車で、先づ片を付けてしまつたが、何所へ預けやう所ろもなく、内へと駕籠の者に頼んで置いたが、女房の手前。儘よ、出鱈目にやつて置かう。
〽並べ立てたる臺の物、片付ける後の方、女房お里はいそいそと、喜ぶ中も氣にかゝる、金の行端をうち問はんと。
ト此うち、奥より、お里、出て來り、思ひ入れあつて、
さと　こちの人、旦那樣の稀のお出で。なんぞ拵らへずばなるまいかいなア。
秋津　拵らへると云つて、もう四ツ過ぎ。マア〱、何なりと有り合せ物で上げて置きやれ。大事と思ふが心の内の御馳走ぢや。
さと　サア、わたしもさうは思うて居れどナ、宵のうちな

ら、どうか仕樣もならうもの。イヤ、宵と云へばこちの人、この間から喧ましう云うて來る、弟子衆から預からしやんした四百兩の金。お前、何にさしやんしたぞいなア。

秋津　ヤ。

さと　サア、そりやモウ、表を張つて居る男の役。要り目も多くござんせうが、案じる胸を休める爲、譯を聞かして下さんせいなア。

秋津　ハテ、役にも立たぬ根問ひせずと、隼人さまに御馳走しやれ。

さと　イヽエイナア、それでもどうも濟まぬわいなア。

秋津　ハテ、女賢しうして牛賣られぬと、何にしやうと、われが構ふ事はない。默つて居やれ。

さと　イエ〳〵、なんぼ其のやうに云はしやんしても、預かつた金を返さねば

秋津　男が立たぬと云ふのか。

さと　それぢやに依つて。

秋津　何をわれが小差出た。立つも立たぬも知つて居る。そんな事に構はずと、奧のお客に酒が要る。一走り行て買うて來い。

さと　サア、そりや買ひに行くけれども、心掛りは、あの弟子衆が。

秋津　また吐かすか。キリ〳〵買ひに行かぬかい。

さと　エヽ、忙しない。この中買うた酒もあるに。

秋津　ありやモウ樽底になつた。早う行きやれサ。

さと　アイ、今行きますわいなア。なんぢややら、人を叱り散らして

ト小樽を持ち、酒の通ひを提げ、門口へ出て

ほんに女子程、弱いものはないわいなア。

ト四つ竹節になり、花道へかゝると、向うより、駕籠屋二人、駕籠を擔ぎ出て來り、花道にてお里に行き逢ひ

駕籠　モシ〳〵、お內儀さん、秋津島關のお內は、何所でござります。

さと　ハイ、其所の格子のたつた內でござります。

駕籠　ハイ、有り難うござります……棒組や、向うの內だとよ。早くやれ〳〵。

ト本舞臺へ來る。これをお里聞き、心得ぬこなしにて、ちよつと立戾り、本舞臺下手に窺うて居る。駕籠舁き、駕籠を門口へ下ろし

モシ、關取はお内でござりますか。お誂らへの駕籠が參りました。

ト門口を明ける。

秋津　オヽ、こりや、駕籠の衆、御苦勞であつた。サアサア、こちらへ入れて下さい。

兩人　ハイ〳〵。

ト駕籠の垂れを上げ、履物を直す。中より、大淀、好みの拵らへにて出て

大淀　關取さん、入つても大事ないかいなア。

秋津　なんの、おれが内へ、おれが連れて來るに、誰れに遠慮があるものか。今夜からはゆつくりと落ちついたがよい。

大淀　さう云ふ事なら、嬉しいわいなア。

秋津　イヤ、駕籠の衆、御苦勞々々。茶でも吞まぬかえ。

駕甲　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

駕乙　棒組、行かうぢやねえか。

駕甲　さうよ。サア行かう。

ト此うら、始終四つ竹節にて、駕籠舁き、向うへ入る。秋津島、後を見送り、門口を締める。あと合ひ方にて、お里、表に立聞きして、いろ〳〵腹の立つこなし。

秋津　サア〳〵、これから何も遠慮をする事はない。お前の内だと思つて居るがよい。

大淀　サア、何からお禮を云はうやら、お前の志し、死んでも忘れは致しませぬ。有り難うござんすわいなア。

秋津　ハテサテそんな事を。何もかも打解けて、身請けしてしまうたれば、誰れが點の打ち手はない筈。併し、外へ圍つて置くも氣がゝりゆゑ、內へ連て來たが、女房めが手前は……それ〳〵、妹にして置く程に、必らずそれを忘れまいぞ。

大淀　サア、そりや隨分承知ぢやけれど、ひよつと悋氣されやうかと、それが氣にかゝるわいなア。

秋津　なんの、この事について、やきもちなぞ燒くが最後、しりこくる分の事。

大淀　サア、さうなつては猶術ないわいなア。

秋津　なんの術ない事があるものか。その術ないも少しのうち。氣を晴らしたがよい。

大淀　アイ〳〵、ほんに綺麗なお住居でござんすなア……爰に寐かしてある子は、お前の子かいなア。

ト國松の寐てあるを見る。

秋津　秋津島が一人の子、可愛がつてもらはにやならぬぞえ。
大淀　そりや知れた。ほんに好い子でござんすなア。
〽詞に愛のつやもある、表にお里が立聞きの、胸は湯玉の立ちつ居つ、知らぬ二人は氣も付かず。
ト此うち、お里、門口に腹の立つこなし。
秋津　イヤ、時に今夜も餘程更けた。殊に明日は明け六ツから起きねばならぬ。サア〳〵、寐たがよい。寐所敷いてやらうか。
大淀　イエ〳〵、勿體ない。男に寐所取らすと云ふは。
秋津　ハテサテ要らぬ遠慮。宮勤めをした者に、寐所敷かすと云ふ事があるものか。氣を替へてわつさりと、木綿蒲團で寐たがよい。
〽堪り兼ねたる女房より、遠慮會釋も夫の胸倉。
ト合ひ方にて、秋津島、戸棚より、夜具蒲團を出し、床を敷く。門口のお里、これを見て、堪え兼ね、ズッと內へ入り、夜具を引ッたくり、投げ出し、枕を抛り出す。
ヤ、女房、こりや何をしやアがる。
さと　何をするとは、コレ、こちの人。

ト引据ゑても力叶はず、たぢ〳〵となるゆゑ、秋津島に下に居てくれろと思ひ入れして、
お前はマア、あらう事があるまい事か。子まである仲のわたしを振捨て、ようもあんな者を連れて戻り、見事爰で寢やしやんすか。サア寢られるものなら寢て見やしやんせ。
ト小突き廻す。
秋津　エヽ、氣狂ひめ。歸り早々何を吐かす。樣子も聞かずに悋氣か、コリヤヤイ、爰に居るはナ、おれが血を分けた妹だワ。
さと　イエ、その妹措いて下さんせ。何もかも表で、立聞きして居たわいなア。
秋津　ヤア。
さと　コレ、そこな美しい女中さん、ようも〳〵こちの人を、此やうに性惡にして下さつたの。その禮はキッと云ひますぞえ。秋津島どの、エヽ、こなさんはなう。四百兩と云ふ金の行き端、不思議な事ぢやと思うて居たが、今と云ふ今合點がいたわいなア。あの傾城を女房にせう爲め、身請けに入れた四百兩でござんすなア。
秋津　馬鹿を云へ。身請けしてどうする。

さと　そりやモウ、思ひ詰めた事なら、手かけ妾もある習ひ、さのみ無理とは思はねど、如何に男の高下ぢやとて、わしといふ者側に置き、床まで敷いてやつた上、これ見よがしに寢ようとは、あんまり氣强い、胴慾でござんすわいなア。

大淀　サア、お前のさう思はしやんすは皆尤も、これには深い、

秋津　コレサ、何も云ふまい。女房の悋氣、聞く耳持たぬ。惚れたが因果、身請けして女房にするが何とした。

さと　オヽ、さうしてわたしはどうするのぢやえ。

秋津　知れた事、去りこくるワ。

さと　そりや、お前眞實かえ。

秋津　オヽ、倦いたに依て暇をやる。よもや云ひ分あるまいがな。

大淀　それではわたしが。

秋津　ハテ、何にも云はずと、わしにチツと、引つついて居やれ。

ト大淀を秋津島引寄せる。

さと　コレマア、其やうにも舌たるう。如何に勤めの身なればとて、女房子のある者を、寢どつてそれが本望か。添うてその身の樂しみも、わしが爲には鬼門の女子。義理も情も知らぬかいなア。

大淀　サア、さう云はるゝ程、辛い切ないはわたしばかり。いつそこの身を。

秋津　コレ。

ト此うち、隼人、上手の障子を明け見て居る。この時、秋津島と顏見合せ、障子を締める。

サア、云ふ程二人が、あらが出る。女房キリ〳〵出てうせう。

さと　エヽ、モウ腹の立つ。さう云やモウ。

〽おうこれ待つてと大淀が、取りつき縋るをいとはぬ荒氣、なんの頑是も泣き出す國松。

ト女房、秋津島へ武者振りつくを大淀留める。この爭ひに枕屛風こけて、國松、起き上がり

國松　アレ母様、怖いなう〳〵。

ト お里、國松を抱き

さと　オヽ、可愛やよう云うてたもつた、鬼と鬼との寄合ひぢやもの、なんと云うても夢中であらうが、この子は可愛らないかいなア、

〽突退け見せてもきよろりくわん。

秋津　我が子ぢやとて、色に替へられるものか。欲しくば其奴もおのれに遣る。一緒に連れて出てうせう。

〽叱るどす聲國松が、小耳に聞き取り泣き出し。

國松　コレ、父様が叱らしやるわいなう。

さと　なんの叱らしやんしたとて怖い事はない。泣きやるな〳〵。ほんに云ひたい事もこの子ゆゑ、水掛け論を云はうより、これから兄さんの所へ行て、明るい暗いを立つてもらひ、あの傾城めを安穩に置かうかいなう。

ト泣きながら立ち上がるを、

秋津　細言云はずと早ううせう、

〽親子を引立表の方、門を突き出し戸をぴつしやり。

トこの文句の通りあつて、あと床のメリヤス。

オ、これも男の云ひ掛り。コリヤ、よく聞けよ。われが兄は明日の行司、勝つても負けても人の口、贔屓の沙汰と云はれては、大事の角力に疵が付く。われを去るのは秋津島が、緣を引かぬ心の潔白。そりやハヤ角力さへしまうたら、これまでのよしみ、手かけなりと下女になりと、おれが勝手に使うてやらうワ。

さと　イエ〳〵、手かけになつて居る程なら、死んでからならうわいなア。

國松　母様、お前が死なしやるなら、わしも一緒に死なして下されいなう。

〽頑是ない程猶いとしく。

さと　そんなら母が死ねば、其方まで……オ、、よう云うてたもつたなう。

ト抱き上げ

頑是なうても慕ふ子を、なんと見捨てゝ死なれうぞ。死にやせぬ〳〵いつまでも、親子一つにとは思へども、無得心な夫の心。この子を父なし子と云はす氣か。あんまりと云はうか胴慾と云はうか。兄さんにこの譯話し、白い黒いを付けにや措かぬ。待つて居やしやんせ。……

〽今さら役に立町の、兄が所へ泣く〳〵も、女夫喧嘩の捨て詞。

國松、おぢや。

國松　アイ。

〽愛に引かれて國松が、後に付いてぞ急ぎ行く。

トお里、いろ〳〵思ひ入れあつて、國松を連れ、向うへ走り入る。秋津島、門口を明け、後を見送り、

秋津　なんの燒いても燒かいでもの事を。女と云ふものは。一人ぼやいて行き居つた。

大淀　イエ〳〵、女子は誰れしも思ひ詰めては、心に取置きのないもの、どうぞ譯を話して、早う取戻して下さんせ。
秋津　ハテ、此やうにして置くも、ちよつとのうち。辛抱したがよい。
トこの時、向う揚げ幕にて、幕明きの角力三人にて
三人　サア〳〵、行くぞ〳〵。
〽道引違へ表には、人音足音どや〳〵と、聲に驚ろき秋津島、早う〳〵と大淀を、納戸へ隱す程もなく、大道狭しとのつさ〳〵、鬼ケ嶽濱右衞門。
トこの文句のうち、秋津島、大淀に囁き呑み込ませ、押入れへ隱す。向うより、鬼ケ嶽、好みの拵らへにて先に立ち、後より以前の三人付き添ひ出て、直ぐに門口へ來り
秋津島は、内に居るか〳〵。
秋津　喧ましい。何奴ぢやえ。
籠石　オヽ、おれだ。先刻割られた頭の算用、してもらはうと思うて來たのぢや。
土蜘　それ〳〵、この土蜘も投げられた、腰骨を仕返しに。
鳴岩　この鳴岩も先刻の汁かけ飯の鹽梅、あんまり旨さに、喰ひ直しに來たのだ。
三人　振舞ふてもらはうかい〳〵。
〽ぐち〳〵喚く面がまち。
鬼嶽　エヽ、靜かにしろえ。
秋津　誰れかと思へば鬼ケ嶽。
鬼嶽　秋津島、許しやれ。
〽遠慮會釋も荒男、横柄にどつさり大胡坐。
ト鬼ケ嶽、内へ通ると秋津島見て
秋津　鬼ケ嶽、角力がなけりやア逢ひもせなんだが、たう明日に押寄せたなア。
鬼嶽　オヽサ、明け六ツの櫓太鼓が
秋津　互ひに性根の定まり時。
鬼嶽　そりやア云はいでも知れた事サ。
秋津　それはさうと、なんと思うて今頃に。
鬼嶽　尋ねにやならぬ事があつて、
秋津　オヽ、尋ねたいとは、そりや何を。
鬼嶽　コレ皆、此方へ入れ……この三人は、お主が弟子ぢやぞよ。
秋津　おれの弟子ぢやが、それがどうした。
鬼嶽　サア、おれが所へ來て云ふには、わが身と師弟の緣

を切つた程に、おれが弟子にしてくれろと、退引きならぬ頼み。それゆゑ届けに來たが、鬼ヶ嶽が弟子にしても云ひ分ないか。どうしたものであらうなう。

〽表ばかりは和らかに、底に針持つ鬼ヶ嶽、うら問ひかければ。

秋津　アレ見や。桃の種へ猿を彫つたを、見るやうな面つきな奴ら。師匠の面汚し。我れから去んだは此方も勝手。

龍石　なんだ面汚しだ。よく其やうに生面を割つたな。

鬼嶽　コレ、すッ込んで居い。そんなら秋津島、いよ〳〵其方に構ひないか。

秋津　念には及ばぬ勝手々々。

鬼嶽　アレ、皆聞いたか。あの通りだ。今からわいらは、おれが弟子だぞよ。

鳴君　そりや知れた事。弟子の方からぼい上げて、こなさんを師匠に頼む三人。違ひがあつて、よいもんでごんすかえ。

土蜘　それ〳〵、この土蜘も龍石も

龍石　役に立たずを師匠にしては、この後の身分が納まらぬ。隨分今からわしどもを

三人　可愛がつて下さりませ。

鬼嶽　サア、斯う念を入れて置いて、秋津島、おれの弟子の龍石が頭なんでぶち割つた。

秋津　ハヽヽ、折檻するは師匠の役。おれが弟子の時にぶち割つた頭。今われが弟子にしてこぢるのは、そりやア理窟が違ふぞよ。

鬼嶽　オヽ、こりや尤も。弟子とは云へど折檻に、頭を割るは聞えたが、濟まぬ出入りは。

〽懷より證文取出し。

二百兩に百八十兩、花の殘りが外に百貫、慥かに預かる證文。弟子の花や給金は、取込んでもよいのかえ。

秋津　ヤ。

鬼嶽　エヽ、茲な大騙りめが。おれが弟子の金を引込まれては、マアおれが立たぬ。

秋津　立たぬと云うてどうならうぞ。高が借りた金、借りる事は法度になつたか。

鬼嶽　ヤ。

秋津　ハテ、どうの斯うのと云つたとて、おれが手に今はない。又ある時に返さうかえ。マア、さう思つてくりやれサ。

鬼嶽　ハヽア、そんならわりや、切りまいたのぢやな。

秋津　云うて見りや、マアそんなものかえ。
鬼嶽　ムウ、それでもわりや關取と云はれるかい。しらで云へば騙りだぞよ。
秋津　イヤモウ、騙りと云ふなら騙りになつて、返さぬ方が當世かいなう。
鬼嶽　オヽ、そりやいつち好い料簡。皆喜べ。マア、騙りにまで仕負ふせた。
三人　忝なうごんす。
トこれより捨ゼりふにて、三人のいぢめよろしくあつて
鬼嶽　四百兩の金を騙つた秋津島。
ト雪駄を取る事。
鬼ケ嶽が弟子に疵付けた、騙りの極印。カウ〳〵。
〽石割雪駄の拜み打ち、金は喰ひ入り眉間の血汐、
ト鬼ケ嶽、穿いて來た雪駄にて、秋津島の眉間を打ち割る。秋津島、額の血を見て
秋津　コリヤ鬼ケ嶽、男の眉間を。
鬼嶽　オヽ、ぶち割つたが、なんとした……とサア、云ふも此方が鬼と呼ぶ、名の付く役の廻り合せ。いま御贔屓のたんとある、盛りの關取秋津島を、おれが雪駄で眉間に極印。定めて罰が當らうと、何れも樣の思惑も、役の事なら仕方がねえ。弟子の敵、云ひ分はあるめえが。
秋津　ムウ。
〽堪え兼ねて戸棚の内より、出かゝる大淀。
トこの時、押入れのうちバタ〳〵と音して、大淀、出ようとするを、秋津島聞いて、惡いと思ひ入れあつて
コリヤ、出まいぞ〳〵。爰に居る事を知らすと、彼方から手を入れる。
三人　ヤ。
秋津　サア、手を入れて弟子どもが、どのやうに云はうが、此方に誤まりはない。コレ、鬼ケ嶽が一人して仕返しするに、うぬらがちよい〳〵出まい〳〵。顏合せては今までの、師匠の手前、どちらもこちらも惡い事だらけ。ナウ、鬼ケ嶽。さうではないか。
〽こなたを靜める詞の謎、解けても解けぬ胸と胸、鬼ケ嶽したり顏。
ト秋津島、大淀へ呑み込ませる。これにて、大淀また隱れる。鬼ケ嶽、思ひ入れあつて
鬼嶽　ハヽヽヽヽ、角力仲間への見せしめ。
ト秋津島、チツと俯向いて居る。

皆の者、これでわいらの顔も立たうがな。
龍石　イヤモウ、好い師匠は持つべきもの。
鳴岩　空腹い時燒酎を呑んだやうに、胸が晴れました。
北蜘　イヤモウ、わしどもも腹が癒りました。
鬼嶽　オヽ、弟子の顔が立ちさへすりや、おれの顔も立つたと云ふもの。これから行て、明け六ツまで酒でも呑んで夜明かしにせうか。
三人　それがようござりまする。
ト鬼ケ嶽、門口へ出て
鬼嶽　ヱヽ、この雪駄には血が付いたゆゑ、これでは場所入りに穢れた履物。
龍石　そんならこれを穿かんせ。
ト龍石、雪駄を脱いで鬼ケ嶽に穿かせる。
鬼嶽　秋津島、鬼ケ嶽は男だぞよ。この仕返しがしたくば、何時でも來やれ。後へ引くのおやない、明日の角力は晴れ勝負、神佛でも信心して、垢離でも取つて土俵入りしたがよい。
三人　アノ悪な大盗人めが。
鬼嶽　ハヽヽ、みんな、面を見い。
三人　ハヽヽ。

〽理窟を笠に腰強く、師匠強みに云ひ散らし、のさばり返つて立歸る。
ト鬼ケ嶽、思ひ入れある。下座の合ひ方にて、三人付き添ひ、皆々向うへ入る。
〽後はしらけし顔つきも、苦り切つたる折こそあれ、表へ迎ひの供廻り。
ト向うバタ／＼になり、以前の供、提灯を持ち出て來り
奴　ハツ、旦那のお迎ひ。
〽聲に從ひ高倉隼人。
ト障子の内にて、隼人出て
隼人　オヽ、聞いた／＼。
〽奥より出るも一思案、物をも云はず表の方へ、立出づる袂を扣へ。
ト上手障子屋體より、隼人、出て、門口へ出ようとするを、秋津島驚ろき袂を扣へ
秋津　イヤ、隼人さま、暫らく／＼。定めて何やかやお聞きに達し、非道な奴と思し召しもござりませうが、これには段々深い様子が。只何事も追つての儀。先づそれまでは御前體、よろしく願ひ奉りまする。

隼人　明日の角力、罷り出る事相成らぬぞ。
秋津　そりや又、何ゆゑでござりまする。
隼人　ヤア、何ゆゑとは、不屆き者めが。
　ト合ひ方になる。
宵より致して始終の樣子、窺ひ聞くに、子まで生したる女房を捨て、傾城遊女を引摺り込み、金銀を費すのみならず、弟子どもが詞を、聞けば聞く程非道の有樣。さう云ふ其方が性根と知らず、高倉隼人が進物持たせ、手を突いて頼むは何の爲。若殿に家督相續させましたいばかり。祝ひに祝ふ今度の角力。味方一人退けば、敵は千騎の強みとなる。おのれが弟子を相手に取られ、雪駄を以て面を割られ、その面で明日の土俵入りがならうと思ふか。うつけ者めが。家督を繼がぬのみならず、若殿にうつけ者の名を取らす不忠不義。相撲の場所へ行くが最後、引ッ縛つて縛り首。見下げ果てたる人非人めが。
〽はつたと睨みし理窟詰め、返す詞もあら涙、拳を握りうづくまる。
　ト秋津島、思ひ入れあつて
秋津　この場に於てあなた樣へ、一言半句申し譯もござりませねど、何を申すも若殿樣が御大切ばつかり。
隼人　ヤア、何が大切。その若殿へ對しては、第一の不忠者。恥辱を取つた面の疵。非道が取つて返らうか。面を見るも忌々しい。
　ト表へ出て。
この上、鬼ケ嶽と角力があらうが、主人への申し譯は、角力終らば。
　ト思ひ入れあつて、花道にて
秋津　隼人さま。
　ト秋津島、隼人の袖を引く。
隼人　伊達に刀は差さぬわい……提灯やれ。
　ト振り切り、隼人、向うへ入る。
〽後打見やり秋津島、これ今生の名殘ぞと、思はず大地へどつかと座し、思案に餘れ折柄に、同じ思ひに大淀が、思はず表へ走り出て。
大淀　モシ、秋津島さん、さぞ無念でござんせう。隼人さまとやらの今のお詞では、お前が明日の角力にも出られず。さうなる時は賤さんの、御代にもならねば、女夫には猶以て。どうぞ仕樣はないかいなア。
〽云へども何の答さへ、涙ながらに大淀は。
秋津島さん、好い思案して下さんせ。サア、あすこへ行

て下さんせいなア。
〽無理に立たせて塵打拂ひ。
ト合ひ方にて內へ入り
其やうに默つてばかり居ては、案じらるゝわいなア。わたしも殿さんと女夫になられるやう、外に仕樣はござんせぬか。また明日の角力の事も、隼人さまへ詫び言の仕樣はござんせぬか。モシ、秋津島さん、好い思案して下さんせいなア。
〽好い智慧出して下さんせと、云へば兎かうの一分別。
秋津　思案と云うたら秋津島が、死ぬより外
大淀　エヽ。
秋津　コレ。
〽あたり見廻し秋津島、思案極めて聲密め。
大淀どの、こなたに賴みがあるが、聞いて下されぬか。
大淀　そりや、お前の云はしやんす事なら何なりと。
トこれにて、秋津島、思ひ入れあつて、あたりにある繩を持ち來り、大淀を縛りにかゝるゆゑ、大淀、惘りして
こりや何としやしやんすぞいなア。
〽泣き沈みたる大淀を、取つて引立て無理無體、かけたる細引取る間もなく、縛り付けた縛り繩。聲立てさせじと猿轡。
ト秋津島、大淀を下手の柱へ縛し上げ、思ひ入れあつて
秋津　隼人さま、宵からの一部仔什、御立腹は御尤もでござりますれど、何を申すも云ふに云はれぬ、若殿の皆お爲が、却つて不忠となり下がり、角力冥加に盡き果てた秋津島。申し譯には死ぬるが高。これでお腹を癒されて下さりませ。とは云へ何にも知らぬ女房伜、後の始末を庄九郎へ、せめて一筆。それ〳〵。
トこれより獨吟になる。
〽明日の眺めと思ふなる、花を見捨てゝ行く雁の、文字さへ薄き水莖の。
トこの獨吟のうち、掛硯を出し、書置を書き終る。思ひ入れあつて、秋津島、火鉢へ手をかけ、この火鉢仕掛けにて、ひしやげる事。
コレ太夫どの、こなたの足手が働らくも、何かの邪魔になるゆゑ、それで縛つて置いたのぢや。惡い心ぢやない程に、おれが死んだその後で、要之助さまへ秋津島が、不忠でない申し譯して下さりませ。なんの命の一つや二

つ、土俵の上の怪我と思へば、口惜しい事はなけれども、只口惜しいは鬼マ嶽めに。アヽ、これも愚痴。ドレ、歸らぬうちに、オヽ、さうぢや〳〵。

〽胸に思ひも增鏡、心に照らす面影も、後の筐と忍び音に、涙の雫殘す封じめ。

ト獨吟のうち、大淀、これを見て側へ寄らうとするゆゑ、行燈を吹き消す。獨吟の切れ。床の淨瑠璃になり

〽表の戶口さし堅め、戶棚の內より一腰取出し、灯し火吹き消す氣あつかひ、力み返つて我が腹へ、ぐつと突ッ込む折こそあれ、お里親子を引連れて、息せき來る庄九郎。

ト時の鐘にて、向うより庄九郎、尻端折り、國松を脊負ひ、お里、ぶら提灯を下げ、先に立ち出て來り、花道にて

庄九　サア、なんぼさう喧ましう云うても、秋津島に限つて、さう云ふ惡い性根はない筈。なんでも今わや〳〵云つて、通り居つた話し聲。どうやら胸騷ぎがしてならぬ。

さと　マア、なんであらうと餘の事云はずに、あの傾城めを引出して下さんせ。

庄九　サア、おれが好いやうにする程に、マア、來やれ來やれ。

ト本舞臺へ來り、門口を明けんとしても開かぬゆゑ。

サア、こりや締つてあるワ。

さと　エヽ、もう、寐くさつたわいなア。

庄九　ハテサテ、何も糺さず悋氣するな。腹も立たうが、おれに任せて置け。

ト門口を叩き。

關取、明けて下され。コレ、おれだ、庄九郎だ。

さと　エヽ、モウ、もつときつく叩かんせいなア。

庄九　ハテ忙しない。コレ、開けてくれ〳〵。

さと　アヽ、聞えたわいなア。大方モウ何所ぞへ連れ立つて行き居つたか。エヽ、面の憎い事ではあるわいなア。

〽樣子知らねば表の兄妹、內には大淀身を揉んで、足搦りしたる物音に、戶の隙間より庄九郎、覗いで見ても解り兼ね、仔細ぞあらんと足骨に、蹴破る戶口粉微塵、內の文目も眞暗がり。

ト此うち、庄九郎、國松を女房へ渡し、門口を蹴破り轉け込むゆゑ、これにて提灯消える。

庄九　南無三、提灯の灯まで消してしまうた。火を灯せ灯

せ。
さと　アイ〳〵、合點でござんす。
〽勝手覺えし女房が、心付木の釜の前、灯す光に。
　トお里、火打箱を尋ね、行燈へ灯を付ける。
庄九　コレ、秋津島は何所に居る。秋津島は〳〵。
　ト行燈の光りにて、よく〳〵見て
さと　ヤヽ、こりやマア、どうさしやんした〳〵。
〽お里はうろたへ國松は、見るよりわつと泣く有樣手負ひをしつかと庄九郎抱き締め。
　ト庄九郎、秋津島の側へ寄り
庄九　コレ關取、氣を慥かに持たつしやれ。これには深い樣子があらう。腹切つた仔細は〳〵。
　トこれにて、秋津島。うつとりして居て、氣が附き
秋津　オヽ、庄九郎か。女房、坊主も連れて戻つてか。
さと　アイ〳〵、こちの人、譯は知らぬが堪忍して、どうぞ生きて居て下さんせ。
秋津　コレ庄九郎、口で云ふにや及ばぬ。この書附け。
庄九　オヽ、合點だ〳〵。妹、なんぞ腹帶をくれ。
さと　アイ〳〵。
〽納戸の暖簾引きちぎり、疵にしつかと卽座の腹帶。
　トお里、暖簾を切つて來る。庄九郎、秋津島の疵口をしつかと卷き、行燈引寄せ、書置を廣げ
庄九　コレ妹、この書置で樣子は知れた。この女中は要之助さまの佮ひ方だワ。
〽結び目取つて庄九郎、解く間遲しと大淀が。
　ト庄九郎、大淀の繩を解く。
大淀　遲かつた〳〵わいなア。
さと　そんならお前は、大淀さんとやらかいなア。
大淀　アイ、さうでござんす。お里さんは隼人さんとやらへ緣あれば、要之助さんのお身の上、必らず云ふたと秋津島さんの云ひつけゆゑ、酷しながらも苦しめし、わたしが切ない心の內、推量して下さんせいなア。
庄九　ムウ。それで妹に隱した譯が知れた。四百兩で身請けせねば、若殿の一大事、頼まれた男の義理。弟子の花や給金を引込んだは、大淀どのゝ身請けの金。
さと　ドレ〳〵、わたしにも讀ませて下さんせ。……
　ト取つて見て、
ナニ〳〵、その上今宵鬼ケ嶽事、弟子ドもを引連れて、その弟子と云ふも我が弟子を、皆おのれが弟子にして、金の催促運の當然、雪駄を以て面を割られ……コレ兄さ

ん、雪駄で頭を割つたといなア。

秋津　庄九郎、女房ども。立たぬわい／＼。

庄九　オヽ、尤ぢや／＼。

さと　道理でござんす／＼。

秋津　立たぬ／＼わい。

庄九　道理ぢや。ヤイ妹、泣いてばかり居ては事が濟まぬぞ。……

　トまた讀みにかゝる。

ナニ／＼、今宵隼人どのが段々の樣子を聞き、非道と心得愛想を盡かし、明日の角力を……オヽ、出るなと云うて暇くれたか。

秋津　オヽ、立たぬ／＼。

庄九　成る程、その立たぬは、尤もぢやが、お主が死んでは、いよ／＼明日の關がない。すりや要之助どのゝ御代にもならず、斯う云ふ事ならなぜおれに、明かして相談してくれぬ。但し相談したとても、役に立たぬ庄九郎と、見限つてした事か。そりや聞えぬぞよ、秋津島。

〽思ひがけなき恨みの詞、手負ひは猶も氣をいらち。

秋津　イヤ、さうぢやない／＼。どのやうな相談したとて、雪駄を以て割られた眉間の疵。この面提げておめ／＼と、なんと土俵へ上がられう。隼人どのが一言、身に浸み渡りて、尤もと思へども、明けて云はれぬ云ひ譯ゆゑ、賴み置くは庄九郎。明日の角力はこの坊主めを、鬼ケ嶽と取らしてくれ。

庄九　コレ、そりや血迷うて何を云ふ。六つや七つの小坊主を、鬼ケ嶽と合せいとは、氣が狂うたか。正氣になれ。

さと　モシ、こちの人、云ひ置く事があるならば、氣を落つけてとつくりと、正氣になつて下さんせ。斯う云ふ事とは露知らず、女子の淺い心から、端下ない悋氣事。夫を始め大淀さんへ、どうも顏が上げられませぬ。モシ、氣を落ちつけ、正氣になつて下さんせいなア。

〽取りつき嘆けば。

秋津　氣も狂はぬ、血迷ひもせぬ。して坊主めは、何所に居る。國松々々。

〽云ふに國松縋りつき。

國松　コレ父樣、なんで腹を切らしやつた。死なずに居て下されいなう。

〽我が子を膝にひん抱きて、穴の明く程打眺め。

　ト秋津島、國松を膝に抱へデッと見て、思ひ入れあつて、

秋津　コリヤ、父はな、鬼ケ嶽に無駄でぶたれ、その無念で死ぬわいやい。明日の角力を取らねば、若殿樣のお身の上、末代まで恥のかきあげ。魂魄はこの地に止まり、蔭身に添うて取らさにや置かぬ、無念の生血、親が五臟、今より其方に讓るぞや。

〽腹十文字に引切つて、我が子を膝に引寄せて、摑み出したる臟腑の血汐、口に押込み差入れば、ウムとばかり目を見詰め、反打ち返れば庄九郎、疊叩いて。

ト國松へ臟腑の精血を呑ませると、薄ドロ〳〵にて悶絶する。

庄九　コリヤ秋津島、血迷うてか。さま〴〵の事をする。坊主めまでを殺すのか。

さと　こりやお前、うろたへてか。

秋津　イヤ〳〵、うろたへはせぬ〳〵。我が心魂に徹したる、二代の關取秋津島、若殿の御運、開くか開かぬか。コリヤ國松よ〳〵。國松やアい。日頃念ずる摩利支天、力を添へてたび給へ。

〽呼はる聲に幼子の、むつくと起きて帶引解き、すつかり脫いで取廻し、力足をどう〳〵〳〵と、肢股踏みならすが如くなり。

ト國松、むつくと起きて裸になり、肢股踏みならす。皆々見て、

さと　オヽ、常に見馴れぬ取廻し。

庄九　すりや、幼な子と思ひの外用に立つか。

秋津　女房喜べ。

さと　アイ〳〵。

秋津　庄九郎、ソレ、褒めてやつて下され。

〽死ぬる臨終の際までも、子ゆゑに碎く心の內、思ひやる程目に涙。

庄九　そんなら其方に精魂移り、天晴れ明日の關取と。

國松　オヽ、鬼ケ嶽を投げて見せう。

庄九　ムウ。アノ見事われが。

國松　オヽ、伯父樣ござれ。地取りせう。

庄九　オヽ、合點だ。

〽おゝ合點と身拵らへ、やつと手合せ組みつくを、ひねる腰附き放れる手先、腕首摑んで働らかせず、右へ押しやり左へ突けど、生え拔いたる如くにて、小腰を廻し何の苦もなく、大の男を突き廻し、物の見事の頭轉倒、不思議と云ふも愚かなり、手負ひは喜び。

トこの文句のうち、庄九郎、國松を相手に角力の鳴り

物にて地取りをする。ト々國松、庄九郎を投げる。
秋津　オヽ、出かしたく\。その通りに投げた上、この雪駄で面くらはし、父が敵、其方が爲には止めの刀。必らず必らず忘るなよ。
〽詞は堅き石割りの、雪駄を取つて。
ト秋津島、雪駄を渡す。
國松　合點々々
トのりになり。
父樣の敵鬼ケ嶽、雪駄の金の緩む程、くらはして見せう。
秋津　オヽ。
〽今死ぬるとは知らぬ子の、頑是ない程聞く父が、さしも丈夫の魂ひも、今ぞとろけるその苦しみ。
さと　モウコレ、今が別れかいなう。
大淀　夢見たやうな、儚ない別れ。
庄九　惜しや男の
さと　散り行く花で
皆々　あつたよなア。
〽惜しや〳〵と悔み泣き、可愛々々と啼く鳥も、連れて聞ゆる夜明けの鐘。
ト皆々愁ひの思ひ入れ。本釣り鐘、夜明け模樣、鷄の聲。
庄九　コレ〳〵、最早夜明けの鐘。櫓太鼓も早追ッつけ。
秋津　一世一度の樂屋入り。伜を連れて早う〳〵。
さと　イエ〳〵、なんぼ其のやうに云はしやんしても、お前を捨てゝなんでマア。
庄九　親や夫の臨終を、見捨てゝ行くもお主の爲。又一つには手負ひに心休めるも、矢つ張り追善。心殘れど何にも云はぬ。やがて冥途で、秋津島。
秋津　云ふにや及ぶ。
〽詞すゞしき關取の、夫は蓮の花角力、西の方やへ土俵入り、さらば〳〵と泣く〳〵も、出づる三人、國松が、振出す手先愛らしく、遂には別れ逢坂の、關と關との晴れ角力、見送る父は修羅道の、櫓太鼓や六ツの鐘。
トこの文句のうち、國松、先に庄九郎お里は着替へを抱へ取りつく。本釣り鐘。
〽哀れ果敢なや秋津島。
ト此うち、本釣り鐘の捨て鐘を打ち、秋津島、前の手桶にある柄杓を取上げ、兩手に持ち添へ、ヤッと水を呑み、この折早めて角力太鼓を打つ。これにて、秋津島、しやんと立ち上がり、よろ〳〵として、門口へ走

り行かんとして、門口の柱に當り、ばつたり倒る〻。花道の皆々、本舞臺を見て思ひ入れ。三重にて幕。幕引きつけると幕外の園松、雪駄を持ち、キツとなる。角力太鼓にドロ〳〵なあしらひ、六法にて入る。庄九郎、お里、これを見て嬉しきこなし、よろしくあつて、向うへ入る。留め木にて後シヤギリ。

大詰　相撲の場

役名——秋津島女房、お里。一子、園松。茶店娘、お幸。行司、庄九郎。弟子、十軒濱藏。關取、鬼ケ嶽右衛門。高倉隼人。

本舞臺、三間の間、一面の竹矢來、眞中木戸口、下手いつもの所出茶屋、前へ床几二脚を置き、左右の矢來へ取組みの顔觸れを提げある事、すべて荏柄天神社内相撲小屋の體。茶店に茶屋の娘お幸。駒下駄、前垂れがけにて茶を運び居る。床几に見物の仕出し四人、腰をかけ、茶をのみ居る。この見得、角力の太鼓にて、幕明く。

仕出　時に姐さん、今度の角力は大分大入で、繁昌すると云ふが、定めし見世も儲かるだらう。

お幸　ハイ、お庇様で毎日々々、お客様の絶えました事はとんとござりませぬわいなア。

仕出　それと云ふも取組みの、顔觸れが好い所爲だ。

同　それに今日は鬼ケ嶽と、秋津島の取組みだと聞いて來たが、本當かえ。

お幸　ハイ、それゆゑモウ今朝から、爪も立たぬ程の大入でござりますわいなア。

仕出　今日の角力を見ねえ日にやア、角力好きだと云へねえから、それでわざ〳〵來ましたが

同　もう何番程取りましたな。

お幸　ハイ、まだ五六番でござりますから、今のうち早くお入りなされませ。

仕出　それぢやア早く中へ入り

同　好い場所へ坐り込んで

同　ゆつくり見物を

同　するとしよう。

　トこれにて、一人、錢を出して、

同　オイ、お茶代は爰へ置くよ。

お幸　ハイ、毎度有り難うござります。お靜かに入らつしやりませ。

ト四人、小家の木戸口へ入る。あと靜かになる。流行り唄になり、向うより、行司庄九郎、着流し、黑羽織、一本差し、雪駄にて先に立ち、後より國松、荒縞の着附け、雪駄にて出る。この後よりお里、小さな風呂敷包みを持ち、悄々とふさぎながら出て來り

さと　コレ國松、其やうに急かずと、マア、靜かに行きやいなう。

國松　それでもわしや、早う相撲場へ行きたいわいなう。

庄九　オヽ、勇ましいその詞。子供心にも感心な事ぢや……併し、まだ場所入りには餘程時刻も早いゆゑ、あの茶店にて

さと　ほんに、さうしませうわいなア。

ト矢張り右の唄にて、本舞臺へ來り、お幸、皆々を見て

お幸　これは秋津島關の姐さん、國松ちやんをお連れなされて、お行司と御一緒に、お遊びでござりますかいなア。

さと　ハイ、今日は角力場に用事もあり、ツイこの子の後見同樣、連れ立つて參りましたわいなア。

庄九　マア、何にしろ一休みしてから、場所へ行くとしよう。

お幸　サア、御ゆるりとおかけなされませ。只今お茶を入れますわいなア。

トお幸、茶の支度をする。三人、床几へかけて、

庄九　コレお里、見りやア大分ふさいで居るが、必らず案じぬがよいぞや。この伯父が付いて居れば、決して國松に引けは取らせぬゆゑ、其方も共に力を添へ、神信心でもしてやりやいなう。

さと　そりやモウ大事の事ゆゑ、摩利支天樣へもお百度を上げ、よくお願ひ申して置きましたが、なんと云うても大人と子供、案じられてなりませぬわいなア。

國松　母さん、案じて下さるな。わしや今日の角力は、充分に取つて見せませうわいなう。

さと　オヽ、よく云やつた。それでこそ秋津島の伜國松。天晴れの者ぢやなう。

トこの時、お幸、茶を入れて持ち來り

お幸　サア、お煑花が入りました。お一つお上がりなされませ。

ト出す。これを受取りながら

庄九　時に鬼ケ嶽關の場所入りは、まだだらうなう。

お幸　ハイ、まだ關取さんはお出でにはなりませぬわいなア。

さと　お幸さん、久しうお見世へも來ませぬが、いつも御繁昌で、ようござりますわいなア。

お幸　有り難うござりまする。マア、見ますれば國松さんには、大層大きうおなりなされて、骨組みの鹽梅と云ひ、お體の恰好、とんと關取に生寫し。お立派な事でござりますわいなア。

さと　ハイモウ、仕合せと丈夫に成人いたしまして、國々の出興行にも、親父と一緒に參りまして、土俵入りをば致しますわいなア。

お幸　それはマア、剛氣な事でござります。お樂しみでござりますわいなア……オヽ、わたしとした事が、お話しばかり致しまして、お菓子も上げませず。國松さんが御退屈。ドレちよつと取つて參りませうわいなア。

ト お幸、茶店の内へ入る。庄九郎、思ひ入れあつて

庄九　コレ國松、内でもよう云ひ聞かした通り、土俵の上へ上がつたら、父の事を忘れるなよ。

國松　なんの伯父さん、忘れませう。わしや口惜しうてたらぬゆゑ、何所までも取組む氣ぢやが、もし子供ぢやと相手にせぬかと、それが案じられてなりませぬ。

庄九　それは決して苦勞にするな。例へ鬼ケ嶽がなんと云ふとも、この伯父が好いやうに工風して、取らせますわいなう。

さと　わたしは女の事ゆゑに、中へはあらはに行かれねど、お前が子供の事ゆゑに、世話やきがてら樣子を見れば、しつかりして父さんの敵。

ト あたりを見て、風呂敷包みより以前の雪駄を出し

これは父さんの恨みの雪駄。大事の時には、これを以て。

ト 國松に渡す。國松、受取り

國松　オヽ、この雪駄で鬼ケ嶽を、見事いがめて見せませう。

庄九　マア、爰は場所の外ゆゑ、人が聞いては不都合。それはお里、預かつて置くがよい。

さと　ハイ、さうしませうわいなア。

ト また雪駄を風呂敷へしまふ。この時、中にて

呼出　東、鶴が峯。西、龜ケ岩。

ト呼ぶ。これを聞き三人、思ひ入れあつて
庄九　オヽ、モウそろ〳〵始まると見える。それぢやァ場所へ入るがよい。
さと　わたしも行つてもよいかいなア。
庄九　今度の場所は若殿の、御家督定めの晴れ角力なれば、付いて來ても構ひはないわえ。
さと　そんなら國松。
國松　ドレ、場所入りをしませうわいなう。
ト櫓太鼓にて、三人、木戸口へ入る。あとお幸、出て來り
こう　オヤマア、お行司さんや秋津島關の姐さんは、もう中へお入りと見える。それぢやアお菓子は、中へ上げうわいなア。
ト茶店にあたりを片付けて居る。この時、櫓太鼓、米山甚句になり、向うより、鬼ケ嶽、好みの拵らへ、駒下駄、一本差し、取的二人付き添ひ出て來り、直ぐに本舞臺へ來て、お幸、見て
これは關取さん、お早うございました。マア、おかけなされませ。
トこれにて、鬼ケ嶽、床几へかける。お幸、茶を持つて出る。
鬼嶽　さうして取組は、今どこらを取つて居るの。
こう　ハイ、只今鶴ケ峯關と、龜の岩關の顏觸れが濟んだばかりでございます。
鬼嶽　それではまだ二段目の顏觸れぢやが……ヤイ茶武藏、なんで早うから迎ひに來たのぢや。まだ場所入りには時刻か早いに、早う場所入りせい〳〵と、急き立て居つて、わいらは何の爲に場所に付いて居るのぢや。
茶武　わしやア關取の場所入りには、まだ早いと思ひやんしたが、爰に居る勇瀉が、關取の迎ひに行け〳〵と、無理にわしの手を取つて引出すゆゑ、それで迎ひに來たのでごんす……コレ勇瀉、貴樣のお庇で關取に、おれが叱られたわえ。
勇瀉　何吐かすぞえ。貴樣が勝手に迎ひに行くと云ふゆゑ、まだ早いとは思つたが、おれも一緒に行つたのぢやわい。
茶武　エヽ、嘘をつけ。貴樣が惡いからぢや。早う關取にあやまれ〳〵。
勇瀉　エヽ、われがあやまれ。おりや知らんわえ。
茶武　又そんな強情を吐かし居るか。

勇潟　オヽ、吐かしたらどうするのぢや。
茶武　オヽ、どうするものか。今にいがめてくれるぞよ。
　ト兩人、ちよつと爭ふゆゑ
鬼嶽　ヤイ〳〵、又わいらはいぢり合ひか。靜かにせえ。一體わいらが氣が利かぬゆゑぢや。これから氣を付けろ。
兩人　オヽイ。
鬼嶽　さうして、うぬらはなんと思ふか。今日はお屋敷の殿樣の御家督定め、角力の晴れぢやに依つて、氣を付けて取れよ。
茶武　そりやア大丈夫でごんす。わしなぞは地取りをして來たから、腕がぶん〳〵鳴つてならねえワ。
勇潟　貴樣はそんなに威張るけれど、先刻地取りをした時に、二度が三度倒れたぢやアねえか。
茶武　それは怪我なら、せう事がないわえ。
勇潟　怪我でも負けは負けぢやわい。
茶武　おのれ、そんな事を吐かすなら、おれが斯う無双にかけたら、われどうする。
　ト仕方をする。
勇潟　そりや知れた事、腰投げにするわえ。
茶武　そんなら首またにかけたら
勇潟　矢筈で受けるわえ。
茶武　併し、斯う閂をかけたら。
　ト調子に乘つて双方立ち上がり、閂にかける。これを勇潟、振り拂つて車輪になり、角力を取つて茶武藏をどつさり投げつける事。鬼ケ嶽、扇にて塵を拂ひ
鬼嶽　コレ、たわけ面め。勇潟も勇潟ぞや。また茶武藏も茶武藏ぢや。往來でなんの態ぢや。ちと嗜なまんかい。
兩人　オヽイ。
　ト腰を擦りながら下手へ扣へる。この時、相撲太鼓になり、庄九郎、出て來り
庄九　オヽ、關取、爰にござりましたか。先刻から餘儀ない事で、御相談が致したく、お待ち申して居りました。
鬼嶽　お行司でごんすか。相談とは、なんの事でごんすな。
庄九　外でもないが、今日の取組みの事について。
鬼嶽　オヽ、さうでごんすか……コレ、野郎ども、わいらは先へ場所へ行き、今直ぐにおれが行くと、斷わつて置けよ。
兩人　オイ、承知でごんす。

ト矢張り、角力太鼓にて、兩人、木戸口へ入る。お幸、こなしあつて、

こう　わたしもちよつとこの間に、姉さんを迎ひに行て來ませう……モシ關取さん、直行つて參りまする。どうぞ店をお頼み申しますわいなア。

ト下手へ入る。庄九郎、思ひ入れあつて、

庄九　イヤモウ、今度の場所は殊の外の大當りで、關取衆にもお客先へ、顔出しやら何やかやで、定めし用多でござらうなう。また今日の顔觸れは、贔屓の取組みゆゑ、わしも今日から場所入りして、實は關取の場所入りを待つて居ましたわえ。

鬼嶽　さうでござんしたか。何か出かけにあちらこちらから、進物を持ち込まれ、一々挨拶に時刻が遲れ、待遠でごんしたらう。さうして秋津島は、小家入りしましたかの。

庄九　サア、その事についての。

鬼嶽　ナニ、その事でごんすと。

庄九　今日は秋津島と關取との立合ひぢやに依つて、小家の中は割れるやうな見物、所で困つた事と云ふは、秋津島は病氣でごんす。

鬼嶽　ナニ、病氣……そりやハヤ、困つた事でごんすの。

庄九　ところで、關取も知つての通り、六角家の若殿の御家督定めの相撲ゆゑ、秋津島が病氣の上は、外の關と取組みを、關取に頼まんと、年寄衆へ相談したところ、六角家の仰せには、家督定めの晴れ角力、外の關では聞濟みなく、秋津島の伜國松を、相手に出せとの達てのお頼み。嫌と云はれぬ贔屓先ゆゑ、不承であらうが、取組んでは下さらぬか。

鬼嶽　なんの馬鹿々々しい。子供を相手に角力を取つて、御家督定めがなるものか。措かんせ／＼。

庄九　さうでもあらうが、先より望んで來た今日の角力。無理でもあらうが取つて下さい。

鬼嶽　お行司にも大概にさんせ。そんな馬鹿な取組みが、なんでわしに出來るものか。マア、冗談云はずと置いて下んせ。

庄九　サア、さうでもあらうが、どうか其所を聞き濟んで。

鬼嶽　エ、しつこい。もう止しにさんせ。

ト この時、流行り唄にて、小家の内より、作人、羽織袴にて出て來り、庄九へ腰をかけ

隼人　オヽ、關取に庄九郎どの、丁度幸ひ。先刻文通にて申し越せし通り、今日の角力は、若殿の御家督定め。秋津島と鬼ケ嶽、兩人の取組みなれど、生憎秋津島は病氣との事。その代りに國松を、名代に致せよと、望んで置いたが、その儀は承知かな。

庄九　サア、その事でござりまする。只今も申して居ります事が、鬼ケ嶽關も子供を相手に、相撲を取るのは馬鹿馬鹿しいと、斷わつて居りまする。

隼人　すりや、不承知ぢやと申すのか。

鬼嶽　ナニ、不承知と申す譯でもござりませぬが、角力は元勝負を爭ふもの。子供を相手に取りましたところが、別段お役にも立ちますまいと、それで辭退をして居る所でござりまする。

隼人　その儀は尤もの事ながら、どうも其方と秋津島と、立合はさぬその時は、家中の者も若殿の、お身の上を案じれば、某最前年寄へ、右の次第を申し入れ、望んで置きし今日の立合ひ。曲げて其方が請合ひくりやれ。

庄九　コレ關取、隼人さまもあのやうに、事を分けてのお賴みゆゑ、不承であらうが聞分けて下され。そりやモウ、相手が子供の事ゆゑに、あまり馬鹿げて土俵入りが出來ぬと思ふのであらう。そりや尤もぢやが、何を云ふにも秋津島は病氣の事。晴れの今日の角力を、此まゝに措いてしまふ時は、今も云ふ通り、六角家のお家に拘はる事ぢや。そりやモウ相手が子供ゆゑ、關取の相手にならぬは知れてあるが、それも六角さまのお賴みゆゑ、不承であらうが……オヽ、さうだ。斯うしませう。土俵の上の仕切りだけ、してやつて下さらぬか。さうさへすれば隼人さまも、これまでの御心勞が立つと云ふもの。また關取にも双方へ、義理も立つぢやないか。サ、そこを思うて仕切りだけしてやつて下され。關取、この庄九郎が無理な賴みぢやけれど、どうぞ得心して下されいなう。

トいろ／＼賴むこなし。鬼ケ嶽、思ひ入れあつて

鬼嶽　事を分けてのお行司のお賴み。ようごんす。土俵の上の仕切りだけは致すでござりませう。

庄九　エヽ、そんならアノ仕切りだけしてやつて下さるか。ヤレ／＼、それでこの庄九郎も、隼人さまや年寄衆に、顏が立つと云ふものぢや……モシ隼人さま、お聞きの通り鬼ケ嶽が、仕切りだけならしてやらうと、得心してくれましたゆゑ、どうかあなたから殿様へ、よろしくお執成しをお願ひ申しまする。

隼人　すりや、鬼ケ嶽が得心してくれうとな……イヤモウ、早速の承知忝ない。身共に於ても、それにて心配甲斐があると云ふもの。定めし御家中の者ども、この事を聞かせたなら喜ぶ事でござらうわい。

庄九　何に致せ隼人さま、爰は茶店の事なれば、棧敷へござつて御ゆるりと、御休息なされませ。

隼人　成る程、屋敷の者も參つて居れば、この場の話しを致さうわえ。

庄九　それがよろしうござりませう。

トこの時、小屋の内にて

呼出　東、常磐山、西、宮戸川。

ト呼ぶ。庄九郎、これを聞き

庄九　今の取組みの様子では、追ひ／＼番數も濟む様子ゆえ、關取にも場所入りをしなんせ。

鬼嶽　それぢやァお行司、行きませうか。

隼人　身共も見物いたすであらう。

庄九　關取先へ……許して下んせ。

ト櫓太鼓にて、皆々木戸口へ入る。知らせにつき、この道具引いて取る。

本舞臺、眞中四本柱、本土俵、砂を撒き、左右へ莚を敷き、柱に弓手桶、椀の蓋、散り紙なぞ提げてあり、後ろ折り廻し、一面棧敷の張り物にて見切り、左右に三階總出の角力居並び、この中に以前の鬼ケ嶽、國松、行司の庄九郎、呼び出し奴鉄吉、その外行司呼出し一人、年寄二人扣へ居る。櫓太鼓にて、道具納まる。

ト直ぐに床の淨瑠璃になり、

〽賑はしき、櫓太鼓も鳴り渡る、はや番數も取り盡し、打留め前の幕角力、互ひに待ちしその所へ、土俵の上に聲高く。

トこれにて呼出し出て、

呼出　東、土蜘々々。西、駒ケ峰／＼。

ト呼ぶ。また行司出て、

行司　こなた、土蜘々々。片や、駒ケ峰／＼……双方見合つて、まだ／＼。

トよろしく軍配を引く。これにて、角力取組み。行司駈けながら、

はつけよいや／＼。殘つた／＼。

ト駒ケ峰、負ける。行司、

土俵。

ト軍配を上げる、これより番數取組む事あつて、トヾ鬼ケ嶽、秋津島の取組みを呼び出し、奴鉄吉、行司庄九郎出て、双方取組ませ、よろしくあつて、淨瑠璃になり

〽行司の軍配引くや否や、四つに渡つて國松が、えんやと押せども大盤石、しやこざかしと振り拂ふ、はずみにかゝつて國松が、あなたへよろめく危なさを、庄九郎は氣を焦せり、飛鳥の如く駈け廻り、それと云はねど助力の軍扇、時に不思議や秋津島の、無念見えねど國松の、陰身に添ふか仁王立ち、見上ぐる腰へ立つかと取りつき、河津をかけて投げつけしは、天晴れ力士の譽れなり。

ト鬼ケ嶽、國松、取組みあつて、トヾ國松は鬼ケ嶽を當てるゆゑ、鬼ケ嶽、苦しみ伏す。

〽思はず母は駈け寄つて。

ト見物の中より、お里、雪駄を持ち、土俵の上へ上がり

さと　コリヤ國松、最前見せたこの雪駄。これにて敵を存分に。

國松　オヽ、合點だ。

〽おゝ合點と國松が、恨みの雪駄振り上げて。父樣の敵、鬼ケ嶽、思ひ知つたか。

〽はつしと打ちし念力は、岩をも通す勢ひなり。

ト國松、よろしく雪駄にて、鬼ケ嶽を打つ。

この時、隼人出て

隼人　コリヤ國松、天晴れのその手柄。

庄九　これにて、修羅の妄執も

鉄吉　晴らす二代の秋津島。

隼人　めでたく屋敷へ。

ト扇を開き

同道なさん……オヽ、めでたい。……

ト木の頭。

めでたい。

トこれにて頭取出て、

頭取　先づ今日はこれきり。

トめでたく打出し

關取二代勝負附（終り）

繪入稗史蕣物語



嘉永元年八月市村座上演繪本

繪入稗史蕣物語

序幕　宇治螢狩の場

役名――宮城阿曾次郎。秋月娘、深雪。母、操。腰元、ゆかり。同、あやめ。同、吉野。同、蔦野。醫者、萩野祐仙。醫者、立花鷄庵。瀬田傳藏。藪野久平。

本舞臺、一面の淺黄幕、上の方、宇治橋の欄干、石の榜示杭。宇治平等院槇の島道と記しあり、下の方葭簀張りの茶屋、すべて宇治川橋詰めの體、幕の内より仕出し、床几に腰を掛けて居る。茶屋男、茶を酌んで居る。茶摘み唄にて幕明く。

仕出　なんといつも、賑やかな事の。

同　螢見がたんと出るぢやないか。

茶屋　當年は殊の外、螢が早う出ました。

仕出　イヤモウ、宇治川の螢狩といふは、諸國に聞えてある事ぢやて。

同　日暮れから見物して行きませう。

茶屋　左やうなら、よい見晴しへ御案内申しませう。

仕出　サア〳〵、ござれ〳〵。

ト矢張り右の唄にて仕出し下手へ入る。ト花道より慈姑頭の醫者祐仙、後より坊主醫者、鷄庵連れ立ち出て來り

祐仙　これは鷄庵老、よい所でお目にかゝりました。

鷄庵　さればサ、お出でを存じたら、お誘ひ申さうもの。

祐仙　この間は病氣も閑ゆゑ、ぶら〳〵と、この宇治のほとりへぶらつきに出たところサ。

鷄庵　然らば川端を、夕方まで御同道。

祐仙　マア〳〵あの床几へ。

ト右の唄にて兩人床几へ腰をかける。鷄庵こなしあつて

鷄庵　サテハヤ尊公には、何とも申し譯もござらぬ仕合せ。御存知の通り、病家も少ないこの鷄庵、それゆゑにお借り申した金子も段々延引、何分流行風か痲疹でも、流行る時分までお待ち下されい。

祐仙　ハテようござる。ない物を無理に取らうと申すやうな祐仙ではござらぬ。愚老も大内家のお手醫なれども、親どもが死去いたし、讓り受けた金銀が澤山ござるゆゑ、先づ當分何不足なく暮し居りますおや。同じ九州より上つて來ても、こなたの懇意に召さるゝ、菊地の浪人阿曾次郎とは、きつい違ひ。

鷄庵　そりや一口に云へるものでござらぬ。先の世によい種を蒔いてござつた上、この鷄庵などに金貸しても、催促めされぬ陰德は、誠にこの世からの生佛。

祐仙　さて、その生佛もこの頃は、戀煩ひで石佛のやうになつて居ますわいの。

鷄庵　ムウ、尊公が戀煩ひとは、とんと解せぬ。して、その先の相手は生娘にて候ふか、但し白拍子にて候ふか。

祐仙　生娘も生娘も、揚貴妃や小町から、運上を取りさうな大美人でござる。

鷄庵　してマアそれは、何者の娘でござる。

祐仙　ハテ、それが知れて居れば戀煩ひはせぬわいの。この間、開帳參りにフト見染めてから、朝夕忘れぬ娘の顏。この戀さへ叶ふ事なら、金はなんぼでも惜しまぬ。なんとその娘に逢ふ智惠はあるまいか。

鷄庵　智惠というたら何がなし、人立ち多い群集の所を、ぶらぶら歩くが上分別。

祐仙　イカサマ、この宇治などへ、螢見物などに出かけまいものでもない。

鷄庵　犬も歩けば棒に逢ふと云へば、川端をぶら〳〵見歩いたら、棒に逢ふまいものでもない。

祐仙　そんなら日の暮れぬうちに、宇治川のあたりを。

鷄庵　サ、歩きませうが、行き戻りでも大きな道。

祐仙　オツと皆までのたまふな。性を附ける前祝ひに、少少なれども。

ト紙入れより金を出しけんじ天皇。

鷄庵　ヤ、こりや二兩、受納峠の孫息子。

祐仙　見當つたらば又後で。

鷄庵　そんなら祐仙老。

祐仙　鷄庵老、隨分氣を附けて。

鷄庵　サア、ござりませ。

ト茶摘み唄にて兩人、下手へ入る。ト前の道具殘らず引いて取り、淺黃幕を切つて落す。

本舞臺、見付け奥深にして遠見宇治川の景なり、上の方丘の心にて、柳の吊り枝。舞臺前浪板、東西の花道に青葭をとりつけし浪板セリ上がる。後ろ一面に浪の張り物、手摺りのやうにして、爰に綺麗なる屋形船、一面に障子立てあり、浪の音一セイにて道具納まる。ト直ぐに獨吟になる。

〽よるべ渚のあま小船、いづく泊りと不知火の。

トこの唄のうち下の方より小船に宮城阿曾次郎、瀬田傳藏、藪野久平、着附け袴大小にて、提げ重を出し、酒盛りしながらよき所に出る。

傳藏　ヤア、彈き居るぞ〱。

久平　あの屋形船と見えるわえ。

傳藏　聲はよいが、唄が解らぬ。

久平　イカサマ、唄が聞きたうござる。

ト始終酒盛りしながら捨ゼリフよろしく、阿曾次郎、棹をさして

阿曾　アイヤ、隨分唱歌は解つてござる。あの琴歌は不知火と申して、九州菊地の秘曲にて、あの外十八段の浪返しと申す手がござる。西國にさへ彈ずる者稀れなるに、誰が傳へて、ハテ奥床しい。

傳藏　イヤモ、我れらなどは唄の事は一向なもの、咲いた櫻に駒つなぐ心なしでござる。

久平　それ〱、酒と肴で氣儘より外に存じませぬて。

傳藏　併し、あの音聲では定めて顔も美しからう。あの障子を開けて唄はいでなア。

久平　イヤ〱、障子を開けて二度悔り、思ひの外瞽女かなぞではあるまいか。

傳藏　イカサマ、さう聞くと盲目のやうに聞えまする。

阿曾　イヤ〱、あの女は瞽女ではござるまい。

兩人　そりや又なぜでござります。

阿曾　さればサ、すべて女の聲は陰聲と申せども、盲目は分けて陰なれど、あの聲は陰中に陽を含み居れば、女は女なれど、兩眼は明らかと存じられます。

傳藏　イカサマ、目明きと聞くと、一倍顔が見たうござります。

阿曾　何を仰せらるゝやら。ハヽヽヽ。

兩人　サアサア、酒に致さう。

〽かぞへんとすれば秋の風。

ト唄の切れにとまる。

ヤンヤ〱。

ト此うち酒盛りになる唄の切れにて屋根船の障子一面開く。内に母操、着流し、屋敷形にて香をきいて居る。娘深雪、振り袖にて琴を前に置き、ゆかり、あやめ、芳野、萬野、腰元にて附き添ひ居る。

ゆか 申し御寮人様、船の内もあまりお氣詰まりにござりませう。

あや ちつと川を御覧なされませい。

深雪 イヤモウ、矢ッ張り爰がよいわいなう。

芳野 其やうに仰しやらずとも、マア／＼これへ。

兩人 お出でなされませいなア。

ト無理に深雪を前へ連れ來る。此うち小舟は酒盛りしてゐる。

萬野 なんと、この景色は、どうでござりますえ。

トこれにて深雪フッと阿曾次郎を見て

深雪 ほんにマア、よい、景色ぢやわいなう。

ト風の音の鳴り物になり、舟の内の鼻紙一面に散る。此うち深雪の帽子巻き上がる。皆々恂りして、小舟の内もこなし。

傳藏 南無三方、天狗風ぢや。

深雪 アレエ。

ト舟の中へ逃げて入る。これにて障子を閉める。

久平 萬歲樂々々々。

トいろ／＼散る物を押へる。

阿曾 ハテ、怪しからぬ川風、もう鎭まりましてござる。

久平 鼻紙も殘らず散り、すんでの事、羽織を取られやうとした。

傳藏 アレ／＼、何やら空にチラ／＼飛んで居りまする。

ト皆々空を見て

久平 イヤ見事々々。

阿曾 これが彼のかまいたちと申すもので、風を巻き上げて、風なぎますれば下りるものでござる。

ト矢張り靜かな風の音にて、最前の帽子上よりちらちら舞ひ下がる。腰元兩人、捨ゼリフにて手を叩き、いろ／＼ある。此うち阿曾次郎、片手にて棹をさし、片手に扇を持ち、そろ／＼と船を出す。此うち深雪、障子を開け窺つて居る。この時帽子は川の中へ落ちようとする。阿曾次郎、程よく扇にて受けとめる。

傳久 イヤ見事々々。

ト褒める。この時小舟は屋形船の際へ行きとまる。

深雪 オツト當るぞ／＼。

ト阿曾次郎帽子を見て
阿曾　こりや帽子と見えます。
腰元　アヽ申し。
ト腰元四人を阿曾次郎見て
阿曾　これはこなた衆のでござるか。
ゆか　ハイ、私しの所の、御寮人樣のでござります。
阿曾　それは幸ひ、納めて置かつしやれ。
ト扇に帽子を載せて出す。
あや　これはマア、ようお取りなされて下さりました。今の樣子では、ナウ、皐月さん。
葛野　サイナウ、定めてお喜びなされますわいの。
芳野　ほんに、ようお取り下さりました。
ト帽子を取つて障子の内へ入る。
久平　とてもの事にこの船を、もそつと其方の方へやつてはどうでござる。
傳藏　それ〳〵、あの船の前へ向けたらようござらう。
阿曾　アイヤ〳〵、これでは餘所の船のお邪魔になれば、この船を遠ざけるがようござらう。
ト棹をさし、戻さうとする所へ船の障子を引拔く。
腰元　アヽ、申し〳〵、ちよつとお待ち下さりませ。
傳藏　コレ〳〵、船を待てと云はれまする。
久平　サア〳〵、お扣へなされぬか。ドレ〳〵。
ト久平入り替つて
御用と仰せらるゝは。
あや　イヤ、此方の主人の申されますには、只今帽子をお取り下されし御深切の段、ちよつとお目にかゝりましてお禮申したう存じますれば
ゆか　さもしき小筒もお慰み旁々、何卒此方の舟へお出でなされまするやう、どうぞお願ひ申しまする。
ト傳藏久平こなし。
阿曾　これは〳〵御挨拶忝なうござりますれど、女中ばかりのお船に、同席いたすは不躾にござれば、この儀は御容赦下されい。
傳藏　これサ先生、そりや何事でござる。願つてもない幸ひなれば。
久平　マア〳〵、あれへござるがよろしうござる。
阿曾　イヤ、男女七歳にして席を同じうせずと申す事もござれば。
傳藏　ハテ、左樣ではござれど、今日一日は學者を打ッちやつて。

久平　グッと碎けるがようござらう。
阿曾　これは又、何事を仰せらるゝ。イヤナニ女中方、よろしくお斷わり申して下されい。
ゆか　左樣なら、あなた方をお願ひ申して、口上を申しておもらひ申しませう。
芳野　それがよいわいの。サア申しあなた方、どうぞちよつとお出でなされまして。
葛野　只今の通り仰しやつて下さりませ。
傳久　サア、私しどもは。
ト阿曾次郎へ氣兼のこなし。
四人　イエイエ、マア〳〵ちよつとでござります。
ト無理に引ッ張るこなし。
傳久　然らば我れ〳〵名代に。
腰元　サア〳〵、お出でなされませ。
ト無理に引ッ張り兩人上へ上がる。
阿曾　左樣なら拙者は、川下へ船を下げて。
ト棹をさしにかゝる。母操、前へ出て
操　ア、、モシ〳〵、マア〳〵お待ちなされませ。先程より女子どもに承りましたれど、申さば遊興の場所、只管これへお出でなされますやう。

阿曾　イヤ、その儀はそれなる御兩所に、お聞き下され。
トまた舟を下げようとするを、傳藏久平あわてゝ止め
傳藏　ドッコイ、我れ〳〵二人を人質に置き、船を下げようとはあまりでござる。
久平　折角の仰せなれば、マア〳〵、これへお出でなされい。
ト無理に手を取る。
阿曾　イヤ〳〵拙者は。
皆々　ハテサテ、マアお出でなさるがようござる。
トかすめたる遊山船の鳴り物になり、皆々無理に阿曾次郎を連れて舟の內へ入る。
腰元　マア〳〵、これへお出でなされませ。
ト上の方へ進める。此うち深雪こなし。
阿曾　イヤ〳〵、矢張り此まゝ。
操　それでは却つて惡うござります。マア〳〵平に。
阿曾　左やうなら御免。
ト三人よろしく上へ並ぶ。操、深雪、腰元、下の方へ並ぶ。
イヤモウ、お構ひ下さるな。達ての招きゆゑ推參仕

りましたが、誠に存じがけないおもてなしにあづかり、
忝なき仕合せにござりまする。
操　ほんに先程は娘が帽子を、お取り下されまして、有り
難うござりまする。コレ、お禮を。
深雪　有り難うござりまする。
　ト恥かしきこなし。
阿曾　これは〳〵御挨拶、痛み入りまする。
操　持ち合せましたる小筒も荒してお呼立て申し、なん
の風情もござりませねど、先づお氣晴しに、一つお上が
りなされて下さりませ。
　ト杯を阿曾次郎にさす。
阿曾　これはお杯、下されまするでござりませう。
　ト杯取り上げ、阿曾次郎呑んで
このお杯は久平どのへ。
久平　これは忝ない。
傳藏　その次は拙者に廻さつしやれ。
久平　ハテ忙しない。
　ト久平飲んで、此うち深雪、阿曾次郎にこなしあつて
ゆかりに囁く。ゆかり側の扇を取つて深雪へ渡す、深
雪、扇へ歌を書きゆかりに渡す。ゆかり、阿曾次郎の
側へソツと置く。
お上りなされいでも、先づこれは御返杯。
阿曾　頂戴仕らう。
　ト杯を取つて呑み、操深雪へこなしあつて傳藏にさす。
傳藏呑んで。
傳藏　憚りながら。
　ト腰元へさす。各々捨ぜリフによろしく、此うち阿曾
次郎、扇を取つて使つてゐる。
久平　なんと小舟と違ひ、氣が晴れ〳〵と致したではござ
らぬか。
阿曾　成る程、諸國に名所もござれど、山城の宇治川は、
取分け名所も多く、川の景色は繪に描きましたやうな風
情。なんと御兩所、絶景ではござらぬか。
　ト云ひながらフト扇を見てこなしあつて
「梅が香をこむる霞の絶間より漏れて匂ふ鶯の聲。」こり
や拙者の扇。手蹟の見事さと云ひ歌の優しさ。こりやい
つの間に。
芳野　申し、そりや御家人樣でござりますわいなア。
阿曾　左やうならばこれが。
操　ハイ、これはマア娘とした事が、あなたのお扇子に。

大方取違へましてがなござりませう。お免しなされて下さりませ。

阿曾　これは〱御挨拶、痛みいりまする。

傳藏　どうぞ、ならう事なら我れ〱にも。

阿曾　イヤ、それは格別、先程あれにて承りました爪音こそ、あれは筑紫の松浦檢校が手を附けましたる、不知火と申す調べにて、かゝる秘曲は都といへど、知る人稀れなるに、何國のお方でござりまするか。卒爾ながら承りたうござります。

操　これは、お尋ねにあづかり、お恥かしう存じます。申すに名もない者ども、お明し申すは又折もござりませう。あなたこそ、よしあるお方と見受けました。何卒お名をお聞かせ下されませうなら、有り難う存じます。

阿曾　ア、イヤ、私し儀は西國方の浪人、をこがましう名乘りますやうな者でもござりませぬが、兎角に律の調べを好みまする。それにつけて菊地家には、菊の栞と申す秘曲がござる由、近頃馴れ馴れしき申しやうながら、この曲をお聞かせ下されませうならば、喜ばしう存じまする。

操　これはマア、詳しう御存じ。その唄は娘がよう覺えて居りまする。最前のお禮に、彈かせてお聽かせ申すでござりませう。ナウ娘。

ト深雪、阿曾次郎へ見惚れ、うつとりして居る。

コレ娘、コレ、コレイナウ。

ト深雪、悄りして

深雪　アイ。

操　コレ、あなたの御所望ぢや程に、菊の栞をお聽かせ申しやいなう。

深雪　イエわたしや。

操　サア、お聽かせ申しやいなう。

深雪　お恥かしうござりますわいなア。

トこれにて操、阿曾次郎と顏見合せ

操　ホヽヽヽ。

阿曾　ハヽヽヽヽ。

ト此うち深雪、扇を出してあやめに囁く。

あやめ　申し、あなた樣にはこの扇へ、何なりともお書きなされて下さりませと、お願ひでござります。

阿曾　イヤモウ、拙者は筆と申しては不風雅でござれば、この儀は平に御免下されい。

傳藏　ハヽヽヽ、我れらが申すやうな儀を仰せらるる。

久平　見事な御手蹟で、ツイ何なりと。
蔦野　一筆是非にお願ひ申しまする。
阿曾　これは一入困り入つた事。
　ト扇を取つて開き
　ムウ、この扇面には一輪の蕣。
　ト筆を取る。操こなしあつて
操　ほんにマア、先刻にからお話しばかり致して、あなた方には、さぞ御退屈にござりませう。コレ、御酒をあげてたも。
ゆか　ハイ〳〵、サア、お一つ上がりませ。
傳藏　左樣なら、も一つ下されうか。
　トまた酒を呑む。此うち阿曾次郎、件の扇にサラ〳〵と書き
阿曾　これはお扇子をよごしました、
　ト深雪ちよつと見て操へ渡す。
操　「露の干ぬ間の蕣に、照らす日影のつれなさに、あはれ一村雨のはら〳〵と降れかし。」ほんにマア、情のこもりしこの御作意。
阿曾　何卒只今申した菊の栞を。
傳藏　イヤ、それよりは御作意の、蕣の歌に手を附けたらば。
久平　イカサマ、こりや面白うござらう。
阿曾　幸ひ菊の栞の調子にて。
傳藏　いづれ一節お頼み申す。
皆々　サア所望ぢや、所望ぢや。
　ト深雪恥かしきこなしにて、琴にかゝる事よろしく。
〽露の干ぬ間の蕣に、照らす日影のつれなさに、あはれ一村雨の、はら〳〵と降れかし。
　ト此うち皆々酒盛りして居る。東の揚げ幕より、以前の祐仙、うそ〳〵として出て來る。下手より鷄庵出て行き合ひ、東の假花道にて
祐仙　オヽ、鷄庵か。
鷄庵　祐仙老。
祐仙　兎角娘に逢はぬわいの。
鷄庵　日が暮れかゝつたら猶の事。
祐仙　どうぞ逢ひたいものぢやが。
鷄庵　氣をつけてござりませ。
　ト行き違ひ、鷄庵は舞臺の方、祐仙は東の揚げ幕へ入る。唄切れる。
皆々　やんや〳〵。

トこれにて入相の鐘鳴る。

阿曾　アリヤもう入相、日が暮れまして、女中と同船は人の思惑。

傳藏　ハテ、これからが螢の最中。

腰元　まそつとこれにお出でなされませ。

阿曾　イヤ、御縁もござらば、また御意得まするでござりまする。

ト操、阿曾次郎、捨ゼリフよろしく、深雪、蔦野に囁く。蔦野、心得て硯と紙とを持ち傳藏に聞く。

傳藏　名か。ムウ、よし〳〵。

ト此うち久平は先へ小舟へ乘り、傳藏を見て

久平　傳藏どの、何をなさるゝ。

傳藏　拙者は只今無心を書いて居りまする。

ト書きつけて渡す。蔦野、深雪へ渡す。

阿曾　サア〳〵傳藏どの。

傳藏　ア、大分食べ醉つた。

トひよろ〳〵とする。

阿曾　これはしたり、まづ〳〵。

ト無理に小舟へ下ろす。

操　なんの風情もござりませぬに、お隙を取らしまして、お氣の毒に存じまする。

阿曾　これは〳〵御挨拶。

操　苦しからずば今暫らく。ナウ娘。

深雪　アイ。

ト恥かしきこなし。

阿曾　アイヤ、お暇申しまする。

深雪　そんならどうでも。

阿曾　御縁もござらば。

腰元　ア、申し。

阿曾　おさらばでござります。

ト以前の鳴り物にて阿曾次郎、棹をさし、久平傳藏は醉ひたるこなし。この舟花道へ入る。舞臺皆々後見送り、うつとりとして居る深雪へ、腰元兩人。

腰元　御寮人樣。

ト深雪、矢張りうつとりして居る。

申し、申し。

操　コレ娘。

ト操、深雪の脊を扇にてちよつと打つ。これにて深雪恟りして、持ちたる扇を落して心付き、取り上げ顏にあてるを、木の頭。操、思ひ入れ。腰元本意なきこな

し、双方よろしく。

ひやうし幕

二　幕　目　明石の浦船別れの場

役名 ―宮城阿曾次郎。秋月娘、深雪。腰元、ゆかり。同、あやめ。同、芳野。奴、關助。座頭、竹市。

本舞臺、見附け奥深に浪幕、舞臺前一面に浪幕、上の方に元船、下手に百石程の船、兩方より側へ寄せて兩方とも苫かけてあり、日覆より月下ろし、すべて明石の浦風待ちの體。浪の音にて、幕明く。直ぐに淨瑠璃。兩床の掛合ひ。

〽晴れて行くへも播磨潟、一夜明石の浦がゝり、苫をならべし舟もやひ、頃さへ秋の月滿ちて、爰ぞ名に負ふ秋月の、娘深雪は過しより、積る思ひのかこち顏、何がな心慰めの、腰元どもが寄りこぞり。

ト淨瑠璃のうち苫を上げると、内に深雪、短檠をかざし、歌書など讀んで居る。腰元三人、侍ひ附きて居て。

ゆか　アレ／＼、見やしやんせ。向うの方が淡路島、こちらに見ゆるが舞子の濱、夜でさへこの景色。ほんに晝とつくりと眺めたら、よい慰みでござんせう。

あや　これにつけても辛氣なは、御寮人様のお顏もち。

芳野　いろ／＼とお慰め申しても、お心が浮かぬので、困つた事ではござんせぬか。

侍ひ　イヤモ、それゆゑに身共が心配、この度御主人弓之助様御歸國のところ、大坂よりの御病氣にて、陸路をお下り、母御操さまにも引き續いてお立ち。荷物も殘らず積み入れ、深雪さまを預かり下る船中にて、もしお煩ひでも出ては、我れ／＼が不調法。日頃お氣に入りのおてまへ達、隨分お諫め申しておくりやれ。

あや　申しお寮人様、あの月でも御覽じて、お心を浮き／＼と遊ばしませ。

〽進むる附き／＼、浮かまぬ深雪。

深雪「我が心過ぎにし方を立歸り、古き都ぞ今は戀しき」この歌は源氏の君、須磨の浦にさすらひ給ひて、都を思ひやり給ひし歌。ほんに思へば味氣ないは我が身の上。なんぼ其方衆が諫めてたもつても、なんの心が勇まうぞ

いなう。
〽打ちしめりたる苫の露、消ゆるばかりの物思ひ、知つたる中の腰元ども、
ゆか　オヽ、お道理でござります。過し宇治の螢狩、風が緣の帽子のお世話。
あや　船へお迎ひ申したる、御浪人のその立派さ。
深雪　それゆゑフッと思ひ染め、焦れ暮らす其うちに。
芳野　鷄庵が婿沙汰を、こちらも聞いて喜びしが
ゆか　思ひがけない間違ひで
深雪　どうぞま一度逢ひたいと、思うて居る間にこの迎ひ。國へ行つたその時は、一生お目にかゝらぬかと、思ひ廻せば廻す程、心の内の本意なさ、推量してたもいなう。
〽推量してとばかりにて、泣く音は浦の小夜千鳥、浪間漂ふ風情なり。
侍ひ　ヤア、これはしたり、皆寄つてお氣を慰めようとはせずに、却つて何か申し出し、猶じめ〳〵。コレ、どうぞお勇め申して具れ。
ゆか　サア、それが私しの思ひ付き、その時にお彈きなされた菊の栞を、爰で濯ふも、せめてものお心ゆかし。
皆々　そりや好い思ひ付きぢやわいなア。
侍ひ　成る程これはよいお氣慰めであらう。サア〳〵爰で、サヽ早う。
〽と進められ、流石否とも岩橋の、まだ解けやらぬ谷間の深雪、心づくしの爪琴を、月に向ひて掻きならす。
　ト腰元、深雪の前へ琴を出す。
〽絃によるてうつなぎそふ、こなたの小舟は東へと、さしのぼる月眺めんと、苫を拂うて阿曾次郎、空に見入りて獨り言。
阿曾　アヽ、誠や同じ月とは云ひながら、所に依つてこれを賞す。信濃に更科近江には石山、爰も名におふ明石の浦、幸ひの船がかり、思はぬ鬱散。ハテ、心凉しき風情ぢやなア。これにつけても思ひ出すは故郷の空、兄駒澤主膳どのには不慮の御最期、心に望まぬ家督の仰せも、兄の横死の實否を糺し、後室のお賴み、江戸表へ立ち歸り、若殿治部之助さまをお迎へ申し、これを功に正三郎が跡目の願ひ。佞人どもを退けんがこの身の望み。これはしたり、沖中とは云へど他聞もあり。
　トあたりへこなし。
ハテ、一人の眺めぢやなア。
〽心ゆるまぬ弓張の、月の餘念もなき目の座頭、聲をし

るべに探り出で。

　ト竹市、座頭の拵らへにて出て來る。

竹市　申し阿曾次郎さま、それにござりまするか。

阿曾　オヽ竹市どの、危ないぞや。

竹市　イエ〳〵、大丈夫でござりまする。

　ト探りよつて

誠に危ないと云へば私しの身の上。この度旦那衆のお庇で都へ上り、參る道々にて護摩の灰につけられまして、アヽ斯う申すうちも震へが出ますやうな危ない事。所をあなたのお庇を持ちましてやうやう遁がれ、此やうに室から一緒に便船して下さるお心ざし、なんとお禮を申しませうやら。

阿曾　なんの〳〵、弱きを救ふは武士の習ひ、禮に及ぶ事ではない。

竹市　イエ〳〵、それでも命の親。

阿曾　ハテ、ようござるわいの。

竹市　有り難うござります。

〽座頭の禮の子期伯牙、それにはあらねど美妙の爪音、思はずはつと心耳を濟まし。

　ト琴の音に氣を附けるこなし。

阿曾　アヽ、隣りの舟にも、お仲間が乘つて居らるゝやら、あの爪音。

竹市　ほんに、こりや妙手でござりまする。

　ト阿曾次郎こなしあつて

阿曾　あの爪音は菊の栞、菊地のお家より外に稀れなるあの秘曲。

竹市　イエ〳〵、筑紫では專ら流行りまして、我れ〳〵風情の者までも、彈き覺えた菊の栞。お慰みにちよつとお聽かせ申しませうか。

阿曾　それは幸ひ、貴公のお手許承はらうか。

竹市　せめてお伽を申すがお禮。さらば一曲調べませうか。

〽どれ一曲と三味線に、合す調子も浪返し〽舟を隔ての連れ彈きと。

　ト竹市、三味線にかゝる。

〽菊の栞の端手唱歌。

〽こなたの船には娘の深雪、それと聞くより不審顏。

　トこの淨瑠璃のうち竹市、琴に合はせて三味線を彈く。

　深雪こなし。

深雪　アレ、隣りの三味線も矢ッ張り菊の栞、思ひも依ら

ぬ連れ弾きは、互ひに想ふ想夫戀。これにつけても思ひ出す。

ト扇を出してこなし。

〽戀しゆかしにその人の、もしやと思ふ娘氣の、見やる目先に思はずふつと。

ト深雪こなしあつて阿曾次郎と顔見合はせ

深雪　ヤ、あなたは。

ト行かうとするを皆々留めて

皆々　これはしたり、お危なうござります。

深雪　ほんに思ひがけないと云はうか、夢ではないかいなア。

皆々　これは又怪しからぬ。マア〳〵、こちらへござりませ。

深雪　フム、矢ツ張りあなたぢやわいなう。

ゆか　これはしたり、夜露が當るとお身の毒。

皆々　サア、こちらへござりませ。

〽サア〳〵こちへと皆々が、無理に連れ立ち船の内へ後に心はひく撥の、撥の糸や三味線の、どうなる事と是非もなく、なんと唱歌や簾の扇、目あては小舟ばつたりと、落ちしはなんぞと取る隙に〽打ちつれてこそ入りにけり。

ト此うち深雪、阿曾次郎の方へ扇を投げる。阿曾次郎取り上げる。皆々深雪を苫の蔭へ連れて入る。阿曾次郎、いろ〳〵と透かし見て、

阿曾　ハヽア、大船より女中方が取落したものと見える。

〽露けき繪面蕣は。

こりやコレいつぞや、宇治で書いたる蕣の畫賛。

竹市　エ。

阿曾　イヤ、朝嵐には船を出すであらう。こなたは先へ休まつしやれ。

竹市　左様ならお先へ臥りますでござりませう。あなたももう休みなされませ。ア、、明けても暮れても目を塞いで居ながら、寝るといふもをかしなもの。左様なら横になりますでござりませう。

〽竹市は探り〳〵て入りにける。

ト竹市苫の内へ入る。

阿曾　ハテ、どうしてこの扇が、思はず爰で我が手に入りしは、合點のゆかぬ。

〽思案に月も雲隠れ、心も空に娘の深雪、常には細き娘氣も、思ひ詰めては一筋に、忍び出でたる船櫓、透し眺

めて。
ト深雪、出て來り
深雪　申し、阿曾次郎さま。
阿曾　身が名を呼びしこなた樣は。
深雪　いつぞや宇治でお目にかゝりし。
阿曾　ムウ。すりやその時に思はずも。
深雪　帽子をお取り下されました
阿曾　その息女がどうして爰へ。
深雪　これには段々深い樣子の、マア何よりはあなたはど
うして。
〽飛び立つ心〽危なやと手をさしのべて〽ひつたりと、
いだき月影〽苫船に〽折しも晴るゝ〽むら雲の〽空にも
粹や〽通すらん。
ト阿曾次郎、手を取り下ろす。
阿曾　ても思ひがけない、していづれへお越しなるぞ。
深雪　阿曾次郎さま、あなたはお胴慾でござりまするな
ア。
阿曾　これはしたり、この阿曾次郎、お恨み受ける覺えは
ござらぬ。
深雪　サア、それがあなたの御胴慾。いつぞや宇治でお目
にかゝり、恥かしい事ながら、思ひ染めても母さんの手
前、本意ないその場のお別れに、聞いたあなたの御名
前。
〽内へ歸れば父さんが、殿御持たすと云はしやんす。
一旦見染めたあなたをのけ、外に殿御は持つまいと、思
うて暮す其うち、鷄庵さまといふお人が、詳しいあなた
のお話しに、父さんは御存じなけれど、わたしが嬉しさ、
月待ちの折りから、あなたのお出と聞き、待ちこがれて
居りましたに、あなたと僞はり似ても似つかぬお人のお
出で、わたしの悔り父樣のお腹立ち。その日暮れ方誠の
あなたのお出なれど、父樣の不興のお詞。その時お別れ
申してより、どうぞま一度お目にかゝつてこの譯をと、
思ふ心の屆いてや、お懷かしうござります。
〽縋り歎くぞ道理なり。
阿曾　ハテサテ、それは思ひも依らぬ事でござつた。いつ
ぞや宇治でお別れ申してより、鷄庵さまを以て度々のお
招き、併し緣邊の儀は少しも存ぜず、ところに少と仔細
あつて他國仕るゆゑ何かの御禮。又はお暇乞ひに參り
しが、何か不興の御挨拶、合點ゆかぬが心せき、其まゝ
出立いたせしが、秋月氏の御息女と、疾にも存じて居つ

たれば、又いたし方もあるべきに、それは格別、御兩親へも何かの御禮。

深雪　父様も母様も、あの船には居りませぬ。

阿曾　して女儀ばかり、只お一人にてこの旅路は。

深雪　サア、父様も母様も、先へお下り遊ばして、わたしを後に殘し置きしが、急に下せとのお使りゆゑ、是非なく京地を立ちましたが、國へ歸ると父様が、殿御持たすと仰しやるけれど、一旦思ひ染めたあなたをのけ、外に殿御を持つ心はござりませぬ。幸ひ爰でお目にかゝりましたは、神佛のお引き合せ。わたしと一所にあの船へお乘りなされて、國へ歸つて父様に、お逢ひなされて下さりませ。

阿曾　サア、そのお心は嬉しけれど、娶るには必ず媒介あり、殊に某は、この度鎌倉のお使ひ、首尾よく仕負ほせなば、表向きより媒介を以て申し入れん。それまでは隨分御無事で、サア、早う船へお歸りなされませ。

深雪　そんならあなたと一緒に、お連れなされて下さりませ。

阿曾　ハテ、それでは親御の手前。

深雪　そんなら、わたしの願ひは叶ひませぬかえ。

阿曾　サア、只今からと申す譯にも。

深雪　さうぢや、南無阿彌陀佛。

〽思ひ切つたる覺悟の體。

阿曾　これはしたり、早まるまい。

深雪　それぢやと云うて。

ト振り切らうとする。

阿曾　これは又短慮千萬、いま入水なす時は、兩親へ不孝になるがや。

深雪　そんなら連れて退いて下さりますか。

阿曾　サア、それは。

深雪　ならぬは矢ツ張り。

阿曾　ぢやと申して。

深雪　イエ〳〵、わたしや死にたい、死にたうござります。

阿曾　すりや某が得心なくば、どうあつても。

深雪　なんの生きて居りませう。どうぞ願ひを叶へて下さりませ。

ト縋りつく。阿曾次郎思ひ入れ。

阿曾　是非に及ばぬ、叶へて進ぜう。

深雪　そんならあなたと御一緒に。

阿曾　義を立つる時には、秋月氏の御愛子を見殺すに似たり。これも一つは不仁の至り。

深雪　エヽ、嬉しうござります。

阿曾　さはさりながら御兩親の、お嘆きなきやう、某と立退きしと、一紙を殘して。

深雪　そんならわたしは委しい譯を。

阿曾　隨分人目に立たぬやう。

深雪　必らず待つて下さりませ。

阿曾　一旦の詞は金鐵。サア早う。

深雪　アイ。

〽あいと返事も愛嬌の、露重げなる苫船へ、いそ〳〵立つて入りにけり。

ト苫船の蔭へ入る。

〽後見すまして阿曾次郎、溜息ほつと月隠れ。

トこの時月を引き上げる。

阿曾　思ひがけない深雪どのゝ心ざし、この場で否むその時は、我れゆゑ命捨てたりと、風聞あつては云ひ譯なし。一先づこの場を連れのいて、九州表へ飛脚を以て。さうぢやさうぢや。

〽思案は胸に碇綱、露の命の風ふせぐ、苫押し分けて入りにけり。

ト阿曾次郎入る。

〽時分はよしと惡者ども、苫脇より窺ひ出で、合圖の呼子を吹き立つれば、小舟早めて押し來る。互ひに何か囁き合ひ、元の所へ忍び入る、折から向うに關助が、逃げ來る惡者遁がさじと、息を切つて馳せ來り。

ト關助と惡者、一卷を奪ひ合ひながら出て來り、ちよつと入れ替つて、

關助　大切な預かりの一卷、怪我せぬうちに渡してしまへ。

惡者　折角手に入るこの品を、うぬらに取られてつまるものか。

關助　何をうぬが。

ト又ちよつと立廻つてキッと見得。この時阿曾次郎、苫船より出て來り、關助と顏見合せる。

ヤ旦那樣か、お尋ね申しましたわい。

阿曾　オ、關助か。

トこの時惡者窺ひ出て

二人　阿曾次郎觀念。

〽打つてかゝるを身を交し、裾を拂へばこなたも曲者、

さらはさせじと双方より、岩も砕けと打ち込む刃物を、しつかと留めて動かせず。

〽深雪は何かと調へて、又も櫓に伸び上り。

ト深雪出て

深雪　阿曾次郎さま。

阿曾　深雪どのか。

深雪　よう待つて居て下さりました。

トこれより又立廻りになる。

〽乗り移らんとする所へ。

大勢　風が直つた。船を出すぞ〱。

ト方々にて云ふ、立廻りのうち船頭一人、水を潜つて逃げる。阿曾次郎、悪者を後へ打ち込む。この時大船は帆を十分に揚げ、この船を斜に段々と奥へ引く。深雪、氣を揉むこなし。また悪者、阿曾次郎にかゝるを見事に切り込む。途端阿曾次郎尻餅をつく。この時竹市出てかゞりつくを押へる。小べりへ手をかける。木の頭、刀を拭き海を見込む。

〽後白浪とぞ。

ト三重にて双方よろしく。

幕

大詰　島田戎屋の場　大井川の場

役名——駒澤次郎左衛門　實ハ宮城阿曾次郎。岩代瀧太。瞽女、朝顔　實ハ深雪。戎屋徳右衛門。奴關助。坂田勇藏。出來島段平。蛇遣ひ蛇皮六。番頭喜助。女郎おこん。同、おとら。同、おかつ。奴橘平。

本舞臺三間の間、常足、本陣表かゝり、講中札いろいろ掛けあり、見付け赤壁、駄荷の書割り、上手障子屋體、下手板塀、爰に御消宿戎屋と記し、これより下手本陣門の書割り、この間出入りあり、よき所に大内家中駒澤次郎左衛門、岩代瀧太と記せし立て札。爰に戎屋の抱へ女郎おこん、おとら、おかつ三人、いづれも女郎の形、奴關助、外に中間三人、雲助四人とせり合うて居る。驛路入り馬士唄にて幕明く。

雲一　コレ〱親方、興津から爰までの道、一本の酒手はお定まり。

雲二　お大名であらうが商人であらうが、馬に乘つたら酒手は取らア。

四人　酒手を下せえ〳〵。

關助　ハテ、わいらが興津から、酒手なしで乘せようと云つたゆゑ、廉いものだと銘々乘つたが。

可內　オヽ、この可內も土手平も、乘つたゞけは錢を拂つた。

中間　云ひ分はねえ筈を、つけ上りのした馬士ども。

中三　酒手を寄越せと惡口雜言、思へば〳〵慮外な奴め。

雲二　何も慮外云つた覺えはねえ。たかゞ酒手を取らう、やるめえとのいさくさだ。

雲四　ハテ、四も五もいらねえ。酒手を貰ふかこの首をやるか、親方、片をつけてくんねえな。

奴皆　云はせておけば法外な奴。

雲一　なんだ切る氣か。道中の雲助は、豆腐や西瓜のやうに造作なく切れねえぞ。なんだ〳〵。

トきつとなるを關助なだめる。

雲二　びく〳〵するな、駄折助め。二本差しが怖くつては田樂は食はれねえぞ。

皆々　サア、切つてもらへ〳〵。

關助　事を無難に濟まさうと、云はして置けばさま〳〵の出放題。もう料簡がならぬわい。

ト双方また立ちかゝる。馬士頭になり、戎屋徳右衛門、やつし羽織の拵らへにて、下手より出て來り、この中へ入る。

徳右　これはしたり、マア〳〵、お靜まりなされませ。私しが惡うは計らひませぬ。お腹が立たうが、マアマア御料簡なされませ。

關助　さう云ふ貴樣は誰れぢや。

徳右　私しは本陣、戎屋徳右衛門でざざりまする。サアサアあなた方は御尤もでござりますが、相手が惡うござります。マア〳〵、お靜まり下さりませ。ヤイ雲助ども。

四人　ヘイ。

ト徳右衛門を見て悄げるこなし。

徳右　わいらは何をやかましく云ふのだ。此方の大事なお客樣に過言を吐くと、海道筋を封じるぞよ。

四人　ヘエ。

ト皆々頭をかく

奴皆　ぢやに依つて。

トおこつくを徳右衛門とめて

徳右　サア〱、ようござります。道中で弱身を見せると、お國の名折れと、思し召す所は御尤もでござります。

雲一　コレ〱親方、こちとらの譯を聞いてもらはう。客を馬に乗せて、酒手を貰ふは當り前。その酒手を彼これ云はれちやア。

雲三　さうだ〱、この島田の宿きつて、東海道を股にかける、おいら達の名折れ。

徳右　サア〱よいワ、おぬし達の云ふ事も聞えてある。

奴皆　そんなら亭主、こちとらが誤りか。

雲皆　おいら達が誤りでごんすか。

徳右　サア〱、双方ともに解つてござります。

關助　コリヤ亭主、上げたり下げたり。

奴皆　どう挨拶をするのだやい。

徳右　たかゞ貰ふのぢや。

皆々　ヤア、。

ト有り合ふ箒を取つて

徳右　おはま、錢一貫取つておぢや。

下女　ハイ〱。

ト錢緡を持ち來り徳右衞門に渡す。

徳右　ソリヤ持つて行け。

ト錢を投げ出す、皆々こなし。

あなた方がやらぬと仰しやるも意地、また此奴等が取らねばならぬと云ふも理窟。中を取つて私しが挨拶の一貫文、これを取つて濟ましてもらはう。

雲一　成る程、親方が裁きは尤もだ。一貫では足らねども、徳右衞門様の挨拶、これで濟ましてやれ。

三人　ハイ親方、有り難うございます。

ト皆々捨ぜりふにてわや〱云うて下座へ入る。

關助　コリヤ御亭主、あの島目を其許にやらしては。

徳右　ハテ、ようござりまする。彼奴等を相手にするは、かつたいに棒打ち。打ッちやつて、奥で御休息なされませ。

かつ　ほんに、どうなる事と思つたに、旦那さんのお裁きで、

こん　早速埒があいて、おめでたう存じます。

とら　誰れぢやと思ふ、戎屋の徳右衞門は男でごんす。

徳右　時に、あなた方は御休息なされませ。

關助　如何にもさう致さう。そんなら御亭主。

徳右　ドレ、御案内いたしませう。

ト馬士唄になり、徳右衛門先に關助、奴三人附いて奥へ入る、女形殘り

かつ　なんと皆さん、どうで今夜はやかましからうぞえ。

こん　サア、そのやかましいで思ひ出した。アノ此方のやかまし屋の喜助どんが、アノ瞽女の朝顔を附けつ廻しつ。

とら　それ〳〵、この間も道中で捕へて、手を合せての無理口說き。

かつ　これはしたり。また其やうな蔭口。喜助どんが聞かんしたら、大抵の事ぢやあるまいぞえ。

とら　それでも、わたしらが聞いて居るとも知らず、たつた一度、それが嫌なら口々なりと、袂を捕へて吸ひ付いたり、呆れて物が云はれぬわえ。ほんに厚皮と云はうか、じんばり男と云はうか。

ト此うち宿引喜助、番頭の形にて窺ひ居る。

喜助　そりや誰れが。

とら　アノ宿引の喜助づらが。

ト顏を見て悔りして

三人　ヤア、お前は喜助どん。

喜助　なんだ、おれが尻引出すと、飽きもせぬ燒もち。朝顏に惚れたがなんぢや、彼奴に男がなけりや、おれも女房はない。すりや互ひに妻なし夫なし、連立つて乞食しても、わいらに三文も無心云つた事はない。あまりガヤガヤとかげ口きゝアがるな。アタ忌々しい。コレ、お客が御膳前だ。臺所へ行つて手傳へ。

三人　アイ。

喜助　行けやい。エヽ、うせうと云ふに。

三人　オヽ、怖。

ト三人奥へ入る。

喜助　エヽ、忌々しい。帳など附けて置かう。

ト喜助、帳合にかゝる。四つ竹節、錫杖の音になり、花道より蛇皮六、蛇を遣ひながら出て來り

蛇皮　御當地にては長虫、常陸の國では山鰻、これわいさで、どつこいしよ御めんよう。彼處の門へ立つと、蜂拂ふやうに吐かし居る。忌々しい婢めだ。

ト此やうな事云ひながら本舞臺へ來る。

ヤア、さて御當地にては長虫、常陸の國では山鰻、まづ最初お目にかけまするが。

喜助　通れ〳〵、帳を附けて居て手がふさがつて居る。

蛇皮　ハテ、どこでも惡い受けぢや。これぢやア蛇遣ひも

商賣替へと出かけざアなるめえ。

ト行かうとするを喜助見て

喜助　コリヤ〳〵、てめえは蛇皮六ぢやアねえか。

蛇皮　オヽ、喜助さん見知り越しに通れとは、胴慾な人だぜ。

喜助　われと知らぬゆゑ通れと云つたのだ。料簡さつせい料簡さつせい。

蛇皮　時にこなさん、何やらおれに頼みたいと云はしつたが。

喜助　われを見掛けて頼むと云つたは、今宵の泊り客、岩代瀧太さまのお頼み。

ト兩人あたりを見て小聲になつて

相役の駒澤次郎左衞門といふ人を、しくぢらさねば御分地の大學さまが大望の妨げ。又瀧太さまの出世の邪魔。そこでその次郎左衞門が預かつて居らるゝお納戸金五百兩は、出來島段平といふ人が盗み取つて、おれに渡して置かしやつたが、持ちつけぬ大枚の金、隱し所に困つたてや。

蛇皮　さうしてお前、五百兩の大金は、どこへ埋めた。

喜助　通例の所は古めかしいと、人の氣の附かねえやうに、奥座敷の釣花活へ隱して、上へ花まで生けて置いたから氣遣ひなし。

蛇皮　巧い〳〵。さうしてその分け口でも來るかえ。

喜助　そりや知れた事、割附しなくてどうするものか。

ト小判一兩出して蛇皮六へ渡す。

蛇皮　忝ない。直さま此方へ受納帖。こりやアノ五百兩の分け口がたつた一兩かえ。

喜助　ハテマア聞きやれ。勘定高い次郎左衞門、毎晩々々金の改め。是非後に金改めの時、五百兩不足と云ひたてるワ。その時にわれを盗人にして、先づ國へ連れて行くワ。その時道から逃がしてくれるワ。そこで五百兩貰うた金を茄子割り、なんと、ちつとの間盗人になつてくれまいか。

蛇皮　そりやハヤ、盗人になるまいものでもねえが、五百兩の盗人になつて、五十兩山割りとは、ちと違算用ぢやあるめえか。

喜助　そんならおれが、思案が悪いか。

蛇皮　サア、マアよく思つても見なせえ。その次郎左衞門といふ奴が短氣者で、用金の盗人詮議にも及ばぬと、討ち放されたら、廿五兩で命の釣替へ、こいつアなか〳〵

危ない仕事だ。
喜助　そんならどうしたものだしらん。
蛇皮　なんでも殺したら殺し徳、後から尻の來ぬ奴が有りさうなものだが。
喜助　イカサマナア。
蛇皮　オヽソレ、この間から爰へも來る、朝顔といふ盲目女、爰らあたりに差構ひのない宿なし、彼奴はどうだらうな。
喜助　コレサ、粗相云ふな。おれが蝶よ花よと惚れこんで居るあの女、
蛇皮　ハテサテ、何をするにも慾づく。彼奴を金の泥坊にして、殺してしまへばよいぢやアねえか。
善助　ぢやというて、あの朝顔の器量を見い。この島田宿廣しといへども、あゝいふ面は二町目の花魁にもない器量よし。
蛇皮　さうしてお前の戀は叶つたかな。
喜助　イヤモウ、いろ〳〵と口說けども得心せぬワ。
蛇皮　ソレ見なせえ。彼奴は云ひ交した男があるゆゑ、所詮お前の云ふ事は聞き入れぬ。ところで疫病の神で敵討。
喜助　オヽ出來た、委細は後に。
蛇皮　首尾よくいつたら。
喜助　五十兩は山割り。
蛇皮　喜助さん。
喜助　蛇皮六、しつかりと賴んだぞよ。
蛇皮　へゝ、さす物ぢやございやせん。
トこの時揚げ幕にて子役大勢。
大勢　朝顔ぢや〳〵。
喜助　コリヤ。
ト騷ぐ。
蛇皮　合點だ。
ト喜助は奧、蛇皮六は下手へ入る。四つ竹節になり、花道より朝顔、石竹の切繼ぎ衣裳、袖乞ひの瞽女の拵らへにて、琴を脊負ひ杖を突き出て來る。後より子役大勢附いて來る。
子一　コレ〳〵、盲目の姐さん。
子二　常住彈かんす朝顔の唄。
子三　三味線や琴が聞きたい。
子四　サア〳〵、早う彈いて聞かせて
皆々　下されいなう。

朝顏　アヽ、これは〳〵、いつもお門まで參じまする、旦那樣方のお子達。ドレ、御機嫌をそこねぬうちに、お聞かせ申しませう。

ト云ひ〳〵舞臺へ來る。この時喜助出て來り

喜助　ヤイ〳〵、イケやかましい餓鬼めらだ。早く歸りやアがれ。

子一　ヤア、戎屋の男が怒り居つた。

皆々　早く逃げろ〳〵。ワアイ〳〵。

トはやしながら下手へ入る。

喜助　エヽ、騷々しい餓鬼めらだ。

ト朝顏の側へ寄り

コレ朝顏、今日はまだ逢はぬの。マア〳〵、此方へ來やれ來やれ。

ト四つ竹の合ひ方になり、兩人眞中へ坐る。

ほんになア、目かいも見えぬが美しい事わいの。日がな一日宿中を歩き廻り、さぞ草臥れるであらうなア。コレ朝顏、爰にも長う居やるが、この近所でも何とか云ふであらうが、在郷者は油斷がならぬぞや。てんがう云うても、決して返事はしやらぬがよいぞや。どんな深味へ嵌らうも知れぬぞ。よいか〳〵。其方思ふも身を思ふぢや。コレ、うんと云つてくれる氣はあるまいか。

朝顏　これは〳〵、見る影もない私しを、有り難うござりますれど、男を持つ事ばかりは。

喜助　コレサ、さう云ふものではないものだ。おれぢやとて宿屋奉公して居れども、明日にもこの島田か金谷の內へ店を出さねばならぬ。ソレ、さうなる時はお主をと、心に錠を卸ろして置いた。コレ朝顏、うんと云ひなよ云ひなよ。

朝顏　サア、有り難うはござりますれど、斯やうに致して居りまするも、私しには云ひ號けが。

喜助　エヽ。

朝顏　サア、云ふに云はれぬ譯がござりますれば、どうぞこればかりは、御免なされて下さりませ。

喜助　ナニ、そんな野暮を云はずと、コレ朝顏。

朝顏　どうぞ御免なされて下さりませ。

喜助　それぢやアならぬと云ふのか。いゝワ、さう木で鼻を括つたやうに云はれちやア、おれも口を開けて引込んでも居られねえ。おれもナ、今まで云ふ事聞いて貰らはうと思つて、こんな物でも引ッ張らして、恩をかけて置いたぞよ。サア、應と云へばよし、否なら少しづゝ貸し

た小遣ひ錢から着せた物、算用せい。

朝顔　サア、お前樣のが御尤もでござりまするが、どうぞ。

喜助　それだから云ふ事を聞きなよ。

朝顔　サア、その儀は。

喜助　エ、面倒な、着せた物剝がうか。

朝顔　妾は往來中でござりますれば、お免しなされて下さりませ。

喜助　そんなら云ふ事聞くか。

朝顔　サアそれは。

喜助　サア。

朝顔　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

喜助　エヽ、埒のあかぬどう盲目め。どうするか見やァがれ。

ト朝顔の帶を解きにかゝる。この時蛇皮六、窺ひ出て、喜助を引退け、顔にて知らせ投げた思ひ入れ。

蛇皮　アよんやさ。

ト喜助呑み込み投げられたる思ひ入れあつて

喜助　アイタヽヽヽヽ、ヤイ蛇皮六、なんで投げた。

蛇皮　オヽ、投げたばかりぢやァねえ。四の五のと云やァ踏みのめすぞ。

喜助　なんだ踏みのめす。コレ、よう聞けよ。この女郎めは苛なむ筋があつて苛なむのだ。わりや又なんで邪魔をするのだ。

蛇皮　おれも又この朝顔は、ちと庇ふ筋があつて庇ふのだが、われが苛なむ筋を聞かうかえ。

喜助　望みなら云つて聞かさう。この女郎めは、後の月からこの宿へ來て、わいらが宿へ泊つて、引解き一つでふるつて居るを見て、おれもフッと思ふには、まんざら惡うも育たぬ奴。可愛い事だと思つて、昨日は百、今日は二百と錢を遣て情をかけ、口說いて見ても色よい返事はなし。こりやまだおれが心が屆かぬと、コレ聞けよ。この繼ぎ〳〵の着物から、帶湯もじまで、つもつて見れば六貫七百、昨夕も三百張り込んで、酒肴を買ひ調へ、口說いても三文とも思はぬ返事。其やうに嫌がる者に、おれも亦大枚の、錢を貸しちやァ置かれねえ。サア、素ッ裸になつておれに返せ。また庇ふ筋といふ返事を聞かう。どうぢやえ。

蛇皮　ムウ、そんなら貴樣、アノおめくに惚れて、六貫七

百入れ上げたのか。

喜助　商賣は宿引でも、世話をしかねぬこの喜助。

蛇皮　もし又その七貫を返したら。

喜助　ハテ、損さへせねば元々サ。

蛇皮　イヽワ、その金返さう。

喜助　アノ乞食のわれが、大枚七貫。

蛇皮　オヽ、お前も知つてる通り、賭場へ直れば、三十貫や四十貫は振り廻す蛇皮六だ。幸ひ爰に持つて居る。七貫といやアマア一兩。これで算用は濟んだぞよ。

ト吸煙草入れより百錢を出して

ソリヤ一兩。

喜助　いヽワ、一兩が戻るからは料簡してやる。エヽ、丁度よい鍔を蛇皮六め。うぬ、覺えて居ろよ。忌々しい。

ト矢張り四つ竹の合ひ方にて、思ひ入れあつて奥へ入る。この時朝顏探り寄つて

朝顏　申し蛇皮六さまとやら、馴染も薄いこの朝顏に、今の難儀をお見捨てなう、大枚のお金を立替へ下されまして、エヽ、有り難うござりまする。

ト手を合す。蛇皮六こなし

蛇皮　ハテ、禮云はんすには及ばぬ。互ひの事でござんすわい。

朝顏　でも大枚のお金を、助力なされて下さります事ぢやもの。さういふあなたのお聲は、モシ、立花鷄庵さまとは申しませなんだかえ。

蛇皮　如何にも下拙。アヽイヤ、そんな者ではない。初めて逢うた蛇遣ひ　こんな身過ぎはして居れど、正直正統なこの蛇皮六。こなたに金を助力するのも、何の由縁はなけれど、わたしはこなたによう似た娘があるゆゑ、子のやうに思はれて、見る度毎に、ハヽア痛はしい事ぢや、目かいの見えぬにとぼ〳〵と、あちらこちらの門に立つ、心根を察しると、胸が一杯になつて、汗と涙がごつちやになつて流れるわいなう。この上は煩はぬやうに、身を大切にさつしやれや。又これは、どのやう事があるまいものでもない、用意に持つてござれ。さうして何でも食べたい物買うて食はつしやれ。

ト以前の小判を出す。

朝顏　イエ〳〵、決してお心遣ひ下さりまするな。さうしてこんな事、マア〳〵そちらへ。

蛇皮　マア〳〵〳〵、入るまいけれど年寄つた者の云ふ事だ。ハテ、納めて置かつしやれ。有やうは、わしや他人

のやうには思はれぬ。さうしておりやちと用がある程に、一返り行て來るから、待つて居やんせ。

ト無理に朝顏の懷中へ金を入れる。朝顏こなし

朝顏　段々とのお志し、嬉しうござんす。けれど、これではどうも。

蛇皮　ドリヤ、行て來ようか。

ト蛇皮六、舌を出し小隱れする。朝顏、後を見送り

朝顏　落月を救ふ人の誠と、由縁もないわしに路用の金まで。エヽ、忝なうござります。それにつけても阿曾次郎さまは、何處にどうしてござるやら。エヽ、苦に色かへる濱の松風ぢやなア。

ト四つ竹の合ひ方になり、朝顏、下手へ入る。蛇皮六窺ひ出て

蛇皮　まんまと攫ませたあの金、今にも五百兩の詮議になつたら喜助どんと云ひ合はして、盜人はあの女郎。廿五兩は我れらがしめこ。イヤ待てよ。此やうな小さな事をせうより、いま喜助が云つた奧座敷の色活に、埋めてある五百兩を我れらが着服。こいつは拍子まんが直つて來たわえ。併し、どこらの花活に隱してあるかしらぬ。

ト奧へ行きかゝるを、關助出て支へる。

エヽ、悔りするわえ。

關助　ナニ悔りする。さうしてむせえ形で、貴様はなんだ。

蛇皮　おれか、おらア蛇、イヤサ、蛇遣ひの蛇皮六と云ふもんでござんす。

關助　その蛇遣ひが奧を見込んで何をする。

蛇皮　われが構つた事ぢやアねえワ。

關助　イヽヤ、この關助の目にかゝつた日にやア、滅多にこの場。

蛇皮　エ。

關助　動かすものか。

蛇皮　さう吐かしや、うぬから。

ト兩人よろしく立廻りあつて、關助、蛇皮六を押へる。この見得よろしく道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間高二重、上手網代塀、いつもの所枝折り戸、向う山水を描きし襖、二重上に岩代瀧太、袴着付け。駒澤次郎左衞門、同じく袴、下に出來島段平、坂田勇藏、半纏、ぶツ裂き羽織にて、いづれも酒盛りの體。平舞臺下手に戎屋徳右衞門、袴羽織

にて手をつかへ居る。誂らへの唄にて道具とまる。

德右　粗末なる田舍酒でござりまするが、よろしう召上つて下さりませ。

次郎　イヤモウ、叮嚀の御料理、祝着に存ずる。

瀧太　甚だ馳走で食べ過ぎたて。

勇藏　もう御酒はこれにて納めてくりやれ。

段平　我れ〳〵は一向御酒は不調法、杯さへ手に取らないワ。

德右　其やうに仰しやらずと、もう一つお上りなされませ。

瀧太　さうして何か耳かしましう、奥や中の間で唄ひ居るがありやなんだ。

德右　ヘイ、あの唄は朝顏と申しまして、年の頃は十八九の女子、可哀い事には盲目でござりまするが、いつぞやから參りまして、あの唄を琴に調べて、袖乞ひを致しまするが、根がうづ高いゆゑ專ら流行りまして、あちらの座敷こちらの座敷と、今ではこの島田で流行りッ子でござりまする。

勇藏　イヤ、成る程それは珍らしい。イヤ、御家老へ申し上げます。その女をこれへ招びよせ、朝顏の唱歌を承はりまするは、如何でござりませう。

段平　イカサマ、勇藏どのゝ仰せらるゝ通り、旅中の欝散でござれば、御家老に承はらずとも、苦しうはござりますまい。

次郎　ナニサマ、欝散とござれば、苦しうもござるまい。ナウ瀧太どの。

瀧太　左やうでござる。亭主、その朝顏とやらを、これへ呼んでくりやれ。

德右　畏こまりました。慥か勝手へ參つて居る樣子でござりました。私しが連れて參りませう。

ト下手へ入る。

段平　琴が上手で器量がよいとは、十分でござる。併し目が見えぬとは、惜しいものではござらぬか。

勇藏　どういふ身の素性か存ぜぬが、不便な者でござる。

瀧太　イヤナニ、女が來るまで、もう一獻くみませうか。

次郎　それがよくござる。

トこの時奥にて

德右　サア〳〵朝顏、早うおぢやいの。

トこれにて床の淨瑠璃になる。

〽無慘なるかな秋月の、娘深雪は身に積る、嘆きの數の

重なりて、埒失ふ目なし鳥、杖柱とも頼みてし、朝香はもろく朝露と、消え殘りたる身一つを、流石に捨ても緣先の、飛石探る足元も、危ふき木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、〽やう／＼座敷へ手をつかへ。

ト朝顏を誘ひ、德右衛門出て來り

德右　これが卽ち只今申し上げました、朝顏でござりまする。コリヤ、何も怖い事はない。サヽ、ツッと出やいなう。

朝顏　ハイ／＼。召しましたは、このお座敷でござりまするか、拙い調べもお笑ひ草、おはもじさまやと。

〽と會釋する、顏も深雪が馴れの果、一目見るより駒澤は、さてはと悔りしながらも、明けてそれとも岩代瀧太、おのが惡事の現はれに、互ひに色目覺られじと、空に紛らす煙草の煙。

德右　申し、御覽じませ、惡うも育たぬやうに見えます。なんと、いじらしいではござりませぬか。

勇藏　ハテ聞いたより好い器量。これなれば定めてその唄も、さぞかしと思はるゝ。

德右　イヤモウ、私しが申すも異なものなれど、なか／＼味をやりまする。

段平　然らば早く唄はせい。

勇藏　朝顏とやら、サア／＼早う。

兩人　所望ぢや／＼。

朝顏　ハイ／＼。

兩人　サア早く。

朝顏　ハイ。

德右　これはしたり、何を遠慮する事があつて。サア弾きや。コレ、お客は御大身様、弾いたらそれだけの事は。サヽ、早う弾きやいなう。

〽引立てる氣の弾かせたさ、厚き情は身に染みながら、思ひ廻はせば。

朝顏　淺ましい。

次郎　ヤ。

朝顏　ハイ、唄ひますでござりまする。

〽焦るゝ夫のあるぞとも、知らぬ盲目の探り手に、戀ゆゑ心つくし琴、誰れかは憂きを斗爲巾の、糸より細き指先に、差す爪さへも八橋の、やつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪しらべ。

段平　何をうぢ／＼、早う唄へ。

朝顏　ハアイ。

ト朝顔、涙ながらに琴に向ふ。
〽露の干ぬ間の朝顔に、照らす日影のつれなさに、あはれ一村雨の、はら／＼と降れかし。
勇藏　成る程、奥にて歌ふよりは又一倍。よく／＼見れば、なか／＼袖乞ひをする女とも見えぬが、これには何ぞ仔細のありさうな事なア。
段平　これサ／＼勇藏どの、あの器量で袖乞ひをするからは、なんでもいがみ根性でもあつて、親の勘當、一家親類にも、見放されたとかいふやうな事であらう。
勇藏　イヤ／＼、左やうとも見えませぬ。コリヤ女、そちや不義いたづらであらうがの。
朝顔　イエ／＼、なんのマア、左やうな事ではござりませぬ。
段平　然らば矢ッ張りいがみ根性。
德右　イヤ／＼、モシ、可愛さうに、なんのそんな事でござりませう。コリヤ／＼朝顔、何もお慰みぢや。其方がその落ぶれた事、お話し申しやいなう。
朝顔　サア、お尋ねに預かりまするもこの身の懺悔、私しも以前はよしある武士の娘、小さい時に云ひ號けの、殿御があつたとの事なれども、それはまだ東西分かぬうちの事、様子あつて、父樣は御浪人なされて都の御住居、重なる月日に人となり、フッと見染めたお方がござりまして、その殿御の後を慕うて、國を出ましたのでござります。
　ト瀧太こなしあつて
瀧太　ナニ、男の後を慕ひしとは、どういふ仔細ぢや、尋ねて見さつしやい。
段平　して、尋ぬる男といふは何者。
朝顔　見染めた殿御は御浪人。
瀧太　ヤア。
勇藏　して、その馴染めは。
朝顔　サア、その馴染めは、過ぎし卯月の中空に、都の辰巳宇治の舟、焦れよるべの螢狩。
〽思ひ染めたる戀人と、語らふ間さへ夏の夜の、短かい契りの本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ國の迎ひ。
親々に誘はれ、難波の浦を船出して、身をつくしたる。
〽憂き思ひ、泣いて明石の風待ちに、たま／＼逢ひば逢ひながら、つれなき嵐に吹き分けられ、國へ歸れば父母の。

思ひもよらぬ夫定め、立つる操を破らじと、屋敷を拔けて、數々の憂目をしのぎ都路へ、上つて聞けばその人は、東の旅と聞く悲しさ。

〽又も都を迷ひ出で、いつかは廻り逢坂の、關路を後に近江路や、みの尾張さへ定めなき、戀し〳〵に目を泣き潰し、ものゝ黑白も水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、いつの世如何なる報いにて、重ね〴〵の嘆きの數、憐れみ給へとばかりにて、聲を忍びて嘆きけり。

瀧太　エヽ、面白くもない長話しで、ほつとりと退屈した。あの女、早く歸せ〳〵。

〽早く歸せと云ふ折から、息を切らして駈け來る侍ひ。

ト　ばた〳〵になり下座より、半纏股引の侍ひ出て

侍ひ　ハッ、旦那へ申し上げまする。只今お納戸金勘定にかゝりましたるところ、金子五百兩の紛失ゆゑ早速申し上げまする。

次郎　ハテ心得ぬ、今日一日に五百兩の、大金不足いたさうやうもなし。ハテナア。

瀧太　旅行のうち金預かりは駒澤どの。

段平　見えぬとばかりにては事濟まぬ。

勇藏　但し、盜賊の仕業なるか。

德右　私しが宿で金子が失つては、本陣の名折れ。

ト　この時、喜助上手より出て

喜助　ヘイ〳〵申し上げます、その盜賊は外ぢやアござりませぬ。爰に居る女郎でござりまする。

ト　朝顏を引出す、皆々こなし

皆々　なんと。

喜助　サア、盜んだ金出してしまへ。

朝顏　コレ〳〵喜助さん、滅相な。なんのそんな事、夢にも覺えは。

喜助　ないとは云はさぬ、うぬが懷に。

ト　引きつけようとするを、德右衞門とめて

德右　コリヤ待て喜助、可哀さうに目も見えぬ者が、大枚五百兩といふ金を、どうして取らう筈がない。その上ついに奧へ通した事もないに、イヤ、こりや盜人は、あれぢやあるまい〳〵。

喜助　コレ〳〵旦那どの、其やうにお前さん、朝顏をお庇ひなされても、もう叶ひませぬ。その證據を出してお目にかけませう。

ト　無理に懷中へ手を入れ、以前の小判を出して

この一兩の金が、お尋ねなさる多の字の極印、これでご

ざりませう。

ト出す。段平取つて

段平　こりやコレ正しく殿の極印。

次郎　あと四百九十九兩の金子は、どう致した。早く白狀させい。

喜助　畏まりました。ヤイ女郎め、われ人に辛ければ人亦われに辛し。よう思ひ知つたか。この金はどうして持つて居る。サア、その譯を吐かせ、吐かさぬか。

朝顏　サア、その金は。

喜助　吐かさにや、カウ。

ト打たんとする、朝顏こなし

朝顏　マア〳〵待つて下さりませ、恩ある人の難儀と包みましたが、有やうに申しまする。その金は最前、蛇遣ひの蛇皮六さまに。

ト此の時上手にて

關助　オヽ、その盜賊、只今それへ。

ト關助、蛇皮六に繩かけ引立て出る。蛇皮六、二重の駒澤、瀧太を見て

蛇皮　ヤ、あなたは。

ト瀧太云ふなと思ひ入れ。

關助　エヽ、下に居らう。この蛇遣ひ、迂散な奴と見受けましたゆゑ、引捉ゑましてござりまする。

喜助　カウ〳〵蛇皮六、五百兩の盜賊か。さうではあるまいがの。

蛇皮　どうして〳〵、正直正道なおれが、ナニそんな事。ハイ〳〵、朝顏に相違ござりませぬ。

段平　ヤイ〳〵、蛇皮六とやら、其方に金子の疑ひかゝり居れば、覺えのない事ならば覺えないと、眞直にこの場で申し上げい。

朝顏　コレ〳〵蛇皮六さん、最前お前に貰ひました、金が紛失のお金とやら、それゆゑにこの難儀、有やうに申しました。どうぞ詫び言して下さんせいなア。

蛇皮　コレ、思ひもよらぬ事を云ふわえ。おれがいつ貴樣に金を遣つた。貴樣に一兩もやる金がありや、こんな態をして居ぬわえ。そんな覺えはないぞ。ありやみんな嘘でござりまする。

朝顏　それでも最前表にて。

蛇皮　ハヽア、こりや人違ひだな、ついに見た事もねえ女子。ハイ、私しは毛頭聊か、少しも覺えのない事でござりまする。

朝顔　それはマア、何を云はしやんすぞいなア。あれほど最前誠らしう、金を貸して下さんしたお前が、其やうな事を云はしやんして。

蛇皮　ハテ、知らぬ〳〵、覺えはない。

瀧太　盜賊は女めに極まつた。ソレ繩ぶて。

段平　ハッ。

ト段平下りて朝顔に繩打つ。

關助　その女に、なぜ繩をおかけなさるゝな。

瀧太　この女は盜賊の科極まりしゆゑ、繩かけるが何とした。

關助　イヤ、盜賊は此奴に極まる、

ト蛇皮六へ思ひ入れ。

段平　蛇皮六を盜賊と云ふ證據は。

關助　その證據と申しますは、只今その女が貰ひし金と申したら、彼奴一兩の金貸した覺えはないと、答へし詞のはし〳〵。キッと詮議相遂げなば金の在所、また相摺りの彌まで。

皆々　ヤ。

トぎつくり思ひ入れ。

關助　ハテ、知れさうなものでござる。

瀧太　イヤ、何は格別、蛇皮六は金を貸さぬといふかコレ正銘、云ひがけひろぐ憎くい女郎め。うぬ、云ひ號けを袖に致して、不義働くその罰で、今その態になり下り、盜賊までひろぐ横道者。ソレ、詮議して白狀させい。

喜助　サア女郎め、金の在所を吐かしてしまへ。

朝顔　イヽエ、覺えはござりませぬ。

喜助　ムウ、云はざアこれくらはすぞ。ほえるなよ。

德右　コレまて、どうするのぢや。

喜助　又とめさつしやるか。

德右　さればいやい、たかゞか弱いこの女、其やうにぶち打擲して、ひよつと死でもした時は、誰れを捕まへて詮議する。

喜助　エヽ。

德右　サア、それぢやに依つて、爰はマア一旦ゆるめて置いたが、よさゝうなものゝやうに存じまする。

瀧太　この上は瀧太が、金の在所云はして見せう。

次郎　アイヤ瀧太どの、お待ちなされい。

瀧太　なぜ止めさつしやる。

次郎　さればでござる。惣じて罪の疑はしきは、輕う計らふが公の道。最前より見るところ、なか〳〵あの女、盜

み致すやうな者とも見えませぬ。併し、證據は彼れが懷中より極印金の出でたる上は、コリヤ、疑ひは其方に、サ、かゝり合はせし者どもゝ、手前が存ずる旨あれば、立騷がずと下に居やれ、

瀧太　これサ〳〵駒澤どの、御自分一人承知でも、手延べにならぬ殿の用金。それだに依つてあの女。

次郎　ハテ、旅中の金子預かりはこの駒澤、事荒立てなば拙者は元より、相役方まで越度ならん。そこを思つてこの詮議、出立までに相糺し、金の員數揃ひなば、貴殿の越度と云ふではなし。いらざる事に瀧太どの、餘りお氣を揉まれぬが、却つてその身のお爲かと存じまする。

ト瀧太思ひ入り。

イヤナニ亭主と、朝顏とやらは、其方にしかと預けおく。

德右　すりや私しに。ハイ、しつかりと預かりました。

瀧太　蛇皮六は身共が預かり、キッと糺明。

次郎　アノ貴殿が。

瀧太　如何にも。

次郎　ハテナア。

喜助　ヤレ〳〵、息勢張つて草臥れた。

德右　マア、奥へござつてお靜まり。

關助　ナニサマ、出立までは間もあらう。

瀧太　蛇皮六を引立てい。

次郎　德右衞門にはその女。

德右　キッとお預かり申しまする。

〽瀧太が胸の算用違ひ、桁は外さぬ駒澤が、心あるじは朝顏を、引立てゝこそ。

ト唄になり、駒澤は朝顏へこなしあつて、瀧太は段平勇藏喜助附き添ひ、關助は蛇皮六を引立て、皆々奥へ入る。朝顏、德右衞門、後へ殘り思ひ入れあつて

德右　預かる事は預かつたが、ひよんなものではあるわい。

朝顏　此やうな身に落ぶれしゆゑ、盜みするかと人さんのお疑ひ。ほんに〳〵なんの〳〵誓文、そんなさもしい心は持ちませぬ。まだこの上に、どんな辛い身になるともいとはねど、盜人騙りと云はれるは、情ない身の上ぢやなア。

德右　オヽ尤もぢや。弱い者は歩に取らるゝと、目の見えぬ其方が、なんの五百兩の金を盜まうぞ。そりやおれがよう知つて居る。お二人のうちお一人は、どうやらお慈悲深さうなお方。お賴み申してこの縺は解いてやる。キ

ナキナせずと、おれ次第になつて居や。

朝顔 エヽ、有り難うござります。侍ひの娘が今のやうに打擲に逢ひ、如何に目かいの見えぬ者ぢやとて、覺えもない盜賊の惡名。わたしや口惜しうござります〳〵。死にたうござりますわいなア。

德右 これはしたり、今死んだら、白いか黑いかは解りもせうが、その尋ねる人には、どうして逢はれる。兎かく人は命が物種。

朝顏 それぢやと申して。

德右 ハテ、若い者といふものは。

ト朝顏を下へ据ゑる。

おれにまで泣かし居る。

ト兩人よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、中足の二重、見付け襖、上の方床の間、上下落間、建仁寺垣、植込み書割り、座敷の體。八ツの鐘にて道具納まる。

〽やゝ更け渡る秋の夜や、寢られぬまゝに駒澤は、あたり見廻し獨り言。

ト駒澤、二重上手に住ひ居る。

次郎 君が一日の情に妾が百年の命を捨つるといふ事、今まで餘所事に聞きしが今といふ今我が身にひしと當つたり、一人の妹は若殿の爲に最期をとげ、今また深雪が成れの果、袖乞ひとまでなり下り、我れを尋ぬる切なる心底、不便とは思へども、大事の役目、大望を抱へしこの身、先頃明石の浦にて逢ひたる時にも、優しき詞かけずんば、今の憂き身をさせまじきに、知らぬ事とは云ひながら、誠ある女に艱難さするも我が誤り。この年月の辛苦を語るその身より、側に聞き居る心の苦しさ、思ひ廻せば不便やなア。

〽悲嘆の涙に暮れ居けり、斯くと樣子を白張りの、襖押しあけおじやれの女。

ト女郎おとら、以前の形にて出て

とら 申し、まだお休みなされませぬか。

次郎 イヤモウ、晝は乘り物にて折々睡眠いたせば、今夜はどうか寢苦しい。サヽ、勝手へ行つて休んでたも。

とら モシ、寢苦しうてお伽がいるなら、お御足を擦りませうか。

次郎 アヽ、イヤ、それには及ばぬ。サヽ、行きや〳〵。

とら そんなら今夜も一人寢せうか、アヽ、情知らずめ

が。

〽しやべり廻つて入りにけり。

トおとらよろしくあつて奥へ入る。

次郎　ア、、時に五百兩の金の紛失。ムウ。

〽工風を凝らすその折から、何心なく亭主は立出で。

德右　これは御家老様には、まだお休みなされませぬか。

次郎　オ、德右衛門、さて〳〵今宵は大きに馳走。殊に樣樣の事が出來いたし、定めて亭主も心勞であらうな。

德右　これは〳〵結構なお詞。私しはちとあなた樣に、お願ひがござりまする。

次郎　ムウ、願ひとは何事ぢや。

德右　餘の事でもござりませぬ、最前お預かり申しました朝顏が事でござりまする。御存知られます通り目は見えず、常に奥へはやりませぬ者、なか〳〵以て盗みをしさうな女とは存じませぬ。

次郎　サ、、手前も左やう存じたゆゑ、相役どもの手にかけず、それゆゑ其許に預け申した。

ト德右衛門、横手を打つ

德右　ア、シタリ、又お侍ひ様の智恵は別なもの、町人ながら德右衛門、感心いたしました。とてもの事にあの縄を。

次郎　ハテ、解くなりとほどくなりと、おぬしの勝手次第、德右衛門、おてまへは町人に似合はぬ、人の落目を見捨てぬ深切。それについて、ちと其許に頼みたい事がある。

德右　イヤモ、あなた樣のお頼みなら、何なりとも。して、そのお頼みは。

次郎　イヤモ、外の事でもない、矢張り朝顏の事。よしある人の娘と見えるが、さて〳〵切なる志し。かけ構はぬ事ながら不便に思ふ。幸ひ持ち合はせたるこの二品、德右衛門、其方にしつかりと預ける間、朝顏に渡してくりやれ。

德右　委細畏こまりました。

ト二品手に取り

こりやマアおびたゞしいお金。その上、この袱紗包みは。

次郎　オ、、それこそは大明國秘法の目薬、甲子の年に出生せし男子の生血を以て服すれば、如何なる眼病も即座に平癒。朝顏に渡してくりやれ。

德右　これは〳〵、何から何まで、お心を籠められた下さ

れ物、朝顔に渡し、喜ばせまするでござりませう。

次郎　何かにつけて其許の世話、よきに計らうてくりやれ。

德右　畏こまりました。最早更けましたれば、お休みなされませ。

ト德右衛門、駒澤立ち上がり

次郎　ア、世の成行きとは云ひながら、我れゆゑ深雪が成れの果。

德右　やつれにやつれし朝顔が。

次郎　身の上話しも胸に釘。

德右　戀ゆゑにこそ目なし鳥。

次郎　我が良藥は與へても。

德右　何卒本腹させんにも。

次郎　只得がたきは男子の生血。

德右　一人助けて一人を殺す。

次郎　人の命は金づくにも。

德右　かゝなへ見れば我れも甲子。もしや年度を御存じあつてか。

ト兩人顏見合せ

次郎　德右衛門、まだ行きやらぬか。

德右　旦那樣。

次郎　明朝逢はう。

〽胸に一物主の心、奥の臥所へ。

ト兩人こなしよろしく、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、中足の屋臺、上手に釣花活かけてあり、すべて奥座敷の模樣、送り返しにて道具納まる。

〽こそは入りにけり、更けゆく秋の夜も淒く、庭には蟲の聲々に、鎌首もたげ蛇皮六が。

ト下手より蛇皮六窺ひ出る。床の合ひ方、蟲の音。

蛇皮　瀧太さまのお指圖で、次郎左衛門をばらしてくれいとのお頼み。待てよ。あの次郎左衛門といふ奴は、慥かに宮城阿曾次郎。あれが宮城なら、なか／＼おいら風情の手ではゆかぬ。なまなか事を仕出したら、おれが首はころり。それよりは奥へ踏ん込んで、滿座の中で恥面かかせ。オヽ、さうだ。待てよ。それよりは、とつくりと利害を說き、おれが落ぶれた難儀の事を話したら、少々は貸してくれまいものでもない。待てよ、借りたところが五兩か十兩の目腐れ金、それよりは喜助に聞いた奥座

數の釣花活に、四百五十兩どめてあるを、おれが一人着服して、直ぐに爰を隨徳寺、それがいつち好い料簡ぢや。

トあたりを見廻し、釣花活を見付け、此うち駒澤、障子を明けちよつと見る。

さては話しの釣花活、これぢやな。幸ひあたりに人目もなし、瀧太の頼みは打ッちやつて、さらばお金を。

ト二重へ上がらうとする所へ段平出て

段平　蛇皮六か。

蛇皮　アイ。

ト恟りして飛びのき、よく／＼見て

お前は最前のお侍ひ。

段平　喜助を知らぬか。

蛇皮　喜助をお尋ねなさるゝは、定めて金の事でござりませう。

段平　如何にも、金を隱し置きしは奥座敷と聞く。

蛇皮　サア、その金の在所は、知つて居ります。

段平　すりや、其方が。

蛇皮　して分け口の五十兩は、どうでござりまする。

段平　氣遣ひ致すな。五百兩盗み出だし、內四百五十兩は喜助に預け、殘り五十兩のうち、一兩は喜助に渡し、四十九兩は身共が所持する。

蛇皮　そんなら早う戴きませうかえ。

段平　そりや駒澤を立たして後の事。

蛇皮　そんなら祝ひに、一つ〆めませうか。

兩人　ハ、よい／＼／＼。

ト手を打つ、この時鶏笛になり、奥にて

ソレ、お立ちぢやぞえ。

ト上手より勇藏出る。蛇皮六下手へ隱れる。

勇藏　最早寅の上刻。

段平　出立の刻限。

勇藏　お支度がよくば參りませう。

ト奥へ云ふ。兩人奥にて

次郎　如何にも出立いたさう。

ト駒澤、瀧太、女共皆々附き添ひ出る。

瀧太　駒澤どの、出立は相成りますまい。

次郎　ムウ、拙者に出立がならぬとは。

瀧太　符に紛失の五百兩の、盗賊は知れましたか。

次郎　お氣遣ひなさるゝな。五百兩の金に別條はござらぬ。

瀧太　金に躊躇はござらぬとは。
次郎　盜みし奴は相知れました。
瀧太　すりやその盜賊は。
次郎　盜賊はあの花活。
瀧太　ヤ。
次郎　サ、彼奴を吟味いたしなば、相知れさうなものでござる。
段平　それ知られたら。
ト段平拔討ちに駒澤へかゝる。駒澤支へながら釣花活へ手裏劍を打つ。これにて四百五十兩落ちる。この時段平の懷中より金包みを引出す。
次郎　員數も四百五十兩、あと四十九兩は段平どのゝお働き。
勇藏　あと一兩は證據の金、それにて都合五百兩の紛失の金揃ふ上からは。
次郎　蛇皮六、其方にも疑ひは晴れた。
瀧太　して、五百兩の盜賊は。
次郎　その盜賊はこの花活。
瀧太　ヤア。
次郎　無難に金子返る上は、強ひて詮議はいらざる事。

瀧太　すりや此まゝに。
次郎　免しつかはす拙者が裁判。瀧太どのお心に叶ひましたか。
瀧太　イヤ叶ひました。ずんと心に叶ひました。
次郎　然らば金子紛失の儀は、御沙汰御無用。
瀧太　如何にも承知仕つた。
關助　して、この者は。
次郎　キッと糾明いたす奴なれど、以前聊か恩義もあれば、その返報。エイ。
ト花活の中へ金包みを入れ投げてやる。
蛇皮　ヤア、こりやお金。エ、有り難い。
〽ほう〳〵逃げて歸りける。
ト蛇皮六、逸散に花道へ入る。雨車になる。
瀧太　ヤア、怪しからぬ雨の脚。
勇藏　ソレ、雨具の用意。
皆々　ハ、ア。
ト下手より大勢にて乘り物を一挺舁き出る。
瀧太　駒澤どの、お先へ。
ト瀧太乘り物へ乘る。供廻りよろしく、段平附いて花道へ入る。

次郎　コリヤ〳〵女ども、徳右衛門を呼んでくりやれ。

女皆　旦那さん〳〵。

ト奥より徳右衛門出て

徳右　これは早、お立にござりまするか。

次郎　オヽ、サ〳〵、さて〳〵昨夜より段々の世話、別して朝顔の一節旅行の鬱散、感心いたした。先程の品この扇子もろとも、花とやらに遣はしてたも。

ト袱紗に包みし扇子を渡す。

徳右　何から何までお情深い旦那様。左やうならば随分ともに、御道中恙なく、めでたうお國入り遊ばされませう。

關助　エヽ、生憎降りが強くなりました。

次郎　急がずば濡れざらましを旅人の。

徳右　後より晴るゝ野路の村雨。これが大方やらずの雨とか申しまするのでござりませう。

次郎　イカサマ、その村雨の露の干ぬ間を朝顔に、今のこの身を語り聞かさば。

徳右　エ。

次郎　さらば。

ト乗り物へ入る。

關助　お立ち。

ト乗り物へ關助、勇藏、家來、附き添ひ花道へ入る。

奥より女形三人出て

とら　なんと皆さん、大水の出た跡のやうぢやないかえ。

こん　大水の筈ぢや。このマア雨の降りやうわいな。

がつ　此やうに降つたら、大井川が留らうぞえ。

とら　川が留つたら又大騒ぢや。覺悟しなさんせ。避しぢやぞえ。

こん　申し旦那さん、まだ夜明けまでは早うござりますれば。

皆々　ちとお休みなされませ。

徳右　イヤ、おりやまだ少と用がある。わいらは座敷の掃除して、早う休みや。

皆々　ハイ〳〵、合點でござんす。サヽ、おぢや〳〵。

ト女形皆々奥へ入る。ト上手より喜助、朝顔を引立て出て來る。

喜助　サア〳〵、うせい〳〵、どめくらめ、うぬは繩をかけてけつかつたに、どうして繩を解きやアがつた。それはさうと、うぬに貸した金を返すか。但しおれが心に随ふか。

朝顔　サア、その金ゆゑに最前の難儀。

喜助　われの詮議おりや知らぬ。金返すか抱かれて寝るか。

　サア／＼どうぢやぞえ。

　トこの時徳右衛門、喜助を投げ、懐中より金を出して

徳右　ソリヤ、借りの一兩、取つて置け。

　ト喜助取つて

喜助　エヽ、折角物になる所、旦那様の支へこさへ。なんとせう。主と病にや勝たれぬ。マア、この金はお貰ひ申して、思へばあの女。

徳右　ヤ。

喜助　あなたの髷が曲つて居る。

　ト喜助、振り上げし手を指さして奥へ入る。

　ヘ面ふくらして入りにけり。

朝顔　常住お世話になる上、あられもない事お聞かせ申しまして、お恥かしう存じまする。

徳右　コレ、今の志しはわしが金ぢやない。今夜お泊りの御家老様が、こなさんに渡してくれいと、くれぐれとのお頼み。まだ／＼その餘りがこれ程、外に扇が一本、これも御大身様が花ぢやと云うて下さつた。こなさんにキツと渡しまするぞ。

　ヘ手渡しすれば訝かしげに。

朝顔　此やうに澤山に、お金を下されう筈はなし。

徳右　その上にこの扇。ア、何やら書いてある。

朝顔　エ、その扇に。

徳右　一輪の朝顔が書いてある。

朝顔　申し、その側に、何ぞ書いてござりまするな。

徳右　オヽ、書いてある／＼。なんぢや、露の干ぬ間に朝顔。こりや朝顔の歌ぢや。さうして裏にも何やら書いてある。

朝顔　なんと書いてござりまする。ちやつと開かして下さりませ。

徳右　宮城阿曾次郎こと、駒澤次郎左衛門と書いてある。

朝顔　エヽ。

　ヘハツと惘くり俄かの仰天。

　そんなら御大身と云つたは、阿曾次郎さまであつたか。エヽ、知らなんだ／＼／＼、遲かつたわいなう。

　ト身を悶え泣き伏す。徳右衛門、不審のこなし。

徳右　コリヤ、遲かつたとは、そりや何が遲かつた。

朝顔　サイナア、常からあなたの御深切、焦れて目まで泣き潰せし、殿御といふは、この扇を持つてゐる、阿曾次

郎さまの事でござりまするわいなア。

徳右　ヤア〳〵。

　ト徳右衛門、悔りこなし。

朝顏　道理こそ最前より、よう似たお聲と思ひながら、御大身とあるゆゑ、詞もかけず居ましたが、そんなら矢ッ張り阿曾次郎さま。斯う云ふうちも心が急く。お後を慕うて。

　ト駆け出すを徳右衛門とめて

徳右　サア、心が急くは尤もながら、折悪うこの大雨、殊に目かいの見えぬ身で、この行く先は大井川。

朝顏　水に溺れて死ねば死ね、爰放して下さりませ。

徳右　併しながらこの吹き降り。オヽ、幸ひの蓑と笠。

〽行かんとすれば支へる喜助、振り切る拍子に身は先へ、よろめく手許に蓑と笠。

　トこの時喜助出て朝顏を支へるを、徳右衛門これを支へて、この立廻りよろしく。

ソレ笠。

〽否なしと押し戴き、杖を力に降る雨も、いつかないとはぬ女の念力。

　ト朝顏、蓑を着、笠をかざして、よろしく花道へ入る。

徳右　盲目を一人やるのは危ない。わしも後から……オヽ、さうぢや。

　ト徳右衛門行きにかゝるを、喜助支へる。立ち廻いながら袴を取る事あつて、トヾ喜助を當て、花道付け際にてキッと見得。これにて舞臺の喜助、見事にかへる。

〽後を慕うて。

　トよろしく三重、雨車、雷の音にて

幕

本舞臺、向う一面、大井川の遠見の張り物、爰に以前の奴關助、眞中に立ち身、左右に川越し人足大勢、取巻き居る。この見得、誂のツトメの鳴り物にて幕明く。

關助　コリヤうぬら、なんとするのだ。

人一　オヽ、なんともしねえが、おのれが主人。

人二　駒澤とやらは川を渡つたそれゆゑに。

人三　われが附添ひあつては邪魔と。

人四　さる侍ひに頼まれて。

人五　主從二人引はなしたも。
人六　一緒に置いて働らかせぬ爲。
人七　おらの仲間の大勢に斯う取卷かれちやア。
人八　もう叶はねえ一文奴め。
皆々　覺悟しろ。
關助　へ、エ、ほざいたり川越しめら、うぬらの手籠めに合ふものか。
人一　その廣言、後で聞かうワ。
人二　面倒だ、たゝんでしまへ。
皆々　合點だ。
ト浪の音、誂らへの鳴り物になり、關助、人足を相手によろしく立廻り存分あつて、トヾ皆々を追ひ込み、キツとなり、爰へ人足一人打つてかゝるを當てゝ。
關助　御主人樣の御身の上、ちつとも早く。
ト見事にかへし
オ、さうだ。
ト花道へ入る。ト淺黄幕切つて落す。と旅人の仕出しよろしく、捨ぜりふあつて上手へ入る。浪の音打上げ、淺黄幕切つて落す。

本舞臺、一面、大井川の體。二の手三の手浪手摺り、舞臺上手、誂らへの蛇籠並べあり、眞中誂らへの捨杭、所々に蛇籠を置き、よき所に松の立ち木、日覆より同じく吊り枝。浪の音、雨車にて道具とまる。
と直ぐに床の淨瑠璃になる。
〽追うて行く、名に高き海道一の大井川、篠を亂して降る雨に、打ち交りたるはたゝ神、漲り落つる水音は、物凄くも又すさまじゝ。
トかすめて浪の音、雨車。
〽夫を慕ふ念力に、道の難所も見えぬ目も、いとはぬ深雪がこけつ轉びつ。
トばた〳〵になり、以前の朝顏、逸散に走り出て來て、花道にて轉び、起き上がつて舞臺へ來り
朝顏　あの水音は大井川。ア、嬉しや〳〵、爰まで來たが、折惡いこの大雨。
〽やう〳〵爰に川の端。
トよろしくあつて
ナウ、川越し達、今爰を駒澤次郎左衛門といふお侍ひ、この川をお越しなされたか、まだか、どうぞ聞かせて下さりませ。

〽云ふ聲さへも息切れの、聲に川越し口々に。

川越　オヽ、その駒澤様は疾にお越しなされたが、殊に最前の大雨で。

皆々　川がとまつた、川止め〳〵。

朝顏　エヽ。

〽ハア悲しやと張りつめし、力も落ちて伏し轉び、前後不覺に泣きけるが、又起き上つて見えぬ目に、空を眺んで。

天道様、エヽ。

〽聞えませぬ。

聞えませぬ。

〽聞えませぬわいなア。

この年月の艱難辛苦も、どうぞま一度その人に、逢はせてたべと片時も、忘らぬ間とてもないものを、今日に限つてこの大雨。川止めとは〳〵、エ、何事ぞ。思へばこの身は前の世で、如何なる事を罪せしぞ。さても〳〵、エヽ。

〽呆氣なや、焦れ焦れたその人に、逢うても知らぬ盲目の、この目は如何なる悪業ぞや、夫の後を慕ひ慕ひ、石になつたる松浦潟、ひれふる山の悲しみも、身に比べては數ならず。

三千世界を尋ねても。

〽こんな因果が又と世に、あるべきかはと口説き立て、拳を握り身を悶はし、流涕こがれ嘆きしは、餘所に見る目も哀れなり、やゝあつて起き上がり。

オヽ、さうぢや〳〵。とても添はれぬ身の業因、この川水の増りしは、所詮死ねとの事なるべし。未來で添ふを樂しみに。

〽爰を三途の岸と定め、弘誓の船にのりの道。

オヽ、さうぢや〳〵。

ト石を拾ひよろしくあつて

〽急がんものと泣く〳〵も、夫を戀し小石の數、袖や袂に拾ひこみ。

南無阿彌陀佛。

〽南無阿彌陀佛の聲もろとも、既に飛ばんずその所へ、馳け來る橋平德右衛門、斯くと見るより抱きとめ。

ト ばた〳〵になり、以前の德右衛門。橋平、奴の拵らへにて出て、直ぐに舞臺へ來り

橋平　コレ申し深雪さま、マア〳〵お待ちなされませ。

朝顏　イヤ〳〵、誰れかは知らねど爰放して、どうぞ殺し

て下さりませ。

徳右　マア〳〵、心を靜めて待たつしやれ。コレ朝顏どの、わしもこなさんの身の上が氣遣ひさに、爰まで走つて來た。コレ、橘平どのとやら云ふ人も見えたぞや。

橘平　コレ御寮人様。下郎めでござります。モシ、橘平めでござります。

〽無理に手をとり抱きのくれば。

朝顏　ムウ、さう云ふ聲は橘平か。

橘平　モシ、下郎めでござります。すんでの事に危ない事。これには何ぞ様子がござりませう。どうぞ聞かせて下さりませ。

朝顏　コレ橘平、エヽ、遲かつた〳〵わいなう。この年月艱難して、尋ね焦れた阿曽次郎さま、折角お目にかかつたに、盲目の悲しさ、さうとも知らず別れたれど、どうやらお聲が氣にかゝり、戻つて聞けば矢ツ張りその人。おのれやれ、追ひつからうと、後追うて來たればこの川止め。コレ橘平、どうせう〳〵、どうせうぞいなう。

橘平　オヽ、お道理だ〳〵。

徳右　オヽ、尤もだ〳〵。

橘平　サア、下郎めもあなたのお行くへを、尋ね廻る其うちに、一昨日の夜の夢に、朝香どのに逢ひ、即ちあなた様は、島田宿戎屋徳右衛門方にござると、云はつしやると思へば目が覺め、こりやなんでも不思議と、夜を日についで來た甲斐あつて、危い場所でお目にかゝり、これといふも日頃から、信心いたす神佛の、お引合せでがなでござりませう。ヤレ〳〵嬉しや〳〵、下郎がお目にかかる上は、お氣遣ひなされまするな、下郎めが駒澤さまに、お添はせ申しまする程に、必らず短氣な事をなされまするなや。

徳右　オヽ、さうとも〳〵、橘平どのゝ云ふ通り、命あつての物種。その戀しい人に添はうにも、その身を大事にせにやならぬ。この後ともに、奴どのを力にして。

橘平　そりやモウ、わしが命にかけても、お添はせ申さずには措きませぬ。シタガ申し深雪さま、朝香どのには坂東巡禮になつて、東海道へ尋ねて見える筈。お逢ひなされませぬか。

朝顏　サレバイナウ、その朝香には後の月、濱松の宿で廻り逢ひしが、その夜惡者に出逢ひ、數ヶ所の手傷。死ぬる今際にわたしをよび、中山邊にはわしが產の親、古部三郎兵衛といふ人あり、この守り刀を證據に尋ね行き、

秋月弓之助の娘と名乘つて逢へとの教へ。可愛やつひに死にやつたわいの。

ト錦の袋に入れし懷劍を出す。

橋平　ムウ、すりや朝香どのには惡者の爲に、非業の死を遂げられしとや。ホ、ホイ。

ヘはツとばかりに驚くうち、始終聞き居る德右衛門。

德右　ム、ウ、そんならあなたは秋月弓之助さまの、御息女でござりましたか。

朝顔　娘深雪が、恥かしいこの姿。

德右　アノ御息女で。さうとは知らず過せし口惜しさ。この上は德右衛門が、深雪さまへ御土産。

ヘ件の短刀拔きはなし、腹にぐつと突き立つれば、橋平驚き押しとゞめ。

ト德右衛門、深雪の懷劍を取つて腹へ突き立てる。

橋平　コレ、こなたには何ゆゑこの最期。

朝顔　申し德右衛門さま、早まつた事なされましたなア。

ヘと云へば苦しき息をつき。

德右　モシ、私しはあなたのお尋ねなされる、古部三郎兵衛でござりまする。

橋平　ヤ、、そんなら常々親旦那の、お話しありし古部氏でござつたか。

朝顔　その三郎兵衛が、何ゆゑあつてその生害。

橋平　これには何ぞ樣子があらう、譯を聞かせて下さりませ。

ヘ詞に手負ひは顏を上げ。

德右　不審は尤も一通り聞いて下され。

ト竹笛入り、合ひ方になり

私し事はその以前、あなた樣の祖父樣、秋月兵部さまに御奉公、若氣の誤まり、奧女中と忍び逢ひ、御手討になる所を、弓之助さまに助けられ、女もろとも國を立退き産み落せしが即ち女子、貧苦の中で育てしが、二つの年に母は病死。男の手で育てもならず、伯母が方へこの短刀を添へて養子に遣はせしが。

ヘ廻り〳〵て思はずも、親が命を助けられし。

秋月さまへ御奉公、死んでも忠義を忘れずに、導き居つたか。

ヘ出かしたなア。

最前駒澤さまのお物語り。唐土傳來の藥、甲子の年の男子の生血にて服する時は、如何なる眼病も即座に平癒との事。今聞き知つた故主の御息女、目盲となりしこのお

姿。せめて少しの御恩返しと、この三郎兵衞が生れ年、丁度辛ひ甲子の年、我が生血にて件の藥を調合なし、橘平どの、あなたへお進め申して下され。

朝顔　その志は嬉しけれど、其方の血汐を現在この場で。

徳右　オヽ、橘平殿、時刻が延びる、早く〳〵。

橘平　ハヽア、天晴れ忠義の古部氏。この生血を用ひざれば、心づくしも水の泡。ソレ。

〽橘平用意の水呑み取り出し、手負ひの血汐を受けとめ受けとめ、泣き入る深雪が懐の、妙藥取つてサヽ御寮人樣、少しも早くこの藥を。

〽差寄すれば。

橘平腰より水呑みを出し、傷口へあて血を絞り、深雪懐中より藥を出し、水呑みに入れ

朝顔　忝ない。

〽深雪は受取り我が夫の、情にあまる賜物と、押戴き〳〵只一口に呑み干せば、不思議や忽ち兩眼開き、蟻の這ふまで見え透くにぞ。

ト朝顔、藥を呑み干す。薄ドロ〳〵になり、兩眼開く。

ヤヽ、今まで盲たる兩眼の、忽ち開くも藥の奇特。

橘平　ナニ、兩眼とも開きしとな。

ト朝顔の側へより顔を眺め

オヽ、ほんに兩眼が開いて、常に變らぬ深雪さま。ヤレヤレ嬉しや〳〵。エヽ、お目が明いた〳〵。

ト喜び徳右衞門に思ひ入れ。

アヽ、これといふも、三郎兵衞どのが命を捨てゝ。

朝顔　この身へ盡す忠義の心。

兩人　エヽ、忝ない。

〽深雪が嬉しさ人々も、喜び合ふこそ道理なり。

徳右　エヽ、嬉しや、最早この世に望みなし。

橘平　開きしお目は盲龜の浮木。

朝顔　優曇華まさりの二人の賜物。

橘平　露の干ぬ間の朝顔も。

朝顔　今朝の嵐に散つて行く。

徳右　いづれも、おさらば。

〽しげれる朝顔物語り、後の世までも。

トよろしく兩人、愁ひのこなし。

南無阿彌陀佛。

〽いちじるし。

ト傳右衛門、落入る。兩人同向のこなし。本釣り鐘、浪の音にて、よろしく。

幕

繪入稗史葬物語（終り）

團七九郎兵衞
釣船三婦
一寸德兵衞

夏祭浪花鑑



坂東彦三郎の團七九郎兵衛

夏祭浪花鑑

序幕　住吉鳥居先の場

役名――團七九郎兵衞。一寸德兵衞。釣船の三婦。役人、堤藤内。玉島磯之丞。こつばの權。なまの八。大島佐賀右衞門。團七女房お梶。倅市松。遊女、琴浦。

本舞臺、少し上手へ寄せて、誂らへの髪結ひ床。上の方石の鳥居、同じく駒寄せ、石垣、石燈籠、床に續いて下の方草土手、これへ松の並木、下の方に葭簀張りの居酒屋、模樣物の掛暖簾の入り口、よき處に紅葉の立ち木、同じく若葉の吊り枝、すべて住吉濱邊、明神鳥居先の模樣。爰に町人仕出しの中へ、役者、力紙附きし朝比奈のかつら、浴衣形。醫者坊主かつらにて、役者を引附けて居るを髪結ひ取支へ居る。外の仕出し、思ひ〳〵の拵らへにて留めて居る。辻打ちにて幕明く。

役者　この醫者坊めが、おれに恥をかゝせやアがつたな。

醫者　ヤイ〳〵、この赤村へ、へた藪めが恥をかゝせたもよく出來た。おのれが癲癇を起すたんびに、服ませてやツた氣附け藥の代ばかりも、いくら溜つて居ると思ふ。その藥代の催促をすれば、ふて勝手を吐かしやアがる。料簡がならぬぞ〳〵。

（ト立ちかゝるを、町人皆々留めて）

町皆　マア〳〵、待ちなさい〳〵。

役者　コレ〳〵、お前方は、打ッちやつて置きなさい。藥代の掛取りに廻る醫者が、どこの國にあるものか。この竹の子坊主め。

醫者　ナニ、竹の子坊主だ、この盗人朝比奈め。

役者　盗人とはなんの事だ。

醫者　そのいけ口を、どうするか。

ト町人皆々留めるを拂ひ退け、役者の横づッぽをくらはせる。

役者　アイタ、うぬ、ぶつたな〳〵。痛え〳〵。目玉が飛び出たぞ〳〵。

髪結　コレサ〳〵、マア〳〵お前も、お腹も立たうが、お醫者樣とあれば、人を助ける長袖の事ぢやアござりませぬか。

トよろしく留める。

町告　マア〳〵、御料簡なされませ。

醫者　なんの長袖どころか、もう斯うなつては、筒ッぽでも袢纏でも、藥禮を取らにやアならねえ。

役者　骨が舍利になるとても、藥代はやらねえぞ〳〵、

醫者　取らねえで置くものか、

ト兩人爭ひながら、辻打ち早めて、上の方へ、摑みひながら鳥居の内へ入る。

町告　こいつア、大笑ひだ。

ト右の鳴り物にて、仕出し皆々上下へ入る。髪結ひは床の中へ入る。と誂らへの出の鳴物になり、花道より、釣船の三婦、好みの拵附け、尻ばしをり、石割り雪駄、珠數を爪ぐりながら先に立ち、この後より團七女房お梶、好みの拵附け後ろ帶、倅市松の手を引き出て來り、三婦花道にて、市松へこなしあつて。

三婦　ヤア〳〵、小びつちよめが、冗談歩き、附き合うて來たかして、思ひの外早かつたわえ。

かぢ　ほんに、さうござんすなア。コレ坊や、サア、おとなしく歩きませうぞ。アレ〳〵、向うが住吉樣の鳥居先。

三婦　アレ、あの鳥居を潜つて、それから行くと、反橋があるぞ。

かぢ　今少しぢや、あんよしやよ。

市松　アイ〳〵。

ト右の唄にて、舞臺へ來り、

三婦　ア、おとなしい〳〵。

かぢ　サア、爰まで來たれば、ちよつと爰で休みませう休みませう。三婦さんも休みなさんせえ。

トこれにて床几を見て、

三婦　オ、サ、幸ひのこの床几、ちよつと腰を休めようかい。

トこなしあつて床几へかける。右の合ひ方。辻打ちの鳴り物をあしらひ、市松へこなしあつて。

さて坊主は、よう歩いたの。大方天下茶屋邊りで、慥かにだらけやうと思うて、二十五文が駕籠、相乘りで振舞ふ處を、三文の地黄煎餅でまじなうた。サア〳〵、ぼんちも爰へ休め〳〵。

トお梶も市松も、よろしく床几へ掛ける事あつて

昨日、こなたが戻つて、團七が牢から出ると聞いたゆゑ、おれはモウ嬉しうて、夜がな寢られず、夜の明けるまで待ち兼ねた。

かぢ　そりやモウ、お前の云ふ通り、わたしも昨日お役所へ出るまでは、もしも命にも及ぶやうな、御裁許になりはせまいかと、大抵や大方案じたではないが、案じるよりは産むが安いと、今日はお許しが出ると聞いた時のその嬉しさは、どのやうだと思ひなさんす。これと云ふも三婦さん始め、御近所の衆の勢力でござんせう。有り難うござんすわいなア。

三婦　オヽ、定めし嬉しからう〳〵。ロレ坊よ、追ッつけ父に逢はしてやるぞ。嬉しいか。嬉しいか。

市松　アイ、父樣に逢ふのは嬉しい〳〵。

三婦　オヽ、さうであらう〳〵。イヤ、シタガ、もつと隙が入らう。祝うて明神樣へ、お禮がてら連れて參らつしやれい。

かぢ　ほんに、ちよつとお禮參りして、來ませうわいなア。

三婦　おれは間違ひの無いやうに、爰に待つて居ようワ。

　トお梶、市松を連れて立ちかけ、こなしあつて。

かぢ　それに附けても三婦さんは、こちの團七どのと念頃な仲ぢやとて、いかい世話でござんすなア。

三婦　ナンノイナウ。併し云ふぢやなけれども、一體はこなたの親仁、三河屋の義平次が來てやらにやならぬ筈を、今日は又なぜ來ぬの。

かぢ　サイナア、今朝から腰が痛いと云うて。

三婦　サア〳〵、作病ぢやて。殊に直ぐにもない和郎ぢやもの。イヤ、こんな事は誰れも來ともながる。マヽ、參つてござれ。

かぢ　アイ、そんならさう致しませう。そんなら、三婦さん。

　ト思ひ入れあつて、

ドレ、參つて來やうわいなア。

　トお梶、市松の手を引き、上の方へ入る。

三婦　ドリヤ、一服やらうわえ。

　トこれより竹本になり

〽親子は宮へ、三婦は火打石に腰かけ、すつぱ〳〵、茶の錢始末と見えにける。

　ト此うち、提げ煙草入れより、火打ち道具を出し火を打ち、煙草をのみ居る。この時下座の囃子になり、花道の揚げ幕より駕籠を舁き、こつぱの權、なまの八、

権　　磯之丞を乘せ出て來り、よき處にて息杖を突き。
オイ棒組、ちよつと入れやらぜ。
ト駕籠を立て、
エモシ旦那え、跡の立場の駕籠と、替へにやアなりません。駕籠の錢を
兩人　やつて下さいまし。
磯之　これは又どうしたものだ。乘る時に大坂までと極めたではないか。先へ行つたら渡さうわいの。
八　それぢやアちッと、勝手が惡うございますよ。
権　跡の駕籠と替へねばなりませぬから。
兩人　どうぞ爰で、やつて下さいまし。
磯之　サア、やる事は易けれども、錢を爰に持ち合さぬゆゑ、大坂へさへ行つたなら、慥かに渡さうわいの。
八　カウ相棒、聞いたかえ。なんだか、あやふやな物云ひぢやアねえか。
権　その事よ。
トこなしあつて、
モシ、旦那、いま受取らにやア、どうも勝手が惡うございますよ。
八　さうして大坂は。

兩人　どこへ行くのでございますえ。
磯之　されば、長町邊で尋ねて見たら。
八　先は知れぬと云ふのは。
権　それぢやア、いよ〳〵爰で渡して、
兩人　もらひたうございますね。
磯之　ハテ、しつこい。爰には錢が無いといふに。
八　ナニ、錢が無い。おきやアがれ、値を極めて駕籠へ乘りながら
権　爰まで仕事をさせて置いて、錢がねえもよく出來た。
八　おら達を騙りやアがるな〳〵。
ト此うち駕籠を下ろして、左右より怒鳴り立てる。磯之丞こなしあつて、
磯之　アヽコリヤ、武士に向つて麁相申すな。
八　なんだ、武士に向つて麁相もねえものだ。
権　ヘン、武士もよく出來た。
兩人　見れば、丸腰ぢやアねえか。
磯之　エ、
ト丸腰に心附き、ぎつくりこなし。
八　それで騙りは解つて居るわえ。
権　こんな奴は見せしめに。

兩人　斯うしてくれるワ。
〽思ひ合うたる惡者同士、駕籠をぐるりと打返され、内より出たる磯之丞、落ちたるはずみに、膝すりむき。
ト兩人にて駕籠を返す。中より磯之丞ころげ落ちる。
磯之　アイタ。こりや、わたしをばどうするのぢや。
〽くわつと急く氣も身の恥と、差俯向いて堪へ居る。
トよろしくあつて、
權　コレ先程、錢の持ち合せがねえと云つて、此まゝでは濟まされねえ。
八　知れた事よ。なんでなりと、爰までの籠賃を取らねえでなるものか。
權　下着でも上着でも剝いで、錢にするがいゝ。
八　さらしぺい〳〵。
磯之　すりや。手籠めにしても、駕籠代を。
兩人　オヽ、知れた事だア。
ト立掛るを磯之丞、ちよつと拂ひ退けるを、又兩人かかる。これを三婦ツカ〳〵と出て、磯之丞を圍ひ、兩人を見得よく留めて、
〽立ちかゝらんとする所を、三婦は見兼ねて割つて入り。
三婦　コリヤ〳〵。滅多な事をして、後で後悔しやアがるな。
〽横合ひから三婦が聲。
ト兩人、こなしあつて、
八　エヽ、この爺め、何を巾をきかせるのだ。
權　なんの譯も知らねえで。
ト誂らへの鳴り物になり。
三婦　ホヽ、知つて居る〳〵。コリヤ、いかむなやい。サアサア、足許の明かるいうち、とつ走らいでナ。
ト兩人、よろしく思ひ入れ。三婦は磯之丞へこなしあつて。
イヤ、見れば樣子がありさうなお方。お年は若いがおとなしい、よう堪忍さつしやるぞ。して、駕籠代はなんぼぢやの。
ト磯之丞、面目なきこなしにて
磯之　サア、ちと樣子がございまして、着のみ着のまゝで走り出で、僅かの鳥目に差支へしをお目にふれ、面目もございませぬ。極めました駕籠代は、二百五十文でございます。
ト氣の毒さうに云ふ。
三婦　アヽ、二百五十文か。ても高い駕籠ぢやの。乘らし

つたこなさんもこなさんぢや。由緣かゝりは無けれども、

ト駕籠へ、こなしあつて、

コレ、この親仁が尻持ちするぞ。

兩人　ヤア、そんならこなたが尻持つか。

三婦　オヽ、この釣船の三婦が、尻持つた達引々々。

ト手に持ちし珠數を見て、

この珠數で數へて見りやア、丁度九百九十九出入りがある。前なら、うぬら、疊んでしまひ、千人投げの數に合すれど、堪忍して去なしてやるぞよ。

疼切り顔を、ぢろりとながめ。

ト兩人こなしあつて、

八　ホヽ、釣船面白い。おら達二人を、

權　どうして去なせる。それを見ようかえ。

〽掴みかゝるを身を交し、ころりと投げたは百の錢。

ト兩人、三婦へ掴みかゝるを、ちよつとあしらひ、懐中より百文投げ出してやる。兩人これを見てよろしくこなし。

三婦　高い極めは此方の損、料簡して半分やる。この格で、いがんだら、大きな目に遭ひ居らう。それ取つて早う行け。

〽丸う裁いた男作り、美しいので氣味惡く。

ト三婦こなし。兩人の駕籠屋よろしくこなしあつて、額見合せ、件の錢を、よろしく取上げる事。

〽錢受取るも怖々に。

それで云ひ分はあるめえな。

〽尻こそはゆく雲介は。

ト兩人よろしく、

兩人　ハイ、云ひ分はござりませぬ。

〽駕引かたげ歸りける。

兩人よろしく、駕籠舁き下手へ入る。

〽磯之丞はしづ〳〵と、三婦に向つて一禮なし。

ト磯之丞、三婦へこなしあつて

磯之　狼藉者に出合ひ、難儀の所を、其許のお世話にて、事なく納まり大慶いたす。只今拙者流浪の身、時を得てお禮を申す為なれば、御在所はいづくか、承はりたう存じまする。

トこなし。三婦思ひ入れあつて

三婦　イヤ、さうあつてはこの親仁、處は申さぬ。今聞いて居れば、こなた様は長町邊へ向けてござるとの事。わしもあのあたりへ行きます者。さうして長町は何丁目。

磯之　イヤ、何丁目かは存ぜねども、三河屋義平次を尋ねて參る者。

三婦　ムウ、アノ義平次に用があるとは、ても變つた者にお近附きぢやの。

磯之　イヤ、近附きではござらねど、その娘のお梶へ。

三婦　ヘエ、そんならお前は、磯之丞さまとやらではござりませぬか。

磯之　とは又、よく御存じで。

三婦　サア、斯うでござんす。今日團七が出牢迎ひに、お梶と息子と二人を連れて來てやりました。その道々、お前の話しを聞きました。いづれあなた樣の事は團七が、よいやうにしまする、氣遣ひさつしやりますな。

ト上手へこなしあつて、

お梶は宮へ參られたが、戻りの遲いは、オヽ、てつきりコリヤ坊主がだらけて、新家の晝飯、あつちやから行て昆布屋に居ませう、三婦に聞いたと云はつしやりませ。

磯之　これは重疊、昨日は堺町で日を暮らし、今日は大坂へ參る處。よい所で其許にお目にかゝり。

三婦　アヽ、イヤ、その御挨拶もゆるりとしませう。マアちやつと行かつしやりませ。

磯之　然らば後程、御意得ませう。

〽昆布屋をさして急ぎ行く。

ト磯之丞こなしあつて、上手へ入る。三婦、後を見送り、

三婦　アヽ、あの人は、よい所でおれに逢うたぞ。イヤ、逢うたは逢うたが、この團七はモウ來さうなものではある。

トのれんを覗きこなしあつて、

床の衆、今日のお拂ひ者は、いかう遲うござるの、わしや大坂から迎ひに來たのぢや。來るまで爰を借りますぞや。

ト床の内にて、

髮結　ハイ、こつちへお掛けなされませ。

三婦　アイ、それは忝うござります。

ト三婦、床の内へ入る。時の太鼓になり、

見物　ソリヤ、科人のお拂ひものが來るぞ〱。

ト見物人の仕出し大勢出る。此うち上手より團七、淺黄の仕着せ、伸びたる月代、伸びたる附け髭にて本繩にかゝり、藁草履をはき、これを絆纏侍ひ繩を持ち、藤内、十手を差し、大小雪駄、落人拵らへにて附き添

ひ出て來り

〽我がいとなみの生洲の魚、沖に出でたる心地なり。

ト此うち捕手へ來り、

繩取　下に居らう。

ト團七を引据ゑ、仕出し皆々よろしく、遠く退き見物する事。

藤内　今日當番の役目を受け。堤藤内罷り越したぞ。ソレ、御法の通り囚人の繩、解きめされ。

繩取　ハア、。

ト繩を解く。

藤内　コリヤ團七、委しく屋敷にて介松主計、玉島兵太夫、兩人申し渡されし通り、去年三月十三日、御家中大島佐賀右衞門が家來に手を負はせ、双方共に牢舍のところ、手疵は癒えて相手は牢死。それゆゑ死罪を御赦免なされ、泉州堺をお構ひと相成るぞ。この趣きを心得よ。

團七　ヘイ〳〵。

藤内　例へ、相手は病死たりとも、其方が死罪はのがれ無きを格別の思し召し、有り難く心得ませうぞ。

團七　有り難う存じまする。

藤内　以來お構ひの場所を辨へず、もし立寄るか、又惡しき風聞もある時は遁がれぬぞ。必らず身持を愼みませうぞ。

〽云ひ渡す事云ひしまひ、

ト藤内、繩取りへこなしあつて、

者ども參れ。

繩取　ハツ。

〽直さま屋敷へ歸りけり。

ト時の太鼓にて、引返して花道へ入る。見物皆々下手へ入る。

〽跡見送りて團七は、故郷の方を伏し拜み。

團七腕をさすり、いろ〳〵こなしあつて、

團七　ア、忝ない、有り難い〳〵。佐賀右衞門が中間達の下手人に取らるゝかと思へば、無念で口惜しかつたを、計らず命助かつたは、日頃信心する不動樣の御利益、又一つには兵太夫さまのお情、お禮は申さぬその替り、磯之丞どのゝお身の上、命に替へても、微塵さら〳〵、御難儀はさせませぬ。

〽獨りつぶやく後より。

トこの時床の内にて、

三婦　團七々々。

團七　おれを呼んだは、何處だ、何處からだ。
三婦　イヤ、何處からでもない、床からだ。
トのれん口より、三婦出る。これより好みの鳴り物合ひ方になり、團七、三婦を見て、
團七　ヤア、三婦どの、ても珍らしい、息災にござつたの。
三婦　オヽ、おりや大坂から堺へ通ふ、わりや堺から大坂へ通ふ、商賣は違うても心は變らぬ念頃。料簡强いわれがあゝした事、よく／＼開かれぬ事があつてと思うて、さて案じたが、出かした出かした、必らず恥ぢやと思ふなよ。江戸を見ぬと牢へ入らぬとは、男の中ぢやないと云ふ。今朝から嬶衆も坊主も連れ立つて、迎ひに來て待つて居た。
團七　エヽ、アノ女房も忰めも。
三婦　ちやつと剃らせてやりや、ぢやが。
ト團七の頭を見て、
ても長い月代、ムウ、臭い若い者ぢやな。着替への着物は。
ト腰へ提げたる風呂敷包みを見て
この包みに入れてある。幸ひナこの床で、月代剃つて明神樣へもお禮申せ。おりや昆布屋へ行て、おちつきするわい。
ト團七思ひ入れあつて、
團七　アヽ、そりや、いかい世話でごんした。
ト團七、三婦の耳へ掛けし、珠數を見て
ヤ　こんたも大分、信心者になつたの。
三婦　サア、今はとんと、腹が立つても南無阿彌陀佛、笑ひ笑ひも、南無阿彌陀佛。念佛講で忙がしい。これから大坂住居するお主、春から打ち續けの當り芝居。又あの張出しの淨瑠璃のと、見せたい物は山々ある。イヤ、こんな事云や日が暮るゝが、イヤ云はにやならぬ事があるわい。お梶が話しで、委しう聞いた磯之丞どのに、たつた今逢つたゆゑ、一緒に昆布屋へやつて置いた。
團七　そりや、わしが大事の人。
三婦　サア／＼／＼、その譯も、聞いて居るてや／＼。
團七　兎角昆布屋で、ゆる／＼と話しませう。
三婦　エヽ、いゝ男になつて、女房に顏見せてやるがよい。コレ、床の衆／＼。
髮結　ハイ／＼。
ト出て來る。
三婦　この男の月代を、剃つてやつて下んせ。コレ氣を附

けて、顔や頭を引かけねえやうにしてくんなよ。
髪結　畏まりました、サアお前さん。
團七　そんなら三婦どん、ドレ、男を一番、磨いて來よう
か。
　ト思ひ入れ。唄になり、床ののれんの内へ入る。三婦、
　のれんの内を覗き込み
三婦　コレ、床の衆頼みますぞや。
　ト風呂敷包みを取上げ
サア、風呂敷包みをそこへ渡すぞ。中へ錢も煙草入れも
着物まで入れてあるぞ。見たか、よからうな。ヤ、南無
三しまうた。肝心の白旗を忘れて來た。ア、、とんだ事
を。エ、まゝよ、今日切り立の初穂をば、ちよつとおれ
が締めたばかり。年寄だけに赤褌だ。マアこれを間に合
せに。
〽兩手を腰にむく〳〵と、左の袖からのれんの口へ。
　ト此うちよろしくあつて、緋縮緬の褌を出して、のれ
　んの内へ引ッぱり取らせるこなしよろしく、捨ぜりふ
　あるべし。
そりや、引いたりしよ〳〵。
　ト内より引く事よろしくある、

ア、コレ〳〵、どうする〳〵。痛い〳〵。
　ト矢張り床のめりやすよろしく内へ引いて取り
そんなら、おりや先へ行つて待つて居るぞ。よいか〳〵。
ドリヤ、行かうかい。
〽昆布屋をさして。
　トこなしあつて、裾をまくりかけ、心附いて下ろし。
〽別れ行く。
　ト三婦よろしく花道へ入る。と乘りの早き合ひ方、唄
　になり、これへかすめて、バタ〳〵になり、花道より
　琴浦、着流しにて走り出て、上手にて躓き、胸を撫で、
　こなしあつて
琴浦　心を空に、やう〳〵と走つて來たが、爰はマア何處
であらう。
　ト舞臺へ思ひ入れあつて、
ホンに爰は住吉樣、磯さまと連れ立つて、難波屋へもよ
う來たが、もしやあすこにぢやあるまいか。
　トあたり見廻し、フト向うへ心附き、
ヤ、あそこへ來るは、憎らしい佐賀右衛門づら、見附け
られたら捕へられう。こりやどうせう、どうせうぞいな
ア

〽どこへ隱るゝ間もあらせず。
ト此うち上手より佐賀右衞門、着流し大小にて、ツカツカと出て
佐賀　ア、コリヤ〱、見附けたぞ〱。
ト琴浦逃げようとするを、走り寄つて引きとめ、輕業の鳴り物になり
オツト、逃げまいぞ〱。コレ、お鯛茶屋から、よう身共を出し拔いて、身を空蟬の藻拔とは、濟まぬぞ〱。マアおれが云ふ事何と聞くぞ。元來お主にはこの佐賀右衞門が附いて居たを、あの磯めが身請けして、お鯛茶屋の箱入り、指もさゝせず賞翫し居る。そこで我れらが太鼓を持ち、極道に拵らへて、勘當させた骨折も、皆貴樣から起つた事。磯めがやうな風來人に、心が殘るとしまひの果は、飛田へ曝され、お情どころを犬や鳥が、オオ、思ひ出しても身が慄ふ。まだその上にひよつとすると、男は助かつて女は死に損。そんな危ない事をせうより、さらりと氣を替へ、サア、マア難波屋で。
〽祝言の杯せうと手を取れば。
ト佐賀右衞門、なだれ、手を取るを琴浦振り切り
琴浦　エ、嫌らしい聞きともない。コレ、爰を放しなさんせ放しなさんせ。
トいろ〱あせるを
佐賀　ハテ、びんしやんしても、この大鳥が摑んだからは、放さぬ〱、爰で逢うたが百年目。
ト手を取るを
琴浦　エ、憎らしい、知らぬわいなア、
ト思ひ入れよろしく、
佐賀　ハテ、はしたない、聲が高いワ。
琴浦　高うても、わしや、否ぢや〱。
佐賀　ハテ、否であらうが、どうであらうが、連れて去んで女房にする。
琴浦　否ぢや〱、否ぢやわいなア。
〽合點せぬもの無理無體、引摺る意地張る床の前。
ト兩人よろしく爭ふ事。トヾ琴浦、のれん口へ入る。佐賀右衞門も後より
佐賀　ハテ、おぢやいなう。
〽引立つる佐賀右衞門が、利き腕、ぐつとのれん越し、捻ぢ上げれば。
トのれん口より、佐賀右衞門の手を捻ぢ上げる。
アイタ〱。コリヤ、何奴だ、何ひろぐ。

トのれんの内にて、

團七　イヤ何もせぬ、おれでえす。

佐賀　ヤア。

〽ずつと出でたる剃立の、糸鬢頭靑月代。

トこれを誂らへの鳴り物になり、のれんの内より、團七、誂らへの染模樣の衣裳、下駄がけ、手拭をさげ、ズッと出る。佐賀右衛門よろしく見て、

佐賀　ヤア、おのりや、けふ牢から出居つた。

團七　オヽ、憖くまい、へヽ、團七といふけちな野郎だ。

佐賀　その團七が、なんで邪魔を致すのぢや。

團七　イヤ、邪魔は致しませぬ。斯う見たところが、お侍ひの分として、女を捕へて見苦しい。ちとお嗜なみなされませ。

ト琴浦、團七を見て、

琴浦　どなた樣かは存じませぬが、危ふい難儀をお救ひ下され、有り難うござります。

團七　そのお禮にやア及ばねえ。こなさんがアノお鯛茶屋に居やしやつた、琴浦さんぢやの。して、磯之丞さまに逢はんしたか。

琴浦　イヽエ。

團七　ムウ、さうしてマア供は何處に居るえ。

琴浦　タヽエ、誰れも居ぬわいなう。

ト此うち佐賀右衛門、拔打ちに切りつけるを、團七、身をかはし、よろしく突きのける。又かゝるをよろしく留めて、

團七　ハテ大膽な。そんな事だから、ツイ此やうな惡魔が見入りたがる。コレ、わしは磯之丞さまを世話する、團七といふ者でごんす。

琴浦　エヽ、そんならお前が、お梶さんのお連合ひかえ。

團七　アイ、左樣サ。

ト爰へ佐賀右衛門また切つてかゝるを捉へ

琴浦　さうして、磯さんは。

團七　コレ、氣遣ひしよまい、ツイそこに。

ト佐賀右衛門こなしあつて、

佐賀　そことは、ドレ、

琴浦　何處に。

ト心々の思ひ入れ。佐賀右衛門立ちかゝるを、押しのけ、雨耳を押へて引附け、琴浦へこなしあつて、

團七　この土手通りを、南へ行くと。

ト云ひながら、佐賀右衛門の耳を押へたまゝ、上の方

へ向けて並木の蔭の茶屋の内の、昆布屋といふ新見世に、磯之丞さまが行つてござる。又わしが女房も來て居るし、また三婦といふ者に逢うたらば、よう頼んで置かつしやい。

ト思ひ入れにて云ふ。

琴浦　アイ〱。

ト呑み込みし思ひ入れ。此うち佐賀右衛門、両手を掛けて押へられし耳の手を取るを、其まゝ引附けて琴浦へ思ひ入れあつて

團七　ア、コレ〱。お前行く道を知つて居るか。

琴浦　イエ〱、知らぬわいなア。

團七　さうか。

ト團七、佐賀右衛門の右の手を取つて、指をさゝせ、

ソレ、爰を、斯う行くと。

ト佐賀右衛門を裏向きにして

その黒塀の間から、此やうな、松の木が出て居るワ。その松の木の筋向うに、こんな。

ト佐賀右衛門と立廻りながら、

地藏様がある。その地藏の前の石橋を、

ト立廻りながら、佐賀右衛門を押伏せて、橋にし、ちよと脊を踏みながら、

斯う渡つて。

ト佐賀右衛門を蹴返し、

一軒、二軒、三軒目だよ。

トこれにて佐賀右衛門、くるり〱とかへる事よろしく。

早く行かんせ。

〽と教へられ。

琴浦　アイ〱。

團七　コレ、東側ぢやぞえ。この仕儀必らず云ふまいぞ。

琴浦　合點ぢやわいなア。

〽いそ〱として急ぎ行く。

ト琴浦こなしあつて、花道へ入る。此うち佐賀右衛門、いろ〱あつて

佐賀　ア、君子は危ふきに近寄らず、三十六計逃げるが第一。

トこなしあつて、

〽飛ぶが如くに立歸る。

ト大拍子にて、足早に上手へ入る。團七見送りて、

團七　ハテ、意氣地のねえ、こそ〱と逃げて失せたわえ。

〽跡見送りて心附き、
イヤ／＼、こりやてつきり昆布屋の事を嗅ぎ附けて、先へはよもや逃るまい。とは云へ道が氣遣ひな。宮へはひつても參られる。ドレ、おれも後から。
ト向うへ行きかける。
〽心急いで行く道から。
ト此うち上手より一寸德兵衞、好みの着附けにて、後より以前のこつぱの權、なまの八、兩人好みの拵らへにて、連れ立ちながら出て、
兩人　オヽイ。
ト呼ぶ。團七構はず、行きかける。
オヽイ／＼。
德　ハテ、こんなに呼ぶに、この男は聞えぬか。
ト團七これに構はず、花道へ行く。
團七　ムウ、呼ぶのは、おれの事かえ。
德兵　オヽサ、マア／＼、待つてもらはうかえ。
ト鳴り物になり、舞臺へ戻つて、
團七　御大層に呼びかけて、サ、何の用だ。
德兵　ハテ、用がなうて呼ばうかい。こつぱになまよそろそろと仕掛けろ。わいらでいかざア、助けてやらう。その間に抜きさした髭でも抜いて置かうかえ。
〽床の床几に上足打ち、煙草入れから出す毛抜も、なんぼう太き穿鑿なり。
ト文句の通りよろしくあつて、
〽いがみと早う見て取る團七。
ト男達の鳴り物になり
團七　コリヤ、おれに何の云ひ分がある。エヽ、小面倒な、早う吐かせ。
權　オヽサ、云ふなといつても云つて聞かすワ。名は云はいでも頼まれたと云や、合點であらう。ハテ、高が先刻の女中、貰ひに來たのだ。
八　あのゝものゝと口數無しに、おいら二人が
兩人　受取らうかい。
團七　ハテ、おれもてつきり、こんな事だと思つた。
權　落ちつき自慢の魚屋團七。
八　命に掛替へあつたら知らず。
權　こつぱの權。
八　なまの八が
權　この腕で
兩人　貰つて見せるワ。

團七　イヤ、此奴等ア除けて通れば方圖がない。また渡さねえといつたら、うぬらどうする氣だ。
兩人　斯うして疊んでしまふのだ。
團七　ナニ、しやらくせえ。
〽右左、ばたり〳〵と蹴倒せば。
權　イヤ、此奴、踰出しを
兩人　ひろいだな。
ト思ひ入れ。徳兵衞ぢろりと見て
徳兵　疊んでしまへ。
兩人　合點だ。
ト團七へかゝる。團七、兩人を相手によろしく立廻り、トゞ兩人したゝかに打ち据ゑられ
兩人　アイタ〳〵。痛え〳〵。
權　親方後を
兩人　頼みやんす。
〽後を頼むと云ひ捨てゝ、命から〴〵逃げて行く。
ト權と八の兩人、叶はずして花道へ逃げて入る。
〽見て居る奴は大膽者、髭抜きしまひ毛抜を納め。
ト徳兵衞よろしくこなしあつて、
徳兵　へ、、、、ても弱い奴等ぢや。あれでも人に頼まれるぢやまで。と云うて退けても居られまい。おれを頼んだのも、無理ぢやないわえ。
〽どりや出て逢はうと、のつし〳〵。
ト思ひ入れにて、誂らへの鳴り物になり。
團七、ちよつと下に居てもらはうかい。
團七　アノ、おれにか。
徳兵　オヽよ。
團七　ハテ、大分時代に出かけたな。
ト思ひ入れあつて、中腰に居住ふ。
徳兵　されば、友達づくの頼むに引かれず、一寸も跡へは寄らぬ一寸徳兵衞が、ちよつとマア、斯うして見ようかえ。
サア、下に居たが、どうする。
團七　ホヽ、こりや又身があつて面白いわい。そんなら差詰め、斯うせうかい。
徳兵　ムウ、さうすりや、おりや斯うするワ。
團七　ムウ、斯うする。イヤ、おりや斯うするワ。
〽打つ手留むる手右左、片手にきりゝと尻ひつからげ。
トせりふのうらより、双方手先の立廻りよろしく、右の文句の通りあつて、左右へ別れて、尻引ツからげ、

キッと見得。これより誂らへの鳴り物になり、高札を
引きぬき、兩人打合ひの立廻りよろしく
〽あまり遅さに新家から、迎ひにお梶は只一人、來れば
うたてや又喧嘩。
ト花道より、以前のお梶走り出て、これを見て
かぢ　コレ、モシ、料簡しやんせ。コレこちの人、こな
たも料簡したがよい。
〽云ふをも聞かぬ摑み合ひ、打ちつ打たれつ止めても、
踏み飛ばすやら蹴飛ばすやら、止めぬ仕やうも並び立つ、
辻札取つて二人が中へ、横にこかして氣轉の枷。
トお梶、双方を止める立廻りあつて、ト側なる辻札
を取り、兩人をよろしく隔てるこなし。
マア／＼待つて、下さんせ。
團七　イヤ、女房、邪魔せずと
徳兵　怪我せぬうちに
兩人　退いた／＼。
かぢ　イヤ、退かぬわいなア。こちの人、今日御赦免にな
つたのも、元を糺せば喧嘩ゆゑ、その足腰もまだ固まら
ず、殊に女房や市松に、喜ぶ顔も見せぬうち、往來中の
この達引。腹は立たうが、マア／＼待つて下さんせ。お
前も何か様子は知らねど、堪忍して。
ト思はず徳兵衞の着物と顔を見て、
オヽ、ほんにさうぢや。お前はこの中の乞食ぢやな。
徳兵　ほんにお梶さんか。面目ない／＼。
かぢ　下がりや／＼。こちの人になんで手向ひ。アノ、非
人の、人でなしめが。
トきつと云ふ、徳兵衞、しよげる思ひ入れにて、尻込
みして
〽あやまり入りたる顔つきで、出入りの腰は折れにける。
ト團七思ひ入れあつて
團七　コリヤ、女房、おりや合點がゆかぬ。彼奴どうして
見知つて居る。
かぢ　見知つてゐいでなんとせう。短う云へば磯之丞さま、
お鯛茶屋からお歸りなされぬ、その時の思ひ附き、お遊
びなさるゝ濱先で、非人の喧嘩身の上話し、此奴を頼ん
で云はしたが、お耳へ止まつてお歸りなされたゆゑ、阿
母さまのお喜び、その御褒美にあの着物、まだその上に
お金も遣り、それから止めたその形ぢやな。
徳兵衞、團七思ひ入れあつて
團七　ムウ、そんなら重々憎い奴。玉島の御恩を着て、磯

之丞どのに仇をする、佐賀右衞門が尻持つ、恩知らずの畜生め。もう免さぬぞ。
〽とびかゝれば、
ト德兵衞身を引いて、
德兵　ア、待つた〳〵、その磯之丞どのといふは、備州出のお侍ひ、玉島兵太夫さまの御子息か。ハ、ア、知らなんだ〳〵。この德兵衞も備中の玉島生れ、少しの科で追ひ拂はれ、國を出る時殘して置いた、女房につれてもお主、おれの爲めにも親方筋。その思惑の琴浦どのに、横戀慕する佐賀右衞門、頼まれた朋輩の、尻持つたは大きな間違ひ。達引どころかおれも共々、お世話をさして下さりませ。頼む〳〵。
〽ぼつくり折るゝ吉野ざし、德兵衞が一分の、立て初めとこそ知られけり、團七始終をとつくと聞き。
ト德兵衞よろしくあつて、團七思ひ入れあつて、
團七　碎けて見りや他人はねえと、こりや珍しい出合ひぢやな、その詞に違はずば、なんぞ慥かな固めをせうか。
德兵　オヽ、そりや何なりと望み次第。コレお内儀、この連れの繪を見さつしやれ、脊根崎心中の德兵衞が、生玉で叩かれて恥面掻いて居る所。その德兵衞が看板で、この德兵衞が出入留め、斯う打明けて解け合うたは明神の引合せ。ア、忝ない〳〵、シタガ、おりやちつとの間も蒸冠つたこの體を、うるさがつて下んすな。シタガ、剩り物は喰はなんだわえ。
かぢ　あのお人の云はしやる事。寺へ行つた折聞かしやんしたか。百人一首の天智天皇樣も、木の丸どのにござつたげな。人間に浮沈みは、ある習ひでござんすわいなア。
〽會釋に團七心づき。
團七　女ども、あの二人の衆は、昆布屋にござるか。
かぢ　サイナ、三婦さんの云はしやるにはナ、男の所へ戻りかけ、掛り人二人連れて去んだら、氣に入るまい。今度は此方へ連れて去んで、女中一人は引受けう。磯之丞さまは行く〳〵は、大事ない奉公でもさせましたらよからうと、三人づれ、先へ去んでござんしたわいなア。
團七　オヽ、そりや慥か〳〵、慥か次手に、固めはどうする。
德兵　オヽ、腕を引かうか、血を呑まうか。
團七　心が解らにやア役に立たぬぞ。われが性根を見拔いたゆゑ、固めの印、渡さうかい。
〽これ渡さうと浴衣の片袖、引切つて差出し。

ト團七、着附けの片袖を、引き切つて、思ひ入れあつて

コリヤ、これは團七が身に附いた片袖、磯之丞どのゝ世話をする。片腕にする證據の袖。とつとゝ受取れよ。

德兵　オヽ、面白い。互ひに心底包まず隱さず、德兵衞が證據も、また斯うちぎつて渡すワ。

ト德兵衞同じく、浴衣の袖を引きちぎり、

磯之丞どのを袖にせぬと云ふ印。どんな事があらとも、御難儀になる事なら、袖にしないと云ひぬく證據。

兩人　サア、受取れ〳〵。

ト兩人差出す袖を取交して

オヽ、受取つた〳〵。

〽互ひに取替へ、手に通し。

ト兩人、右の袖に引きかけ

團七　おれがこの袖から、肩に引きかけて、世話したら、ナウ德兵衞。

德兵　オヽ、おれも斯う引きかけりやア、氣遣ひは微塵もない。男は當つて碎けろと。

團七　斯うなるからは

兩人　兄弟同然。

かぢ　互ひに心解け合うたで、わたしも心が落ちついたわいなア。サテ、この上は德兵衞さんも。

德兵　大坂へ直ぐに行かうかい。

團七　そんなら德兵衞、

德兵　團七どの。

かぢ　連れ立つて

團德　これから直ぐに。

〽裏表なき氣の片袖、固めはしやんと住吉の、亡者の袖より慥かな袖。

ト此うち三人よろしく身繕ろひする。この時以前の權と八二人、窺ひ出で

兩人　さては二人が。

ト云ひながら、團七德兵衞へかゝるを突き廻し、ポンと返す。お梶、帯を引上げ、三人よろしくこなしあつて、双方見合つて、木の頭。

團德　ドレ、行かうかい。

〽打連れてこそ。

ト三重にて、よろしく

二幕目　釣船三婦内の場

役名＝＝團七九郎兵衛。一寸德兵衛。釣船三婦。玉島磯之丞。こつばの權。なまの八。三河屋義平次。德兵衛女房、お辰。三婦女房、おつぎ。傾城、琴浦。

本舞臺、三間の間常足の二重、眞中のれん口、正面茶壁佛壇、これに進上のビラを貼り、上手一間の障子屋體、下の方一間の腰障子、これへ筆太に「釣船」と書いてあり、軒づらに祭禮の提灯を掛け、箱火鉢、茶呑茶碗、煙草箱、長煙管、燒火鉢を置き、これにておつぎ、小鯵を燒いて居る。琴浦、磯之丞、常足の上にて、笊の中より小茄子の袴を取り居る。この見得よろしく屋臺囃子にて幕明く。

ト下手よりこつばの權、なまの八の兩人、獅子袢纏を着て、笊の獅子を冠り出て來り

兩人　おめでたう。

ト內へ入り、獅子舞ひをしながら、琴浦を見て

權　ありや、琴浦、

ト云ひかけるを、八制して其まゝ門口へ出て、花道へ入る。

琴浦　先刻からも云ふ通り、なんぼお前が云はしやんしても、お仲さんが諦らめられるものかいな。

磯之　イヤ〳〵、それは其方の悋氣と云ふもの。其やうに疑ふものぢやないわいなう。

琴浦　そんなら、なぜお仲さんを連れてござんしたぞいなう。それがわたしや聞えませぬわいなア。

ト煙管にて疊を叩いて云ふ。おつぎ思ひ入れあつて

つぎ　アヽモシ、琴浦さんも好い加減に云ひなさんせ。其やうに悋氣をしさんすのが嫌さに、此方の三婦どのが、お仲さんを、送つて行つたではござんせぬか。お前も粹のやうにもござんせぬ。男に勤め奉公さしたと思へば濟むわいなア。よい加減に仲を直したがよいわいなア。

琴浦　アノ、そりやおつぎさんの云はしやんす事ぢやござんすれど、お仲さんと心中に行かしやんした濟七さんと、仲を直したとて、あまり面白うござんせぬ。九郎兵衛さんも娘御のある內へ、奉公にやらしやんしたが、聞えませぬわいなア。

磯之　アヽ、コレ〳〵、九郎兵衛に何の恨み。斯うして三

婦どのゝ世話になるのも、九郎兵衛からの頼みゆゑ、恨みがあるなら淸七に、たんと云やいなう。

琴浦　サア、その恩のある人に、恨みを云ふのも、お前の業。

磯之　イヤ〱、云やんな〱。世の中に据ゑ膳と鰒汁を喰はぬは、男の中ではないと云ふわいなう。

琴浦　それ〱、その口が憎らしいわいなア。

ト此の時三婦、親仁の拵らへにて、珠數を持ち、大縞の浴衣にて出て來り、門口にて

三婦　女房ども、今戻つた。

ト云ひながら内へ入る。

つぎ　オヽ、こちの人、戻らさんしたかいなア。サア〱、茶々一つ上らんせ。

ト茶を持つて來る。

三婦　なんと留守の間に、祭りの料理は出來てあるか。

つぎ　イヤモウ、お前の云ひ附け通り、鯵の照燒にお作に酢の物まで、すつぱりと出來て居りますわいなア。

三婦　オツと、それでよし〱。喰へる〱。

つぎ　モシ、道具屋の娘御は、首尾よう戻してござんしたか。

三婦　ハテ、人の大事な娘、誘拐したと云はれては、磯之丞どの男が立たぬ。首を縊つた傳八めに、何も彼もなすり附けて、金の事までさらりと濟まし、仲買の彌市を殺した事は、彼の書置でしてやつたと思つたところが、嫌な風說があるて。コレ、お二人も聞かつしやりませ。その書置の手が、傳八の手蹟で無いと、一家一門が云ひ出して、御詮議を願ふとの噂ゆゑ磯之丞さまを大坂の地には置かれまいと、九郎兵衛も氣が附き、おれもさう思へども、差當つて立退かうと云ふ當途もなくやられもせまい。ハテ、どこぞよい處がありさうなものだ。イヤ、さうして端近へ出て、人に顏を見られては惡い、殊に琴浦どのなどは、目がける者があれば猶の事。女房どもも女房どもだ。なぜ此やうに店先へ。

つぎ　それ見やしやんせ。主の云はるゝ通り。それになんぞや榮耀らしい燒餠どころか、殊に依つたら二三年も、別れ〱にならうも知れぬ。暇乞ひと仲直りの汗を、一度にかいて置かしやんせ。

磯之　それぢやと云うて。

琴浦　どうマア奧へ。

つぎ　エヽ、措かしやんせ。何をウヂ〱と琴浦さん、早

う連れまして。

　トこれにて琴浦思ひ入れあつて

琴浦　申し、磯さん、お前に話しがたんとござんす。ちやッと奥へござんせ。

　ト磯之丞の手を取るを振り切り

磯之　ハテ、さうせまいぞ。三婦どのが見てござるわいなう。

　ト逃げようとするを、また手を取り、

琴浦　ハテマア、ござんせと云ふに。

　ト唄になり、兩人思入れあつて、奥へ入る。この唄をかりて花道よりお辰、世話女房の形にて、日傘を持ち出て來り、思ひ入れあつて門口へ來り

たつ　申し、ちと物が承はりたう存じます。この邊に荷物のお世話をなされまする、三婦さんのお内を、御存じではござりませぬか。

　ト門口を明け

つぎ　ハイ、こちらでござります。マア、どなたでござりまする。

たつ　ハイ、わたしでござりまする。

　ト三婦、お辰を見て

三婦　オヽ、これは〳〵。ようござつた。サア〳〵、此方へ入らつしやれ〳〵。コレサ、徳兵衛のお内儀ぢや。

つぎ　オヽ、さうでござんしたか。マア〳〵、入らしやんせ。

　トお辰、内へ入る。

ほんにマア、この暑いのに、ようこそ〳〵。サア〳〵、茶々一つお上りなさんせ。

　トおつぎ、茶を出す。

たつ　これは有り難うござります。モウ〳〵、お構ひなされますな。三婦さまには先程、九郎兵衛さまの處で、お目にかゝりまして、何や彼やお禮を申しましたれど、お前樣には初めてお目にかゝりました。わたしは備中玉島に居りまする、徳兵衛が女房の、辰と申す者でござりまする。

つぎ　イヤ、これは〳〵、暑さの時分、よう上つてござんしたなア。

たつ　マア、何からお話し申しませう。連合ひの徳兵衛どのは僅かな科で國を立退きまして、和泉とやらに居られましたを、皆さん方が世話をして、暫らく大坂の住居。生れつきが荒々しく、喧嘩と云へば一番駈けに、刃物三

味いたすやうな人。定めて何やらかやら、お世話勝ちにござりませうと、ちよつとお禮に上りました。

つぎ　これは〳〵、なんのお禮に及びませう。そりやモウ、お互ひの事でござんす。さうした荒々しいのは、いづ方にも有る事。手前の人も五六年以前までは、それは〳〵喧嘩好きで、假初にも、ちよつと橋詰へ出てもらはうかと、毎日毎晩、それも又直れば直るものでござんす。今では虫も踏み殺さぬ佛性。アレ、あのやうに片時も、珠數を放した事はござんせぬ。腹立つ事がござんすりや、南無阿彌陀佛で消して居られまする。

三婦　イヤモウ、嬶が云ふ通り、常日頃が、これぢや〳〵。

ト珠數を爪繰つて見せる。

たつ　それはマア、結構な事でござりまする。

三婦　イヤお內儀、德兵衞も同道でござりまするか。

たつ　サイナア、女房の思ふやうにもござんせぬ。モシ聞いて下さりませ。お國のお咎めもゆりましたゆゑ、迎ひに參りましたに、ヤレ嬉しやと申す處へ氣も附かず、マア四五日も後から下らう、先へ歸れと素氣もなく申されまするゆゑ、未練さうに附合うても居られませず、是非なう先へ下りまする。

〽話しのうちに、三婦の女房が心附き、云ひ出すしほに、茶を差出だし、

つぎ　マア〳〵茶々一つ。時にお辰さん、あまり馴れ〳〵しいが、お前にちやつとお頼み申したいことがござんすが、なんとわたしに、頼まれては下さんすまいか。

〽裏問ひかゝれば、立ち直つて襟かき合せ。

たつ　玉島の田舍に住みましても、一寸德兵衞が女房辰でござんす。頼むとあるを一寸でも、後へは引かぬが、夫の氣性、マア云うて見なさんせ。

つぎ　そりやマア嬉しうござんす。お禮から先へ申します。定めて德兵衞さんのお話しで、聞いてござんせうが、和泉の國濱田の御家中、玉島兵太夫さまと云ふお方の御子息に、磯之丞さまといふがござんすが、樣子あつて町の奉公なされてござつたところに、若氣の至りで人を。マアこの大坂に置かれぬ首尾。今も今とて、內の人との相談、どうぞこの方を。

たつ　預かりませう。わたしの方へお連れ申しませう。

つぎ　そんなら、預かつて下さんすか。

たつ　ハテ、そこを引かぬが一寸の女房。殊にその親御の兵太夫さまには、ちッとわたしの方にも由緣もござんす。

預かつてお連れ申しませう。

つぎ　そんならさうして下さんすか。ヤレ〳〵嬉しや〳〵、それ聞いて落ちつきました。ドレ、爰へお連れ申して來ませう。

ト立ち上がるを、三婦留めて

三婦　コリヤ待て女房、女賢しうして牛賣れぬと、入らざるおのれが差配立て。賴んでよければおれが賴む。磯之丞どのをお辰どんに、預けてやつては、おれが男が立たぬ。

つぎ　サア、そこを預けるが、あなたのお賴。

三婦　ヤア、吐かすなえ。わりや男の一分を捨てさすか。たわけ者めが。

〽呵り飛ばされもぢ〳〵うぢ〳〵、お辰は聞き兼ね。

たつ　モシ三婦さん、無理に賴まれたうて云ふぢやござんせぬが、わたしがそのお人を預かれば、お前の男が立たぬとは、どういふ譯でござんすえ。但しは女子ゆゑに、まさかの時は役に立たぬと思うてか。まんざらひじりかすりを喰ふやうな、女子でもござんせぬ。一旦賴むの賴まれたのと云うたからは、三日でも預からねば、わたしの顔が立ちませぬ。立てゝ下さんせ、親仁さん。

〽辛い女房の詞の山椒、茶びん天窓を動かする。

三婦　イヤ〳〵、どう云うても、預けては、この三婦が男が立たぬ。

たつ　サア、その立たぬ譯を、承りませう。それには何ぞ樣子がござんせう。そりやマア、どうして立ちませぬな。

三婦　サア、立たぬといふ譯は、お内儀の顔に色氣があるゆゑ。

たつ　なんと云はしやんす。

三婦　德兵衞が思ふにも、三婦といふ者は、いゝ年をして無遠慮な、我が身に火の附いて來たゆゑに、それが切なさに、若い女房に若い男を預けてやつたは、聞えぬとサア、思ひはせまいが、また思ふまいものでもない。あながちこなたに限つて、さうした事はあるまいけれど、思案の外といふ事があるに依つて、また疑ふまいものでもない事ぢやに依つて、人の口には戸が立てられぬ。コレ、必らず腹立てまいぞや〳〵。いつそ、こなたの顔が、歪んであるか、半分そげてあつたら、德兵衞が何とも思ふまい。また世間も濟むといふもの。おりや誓文、コレこの珠數に掛けて、賴みたいこなたの氣性。併し萬が一德兵衞が立たぬ事が出來ると、おれは勿論九郎兵衞までが、

男が廢るといふもの、間違ひはあるまいけれど、外といふ字で預け憎い。マアさう思つて下され。

〽事を分けたる一言に、流石のお辰も詞は出でず、差俯向いて居たりしが、何思ひけん立ち直り、火鉢に掛けし鐵弓の、火になつたのを押取つて、我れと我が手に我が顏へ、ぺつたり當てる燒鐵に、ウンとばかりに反り返る、夫婦もあわて抱きかゝへ、藥よ水よといたはれば、むつくと起きて

　ト文句通りあつて

たつ　なんと三婦さん。この顏でも、思案の外といふ字の、色氣がござんすかえ。

　トこれにて三婦手を打ち

三婦　出來ただお内儀。磯之丞どのを頼みます。

たつ　すりや、預けて下さんすか。

三婦　唐までなりと、連れ立つて下され。

たつ　エヽ、嬉しうござんす。それでわたしも落ちつきました。磯之丞さまの親御兵太夫さまは、備中玉島が御生國、德兵衞どのゝ爲にも親方筋。その御子息樣を預からいでは、連合ひの男が立ちませぬ。わたしも主へ立たぬに依つて、親の產み附けた滿足な顏へ、疵附けて預かる心、推量して下さんせ。

〽語るを聞いておつぎも淚、三婦も淚の横手を打ち。

三婦　ハテ、德兵衞は頼もしい女房を持つたなア。なぜ男には生れて來なんだ。あつたら物を落して來たなア。ソレ女房ども、奧へ伴ひ磯之丞さまを、備中へ下す支度しやれ。

つぎ　合點でござんす。

三婦　お内儀、顏は痛みはしませぬか。

たつ　アイナア、我が手でした事。お恥かしうござります。

〽惜しや盛りを散らせしと、三婦の女房はいたはりて。

つぎ　モシお辰さん、疵が痛むなら、膏藥を上げませうかえ。

たつ　イエ／＼、それには及びませぬ。

つぎ　そんなら、何かの話しは、アノ奧で。

たつ　聞いたり云うたり。

つぎ　話さうわいなア。

たつ　そんなら三婦さん、後程お目にかゝりませう。

　ト唄になり、お辰おつぎ、奧へ入る。

三婦　ドリヤ、お念佛でも申さうか。

　ト佛壇の前へ直る事。この前へ直る事この時花道より

権と八出て來り、門口にて、

権　三婦どのは内にか。

八　イヤサ、お宿にか。

三婦　オヽ、コリヤ二人ともに、まだ祭りをしまはぬか、呑みに來たのか。いま看經を仕掛けて珠數を放されぬ。そこらに樽があらう、ぐつと一杯引つかけて行きやれ。南無阿彌陀佛々々々々々々。膳棚に肴もあらう。南無阿彌陀佛々々々々々々。

権　八よ、親仁の今のを聞いたか。なんだかぶつ〳〵を聞かうより、てめえより云ひ出せ〳〵。

八　エヽ、てめえ云ふと云つて來たぢやアねえか、てめえ云へ〳〵。

権　コレ三婦どん、こなたの内に、貰ひたいものがあつて來た。

兩人　花を下んせ〳〵。

三婦　なんだ、花をくれ。ハヽア、留守の内に、お神輿か獅子でも持つて來たな。

八　オヽ、美しい花を見附けて置いた。

権　さる侍ひに頼まれて、その花を貰ひに來た。

八　それ〳〵、直につまんで來てやらうと受合つて、そのお侍ひを宮の内に待たして置いた。

権　以前なら腕づくといふ所だが、白髪親仁の禿天窓をさうもなるめえ。

八　但しは何とか云つて見る氣か。金にでもする氣があるか。

権　どせう骨を落ちつけて

兩人　挨拶しろ〳〵。

三婦　若い者といふものは、嗜め〳〵。わいらは住吉で初めて逢つたが、もう根性が直つたらうと思つたが、まだ直らぬな。侍ひといふのは、大島佐賀右衛門といふ奴であらうがな。

兩人　マア、そんなものよ。

三婦　コリヤ、それなれば、琴浦には磯之丞といふ、歷とした男があると、云つてくれ〳〵。

権　ヤア、この親仁、おいら達を子供のやうに思つて居やがるな。

三婦　オヽ、おれが目からは子供も子供、稻子のやうに見えるわえ。

八　なんだ、稻子だと吐かしやアがつたな。稻子なら捌ね込んでやらう。

ト奥へ行きかけるを、三婦引ッ捕へ、ちよつと立廻りて兩人を捕へる。此時奥よりおつぎ出て

つぎ　モシ、こちの人、わたしや先刻から聞いて居たが、こりやモウこなさん、堪忍がなるまいがな。

三婦　コレ嬶、五六年願うた後生を無にして、いつそ切つてしまはざなるまいかえ。

つぎ　そんな事もようござんすが、それもあんまり不便なゆゑ。

三婦　イヤ／＼、こんな時切らざア、切る時はあるまいぞえ。

ト　これにて兩人、氣味の惡きこなしにて思ひ入れあつて

權　こりや面白い、切られよう。サア、切れ／＼。

八　こくにも立たぬ老ぼれめ、きつぱ廻しやア、首と胴との生き別れだ。

兩人　サア、切れ／＼。

三婦　もう是非がない、切つてしまふぞや。

兩人　ヤ。

三婦　おれが切るのは、この珠數だ。

ト　ふッつり中途より切り、後へ投げて、

サア、これからは元の釣船の三婦。うぬらに刃物が入るものか。

ト　ちよつと立廻り、兩人を投げて、

コレ、脇差をおこせ。

つぎ　ハテ、もう刃物は入らぬではござんせぬか。

三婦　イヤ、このがらくたは爪の垢とも思はぬが、根ざしの侍ひ佐賀右衛門を、ばらしてしまふ。男の丸腰は見苦しい。寄越せ／＼。

ト　おつぎ、脇差を持つて來る。三婦、脇差を差す。權八は三婦にかゝる。

嬶、行て來るぞや。

つぎ　オヽ、行てござんせ。

ト　三婦、兩人を相手にしながら、花道へ入る。おつぎ、見送つて、

あゝは云ふものゝ、年は取つても居るし、もし引けを取らねばよいがなア。

ト　花道より義平次、駕籠の者を連れ出て來り、門口へ來て、

義平　ハイ、御免なさいまし／＼。

ト　門口を叩く。この時おつぎ出ながら

つぎ　ハイ、どなたでござりまする。

ト門口を明ける。義平次見て

義平　オヽ、こりや三婦どのお內儀、この頃は逢ひませぬ。いつ見てもまめやかな。

つぎ　これは〳〵義平次さん、お前もお達者で珍らしい。なんと思うてござんした。

義平　イヤモ、年寄は子に遣はれます。九郎兵衛が云ふには、惡者どもが頼まれて、琴浦どのを盗まんと、目を掛けるゆゑ、定めて三婦どのにも心遣ひ。四五日こちらへ預かつて置いたなら、燈臺元暗しとやらで、氣遣ひはあるまい。夫婦の衆も氣休めになるゆゑ、迎ひにいつて來いと云つて、駕籠までおこしました。これまではいかいお世話になりました。

つぎ　なんのそのお禮に及ぶ事かいなア。今も今とて惡者どもがとつぱさつぱ。連合ひがその出入りに行かれました。二三日もこの內を明けて、あいらに身を明かす心得で、九郎兵衛どのゝ魂膽で、俄の迎ひでござんせう。舅御のお前に渡せば、慥かなもの。奥にでござんす。ドレ、呼んで來ませうわいなア。

ト奥へ入る。義平次思ひ入れあつて、

義平　コレ〳〵駕籠の衆、隙は取らせぬ。まちやつと待つて下され。

駕屋　ハイ〳〵、畏まりました。

トこの時、おつぎ、琴浦を連れて出て來り

琴浦　そんならわたしは、九郎兵衛さんの方へ行かねばならぬかえ。

つぎ　サア〳〵、二三日のうちぢや、得心してござんせ。

琴浦　わたしや九郎兵衛さんに譯を云うて、磯さんの方へ。

つぎ　それも合點。サア〳〵、ござんせ〳〵。

義平　サア〳〵ござれ〳〵。コレ駕籠の衆、靜かに頼みます。

ト琴浦を急がせて駕籠へ乘せる、

そんならお內儀。コレ、駕籠を早くやつてもらひませう。

ト義平次、思ひ入れあつて、駕籠舁きを追ひ立て〳〵、花道へ入る。この時奥より磯之丞、お辰出て來り

たつ　ハテ、何もかもよろしうござります。御案じなさる事はござりませぬ。

磯之　そんならお內儀、わしやモウ行きまする。どうぞ琴浦の便りを、早う寄せて下されいなう。

つぎ　サア〳〵、それも三婦どのと談合して、直ぐに後か

ら云うて上げまする。

たつ　そんならおつぎさん、何も心遣ひをさしやんすな。

サア〳〵、參りませう〳〵。

磯之　行くは行くけれど、どうも心が。

ト門口へ來る。これなお辰留めて

たつ　ハテ、よろしうござります。わたしに任せてお置きなされませ。

つぎ　磯之丞さまのお身を、どうぞ。

たつ　しつかりと預かりました。

磯之　おつぎどの、又の便りを。

たつ　サア、參りませう。

ト唄になり、兩人、花道へ入る。

つぎ　ヤア〳〵嬉しや〳〵、磯之丞さまを備中へ送り、琴浦さんも九郎兵衛さんの方へ預けたりや、やう〳〵落ちついた。ドリヤ、お燈火でも上げようか。

トこの時花道の揚げ幕にて

團七　マア〳〵父さん、待ちなせえ〳〵。

徳兵　コレサ、料簡さつせえ〳〵。

ト云ひながら、三婦をなだめながら九郎兵衛、徳兵衛出て來り、

團七　コレ〳〵父さん、たかゞ逃げる侍ひを、相手にするにやア及ばねえ。

徳兵　大人氣ねえといふものだ。

三婦　イヤ〳〵、構はずと退いてくれ〳〵。

兩人　マア〳〵、料簡さつせえ〳〵。

ト云ひながら、門口へ來る。おつぎ出て、

つぎ　九郎兵衛さんに徳兵衛さん、ようござんした。さうして出入りの樣子は、どうでござんした。こちの人が引けを取りはしませぬか。

團七　イヤ〳〵、年は取つても氣遣ひな事はねえ。ナウ徳兵衛。

徳兵　さうとも〳〵。昔に變らぬ達者者。八や權を蓮池へ、どんぶりといはしたゆゑ、侍ひめは逃げてしまつた小氣味のよさ。

つぎ　さうでござんしたか。ヤレ〳〵嬉しや〳〵。サアサア、入んなさんせ。祝ひにわッさりと、酒にせうわいなア。

トこれにて皆々内へ入る。

三婦　コリヤ女房、よく氣が附いた。徳兵衛には取分け、お内儀の事を話さにやならぬ。九郎兵衛には又安堵さす

事がある。サア、マア奥へ來やれ。
徳兵　ドレ、お内儀の御馳走にあづからうか。
　ト三婦徳兵衛は奥へ入る。團七とまり思ひ入れあつて
團七　お内儀、琴浦どのや磯之丞さまは、見えられぬが、どこぞへ行かれたか。
つぎ　サレバイナア、どうやら世間か騷々しいゆゑに、氣を揉んで居たところ、徳兵衛さんのお内儀、お辰さんがござんしたゆゑ、磯さまを預け、備中へ遣りました、又そこへお前の方からの迎へゆゑ、たつた今琴浦さんは。
團七　ムウ、すりやアノ、誰れが迎ひに來ました。
つぎ　ハテ、お前の舅、義平次さんが見えられて、九郎兵衛が云ひますには、四五日戻して下されと、駕籠まで持つてござんした。
團七　ヤ、、、、そんなら、この九郎兵衛がと云うて、舅どのが。ムウ。して〳〵、その駕籠はどつちへ。
つぎ　慥かに南の方へ。
團七　それを遣つては。
　ト團七駈け出すを、おつぎ留めて
つぎ　コレ待たしやんせ。そんならお前は、迎ひにごさんした事を知らずにか。
團七　知つた知らぬは後での事。
つぎ　イエ〳〵、それを聞かぬうちは。
團七　エ、、面倒な。
　トおつぎを振り拂ふ拍子に、脇差を突き、逸散に花道へ行く。おつぎ、ウンと云つて倒れる、團七舞臺を見て
お内儀、この煙草入れに藥がある。これ呑んで下んせ。
　ト煙草入れを抛る。
〽長町さして、
　ト三重にて、團七、逸散に花道へ入る。これにてよろしく、

三幕目　長町裏殺しの場

役名――團七九郎兵衛。一寸兵衛。三河屋義平次。

本舞臺、正面黒板塀、見越しの松、上手へ寄せて、剣れ釣瓶の井戸、舞臺へ五間切り穴の誂らへの泥船。日覆より松の吊り枝よろしく、御輿太鼓にて幕明く。
ト花道より、義平次、籠屋を先に、追ひ立て出て來り、

義平　サア／＼、早くやつて下せえ／＼。

ト云ひながら急ぐ。この時揚げ幕にて

團七　オヽイ／＼。

ト渡り拍子になり、花道より團七、追ひ駈け出て來り、花道にて駕籠と入れ替る。此うち本舞臺まで擔ぎ來る。

棒鼻を押へて、

この駕籠後へ戻してくれ／＼。

義平　なんだ、おれがやつた駕籠だ。構はず先へやれ／＼。

團七　イヽヤ、戻して。

義平　やれ／＼。

ト兩人爭ふ。團七、駕籠を下に置かせ、キッとなる。

義平　ヤイ九郎兵衞、わりやこの駕籠をなんとするのだ。

團七　コレ、申し父さん、この駕籠のこの女中は、こんたも知つての通り、わしが爲には、大恩あるお方から預かつたお人。それを今連れてごんすのは、ハヽア、こりやてつきり惡者どもに頼まれて、金にする氣でござらうが、そりや惡いぞえ／＼。さうされてはこの九郎兵衞の顔が、どうも立ちませぬ。コレ父さん、こんた、この中もこの中とて、内本町の道具屋で、田舍侍ひの拵らへにて、似せ香爐を持つて五十兩の騙り。

ト義平次、駕籠の方へ向いて、云ふなといふ思ひ入れ。

サヽ、それもマヽようごんす。併し又惡いと云うてからが、嗜なむ心もござるまい。見下げ果てた。これも後の事サ。何もかも云ひますまい。ぢやに依つてこの駕籠をナ。コレ、駕籠の衆、今聞いて居る通り、親仁どんの氣も直つた。大儀ながら戻して下せえ／＼。

駕舁　ハイ／＼。

ト舁き上げる。

義平　ヤイ／＼／＼、待て／＼。

籠舁　ハイ／＼。

團七　サ、ヤレ／＼。

義平　エヽ、おれが雇つたこの駕籠、やる事はならねえぞ。

トこれにて駕籠を元の處へ下ろす。

ヤイ九郎兵衞、嗜なむ心がるまい事か、見下げ果てたとはよく云つた。忝ない。その愛想づかしを、待つて居たのだ。六年以來おれが娘を女房にして、なぐさみ物にして居る、サア揚代を貰はう。ヤイ、慈な恩知らずめが。コリヤ、よく聞けよ。おのれは元、宿無し團七と云つて、粹方仲間の小歩き。貰ひ喰ひして居たを、おれが引上げて、堺の濱の魚賣りをさせて置いたぞよ。又その上に娘

のお梶と乳繰つて、市松といふ子までひり出し居つたぢやないか。月々の當がい物を取るのが好さに、目をねむつて居るうちに、乳守の町で喧嘩を仕出して、和泉の牢へ百日餘り、入つて居つたぢやないか。其うち女房や子は、誰れが養つて居たと思ふ。

團七　サア、それはみんな、お前樣のお世話で。

義平　エヽ、吐かすなえ〳〵。その入用を埋め合さうと思つて、金儲けにかゝれば、おのれが道具屋の內に居るとて、よくもあれを上げさせ居つたな。

團七　イエ〳〵、それはその時の、ツイ。

義平　イヤ〳〵、吐かすかいなう。コレ、今日琴浦をちよろまかして來たのは、惚れてござる佐賀右衛門どのに渡して、金にするのぢやわやい。

團七　サ、その金も、わしがどうでもする程に、この女中を人手に渡しては、どうも顏が。

義平　顏が立たぬか。オヽ、さうであらう〳〵。コリヤ、長々親子の者が養はれて居た、アノこの、この、この顏が立たぬか。よい男だ。立派な者ぢや。ドレ〳〵。

　ト顏をこちらへ向けて

但しは又、この、この頰桁が立たぬか。ごくにも立たぬ。

、、、あんだらを吐かしやアがるな。

〽立蹴にはつたと蹴られても、舅は親と無念を堪え、齒を喰ひしばり居たりける。

　ト義平次、團七を蹴飛ばす。團七、思ひ入れあつて氣を替へ

團七　イヤモ、段々の仰せ、一々御尤もでござります。何と申しませうやら、返す詞もござりませぬ。親子の者が永々のお世話の上に、又しても〳〵、金儲けを妨げまする段、眞平御免下さりませ。モウ〳〵、この上ふッつり金儲けの邪魔は致しませぬ。その替りに、アノ女中ばかりは。

義平　イヤ、ならぬ。

團七　そこをどうぞ。

義平　エヽ、ならぬ、ならぬ、ならぬわい。

　ト團七、思ひ入れあつて、

團七　サア、素手でお詫びは致しませぬ。友達が寄りまして、頼母子講をしてくれました金が、爰に三十兩ござりますれば、これをお前樣に差上げますが、身の代に取つた思し召しで、どうぞ琴浦どのを三婦の方へ、お戻しなされて下されまし。外々へやりましては、どうもこの九

郎兵衛が顔が立ちませぬ。慈悲ぢや情ぢや。コレ父様。

ト袂を引くを振り放して、外を向きながら、義平次思ひ入れ。團七も思ひ入れあつて

〽手引き袖引き膝を突き、親といふ字は是非もなや、義平次も三十兩、當分取るに少しは和らぎ。

ト義平次、思ひ入れあつて、

義平　琴浦を佐賀右衛門どのに渡してやれば、百兩が物はあるけれど、かゝりや繋がる娘の縁。只やつたと思ひ切り、三十兩で返してやらう。

團七　すりや、お戻しなされて下さりまするか。

義平　戻してはやるけれど、其方、その金持つて居やるか。

團七　イヤモ、慥かに爰に持つて居ります。

義平　よもや、騙しはせまいの。

團七　なんの騙して、よいものでござりませう。

義平　そんなら、それに違ひもあるまい。コレ〱駕籠の衆、いま戻つて來た處まで、その駕籠を返して下され。

駕皆　ハイ〱、畏まりました。

義平　駕籠賃も、先で存分貰はつしやい。

駕一　有り難うござります。こんな時に貰はねば、ナウ棒組。

駕二　それ〱、水も呑む事は出來ねえ。サア〱、やらかせ〱。

ト駕籠は花道へ入る。團七見送つて居る。義平次思ひ入れあつて、

義平　コレ聟どの、駕籠は眞直ぐに、三婦の内へ戻した。サア、約束の物を。

團七　ヘイ、約束の物とは。

義平　ハテ、氣の附かない。ソレ、彼の物よ。

團七　彼の物とは。

義平　エヽ、物覺えの惡い、三十兩の金を受取らう。

團七　ハイ、その金と申しては。

義平　サア、それを出して下され。

團七　イヤ、その金は。

義平　コレ、心が急くワ。早う渡しやいなう。

ト此うち團七もぢ〱して、困る思ひ入れ。

團七　イヤ、その金は、只今爰にはござりませぬ。

義平　エヽ。

ト義平次、恟りして、後へ引くり返る。

團七　只今宿へ歸りまして、才覺いたし參りまする。

トこの時義平次、やう〱腰の立つ心にて、團七の襟

髪を捕へて引きつけ

義平　なんと吐かす。その金が無いとは、おのりや親を、うま／＼一杯騙し居つたな。エヽ、腹が立つ腹が立つ。

ト團七を捻ぢ伏せる。

團七　申し、左様ではござりませぬ。内へ歸れば心當りがござります。マア／＼、爰を放して下さりませ。

義平　エヽ、さう云つて爰を逃げようと思つて、さう甘くはさせぬぞ。おのれ、どうしてくれう。この腹癒せに、いつそ斯うして。

〽斯うしてくれると捻ぢ廻し、踏んだり蹴たり擧句には、砂に擦り附け石に打ちつけ、引廻し／＼。

ト砂へ捻ぢつけ、石にてくらはし、踏んだり蹴たり、いろ／＼に苛なむ。この時腰に挾みし雪駄落ちる。これを義平次見て取り

こりやなんぢや、雪駄ぢやの。イヤ、おのれは大層な物を穿き居るな。この親はこの年になるが、二十四文の藁草履、こんな物をへけらかして、それで面が立たぬといふのか。アノ、この面が。

ト雪駄で兩方の頰を突く。團七ムッと思ひ入れ。

なんぢや／＼。おのれは親を睨め居るか。親を睨むと、平目になるぞよ。無念なか、口惜しいか／＼。ヤレヤレ可哀さうな。

トこれにて脊中を撫で

なんぢや泣くか、吠えるか。コレ、おのれのやうな畜生には、この雪駄の皮が分相應。

ト雪駄にて散々に團七を打つ。團七、無念の思ひ入れにて、その手を取り

團七　こりやモゥ、どうでも。

ト團七脇差の柄へ手をかける。義平次、悔りしながら、思ひ入れあつて

義平　なんだ／＼。コリヤ、何をするのぢや。われはおれを切る氣ぢやの。

トこれにて團七思ひ入れあつて、脇差を後へ隱す。

團七　どう致しまして、左様な事が。

義平　イヤ／＼、切る氣ぢやに依つて、脇差に手を掛けたのぢやな。こりや面白い。切るなら切れ／＼。切られよう。サア、爰から切るか。

ト尻を捲り

イヤ、爰から切るか。サア、切れ／＼。

團七　どう致して、左様な事が。



安政二年五月　中村座上演



市川小團次の團七　中山市藏の義平次

義平　イヤ〳〵、切る氣だ。サア、切れ〳〵。古いせりふ
だが、切つて白けりや錢は取られえ。サア切れ、切れ、
この脇差で、おれを切れ〳〵。
ト これにて、脇差の柄を押へて、思ひ入れあつて
サア、この脇差で切れ〳〵。
ト 脇差を持ち添へ、
コレ、切れ、切れぬか〳〵。
團七　なんとして、お前様を、
義平　イヤ殺せ、サア、切つてもらはう。コレ、よく聞け
よ。舅は親ぢやぞよ。コレ、親を切れ。一寸切れば一尺
の、竹鋸で引廻す。三寸切れば三尺高い木の空で。逆磔
ぢやぞよ、サア切れ、これで切れ〳〵。
團七　どう致しまして、危ない〳〵。
ト いろ〳〵捨ぜりふ。放さんとする思ひ入れ。此はず
みに思はず義平次を一刀切る。義平次、いろ〳〵と摑
み合つて居るうちに、血の流るるを見て
義平　ヤア、切つた。親殺し〳〵。
ト 花道の方へ逃げようとするを、團七、口を押へて、
キッとなつて、よく〳〵見て、
團七　こりや、手が廻つたか。

ト 思はず手を放す。
義平　人殺し〳〵。
ト 駈け廻るゆゑ、團七も悄りして、また義平次の口を
押へ、思ひ入れあつて
團七　こりやモウ、九郎兵衛が一生懸命。舅どの、堪忍さ
つしやれ。
ト 云ひながら、泥船へ切り込み、花道よき所へ行き、
キッと見得。これより鳴り物になり、兩人よろしく立
廻りあつて、トゞ止めを刺す。このキッカケよろしく、
後ろ灯入りの花車など、屋體、祇園囃子にて通る。團
七思ひ入れあつて、死骸を片附け、井戸にて水を汲み、
體を洗ふ事よろしく、脇差の鞘を尋ねる。よき處へ、
上手より、皆々御輿を擔ぎ出て來り、
皆々　ちやうさや〳〵、ようさ〳〵〳〵。
ト 云ひながら舞臺を廻り、又よき所にて花道へ入る。
團七この中へ交り、舞臺にて辷り、尻居に撞となりて
思ひ入れ。
團七　惡い人でも舅は親、免して下んせ。
〽八丁目とぞまぎれ行く。
ト 團七は花道へ入る。この時上手より、徳兵衞出て來

り、舞臺よき所にて、團七の雪駄に躓き、拾ひ取り、透かし見て思ひ入れあるを、木の頭。かすめて渡り拍子を打込み、よろしく、

ひやうし幕

大詰

田島町團七内の場

役名——釣船の三婦。一寸德兵衞。團七女房、お梶。同一子、市松。役人、堤藤内。團七九郎兵衞。

本舞臺、一面の平舞臺、向うのれん口、上手、押入れ。ズッと上手に一間の障子屋體、いつもの所に門口、その外に腰障子、すべて團七の體。聖天にて幕明く。

ト直ぐに床の淨瑠璃になり

〽妻のお梶は父親の、敢へなき最期常からの、心ゆるとはいひながら、悲しさ餘り今日も又、墓參りして立歸る。

ト聖天になり、お梶、日傘を持ち、向うより歸つて來ると。

〽子供遊びのわやく同士。

ト下座より市松に大勢の子供附いて、ワヤ／＼喚きながら出る。

子一　また市松が擲き居つた。

子二　わしもぶたれた。叩き返す／＼。

ト　お梶、この中へ入り

かぢ　これはしたり、また市松かせぶらしたか。堪忍しや堪忍しや。ホヽ、憎い奴ぢやの。わしがぶち返してやりませうぞや。

子一　此方の町へ來をつたら、寄つてかゝつて

皆々　縛つてやるぞよ。

市松　おのれ、その口止めてやらう。

ト追ひかけうとする。子供皆々逃げて入る。お梶、市松を止めて

かぢ　コレ市松、あの子達に怪我させたら何とする。ほんにマア、親に似ぬ子は鬼ッ子と、九郎兵衞どのゝ一徹によう似た事ぢやなア。祖父樣が七日後に、長町裏で殺されその切り手を詮議最中。意趣ある者の覺えはないかと、母は每日お上へ呼ばれ、心も心ならぬのに、如何に子供ぢやというて、あんまりな惡戯ぢやぞよ。そしてマア、父樣は其方を置いて、何處ぞへござつたのかえ。

市松　イヤ、父様は奥に寐てぢや。おれが敵討の芝居の眞似をしてゐたら、彼奴等が親の敵と云うて、おれを擲き居つたに依つて、祖父様の敵と云うて擲き返したのぢや。母様、祖父様を切つた奴が知れたら、おれが殺してやるぞえ。

トこれにてお梶、思ひ入れ。

かぢ　其方さへそれ程に、祖父様の事思やるに、わしは常から愛想が盡き、疊の上では死なつしやるまい。ひよんな死をすると思うたゆゑ、切つた奴を何んとも思はなんだ。思へばわしは不孝な者。悪い人でも親は親。澤山さうに思つたのが、今では口惜しい、悲しいわいなア。

〽口說き涙の折からに。

トお梶、市松を内へ入れ、すかす思ひ入れ。

〽心の合うた友鳥、なきに立寄る一寸德兵衛。

ト唄になり、向うより德兵衛、肩に貫錢を擔ぎ、笠を持ち、旅形にて出て、直ぐに舞臺へ來り

德兵　コレ、九郎兵衛は内にか。玉島へ下るゆゑ、暇乞ひにちよつと來たわい。

ト内へ入る。お梶、見て

かぢ　オヽ、誰れだと思へば鹽原さん。これからお下りでござんすか。暑い時分に、大抵ではござんせぬなア。どうぞお辰さんへも、よろしう言傳して下さんせ。

德兵　イヤモウ、言傳受取つても死人同然、ついに云うた事がない……イヤ、その死人で思ひ出した。親仁を殺した者は、まだ知れぬかいの。

かぢ　サア、お上にも御詮議が強いけれど、未だに知れませぬわいなア。

德兵　さうであらう〳〵。殺して物を取つたとか、その晩に大きな出入りでもあつたなら、詮議の手がゝりにもなるであらうか、あの親仁に意趣ある者といへば、大坂中に數限りなくある。すりや知れぬ筈ぢや。定めてその事で九郎兵衛も、心遣ひして居やるなう。

かぢ　推量して下さんせ。主もホッとしたかして、寐てばかりゐるわいなア。どうで切つた者は知れますまい。いとしや犬死でござんせうわいなア。

ト泣く。

德兵　ハテ、もう泣かぬがよい。もう諦める事ぢやて。時に、九郎兵衛に、ちよつと逢つて行きたいが。

かぢ　ほんに、起しませうわいなア、

德兵　よく寐てゐるなら、マア後でもよいて。

かぢ　イエ〳〵、また後で叱られるわいなア。コレ市松、父さんを起しておぢや。

市松　アイ〳〵。

ト一間へ入り

コレ父様、小父様が來てぢや。コレ、起きさつしやれいなう。

團七　ナニ、德兵衞が來たとか。そこへ行て逢はうかい。

ト唄になり、障子屋體より團七、誂らへの形にて出て

オヽ、德兵衞か。旅立ちの形で、船にでも乘るのか。

德兵　オヽ、玉島へ下るのぢや。こんたもこの間の取込みで、さぞ草臥れたであらう。

團七　推量してくれ。舅の惡死で、體がぶき〳〵云ふほど草臥れた。

德兵　尤もだ〳〵。なんと、氣休めに、おれと一緒に、玉島へでも行かぬかい。

團七　ハテ、それどころかい。

德兵　さうぢやないぞえ。もや〳〵のあつた後では、キツと大煩ひが出るもの。おれの詞に附いて、下つたらどうだな。

團七　何を益體もない。備中三界へ、何しに行くものかい。

德兵　イヤ、まんざら用がないでもあるまい。おれが女房に磯之丞さまを預けてやつたからは、見舞ひがてら下つても、大事あるまいぞよ。

團七　ハテ、顏に燒鐵まで當てゝ、預かつてくれたお辰どん。なんの心配する事があるものか。殊におれは、船は嫌ひぢや。板子一枚下は地獄。海上はおりや怖いわい。

德兵　ナニ船が怖い。こりやアおかしい。人は見かけに依らぬ、命は惜しいものぢやなア。

團七　オヽ、取分けこの九郎兵衞は、男だに依つて命が惜しい。大恩うけた兵太夫さまが、餘所ながら賴むと云はれた一言。磯之丞さまの歸參が叶ひ、親御の手へ渡すまでは、この九郎兵衞は命が惜しいわい。

德兵　サア、その大事の命ぢやに依つて、大煩ひの起らぬうちに、おれと一緒に行かぬかと云ふ事よ。

かぢ　さうでござんすとも。主に煩らはれますと、わたしや市松がうろたへるわいなア。こりや德兵衞さんの云はしやんす通り

團七　エヽ、何吐かすか。大坂を離れては、和泉の樣子、磯之丞さまの歸參の手蔓が知れうか。なんの女の小差出た。すつ込んでゐやアがれ。



安政二年五月　中村座上演　市川小團次の



圖七　岩井粂三郎のお梶　片岡我童の德兵衛

トこれにてお梶、つンとする。徳兵衛、思ひ入れあつて

徳兵　コレ　内儀、お茶一つ下され。

かぢ　アイ／＼。

ト思ひ入れあつて奥へ入る。徳兵衛、あたりを見て、腰に挾みし雪駄を出し

徳兵　コレ九郎兵衛、山形に丸じるし、この雪駄、覺えがあるか。

ト突出す。團七、思ひ入れあつて

團七　そりやアおれの雪駄だが、それがどうぞしたか。

徳兵　これがお主の雪駄なら、おれと一緒に玉島へ、下つたがよいと云ふ事よ。

團七　ムウ、それがおれの雪駄なら、なんで玉島へ行かにやアならぬのだ。

徳兵　コレ九郎兵衛、この雪駄は、味な所で拾つたぞよ。イヤサ、長町裏の畑中で。

團七　ヤ。

徳兵　サ、それぢやに依つて玉島へ、一緒に下れと云ふ事よ。

ト團七、思ひ入れあつて

團七　ムウ、イヤ、その雪駄は、この中、練物を見ようと思つて、小間物屋の見世へ上がつたら、片足を犬に取られた。大方それを畑中へ、咬へて行つたものであらうよ。

〽けんもほろゝに顏色も、人を殺せし體もなし、徳兵衛は目もうるみ、流るゝ汗と共に拭きとり。

徳兵　コレ、聞えぬぞよ九郎兵衛。こんたと住吉で逢つた折、腕を引く代りだとて、取交したこの片袖、おりや大事にかけて持つてゐるぞよ。これまで兄弟同然に、心底明かす友達仲、なぜ物を隱してくれる。コレ、おれが雪駄も山形に丸じるし、片足見えぬがお上へ廻り、詮議の種になつた時、その罪人は徳兵衛と、身に引請けて名乘る覺悟。これ程までに思ふおれに包み隱すは曲がない。なぜ斯う／＼と譯を明かし、相談してくれぬぞい。但しこの徳兵衛の性根魂ひ、氣遣ひとでも思ふのか。そりやあんまり、聞えぬぞよ／＼。

〽親の時さへ泣かぬ目に、恨みの涙はら／＼と、保ち兼ねたる殊勝さよ。九郎兵衛も身の大事、粗忽にも明かされず、差俯向いて居たりしが。

團七　段々お主の志し、惡くは受けまい。忝ない。ハテその雪駄が、惡い所にあつたものなう。

徳兵　コレ、こんた一人の身ぢやないぞよ。泣くと食はうといふ子はあり、お内儀はまだ若し、身をしまふやうな事仕出して、取返しがつくと思ふか。それぢやに依つて身に引請ける覺悟の雪駄。

團七　ハテ、引受けさして見てゐるやうな、九郎兵衞でもあるまいわい。元より身に覺えない事。氣遣ひせずと、もう船も出る時分、早く下つて磯之丞さまを、よう世話をしてくりやれ。

徳兵　そんなら、どうあつても明かさぬのか。

團七　ハテ、もう何も云ふ事はない。日のたけぬうち、早く行くがよい。ドレ、おれも見かけた、夢でも見ようか。

〽入らんとするを、思ひがけなく。

徳兵　九郎兵衞、捕つた。

團七　なんと。

ト思ひ入れあつて、

徳兵衞、何を捕つた。

徳兵　イヤ、蚤を取つた。

團七　ナニ蚤を……ハテ仰山な、蚤の取りやう。

徳兵　コレ見い。蚤といふものは愚かなもので、忽ち命を取られるを知らいで、體の中を這ひ廻る。なんぼ飛ぶ程の術を持つても、天下の息のかゝつたこの指で、斯う押へられては叶ふまい。取られぬうちにこの蚤も、早う高飛びすればいゝに。ナウ九郎兵衞。

團七　ハテ、その蚤も、チッと縫目の中に居りやア、捕へられる事もあるまい。生仲にうぢついて、飛び歩くゆゑ押へられる。それに又その蚤に。コレこの刀のやうな針があると、切つて〳〵切り拂ひ、唐天竺へも一つ飛び。一寸の蟲にも五分の魂ひ一寸の蟲にも、ナア徳兵衞……其うち、逢はう。

〽さらばと云うて入りにける。

ト團七、思ひ入れあつて奥へ入る。徳兵衞こなしある所へ、お梶、茶を持つて出て

かぢ　生憎湯がさめてゐるに依つて、お茶が遅うなつたわいなア。

徳兵　ハテ、その茶も水同然、おいらが志しも水の泡となつたわい。せめてこなさんなと、喜んでもらはうか。

かぢ　なんの事やら解らぬが、常々からお前の志し、わたしや嬉しう思うてゐるわいなア。

徳兵　ハテ、九郎兵衞と念頭するも、堺でこなさんと初めて逢つた時、ハテあの女房は可愛らしいと……ハ、、、

ハ。それも何の役に立たぬ。ドレ、玉島へ下らうか。

ト立ち上がる。お梶見て

かぢ　コレ／＼徳兵衛さん、お前の帷子は、どこもかしこ綻びて、袖廻りがバラ／＼ぢやぞえ。それ着て船へは乘られまい。

徳兵　ほんになア。綻びた所を括つて置いたが、みんなほどけたと見える。なんと一針、縫つちやア下んせぬか。

かぢ　オヽ、易い事でござんす。ちよつと脱ぎなさんせ。

徳兵　ハテ、斯うしたまゝで縫はれぬかな。

かぢ　エヽ、マア半氣な。其まゝで縫はれるものかいなア。ちやつと脱ぎなさんせえなア。

徳兵　でも、内證が北國ゆゑ。

かぢ　ホヽ、自慢で加賀の下帶かえ。

徳兵　ハテ、その隣の越中よ。

ト帷子を脱いで裸になる。合ひ方になり、お梶、針箱を出し、縫ひにかゝる。徳兵衛、思ひ入れあつて

徳兵　ハテ、いつ見てもこんたは美しいの。九郎兵衛が大坂を離れぬのも、無理ではないかい。憎いほど賦がある。

かぢ　何をマアじやら／＼と。早う玉島へ去んで、お辰さんにさう云うて、喜ばして上げなさんせいなア。

徳兵　イヤモウ、革足袋のやうに焦げたお辰の顏、二度と見る氣はないわいの。

かぢ　でも、久しぶりで、しつぽりと面白からうぞえ。

徳兵　面白けりやどうぞ思つてか。エヽ、茲な畜生め。

トお梶の膝を抓る。

かぢ　エヽ、何さんす。痛いわいなア。

徳兵　なんの痛い事があるものか。おりやこなさんの綻びを、藥になるなら縫つてやりたいわい。

かぢ　コレ、惡い事さんすと、針で突くぞえ。

ト此うち三婦笠をかむり、表へ來かゝり、樣子を聞いてゐる。

徳兵　ハテ、有やうは九郎兵衛を、玉島へやつてから後でと思うたが、もう斯うなつては堪へられぬ。

トお梶へ抱きつく。お梶、惘りして突き退ける。奥より團七出て、眞中へヌッと立つ。徳兵衛、思ひ入れあつて、帷子を取つて着て

サア、去ぬとせうか。大坂に居たとて、花實の咲く事はあるまい。早う玉島へ來て、女房の顏でも見ようか。

ト思ひ入れあつて行きかける。

團七　徳兵衛待て。

徳兵　なんぞ用か。
團七　用がある。そこへ直れ。
徳兵　仰山に出かけたな。コレ、お内儀との事なら、愚圖愚圖云ふにやア及ばぬ。疾からおれは惚れてゐるが、友達の義理を思ひ、齒節へも出さなんだ。時節もあらうと思つたが、其方から隔てるやうになつては、義理も瓢箪もないといふもの。サア、いつそお内儀をおれにくれるか。さもなくば胸にある事、殘らずそこへまき出せ。
團七　ハヽヽヽ、頼もしさうな事を云つても、女房を欲しがる根性で先刻の樣子がサラリと知れた。欲しかア女房も遣らう。大事の事も云つて聞かさう。見事われが、聞くか、貰ふか。
徳兵　ハテ、二種ともにおれの望み。聞かうわい。貰はうわい。
團七　オヽ、遣るぞよ。
徳兵　貰ふぞよ。
團七　サア
徳兵　サア
兩人　サア／＼。
〽身拵らへする表にも、三婦は身構へまさかの時、走り込まんと控へゐる。
ト團七、懐より片袖を出し、引裂き、叩きつける。徳兵衞も片袖を出し、同じやうに叩きつける。兩人思ひ入れあつて
團七　互ひに固めを破つたからは
徳兵　心は殘らぬ。イザ
團七　イザ
兩人　イザ／＼
〽まつかうしてと切りかけるを、丁と受けとめ受け流しはつし／＼、と打ち合ふ太刀音。
ト兩人拔いて立廻りになる。お梶、捨ぜりふにて、あちこちと止めに廻る。三婦、思ひ入れあつて笠を取り、内へ入り、二枚屏風を取つて二人の中へ入り、白刃の上へかぶせて上へ乘り
三婦　二人とも、待つた／＼。
團七　ヤア、邪魔な所へこんたは三婦どん。
徳兵　怪我せぬうちに。
兩人　退いた／＼。
三婦　イヽヤ退くまい。切るなら切れ。堪忍ならざア、おれを切れ。

團七　コレ親仁どん、この喧嘩の邪魔するは、德兵衞の肩を持つ心か。

三婦　ハテ、肩を持つも脊を持つも樣子を知らぬ上の事。知つて非道に與みせうか。最前から控へてゐたも、料簡思案を見ようばつかり。果し合ひとは、若い〳〵。

團七　ヤア、女房を盜まれ男が立つか。若くとも年寄りでもこなたは、堪忍する心か。

三婦　オヽ、堪忍するとも〳〵。コレ九郎兵衞、世界に堪忍ならぬといふは、腹の減つた時だけぢや。先づ間男の行ひやうに、上中下の三段ある。其うち下の料簡といふは、今こんたがするやうに、果し合ひか、重ねて置いて、四つにするのが下の下の思案。なぜと云へ。男らしい事をしたと云はれうとすれば、盜まれた鼻毛の尻が、世間へパッと立つ。そこを思うて內證で、耳を削ぎ鼻を削ぎ、坊主にするを好いやうに思へど、これが又第二番目の中の思案。極上々の思案といふは、堪忍の胸を撫つて、世間へも知らさぬやうに內證で、さらりと暇やつてしまふのが、大極上々箱入りの思案といふ。元より不義があつたではなし、口先のてんがう。それを云ひ立て討ち果すは、彼の極々惡い下の下の思案。そこを思つてこの出入り。貰ひに來た。サア、おれにくれ、この親仁が貰つたぞよ。

〽貰ひかけられ九郎兵衞も、思ひ廻せば我が身にも、大事抱へてこれしきに、命を果すやうなしと、傍に立つて硯箱、さら〳〵さつと書き認め。

ト團七、思ひ入れあつて白刃を納め、狀を書いて

團七　コレ、三婦どの、こなたを立てゝ何にも云はぬ。これを渡して下さりませ。

〽書いた一通投げつけて、一間へこそは入りにけり。

ト書附けを投げつけ、思ひ入れあつて奧へ入る。お梶、取上げて

かぢ　ヤア、こりや暇の狀ぢや。去り狀ぢや。

〽はつとばかりに泣き沈む。

三婦　エヽ、何をメロ〳〵。覺えがあらうがあるまいが、この內には置かれぬ。立つた〳〵。

かぢ　サア、立ちは立たうが、市松はどこに居る。市松々々。

市松　アイ〳〵。

ト駈けて出るを抱く

三婦　サア、一寸にはこの三婦が、相手になつて存分云ふ。サア、うしやアがれ。

ト三人思ひ入れあつて、外へ出て

かぢ　三婦さん、德兵衞さん、お前方の云はんす通り、連合ひを騙して、暇の狀を取つたからは、九郎兵衞どのは、親殺しはなりませぬかえ。

三婦　舅は親、聟は子、親殺しになつた時は、市松とこなたが竹鋸で引かれればならぬ。それが悲しいばつかりに、德兵衞に不義仕掛けさせ、おれも共々口たゝき、暇の狀を書かした。この上は捕へられ、殺されても一思ひ、他人同士の喧嘩になつて、苦しい死やらはせぬであらうが、今日は露はれて捕へに來るか、明日は繩目に及ぶかと、案じて夜の目も合ひはせぬ。エヽ、こんな氣ではなかつた年を寄れば心まで、只の親仁になつたかいやい。

〽しやくり上げれば德兵衞も、

德兵　どうぞして備中へ連れて行くか、さなくば明かして去り狀も、相談づくで書かさうと、思つて問へどどうしても云はぬゆゑ、千法書きて云ひ合せた通り、心に思はぬ不義いたづら。さぞ腹が立たう、憎からう。どうした緣か兄弟より、親しうしてもらつた人に、人でなしと思はれる、おれも因果、お內儀も因果、因果同士の集まりといふもの。

かぢ　さうでござんすとも。取分け女子は去られまい、隙取るまいとする筈を、愛想づかしは九郎兵衞どの、皆こなさんの爲ぢやぞえ。コレ、市松もよう聞いてたも。わしは親を殺されても、憎いとも聞えぬとも、思ふ心は微塵もない。よく〳〵腹の立つ事が、あつての事を思へども、情ないはお上のお咎め。今日も御前でお代官樣が、コリヤ、氣遣ひするな、今の間に詮議仕出して、下手人を取つてやるぞと仰やつた、その時のわしが悲しさ。泣いてばつかりゐたれば、町の衆が腰押して、ソレ有難いとお禮申せ、お禮申せとせり立てられ、連添ふ夫を殺すのを有難うござりまするると、云つた時のその苦しさ、死なれるものなら、直ぐその場で。

〽死にたかつたとせき上げて、嘆けば立聞く九郎兵衞が、胸に磐石熱鐵を、呑むより辛き血の淚、妻の心、三婦が情、德兵衞が貞義をも、聞いてはるかに手を合せ、泣いて禮云ふばかりなり。

ト一間に團七聞いてゐて思ひ入れ。こなしあつて障子締める。

三婦　サア、お內儀、こなたがこの家にゐては、夫婦の緣が切れぬも同然。萬一の時に云ひ譯もやかましい。

兎角九郎兵衛が親殺しにならぬやう、夫に名残も惜しかろけれど、おれが所へ、サアござれ。
〽引立てられてお梶は猶、しやくり上げ〳〵、嘆けば共に市松が、
市松　母様、どこへも行く事は否ぢや。父様と一緒に、内に居て下されいなう。
〽縋れば思はず聲上げて、わつとばかりに取亂す。罪科遁がれぬ天の網、四方を取卷く人聲足音。
ト三人よろしく愁ひの思ひ入れ。この時、ドン〳〵になる。皆々恟りして
三婦　コリヤ、泣いてゐる所ぢやない。ヤア〳〵、捕り手と見えて大勢の人聲。
徳兵　三婦どんは、この二人を、早く裏から落して下され。
三婦　合點ぢや。
ト三婦、お梶市松を連れて奥へ入る。
〽程なく所の代官捕り手、ばら〳〵と亂れ入り。
トどん〳〵にて、向うより藤内、凛々しき形にて、捕り手大勢連れ、駈け出て
藤内　ヤア、九郎兵衛はいづくに居る。舅義平次を殺したる、科明白に顯はれたり。これへ出て、繩かゝれ。

徳兵　これは思ひもよらぬ仰せ。それにはなんぞ、慥かな證據でもござりまするか。
藤内　ヤア、吐かすまい。その節泥の中に、山形に丸印の、雪駄片足殘りあつたを、段々に詮議すれば、九郎兵衛が雪駄なる由。遁がれぬ所ぢや。これへ出せ。
徳兵　イヤ、憚りながら、その印なれば私しの、雪駄とても斯くの通り、山形に丸印でござりまする。
ト自分の雪駄を出す。
藤内　イヤ、そればかりでない。義平次九郎兵衛喧嘩の場所より、女を乘せたる駕籠の者、立歸る振りにて見屆けたと、只今役所へ訴へ。なんとこれでも爭ふか。
〽退引きならぬ訴人には、言句も出でず赤面し。
徳兵　さほど慥かな證據がござりますれば、九郎兵衛は科人に相違ござりますまい。併し、荒立てゝはなか〳〵に、お手廻らぬも何とやら。私しにこの役を、仰せつけられ下さりますれば、騙し捕りに捕へて差上げませう。それともにお疑ひなら、御勝手になされませ。
藤内　オヽ、聞き及んだる強力者、迂濶には踏み込まれまい、其方も共々お上の奉公。徳兵衛、其方に云ひつけたぞ。

德兵　ハツ、畏まつてござりまする。

藤内　ソレ。

トどん／＼にて、藤内捕り手、奥へ入る。德兵衞思ひ入れ。上手の一間より三婦、お梶と市松を連れ出て

三婦　この市松を虜にされたら、氣が遅れて九郎兵衞が、後思ふやうに働らけまい。親子の者を預けて來るうち、後を頼むぞ。

德兵　合點だ。

〽道を急いで。

ト三婦、三人を連れて表へ出る。德兵衞見送る。ドンドンにて、道具廻る。

本舞臺、一面の大屋根、前側、塀の上を見せたる心。爰に團七、大童になり、捕手大勢と立廻りゐる。ドンドン、アリヤ／＼の聲にて道具とまる。

ト誂らへの鳴り物にて、大ダテ充分にあつて、トヾ捕り手を追ひ込み、キッと見得、下手より德兵衞、十手を持つて上がり

德兵　團七、捕つた。

團七　わりや德兵衞か。

ト思ひ入れあつて、手を廻す。德兵衞、貫ざしの錢を團七の首へ掛け

德兵　コレ、逃げられるだけ逃げてくれ。落ちつく所は備中の玉島。分つたか。

團七　ムウ、忝ない。

〽飛ぶが如くに。

ト兩人、見合つて、よろしく見得。ドン／＼、誂らへの合ひ方にて、

幕

夏祭浪花鑑（終り）

解說

渥美清太郎

人形芝居で當りを得た作を、歌舞伎へ移入するといふ事は、寛延頃から非常に行はれ始め、本場の京坂は勿論、江戸でも一時は流行を極めたものだつた。本卷にはその中から、世話物の代表的な作のみを選んだのであるが、由來斯種の脚本は、院本をどの程度まで歌舞伎化してあるかといふ事を觀るのが主眼であるから、その中でも成べく原作を離れて工風してある臺本を採つた積りである。

双蝶々曲輪日記（ふたつてふ〳〵くるわにつき）

寛延二年七月、竹本座初演の九段物で、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等のお馴々であるが、夏祭に趣向が似てゐると云ふので人形では不評であつた。歌舞伎へ入ると相撲といふ役柄が、役者だけに一層生きて來る所爲か、非常に好評で全く歌舞伎へ入つてから有名になつた作と云つてよい。元來が近松の「壽門松」を土臺にして、西澤一風の「昔米萬石通」を按配した、この人達の作にしては急拵らへらしい痕があるだけに、初演の不評もそこらから來たのかも知れぬ。今は二段目の相撲場と三段目の米屋、六段目の橋本、八段目の引窓の四段のみが、行はれるだけであるが、成るべく場面を多く取入れたい爲に、所藏の臺本を選んだので、割合に原作に近いものとなつた。多分安永天明頃の大坂本であらう。筋を通すには頗る恰好であるが、それでも三段目の茶屋場と九段目の竹右衛門内が缺けてゐる。この二幕は歌舞伎でも省かれる場合が多かつたのであらう。

けいせい反魂香（はんごんかう）

寶永五年に竹本座に上演された近松門左衛門の作である。上中下の三段物で、吃又の件は上の眞中に當るが、全體から觀るとこれは挿話的な件になつてゐて、中心は狩野四郎次郎と遠山の戀物語、不破名古屋の達引なのであるが、歌舞伎ではこの吃又の件だけが、いつも獨立して中幕式に使はれ、今日に殘つてゐる。尤も歌舞伎の方は、寶暦二年三月竹本座で、吉田冠子の訂正した「名筆傾城鑑」の方に多く據つてゐる。本卷に收錄した臺本は現時各劇場に行はれるもので、極めて近い頃の所演と思はれる。「傾城」を「けいせい」と假名で書いたのは、臺本に據つたものである。

往古曾根崎村噂（むかし〳〵そねざきむらのうわさ）

安政七年九月、大坂竹田座の初演で、作者は近松半二と近松善平、大近松の「曾根崎心中」をその當時向きに改作したものである。上下二段物で、本卷に入れてあるのは、その上卷だけ。この外に「住吉新家の段」「内本町平野屋の段」が下の卷になつてゐるが、歌舞伎では上の卷だけを演じるのが通例である。この二幕は明治になつてから、東京でも演じた事がある。本卷の臺本は年月不明であるが、恐らく天保頃の京坂所演本であらう。

心中天網島（しんぢうてんのあみじま）

享保五年十二月、竹本座初演の大近松が傑作で、同年十月十五日、網島にあつた小春治兵衛の情死一件を脚色したものである。早くから歌舞伎に入つてはゐたらしいが、多くは京坂で、材料が材料だけに江戸では餘り上演しなかつた。本卷収錄の臺本は珍らしく江戸出來の方で、文政十二年八月市村座で、坂東簑助の治兵衛、中村歌六の小春、藤川官吉のおさん、坂東三津五郎の孫右衛門の役割で演じたものである。原作では三段であるが、これは上の河庄、中の炬燵だけで、この二幕だけが多く歌舞伎に行はれたのである。近松物上演の他の例に洩れず、原作よりも近松半二の改訂した「心中紙屋治兵衞」の方に據つてゐる。

伊賀越道中双六（いがごえだうちうすごろく）

荒木又右衛門が助太刀して、義弟渡邊數馬に父の仇河合又五郎を討たした、有名な伊賀上野の仇討事件を脚色したもので、これより先、奈河龜助が歌舞伎で「伊賀越乘掛合羽」を出して大當りを得たに刺戟され、天明三年四月竹本座に書き卸したもので、作者は近松半二と近松加作である。同年九月に中の芝居で歌舞伎へ取入れて以來、「乘掛合羽」と並んで持囃され、時には兩者を混じて演じる事もあつたが、今日では寧ろ「道中双六」の方が歡迎されてゐる、本卷収錄の臺本は、文政五年七月江戸中村座初演のそれで、伏見宿屋の場を除くの外は全部取入れてあるのが珍らしい。この時は坂東三津五郎の政右衛門と重兵衞、瀨川菊之丞のお谷とお米、嵐德三郎の大内記と丹右衛門と幸兵衞、嵐冠十郎の股五郎と五右衛門と平作といふ役割であつた。

茜染野中の隱井（あかねぞめのなかのかくれゐ）

元文三年十月、豐竹座に初演の三段物で、作者は原田由良助であるが、並木宗輔が添削したと稱してゐる。以前に出た「梅屋灘浮名色揚」といふ淨瑠璃を改作したもので、長吉殺しの段は今に傳はつてゐる。收錄した臺本は安永天明期の京坂上演物らしい。序幕なぞは殆んど淨瑠璃を離れ

た創作になつてゐる。

新板歌祭文（しんぱんうたさいもん）

安永九年九月、竹本座初演の近松半二作である。「袂の白しぼり」や「染模樣妹背門松」など同題材の作を粉本としたのであらう。二段のうち中卷の野崎村は誰れも知つてゐる有名な幕、本卷にもその一幕を收錄したが、京坂は別にして、江戸では文久元年の夏に守田座で、尾上菊次郎のお光、市川福太郎のお染、中村福助のお染、市川小團次の久作で出したのが初めであるから、云はゞ歌舞伎としてに新らしい方だが、何分義太夫で賣込んであるので、近頃は盛んに上演を見るやうになつた。本卷に收錄したのはその文久元年の折の臺本であるが、この時は世界が江戸になつてゐるので、便宜原作に據つて一二ヶ所訂正した。

關取二代勝負附（せきとりにだいのしようぶづけ）

明和五年九月、大坂並木座に初演の義太夫であるが、同じ材料はこれより以前、歌舞伎で脚本してあつたらしい。この時は八民平七の作で、二段物の短い淨瑠璃である。人形でも歌舞伎でも非常に歡迎され、今も時折は上場を見る程である。この卷へ入れた臺本は、文政十二年三月市村座所演のもので、坂東蓑助の秋津島、淺尾爲十郎の鬼ヶ嶽、岩井粂三郎のお里、坂東三津五郎の隼人と庄九郎といふ役割であつた。

碁太平記白石噺（ごたいへいきしらいしばなし）

奥州白石在足立村の百姓四郎左衞門が、田邊志摩といふ侍ひに殺されたのを、四郎左衞門の娘すみ、たかの姉妹が、苦心の末仇を討つたといふ事實に、慶安太平記一件を附加して作つたのがこの淨瑠璃で、安政九年正月、江戸外記座が初演。烏亭焉馬、紀上太郎、容揚黛の合作である。全部十一段續きの大物であるが、本卷には天保十三年三月河原崎座で、西澤一鳳が改訂した「岩藤浪白石」（いはふぢなみのしらいし）に據り、一般に行はれる四幕だけを收めた。この時は嵐吉三郎の宅七、尾上榮三郎の宮城野、尾上菊次郎の信夫、市川九藏の谷五郎、市川九藏の常悦と惣六とであつた。尤も、大詰の仇討の幕は、文政四年七月中村座所演のうちから採つたのである。

繪入生寫蕣物語（ゑいりせつせつあさがほものがたり）

司馬芝叟が作つた長話といふものゝ中に「蕣」といふのがあつた。これを土臺に近松徳三が、朝顔日記の劇を作つたのであつたが、深雪に扮する適當な俳優がなかつたの

で、筐底に秘めて置いたのを、後に奈河晴助が増補し、文化十一年正月、大坂中の芝居で「けいせい筑紫𤕝(つくしのつまごと)」と題して上演、澤村田之助に深雪を演ぜしめて大當りを得た。これが義太夫の形になり、「生寫朝顔話」として稻荷の竹本座に上演したのが天保三年正月の事で、即ち德三の遺作だと傳へられる。いま義太夫に行はれてゐるのはこれであるが、今度は西澤一鳳がこの淨瑠璃を土臺にして訂正を加へて、嘉永元年八月の市村座に上演させたのが本卷收錄の臺本で、即ち逆輸入の形になつてゐる。この時は八代目市川團十郎の阿曾次郎に、坂東しうかの深雪であつた。

夏祭浪花鑑(なつまつりなにはかゞみ)

元祿の末期に大坂で片岡仁左衞門の演じた「宿無團七」といふ歌舞伎から想を得て脚色したもので、初演は延享二年七月の竹本座、作者は並木千柳、三好松洛、竹田小出雲である。この時人形に初めて帷子を着せたり、長町裏で本泥や本水を使つたりしたのは有名な話である。世話淨瑠璃としては隨一の當り物、今に到つて猶盛んに上演される。原作は九段ものでお鯛茶屋から團七隱れ家まであるのだが、本卷には文久三月夏中村座上演の臺本に據つて、重要な四幕だけを收めた。

編輯校訂責任
渥美清太郎
鈴木　侃

日本戲曲全集・第二十九卷
義太夫狂言世話物篇下・第廿二回配本

編纂者檢印

昭和五年七月二十日印刷
昭和五年七月廿二日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋 五一・六四一 三七・八一
振替東京 一六一七八

整版所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社印刷）



